オーダーメイド

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オーダーメイド

【Ｎコード】
Ｎ９４８５Ｂ

【作者名】
ｚｅｎｓ

【あらすじ】
友人と冗談半分で応募したら、本当に世界初の完全人間型ロボットがやって来た。そこから始まる日常系ラブコメ。ずっと変わらないと思っていた日常は少しずつ確実に変化していく。１２月２５日、８５話（第１部最終話）更新。２００９／１／５。続編、オーダーメイド２もはじめました。よろしければどうぞ。

プロローグ：それが始まりの日だった（前書き）

２００７．６／２１、本文加筆
２００７．８／１９　３人称から１人称への一部変更による修正、タイトル変更、及びｐａｓｔ編追加。
１０／１　本文一部修正

プロローグ：それが始まりの日だった

『あなたの望むメイドさん、お作りします。』

こんなチラシが入っていたのは、春休みが始まって間もない頃だった。

そして春休みはそろそろ終わるというある日、俺たちは幸樹に呼び出され、嫌々ながらもこうして集まっていたのだ。
俺、恵麻、由真、晃の４人を見回しながら、幸樹は興奮気味に言った。

「これ、絶対応募しねえとな！！」

・・・そもそも、メイドだ？そう思いつつも友人として俺は、鼻息の荒い幸樹を諌める。

「幸樹、お前鼻息が荒いぞ。とりあえず落ち着け。そして、このチラシよく見てみろ」

・・・何故、俺がお前の趣味に付き合わなきゃいけないんだ。この時、俺はそう思った。
そこで、未だに興奮が冷めない幸樹を落ち着かせようと俺は、事の発端となったチラシをもう１度幸樹に見せる。

チラシの詳細はこうである。

応募期限３月末まで
対象者　日本国民であればＯＫ

応募方法　葉書に住所、年齢、電話番号、そして、どういうタイプのメイドが欲しいかを書いてポストへ
商品　オーダーメイドＰ１

（中略）

限定１名様

当選結果は、発送をもって変えさせていただきます

企画：（株）ハンドメイデン

「いやー、そんなこと言ったってほしいじゃん、景？」
「何故、俺に振る？」

改めて、チラシを見せて現実を再確認させたにもかかわらず、幸樹は現実を見ようとしない。
いち早く感想を漏らしたのは、その表れだろうな。
その上、くねくねしながら同意を求められても気持ち悪いだけだ。
俺は、内心話すのも嫌になるが、それ以上に周りは話はおろか、その存在すら認めようとしていない。
・・・お前らな、説得くらいしろよ。

「景もほしいだろっ！！」
「いや、断定するな」

繰り返すな。いらない。それに、何故俺なんだ。
幸樹は俺の反応がいまいちだったのを見ると、じっと俺を見つめると納得したように言った。

「それもそうだな、景は既に妻がいるから、仕方ないよな」
「は？いないぞ、そんな・・「ええっ！？そんな～、照れます」
「あはっはっ、いいねえ。オシドリ夫婦。」

幸樹が話を変えると、途端に恵麻や由真が悪乗りを始める。もちろん、俺の言うことなど聞いてもいない。

みんな完全に俺の意見は無視か・・・。それに、恵麻も由真も冗談でそういうことを言うと、俺が傷つくということを知らないのか。
・・・俺は、意外と打たれ弱いんだぞ。誰も信じてはくれないが。

「恵麻は妻じゃない。幼馴染だ。つまらない冗談は止めておけ」
「うぅ～」

俺の言葉に恵麻が何だか不満そうにしているが、こういうことははっきりしておかないと誤解を招きかねない。
その後、しばらく誰も話をすることが無い様で、皆が退屈そうな雰囲気になっていた。
すると、晃が急に呟くように言った。

「・・・僕は応募したいな」

晃の言葉に思わず俺は、だらけていた姿勢を正し、目を見開く。

「・・・正気か？晃」

・・・今まで会話に入ってこないと思ったら、こいつもメイド好きだったとは。
俺の晃の見る目が変わった。

「え～と？変態さんなの？綿野君」

だが、晃を見る目が変わったのは、他の3人も同じことだった。失望したのが2人。見直した奴が1人。

「うっ・・・」

晃は恵麻にすぐに言い返せずに言葉に詰まるが、何かうまいことでも言って、恵麻たちを丸め込むつもりだろう。

何か、必死に考えている。

「藍羽さん、上総野さん。よく考えてみてよ。このメイドは世界に1つしかないんだ。もし当たれば・・・」

「男のロマンだっ、違うか？」

「・・・いきなり話に割り込まないでよ。まあ、そんなとこなのかもしれないけど、売ればそれなりにお金にはなると思うよ。ま、どうせ当たりはしないんだし、物は試しってとこかな」

晃が恵麻たちを説得しようと話していると、幸樹が急に口を挟む。

男のロマンって・・・お前のロマンを世界中の男に押し付ける気か？

それに晃が、何だか必死になっているが、理由は分からなくもない。

メイド好きなんていうレッテルは張られたくないよな。

俺は晃の話を聞いて、それもありかと思う。切手代くらいしかかからないから、宝くじを10枚買うよりは安上がりだ。

「ということで全員で応募だっ！！」

幸樹が、これを好機と見るや、突如立ち上がり、勝手に宣言をする。

1人だけ妙にテンションが高いからだろうか、俺たちは置いてけぼ

りだ。

有頂天になった幸樹の突然の宣言に由真はこめかみを押さえながら言う。

「あんた、こんなことのためにあたしら呼んだわけ？」

すると、幸樹は由真の言葉に、さも当然と言わんばかりに言葉を返した。

「いいだろうが、由真。俺たち友達だろ。それに応募者は1人でも多いほうがいいだろっ」

「・・・・」

晃が賛成して見方が増えたせいか、何だか堂々としている。

それに、あまりにはっきりと言い切るものだから、普段は強気な由真も圧倒されている。

・・・執念って恐ろしいな。俺は、幸樹を見てそう思わずにはいられない。

晃も、幸樹に追随するように言った。

「僕は幸樹に賛成だよ。折角だし応募しようよ」

・・・確かに悪くないかもしれない。

幸樹の執念に影響されたせいだな。俺は応募するくらいなら悪くないと思ってしまっている。

俺は、晃に確認を取る。

「つまり売って5人で山分けするということか」

「まあ、そういうこと。」

「なら、俺も賛成しようか。まあ、それに遊びということなら、それも構わないだろ」

俺が賛成に回ると、恵麻も由真も驚いたような顔をする。幸樹ですらも驚いていたが、すぐに俺の手を握り、涙を流しそうな勢いで感謝された。

だが、幸樹には悪いが、そもそも当たるわけもないし、応募するくらいなら問題はないというのが俺の率直な考えだ。実際、幸樹の部屋に来てからトランプゲームしかしていないしな。

そうと決まれば、恵麻たちも巻き込まないとな。

俺たちだけで、応募しても面白みに欠ける。

そこで、恵麻たちにも参加を勧める。

「う～ん、景君が賛成するなら私も賛成するよ」

「まあ、どうせ遊びだし」

色々と言っていた割には、あっさりと賛成してくれたので俺は拍子抜けした。

・・・まあ、たぶん誘ってくれるのを待っていたのだろう。

「何故！？俺が勧めたときには賛成しないのに景が勧めたら賛成なんだっ！それに俺は売らんぞ。絶対に売らんっ！！」

・・・おい、まとまりかけた話を崩そうとするな。

俺が、そう思ったときだった。目の前を、足が通り過ぎた。

「うるさいっ」

「ぐへっ」

俺が蹴られるのかと、思わず固まった。が、いつまで経っても衝撃が来ないので目を開く。
どうやら由真の回し蹴りで幸樹が吹っ飛び、壁にぶつかったらしい。壁からずり落ち、気絶している幸樹を、見てさすがにやりすぎだと思うが、そんなことを言ったら二の舞になりそうだ。

ついでに言うと由真は今日は丈の短めのスカート。
白のパンツが見えましたなんて俺は全く言うつもりもない。
それに、見てもいない。ああ、見ていない。
だが、幸樹が吹っ飛ばされたことなど微塵も感じていない恵麻が急に大声を出した。

「私できたよ～」

俺たちは何事かと恵麻の方に視線を集中させる。既に恵麻は、応募葉書を書き終えていた。

「「「早っ」」」

恵麻を除く全員の意見が一致したので俺たちは思わず笑った。恵麻だけが何がおかしいのか分からず、きょとんとした顔をしていた。

「やっぱり、お仕事はできてほしいな～、見た目はね～」
「僕好みの容姿にしないと」
「メイドさん、はあはあ」
「まあ、これくらいはできないと困るし。見た目か、どうすっかな」
「設定が面倒だな、何も書かなくていいか」

結局、何だかんだ言いながらも、俺たちは楽しみながら書いた。
俺たちはポストへと投函すると、いつものようにカラオケに行くことになった。
そんなこんなで1日が終わる頃には疲れ果て、俺は応募したことなんて忘れてしまった。

しかし、俺たちは1つの重大なミスを犯すことになる。
その時はまだ知らなかったし、知っていたなら応募なんてしなかった。

それを知るのは、彼女がやって来た日のことだった。

prologue ～Another Side～

「えーと、ここが私のご主人様のいらっしゃる住所なんですね？」

ここはとある会社の一室。
2人の女性が会話をしている。

「ええ、そうよ。ここがあなたの主の家よ。何か質問は？」

どうやら後に話した女性の方が上司のようだ。

「ありません。先にご主人様の家へ行き、お帰りをお待ちすればいいのですよね？」
「ええ、その通り」

「あ、部長。一つ質問があるのですが？」
「何かしら」
「ご主人様の家族構成は？性別は？好きな食べ物は？」
「・・・」
「えーと・・・調べてないとか・・・・でしょうか？」
「ぎくっ」

この部長かなり抜けているのか、調べていなかったようである。
しかし、こういう人はただでは起きないのである。

「いいのです。とりあえず当選した方のところへ行ってください」
「質問に答えてください！！」
「あなたは１つと言いました。しかし、３つも質問しましたね。ですから答えなくてもよいのです」

部長はむちゃくちゃな理論で逃げるが、かなり無理がある。
それに少しだけ早口になっていることに部下の女性は気付いた。
部下の女性が疑いの眼差しを向けると、視線をあからさまに逸らし、話題も逸らす。

「しかし、あなたの主のことが分からないと困りますね。あなた調べてください」
「ひどいです。職権の乱用です」

部下であろう銀髪の女性は真っ向から正論で反論するが、部長である女性は適当なことと上司の権力で一蹴する。

「権力はこういう時に振るうものですよ。さあ、頑張って調べてくださいね。あなたがメイドとしてそこで働くのですから仕方ないのですよ」

仕事を忘れていたのは上司である彼女。担当も部長である彼女。
だが、自分のことは棚に上げ、部下に仕事を押し付けると彼女は紅茶をまたのんびりと飲み始めた。
すると、部下の女性は、少し溜息を吐くと話を続ける。

「ところで、何でこの方の意見を採用したのですか？」
「何で？ですか。ええ、答えは簡単よ。注文がない。ただこれだけよ」
「それは・・・」

部下であろう女性は、何かを言おうとするが、部長に遮られる。

「注文がないと開発するのが簡単ですもの」

だが、彼女は管理部部長である。
そして、彼女は一切開発には関わっていない。
この適当さは、もしかすると会社の体質なのかもしれない。

「ううっ」

結局、応募事項なんてこんなものである。
細かいことを書いても、開発部から「面倒だから」、「そんなの無理」という嵐だったのだから。
部下の女性は項垂れて、部屋を後にした。
その彼女の背中を見ながら、部長は思った。

・・・メイドとしては申し分ないけど、1人の女の子としてもきちんと暮らせるだろうか、と。

数日後、メイドはとある家の前へと来ていた。

「ここが私の主のいる家なんですねー」

『有栖』と表札には書かれていた。

そして、この日メイドは現実という名の戦場に立つことになる。

「とりあえず、チャイムを鳴らしてっと」

ピ～ンポ～ン

「はーい、どちら様ですか？」

家の中から、２０代前半であろう女性が出てくる。

しかし、彼女はメイドさんを見ると動きが止まった。

それは普通の反応とも言えよう。

そんなことはお構いなしに、メイドは挨拶を始める。

「はじめまして、お母様。私は、メイドのエリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型と申します」

「・・・はじめまして、あのー・・・メイドさん？ですか？」

「はいっ、その通りです。私のご主人様、有栖　景様のお母様で間違いないですよね」

「ええ、景は確かに私の子ですけど・・・。何でうちにメイドさんが？」

いまいち状況の分からない母親と家の前にたつメイド。
朝からメイドがやって来るなど、誰が想像できようか。
ようやく母親が困惑していることに気づいたメイドは説明をすることにした。

そして、メイドは自分が以前ハンドメイデン社が募集した企画の商品であること、
当選したのが、有栖　景だということ、今日から自分がここで働くことを説明した。
当初は困惑していた母親だったが、事情は少し飲み込めたので景が帰ってきたら話し合うということで、家で待ってもらうことにしたのだった。
エリスは家に上げてもらったのはいいが、そわそわとして落ち着かない。
お手伝いをすると申し出たものの、やんわりと断られるのだ。

「申し訳ありません、本来であれば私が仕事をしますのに」
「いいのよ、お客さんはゆっくりしていてね」
「はぁー」

エリスは気の無い返事をする。
彼女は何も注文がなかったとはいえ、元々メイド。
家事の一通りくらいは簡単にこなせるのである。

「暇です。早くご主人様帰ってきてくださあああいっ！！」

そして、彼女は夕方、主人と呼ぶ景が帰ってくるまで待つことになる。
その間、ずっと体がうずうずしっぱなしだったそうである。

結局、何も手伝わせてはもらえなかったのだから。

この日、平凡だった有栖　景の毎日は終わりを告げるのであった。

prologue　～past～

夢を見た。

まだ幼い頃の夢だ。

小さな女の子が転校して来て、すぐにその子とは友達になった。

その子は、活発な性格でみんなの人気者になった。

だけど、その子は誕生日の前日、急にいなくなった。たった4ヶ月、短いけど楽しかった。

もういないと気付いたとき、僕は悲しかった。せめて、お別れくらい言ってほしかった。

でも、僕は年月が経つにつれて忘れていった。女の子がいた時間も思い出も、その存在さえも。

・・・渡せなかったプレゼント、いつか渡す日が来るかな。

その気持ちだけは、机の中に今もある。

プロローグ：それが始まりの日だった（後書き）

最後まで読んでいただいた方、はじめまして。

初めて小説？いえ、小説モドキを書いてみました。
これで小説とか言ったら、他の人に怒られそうです。
それでも、頑張って書いてみようと思いますので、よろしくお願いします。

第１話：最後の平凡な日　その１（前書き）

２００８．１／１９　本文修正及び一部カット

第1話：最後の平凡な日　その1

俺には夢があった。子供の頃の下らない話だ。

だが、その夢はいつの間にか記憶の彼方へと消え去り今では普通の高校生2年生。

今の夢は、そのうち結婚してささやかなながらも幸せな家庭を築くことだ。

夢が無いと周りからはよく言われるが、そんなことはない。

いずれ、どんな奴でも気づくはずだ。

当たり前のことが続くことが、幸せなんだと。

そして、今日も俺の平凡だがそれなりの日常は始まる。

高校2年に上がって最初の登校日。

つまり今日は始業式の日だ。

俺の名前は有栖　景　（ありす　けい）。

性格は、周りからは冷静、落ち着いているだとか言われているがそんなことはない。

俺だって思春期真っ盛りだ。女の子といれば意識するし、恋愛だってしたい。

容姿は自分で卑下するほどでもないと思う。しかし、俺は全くモテないのだ。

おかげで16年間彼女なし。きっと一生できないだろうと悲観して

いる。
だが、好きな人ができないだけであり、できたら真っ先に告白をしようと考えている。
そう。いないだけであり、できないわけではない。・・・言い訳だな、これは。
朝からくだらないことを考えていたせいだろうか、少々だるい。
すると、朝から暗いオーラを纏った俺を見かねた隣を歩く幼馴染が言った。
「ねえ、もうちょっとちゃんと背筋を伸ばすことはできないの？」
俺の隣にいるのは、藍羽　恵麻　（あいう　えま）。
こいつとは何故か幼稚園、小学校、中学校、高校と同じだ。
だが、どこぞのラブコメのように家が隣だなんてことはない。
・・・いや、実際はお向かいさんだから、同じ様なものか。
今でも家族ぐるみで交流があり、互いの家に遊びに行くことは多々ある。
このことを中学校の頃から友人に話したら、「お前、それ何のラブコメ？それともエロゲーか？」と
言われた。
・・・話す相手を間違えたようだった。
「春休みが終わってかったるいからな。それにいつもの俺はこんなんじゃないのは知っているはずだ

」
「そんな嘘ばっかり言ってるとずっと独りだよ～」
余計なことを言ってくれるな。
瞬時に、俺の嘘を見抜く恵麻。さすがに１６年の付き合いだけはある。

「大きなお世話だ。大体、お前だって・・・」
「え？な～に？」

彼氏いないだろ？そう言おうと思ったが、恵麻がじっと俺の方を見るものだから思わず次の言葉を飲
み込む。

大変憎らしいことに幼馴染はモテる。
事実、高校１年の頃だけで６，７回は告白されたらしい。
中学の頃も多数の告白があったらしいが、全て断ったらしい。

俺は隣を歩く恵麻をチラッと横目で見る。

確かに、悔しいが幼馴染の見た目は付き合いの長い俺から見てもかわいいと思う。
ライトブラウンのロングヘア、目はぱっちりとしていてきれいな白い肌。

・・・胸はないと思う。と言うよりもまじまじと見ていたら変態確定だ。
全体的に見ると美人と言うよりもかわいいタイプ。

性格はどちらか言うと大人しい方だ。でも、言いたいことははっきり言う方だから普段は猫を被って

いることになる。
何でもオールマイティにこなす上に他人に親切。
そのため友達も多く、特に去年のクラス委員長とは小学校以来の親友だそうだ。
俺の1年の頃のクラスにも告白しようと狙っている奴は多かったらしい。

だが、隣にいる俺は未だに1回も告白されたことはない。何か癪に障る。
基本的に俺は負けることが嫌いなのだ。
しかし、そんな万能型幼馴染にも唯一苦手なものはある。
それは・・・この年になっても未だに怪談話が苦手だということだ。
まあ、それは愛嬌というものだ

ろう。

俺はそんなこと考えながら歩いていた。
だから、全く気付かなかった。・・・恵麻が俺の前に飛び出してきたことに。

「ちょっと、ねえってばっ!!私の話聞いてる?」
「うわっ」
「きゃっ」

いきなり目の前に出てきた恵麻を避けることなどできるはずもなく・・・俺が恵麻に覆い被さる様に

こけた。

「・・・」
「・・・」

互いに見つめ合う俺たち2人。
ついでに言うと俺は顔が真っ赤だろうな。目の前の恵麻も真っ赤だ。
体勢は何と言うのだろうか・・・周りから見れば俺が恵麻を襲っている様にしか見えないだろう。
この年で性犯罪者の仲間入りはごめんだ。

「えーと、何て言うか・・・その・・・すまん」
「私は別に・・・気にしてないよ」

そこで、一応冷静であることを装ってすぐに恵麻の上から退く。
あまり表情には出さないようにはしているが・・・とても恥ずかしい。
顔を真っ赤にして潤んだ目でこっちを見て、ぶつぶつと何か言っている恵麻。
気にしてないというが、どう見てもそうではないことは火を見るよりも明らかだった。

少し落ち着いたところで何やらひそひそと話す声がするので周りを見ると、こちらをちらちら見なが
らひそひそ話すおば様方がいた。

「あら、やだ。最近の若い子って場所を選ばないのね？」
「大胆ねえ・・・嫌らしいったらありゃしない」

・・・いや、聞こえてるから。それに、何を想像してるんだ。

近くでは、親子連れが俺たちを見ながら話していた。

「ママ、あのお兄ちゃん達何してるの？」
「しっ、見ちゃいけません」

・・・いや、何もしてないから。
しかし・・・何だかまずい状況だな、さっさと行かないと。
周りからの痛いほどの視線を感じ、まだ倒れたままの恵麻に手を差し出した。

「大丈夫か、手貸すぞ」

そして、恵麻を起こす。
俺はあくまで冷静であることを装う。
胸の感触が柔らかかったとか、そんなことは断じて考えていないぞ。
本当だ。

・・・嘘です、ごめんなさい。

「あ、ありがとう。ねえ、周りに人いっぱいいるし早く行こう？」
「・・・」
「ねえ、景君？どうしたの、ぼーっとして」
「・・・そ、そうだな」

幼馴染の胸のことを考えていましたなんて恵麻には絶対に言えない。
そんなことで１６年にもなる付き合いの長いこいつに嫌われるのは情けない。

この先、こいつも恋をし、いずれは彼氏もできることだろう。
一緒に学校へ行くこともなくなるだろう、会話も減ることだろう。
それでも、時折くだらない会話ができればと虫のいいことを考えている俺がいる。
当然、今のままの関係はいずれ終わる。その日が来るまでは隣にいたいと思う。まあ、我侭だな。
そう思いながら目の前の恵麻を見ると・・・。

ん？いない？

「ねえ～、何してるの～。早く行かないと間に合わないよ～」

げっ。もうあんな遠くに行っているのか。
まあ、いい。俺も行くとするか。

「・・・本名は『あいうえお』のくせに」

俺は恵麻に追いつくと、特にあいうえおの部分を強調して言ってやる。
案の定、少し怒っている表情が見て取れる。
このあだ名は、俺が偶然発見したものだ。
それ以来、時折こうやって使うことがある。
もちろん恵麻は、呼び始めた当時からこのあだ名を気に入ってはく

れなかった。

「そのあだ名やめてよっ！」

「恵麻が嫌がっても、ずっと呼び続けてやるから安心しろ」

「いいけど、責任取ってくれる？」

責任って何だ？まあ、いつものように軽くあしらっておけばいいか。

「そうだな・・・一生養ってやる」

「そっか～。じゃあ、不束者ですがよろしくお願いします」

そう言って俺たちは互いに笑った。

こうしていると付き合っている恋人のようにも見えなくもないが、

実際は互いにそんな感情を微塵も

抱いていない。

友達として長い時間を一緒に過ごしてきたのだ。これ以上望むことなど特にないと俺は思っている。

トラブルもあって無駄な時間を過ごしてしまった俺たちだが、走ったおかげもあってか時計を見ると

何とかいつも通りの電車には乗れそうな気がする。

俺は、間に合いそうだということが分かると少し気持ちの余裕が持てるようになった。

そうすると周りのことも少しは気になるわけで・・・。

・・・何故か、恵麻が腕にくっついている。
まあ・・・正直・・・何というのだろう。
柔らかい2つのものが腕に当たるんだ。
「らんらんらららん、らんらんらららん」
恵麻は何が楽しいのかは知らないが、機嫌よく聞いたこともない歌を歌っている。
ラッキーだな・・・じゃなくてだ。
朝から、こんなにくっ付いて本当に何がしたいんだ、こいつは。
「いったい、いつからこうなったんだ？」
すると、俺の独り言に反応した恵麻が相変わらず腕にくっつきながら言った。
「景君、何か言った？」
・・・相変わらず、反応がいいよな。
「いや、何でもない」
「そうかな～？」
昔は、こんな奴じゃなかったはずだ。こんなおっとりとした少し天然がかった性格ではなかったんだ
。
幼稚園の頃なんて、家来と女王様のような関係だったんだ。

例えばだな・・・。

「景、砂のお城作って」

「やだ」

「・・・ぶつよ」

「・・・わかった」

あの頃は、暴力に訴えてきたからな。そして、今とは違って、景と呼び捨てだったしな。

さらに、幼稚園で喧嘩一番強かったことを覚えている。

悪ガキをぼこぼこにして、家来扱い。

そのくせ、悪ガキの親が文句を言ってきたら、泣いて相手に責任を擦り付ける。

当時から恵麻は周りの親からかわいいと言われていたからな。

悪ガキの親のほうも、まさか恵麻がそんなことするとは思ってなかったらしいし。

そしていつの間にか、そういった問題は有耶無耶になって消えてしまう。

まあ、裏の顔を大人は知らなかったからな。

俺も1度往復ビンタを食らったことがある。

よく聞いてなかったのが悪かったのかもしれないが、いつものように命令だったのだと思う。

機嫌が悪かったんだろうな。

かなり俺の両頬は腫れて痛くて、そして恥ずかしいことだが恵麻が怖くて泣き続けた。

当時から仲がよかった俺たちだったので、何でこうなったのか分からない幼稚園のお姉さん先生は困

惑していた。

恵麻は終始むっとした顔をしており、理由を話すことはなかった。
いつどこで性格がこんなにも変わったのか、俺には知る由もない。
小学校の頃には、今とあまり変わらなくなったような気がするが。
いつか理由を聞いてみたいもんだ。

ちなみにお姉さん先生というのは、幼稚園の頃にお世話になった先生のことだ。
「お姉さん」と強制的に呼ばせていたんだ。
1度「おばさん」と言った奴がいたが、先生にどこかに連れて行かれた。
そして、戻ってきたら「お姉さん」と呼ぶようになっていた。
何があったのか知りたいが、知ったら戻ってこれないと幼心に思ったものだ。
そいつは先生を見るたびにガクガク震えていたからな。

「・・・でね。・・・景君!!私の話聞いてた?」

少しばかり昔を思い出していたら、恵麻がさらにきつく腕に抱きついてきた。
昔のことを思い出していたら、恵麻のことをすっかり忘れていた。
それに、何だか顔が熱くなってきたような気がする。

「いや、聞いてなかった。ちょっと昔のことを思い出していてな」
「どんなこと?」

恵麻が興味を示す。
相変わらず、腕にきつく抱きついたままだが。

「恵麻は、昔女王様だったなって」
「昔は昔。今は今だよ～。それに私は女王様なんかじゃなかったよ。だって、みんな仲良くしてくれたもん」

その瞬間、恵麻の顔が引き攣った。あまり、思い出したくない過去だったらしい。
意地になって反論される。俺は面白がって、さらにからかう。

「それは、恵麻が怖かっただけだろ。よく考えてみろ。どこの世の中に、仲良くしている友人から往復ビンタされる奴がいる？」
「それって、景君でしょ～。うん、覚えてるよ～」

そして、さりげなく昔の恵麻の横暴を訴えてみたのだが、恵麻はどこか懐かしそうに言う。
・・・笑顔で言うな。

「まあ、その誰かさんは今では全くその面影すらないけどな」
「えへへ」

何がうれしいのか分からないが、さらに俺の腕のひっつく恵麻。
まあ、うれしくないのかと問われるならば、うれしいと答えるだろう。
だが、俺はだんだん恥ずかしくなってきたので、未だにくっついている恵麻に言うことにした。

「いい加減離れてくれないか？」

2度3度、同じことを言っているがどんどん言葉が丁寧になっていく気がする。

最初は、「離れろ」。そして、「離れてくれ」。

それでも丁寧語だけは絶対に使わないつもりだ。

こんな奴に、頭を下げるような言葉なんて使いたくない。

「やだ」

「・・・」

さすがに拳骨でもお見舞いしてやろうかとも思ったができなかった。

ここは駅。公衆の場で、女を泣かせたら男に勝ち目などそうないだろう。下手をすれば警察沙汰になりかねない。

もう1度だけ、穏便な解決を目指して恵麻に言おう。・・・まあ、期待はしてないが。

「離れてくれないか？」「やだ」

即答だった。

仕方ないのであまり意識しないようにと、そのままの状態のまま周りを見てみた。

・・・俺にとっては不本意ではあるが、駅で腕を組んでいる男女。

しかも朝っぱらからだ。当然、視線が痛かった。

このままだと正直、精神が持たない。

胸が当たってるし、視線は痛いしな。
ここは、仕方ないよな・・・。

「恵麻さん？」
「いや」

いや、俺は何も言ってないぞ？

「お願いですから、腕を組むの止めてもらえませんか？」

その瞬間、恵麻の動きが止まった。
腕に掛かる力がふっと抜け落ちたのが分かった。
そして、俺を不思議なものでも見るかのように驚いた表情で見ている。
ああ、俺だって不本意なんだ。
でもな、理性も限界だし、世間体もやばいんだ。
俺が心の中でほっとしていると、俺の予想を上回った行動を恵麻は取った。

「景君が丁寧語でしゃべった！？」

恵麻が俺を何かおかしいもの、いや宇宙人でも見つけたかのように驚いた表情をして叫んだ。
いや、公共の場で叫ぶなよ。
ああ・・・おっさんがうるさいって顔でこっち見てるな。
結局、朝から他人に迷惑をかける羽目になり、知り合いに見られていたらと思うとぞっとする。
俺は世間体を気にするからな。

「俺が丁寧語使ったら、いけないのか？」

「うん、そうだよ！丁寧語で話す景君なんて景君じゃないよ！」

・・・そんなに似合わないのか？

恵麻に全力で否定される俺。

確かに、恵麻に丁寧語を使う俺は気持ち悪いな。

俺だって自分自身が丁寧語を使うキャラじゃないのは知っている。

だが、それなりに目上の人には敬語を使っているはずなんだがな。

しかし、そんなに俺の素行は悪かったのか？

・・・1つあった。

中学の頃に、全教科赤点をとったことがあったのだ。その時、俺は周りに反発していた頃だったので

、補習も指導も完全に無視していた。

それ以来、先生方には目をつけられているな。

それ以外、そんなに悪いことはしてないぞ。

自慢じゃないが、俺は今まで無遅刻無欠席だ。

ん？何か聞こえるな。

「景君？景君？景君ってばっ！！」

「のわっ！！」

気がつくと、目の前に恵麻の顔があった。

いきなり恵麻の顔が近くにあるもんだから、俺は顔が熱くなるのを感じた。

と言うのも恵麻は、それなりに美人だからな。いくら幼馴染だからと言っても、こんなに顔を近づけ

なくてもいいと思うんだが。警戒されていないと喜ぶべきなのか、はたまた男して見られていないのか。

俺は、心を落ち着けると、少し慌てている恵麻に尋ねた。

「恵麻、どうした？」
「電車に乗り遅れるよ？」
「・・・」

何だと！？
俺は、恵麻の一言に慌てた。一気に体温が下がり、顔の火照りもなくなった気がした。

「急げ、恵麻っ！」
「待って景君。そっちは反対のホームだよっ！」
「何っ！？」

間もなく、2番線から・・・。

「まずい、もう時間がない。恵麻走るぞ」

ホームからアナウンスが聞こえてくる。

「景君！私たちが乗るのは各駅停車だよ！」
「・・・」

俺が階段を駆け上がると同時に発車したのは急行電車だった。
隣の1番ホームには・・・各駅停車が止まっていた。
この駅では、急行の待ち合わせのために各駅停車が止まるのだ。
そして、俺たちの高校がある駅には急行は止まらない。
要は各駅停車に乗らなければ、駅には着かないということだ。

「何だか、無駄な苦労をした気がするな」
「景君。気のせいじゃないよ～。無駄だったんだよ？」
「・・・」

恵麻に指摘され、愕然とする俺。
朝から、こんなに疲れるとは思ってもみなかった。

「景君？ぼーっとしてないで電車に乗らないと」
「ん？ああ、そうだな」

こうして何とか電車に乗ることができた俺たち。
俺は何で電車に乗ることでこんなに苦労しているんだろう。
きっと春休みボケが抜けきってないのだろう。

「景君。電車に間に合ってよかったね」
「全くだな。危うく新学期早々、駅からあの坂を駆け上げることになるところだったな」
「あ」
「恵麻。どうしたんだ？」

電車が次の駅に着く頃、恵麻は周りをきょろきょろと見回した。
ある方向を見て恵麻は小さく声をあげると、電車の奥の方へと進んでいく。

最近の俺は物事に対して妥協が多いのも事実だ。メイドロボ応募の件だって、その典型例に当たるだろう。
そして、特に恵麻に対して、最近甘い気がする。
あんまり甘やかしてはいけないな。
ところで、恵麻は・・・どこに行ったんだ？
すると、人ごみの中から恵麻の声が聞こえ、俺の手招きする姿がちらっと見えた。

・・・しかも、座っているのか？

俺は、暢気に座っている恵麻を見て、どうやって座ったのか気になった。

「女の子には秘密が色々とあるんだよ～」
「・・・興味ないけどな」

俺は冷たくあしらうと満員電車に揺られながら立った。
恵麻が俺の鞄を持ってくれていることが唯一の救いだった。

・・・行きはラッシュ。帰りも時間によっては混んでいる電車に乗るなんて最悪だな。
俺は、学校選びを間違えたのではないかと何度目か分からない後悔をした。

第1話：最後の平凡な日　その1（後書き）

「お仕事、お仕事をいただけませんか？」
「悪いな、姉ちゃん。今、仕事はねえな。この時期は営業してねえんだ」

今、私は主の家に上げていただいてます。
そして、主のお母様とテレビを見ています。
メイドなのにいいのでしょうか？

「うううっ、仕事はいずこ？」

きっとこのテレビの人は頭が悪いんですね。
夏にスキー場で仕事なんてある訳ないです。
・・・でも、今の私の状況に酷似しています。

「まあ、仕事くらいあげたらいいのに。掃除くらいはあるわよね」

・・・お母様。
テレビの登場人物にそう思うのでしたら私にもお仕事ください。

「まあ、もうこんな時間。そろそろご飯作るからテレビでも見てて
ね」

これは、チャンスです。メイドの力を見せるときです。

「私もお手伝いします」
「あらっ、大丈夫よ。エリスちゃんは座ってて」

えーと、台所から追い出されました。
これじゃあ、何のために来たのかわからないんですけど。

「掃除くらいあるでしょっ」

・・・テレビの人とは何だか気が合いそうです。

本編にメイドさんが登場するのが、先になりそうな予感。
ということで、後書きで少しだけ書いてみました。
こんな駄文ですが、読んでいただいた方ありがとうございました。

第２話：最後の平凡な日　その２（前書き）

２００７年６月１０日。本文加筆。
２００７．９／２　本文修正及び加筆。２００８．１／１０　１．５話を削除

第2話：最後の平凡な日　その2

春。

それは出会いもあれば別れもある季節。

俺の高校2年の生活がここから始まる。

・・・が。

「おっはよーう」

「うげっ」

げほっげほっ。

いきなり後ろから背中を叩くとはどういう神経してるんだ。

俺が、折角いい気分に浸っていたというのに。

こんなことをする奴は2人ほど思いつく。

しかし、女の声だったから、あいつに違いない。

ゆっくりと後ろを見る。

そして、やっぱりそうかと正直溜め息が出る。

「はぁ」

「景。新学期早々、溜め息なんて辛気臭いねえ」

お前が原因だ、お前が。

「まあいいや。おはよう、恵麻、景。あはっはっ、朝から夫婦同伴なんてうらやましいわ」

「おはよう。って俺たちは夫婦じゃない！！」
「おはよう～。そうだよ～、由真～」

笑いながら、俺たちをからかう目の前の女は上総野　由真　（かずさの　ゆま）。
俺は、去年同じクラスだった奴で、クラス委員長だ。
見た目は少々きつい印象を受ける目。
ショートヘアで身長は、１６０半ばくらいだろう、恵麻との身長差が１０センチはあるかもしれない。
男っぽい言葉遣いをするが、れっきとした女だ。

バスケット部に所属していて、去年は大会でベスト８までいった。
性格は、一言で豪快だな。大抵の事は笑い飛ばすくらい度量も大きい。
言いたいことは恵麻以上に言うタイプだ。

そして、こいつもモテる。
・・・同性にな。
本人は、否定しているがたまにいるんだ。
怪しい目で由真を見ている女が。

「由真様、今日も素敵ね・・・」

・・・今もいるんだ。電柱の裏からこっそりとな。
バレバレだし、みんな気づいてる。
あえて、気づかない振りをしてるだけだ。
今も、目がたまたまあった奴があからさまに視線を逸らしたしな。

まあ、見つめられている当の本人は全く気づいていないがな。
あれだけの熱い視線に気づかないのは、鈍感なのかもしれない。

「まあ今年度もよろしくなっ。あたしら、今度はみんな同じクラスだといいな」
「俺は、遠慮したいけどな」
「全く、素直じゃないねえ」
「私たちきっと、同じクラスだよ」
「まあそうだといいな」

去年は、俺と由真は同じクラスだったが、恵麻は違うクラスだった。
俺ももちろん本心では、今年は同じクラスになれればと思っている。
きっと、2人も同じ気持ちでいてくれる。
その証拠に俺も恵麻も由真も自然に笑ってるしな。

「それじゃ、行くか」
「うんっ」
「そうだな」

俺たちは時間に余裕を持って出たおかげで遅刻はしなかったが、色々と問題があったせいで学校に着いたのはいつもと変わらない時間になっていた。
さてと、時間もあまりあるわけじゃないし、さっさと確認するか。

俺たちが通っている高校、聖蓮学園は俺が住む街の駅から5つ先の駅から徒歩15分くらい行った少し丘の上にある。
学校からは街が一望できるし、晴れていれば海も見ることができる。
高台にあって景色がいい。
もうわかるだろうな。
行きはずっと上り坂だ。
もちろんバスはあるが、何故か接続が悪いので遅刻ぎりぎりに行っ

てもたぶん間に合わないだろうな。
それにバスは混むからな。乗るだけでも時間がかかるんだ。

そして、ここは中高一貫校な上にエスカレーター式で大学まであるから結構人気の高い学校だ。
元は女子高だった聞いているが、それは２０年も前の話だそうだ。
その名残なのか、全校生徒数では女の生徒の方が多い。
恵麻曰く、「制服がかわいいから女の子に人気があるんだよ～」とのことだ。
何でも、ＯＧの有名デザイナーがいくつかサンプルを作ってくれて、その中から生徒総会で決めたんだとか。

「景君～、由真～。あそこだよ～」

やっぱりここなのか。
去年俺たちが入学したときにも、クラス分けはここにあったんだよな。
・・・初代校長像の横にな。
このハゲの像はみんなからハゲ神様と呼ばれている。
何でか？それはまたの機会にしよう。

で、俺はどこだ？
その時だ。いきなり後ろから聞き知った声がかけられた。

「よぉ、景。お前も恵麻ちゃんも由真も同じＤ組だぞ」

やっぱりお前なのか。
今、後ろから声をかけてきたのは、メイドバカこと、寿々林　幸樹（すずばやし　こうき）だ。
俺たちを春休みにメイドが欲しいあまりに召集をかけたバカだ。

１８０ほどの身長があり、俺の知り合いでは2番目に大きい。
いつも髪は短くしており、野球をしていない時には髪を立てているし、染めていることもある。
本人が言うには、こだわりがあると言っているが、野球をしているときと変わりはそうない。
野球部に所属していて毎日練習しているために結構色は黒い。
少々暑苦しいが、根は真面目な奴で野球の練習にはとても熱心だそうだ。そのため、去年から既に3番を打っているらしい。
ちなみに守備位置はサードだと前に話していた。

しかし、こいつはとても頭が悪い。
赤店のない科目の方が少なく、2年に上がれたのも奇跡と言っても過言ではない。
俺も似たようなものだが、俺以上のバカと言っても過言ではない。

「また、幸樹と同じクラスか。バカがうつりそうだな」
「安心しろ。バカはうつんねーよ。今年も仲良くやろうな」
「ああ、今年で終わりだがな」
「ひでーな、おいっ」

俺たちはそんなことを言いながら笑っていた。
軽口が言い合える仲のいい男の友人なんて、こいつと後もう1人くらいのものだ。
こいつは調子に乗りやすいのが、問題なんだがな。

「よお、奥さんに愛人」
「誰が、愛人よっ」
「ぐへっ」
「・・・照れるな～、もう」

ほらな。
大体、幸樹が恵麻と由真に余計なことを言って、由真に蹴り飛ばされるんだ。
このやりとりも1年たつと慣れるものだ。
恵麻の反応もいつもと同じだ。

最初は、蹴り飛ばされる幸樹の身を真面目に心配していたんだがな。
ん？今か？全く心配しないな。
幸樹は全く進歩のない奴だからな、心配するだけ損だ。

「バカは放っておいて教室行くか」
「いいの？置いて行って？」
「いいのいいの。どうせすぐ来るから」

そして、俺たちは幸樹を放ったまま教室へと向かう。
幸樹はすぐに来るだろ。

「おいっ！こらっ！！放置か？放置なのか？」

もう大丈夫だろうな、既に起きてるしな。
由真の蹴りに対してどんどん耐性がついてきてるな。
そのうち、蹴りをもらっても倒れないんじゃないか？

そういえばD組に他に誰がいるか、見てこなかったな。
まあ、行けば分かることだろう。

第２話：最後の平凡な日　その２（後書き）

まずは読んで頂いた方々、本当にありがとうございます。
果たして、全話読んで頂いた神のような方はいらっしゃるのか？

今回は、ちょっとした登校時のお話です。
・・・私が、計画性、文章力がないためにメイドさんの登場がまだまだ遅れそうです。
と言うよりも、文字数が少ないせいなんですけど（苦笑）。
次回からは、文字数が１．４倍になります。

最後になりますが、感想、ご指摘お待ちしております。

第３話：最後の平凡な日　その３（前書き）

２００７年６月１０日。晃の説明を加筆修正。
２００７．９／２　晃の説明の矛盾を改善。

第3話：最後の平凡な日　その3

俺は、神様なんて信じてはいない。
祈るだけで願いを叶えてもらうなんて虫が良すぎる話だ。
俺は自分の力だけで生きていける。
そう思っていた時期があった。
今思えば、傲慢極まりないことだ。
だが、いつからだろうか？
友人がいて、家族がいて。それが最も大切なことだって気づいたのは？

D組はここか。
ここが俺の新しい教室か。
俺は、見た目に似合わず緊張しやすい。
特に新しい環境に適応するのが苦手だ。
そのせいと見た目のせいで人が寄ってこないため、友達と呼べる奴は昔から少なかった。
そんな俺と友人でいてくれる、こいつらには感謝しなくちゃいけないんだろうな。
恥ずかしくて、絶対に口には出せないがな。

「席は自由だって。隣いい？」
「別に構わないが、すぐに席替えになると思うぞ」
「そっか～、また隣だといいね」
「いや、別に・・・」

同じクラスなんだから別にどこでもいいと思うんだが、そういうことを言うと恵麻が怒るからやめておく。
ちなみに俺たちの席は中央の列の一番後ろだ。
俺の前には、幸樹、恵麻の前には由真が座っている。
クラスに誰がいるのか、少し見ようと思ったが、幸樹が声をかけてきた。

「晃も同じクラスのはずなんだが、まだ来てないらしいな」
「何だ、晃も同じクラスなのか？そういえば去年はあいつは違うクラスだったな」
「まあな。でも、お前友達少ないんだからいいじゃねーか」

余計なお世話だが、事実なので反論しにくい。
幸樹は、きょろきょろと辺りを見回している。
正直ガキじゃあるまいし、落ち着いたほうがいいと思うんだが。

「おいっ、景。このクラス、三大歌姫の一角『聖歌姫』がいるぞ」
「・・・あいつも同じクラスなのか」

今、幸樹の言ったようにここの高校には三大歌姫というのがいる。
3人とも人気がある上に、皆合唱部に所属しており、そのせいか合唱部は部員がかなり多い。
だが、先に言っておこう。

・・・3人のうち2人は男だ。

三大歌姫は、『聖歌姫』、『魔性のアルト』、『天使のソプラノ』の3人を合わせてそう呼んでいる。
1人は正真正銘の女で、他の男2人もまとめて聖蓮学園三大歌姫と呼ばれている。
姫じゃないだろと思うだろうが、男のうち1人は女と見間違いそうな容姿だし、本人もその呼び名を気にしてないので何とも言えない。
普通は、「聖蓮学園三大美少女」なんかがあると考えるだろうが、不思議なことにそういう呼び名はないんだ。
ちなみに美少女というのがいないわけではないのだが、三大歌姫と比べるとインパクトに欠けるものがある。
男2人含めての三大歌姫と言うのは他に例を見ないからな。

「あ、景じゃない。おはよう。また同じクラスね。うれしいなぁ」

今、俺に声をかけてきた『聖歌姫』は男だ。
名前は、西方　光　（にしかた　ひかる）という。
合唱部では、独唱を担当することが多く実質上エース的存在だ。それに他の2人は目立つのが好きではないみたいだしな。
あまり俺は好きではないんだが、1年のとき珍しく向こうから声をかけてきて、それ以来そこそこ仲のいい友人である。
好きではない理由？そんなの簡単なことだ。
どう見ても、女にしか見えないからだ。
こいつがアイドルと言われても何ら不思議ではない。
長い髪はさらさら、爪もきれいにしている。
本人曰く、少し化粧もしているそうだ。
その上、声も女のように高い。
だが、男女問わず友人が多く、俺とは真逆の存在だ。

「1年間よろしくねっ」

その女のような顔、高めの声で言われると目を瞑っていれば１０人が１０人女だというだろうな。
目を瞑ってなくても女だが。
生まれてくる性別を間違えたんだろう。
こいつに本気で惚れているという男もいるという。
俺は、さすがに同性を好きにはならないが。

「よろしく」

俺が挨拶をすると奴は前の方へ行ってしまった。
そろそろチャイムが鳴るからな。・・・しかし、まだあいつは来ないのか。
そして、チャイムが鳴る寸前、１人の男が入ってきた。俺たちを見つけるとこちらへやって来たその男に幸樹が声をかける。

「遅いぞっ、晃」
「はあはあ。ごめん、ちょっと用事があって。みんな、おはよう」

息を切らして教室に走りこんできたのが、綿野　晃　（わたの　あきら）だ。
俺よりも身長は低く、たぶん１７０くらいだろうな。
眼鏡をいつもしており、一見インテリ風な雰囲気を醸し出しているが、こいつもあまり頭は良くない。
と言うよりも、得意科目とそうでない科目の点差があまりにも激しいのだ。
数学や理科は毎回ほぼ満点であるにもかかわらず、その他の科目は赤点ギリギリという興味のないことはやらないタイプだ。
顔は結構いいと言われている方で、その知的で冷静に見える所が、

それなりにモテる要因らしい。
コンピューター研究会に所属しており、自作パソコンを作るためにバイトをしているらしい。晃と知り合ったのも、たまたまバイト先が同じだったからだ。まあ今でも、同じバイトをしているんだがな。
そして、晃はしょっちゅう遅刻寸前で教室へと飛び込んでくることも多い。
こいつの用事はたぶんネットだろうな。いつも、どこかのサイトの話をしていることが多いからな。

「またネットか？相変わらずだな。今日は何を調べてたんだ？」
「おはよう、景。ちょっと聞いてよ。昨日、僕たちも応募したメイドが発送されたらしいんだ」
「晃。・・・そんなこと調べてたのか？」
「そんなことじゃないよ。あの世界初のメイドロボなんだから」
「まあ、そうだな」

こいつもメイドバカみたいなこと言うのか・・・。
春休み、一緒に遊びに行くたびに、幸樹にメイドの話を聞かされ続けた俺にとってはメイドの話はもう勘弁して欲しい。
少々、俺がげんなりしていると前に座っている奴が騒ぎ出した。

「まじかっ！？で、誰に当選したんだ？」
「そこまでの情報は載ってなかったよ。ただ、今日には当選した人のところに来るだろうって」
いや、幸樹。お前には当たってないからな。
・・・落ち着いてくれ。周りの視線を感じ、俺はげんなりとする。
「その情報は確かなのか？ガセかもしれないんだろ？」

「まあ、そう言われると否定はできないね。でも結構信用できる筋の話みたいだから」
「へえ～、今日来るんだ～。家に帰ったらいたりして。玄関開けたら、メイドさん・・・なんちゃって～」
「いいよなあ、それ。うんうん、いいよないいよな」
「あんたら、バカだねえ。夢見すぎだよ。全く、恵麻まで一緒になって」

ペロっと舌を出す恵麻。
でも、玄関開けたらメイドさんなんて洒落にならんと思うぞ。
それにうれしそうに頷くメイドバカ。
・・・本当にバカだな

「これは本当の話だけど、今年の担任は武蔵先生だって。職員室でクラス表見たって人が言っていたんだ」
「まじかよっ！？俺、あの先生苦手なんだよ」
「あははっ、あんたら怒られてばかりだもんね」
「俺はそうでもない。幸樹だけだ、怒られているのは」

俺たちの話している武蔵先生というのは、数学の教師だ。
筋肉隆々の体育教師のような風貌に反して、数学なんぞを教えている。
俺の一年の頃の担任で、俺のことを色眼鏡なしで見てくれていた数少ない先生だ。
だが、幸樹は居眠りをしていたり、宿題を忘れたりするからよく怒られていた。
見た目のせいで『マスゴリ』なんていうあだ名で呼ばれていた。
今年もマスゴリか・・・まあ俺は構わないんだが。

「は～い、みんな静かにして」

みんなで、バカ話をしていたらどうやらマスゴリが来たようだ。
ん？妙に女のような声だな。
そして、教室の扉が開く。

全員が教室に入ってきた先生を見る。
って、誰だ！？

「みんな、おはよう。私がこのクラスの担任の相模　仁美　（さがみ　ひとみ）です。担当教科は数学。本当は、担任になる予定ではなかったのだけど、武蔵先生は不幸な事故・・・じゃなくて交通事故に遭われて入院されていらっしゃるので、今年は私がこのクラスを受け持ちます。１年目で慣れない事も多いけど、みんなと一緒に頑張っていくからよろしくね」

おいおい、マスゴリ。新年度から交通事故とはな。まあ、ご愁傷様とだけ言っておこうか。
しかし、クラスの男のテンションは高い。
まあ、美人でスタイルのいい女教師の方がむさい筋肉男よりいいと思うは、男の性だろう。
しかし、今あの先生何かいいかけたような・・・。
言い直す必要が果たしてあったのかは、謎だな。

「晃。お前の情報、今日はアテにならないな。担任、マスゴリじゃないぞ？」
「おかしいな。交通事故なんていつ遭ったんだろう？まあいいんじゃない。美人の先生が代わりに担任なんだし」
「春休みだったから知らなくても仕方ないだろ。それに、景。マスゴリなんて気にすんなよ。お前、ゲイか？それよりも、相模先生見てみろよ。すんげえ美人だろ。俺、ラッキーだわ。事故ったマスゴ

リに感謝だな。まあ、ゲイの景には関係ないけどよ」
「俺はゲイじゃない！！」
・・・しまった。
大声で叫んでしまったので注目が俺に集まる。
何故か、1人の女が目をきらきらさせながらこっちを見ている。
いや、信じないでくれ。・・・もしかして、そっち系なんだろうか？
「そこの2人。朝から元気なのはいいけど、ホームルーム中は静かにね。それじゃあ、今から始業式だから体育館へ行きます。はいっ、移動」
新年度早々、ゲイ疑惑が発生した俺。
人の噂も何とやらだ、すぐに消えることだろう。
「ねえ、景君？景君はノーマルだよね？」
恵麻は真剣な顔をして聞いてきた。
「・・・」
「ううっ、痛いよ～」
俺は、話を掘り返した恵麻に制裁を加えておいた。
こいつもそんな風に俺を見ていたのか・・・。

第3話：最後の平凡な日　その3（後書き）

祝！１０００アクセス。
ついに１０００アクセスを達成しました。
これまで、読んで頂いた方々には感謝でいっぱいです。

今日は2日続けての更新となります。
ヒロイン候補以外の主要人物はこれで全員登場・・・メイドさんを除いてですが。
6話でようやく登場になります。
これだけだらだらしてると読者に見捨てられそうですが、お付き合いしていただけたら幸いに思っております。

２０００アクセス達成したら、記念小説を書くかもしれません。
いつも最後になりますが、読んで頂いている方々、本当にありがとうございます。
また、感想、間違いのご指摘もお待ちしております。

第４話：最後の平凡な日　その４（前書き）

２００７年６月１０日。脱字修正とほんの少しだけ、本文追加。
２００７．９／３　本文修正

第４話：最後の平凡な日　その４

「いやあ、皆健康に新年度を迎え、大変喜ばしい・・・・・」

「で、あるからして・・・・」

「私の今年度の目標は・・・・」

どうでもいい校長の話がもう２０分も続いている。
しかも、生徒をずっと立たせているのだから、聞かされている側からすればたまったものではない。
周りの奴も飽きているのか、おしゃべりをしている者が大半だ。
大体、校長の今年度の目標なんて誰も聞いてないから。

俺たち生徒が、校長の話に飽きて騒がしくなってくると、少しの間黙る校長。
静かになるのを待っているのだろうが、無駄な話が多い校長のせいで皆飽きているということには残念ながら気付かないようだ。
そして、校長も我慢の限界を超えたようで、俺たちに注意をする。

「私の話はまだ終わっていません。静かにするように」

俺は声を大にして言いたいことがある。
だが、先に俺の言いたいことを幸樹に言われてしまったな。

「なあ、景。俺思うんだよ。俺たちに注意する前にまずは、校長が話を要約した方がいいんじゃねーかって」
「ああ、全くだな。実のない話ほど、聞いていてつまらないものはないからな」

「言えてるぜ。あのヅラ校長のありがた～い話なんて誰も聞いてないしよ」

幸樹の言いたいことはよく分かる。
しかし、声がでかいと思うんだが・・・ほら見ろ、校長がこっち見てるしな。

「そこの君たち、まだ言いたいことはあるから、ちゃんと最後まで聞くように。それでは、続けます。最近の若者は我慢が足りないと思うのです。しかし、それは我々大人がきちんと教育しなかったためであり・・・・・」

そして、校長の話はさらに１０分続いた。
絶対に嫌がらせだろ、これ。
・・・どこの学校でも校長の話は長いのだろうか？

校長の話だけで半分の時間を費やした始業式は、校歌斉唱の後ようやく終わりを告げたのだった。
ようやく教室に戻り、イスに座れることの喜びに感謝していた俺に恵麻が話しかけてきた。

「景君。校長先生の話長かったね～。」
「確かにな。あまりためにならない話だったから時間を損した気分だ」
「この後は、先生が１回クラスの人の名前と顔覚えたいって言ってから出席かな？あ、そうそう。学校終わったら、みんなでどこか遊びに行かない？由真ちゃんは行くって」

すぐに家に帰っても、テレビを見るしかすることのない俺はすぐに

了承した。

「俺は暇だから構わないが。ところで、どこに行くんだ？」

昼飯は外で食べるつもりだったし、ちょうどいいと思ったのだ。

だが、男1人というのも寂しいので、幸樹や晃も誘ったらどうだと提案してみる。

「折角だし幸樹と晃も誘ってもいいか？」

俺がそう言うと、恵麻は呆れたように苦笑すると言った。

「もう誘ってるよ～。景君、昨日携帯見てないでしょ？返事来なかったから・・・」

だが、恵麻は幸樹と晃を既に誘ってあった上に、俺にも携帯でメールが来ていたらしい。

俺は、ポケットから携帯を取り出すと、受信メールをチェックする。

「・・・確かにメールが来ているな」

「景君、現代的じゃないよ～」

「携帯を毎日チェックすることが現代的だと言うなら、俺は非現代の人間だな」

「景君、拗ねないでよ～。でも、これからはちゃんとメールはチェックしてね」

「わかった、わかった」

メールをチェックしていないだけで、現代的ではないと言われるとは思わなかった。

確かに、俺も携帯は持っているが電話とメール以外に使うことはほ

とんどない。
カメラは一応付いているが、使ったことがない。
最近では、テレビ付きの携帯も普及しているそうだが、携帯で見たいほどのテレビ番組が果たしてあるのだろうかと考えてしまう。
まあ、これは俺が大してテレビ番組を見ないせいでもあるのだが。

「みんな、もう戻っているみたいなので、ホームルームの続きをします」

そういえば、恵麻が言っていた出席を取るんだろうな。
そして、先生は出席簿を見ながら、俺たちに言った。

「それじゃあ、名前を呼ぶから、読み方が違ったら教えてください」
「はあああいっ」

無意味に元気良く返事をする幸樹。
・・・ここは小学校じゃないぞ。恥ずかしいとは思わないのか？

「ふふっ、君は元気がいいわね。じゃあ、名前を呼んだらもう1回元気良く返事してね」
「はいっ！！」

幸樹の大声での返事を大人の対応で流すとはな。
意外とこの相模先生は大物なのかもしれないな。
というよりも、幸樹よ。お前は小学校に帰ったほうがいいぞ。

「いやあ、景。俺、ポイント高いんじゃね？」
「何のだ？まあ、変な生徒としてならポイントを稼いだと思うぞ」
「景には負けるぜ？何たってゲイ疑惑だからな」
「・・・」

「まあ、気にすんなって」
俺が落ち込んでいると思ったのか、そう言って俺の肩をポンポンと叩く幸樹。
ゲイ疑惑は、お前が原因の半分だけどな。
先生は、特に言わなかったから定番の自己紹介というものは無いらしい。
そして、先生は俺たち生徒の名前を呼び始めた。
「それでは、出席を取ります。藍羽さん、藍羽恵麻さん」
「は～い」
きっと、この担任は小学校の先生にでもなりかったのだろう。
俺はそう勝手に推測する。普通は、こんな風に呼ばないと思うぞ。
そして、最初に呼ばれたのはやはり恵麻だった。
恵麻は、今まで、クラスの出席番号が1番でなかったことがない。
『あいう』という名前よりも、呼び名が早い奴は今だかつて見たことがない。
ちなみに俺は、2、3番目のことが多かったが、去年は出席番号が1番だった。
恵麻の次はたぶん俺なんだろうな。
たぶんなんだが。
「次は、有栖君。有栖景君」
やっぱりそうか・・・。
俺は、適当に返事をする。

「はい」

「・・・君が有栖君なのね」

ん？先生が今何かぼそっと言った気がするんだが・・・気のせいか？

「次で最後ね。綿野君。綿野晃君」

「はい」

ようやく出席が終わったな。

俺は、あまりクラスの奴に興味はなかったから名前を聞いてもいなかった。

それに嫌でもそのうち覚えるだろうしな。

「それでは、ホームルームを終了します。クラス委員や席替えは明日決めたいと思います。自己紹介は各自で行ってください。それじゃあ、また明日ね」

ホームルームを終えて、教室から出て行こうとする先生。

しかし、すぐに何人かの生徒が先生のとこへと行く。

・・・幸樹もいたな。

「さてと、帰るか」

俺が、さっさと帰ろうとすると恵麻に呼び止められた。

「景君っ。この後、遊びに行く約束でしょ。『さてと、帰るか』じゃないよ～」

「そういえば、そうだったな。・・・すまん」

「しっかりしてよ、景君」
「何やってんのよ。まだ春休みボケなの？」
すっかり約束を忘れて帰ろうとしていた俺を怒る恵麻。
由真から見ると俺の中では、まだ春休みが続いているらしい。
「相模先生、すっかり人気者だね～」
恵麻がそう言ってきたので、教室の前のほうの騒がしい集団を見る。
・・・男ばっかりだな。
いや、正確に言うと女もいるんだが、数が違うな。
先生は次から次へと洪水のような質問攻めにあっている。
「先生はどこの大学出身なんですか？」
「先生、とても若く見えますけどいくつなんですか？」
「彼氏いるんですか？」
「俺と結婚してください！」
「スリーサイズは？」
何故か、告白をしている奴もいるな。・・・って、お前か。幸樹。
どうでもいいが、スリーサイズを聞くのはセクハラじゃないのか？
女の方も、色々と質問攻めにしている。
「どういう化粧品使ってるんですか？」
「その時計かわいい～」
「そのネックレス、どこで買ったんですか？」
・・・。
男と女では結構質問内容が違うものなんだな。

俺が、どうでもいいことに感心していると、由真が話しかけてきた。
「景。あんたは行かないの？」
「ああ、行くぞ」
「じゃあ、何でここに突っ立てるのよ？」
「何で、と言われても俺も困るんだが。恵麻から聞いてないのか？」
「何で恵麻が・・・ああ、そっちね。違う違う。景は先生のとこ行かないのかってこと」
「・・・そういうことか。俺は教師に興味なんてないからな」
「ふーん、まあいいや。今１０時半なんだけど、どうしようか？」
自分で話をふっておいてその反応なのか？
確かに相模先生は美人だが、俺は由真にも言ったが教師に興味なんてない。
ただ、きちんと教師として、最低限のことをしてくれれば文句はない。
由真がまだ１０時半と言うのでちらりと時計を見て俺は正直に思った。
まだ１０時半なのかと。
昼には少々早く、遊びに行くには少し中途半端な気がしなくもない。
少し考えてから、俺は１つ意見を言ってみた。
「そうだな、駅の近くの新しいファーストフードの店でも行ってみないか？」
俺が食べたいのは、ギガバーガーなる新しい商品だ。
健康ブームのアメリカから追い出されてきたというからには、きっとかなりの大きさだろう。

俺は、ミーハーだと以前幸樹から言われたことがあったが、その通りなんだろうな。
しかし、1回も試してみずして駄目だというのは俺の食のポリシーに反する。
新しい発見はいつでも、知らない商品にあるのだからな。
俺の提案に晃は、溜息を1つ吐くとまたかというように言った。

「景、僕が思うにギガバーガーが食べたいんだね？」
「そうだが・・・それがどうかしたのか？」
「いや、景って変なものを好むからさ」

お前の認識は甘いと思うぞ。
俺は、この前のドーナツ屋のオープンの時に3時間待ったんだからな。
世の中ミーハーなのは、俺だけじゃないってことだ。
俺は、さっさと行こうと思い、由真に集合場所の確認を取る。

「俺は、並びに行くから集合場所を教えてくれないか？」
「いや、並ばないでしょ。でもまあ、物好きはいるからね・・・」
「甘いな、由真。初日というのは意外と人は集まるものだぞ。それにいつ無くなるか分からないからな・・・」

そう。俺には1つだけ不安があった。
それは・・・俺が好む商品はすぐに無くなってしまうということだ。
売り切れるのではなく、文字通り無くなるんだ。
例えばだな、『メロンっぽいアボガドジュース』や『不良トマト500』とかだな。
今は、どこの自動販売機にも見かけなくなって久しいがな・・・。

俺が由真の認識を改めようとしていると、急に恵麻がぼそっと言った。

「じゃあ、私も行こうかな？」

由真は驚いて、恵麻の方に振り向いた。

「あんたも食べる気！？」

「ち、違うよ」

「ははーん、そういうこと」

この2人はいったい何やってるんだ？

恵麻も赤くなったり、慌てたり忙しい奴だな。

そんなことはさておいて、俺は赤くなっている恵麻に集合場所を尋ねる。

「で、どこに集合なんだ？」

恵麻は、ようやく落ち着いたようで、いつもの調子で答える。

「駅前だよ。お昼を食べてから遊ぶ予定だったし、私も行ってもいいかな？」

「別にいいが、売り切れの可能性もあるけど、いいのか？」

「うん、大丈夫～。売り切れだったら、ファミレスにでも行けばいいんだよ～」

恵麻は決まりだな。そこで、俺は由真と晃にも聞いてみる。

「それもそうだな。由真と晃はどうするんだ？」

俺の言葉に仕方なさそうに由真と晃は頷いた。

「まあ仕方ないか。あたしも付き合ってあげようじゃない」

「僕も同じく」

ふと、幸樹のことを思い出したが、幸樹は先生のところに未だにいるから無視だ。

後で、メールでもしておけばいいだろう。

俺は付き合ってくれる恵麻たちに礼を言っておく。

「悪いな、俺の我侭に付き合わせて」

晃たちは、俺の言葉に意外そうな顔をしたが、すぐに何を今更と言わんばかりに言った。

「僕は気にしてないよ。それに景がまた変なものを見つけるんじゃないかって、ある意味楽しみだよ」

「あははっ、言えてる」

「景君って、いつもはやる気なさそうだけど食べることだけが関わるとやる気が出るよね～」

何だか俺の評価は食べることしかないみたいだが、事実だから仕方ないな。

だが、恵麻たちのように特に嫌そうな表情をすることなく付き合ってくれる友人を持った俺は幸せなんだろうな。

教室を出るとき、ふとそう思った。

第４話：最後の平凡な日　その４（後書き）

更新完了。
今回も読んで頂いた方々、本当にありがとうございます。
今回の話は、大きく言うと序章に当たる部分の全６話のうちの５話目になります。
次が序章の最終話、ようやく終わります。
毎回閉めは同じですが、感想、ご指摘の方もお待ちしております。

第５話：最後の平凡な日　その５（前書き）

２００７．９／３　本文修正。
２００８．２／１８　指摘された矛盾を修正。指摘してくださった方、ありがとうございます。
たぶん、修正されたはずです。

第5話：最後の平凡な日　その5

俺は、正直がっかりしている。

それこそ、愚問だ。

ああ、そうだ。売り切れたんだ。ギガバーガーがな。

俺たちが店の前に着いたころには、人がかなり並んでいた。

それでも、１１時前。

まさかなくなるとは思っていなかった。

今日は開店日だからな、普通は多めに用意するはずだと。

それなのに・・・。

「ギガバーガーは好評のため、売り切れで～す」

「・・・」

結局、ファミレスへ来ることになった俺たち。

俺は未だに敗戦のショックから立ち直れてはいない。

そして、俺に何て話しかけたらいいのか迷う３人。

「・・・あはは」

「え～と、こういう時なんて言ってのいいのかな？でもね、景君。

元気出してよ～」

「・・・ああ」

由真は、苦笑いを浮かべているし、恵麻は俺を慰めてくれようとしている。
でも、俺は何を言われてもうわの空だ。
だが、今まで何も言わなかった晃がメニューを見るなり俺に話しかけてきた。

「景、見てよ。ここにさ、新商品バナナ丼がある・・・」
「食べるしかないな」

新商品という言葉に反応する単純な俺。
そして、すぐにメニューをひったくるようにして奪うと、目を通す。

「反応早っ！？というよりもバナナ丼だよ！？正気なの？」
「由真、俺は正気だ。ギガバーガーはまた今度だな。まあ今日はこれにするか」
「・・・本当に単純だよね」

晃、お前何気にひどいことを言うな。
俺だっていつまでも引きずったりはしない。
と、ちょうどそこへウエイトレスが注文を聞きにやって来た。

「ご注文はお決まりですか？」

恵麻は注文をしようとその人を見上げると、急に叫び声を上げた。

「ああ～！？」

恵麻が大声を出すものだから、周りの客が何が起きたのかとこちらを見ている。

だが、よく見ると俺たちと同じ制服を着た学生、つまり同じ高校の生徒がたくさんいる。
どうやら、帰りがけにここに寄っている学生は多いらしい。
店員の女は、恵麻に注意すると、小声で話しかけてきた。
「お客様、大声は他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください。・・・ねえねえ、恵麻。恥ずかしくないの？」
すると、恵麻も由真も何だか親しそうに話を始めた。
どうやら、この店員は恵麻や由真の友人らしい。
「えへへ、ごめんね～。やっぱり亜樹乃ちゃんだ～。今からアルバイトなんだ～？」
「へえー、がんばってるんだな。今度どっか遊びに行かないか？まあ、暇があったらだけど」
その間、俺はというと話についていけず、居心地の悪さからか外をぼんやりと眺めるしかできなかった。
できれば早いとこ注文を取ってくれないだろうか。
「まあね。うーん、そうだねえ。後、2人くらい誘ってデズニーランド行こうよ。新しいアトラクションも増えたみたいだし。私、優待チケット5枚あるんだ・・・あっ・・・げっ、まずっ」
いきなり声を上げるから何事かと思ったが、店員はびくっとして後ろを振り向いて、頭を下げると、今度は俺たちを見て申し訳なさそうな表情をして、再び注文を聞いてきた。
「・・・そうそう。そういえば私、注文聞きに来たんだった。あん

まりゆっくりしてると怒られるんだよね。ではでは、改めまして。お客様、ご注文はお決まりでしょうか？」

俺はしばらく注文を聞いている店員を観察してみる。髪を後ろで一本に束ねており、顔立ちは何と言うのか素朴な感じを受けるが、少々大人っぽさも感じさせている。身長は、１６０くらいだな。

・・・いつまでも、不躾に見ているのもよくないな。

そろそろ注文をしようと口を開いたその時だった。由真が先に手を挙げると、注文をしてしまった。俺は、と言うと・・・タイミングを失い、口が開いたままの状態だ。

「私は、冷菜パスタとアイスティー」
「じゃあ私は、オリジナルパスタセットでお願いします」
「僕は、ランチ定食Ｂを」

女性陣が２人ともパスタを頼むので俺は開いたままの口を１度閉じると、気になったので聞いてみた。

「ここってパスタがおいしいのか？」
「うん、そうだよ。ここはパスタだけはおいしいよ～」
「・・・藍羽さん、かなり失礼だと思うよ」

空気を読まなかったのか、それとも意図的に言っているのか。俺にはわからないが、きっと言ってはいけないのだと思うぞ。

「くすっ。あっ・・・こほんっ。口が開いていたお客様はどうなされます？」

口が開いていたって・・・見られたのか。
ついでに、こほんって。絶対にわざとだろ。
だが、俺は気を取り直すといくつかの新作の中から1つを迷うことなく注文する。

「俺は、バナナ丼を」

すると、俺の注文だけ、店員は少し言葉に詰まった。

「・・・え？えーと、バナナ丼・・・でよろしいでしょうか？」

1通り俺たちの注文を聞き終えると、店員は再度注文を読み上げる。

「では、ご注文を繰り返しますが・・・・以上でよろしいでしょうか」
「は～い」
「では、少々お待ちください」

お辞儀をして去っていく、店員。
しかし、「くすっ」って何なんだ？
人を見て笑うとは失礼だな。

俺が、少々不満に思っていると恵麻と由真が楽しそうに話している。
そして、急に恵麻が「そうだ」と言って俺に話しかけてきた。

「寿々林君にメールした？」
「・・・すまん。すっかり忘れていた」
「景君のことだから、きっとそうだろうと思って、私が連絡してお

いたよ。昼ごはんは1人で適当に食べてから来るって」
「・・・そうか。悪いな、恵麻」
「そんなこと別にいいよ～」
やっぱり恵麻はいい奴だな。
昔から、俺が忘れていたことを何かとフォローしてくれるからな。
時折、俺もお礼ということで飯をおごったりしているが、そんなことで果たして大きな恩を返せているのだろうか？
そして、あの時も恵麻がいなかったら・・・。
俺が、昔のことを思い出していると由真が俺の目の前で手を振っていた。
「景？景？ねえ、景！」
「どうした？」
ぼんやりと答えて俺を見て、何を考えたのか、頬杖をつきながら左手の人差し指を俺のほうに向けてくるくるとしながら、自信たっぷりに言ってくる。
「何ボケっとしてんのよ。ははーん。もしかして、亜樹乃のこと考えていたとか？」
亜樹乃？ああ、さっきの店員か。って、あれ亜樹乃だったのか！？
俺は、店員が再度去って行った見やった。
「あれ、本当に亜樹乃なのか？」
俺は由真に聞いたつもりだったのだが、その質問に何故か慌てたよ

うに恵麻が答える。

「け、景君覚えてないの？ほ、ほらっ。去年の体育祭の借り物競争の景君が私に言ったでしょ。『恵麻、お前の友人どっかにいないか？』って。確かに今日の亜樹乃ちゃんは、髪を纏めているけど」

「・・・ああ。あれか。『幼馴染の友達、幼馴染がいない場合は、友達の友達』というお題か。でも、仕方ないだろ。いつもは髪なんて纏めてないんだから」

「景君は気をつけた方がいいよ～。見た目が変わっていても中は同じなんだから」

恵麻は話しながら落ち着いたのか、いつの間にか話し方が普通に戻っていた。

去年の体育祭、俺は借り物競争に出ることになった。

他にも、いくつかの競技に出たのだが、大体は団体競技で個人競技はこれだけだった。

そして、その時のお題が、『幼馴染の友達、幼馴染がいない場合は、友達の友達』だったのだ。

その時の俺は、もうちょっとましなお題があるだろうと思ったが、ペナルティを科されると厄介だったので諦めた。

減点を食らおうものなら、同じカラーの奴らに何をされるかわかったもんじゃないからな。

その時、由真は次の競技でいなかったので、代わりに協力してくれたのが壬生　亜樹乃　（みぶ　あきの）だ。

たまに話をする仲ではあるのだが、いつもと見た目が違ったので気づきもしなかった。

忘れてたなんて言えるわけもなく俺は、他に話題を変えようと由真

に話しかけた。

「そういえば、去年の体育祭での由真の活躍は鬼神のようだったな」
「鬼はないだろ、鬼は。」
「・・・神であることは否定しないんだ。痛っ」

余計なことを言ってゴツンと音を立てられる、晃。警戒が薄いようだ。
そして、本当のことを言った俺も殴ろうとする由真。
晃は殴られたものの、俺には届かないようだ。
俺は、由真の対角線上に座っている。要は一番遠いんだ。
届かなかった由真は少し悔しそうだ。

「晃は去年、何に出たんだ」
「僕は、仮装リレーと他のクラス対抗競技かな」
「私は、去年は騎馬戦の上にいたよ～」
「あんた、すぐに負けたじゃん」
「あ～、そんなこと言うの～。由真ちゃんが取ったんでしょ」
「あー、どうだったけ？」
「忘れたフリしてる～」

去年の体育祭の会話で盛り上がる俺たち。
そんなところに料理が運ばれてくる。

「お待たせしましたー。・・・バナナ丼のお客様は、って・・・君だったね」
「亜樹乃なんだよな？双子の姉妹とかじゃないよな？」
「あれあれ？思い出したんだ。そうそう借り物競争の借り物こと壬生　亜樹乃とは私のことさ。はいっ、バナナ丼。1個バナナをサービスしてあげたから。全く、少し見た目が違うからって私だと分か

らないなんてよくないなー。第一、私に姉妹なんていないし」
「・・・ありがとう」

バナナ丼を置いて厨房の方へと戻っていく亜樹乃。
俺たちの話を聞いていたのか、それとも俺たちの話し声が大きいから聞こえてしまったのか。
後者であれば、問題だろう。

「む～」と言う恵麻の声が聞こえたが、まだパスタが来ないことが不満なのだろうか？

バナナ丼は、温かいご飯の上に切ったバナナが乗っており、その上に生クリームがたっぷりとかかっているシンプルなものだった。
バナナが1本増えたせいか、ご飯が全く見えないんだが。
俺が、早速バナナ丼を食べようとすると、周りの視線を感じた。
言うまでもなく、一緒に来ている3人だ。
ん？よく周りを見ると近くの人たちも俺のほうを見ている。

「一体、なんで俺のほうをみんな見ているんだ？」

よく見ると厨房のカウンターからもシェフであろう人がこっちを見ている。
遠くからでも期待されているのがありありとわかる。

「すごく居心地が悪いんだが」
「そりゃー・・・ねー、恵麻」
「そ、そうだよね～。絶対お店で出すものじゃないよ～」
「そうか？じゃ俺は、先に食べるぞ」

さらに周りの視線を独り占めにする俺。

そんなに珍しいのか？
周りを気にしていても仕方がないので、まずは一口。

「・・・」
「・・・」

俺の最初の一言を皆が待っているようだ。
非常に一様に不安げな様子で俺の顔を伺っている。
そして、もう一口。
一口だけで、おいしいかどうかを決めるのは愚かな事なのだからな。
ますます不安げな様子になっていく周りの人々。
そして、口の中の食べ物が無くなると、俺は静かに口を開いた。

「まあまあだな」

周りは信じられないといった表情だ。
厨房のシェフらしき人も驚いている。あんたが作ったんじゃないのか？
そして、友人であるはずの3人も「いや、それはない」と手をヒラヒラと振って否定のジェスチャーを示す。

そこで俺は、3人にも勧めてみる。

「失礼だな。食べてみるといい」

しかし、3人とも首を横に振る。
何てもったいない人生を送っている奴らだ。
若いうちから挑戦心を失っているなんてな。

俺が哀れんだ目をして言うと、由真は大笑いしながら返す。

「残念だな。このバナナとクリームが温かいご飯に混ざって甘みを引き立てていると言うのに」
「あはははっ。あんたの奥さんになる人は幸せだよ、きっと」

何が言いたいんだ？
さっぱりわからないが１つだけはっきりとわかることがある。
俺に対して失礼だ。

俺が、由真の言葉に不満そうにしていると、晃も笑いながら言う。

「案外、味覚障害かもよ。僕は、自分が作った料理の味がわからない人とは結婚したくないと思うよ」
「それは困るな～」

俺だって、味くらいわかるぞ。
それに、恵麻はいったい何が困るんだ？

俺が、文句を言おうとすると、店員が残りの注文を運んできた。
既にバナナ丼を食べ終えて、空になっている器を見ると、俺のことを宇宙人でも見るように、そしてどことなく馬鹿にするように言った。

「あれあれ？よく食べれたね。はい、ご注文の冷菜パスタとアイスティー、オリジナルパスタセット、ランチ定食Ｂでございます。以上でよろしかったでしょうか？」
「そうだね～。亜樹乃ちゃん、ありがと～」

俺は、器を持っていった店員を見ながら、ふと考えた。
・・・俺の味覚はおかしいのだろうかと。

その後、ボーリングへ行ったのだが、ずっとこの話題で持ちきりだった。
そして、俺の昼飯のことを聞いた幸樹は一言。
「お前ら、そんなことで驚くなよ。まだまだ景の本気はこんなもんじゃねーから」
幸樹のフォローに期待した俺が間違っていた。
「まあ、景と食事に行くときには、普通のメニューのある店を選ぶんだな」
幸樹、お前の基準で言うとあのファミレスも普通じゃないんだが。
ちなみに俺のボーリングのスコアは７５だった。
俺は、生まれて初めてボーリングをやったのだが、他の４人は１００以上だった。
さらに罰ゲームと称して、ジュースをおごらせやがった。
こういうのは、初心者に手加減するものだと思うのだがと、俺が抗議すると由真はスポーツ選手らしく「勝負の世界に手加減なんてあると思ってんのか？」などとのたまう始末。
そこで俺は恵麻たちに同意を求めたが、皆反応は鈍かった。
「う～ん、景君は今回が初めてだから仕方がないよ。でも、負けは負けだから～」

「景、男らしく負けを認めろよ」
「僕も、潔く負けを認めたほうがいいと思うよ」
「・・・」
こいつらとは2度勝負事はしないと俺はこの日誓った。

「じゃあ、また明日な」
「恵麻、景。また明日」
「景、藍羽さん。それじゃあ」
俺と恵麻以外は反対方向なので、高校の最寄り駅で別れた。
結局あの後、カラオケに行き、2時間ほど歌うことになった。
隠しても仕方がないが、俺は歌が下手だ。
だが、歌うことは嫌いではないので、数曲歌っておいた。
・・・4人とも爆笑していたがな。
以前は耳を塞いでいたが、今ではもう慣れてしまったらしい。

ちょうど夕方だったので電車から遠くの海のほうに夕日が見えた。
明日も変わらない日々が続くだろうな。
夕日を見ていると根拠はないがそんな気がした。

そして、電車に揺られること10数分で自宅の最寄駅に着いた。
今日は恵麻と一緒に帰るのか。
恵麻は、いつもは部活で忙しいからな。
俺は、帰宅部だからいつも学校が終わったらすぐに帰っている。
週3、水、木、金とバイトをしているからな。

今日はバイトが休みだったから、こうして遊んでいたんだけどな。
バイト先の話は・・・まあ別の機会にでもするか。

駅からの帰り道、恵麻が俺に話しかけてきた。

「ねえ、景君」
「どうした？」

俺が、返事をすると、恵麻は俺の横に並ぶと言った。

「今日は楽しかったね」
「ん？まあ、そうだな」
「明日も迎えに行くから、寝坊したらダメだよ」
「恵麻こそ、寝坊するなよ」
「ふふっ」
「何がおかしいんだ？」
「秘密だよ～」
「あ。待て、恵麻」

他愛のないいつもの会話。
これが俺たちの平凡な日常。
これからも続く日常。

「じゃあ、また明日～」

笑顔で手を振る恵麻。
俺たちは、お向かいさんなので、反対側が俺の家になる。

「さてと」

鍵を差込み、家の扉を開ける。

「母さん、ただいま」

だが、いつもと違う日常がそこにあった。

「お帰りなさいませ、ご主人様っ」

第5話：最後の平凡な日　その5（後書き）

ようやく、一区切りつきました。
今回は、1人登場人物が増えました。

後、ヒロインは3人（組）くらいまでに抑えたい。
で、ないと1人1人がの存在が希薄になりそう。
多人数を丁寧に描写できるほど文才ないですし。
そうすると5人になりそうです。

・・・とりあえず多いような。

今回もオーダーメイドを読んで頂いた方々、本当にありがとうございます。
まだまだスローテンポで進んでいきます。
その辺は、作者が未熟なためです。お許しください。

感想・ご指摘もお待ちしております。

外伝１：ある研究者の苦悩（前書き）

２００７．９／５　本文修正。

外伝1：ある研究者の苦悩

私の名前は、三津刃　甘奈　（みつは　かんな）。
ハンドメイデン社開発部の主任研究者よ。

うちの会社、ハンドメイデン社は現在、管理部門、営業部門、サポート部門そして、私たち開発部門に分かれているわ。
管理部門は、主にメイドロボの管理。つまり、今はエリスの管理ね。
今は大して、忙しくないですね。エリス1人しか管理する必要がないから。

次に営業部門。
ここは、主に顧客との契約を拾ってくるところね。
ここは、結構忙しいみたい。

唯一、カタカナの部門、サポート部門。
ここは、お客様からの修理の依頼とか、バージョンアップ、問い合わせに対応する部署。
ここは・・・開店休業状態ね。

私たち開発部門は読んで字の如く、説明はいらないわね。

そして、1年前世界初の人間型メイドロボットのエリスが誕生したの。
エリスは5年の歳月をかけて、出来上がったの。
できる限り、人間に近いロボット。
それから1年間、予想外のバグがないか、データだけでは難しいと思う人との接し方なんかを教えていったの。

もちろん極秘事項だったわ。
そして1年後のつい最近、世界初の快挙として、世界中に華々しく発表されたわ。
世界中から、取材が殺到したわ。
私もインタビューを受けたりしたんだけど、テレビ映りがどうだったか気になってるの。

それに、エリスは学習型ＡＩを搭載しているから、色々と覚えることができるの。
どう？すごいでしょ。
ＡＩは部長が主に1人で作ったんだけどね。
部長って普段はだらしないんだけど、メイド作りには人一倍の情熱を持ってるのよね。

でもね、ここで1つだけ問題があったの。

本当の意味での実戦データが全然ないこと。
私たちとしか接していないエリスのデータじゃ後継機は作れないし。
だから、データを集めることも兼ねて、エリスに一般の人のところへ行ってもらう事にしたの。
開発部部長は反対だったんだけど、社長が押し切ったちゃった。

「私は反対です。もし、エリスに何かあったら・・・」
「大丈夫でしょ。じゃあ聞くけど、君たちの1年間は何だっただい？」

こう言われたら、もうどうしようもなかったわ。
そうそう、そもそも社長がメイドロボを作ろうって言い始めたの。
私は、後から会社に入ったので、分かりませんけど4部門の部長と

社長、それに社長夫人は知り合いらしい。
職場の人間関係になんて興味ないかな？
まあ、秘密事項が多くてあまりお話しすることができないから、ごめんね。
でもまあ、どちらにしろ・・・社長の趣味で、ついにはメイドロボが完成したなんて世間には言えないけどね。

それに、社長はエリスの衣装を手がけていたんですけど・・・ちょっと開発部で変更したってバレたらやばいかも。
でも、バレない自信はあるんだ。・・・メイド服を変えただけだし。
それに奥さんの了承も得てるし。

毎日忙しい職場だけど、私はこの仕事は楽しいと思ってる。
みんなもきっとそうじゃないかな。

今日は、そんな私たち開発部門で起こった、ある出来事。
そう、エリスのお仕事先選考の出来事。

まず、一番の問題は、広告にあったの。

応募期限３月末まで
対象者　国民であればＯＫ
応募方法　葉書に住所、年齢、電話番号、そして、どういうタイプのメイドが欲しいかを書いてポストへ
商品　オーダーメイドＰ１

・・・・・
限定1名様
当選結果は、発送をもって変えさせていただきます
企画：（株）ハンドメイデン
「ちょっと、中村さん！」
ああ、部長がイライラしてる。いえ、完全にキレてるよね。
全国に宣伝を始めた、世間で言うところの春休みが終わる頃。
うちのトップが、営業部の部長さんに朝から文句を言っていました。
「こんな広告出してどうするのよ！？」
あまりのうちの部長の剣幕に、中村さんもビビッています。
あ、何とか空気を変えようと頭をかきながらも必死に説得しようとしている。
「いやあ、こうした方がいいかなあ、な～んて思っちゃったり・・・」
だけど、完全に頭にきてる部長には通用しなかったみたい。
って、そもそもそこで弱腰になるのが、中村さんの悪い癖だと思うんだけどな。
「いいわけないでしょ！全くもう、エリスの変更はうちがするのよ」
「いや、それが開発部の仕事・・・」
「大体ね。私はエリスを実際に世間へ出すことは認めたわ。でもね、

エリスの外見、性格、所謂エリスのデータを変えるつもりなんてないわ！」

朝から、営業部部長を怒るうちの部長。
私もエリスはかわいいからね。
変更なんて許しませんし、開発部の他のみんなもそれに関しては同意見です。
エリスは人によっては娘、私にとっては妹のような存在だからね。

今回の件で、一番反対したのも私たち開発部なの。
エリスを出すのはまだ早いって。
でも、社長にこう言われたけど・・・。

「いや1年前にも同じことを聞いたんだけど・・・」
「まだ、バグがあるかも・・・」
「それも1年前に言ってたよね」

ええ、そうです。
発表が遅れていたのは、私たちのせいなの。
本当は半年で十分なはずだった。
だから、納得せざるを得なかった。

「ああっ、もういいわ！！応募総数はどれくらいになりそうなの？」
「さあ？後1週間あるから・・・」
「それ全部、こっちに回して。うちで、選考します。拒否は許さないわ！」
「はっ、はい！！」

こうして、私たちはエリスの派遣先を探すことになったの。

「ああ！？何これ。却下」
「・・・部長が怖い」
１０日後、応募総数８００万件を超える中、私たちの戦いが幕を開けました。
部長は、次々と却下にしていきます。
私が殺気立つ部長を横目で見ていると、同じ開発部で同期の加奈が私に聞いてきた。
「ねえ、甘奈。これいつになったら終わるのかな？」
私は、もう１度勢いよく仕事をしている部長を見て言った。
「案外早く終わると思うけど」
加奈も同じ様に部長を見るけど、溜息をついて納得する。
「・・・そうね」
部長が次々と却下にしてるからね。
でも、私たちが話をしていると、部長が目を三角にして怒ってきた。
「そこっ！！さぼってないでさっさと手を動かす」
「「は、はいっ」」
触らぬ神に祟り無しよね、舌を出して加奈と言っていると、また部長に睨まれた。

そんな時、私たちのところに強力な助っ人がやって来たの。

「私もお手伝いいたします」

そう、エリスです。
この健気さがかわいいのよね。
それに、私たちよりもこういう仕事は得意みたいだし。

「エリスはいいのよ」

部長は、エリスにはみんなへの態度とは全然違う態度を取る。
だけど、エリスは引き下がらずにもう1度部長に言うと、少し考えてから部長の方が折れてしまったの。

「でも・・・、私のご主人様となる方を探すわけですから」
「・・・そうね。じゃあ、手伝ってくれる？」
「はい！」

エリスも真剣にこのことを考えているんだ。
よーしっ、私も頑張るか！

「これも、ダメ。これも多すぎ。これは・・・」

急に動きを止めた私に気づいたのか、声をかけてくる加奈。

「どうしたの？甘奈」

これは・・・。
私は1枚の応募葉書を加奈に見せた。同じように加奈も固まってい

る。

「「・・・設定が多すぎよ！！」」

「何？却下よ」

葉書1枚でしか応募できないのだけど、びっしりと埋まっていたの。

というよりも、虫眼鏡使わないとよく見えないんだけど・・・。

そんなこんなで3日が過ぎました。

「うわっ、これキモっ。見てよ」

「わはははっ。おかしいよー、これ。笑いすぎてお腹痛い」

「これなんて、どうだ？」

「「ないない」」

初日は、こんな感じで開発部のみんなで結構和気藹々と作業をしてたんだけど・・・。

1日経つとだんだんみんな口数が減っていった。

そして、3日目に入ると、職場の空気がよどんできたの。

それは、もうお昼になろうかという頃のことだった。

誰かが、まだ大量に残っているダンボール箱に入った葉書の山を見て呟いた。

「・・・つーか、まだあんなにあるのな」

来る日も来る日も、葉書ばかりを見ていたせいか・・・私たちはも

う葉書を見るのも嫌になっていたの。
そして、加奈は持っていた葉書を放り投げて、そのまま仰向けに倒れると、部長に言った。

「もう、嫌ぁー。部長ー、何か要望が書いてあるの全部捨てていいですかあー？」
「もう、最初から捨てていいって言ってるわよ？」

それを聞くと応募葉書をその辺に捨てる加奈。
部長ももう投げやりになってるし・・・。

「いいの？それっていいの？」

私の突っ込みは空しく開発部内に響いた。
もうみんな無言だし。

「はぁー。後、何枚あるのかなあ？」
「甘奈様？少し休憩されてはいかがですか？」

私が溜息ををついて少し休憩しているとエリスがやってきました。
相変わらず、他人にばかり気を使うのね。
そういうプログラムを組んでいるから仕方ないかな。

「ううん。大丈夫」
「そうですか。それならよかったです。では、私は仕事に戻りますね」

うれしそうに笑うエリスを見てると、ロボットだってことを忘れてしまう。
そんなエリスを見ながら、つかんだ1枚。

どうせこれも、色々と書いてあるんだろうなあ。
でも、この葉書は違ったの。
「ああっ！！」
「何？甘奈？」
「ちょ、ちょっとこれ見てください！」
私が、興奮しながら部長に差し出した1枚の葉書。
「・・・、これよ！！」
そう。
この葉書には、何も書いてなかったの。
容姿、性格といった細かな設定どころか、本当に何も・・・。
「よくやったわ！甘奈、今度食事でもおごってあげるから。エリスー、見て。ここで決まりよー」
喜ぶ部長を見て、加奈が当然の疑問を私に投げかけてくる。
「うわっ、あれでいいの？」
私が答えようとすると、先に鷹西さんが元気に答えた。
あれ？何か変ね・・・。
「いいんだろ、部長がああ言ってんだし」
・・・何かがおかしいような？
でも、私もそれには同意見です。エリスもうれしそうにしているか

らね。

鷹西さんは、対外部署との交渉が主な仕事だから、基本的には開発には関わってはいないけど、彼がいないと1年もの我侭はできなかった。

だから、人によっては『開発部の裏部長』なんて呼ぶ人もいるの。

「そういうものかなあ？」

私の意見に大きく頷く鷹西さん。

この部署では一番の大人だと思うし、体力もあるかな。

だって、3日間ずっと仕事をしてても疲れてない、・・・あれ？

私は、ふと思ったことを鷹西さんに聞いてみる。

「鷹西さん？そういえば、今までいた？」

「え？・・・い、いたさ。何を人聞きの悪いことを。ははっ、ははは・・・」

・・・嘘だ。みんな、そう思ったでしょうね。

みんな殺気だった視線を送っているけど、加奈は特に我慢できなかったようだった。

「いなかったよね？私たちがどれだけ頑張ってたと思ってんだあ！！」

あまり嘘の下手さに加奈はキレるとその勢いで机を持ち上げる。

机を持ち上げたことに驚いた鷹西さんは、弁解をするが加奈は全く聞く耳を持ってなかった。

「い、いや。だからさ。お、俺も色々とあってだな・・・って!?
うわっ!?ちょっ、お前。待て。だから話を・・・」
「問答無用っ!!」
「ぎゃああっ」

加奈の投げた机が当たって、倒れてる鷹西さん。
大丈夫かな?
でもまあ、いいか。この人、仕事よくさぼってどこか行ってるし。
騒動の一部始終を見ていたエリスは、少し困ったような顔をすると言った。

「・・・えーと、こういう時はこう言うんですよね?なーむー」

エリスの言葉に驚いて私は、エリスの顔を見る。
不思議そうに首を傾げるエリスを見た私は、誰に言うでもなく呟いた。

「・・・誰?余計なこと吹き込んだのは?」
「加奈様です」

・・・加奈・・・ね。私は、その答えに納得する。

ところで、サボリが帰ってきたと思ったら部長はどこに行ったんだか・・・。
そういえば、さっきまでエリスは部長と一緒にいたんだっけ。
私は、エリスに部長がどうしたのか聞いてみた。

「あれ?エリス。部長は?」
「部長ですか?社長のところです。私のお仕事先が決まったことを

報告に行きました。部長もとても喜んでくださっ・・・・て」

エリス、あなた寂しいのね。私は、エリスが言葉に詰まるのを聞いて、そう思った。
でも、私だって寂しいのよ。

「エリス、泣くことないないでしょ？いい。これだけは覚えておいて。あなたはロボット。だけど、限りなく人に近いの。それはね、あなたにも人に近い感情というものがあるからなのよ。今の感情はうれしい、わかるよね」
「ううっ・・・ぐすっ、・・・はい。私は、これまでみなさんにとてもかわいがっていただきました。だけど、心配なんです。私のご主人様がいい人なのかどうかが」

エリス・・・。
やっぱり、あなたは私たちの誇りね。
これだけ、感情があるんだから。

「エリス。いい？よくない人だったらぶん殴っちゃえ」
「ええっ！？それは、よくないと思うのですが」
「いいのよ。相手にわからせてやればいいのっ」
「ありがとうございます。心配してくださってるんですね。でも、私は大丈夫です。きっといい人だと思うんです。甘奈様が見つけたお方ですから」
「・・・あははっ。でも・・・いつでも戻っておいでね。私たちがついてる。あなたは一人じゃない。忘れないで」

偽りのない本心。
ロボットの感情なんてあるわけがない、プログラムに過ぎないと言う人もいると思う。

私は、違うと思う。
データからできたことは事実。
だけど、多くのことを私たちと学んできた。
経験を蓄積してきた。
経験を積んで成長するのは人も同じこと。
心を作ることはできないけれど、人も経験によって行動が変わることがある。

エリスは世間知らずのお嬢様みたいなもの。
ただ、違うのは人間じゃないということ。
限りなく近い、だけど限りなく遠い。

でも・・・もしも、神様が存在するならお願いをしたい。

あの娘の主となる人がどうかいい人でありますように。

それから数日後、エリスは主となる人の家へ出発していった。
エリスがいなくなって、うちの部署は静かになったわ。

・・・それだけが原因じゃないんですけどね。

昼休み、加奈がもったいぶって話したことを思わず私は聞き返した。

「部長が休暇願い！？」

そう、部長も今日から休暇を申請して休んでるの。

でも、すごく嫌な予感しかしないんだよね・・・。

「加奈、何で？・・・って、聞くまでもないか。あの人も無茶するよね」

私は、理由を加奈に聞き返すけど、すぐに部長の性格を思い出すと、途中で聞くのを止めてしまう。
持っていたコーヒーを1口飲んだ加奈もすぐに私の言葉に笑いながら同調した。

「あの部長のことだからね」

だけど、あの部長が外の世界でやっていけるのだろうか？
私たちは、部長が何か問題を起こさないといいけど、と心配になる。

「「はぁ～」」

1つ溜息をついた私は、話題をエリスに持っていく。

「でも、もうエリスはとっくに着いた頃だね」

やっぱりエリスのことが心配な私。
まあ、部長はどうでもいいとして、問題はエリスの方ね。
たぶん、朝には着いているとは思うんだけど、もし会社員とか学生だったらいない・・・よね？
既婚者だったりしたら、何かとマズイんじゃ・・・。
学生だといきなり親とばったりだよね。

加奈も不安を覚えていたようだったけど、急にはっとした顔になると、私に尋ねる。

「そうよね。頑張ってるかなあ？あ・・・でもさ、どんなとこに行ったの？」

「「・・・」」

私たちはお互いに顔を見合わせると、慌てて管理部へと走った。

この後、管理部部長に聞いたところ、大して相手のことを調べずに行ったんだとか。
男子高校生だということくらいしか私たちはわからなかった。
やっぱり、出さないほうがよかったんじゃないか。私はそう思わずにはいられない。

数日後、私宛に部長からメールが届いた。

「たまに会社にも来るから」と。

・・・こっちは帰ってこなくていい。

外伝１：ある研究者の苦悩（後書き）

読んで頂いた方々、ありがとうございます。

今回の話は、ハンドメイデン社開発部でのエリスの主の選考の話です。

所謂、番外編です。

今回の主人公、三津刃　甘奈は後にまた登場する予定です。

どこで登場させるかは決まっているので、出てきたら、ああここかと思っていただけたら幸いです。

覚えている人がいるかは別として・・・。

感想・ご指摘もお待ちしております。

第6話：メイドさんがやって来た夜　前編（前書き）

２００７．９／９　本文修正

第6話：メイドさんがやって来た夜　前編

「お帰りなさいませ、ご主人様っ」

家に入ると玄関にメイド服を着た女がいた。
銀髪の腰まであろうかという見るからにさらさらとしたロングヘア、
俺を見つめる蒼い双瞳。
肌は透き通るように白く、見たことはないが深窓の美少女というのがいたとしたら、こういう感じなのだろう。
そして、服はヒラヒラとしたフリルがたくさんあるエプロンドレス。
所謂メイド服なのだろう。
だが、こんな人を俺は今まで見たことがない。
ということは、考えられることは1つ。

「・・・すいません、間違えました」

俺は、慌てて家から飛び出した。
・・・近所にメイド雇ってる家があったなんてな。
だが、表の道に飛び出してから、ふと考える。

今、俺の目の前にあるのは恵麻の家だ。

そうすると・・・反対側にある、ここは俺の・・・家だよな？

もう1度、門の表札を見ると、『有栖』と確かにあった。

・・・確かに、ここは俺の家だ。
そっと、門を開けもう1度、恐る恐る扉を開けてみる。

近所の人がこの光景を見たら、俺は完璧に不審者だろうな。

「・・・」

もう1度開けてみたが、そこにあるのは同じ光景だった。

「おかえりなさいませ、ご主人様っ」

俺も驚きで言葉遣いが変わってしまう。

「あのー、どちら様？」

しかし、目の前の女が答える前に家の奥から母さんが出てきた。

「景ちゃーん。帰ったのね。詳しい話は座ってしましょ」

俺には、よく分からない。

何故、この家にメイドがいるのか？それに俺のことをご主人様とか言っていたな。

もしかして、俺が当選したのか？

この方が、私のご主人様なのですね。

私を見て驚いていますが、悪い人ではなさそうです。

ただ・・・1つだけ言えることがある。

絶対に俺の人生に関わらせてはいけない、と。

1つだけ分かっていることがあります。

今日から私はこの家で、ご主人様のお世話をするんです。
私は頑張らないといけませんね。

考えていることは全く違う2人。
だが、この日を最後に景の平凡な日常は終わりを告げるのである。

リビングにあるテーブルに座る俺と母さん。
そして、正面にはメイド。
絶対に不自然な光景だ。
それに何で母さんは、この知らない、しかもメイド服を着ている怪しい女をうちに入れたんだ？

俺の母さん、有栖　柚葉　（ありす　ゆずは）はまだ若い。
今年で３２になる。
俺を産んだとき、まだ１５だったらしい。
当然、俺を産んだせいで普通であれば今俺が楽しんでいるような青春を送れたはずだ。
それを俺を産んだせいで、台無しにしてしまったのではないか。
そう幼心に感じたこともあったし、からかいのネタにされたこともあった。
そして、そのせいで母さんと喧嘩をしたこともあった。
母さんが泣いたのを見たのはその時が最初で最後だ。

まだ現在では３１歳だが、見た目はまだ２０代と言っても十分通用するだろう。
１５５くらいだから恵麻と同じくらいの身長だ。
息子である俺から見ても、まだまだ若いし、その辺りにいるどの母

親よりも美人だと思っている。
こんなことを言えば、マザコンと言われるのがオチだろうがな。
だが、母さんを本当に母さんと思ったあの日から俺が一番尊敬している人でもある。

「・・・」

無言の時が流れていく。
しかし、俺の母さんがその時を壊す。

「この娘ね。あなたのメイドさんなんですって」
「は？」
「だ・か・ら。あなたのメイドなのっ！」
「母さん。冗談は止めてくれないか？」

母さんはたまに冗談を言うことがある。
子供の頃からよく騙され続けている俺からすれば、いくらなんでもこればかりは信じることはできない。

嘘か、本当かということで言い合う俺と母さん。
すると、俺たちの様子を見ていたメイドがすっと立ち上がり俺の前にやって来た。

「お母様のお話は本当の話です」
「何故、お前にそんなことが言える」

いきなり見ず知らずの女に本当だと言われても信じる気にはなれない。
俺が、不審そうな目を向けると小首をかしげる目の前のメイド。
そして何を思ったのか、ぽんっと手を叩く。

「あの・・・私の話聞いてもらえますか？」

メイドは母さんと言い争う俺に向かっておずおずと言った。

「わ、わかった」

俺は、メイドのあまりに真剣な目に圧倒され、思わず頷いていた。
すると、メイドは嬉しそうに微笑むと俺の手を握りながら言った。

「ありがとうございます、ご主人様。」
「ずっと気になっていたんだが、その、ご主人様というのはやめてくれないか？言われるたびに寒気がするんだが」
「それは大変です！ちょっと失礼します」

メイドはそう言うと、俺の額に右手を当てる。
しばらく、その姿勢のままでいたのだが、何を思ったのか・・・メイドは自分の額を俺の額にくっつけたのだ。

「うーん、熱はないみたいですねえ」

顔が非常に近くにあるのが、とても恥ずかしい。
あまりに恥ずかしいことをされ、心臓の鼓動が早まるのが分かるのだが、あくまで表面上は冷静に言った。

「・・・とりあえず、どいてくれないか？」
「あ、申し訳ありません」

ようやくメイドは俺の手を離すと、俺から少し離れた所に座った。
・・・照れてなんていないからな。俺は、自分にそう言い訳する。

だが、こんなことをされたのは小学校低学年の頃に母さん以来だな。
メイドは、もう1度座っていた所に座りなおすと、また話を続けた。
「では、お話の続きをしますね。ご主人様は、以前ハンドメイデン社のメイドロボプレゼントにご応募されましたよね」
「ああ」
「まあ、景ちゃん。・・・趣味かしら」
メイドの言葉に母さんは口に手を当て、わざとらしく驚いた顔をしたもちろん、俺のそんな趣味はない。さらに、独り言のようだが聞こえるように言うのはやめてほしい。
「俺にそんな趣味はない。それに確かに応募したが、俺は何も書いていなかったはずだ」
何も書かなければ万が一にも当選はないだろう。
そう思っての判断だった。それが間違いだと、あの時の俺は微塵も考えていなかった。
「はい、確かに何も書いていませんでした。だけど、それが当選の要因となったのです。そして、私が商品ということになります」
「・・・まじか？」
「はい、まじです」
何も書かなければ当たらないだろうというその判断は結果としては誤りだったということだ。
現にこうして、メイドがいるんだからな。
だが、さっきから何かが俺の中で引っかかっている。
・・・ん？ハンドメイデン社？

「もしかして、お前。・・・ロボットなのか？」

目の前のメイドはどう見ても人にしか見えない。
だが、このメイドはさっきハンドメイデン社の商品と言った。もう可能性はもう１つしかない。
俺が、訝しげに聞くと、メイドは否定することなく言った。

「はい。あ、まだ自己紹介していませんでしたね。はじめまして、私のご主人様。メイドのエリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型と申します。私のご主人様であります有栖　景様のお世話をするためにやって参りました。末永くよろしくお願いします」

そして、メイドは床に正座をして三つ指をついて頭を下げた。
・・・嫁に来たわけじゃないだろ。
だが、丁寧に頭を下げられたので俺も、床に正座をして頭を下げる。

「あ、いや。こちらこそよろしく」

礼儀には礼儀を持って返すのは、当然のことだ。
すると、母さんも俺の隣に正座すると、頭を下げた。

「あらまあ。エリスちゃん、よろしくね」

今、リビングにいる3人ともがお互いに頭を下げている状態だ。
もし、父さんが帰ってきたら、不思議に思うに違いない。

そこで俺は、最初に頭を上げると目の前のメイドに疑問をぶつけてみた。

「ところで、何も書いていなくて当選したんだ？俺はいまいち納得できないんだが」

すると、メイドは頭を上げると俺が納得できないことが腑に落ちないようで、もう1度正座し改まって話し始めた。

「それもそうですね。では、ご説明します。私を作った会社であるハンドメイデン社はロボット開発、特に人間型ロボットに力を入れています」

「それで、世界初にできたのが、・・・メイドロボなのか」

「はい、その通りです。で、何故、当選されたのかということですけど。簡単に言うと設定を変えるのが面倒だったからです」

さらりと笑顔で企業の裏側を暴露するメイド。

だが、世界初の人間型ロボットがメイドだなんて・・・。

この世界は腐っているのだろうか？

だが、ここで俺は思うことがあった。

「母さん。なんで、連絡してくれなかったんだ？」

「あら、メールしたわよ？届いてないの？」

「・・・」

どこかであったようなやり取りをする俺。

・・・メールに書いてあるな。

『メイドさんが来てるから、早く帰ってきなさい』と。

話を変えようと俺はメイドに話しかけてみた。

「エリスさん・・・だったよな。名前の後のＭＯＰ１ＨＫ型って何の意味があるんだ？」

「エリスで結構ですよ、ご主人様。これはですね、マザータイプ０号機、パーソナル１ハウスキーパー型ということです」

いや、よくわかんないだが。
まあ、大して気にならないからいいか。
そう俺は結論付けようとしたのだが・・・。

「よくわからないですよね。こほんっ。それでは、説明させていただきます。マザータイプというのはですね、一番基本となる機種のことです。これから世に出る後継機種のためにデータを収集したりするのです。パーソナルというのは、これは個人向けということですね。今はまだ出てはいないのですが、そのうち企業向けにも能力を特化させたタイプが出ると思います。ハウスキーパー型というのは、ご主人様のお世話に特化したタイプのことです。他には、Ｆ型、これはファイター型のことです。ご主人様の身の安全をお守りすること、つまり戦闘に特化したタイプです。今は、この２タイプが検討開発されていますが、今回の応募から採用されるものもあるかもしれません」

興味のないことを長々と説明をされてしまい、俺はうんざりした。
昔、ロボットを作りたいと思ったことはあったが、メイドロボを作りたいと思ったことはない。
それに、今の俺は科学技術には非常に疎いのだ。頭から煙が出そうだ・・・。

「エリスさん」
「はい、何でしょうか？ご主人様」
「当選を無効にすることはできないのか？」

俺は、メイドに世話なんてしてもらう必要はどこにもない。

介護の必要な老人の所かメイドが好きな奴のところにでも行ったほうがいいだろう。

「無理です」

しかし、メイドは、首を横に振った。
何言ってるんだ？と言いたげな表情で。

「当選した時点で、私は有栖　景様をご主人様とすると決めておりました」
「ということは、まだ契約は成立してないわけだ」
「はい、その通りです。ちょっと手を貸していただいてもよろしいですか？」

俺は、メイドの言葉を何も疑うこともなく手を差し出した。
手を差し出すくらいならと思っていた時点で、俺の警戒心は緩んでいたのかもしれないし、今の科学技術を舐めていた。
差し出した俺の手を握ったメイドの手が淡く光ったかと思うと、次の瞬間にはその光は消える。
そして、メイドは俺の手を離す。

「今、何をしたんだ？」
「契約です」
「・・・契約？」
「はい、そうですけど？これで有栖　景様が私のご主人様として登録されました」

無邪気な笑顔で、さらりと衝撃の事実を言うメイド。
だが、俺にはその笑顔が、悪魔の笑顔にしか見えない。

そのメイドの笑顔を見ていると1つの約束を思い出した。
そう、もし当選したら売るという約束のことだ。

「ところで、今から契約を解除して他人に譲渡または売ることは可能なのか？」

約束を思い出した俺は、さっさとこんなメイドロボとの契約を破棄して売ろうと考えていた。
しかし、現実はそう甘くはない。

「無理です。1度契約をした場合、契約を破棄することは不可能ですよ。まだ、私は試作品段階ですので。これはハンドメイデン社の試験でもありますので、契約解除は莫大な違約金を支払っていただくことになりますけど。それでも本気で私を売るおつもりですか？」
「・・・」

あまりに売ることのリスクが大きすぎないか？
・・・まあ外れたと言えばバレることはないだろう。

「わかった。そういうことなら仕方がない。この年で一生返せない借金を背負うつもりはないしな」
「私のことがお嫌いなのかと思いましたけど、一安心ですっ」

そう言って笑うメイドの顔はどう見てもロボットのそれではない。
家に置くことを了承している時点で毒されているのかもな。

「ところで、いつまでいることになるんだ？」

所謂、これは試験。
1ヶ月程度で帰るだろ？俺はそう思っていたのだが・・・。

「一生です」
「・・・すまん、もう1回言ってくれないか？」
あまり認めたくない発言が聞こえてきた。
もう1度聞いてみるが、返ってきた答えは同じものだった。
「ですから、一生ご主人様のお世話をさせていただきます」
「・・・」
「どうかされましたか？肩が震えていらっしゃいますけど」
聞き間違いじゃなかったのか！？
一瞬でも置いてあげようかと思った俺がバカだった。
こんなロボットとも人とも分からないものを家に置くほど、俺は酔狂ではない。
それに、平凡な俺の日常が崩れてしまう。
俺は心の底から叫んだ。
「帰れっ！！」
「ええっ！？そ、そんな・・・」
だが、あろうことかメイドは泣き出してしまったのだった。

第６話：メイドさんがやって来た夜　前編（後書き）

まずは、読んで頂いた皆様、ありがとうございます。
前回の更新で、ついに２０００アクセスを突破しました。
本当にありがとうございます。

今回からは、いよいよメイドさんの登場です。
ようやく話が進みますよ・・・。
メイドさんがやって来た夜は３部構成です。
最後まで、お付き合いいただけたらと思います。

最後になりますが、感想・ご指摘もお待ちしております。

第7話：メイドさんがやって来た夜　中編その1（前書き）

9／20　本文修正

第7話：メイドさんがやって来た夜　中編その1

「ううっ、ひどいです」
「あ、あのな・・・さっきから謝ってるだろ？」
俺がメイドを泣かせてしまってから10分は経っただろうか。
母さんから白い目で見られ、目の前ではメイドがわんわん泣いている。
何とか落ち着いてもらおうとするのだが、全く泣き止む気配が見られない。
「じー」
机の反対側では、母さんがお茶をすすりながら、俺の様子をじっと見ている。
もちろん、助けてくれる気などさらさらなさそうだ。
「・・・エリスさん？」
こうして話しかけるのは、何度目になるだろうか。
怒りに任せて、目の前の泣いている女を蹴りだせたら、どんなに楽だろう。
そう思うが、親も見ているし、それに俺としても後味の悪いことはしたくない。結局、残された選択肢は、説得するくらいしか残っていないのだ。
「ぐすっ、・・・ううっ」
だが、エリスは、泣いてばかりで、俺の言葉など聞いていないよう

だった。
泣いているだけでは、何も解決できないと言いたいが、原因は俺にあるので、そう言う事もできない。
何かいい方法はないだろうかと考えるが、何も浮かんでこない。イライラして頭を掻き毟っていると、ふと昔の歌のワンフレーズが浮かんできた。

・・・泣いてばかりいるメイドさん。

そんなくだらないフレーズが浮かぶほど俺は困惑しているのだろう。
今なら、犬の警官の気持ちが分かる・・・と思う。

俺は、もう1度泣いているメイドを観察する。そこでふと気付いた。
そもそもロボットに感情がいるのかと。
感情というものは時として厄介だと感じることがあるが、まさに今の状況がそれだな。

「・・・何だかどうでもよくなってきたな」

俺も思わず、素直な気持ちを口にして、天井を仰いだ。
それに、ずっと話していたことや、ストレスのせいか段々と喉の渇きを感じるようになってきた。

・・・何か飲み物を持ってくるか。
そして、1度気分を変えるために冷蔵庫からお茶を持ってきて2つのコップに入れる。
1つは俺の、もう1つはメイドのだ。
その1つを俺は飲み干すと、もう1つのコップを未だに床で泣いて

いるメイドに乱雑に差し出した。

「とりあえず、これを飲んで落ち着け。それに冷たいうちに飲んだほうがいいぞ」

「ううっ、私はロボットですので・・・お茶だけでなく、飲み物も食べ物もいらないんです」

親切心からの行動だったのだが裏目に出てしまう。

何故だろうか、困ったときにとる行動は裏目に出ることが多い。エリスの俺を気遣ったような笑顔が心に刺さるように痛かった。

「・・・すまん」

そう言って、お茶を引っ込める。

どうして、こんなに気が利かないのだろうか。

冷静に考えれば、目の前のメイドはロボットと言っていた。

全く情けないな、と俺は自己嫌悪に陥っていた。

だが、メイドは感謝の言葉を添えて俺の手を握ると優しく言った。

「でも・・・うれしいです。ご主人様の優しさが伝わってきました。ありがとうございます」

そういえば・・・初めて笑ったところを見たな。小さなことで、しかも相手にとっては迷惑だったにも関わらずだ。

何をやっていたんだ、俺は・・・。

ようやく俺は気がついた。勝手に自分から話をややこしくして、勝手に空回りしていたことに。

「わかった。もう今日はもう遅いし、家から追い出そうとした俺が間違っていた」
「・・・ということは、ここにいてもいいということですね！？」
「まあ・・・そうだな」

俺の手を握りながら、メイドは子供のようにはしゃいでいた。
それでも、俺は不思議と悪い気分はしなかった。
まあ、メイドの方は悪い気分だっただろうな。
問題は山積みな気がするが、後で話し合いで解決すれば問題はないはずだ。

・・・後でな。

俺たちの決着が着いたのを見て、母さんが言った。

「話もついたみたいだし、夜ご飯にしましょ」

こうして、俺たちは少しだけ遅い夕食を取るのだった。

夕食後、俺はメイドともう1度話し合うことにした。
もちろん追い出すということでなく、今後のことでだ。

「ところで、世話と一言で言っても実際何をするんだ？」
「朝、ご主人様を起こすことから、そ、そのですね。・・・夜のお世話まで」
「いや、しなくていい」

俺は、突っ込まずにはいられなかった。
大体、データだとしたら作成者の悪意を感じてならない。

「ところでだ。俺が見る限りでは、どうもロボットには見えないんだが。本当にロボットなのか？」
「もちろんです、ご主人様。そうですねー、証拠をお見せしましょう」

そう言うと、おもむろに服を脱ごうとするメイド。
俺はというと、大慌てで止めにかかる。
今、俺の顔は真っ赤に違いないだろう。

「な、な、何をしようとしてるんだ！？」

慌てる俺を余所に平然とした顔でメイドは答える。

「背中を見ていただければ、わかると思いましたので」
「いや、もう脱ごうとしなくていいからな」
「そうですか？ご主人様がそうおっしゃるんでしたら、止めておきますね」

ふう、とても疲れるな。
このメイドはロボットなのだが、どう見ても人にしか見えないせいか、さっきのようにいきなり服を脱ごうとするような行動をされるとやはり焦る。

「ご主人様。ちょっとお聞きしたいのですが・・・」
「ところで気になっているんだが、その、『ご主人様』っていうの止めてくれないか？」

「どうしてですか？私のご主人様ですから、特に問題ないと思うのですが」
「いや、何て言うのか・・・そんな呼ばれ方されている奴なんて普通はいない」
俺は、ずっと気になっていることがある。その１つが俺をご主人様と呼ぶことだ。
少し前にも言ったが、このメイドの突飛な行動で有耶無耶になってしまっている。
俺は、生まれてこの日まで『ご主人様』などと呼ばれたこともないし、呼ばれたくもない。
俺は、普通の人間だからな。

「でも・・・」

メイドの方が何か言おうとするが、それを遮って俺は言う。

「普通に景と呼んでくれればいい。その代わり、俺もエリスと呼ばせてもらうけどな」
「もちろん、私のことはそうお呼びください。えーと、景様でよろしいのですね？」
「いや、様はいらないんだが・・・」
「やはり敬称をお付けしないと。これはメイドとしてのアイデンティティーの問題ですので」
そう言って、エリスは様付けだけは頑なに譲ってくれなかった。
まあ、ご主人様と呼ばれるよりはよっぽどましだな。
とりあえず、呼び方についての話を終えると、俺は先程エリスが言いかけたことを聞いてみた。

「エリス？さっき何か言おうとしていたが、何だ？」
「いえ、景様のことを少しでも知りたいと思いまして。景様のことを教えていただきたいのです。通っている学校とか、好きな食べ物とかです」
「俺のことか、別に構わないぞ。エリスのことも聞いても構わないか？」
「はい、もちろんです」

それから、俺たちはお互いのことを話し合った。
俺は、俺の通う高校のこと、友人のこと、今日の出来事なんかを話した。
俺が好きな食べ物の話をした時には、熱心に聞いてくれた。
だが、特に好きな新商品を話しているとエリスの表情がだんだん曇っていくのがわかった。
最後には、もう結構ですと少々青ざめた顔で言われてしまった。
そして、こう言われた。
個性的なのですね、と。

俺の話の中でエリスが最も反応したのは俺たちの担任の話をした時だった。
その時のエリスの表情は驚きで満ち溢れていた。
俺は意外だったので、どうした？と聞いたが、特に何でもないと言われたのでそれ以上は聞かなかった。
人、いやロボットだが、それぞれ事情というものがあるからな。
何らかの知り合いだということだけは推測できるしな。

一方のエリスの話だが、エリスは既に1年前には完成しており、これまでの1年間で運用試験を行ってきたということ、ハンドメイデン社の内情のこと、お世話になったという開発部の人たちのことな

んかを話してくれた。
特に俺が興味を持ったのは、５年も前からこの計画が存在していたということだ。
同時にこうも思った。その時、俺の野望は潰えていたんだ、と。

「ところで、エリス」
「はい、景様。何でしょうか？」

俺はエリスの話を聞いて疑問に思ったことがあった。
聞くところによるとエリスを設計、開発したのは開発部だと言う。
そして、１年間運用試験を行っていたというが、それはどうも開発部の我侭だったようである。
同時にエリスをメイドではなく娘、妹のようにかわいがってくれたとも話していた。
何故、その人たちのところへ帰らないのだろうかと。

また、世界に１つしかないエリスをどうして俺のところへ一生置いておこうと思ったのかとも。

しかし、エリスの答えは俺にとっては意外なものだった。

「いずれ、私の後継機たちが彼女たちのサポートをすることになると思います。私よりもずっと高機能な後継機たちがです。私はそのためのデータ収集機なのです。いつまでも、私が開発部の皆さんに甘えていてはいけないのです。それに景様を選んだのは偶然なんかではありません。会社には、景様のことはあまり調べてないと言ってありますけど、それは嘘です。しっかりと調査をした上で、この方ならきっと大丈夫だと思ってこちらへ来たのです。」
「・・・」
「いずれ、会社にとって私はいらない存在になります。開発部の皆

さんは、『いつでも戻っておいで』と言って下さっています。それでも・・・居場所がなくなるんじゃないかって、ずっと怖かったんです。私がここに来たのは私の意志です。景様が必要とされなくなるまで、ここに置いてください」

気がつくと、俺はエリスの頭を撫でていた。
俺も自分がこんな行動をしていることに驚いている。
エリスも驚いて目を見開き、俺を見つめている。

「エリスを追い出そうとした俺が言っても説得力がないかもしれない。だがな、俺はエリスをもう追い出したりしない。ここには、母さんも父さんも、そして、俺だっている。そのうち俺の友人とだって友達になれる。俺を除けばみんないい奴ばかりだ。エリスは1人じゃない。決して1人なんかにしない、俺が約束する」

ただ、エリスの話に同情しただけなのかもしれない。
この場の空気に流されただけかもしれない。
もしかすると、母さんが俺に言った言葉をそのまま言っただけかもしれない。
だが、俺は約束をした。

俺がどのような道を進もうとも、決して1人にはしないと。
エリスが俺を必要としなくなる日まで。

「あ・・・ありがとうございます、ぐすっ。景様が思った通りの方でよかったです」

そう言って、エリスは俺に抱きついてきた。
何と言うのだろうか。抱きついてきたエリスは意外と柔らかいし、何かいい匂いがするな。

それに意外と胸もあるような・・・。
いや、・・・エリスはロボットなんだよな。
でも、本当に人間としか思えない。

「景。成長したのね」

母さんが、うれしそうに言う。
昔、母さんも同じようなことを言ったし、その時も俺の頭を撫でてくれた。

でも、俺は成長はしてないだろうな。1度はエリスを追い出そうとしたのだから。

「母さん。俺は別にどこも成長してないと思うぞ」

それでも、母さんは俺とエリスを見て笑みを絶やさなかった。
そして、俺の頭を撫でてくれた。その表情は、あの時と同じ笑顔だった。

母さんは、しばらく俺の頭を撫でた後、食器を洗いに台所へ戻っていった。

その間もずっとエリスが俺に抱きついていた。
そんな時、予想外の問題は発生した。

第7話：メイドさんがやって来た夜　中編その1（後書き）

3部構成だったはずの話が・・・・。
今回の話は、エリスとの和解です。

長くなったのと、区切りが悪い気がしたので途中で気ってしまいました。
なかなか心情の変化を書くというのは難しい、そう実感させられました。

まだまだ先は長いですが、書くモチベーションがあるのも、読んでいただいている方々のおかげです。
本当にありがとうございます。
これからも読んで頂ければ幸いです。

いつもの閉めになりますが、感想・ご指摘等お待ちしております。

第8話：メイドさんがやって来た夜　中編その2（前書き）

１０／１　本文修正

第8話：メイドさんがやって来た夜　中編その2

俺たちは、ようやく第1歩を踏み出した。

いや、それでも前途多難だ。

だけど、これからゆっくり1歩1歩進んでいけばいい。

そう思った矢先のことだった。

「ただいま。今帰ったぞ、け・・・い？」

父さんが俺とエリスを見ると、その場でフリーズする。

・・・今の状況を整理しよう。

俺は、今エリスに抱きつかれていて、離れようにも何もできない状態だ。

そして、エリスは泣いている。しかも、メイド服だ。

結論を言うとあまり良く思われない状況になる。

俺が女を泣かせているようにしか見えないからだ。

「景、お前もなのか？」

父さんは、呆然としている。

お前も？少しの間、父さんが何を言いたいのか、俺には分からなか

った。
だが、俺が口を開こうとする前に、母さんが飛んできた。
「あなた、お帰りなさい」
「ただいま、柚葉。先に飯を食べたいからよろしく頼む」
父さんはそう言うと、着替えるために部屋に行こうとするが、すぐに我に返ったようで舞い戻ってきた。
「そうじゃない・・・柚葉、これは一体どういうことなんだ？もしかして・・・」
「心配しないで、景ちゃんはあなたと違って真面目だから」
父さんは母さんの言葉に深く傷ついたようだった。
床に『の』の字を書きながらいじけている。
「そ、そうだよな。俺とは違うよな」
そう言って納得しようとするが、目には光るものがあった。
相変わらず父さんは母さんの尻に敷かれている。
俺の父さんである、有栖　雅巳　（ありす　まさみ）は、母さんとは２０の時に結婚した。
俺が産まれたのは父さんが１９の時だったから、できちゃったどころではない。
既に結婚式当時、俺は産まれていたんだからな。
そして、父さんは大学を中退して、公務員となった。
中退した翌年には、仕事に就いていたのだから、相当な努力をしたはずだ。

だが、父さんはこう言う。
合格しなかったら、結婚させてもらえなかった、と。
と言うよりも、殺されただろうと。
俺は幼い頃から、よくこの話を父さんから聞かされていた。
あんな優しい爺さんや婆さんがそんなことする訳ない、そう思っていた。

だが、今でも父さんは実家に帰れないらしい。
父方の爺さん、婆さん、つまり父さんの両親は今でも俺と母さんが帰るたびに謝ってくる。
母さんは、もういいって言っているのだが、気にしているらしいのだ。

しばらくすると父さん立ち直ったようで、俺にエリスのことを聞いてくる。

「で、景。そのお嬢さんはどなたなんだ？外国の方のようだが」

良くも悪くも父さんは切り替えが早い。既にさっきの事は忘れたかのように、今はエリスに興味を示している。
母さんは、父さんの後ろで笑っている。まあ、エリスがロボットと気付かない父さんがおかしいのだろう。
確かに、おかしいのは分かるが事情の分かっていない人に対してはひどいと思うぞ。

そこで父さんにも説明しようと俺は父さんの真正面に立つ。

「父さん、落ち着いて聞いてほしい」

俺が真剣な神妙な面持ちで話を始めると、父さんもただ事ではないと察したのか、真剣な表情になった。
だが、その瞳の奥に不安が見え隠れしている。少し目が泳いでいるのが分かった。

「この人はエリスさんと言うんだ。今日からうちに住むことになったんだ」

とりあえず父さんに簡潔に紹介しておく。
が、これでは当然誤解を招くことになるのは目に見えている。
付け加えてエリスはロボットだと言おうとすると父さんが吼えた。

「景。お前、女の子にメイド服を着せる趣味があったのか！？しかも、外国の娘さん！一体いつ知り合った・・・うおっ！？いでっ！」

興奮する父さんを母さんがハリセンで叩こうとするが、父さんはかわした。
と、思ったのだが、連撃の下からのアッパーが顎に直撃した。

「ちゃんと、最後まで話を聞くっ！！」
「はい・・・」

母さんが一喝すると父さんは小さくなる。
家庭内での権力者が誰なのかがよく分かるだろう。

「父さん、もういいか？」
「・・・続きを頼む」
「父さんは、ハンドメイデン社のメイドロボプレゼントのことは知ってるよな？」
「ああ、知ってるさ。応募したからな、俺も・・・」

「・・・ふーん。あなた？後できちんと話し合いましょうね」
父さんは言ってから、しまったという顔をするが既に遅い。
母さんの冷たい目が、父さんに突き刺さっている。
俺じゃなく、既婚者に当選していたら、こういう風景が見られたのだろうか。

「景様？お父様は、この家ではお母様よりも立場が弱いのですね。これが普通の家庭なのですか？」
「今の時代、どこの家もこういうもんだと思うぞ」
「勉強になりますね。これもデータとして開発に役に立ちそうです。でも、私が結婚されている方に当選していたら、こんな光景が見られたのでしょうか？」

・・・考えを読まれたのか？
俺はエリスの言葉に驚きつつも冷めた口調で答えた。

「家庭によるんじゃないのか」

まあ、確かにメイドがいきなり家に来たら、下手をすれば家庭不和の原因になりかねないな。
どう見ても、人にしか見えないエリス。事情を知らない人にロボットだと言って信じてもらうのは難しいかもしれない。

「父さん、続きを話すぞ」
「・・・ああ」

既に疲れているようだが、・・・ちゃんと聞いてくれるのか？

「エリスはハンドメイデン社から来たメイドロボなんだ。俺が当選したんだ」
「・・・ということは、我が家にメイドさんが住むということなんだな。もしかすると・・・」
「ええ、そうよ、景のメイドさんだけど」

母さんは俺の名前を強調するが、妄想に耽る父さんの耳には入っていないようだ。
俺は、状況に戸惑うエリスに父さんに挨拶すれば？とこっそりと言う。
エリスは頷くと父さんの前へと行った。

「はじめまして、お父様。景様のメイド、エリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型と申します。実際に世間の暮らしを体験し、データ収集のためにやって参りました。データ収集のお仕事が終わりましたら、引き続き景様のお世話をすることになっております」

エリスが正座をして頭を下げると、父さんもつられるように頭を下げる。

「こちらこそ、何のお構いもできず申し訳ない」

この家族は同じことしかしていないような気がするが、家族なのだから仕方ないだろう。
変なとこばかり似てしまうよな。
だが、父さんは何か引っ掛かったようで、少しの間何か思案していたようだったが、急にはっとした顔をするとエリスに尋ねた。

「・・・ところで、景のメイドというのは？」
「はい。私は、ハンドメイデン社から景様にプレゼントされたメイ

ドロボです」
「何！？」

父さんは、信じられないといった様子だった。
『俺のメイド』という言葉だけではなくエリスがロボットだということもあるだろう。
母さんが後ろで必死に笑うまいと耐えているが、それは無視だ。
父さんも母さんのことは目に入らなかったようで、急に真剣な顔になると静かに言った。

「景、先に言っておくことがある。エリスちゃんがかわいいからって手を出すなよ？」

そう言うと、顔が思い切りにやける。
それを見た俺は少々頭にきたので、父さんのトラウマに触れるようなことを冷たく言い放った。

「・・・父さんじゃないからな。それにエリスはロボットだ。父さん、頭大丈夫か？」
「・・・景よ。お前もか」

父さんは悲しそうな顔をする。だが、今日の父さんは少し違っていた。

「景、俺に譲ってくれないか？」

珍しく凹むこともなく、父さんは俺に迫ってきた。
言われすぎて、耐性がついてきたのかもしれない。
だが、次の瞬間には撃退されることになる。

「私は景様のものですし・・・申し訳ありません」
「あなた。また過ちを繰り返したいのかしら？」
「いいえっ！！景、しっかりとお世話されるんだぞ」

母さんの冷たい言葉と、エリスのはっきりとした拒絶に父さんはあっさりと引き下がった。
しっかりお世話されろって、一体何なんだ？・・・しかも、エリスは俺のものにいつの間にかなっているな。

俺が、両親とエリスのやりとりに呆れていると、エリスが楽しそうに言った。

「これが、日本の家庭なのですねー」

何を勘違いしたのか、エリスはすっかり感心していた。
間違った知識を学んでほしくはない俺は、エリスに忠告する。

「エリス、これは一例に過ぎないからな」

だが、俺の声はすっかり感心しきっているエリスには届かない。
ある意味では間違ってはいないが、こんなことばかりを学んでほしくはない。

「・・・これでいいのか？」

俺は、エリスの後継機のことが少しだけ心配になった。

第8話：メイドさんがやって来た夜　中編その2（後書き）

2日続けての更新です。
と言っても、2つに分けたうちの後編ですけど・・・。

今回のは、少し短めです。
楽しんでいただけたら、幸いです。

第9話：メイドさんがやって来た夜　後編（前書き）

１０／６　本文を全体的に修正

第9話：メイドさんがやって来た夜　後編

父さんとの一騒ぎが収まって、ほっとしたのも束の間。

ふと、時計を見るともう１０時になっていた。

エリスに聞きたいことはまだあったんだが、明日にでも聞けばいい。

そう思って、俺は風呂に入ることにした。

「母さん。先に風呂入るから」

「もう遅いし、まだ誰も入っていないから早く出てくるのよ。私は父さんと話があるから」

「・・・はははっ、景。早く出て来るんだぞ」

父さん、生きて帰ってきてくれ。

母さんの説教は長いから、耳が痛くなる。

俺も何度かされたことがあるが、その時は1時間ほど延々と怒られ続けた。

試験で、寝ていたために1科目だけ極端に悪かったのがバレたのだ。

母さんに聞いていないのがバレるとさらに説教をされるから、そのせいで人の話を聞くふりだけは上手になった。

「そこに座って」

「・・・はい」

・・・説教が始まったな。

俺はそそくさとリビングを後にした。

だが、俺が脱衣所に入ろうとした時、ある事実に気づいたのだ。

「エリス。何故、俺について来る？」

エリスまでもが入ってこようとするのだ。

「何故？と言われましても、お背中をお流ししようと思いまして」

「・・・大丈夫だ。それくらい１人でできる」

エリスは不満そうだが、俺にとってみればエリスと風呂に入りたいとは思わない。

ロボットと言われても、見た目は人間の美少女だ。

本音としては嬉しいが、人は理性ある生き物だ。感情に流されてはいけない。・・・くっ。

「エリス？」

そう呼ぶと、エリスの目がぱっと輝いた。

「もしかして、考え直していただけたのですか？」

・・・一瞬迷ってしまったが、その迷いを断ち切るためにエリスの目を見据えて言う。

「・・・いや、違う。エリス、お前ロボットだって言ったよな。風呂とか入って大丈夫なのか？」

だが、俺の心配は杞憂だった。エリスは、にこりと微笑むと自分の手を触りながら言った。

「私が水に濡れたら故障すると思って断られたのですね。景様はお優しい方です。でも心配御無用です。私は水が体の中に入ろうとも壊れませんから」
「そうなのか。最近のロボットはハイテクなんだな」
「はい。では、私も・・・」

それとこれとは話が別だ。きっぱりと断っておく。

「いや、背中くらい自分で流せるからな」
「・・・仕事が。あうー」

エリスを脱衣所から追い出すと、俺はしっかりと鍵を閉めておいた。さすがにエリスも諦めたようで、廊下を歩いている足音が遠くなるのが分かった。
俺は、少しだけ残念な気もした。

・・・ほんの少しだけだからな。

俺が、風呂から上がると、階段の前でエリスが誰かに親しげに電話をしていた。

ん？携帯電話なのか？

俺は、てっきりエリスに通信手段が内蔵されていると想像していたのだが・・・。
エリスを見ながら、そんなことを考えているとエリスの方が俺に気

づくと、電話を終え、俺の方へとやって来た。

「あっ、景様。お風呂から出られたのですね。・・・私をじっと見られていますけど・・・ど、どうかされましたか？」

「いや、携帯なんだなと・・・」

「はい、そうです。今、景様と契約を交わしたと会社に報告の連絡をしていました」

・・・俺は、もう夜の１０時半も過ぎたこんな時間に電話をかけるのは迷惑ではないかと思うのだが。

「ところで、相手方は何か言っていたか？」

「はい。景様によろしくと。後、手を出したらコンクリに詰めて海に沈めると。私は別に構いませんよ？」

「・・・どちらの意味で構わないんだ？」

エリスの意味深な発言は無視しておくことにする。

前者だったら俺はそんなことはしないし、コンクリで俺が沈められてもいいというのであればエリスは腹黒確定だ。

だが一体、そんなことを言うのは誰なんだ？

少なくとも、もし出会ったら1発ぶん殴ったほうがいいのではないか。

俺は、そんなことを考えていた。

だが、そんな俺の考えもすっ飛ぶ、物騒な話がリビングから聞こえてきた。

「大体、あなたはそういうところがなってないの。いいっ！！エリスちゃんに妙な真似したらコンクリに詰めて海に沈めるから」

・・・まだ、説教が続いていたのか。それにエリスの電話の相手と同じことを言っている。
だが、母さんならやりかねない。俺は本気でそう思った。
まだこの家に慣れていないエリスがいること、母さんすっかり忘れているな。

「・・・」
「・・・」

母さんが、いきなり物騒なことを言うものだから俺たち2人は黙ってしまった。
俺は、もう慣れているから気にはならないが、エリスは唖然としている。まあ、無理もない。きっと、猫を被っていい面を見せていたのだろうから。
それに会社の人と俺の母さんが同じことを言っていれば驚くのも無理はない。
俺も、母さんと考えが似たような人がいたことに驚きだ。

すると何か話題を変えたかったのだろう。エリスが2階を指差しておずおずと言った。

「・・・折角ですから、景様のお部屋を拝見してもよろしいでしょうか？」

俺は母さんの説教に慣れているが、エリスはこの場には居辛いのだろうな。
エリスは何だか居た堪れないといった感じの表情をしていた。
誰だって家にやって来た初日から、こんな状態では疲れるだろう。

「ああ。別に大して見るものはないが、それでもいいなら構わないぞ」

俺とエリスは、未だに説教の終わらないリビングから少しでも離れたいという思いで2階へと上がった。

既に分かっていることだと思うが、俺の部屋は2階にある。
階段を上って、一番手前にある部屋が俺の部屋だ。奥には、物置と化している部屋が1つある。
もう1部屋も物置だが、そちらは割りと空きもある。俺が主にいらない物を置いている所になる。

3人家族としては広い家だと思うかもしれない。確かにそこそこ広い家だとは思う。
元々は、父方の祖父母も一緒に住む予定だったそうだ。そのため、部屋が余っている。
そのため母さんの口癖は、「これなら景のお嫁さんが来て、孫が生まれても安心ね」だ。

いつの話だ、と思う。

エリスは俺の部屋に入ると、しばらくドアの前に立ち止まっていたが、思い出したように振り向いた。

「割と普通の部屋ですね」
「・・・どんな部屋だと思ったんだ？」

すると、きょとんとした顔をしたエリスは顎に手を当てながら部屋の奥にあるベッドへと向かった。

「そうですね。服が床にそのままになっていて、ベッドの下には・・・」

そして、おもむろにベッドの下を漁り始めた。

「・・・ない・・・ですねえ。おかしいです、年頃の男の子の部屋には必ずあるはずなのですが。どこに隠しているのですか？」

「そもそもないぞ」

そうは言うものの、実際はひやひやしている。
俺は、そんな単純なところに隠したりはしない。
別の本のカバーを被せて本棚に置いてある。

「じゃあ本棚ですね」

「・・・」

あまりに勘の鋭いエリスに俺は思わず息を呑む。
下手に焦って動けばバレてしまう。
俺は1冊しか持っていないが、サイン入りのもので幸樹から貰ったものだ。

本棚は3段ある。
一番下の右から7番目にある本が・・・。

「・・・」

「どうしました？エッチな本がやっぱりここにあるのですね」

俺が黙ったのをエリスは肯定と受け取った。本を1冊ずつ手にとって調べ始めた。
1冊1冊本のカバーまで剥がして確認する徹底さだ。
だが、俺はそんなことで動揺したのではない。

・・・写真集そのものがないのだ。
エリスじゃないな、こいつは今日来たばかりだ。まず、除外される。
そうだとしたら両親、しかも母さんの方が確率としては高いはず。
もし、そうだとすれば俺の命はまずない。
だが、母さんだとしたら、呼び出しがあるはずだ。しかも、すぐに。

・・・それなら、父さんなのか？

俺は、一応確認を取るために下へ降りようとする。
もう、母さんの説教も終わった頃だろうしな。

「エリス、俺は下へ行って来る」
「では私も行きます」

エリスも俺の後ろについて来る。
その声に振り向くと、既に3段全ての本を調べ終えていたようでエリスの後ろには本とカバーの山があった。
これが、メイドの実力なのか・・・。

だが1つだけ問題があった。

・・・こんな夜に、ほとんど掃除もしていない本を取り出したり、カバーを外したりすればどうなるかわかるはずだ。

・・・部屋の空気が埃っぽくなっていた。

「何か空気が悪いですね」

「・・・・」

俺は、無言で部屋の窓を開けた。

そして、戻り際、この原因に制裁を加えておいた。

エリスは涙目で抗議の視線を送ってきたが、もちろん無視しておく。

その後、本を片付けたので無駄な労力を使ってしまった。

「そういえば、エリスが寝る部屋がまだ決まってなかったな。もう、終わってるだろうし、母さんに聞いてみるか」

本を片付けた俺たちは、母さんにエリスが寝る部屋はないかと聞きに来たのだ。

「私は、景様のお部屋で一向に構いませんけど？」

「・・・俺は一向に構うけどな」

だが、俺はあることに気づいた。リビングはもう静かだな。もう寝てしまったのだろうか。
そう思いながらも、扉を開けた。

「母さん、エリスの部屋のこと・・・・なんだが」

俺は、驚愕と恐怖で言葉が途中で途切れてしまった。
そこには、俺の写真集を持った母さんと、顔面蒼白の父さんがいた。
蒼白なのは、俺も同じだ。表には出していないが。

「あら？景ちゃん。ちょっと待ってくれる。すぐ終わるから」

にこやかに笑顔を向けられ、俺はぎこちなく首を縦に振り返事をした。

「はい」

・・・正直に言おう。母さんの顔は般若のようだ。
俺は、比較的正直だと言われるが、空気くらいは読めると自負している。

そう。今は何も起こらないことを願うしかない。
俺が黙っていれば、大丈夫だ。

だが、父さんはいとも簡単に白状した。

「いや、これは景の部屋から持ってきたんだ」

・・・父さん、俺を売る気なのか！？
俺は、親子の絆など大したことはないと思い知った。

父さんは、俺をちらりと一瞥し、視線でこう言っていた。

自業自得だと。

「やっぱり景様はエッチな本をお持ちだったのですね」

エリス！？

火に油を注ぐような真似をしないでくれ。

2人の話を聞いた母さんが、俺の目を見て聞いた。

「景ちゃん？これは、景ちゃんの本なの？」

だが、その視線は異様なまでに冷たい。

父さんは、にやにやしている。エリスは、目をきらきらさせて、俺を見ている。

・・・この家は敵しかいないのか？視線の嵐に晒されながら、そう思う。

俺が、黙っていると母さんは一段と声のトーンを落として言った。

「景ちゃん？」

この際、父さんに犠牲になってもらうか。

俺は特に悩む事なく、父さんを売ることにした。そして、母さんの目を見ながら言った。

「母さんは、俺がそんな物を買うと思っているのか？」

母さんは、しばらく俺の目をじっと視線を逸らすことなく、見ていたが表情を和らげ、俺を抱きしめこう言った。

「・・・景ちゃんがそんなことするはずないわ。ごめんね、信じてあげなくて。一瞬でも疑った母さんが悪かったわ」

「い、いや。分かってくれるならいいんだ」

「なっ！？景。お前、父さんを売るつもりか！？って、母さん。これは本当に俺のじゃない！信じてくれ！」

悪いが、俺のために死んでくれ。

母さんに抱きしめられたまま心の中で俺は、合掌をした。

もちろん、哀れみなどない。

そして母さんは、俺を離すと、父さんに写真集を振り下ろした。

・・・本の角が当たるように。

「うるさいっ、この変態！！」

「がっ！？」

父さんには、きっと星が見えていたに違いない。

殴った本人である母さんは、エロ本を床に叩きつけると、父さんを罵倒する。

「エッチな本は明日、燃えるゴミの日だから出しておくから。何よ、やっぱりロリコンじゃない・・・」

父さんよりも俺の方が母さんに信頼されていて助かったな。

だが、その写真集にそんなに幼いのは載っていない筈なんだが・・・。

「景様の物ではないのですね。・・・残念です」
妙に俺を写真集所持者にしたがるエリスに一言文句を言いたかったが、俺はぐっと堪えるしかなかった。
あまり、この話題を蒸し返したくないからだ。
そこで話題を切り替える。

「ところで、母さん。エリスの部屋はどうするんだ？」
俺はこれを聞きに来たはずだったが、既に１１時半になっていた。
母さんは、少し考えると悪意に満ちた笑顔を浮かべた。

「そうねえ・・・。じゃあ、景の部屋・・・」
「却下だ」
「冗談よ。１階の奥の空き部屋があるでしょ、あれ使ってもらいましょ」
「・・・あの部屋、物置じゃないのか？」
母さんが、エリスに勧めた部屋は、今は物置となっている。
掃除をしないとまず住むことは不可能だろうな。

「そうね。だけど、掃除すれば使えるわ。明日は土曜日だし、お父さんもいるから、みんなで掃除すれば明日の夕方には立派な部屋になると思うわ」
「俺は明日学校だ」と言うと、「早く帰ってくるのよ」と、あっさりと流された。
加えて、「エリスちゃんのご主人様なんだから、あなたが一番手伝

うべきなの」と言われる始末。
確かに主になったことはなったが、不可抗力だ。
すると、エリスは遠慮がちに言った。
「私は1人でも大丈夫です」
だが、母さんは引き下がらない。
「家族は、助け合うものよ。それにあなたは、もう有栖家の一員よ。私たちが手伝うのは当然でしょ」
「ありがとうございます。それでは、お言葉に甘えさせていただきます」
エリスの表情はとても嬉しそうに思えた。
俺も、母さんに言うことには異論はない。もちろん、エリスの部屋の片付けくらいは手伝う。
それにエリスが困っているなら、助ける。それが家族であり、当然の行為だ。
「エリスちゃんは素直で可愛いわー」
母さんは、昔から娘が1人ほしかったと言っており恵麻を昔からよく可愛がっていた。
それでも、遠慮していると本人は言っていたが、俺にはそうは見えない。
恵麻を見ると必ず抱きしめるからな。
エリスのことも娘のように思っているのだろう。

母さんは、しばらくエリスの頭を撫でていたが、ふと思い出したようにエリスに言った。

「そうそう、エリスちゃん。今日は、私の部屋に来るといいわ」

これで、問題は片付いたな。俺はほっとするとエリスに言った。

「家族っていいものだろ？今日から、エリスも俺たちの家族だ。・・・ようこそ、有栖家へ」

俺の言葉にエリスは、初めは驚き、そして何だか照れくさそうにしていた。

だが、俺に今まで一番の笑顔を見せると迷うことなく答えた。

「はい、景様」

ようやく今日が終わったか。・・・よく考えれば昨日の出来事なのだが。

俺は、ベッドに横になって1日を振り返りながら天井を見上げていた。

いつものように恵麻と学校へ行き、今年は幸樹や由真、晃たちと同じクラスになった。

担任が美人であったり、外食に行ったら恵麻たちの友人が働いていたりもした。

ボウリングをやって最下位になっておごらされ、カラオケで馬鹿みたいに騒いで・・・。

いつもと同じような1日だった。だが、楽しいと思える時間だった。

そして、今日エリスがやって来た。

俺は、最初エリスを追い出そうとしたんだったな。

今思えば、俺は何をしていたのかと思う。

紆余曲折はあったが、結果として俺にとって1人、大切な人が増えた。俺が言うのも、変な気がするが、きっと仲良くやっていけると思う。

家族や友人たち、そして、俺とも・・・。

明日から、また日常が始まるのだろう。

エリスが加わった、日常が。

そんなことを考えていると、俺は、いつの間にか眠っていた。

第9話：メイドさんがやって来た夜　後編（後書き）

今日は、前の部分で誤変換等がないかのチェックをしていたら、意外とミスがいっぱいありました。
特に、話の内容は変わっていませんので、ご安心を。

また、読んでいて間違いに気がつかれたら、是非ご一報をお願いします。

第１０話：メイドさん、学校へ来る　前編（前書き）

１０／１２　本文修正

第１０話：メイドさん、学校へ来る　前編

日の光がカーテン越しに俺の部屋へ差し込んでくる。

日の光は、起きたばかりの俺には眩しすぎる。

もう少し寝ていてもいいだろう。まだ、６時２０分か。後、１０分くらいは大丈夫だ。

今日は普通の１日が始まる。

そう、始まる・・・・はずだった。

・・・何だ、この人に抱きしめられたようなこの感覚は。

そして、何か柔らかい弾力に富んだものが俺の背中に当たっている。

「景様、おはようございます」

・・・朝から、俺の布団にメイドがいた。

「・・・そういえば、お前がいたんだったな。おはよう、エリス」

俺はすっかり忘れていた。エリスが昨日から住んでいたということを。

俺が挨拶をするとエリスはにっこりと微笑み、俺に聞いてくる。

「おはようございます、景様。昨日はよく眠れましたか？」
だが、俺はむっとしながら言った。
「お前が俺にくっついて寝てなかったらな」
その言葉にエリスは不満そうだったが、俺には関係ない。
不満なのは、俺も同じことだ。
それよりも、問題にしなくてはいけないのは、エリスがここにいるということだ。
「ところで、何で俺の布団にエリスがいるんだ？昨日は母さんの部屋で寝たんじゃないのか？」
「６時過ぎに起こしに来たのですが、景様が気持ちよさそうに寝ているのを見たら、つい一緒に・・・」
『つい』、で俺の布団に入ってくるな。
結局、俺は貴重な朝の１０分の時間をエリスとの会話で終わらせてしまった。
あの起きなければならないと思いつつも、うとうとしている時間が至福だと言うのにな。
俺は、まだだるいと思いつつも体を起こす。
「景様。朝食の用意ができていると思いますので、顔を洗って早く降りてきてください」
そう言いつつも、エリスは何故か部屋を出て行こうとしない。

その上、もじもじとしながら、こちらをちらちらと見ている。
俺は、不思議に思いながらエリスに尋ねた。

「ん？どうした、エリス。着替えたら、すぐ行くから。今日は幸樹に借りたゲームを返すから少し早めに出ないとな」

俺は、制服を掛けてあるハンガーを見るが、あるはずの制服が掛かっていなかった。
すると、エリスは相変わらずもじもじとしながら、俺の制服を差し出す。
そして制服を俺に手渡し、一歩前に出ると、顔を赤くし視線を下に逸らしながら言った。

「お着替え、お手伝いします」

「・・・」

俺は、無言でエリスを部屋からつまみ出すと、部屋の鍵を閉めた。

「えっ？待ってください、景様。開けてください、景様ってばー」

エリスが扉を叩いているが無視だ。
そんな恥ずかしいことができるわけがない。それい、エリスも照れるようなことをするなら、止めておけばいいのにな・・・。

エリスを部屋から追い出した俺は、ベッドの上にあったゲームソフトの上にパジャマを放り投げる。
そして、さっさと俺は制服に着替えた。
結局、俺が部屋から出るまでエリスは扉を叩き続けていた。

「・・・」

俺が着替え終えて部屋から出ると、仏頂面をしたエリスがいた。
ドアノブを回して出ると、エリスは一瞬明るい表情をしたが、俺が制服を着ているのを見ると不満そうな顔に戻った。
エリスは何も言わなかったが、顔を洗い、歯を磨いているときも、俺がリビングに行くまでの間、じっと俺を睨み続けていた。

もちろん、居心地が悪かったのは言うまでもない。

「母さん、おはよう」
「お母様。景様を起こしてきました」

俺とエリスはそう言って、リビングに入る。
父さんは夜に起きたのか、ここにはもういなかった。二度寝をするために部屋に戻ったのだろう。
母さんは台所から顔だけを覗かせると、「おはよう、景、エリスちゃん」と言うと、すぐに顔を引っ込める。
だが、何かを思い出したようで、もう1度顔を出すと俺に言った。

「景。悪いんだけど、新聞取ってきてくれる？」
「わかっ・・・」
「私が行きます！！」

俺が返事をする前にエリスはそう言うと、リビングを飛び出していった。
すると、母さんはリビングに出て来ると、エリスが飛び出していったリビングの扉を見ながら言う。

「エリスちゃん。本当に素直な子よね。かわいい娘ができたみたいで、母さんうれしいわ」
「娘か・・・。母さん、エリスはロボットだぞ」
「あら、それくらい私だってわかってるわ。でも、そういう問題じゃないのよ」

そう言って、母さんはご飯を茶碗によそう。
そして、俺の前に置く。

「いただきます」

今日は、豆腐の味噌汁か。
母さん、今日は寝坊したのか。

俺は、味噌汁を見れば母さんが朝起きたかどうかが分かる。
その基準は、味噌汁にある。
具が1つなら確実に寝坊している。例外として、わかめと豆腐の場合も寝坊だ。

・・・エリス、戻ってこないな。
既に5分は経っているが戻ってこないエリスが少しだけ心配だった。
俺の家は、玄関から門まで車で移動するような広い庭などない。
新聞を取るくらいなら、1分あれば十分だ。
朝食を食べながら、俺は母さんに言う。

「母さん。エリスは新聞を取りに行ったんだよな？それにしては遅くないか？少し様子を見てくる」

俺はリビングを出て行く。

・・・玄関にもいないということは、まだ外にいるのか。
そこで玄関を開け外に出ると、エリスが近所の人と会話をしていた。
だが、その近所の人というのが問題だった。

「あら？景ちゃん。おはよう」

そう。恵麻の母親、愛美　（あゆみ）さんだった。
俺は、会ってしまった以上無視するわけにもいかず、内心最悪な状況だと思いながらも、挨拶をする。

「お、おはようございます」
「景様、どうかされましたか？」
「景様？・・・この娘とはどういう関係なの？」
「・・・」

そんなことを聞かれても、俺のメイドです、なんて答えられるわけがない。
答えたら最後、俺の人生はお先真っ暗だ。
俺は答えに窮して曖昧に笑ってみせるが、勘の鋭い恵麻の母親はすぐにピンときたらしい。
にやにやとこっちを見て笑う。

「景ちゃんにそんな趣味があったなんて、おばさん驚いた」

恵麻の母親ということは俺との付き合いも長いわけだ。勘が鋭いのは、恵麻とは違うが、雰囲気は恵麻と同じものを感じる。
もう１つ違う点を挙げるならば・・・。

「あらまあ。景ちゃん、うちの娘を路上で押し倒すだけじゃ飽き足

らずにこんなかわいい外国の娘にも手を出して。しかも、メイドさん」

この人は、俺をよくからかってくる人だ。
だからこそ、言っておかなくてはならないことがある。

「い、いえ。こいつは、エリスと言いまして・・・」
「いいのよ、景ちゃん。男の子だったら、2人とも貰っちゃいなさい。あ、もちろんうちの娘もちゃんと愛してくれないとダメよ。もう、そこまで進んでるなんて、もうお義母さんって呼ばれるのも時間の問題ね」

おばさんは、自分で言っておきながら、勝手に照れている。そもそも俺の話なんて聞いてもいない。
だが、問題はそこではない。・・・昨日のことをおばさんが既に知っていたとはな。
恵麻は、そういうことは話さないからきっとあの中に知り合いがいたのだろう。
この様子だと母さんに伝わるのも時間の問題。
むしろ今まで伝わっていないことが奇跡だとしか言いようがない。

「景ちゃんのお母さんにも、昨日の夕方、うちの前でばったり会ってね。うちの娘を押し倒したことを喋っちゃった」
「・・・」

・・・神はどうやらいなかったらしい。
母さんが、昨日そのことを話さなかったことが恐ろしい。
きっと、エリスが来ていなかったら、夜遅くまで根掘り葉掘り聞かれたことだろう。

「あの、おばさん。これから話すことを黙って聞いてもらえますか？」

俺は、黙っていても仕方ないと感じ、おばさんにエリスのことを説明することにした。

このままだと、昨日の話のように変に広まってしまうからな。

おばさんは、初めは半信半疑といった感じで聞いていたが、　段々とこちらの話を信じてくれた。

「じゃあ、このエリスちゃんはロボットなのねえ。しかも、応募したら当たったと」

「ええまあ」

苦笑いで俺は答える。

まさか、何も書かなかったら当選したとは言えまい。

「では、おば様。申し遅れましたが自己紹介をさせていただきます」

そう言うと、エリスはコホンと１つ咳払いをするとおばさんにお辞儀をしてから話し始める。

「私はエリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型と申します。ハンドメイデン社より、後継機開発のデータ採集及び景様のお世話のためにやって参りました。景様共々よろしくお願いします」

俺共々って・・・最近の俺はそこまでおばさんに迷惑は掛けてないとおもうんだが・・・。

エリスの言葉に俺が釈然としない思いを抱えていることなど知らないおばさんは、こちらこそと頭を下げる。

しばらく、俺はその様子を眺めていたが、言わなくてはならないことがあったことに気が付いた。

「おばさん。お願いがあるんですけど・・・」

「このことは黙っておくからね。もちろん、誰にも口外しないから。娘にもね」

おばさんが話の分かる人でよかった。

俺は、安堵する。

「ありがとう、おばさん。恵麻たちには、俺から話しますので」

「いいのよ、別に。・・・うん、まあでも、私が話さなくてもすぐに広まるかもね。そのうち、テレビ局とか来たりしてね」

おばさんは、意味深に言う。

周りには土曜日ということもあって人影はない。

近所の人たちにはまだバレないだろう。おばさんの言葉がどういう意味なのか、俺には分からなかった。

「じゃあ、これで失礼します」

「また、うちに遊びに来てね。恵麻もいつでも待ってるからね」

「では、おば様。失礼します」

そうして、俺たちは家へと戻った。

リビングへ戻ると、母さんが俺たちに声をかけてきた。

「エリスちゃん、ありがとう。景。さっさと食べる、時間がないわよ」
「いえ。これもメイドの仕事ですから。景様はいつもこのような時間に出ておられるのですか？」
「そうだな」

時計を見ると、既に7時１０分を指していた。
俺は、母さんへの返事はそこそこに慌てて食べる。
俺は、いつも7時半には家を出ているのだから。
まだ慌てる時間ではないと思う。

『いつも』ならな。

ただ、２つ３つエリスに言っておきたいことがある。
だから、急いでいるのだ。

だが、急いで食べている俺にエリスが話しかけてきた。

「景様は、何と言う高校に通っていらっしゃるのですか？」
「ん？昨日話さなかったか？聖蓮学園だ。この街の駅から電車で５駅だ」

俺は、朝食を食べながら答える。
エリスが言うには、高校の話はしたが、肝心の学校名を言っていなかったらしい。
そして、味噌汁を飲み終えると手を合わせる。

「ごちそうさま」

そして、俺は流しに食器を持っていく。
すると、エリスが机をガタンといわせ立ち上がると叫んだ。

「ああっ！！・・・私の仕事が」

いつもの習慣で、皿を持って行ったのだが、エリスにとっては問題のある行動だったらしい。
・・・時間も無いがやはり言っておいたほうがよさそうだな。

「エリス、ちょっといいか？」
「はい。何でしょうか？」

エリスは何か仕事をもらえると思ったのか、パタパタとスリッパを鳴らしながらやって来る。
そのエリスを見て、俺は溜息をついた。

「今、思ったんだが、そのメイド服どうにかならないのか？」

恵麻の母親にバレてから、考えたこと。
それは、エリスのこの格好で外を出歩かれると非常に問題があるということだ。
家でも、あまり着ていてほしくない。それが、本音だ。

だが、エリスは不思議そうな顔して言った。

「メイドである以上は、やはりこの服を着ていないといけないと思います。それにこの服は意外と動きやすく作ってありますから大丈夫です。それに替えの服も数着用意してあります」

面倒な服がまだあったのか。

俺は、正直言って頭を抱えたかった。1着どころか数着あると言うのだから。

朝の出来事もそうだが、もしも・・・エリスが買い物等で外に出たとき、メイド服を着ていたならどうなるだろうか。
注目を浴びることは必至だ。

このメイド服はフリフリがたくさんついている。
世間のメイドのイメージはあまりいいものとは言えない。
そんなメイドが家にいると知られれば、世間のいい笑いものだ。

俺は、俺の世間体のためにエリスに頼んでみることにした。

「エリス。これは頼みなんだが普通の服、着てくれないか？」
「景様がそうおっしゃるのでしたら・・・」

エリスはもっと食い下がるのかと思ったが、少し名残惜しそうな顔をしていたものの、意外にもあっさりと了承してくれた。
だが、エリスは言いづらそうに話を続ける。

「ですが、景様。家の中では、この服でいることを認めていただきたいのです。この服は会社の方々が一生懸命、私のために作ってくださったものなのです。それを使わないというのは、作ってくださった方々の気持ちに反します」

・・・エリスの会社はロボット作りの会社ではないのか？
そのうち、エリスを作ったという会社のことは聞いてみるとするか。
とりあえず、エリスにとって大切な人たちだということは分かったわけだからな。

「・・・家の中では、着ていても構わない。まあ、干しても家の周りの垣根で隣くらいしか見えないからな」

それにしても、随分と可愛がられていたんだな。俺は、メイド服を大切そうに見つめるエリスを見て、そう思った。

まあ、俺が少しくらい恥を掻いても構わないか。

俺が、エリスのためなら少しばかりの恥は仕方ないなと思っていると、エリスが携帯を取り出しどこかへ電話をし始める。

「干すときですか？ちょっと待っていただけますか？あ、三津刃さんですか？実はお願いがありまして・・・」

まあ、俺もエリスを家に置くと決めたときから、こうなるとは思っていたんだがな。

メイドロボと住んでる家なんて、どこにもないからな。

これから手探りで、やっていくしかないだろう。

1日経っただけで、随分と俺も考えが変わるもんだと自分自身のことながら呆れる。

・・・そろそろ準備しないとまずいな。時計をちらりと見ると急いだほうがいい時間になっていた。

すると、電話を終えたエリスがいきなり俺に向かって嬉しそうに満面の笑みで言った。

「今、会社に電話して事情を話したら、日曜日にお風呂でも干せるように浴室暖房乾燥機付きのお風呂を用意してくださるそうです」

だが、俺は心配の方が先行してしまう。それにそんなおいしい話が

あるのだろうか？戸惑いながらもエリスに聞く。

「なあ、エリス。１つ聞きたいんだが、その代金は俺が払うのか？それに、いつ工事する気だ？」

俺はまだ学生であり、バイトをしているとは言え、そんな物を買う金はない。

だが、俺のそんな心配もエリスは気にしていないようだった。。

「私たちの会社の商品ですので、無料です。ご安心ください。景様の恥は私の恥ですから。それに、あの商品が来ると思いますので・・・」

そう言ってエリスは、にこり微笑みを浮かべた。

最後の言葉が気になったが、今の俺に確認する暇はない。

でも、いいのだろうか？エリスを他の人に派遣したほうが安く済むだろうに。

そんな俺たちのやりとりを見ていた母さんが呆れ声で言った。

「景。もう時間よ。恵麻ちゃんが待ってるわよ。恵麻ちゃん、遠慮して外にいるんだから、早くしなさい」

時計を見ると既に３０分になっていた。

俺は２階に駆け上がると、鞄を掴み、急いで玄関へ向かう。

そして、エリスに言いたかったことを言っておく。

「エリス。もし、外に出たかったら母さんに言ってくれ。服は母さんのを借りれば問題ないだろうから」

急いで出ようとする俺の背中にエリスから声がかかる。

「景様。わかりました。いってらっしゃいませ、景様」

振り向くと、エリスが胸の前で小さく手を振っていた。

俺は、手を振ることはせず、慌てて靴を履きながら言った。

「母さん、エリス。いってきます」

「いってらっしゃい」

玄関の外に出ると、恵麻とおばさんが待っていた。

おばさんは、俺が出てくるのを確認すると、悪戯っぽくウィンクをして俺に言う。

「景ちゃん、いってらっしゃい」

俺はというと苦笑いを浮かべるしかない。

恵麻は俺とおばさんを見て不思議そうな表情をしている。

「景君、行こう」

「ああ。おばさん、いってきます。恵麻、待たせて悪かった」

「別にいいよ～。そんなに待ってないから」

結局、俺はいつもと家を出る時間がさほど変わらなかった。

エリスに構っていたのが、問題だった。

・・・エリスのことは学校に着いたら、みんなに言うか。

いつまでも、隠し通すというのも後ろめたいからな。

そう俺が心の中で決意していると、恵麻が俺の肩を叩いた。

「景君。あのね。昨日のことなんだけど」

「どうした、恵麻？」

「お母さんがね、一部始終を見てたんだって」

「・・・」

恵麻が頬を朱に染めて言う。

どうやら、おばさんは勘違いで、忘れ物を渡そうと恵麻を追ってきたら、たまたま現場に遭遇したらしいのだ。・・・絶対、嘘だ。

「愛美さん、言いふらさないよな？」

「・・・たぶん、ね」

「「はぁー」」

俺たちは2人して、朝から溜息をつくのだった。

エリスのことは言いふらさなくても、昨日の朝のことは言いふらすかもしれない。

俺たちは一抹の不安を拭うことができなかった。

第１０話：メイドさん、学校へ来る　前編（後書き）

まずは、読んで頂いた方々ありがとうございます。

今回から、ようやく話が進み始めます。

更新の方は、たぶん週１、２に落ち着くと思います。

感想・ご指摘お待ちしております。

第１１話：メイドさん、学校へ来る　中編（前書き）

１０／１９　本文を全体的に修正

第１１話：メイドさん、学校へ来る　中編

「・・・景様のお部屋はきれいであまり掃除のし甲斐がないです」

景が学校へ行った後、エリスは気合を入れて景の部屋にやって来た。そこで最初に言った言葉が冒頭の言葉である。

「これですね。景様ったら脱ぎっぱなしでだらしないです」

そう言いつつも、エリスは嬉しそうだった。しつこく仕事を求めた結果、根負けした柚葉が、初めてくれた仕事なのだから。

まだこの家に来てから2日。
主である景の世話ができていないエリスにとっては、認めてもらうチャンスだと考えていた。
そして、脱ぎっぱなしのパジャマを畳もうと手に取ると、そのパジャマの下に見慣れないものが出てきた。

「これは、確か・・・」

それから、１０数分後。エリスは、柚葉の服を借りて玄関前に立っていた。心なしか彼女は、わくわくしているように見える。

「では、いってきます」
「気をつけてね、エリスちゃん。・・・全く、景は・・・エリスちゃんに迷惑かけて」

柚葉は、エリスが見えなくなるとぼやいた。エリスの目の前で言えばこう言うだろう。

「そんなことありません」と。

だが、エリスを見送った柚葉だったが、しばらくして肝心なことに気がついたのだ。

「・・・あ、エリスちゃんが学校に行ったら・・・大騒ぎになるんじゃないかしら・・・」

この日、本当の意味で景の平凡な日常が終わった。

朝のホームルームが始まる前、俺は、幸樹に頭を下げていた。

「すまん、幸樹」

俺は朝、エリスのことで焦っていて、すっかりゲームを返すことを忘れていたのだ。

学校に着いて、鞄を開けるとそれは入っていなかったのだ。

「まあ、気にすんな。俺はあのゲームはクリアしてるからよ」

「来週の月曜日には必ず返す」

「おうっ」

幸樹は気前良く許してくれたのは、俺の心を少しだけ軽くしてくれ

た。
だが、横槍を由真が入れる。
「景。あんた、やっぱり春休みボケだね」
そう言って由真が笑いながら俺の肩を叩くが、身体的にも痛いし、むしろ今日は精神的に痛い。
だが、俺は重要なことをみんなに言わなければならないのだ。
もちろんエリスのことだ。
「・・・ところで、幸樹たちは放課後、１０分ほど時間空いてるか？少し話をしたことがあるんだが」
俺が、そう話を切り出すと、内容も聞かず幸樹は、あっさりとオーケーを出す。
「俺は時間あるからいいぞ」
「僕も大丈夫だよ」
続いて、晃も時間があると頷く。そこで俺は、隣の恵麻、その前の由真にも尋ねた。
「恵麻、由真はどうだ？」
「私は大丈夫」
「あたしもいいよ」
恵麻も由真も、特に用事はないらしい。とりあえず、全員確保できたか。
すると、晃が急に口を挟む。

「ところでさ、珍しいよね。景が僕らに話があるって」
確かに俺は自分から他人と話すタイプではない。何か魂胆があると思われても不思議ではない。
さらに幸樹も不思議に思ったようで俺に耳元に口を寄せると小声で尋ねる。

「まあな。ところで、今話せることなのか？」
「いや。あんまり大きい声で話せることじゃない。放課後話すから」
そう言って、必要以上に顔を近づけてきた幸樹に肘打ちを1発お見舞いすると俺は距離を取った。

その時、8時半を告げるチャイムが響く。
悶絶する幸樹を無視し、そろそろ先生が来る頃かと思い教室の扉の方を横目で気にする。
だが先生はまだ来ていない。その代わりに俺はふと視線を感じ、そちらを見た。

「やっぱりか・・・」
「どうしたの、景君？」
「いや、何でもない」

恵麻には曖昧に返事をしたが昨日といい今日といい、頬を赤く染めながら何かを熱心に書いている女のことが気になるのだ。
今日は俺と幸樹を見ながら、スケッチブックに何かを書いている。
・・・あのスケッチブックは、見たらきっといけないんだろうな。

そうこうしていると、担任の相模先生が教室に入ってきた。

「・・・」

しばらく俺と幸樹を交互に見ていたがやがて溜息をついて言った。

「寿々林君は、どうして床で寝ているの？」

俺は溜息を同じ様につくと、幸樹を1度見やってから言葉を切り出した。

「床が好きなんです、彼」

「・・・景。お、お前な・・・」

「はい、出席を取ります。藍羽さん」

先生は、幸樹の返事を聞くことなく出席を取り始めた。・・・無視するなんて、さりげなく鬼だな。

そして、出席を取り終えると、先生は黒板に何やら書き始めた。

「今から、先にクラス委員や係を決めたいと思います」

まずは学級委員を決めることになったのだが、大抵クラスに1人はやりたがる奴がいる。

いない場合には、決めるのに長引く役職でもあるな。

このクラスはどうだろうか。

「まずは、学級委員からね。立候補する人はいますか？」
先生が挙手を促すが、反応する奴は誰もいない。
皆、先生と視線を合わすのを避けており、ただ誰かが立候補するのを待っているだけだった。
まあ、それが普通だよな。
だが、そんな空気の中、由真が勢いよく立ち上がる。
「じゃあ、あたしがやります」
その言葉に教室の中の空気が少しだけ変わった。
先生も特に思案することも、俺たちに聞くこともせずに言った。
「じゃあ、お願いしようかな」
だが、由真は振り返って俺を見て笑うと先生に条件を突きつけた。
「でも・・・1つだけ条件があります」
「何かしら？」
・・・こんな所で冗談でも言うつもりか？
にわかに教室中が騒がしくなる。先生も怪訝そうな顔をしている。
その中で、まるで周りの喧騒が空気であるかのように由真は顔色1つ変えなかった。
「有栖君をもう1人の学級委員に任命することです」
「俺の意思は？」
・・・そういうことか。

だが、俺は、あまりこういう役職は好きではない。面倒はないに越したことはない。

俺が、渋っていると先生が俺たちに介入してきた。

「上総野さん。有栖君は嫌がってるみたいだし、その条件はよくないと思います」

先生が擁護してくれたおかげもあって、由真はしつこく勧めてはこなかった。

もう1人の委員は、名前の知らない男が先生に指名された。

ただ、委員決めが終わると、振り向きざまに由真が言った。

「全く、あたしとやるのが嫌なわけ？」

・・・お前だからこそ嫌だ・・・なんて言えればいいが、ここで言ってもまた言い争いになるだけだしな。

「いや、俺には向かないと思っただけだ」

そう俺が言い訳をすると、しばらく由真は値踏みするような視線を向けていたが、やがて大きく溜息を吐いた。

「まあ、分からないことはないけどねえ」

それっきり由真は俺に背を向け前を向いてしまった。

・・・新学期早々、目立つ真似をしてくれるものだな。

俺には関係のなかった委員会、係決めが終わると、教室の中がざわつき始める。
それは、俺の周りも例外ではない。

「次は、席替えだね～」
「まあまあ、恵麻。まあ、クラスが変わるわけじゃないんだし」

恵麻は折角、由真と近くになったのに離れることが残念らしい。
確かに、由真の言うとおりクラス内にはいるわけだし、気にすることはないと思うんだがな。
そんなことを考えていると、恵麻は急にこちらに話を振ってきた。

「景君は私と離れるのは嫌だよね！」

既に聞いているのではなく、もう押し付けになっている。
俺は、有無を言わせない恵麻の勢いに負けて言った。

「あ、ああ。・・・まあ、そうだな」

それを聞いた由真は、娘を可愛がり過ぎている親バカの親父を見るような目で俺を見る。
そして、心底呆れた口調で言った。

「あんたねえ。・・・恵麻を甘やかしすぎよ」
「そうか？」

別に俺は、恵麻を甘やかしてなんていない。そもそも俺は育てた覚えはない。
俺が冷めた目で由真を見ると、由真は口うるさいおばさんのように

言う。

「あんた、自覚もないの？第一、高校生にもなって一緒に学校来てるし、この年で恵麻の尻に敷かれてるし・・・。もうちょっと男らしく、びしっとしなさい。俺に黙ってついて来い、くらいのことを言いなさい」

「由真、お前・・・。いつの時代の人間だ？一緒に学校に来ることについて、別にお前にとやかく言われる筋合いはないと思うぞ。それに、俺は恵麻の尻に敷かれてなんかいない」

俺のプライドのために否定はするが、恵麻はああ見えても、自分から他人を引っ張る方だ。

今は、それは鳴りをひそめているが、昔は俺を引っ張り回していたくらいだからな。

朝、一緒に登校しているのは愛美さんが、恵麻も俺と一緒のほうが安心だろうからと言う理由で来ているだけだ。

由真はどうも俺と恵麻をセットに考えて物事を言いたがる気がしてならない。

ただ、それは由真に限ったことではなかった。

「いや、どう見ても尻に敷かれてるだろ。俺は、景とはこの中では付き合い長いほうだぜ。その俺が断言する。景は恵麻ちゃんの尻に敷かれている！」

「僕もそう思うよ」

「・・・」

「私、景君をお尻になんて敷いてないよ～」

恵麻を除く3人から見ても、俺は尻に敷かれているらしい。むきに

なって恵麻が反論しているが、この手のからかいは無視していればいずれは自然に消えていくものだ。
ただ、１つだけ言いたいことがある。
お前ら、そんな目で俺を見ていたのか？と。だが、言っても確実に肯定されるだけだから言わないで内心に留めておくけどな。

しばらくの間恵麻で遊んでいる3人をぼーっと見ていたが、段々と俺は心配になってきた。
これだと、メイドが来たなんて言ったらどうなるのだろうか？
たぶん、大騒ぎになることは確実だろうな・・・。
俺が、そう遠くないであろう未来に思いを馳せていると、恵麻が心配そうに声をかけてきた。

「ねえ、景君。顔色が良くないよ？」

そんなに顔色が良くなかったのか。
まあ、そうだろうな。
こんな奴らに話そうとしてるのだからな。
俺は、目の前で俺と恵麻をからかう3人を見ていると頭痛がした。

教室がますます騒がしくなってきたとき、先生がパンパンと手を叩いて言った。

「はーい、静かに。席順は公正にくじ引き一本勝負です。順番は、

一番左前に座っている・・・久賀和良君と、一番奥の席の浜君でじゃんけんして勝ったほうからということになります」

先生はそう言うと、2人にじゃんけんをさせる。
勝ったのは、浜とかいうひょろっとしているが背の高いもやしのような眼鏡をかけた奴だった。

「「・・・」」

俺は、負けた久賀和良とかいう奴に同情した。
いきなりじゃんけんさせられ、負けるとは運が無いよな。

「じゃあ、浜君から順番にね」

そして、席替えのくじ引きが始まった。

「みんなで一斉に見ようよ」

恵麻の提案により俺たちはまだ、くじの中身を見てはいない。
先生は、席を番号で決めており、以前の久賀和良の席は1、浜の席は35ということになる。

「じゃあ、せーの」

そして、俺たちは一斉にお互いのくじを見せた。

「・・・」

その結果はというと・・・俺は、６。恵麻は7。幸樹は３３。晃は２４。由真は１４。

俺は、見事に一番後ろの席になった。
また、恵麻の斜め後ろに由真が座っており、この2人だけは唯一近くの席だった。
だが、俺たち3人はバラバラになった。

そして、俺の隣には・・・あの怪しい視線で俺を見ていたスケッチブック女が座っていた。

「・・・」

・・・きらきらした目でこっちを見るな。

席替えも終わり、そして連絡事項を終えた先生が教室から出て行くと恵麻たちが俺の席へとやって来た。

「景君。話があるって言ってたよね～」
「まあな」

そして、俺は皆が集まったのを見ると、場所を移動しようと立ち上がった。
すると、突然クラスに駆け込んできた同クラスの男の一言が教室中に響き渡った。

「おいっ、みんな聞いてくれ。外国人の美少女がうちの学校に来てるぞ！！」

特に『外国人』という所が、俺にとっても衝撃だった。
尚もその男は興奮気味に話を続ける。
「銀髪で蒼い瞳の女の子だ。しかも、スタイル抜群の美人で本当に見たこともないくらいの美人だ」
興奮しているせいか、一部言葉がおかしい気がする。
だが、俺はそんなことが気になったのではなかった。
エリスか！？
その条件に即座に当てはまる同居人が俺にはいたのだ。・・・そんな酷似した条件の外国人が2人もいるとは思えない。
焦る俺の気持ちを余所に、話を聞いた幸樹もにやけた顔で俺に言った。
「景。聞いてたか？すげえ美人の外国人がうちの学校に来てるってよ。これは絶対、転校生だな」
俺は即座に、心の中で転校生じゃないと思ったが、心に留めておく。
・・・正しくはメイドだ。
しかも、一応俺の家に来ている。
「あ、ああ。そうらしいな」
俺の返事は、うわの空だ。
もし、本当にエリスだとしたら俺の学園生活は終わりに違いない。
「ねえ、景君。大丈夫？顔、真っ青だよ～」

「ああ・・・大丈夫だ」

その時、教室の外がにわかに騒がしくなる。
教室の外にいる奴らの声が聞こえた。
その声を聞いている限りでは、どうやらこっちに来ているようだ。

そして、その『外国人の美少女』が俺たちの教室に入ってきた。
やっぱり、そうか・・・。
俺の予想通り、やって来たのはエリスだった。俺を見つけるとエリスはこちらに駆け寄ってきた。

「景様、こちらでしたか。これ、忘れ物ですよ」

そして、エリスが手渡したのは、俺が忘れたゲームソフトだったのだ。
自業自得とはこういうことを言うのかと、俺はうなだれるしかなかった。それでも、一応感謝はしておかないといけないよな・・・。

「・・・ありがとう、エリス」
「いいえ。私は景様のメイドですから」

エリスがメイドと言ったその瞬間、周りの空気が凍りついた気がした。
皆がエリスを注目していた状態の中、『俺のメイド』とはっきりとエリスが言ったのだから仕方のないことだろうな・・・。

少しの間、皆は理解が出来なかったようで黙っていたが、やがて状況を飲み込むと驚きを隠すことなく叫んだ。

「「景様!?メイド!?」」

俺とエリス関係にクラス中、他のクラスの野次馬が騒然とし、様々な意味の篭った視線が投げかけられる。
それは、俺の友人たちも例外ではない。
恵麻はじっと俺を見つめ、幸樹は羨ましそうに、由真は侮蔑の視線を、晃は意外そうな顔でそれぞれ俺を見ている。
だが皆、どういう視線であれ好奇心を隠せてはいない。

「あ、あの・・・景様、大丈夫ですか？」
「ああ・・・俺は大丈夫だ・・・」

周りの野次馬の視線を一身に受けながら、俺は思った。

・・・俺の平穏な学園生活が終わったと。

第１１話：メイドさん、学校へ来る　中編（後書き）

最近忙しくなってきたなあ、なんて言い訳します。（実は、本当です）

ちょっとばかりランキング上位の作品を読んでみたのですが、文章の上手さ、物語の面白さに感動しました。

作品名は言いませんがね。

やっぱり上位の作品って参考になるなあと思う今日この頃です。時間があまりないので、最初の数話しか読んでませんが・・・。

・・・忙しいのに読んでて自分の作品に割く時間が無くなってるなんて言えない。

実際、この作品は書き始めてから1ヶ月になろうとしていますが、本編ではまだ2日しか経っていません。

何だろう。この遅さ。

まずは書かないとうまくならないと思うのでこれからも書き続けていきますよ。

以上、作者の戯言でした。

感想・ご指摘等お待ちしております。

第１２話：メイドさん、学校へ来る　後編

俺の周りには、今たくさんの人がいる。
クラスメイト、興味本位で集まった野次馬。
そして、目の前には俺の友人たち。
さらに俺の傍らでは状況が理解できず、俺の腕にくっついているメイドがいた。
が、俺はエリスに何か違和感を覚えた。
同時に目の前から殺気が俺に放たれている気がする。
・・・恵麻。何で俺をそんなに睨むんだ？

「景君。説明してくれるよね」
恵麻が、にこりと微笑んで言う。
もちろん、顔は笑っているが目は笑っていない。そのせいか、むしろ怖い。
そして、既に質問ですらない。・・・断定か。
「分かった。まあ、今日話そうとしてことはこいつのことだからな。だがな。悪いがここは人が多すぎる。場所を替えても構わないか？」
「別にどこでもいいよ」
俺は、この教室で話すことには抵抗があったので、場所を替えるこ

とを提案した。
恵麻は、特に反対はしてこなかったが、口調から察するに怒っているようだ。
だが、何で恵麻が不機嫌なのかは俺には分からない。
いや、１つだけ事態から推測するとはっきりと分かることがある。
エリスが関係しているということだけは。

俺たちは、図書室の奥にある視聴覚室に行くことにした。
あそこなら、普段から人はいないしな。
そして移動中、恵麻の機嫌が直ることはなかった。

俺は、視聴覚室に入ると鍵を閉める。
俺の予想通り、ここには誰もいなかった。
ここなら、大丈夫だな。

「とりあえず、その人が誰なのか教えてくれないか？」
幸樹が、にやにやと俺の不幸が楽しいと言わんばかりに言う。
一応、言葉には出さないようにしているつもりだろうが、表情を見れば一目瞭然だ。
それに、いつ買ったのか知らないが缶コーヒーを手で弄んでいる。
俺が説明しようと口を開こうとすると、エリスが先に話を始めた。
「実はな・・・」

「はじめまして、皆様。私の名前はエリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型と申します」

いきなり、何とか型と言われたら誰だって、困惑するよな。
エリスの普通ではない自己紹介に、不思議そうな顔をする４人。
俺を見て、この人何を言ってるんだ？と言いたそうだ。

俺は話を取られたことと、エリスの自己紹介に苦笑いを浮かべるしかない。

「え、え～と・・・エリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型さん？・・・・・・えりすちゃん・・・？」

恵麻が、途切れ途切れにエリスに聞く。だが、最後に恵麻が言った言葉を誰にも聞こえていなかった。
エリスの摩訶不思議な自己紹介のせいか、既に恵麻の毒気は抜けたようだ。
ＭＯＰ１ＨＫ型なんて名前聞いたことあるわけがない。
俺も、昨日初めて聞いたからな。

「はい。そうです。え、・・・・いえ、藍羽　恵麻様ですよね。景様より、お話はお伺いしております」

そう言うと、エリスは頭を下げる。
何かを言おうとしたらしく、エリスは珍しく言葉を詰まらせた。
が、すぐに言葉を続ける。

「景君の知り合いなんですね～。私は、藍羽　恵麻。恵麻って呼んで下さい」
「恵麻様ですね。わかりました」

互いに自己紹介をする恵麻とエリス。
なかなか良好な関係が築けそうだ。
と言うよりも、俺のときとは明らかに態度が違う。単純に信じるとはな。
だが、恵麻は何かを考え込んでいるようにも見えた。その顔はいつになく真剣で、俺は声をかけることができなかった。
だが、他にも問題はあった。
「で、結局。エリスさんはあんたの何なの？メイドとか言ってたけど」
由真が俺を睨みながら言う。
もう仕方ないよな。
俺は、意を決して言うことにした。
「実は話というのは、他でもない。エリスのことだ。・・・当たったんだ、この前の応募にな」
「「・・・」」
俺の突然の告白に黙る４人。
が、すぐに大声をあげて驚く。
「「えええええっ！？」」
その絶叫は、正直耳障りな上に頭が痛くなる。

ここは、視聴覚室のために音が響くのだ。
俺は、至近距離で叫ばれたので、耳を塞いだ。
それでも、ふさいだ手の隙間から侵入した不快な絶叫によって耳にダメージが残っている。

「・・・お前ら、耳を塞ぐんだったら叫ぶな」

叫んだ４人も耳を塞いでいたのだ。
エリスも、耳を塞いでいた。
俺は、呆れることしかできない。

「・・・景様。人って超音波を発するのですね？これもデータとして持ち帰ります」
「エリス。余計なことは学ばなくていい」

目をきらきらさせて、興奮するエリスを諌めておく。
俺は、後世に恥を晒すつもりは全くない。

だが、俺は１つ気になったことがあった。

「ところで、エリス。何で俺の居場所が分かった？」

エリスに学校のことを話した覚えはある。
だが、俺はクラスまでは話した覚えはない。

そうすると、考えられる結論は・・・学園中を探し回っていたのだろうな。

ところが、エリスの答えは意外なものだった。

「景様の居場所なら、すぐに特定することができます。私は、これでも高性能メイド型ロボットです。契約を交わしたご主人様の居場所を知ることなど簡単なことですよ。私は、機能としてＧＰＳがついています。いつでも地球上のどこにいても、景様の居場所は分かるのですよ」

「・・・そうなのか」

そう言って、胸を張るエリス。

スタイルよく作られているため、出ている部分がより強調されている。

何故か、悔しそうな恵麻と由真。

そして俺はと言うと、エリスの答えに唖然としていた。

どうやら、最近の科学は個人のプライバシーには無頓着なようだ。

「景。当選したってことは、このメイドロボは売りに出すよね？」

晃が一体いくらになるだろうかと、言いながら俺に言った。

俺も、そのことは最初に考えたんだがな。

「晃様ですよね。残念ですが、私を売ることはできないのです」

「どうしてか教えてもらってもいいかな？」

はっきりとエリスに言われる晃。

・・・笑顔が引きつってるな。

晃は、人見知りをする方だと言う。

確かに初対面の奴に対する態度は俺たちへのそれとは明らかに違う。

「景様にも申し上げたのですが、私は試作品です。景様専用という

ことで登録されていますし、既に景様とも契約済みです。もし、どうしてもお売りになりたいとおっしゃるのであれば違約金を支払っていただくことになります」
「・・・違約金っていくらなの？」
俺は、思った。まだ売る気なのかと。
俺には、エリスと晃の間に火花が散っているのが見えた。
「正確なことは分かりませんが、１００億は下らないと思いますよ？」
「へえ。で、払うのは僕なの？」
「いえ、お支払いいただくのは、景様です」
「何っ！？」
違約金が１００億以上というのはこの際どうでもいい。
俺が、驚いたのは他でもなく、その違約金を俺が支払うということだ。
が、この話には続きがあった。
「ですが・・・景様が売りたくないとおっしゃるのに無理に周りの方々が売ろうとなさるなら話は別です。私がその方々を速やかに排除すればいいことです。私には景様の平穏な生活を守る義務がありますので」
「・・・冗談だけどね。あははっ」
「そうですよね。ふふふっ」
互いに笑いあう2人。どう見ても、腹の探りあいにしか見えない。
それに俺にはエリスと晃の周りに黒いオーラが見えた。
晃は、友人でない奴にはこんな対応しかしない。まあ、たぶん試しているのだろうが。

だが、・・・エリスはこんな奴だったか？
この性格が本当にデータだとしたら、誰をモデルしたのだろうか？
それに恵麻や由真もエリスの豹変に驚きを隠せない。
特に、恵麻はさっき話したばかりだからな。
2人の雰囲気の険悪さに俺も呆れていると、エリスの目つきが突如変わった。
「はあっ！！」
「・・・っ！！」
いきなり何かを取り出すと、それを後ろにいた幸樹に突きつけたのだ。
いきなり何かを突きつけられて、腰が抜けたかのように座り込む幸樹。
「「・・・槍？」」
幸樹以外の、俺たち4人の言葉が一致する。
それに対して、幸樹の眉間に槍を突きつけたまま、こちらを見るエリス。
幸樹は携帯を手に持ったまま震えが止まっていない。
手に持っていたはずの缶コーヒーは槍に貫かれ、中身が漏れ出している。
・・・エリス。その槍、後できちんと洗ったほうがいいと思うぞ。
「あたし、・・・コーヒーまみれの槍なんて初めて見たよ」

由真が誰に言うわけでもなく言う。
そんなものは、俺だって見たことない。
幸樹と当のエリスは反応しなかったが、皆気持ちは同じだろう。
だが、幸樹は携帯電話で何をしようとしていたんだ？
「いえ、これは槍ではありません。ｃＢＮを使って作られた私専用の槍剣です」
エリスは笑顔で俺たちに武器を説明するが、肝心の武器は幸樹の眉間に突きつけたままだ。
もちろん、俺たちは笑えない。
「エリス。ところで、それはいつから持っているんだ？それにｃＢＮとは何だ？」
俺は、ふと疑問に思った。
昨日来た時には、持っていなかったし、今日の朝も持っていなかった。
第一、エリスの背の丈よりも長い武器を気づかないわけがない。
「今朝、景様がお出かけになった後に届いたんです。早速試してみたのですが、まあ少し重たいですけど、使い勝手はいいと思います。ｃＢＮというのは、立方晶窒化ホウ素と言いまして主に金属加工に使われる非常に硬度のある物質です。ダイアモンドよりは硬度はないですけどね」
「・・・ねえ、エリスさん。それ、おもちゃかな。ちょっと貸してくれる？」

そう言って、エリスから槍剣を借りる晃。
ようやく、眉間から槍剣が無くなった事に安堵の表情を見せる幸樹。
確かにおもちゃにも思える。
エリスはそれをまるで羽のように軽く持っていたからだ。
エリスはその槍剣をあっさりと晃に貸す。もちろん、缶は刺さったままだ。

「なっ！？」

が、エリスから手渡された瞬間、顔が真っ赤になってしまった。

「大丈夫ですか？晃様」

そう言って、心配そうに晃から武器を返してもらうエリス。
俺は、改めて槍剣という武器を見つめる。
長さは、２メートルほど、刃の部分が異様に長い以外は、普通の剣だ。
エリスは、刺さったままの缶コーヒーを右手で取り外すと左手の槍剣を背中の鞘へと仕舞う。
そのまま、ポイ捨てをしないところは褒めるべきなんだろうな。
例え、その手に余ったコーヒーがかかってベトベトになっていてもだ。

「ああ、大丈夫」
「そうですか。重いので怪我をされたらどうしようかと思いました。
でも、これからも景様共々よろしくお願いしますね」

そう言って、晃に笑顔を見せ、手を差し出す。
晃もそれに対して手を差し出し握手をした。

が、コーヒーでベタベタの手だ。

「よろしく、エリスさん」

晃は笑顔で握手をすると俺の方へ来て、こう言った。

「なかなかいい娘じゃないか。ちょっと試してみただけなんだ。景はどうせ売る気ないんでしょ」

「やっぱりそうか。まあ、仲良くしてやってくれると俺もありがたい」

「分かってる。でもさ、僕は思うんだ。握手する前にコーヒーのついた手を拭いてくれていたら、尚ありがたいってね」

そう一言俺に文句を言う晃。

お互いに俺たちは、拳をつき合わせた。

これが、俺と晃と幸樹、3人の無言の挨拶。

友人である証だ。

そこにエリスがそっと寄ってきた。

ハンカチで手を拭きながら。

「先程は色々と失礼いたしました。ご主人様以外に敵意を向けられるとつい反応してしまうのです。そうでないと景様をお守りすることはできませんから。でも、いいデータ採集ができました。これは、F型のデータに使えますね」

晃に謝るエリス。晃も別に構わないといった感じだ。

が、いいデータが採集できたと喜ぶエリス。

ただ、俺は1つエリスに言うことがあった。

「エリス、ちょっといいか？」

そう言って、エリスを手招きする。

「はい。何でしょうか？景様」

「その武器の話なんだが・・・」

「このミストルティンがどうかしましたか？もしかして、お気に召さないのでしょうか？」

エリスは不思議そうな顔をして聞いてくる。

そして、俺がその槍剣が気に入らないのではないかと見当違いな心配をしている。

「エリス。よく聞いてくれ。日本では、そんな武器を持ち歩くことは禁止されている。それにそんな物を人に向けるな。危ないからな。後、コーヒーついただろ。ちゃんと洗っておくんだぞ。」

「いいえ、大丈夫です。私は武器もそれなりには扱えますので。コーヒーは、後できちんと拭き取っておきます」

だが、エリスはそんなことはないと反論する。

コーヒーは、後でいいのか？

と言うよりも、お前の心配じゃないんだがな。

「エリスは、何で武器類も扱えるんだ？確か、お世話に特化したタイプだったよな？」

俺は、エリスが言っていたことを思い出して言った。

確か世話に特化したタイプだと言っていたから、戦闘はできないんじゃないのか？

「はい。でも、お世話に特化したタイプ、ＨＫ型でも戦闘能力はそれなりにあります。それに私はマザーですから」

「そうか・・・」

マザー？母親という言葉に何の意味があるのかは分からない。
が、今の俺にそんなことを気にする心の余裕はなかった。
こんな物騒なメイドと契約してしまったのは、間違いだったのだろうか？
近い将来、警察沙汰を起こすのではないか。
俺は、本気で心配になった。

「ところで・・・・幸樹。大丈夫か？」

未だに震えの止まらない幸樹に声をかける。
まあ、そうだよな。あんなもの突きつけられたら、さすがに仕方ないよな。

みんなは幸樹からは離れている。俺が一番近いくらいだからな。
全員、幸樹のことは目に入れていない。

・・・誰も声をかけなかったのか？

俺が、恵麻たちに視線を送ると、視線で返された。

気持ち悪くて声がかけられなかった、と。

由真、お前な・・・。
いくら何でもひどくないか。
そんなアイコンタクトを送っていると、幸樹がようやく返事をする。
「あ、ああ。何とか大丈夫だぜ・・・」
「・・・・・大丈夫・・・・なのか？」
俺には、どう見ても大丈夫には見えない。
どうやらメイドへの幻想は消えたように思える、と言うよりも消えただろう。
これはトラウマになるんじゃないか？
俺は、そう感じた。
「・・・ところで、景。お前、メイドの躾くらいはちゃんとしてくれ・・・。俺まだ死にたくねえぞ」
「・・・今日、帰ったらきちんと話し合うから」
こぼれたコーヒーが、制服について染みになりつつある幸樹に約束した。
俺もこんな騒ぎを起こしてほしくはない。
「・・・景。腰が抜けて、立てねえ。手伝ってくれないか？」
「分かった」
そう言って、肩を貸す。
とりあえず、椅子に座らせておく。
そして、俺は気になったことを聞いてみた。
「悪いな、景」

「ところで、幸樹。お前、エリスに何をしようとしたんだ？」
エリスが、いきなり武器を突きつけた原因だ。
もし、幸樹が何もしていないのであれば、きちんと話し合う必要があるだろう。
が、どう見てもあの時の幸樹は怪しかった。
「1つ聞きたい。匍匐前進していたのはどうしてだ？」
「あ、いや。その・・・」
妙に口篭る幸樹。
額からは、まだ春の涼しい日だというのに汗が光っている。
それに、視線をあっちへやったり、こっちへやったりと挙動不審だ。
が、俺の疑問は幸樹ではない他人によって解決された。
「ああ、それね」
由真だ。
いきなり会話に乱入してきたかと思うと、勝手に話を始める。
細かいことを気にしない性格であることは知っていた。
「まず、エリスさんの背後に幸樹が匍匐前進で近づいたのよ」
「……」
が、ここまで気にしないとは思わなかった。
頼むから、空気を読んでくれ。
もちろん、俺の思いは通じることはない。

「景君。由真ちゃんってね、推理小説が好きなんだよ～」
「そうなのか」
俺は、恵麻から由真の意外な趣味を教えてもらった。
そうか、全ての謎は解けた。
・・・いや、謎ですらないな。
「そして、携帯のカメラをエリスちゃんに向けた時、事件は起きたのよ」
いきなり語りだす由真にみんな唖然としている。
「カメラを撮ろうとした、まさにその時エリスちゃんが槍剣を突きつけた。そして、缶コーヒーは、その時幸樹が驚いて手から離したのがその槍剣に刺されたってわけ。つまり、盗撮しようとしていたんだ」
「もうみんな、気づいてることを蒸し返さなくても・・・」
晃が、俺たちの気持ちを代弁する。
「細かいことは気にしない。男だろっ。それに1度やってみたかったんだ」
そう言って、晃の背中をバシンと叩く由真。
・・・晃がむせて苦しそうだ。
それを見て、笑う幸樹。
恵麻も笑っている。

「景様。楽しい方々ですね」

エリスは、楽しそうに笑顔でみんなを見ていた。
その笑顔はまるで、公園で走り回る幼い我が子を見る母親のようだった。

「まあ、そうだな。こいつらといると退屈しないからな」
「でも、景様。学校は危ない所なのですね」
「どうしてだ？」
「はい。今日だって、景様の周りに危害を加える危険性のある方々がたくさんいましたし。やはり、月曜日からは、私が学校へ同行し、景様をお守りいたします」
「その、ミストルティンを持ってか？」
「はい」
「・・・俺のためというなら、武器は持ち歩かないでくれ。ついでにもう学校には来るな」
「どうしてですか？」
「・・・もういい。後で現代日本について説明するからな」

俺は、きちんと現代日本のことを説明していなかったことを後悔した。
エリスはさも不思議そうに聞いてきたからだ。

「・・・私だって、それくらい分かっていますよ。・・・景君」

その声は誰にも届くことはない。

誰かの声が聞こえた気がして振り向いたとき、ちょうど目の前にエリスがいた。
その時、俺は違和感の正体に気づいた。

「・・・カチューシャがなかったのか」
「どうしたの？景君」
「いや、何でもない」

恵麻たちに話す事でもないので、俺の心に閉まっておいた。
また、何を言われるか分からないからな。

俺たちが視聴覚室を出ると、その前にはたくさんの野次馬がいた。
そいつらが、しつこく俺とエリスの関係を聞いてきたが、無視しておいた。
知り合いですらない野次馬に無駄なことを話すほど、俺はお人よしでも、お喋りでもない。

「悪いが、みんなこのことは秘密にしておいてくれ」

恵麻たちにはこう言ったが、結局噂は憶測が雪だるま式に膨れながらあっという間に広まっていくのだった。
俺がそのことを知るのは、週が明けた月曜日のことだった。

第１２話：メイドさん、学校へ来る　後編（後書き）

朝と夜、読む人が多いのはどちらなんだろう？
そんなことをふと思う今日この頃。

今回も読んで頂いた方々ありがとうございます。
本編内２日目終了。
このスローペースだと本編３日目が終わるのが６月末になりそう・・・。

一応、次回更新は月曜日になります。

第１３話：洋服と充電器　前編（前書き）

２００７年８月１３日　琴美の呼び方修正。
１０／１８　本文一部削除

第１３話：洋服と充電器　前編

それは、エリスの部屋ができた翌日、日曜日のことだった。
俺は、朝からぼーっとニュースを見ていた。
テレビのアナウンサーは、淡々とニュースを読み上げる。
この人は、少なくともバラエティ向けではないなと俺は思った。

次のニュースです。世界第2位のハンバーガーチェーンが日本に再上陸いたしました。
3，4時間は待ったという、その第1号店に当番組の記者が取材に行ってきました。

「・・・俺も行くべきだったか」

このニュースを見ながら、俺はそう呟く。
そして、中継が終わり放送スタジオへと戻される。

はひ？

バーガーを食べながら、返事をするアナウンサー。

「・・・何やってんだ？」

ニュースを淡々と読んでいたアナウンサーが、紹介されていたバーガーを食べていたのだ。
急に、カメラが回って焦ると思いきや、アナウンサーは冷静にその食べていたバーガーを横に置き、青いハンカチで口を拭くと、何事も無かったかのように、またニュースを読み始める。

「この方、行儀は悪いです」
俺の後ろで立っていたエリスは、そう言葉を漏らす。
母さんも、見ていたが特に反応は無い。が、おそらくはエリスと同意見だろう。

「思うんだが、エリスも座ったらどうだ？」
「いえ、お気遣いなさらないでください。私はメイドですから」
ずっと気になっているのだが、エリスは俺が食事をしている時は、俺の後ろで立っている。
俺が食事を終えると皿を片付けようとするし、おかわりを取りに行こうとすると、すぐに私が行きます、と飛んでくる。

「いや、座ってテレビでも見ていたら、いいと思うぞ」
「そうよ、エリスちゃん。景だって、皿の片づけくらい1人でできるし」
「テレビはここからでも見えますし、メイドがだらだらとしているのはおかしいですから」
俺と母さんが、そう言うがエリスは休んでいるのが、あまり好きではないらしい。
そんなエリスを、見ていた母さんが、ふと何かを思い出したように言った。

「そういえば、エリスちゃんの服って、それだけよね？景ちゃん。エリスちゃんの服を一緒に買いに行ってあげなさい」
この母さんの一言から、日曜日は始まった。

「エリスはどんな服がいいんだ？」

俺とエリスは、今駅前のデパートへと向かっている。
もちろん、エリスの外出用の服や靴、日用雑貨を買いに行くためだ。
俺は、女性の服のことはさっぱり分からない。
恵麻にメールをしてみたら、今日は遊びに行っているらしい。
由真も一緒だと言うので、俺の知り合いの女の友人はもういない。
仕方がないので、俺とエリスの2人で買い物に行くことにしたのだ。
母さんと行けばいいと言ったが、俺がご主人様だと母さんに言われ、
結局俺がついていくことになったのだ。
だが、俺は何か母さんに言い忘れているような気がするのだ。

だが、今俺は既に精神的に疲れている。

それは、人目を引くエリスの容姿に問題があった。
どう見ても、日本人に見えないエリスは男女問わず、振り返られるのだ。
同時に俺にも好奇、嫉妬、羨望、さまざまな視線が突き刺さる。

「服でしたら、メイド服がありますのに」
「いや・・・それだと外歩けないぞ。ただでさえ、エリスは目立つからな」
「今の私の格好って、そんなに変でしょうか？それに景様はお疲れ

のようですが、どこかで休みましょうか？」
別に今のエリスの服装が変だと言うわけではない。
母さんの白のワンピースを借り、その上にカーディガンを羽織っているだけだ。
メイド服では、黒のワンピースなので印象がまた違って見える。
どちらかと言えば、その銀髪と蒼の目が問題なのだ。
それに加えて、人並み外れた美少女ということもある。
エリスの気遣いはありがたいと思うが、心労の原因もお前なんだけどな。

「いや、さっさとデパート行って、帰るぞ」
「はい、景様」

こうして、俺たちはデパートへとやって来たのだ。

「・・・バーゲンセールか」
デパートに着くと、そこはまさに戦場そのものだった。
１０００円均一の洋服の籠の前は、人山の黒だかりの状態だった。
「これは私の！！」
「あんたね、その汚い手を離しなさいよ」
「どきなさい、邪魔よ」
「ああ？ババアはすっこんでろ！」
そして、少し離れたエレベーター付近には荷物を持たされた夫や退

屈そうな子供が数組いた。

「おとーさん、暇だよう」

「もう少ししたら、お母さんが帰ってくるからな」

そう言って、娘の頭を撫でる知らないおじさん。

荷物が多すぎて、動くに動けないようだ。

「・・・今日、来ないほうがよかったか」

俺が、人ごみにうんざりしていると聞き知った声で声をかけられた。

「あら？景ちゃん。こんな所で会うなんて奇遇ね」

「ああー、景」

「おばさん、琴美ちゃん。こんにちは」

振り返ると、そこにいたのは恵麻のおばさんと妹の琴美　（ことみ）ちゃんだった。

皆が、俺のことを景と呼ぶからいつの間にか琴美ちゃんもそう呼ぶようになった。ちなみに、お兄ちゃんと呼ばれていた頃もあった。

「あら？エリスちゃんも一緒なのね。買い物？」

「ええ、まあ。エリスの服を買いに来たんです」

「ねえ、景。後ろの美人の外人さんは誰なの？もしかして、・・・恋人！？」

そういえば、琴美ちゃんには説明してなかったな。

いきなりエリスを指差し、叫ぶ琴美ちゃんを見て俺はそう思った。

だが、いきなり知らない人に指差され、戸惑うエリス。

・・・縋る様な目をして、こっちを見ないでくれ。

「いや、こいつはうちに来たロボットでエリスと言うんだ」
「えー、景。嘘が下手だよ。やっぱり、恋人なんでしょ！」
端的に説明をしたのだが、全く相手にされなかった。その上、さらに勝手に興奮している。
琴美ちゃんの後ろで、笑いをこらえるのに必死なおばさん。
妙な所に食いつく琴美ちゃんを見ていると恵麻とは似たもの姉妹なんだと感じる。
笑いをこらえるのに必死なおばさんは助け舟を出してくれそうにない。
だが、もう1人助け舟を出してくれる存在がいた。
「いいえ、景様のおっしゃることは事実です」
それはエリスだった。
「私は、ハンドメイデン社から景様のお世話をするためにやって来た、メイド型ロボットです」
「ええっ！？もしかして、あの？」
指示代名詞で、エリスに問う琴美ちゃん。
「はい」
それに対して、意味を分かって答えているのかは分からないが、自信たっぷりに答えるエリス。
新たな誤解が生まれないかと心配でならない。
琴美ちゃんは、少し考えると俺の方を向いて言った。

「景、あのメイドロボが当たったんだ・・・。お姉ちゃんの話は本当だったんだね」

心なしか残念そうに聞こえる。

とりあえず、意思の疎通はできているようなので一安心だろう。

「・・・琴美ちゃん、知ってたのか？」

どうやら、恵麻が妹に話したようだった。

この分だと、明日には学校中に広まっている可能性は否めない。

恵麻が妹に話しているくらいだ。由真は、学校中に話しているだろうな。

あいつは、おしゃべりだからな・・・。

俺が、最悪の可能性を予想していると、琴美ちゃんが心配そうに俺の顔を覗き込んできた。

「うん。お姉ちゃんがね、景のところにメイドさんが来たって言ったんだよ。何か不満そうだった」

「・・・そうか。ところで、恵麻はどこ行ってるんだ？」

「お友達と遊園地だって。私も行きたかったなあ。今度、景が連れってってよ」

「恵麻とでも、行ってくれ」

琴美ちゃんが俺に遊園地にせがむ。

俺は、何故だかこの琴美ちゃんに懐かれている。

小さい頃から、よくママゴトに付き合ったせいかもしれない。

決まって、琴美ちゃんが奥さん、俺が旦那さん、恵麻は小姑の役だった。

今思えば、何故小姑の存在を幼い琴美ちゃんが知っていたのかは分

からない。

「あらあら、モテモテねえ」

「・・・」

ん？俺がモテモテ？

俺がぼーっとしていたからだろうか、俺の右腕を不満そうな顔をしている琴美ちゃんが引っ張っていた。

そして、反対側の腕を・・・・。

「何やってるんだ？光」

「何って、いちゃついてるんだけど？」

「疑問に疑問で返すな」

同じクラスの西方　光が引っ張っていた。

「何で、お前がいるんだ？」

「別にいいじゃない」

そして、俺の体にくっ付いてきた奴がいた。

「景様。私も失礼しますね」

「エリス・・・。何でお前までくっつくんだ？」

「・・・うーん。皆様がくっついていますし、それに景様は私のご主人様ですから」

「理由になってるのか、それ？」

今俺の状況はと言うと、右腕を引っ張る琴美ちゃん。まだ、幼さは残るが可愛らしい顔をしている。
左腕を引っ張る光。こいつは男だが、知らない奴から見れば美人の女にしか見えないだろう。
後ろから、俺を抱きしめるようにくっついているエリス。見た目が良く、さらに外人のように見えるから兎に角目立つ。

・・・いい見世物だな。

事実、俺たちの方を、買い物を終え戦利品を手にしたおばさんたちが興味深げにじろじろと見ていた。
何と言っても俺は美少女たちに囲まれており、その上、傍から見れば俺を巡って引っ張り合いをしているように見えるのかもしれない。
現実は大きく違っているのだが。

「とりあえず、離れろ!!」

恥ずかしさが臨界点に達した俺は、周りの迷惑を顧みることなく叫んだ。

その後、俺が突然叫んだことに驚いた3人は同時に離れてくれた。
そして、俺が光に2人を紹介すると納得しこう言ったのだ。

「なーんだ、そうだったの？これが、あのメイドロボなの？人と何ら変わりがないじゃない。それに、そっちの女の子は藍羽さんの妹さんなんだぁ」

が、納得していない奴もいた。

「景！！この美人さんは誰？」

琴美ちゃんだった。

確かに、琴美ちゃんは初めて光を見るからな。

だが、いつもの琴美ちゃんはもっと大人しいはずだ。よっぽど遊園地に連れて行ってほしかったのだろう。

何だかんだ言っても、子供っぽさはまだ抜けきっていないからな。

「琴美ちゃんは、光のことは知らないよな。こいつは、西方　光。俺と同じクラスの・・・男だ」

「・・・景、冗談きついよ」

「景の言うことは、本当よ。ほらっ」

さすがに俺の言うことは信じられなかったようで、ジト目で俺を見ている。

だが、全く信じてもらえなかった光は、琴美ちゃんの手を掴むと自分の胸にその手を持っていった。

「ね？男の子でしょ」

「・・・本当ですね。ぺったんこです。しかも、私よりもないね」

とりあえず、別の所に持っていかなくてよかったと俺は思う。

それは、確実に犯罪だ。

それにぺったんこと言っているが、琴美ちゃんは比較対象が男だということを忘れているのだろうか。

「・・・あなたも変わらないけどね」

「へえ」

2人は険悪な雰囲気になっていくのは、誰の目にも明らかだった。
琴美ちゃんの目は据わっているし、光は冷静を装っているが手が震えている。

「あらあら。どっちの方があると思う？何なら私も比較対象にしてもいいのよ？」
「おばさん、俺に話題を振らないでください」

あからさまに、俺を巻き込もうとするおばさん。
その表情を見る限り、悪意に満ちている。

「エリス。そろそろ行くぞ。無駄な時間を過ごすのはもったいない。
琴美ちゃん。光。それにおばさん。失礼します」
「あ、はい。それでは、皆さん失礼しますね」

俺は、おばさんに会釈をした。
そして、俺とエリスはその場を後に・・・できなかった。

「ちょっと、景ちゃん、待ってくれる？」

おばさんに呼び止められたのだ。
友人だったら、軽く無視できるのだが、さすがに弱みを握られている人を無視するのはよくない。

「何ですか？」
「エリスちゃんの服を買いに来たって、言ってたわよね？もしよかったら一緒に選んであげようか？」
「本当ですか？だったら、助かります。俺、女物の服はよく分からないので」

「やっぱりね。エリスちゃんが着ている服、柚葉さんのでしょ」
おばさんは、そう言って苦笑した。
エリスの服をどう選ぶか悩んでいた俺にとっては、天の助けだ。
「琴美！景ちゃんがエリスちゃんの服を買うのを手伝うわよ」
「え？あ、はーい」
光と睨み合っていた琴美ちゃんだったが、おばさんが呼ぶとすぐにこっちへやって来た。
そして、おばさんは光の方を向くとこう言ったのだ。
「折角だから、あなたもいらっしゃい」
「いいんですか？」
「ええ。大勢で買い物した方が楽しいでしょ？」
結局、おばさんは光も誘って、俺たちは5人で買い物をすることになったのだ。

「うーん、私はこっちの方がいいと思うなあ」
「やっぱり・・・、これじゃない？」
「2人とも、こっちの方がいいわ」
「「それは、おばさんっぽいと思うよ（思います）」」
「そうかしら・・・」
何だか長くなりそうだ。
どこかで休むか。
俺が、服を選ぶのに夢中な3人を横目に休む場所を探そうとした時

だった。

「景様。これはどうですか？」

目の前に障害物、もといエリスが飛び出してきた。
そして、手に持っている服を俺に見せる。

「それ、メイド服だろ。どこにあった？と言うより、同じ物を買ってどうする」
「それもそうですね」

そう言って、また戻っていくエリス。
俺は、溜息をつくしかなかった。
エリスの趣味は、あんな服なのか？
まあ、プログラムなんだろうが。

「まあ、その辺でもうろつくか」

俺は、1人他の場所へと移動することにした。

「兄ちゃん、これどうだ。新発売のタコのないたこ焼きだ！！」
「おっさん。それは、たこ焼きじゃないぞ」

俺は、デパート地下1階の食品売り場に足を運んでいた。
そこで、店員のおっさんに呼び止められたのだ。

そして、食わされた牛肉入りたこ焼き。
タコが入っていないのに、たこ焼きというのが売りらしい。

「兄ちゃん、買っていくかい？」
「いや、遠慮しておく」
「そうかい、残念だ。ま、1ヶ月に1度新商品祭はやってるから、また来いよ。今度は、兄ちゃんに買わせてくださいと言わせてやるからな」
「期待せずに待っておくよ」

1ヶ月に1度か。
たまには、外に出てみるのもいいもんだな。
その後も、俺は新商品祭を満喫していた。

「・・・しまったな。買いすぎた」

俺が気がついたときには1時間半も時間が経っていた。
試食を片っ端から食べていたから仕方ない。

また、何点かの商品を買っていたせいでもある。
なかなか美味な物が多かったが、特に気に入ったのは味噌大福だ。

来週は、珍味展があるらしい。
俺は1人で行こうと思った。
幸樹や恵麻たちはどうしてだか、俺の趣味を理解してくれないからな。

さっさと、戻らないとまずいな。
俺は急いでエスカレーターへと向かった。

第１３話：洋服と充電器　前編（後書き）

最近の時事ネタを１つ入れてみたりしました。
若干の変更・想像がございますが・・・。

今回の話は、２話構成でお送りします。

そして、前回の更新で５０００アクセスを達成しました。
これも、来ていただいた方々のおかげです。
本当にありがとうございました。

第１４話：洋服と充電器　後編（前書き）

２００７．６／２０、本文加筆。
２００７年８月１３日　琴魅の呼び方修正。

第１４話：洋服と充電器　後編

「景様・・・。どこに行かれたのでしょうか？」

俺が、３階の洋服売り場に戻ると、心配そうな顔をしたエリスが椅子に座っていた。

心配されてたのか。謝るべきだよな。

俺は、エリスの前へ行って言った。

走ってきたので、息が切れているがそんなことはお構い無しだ。

「はあはあ・・・。エリス、すまん。暇だったから、色々と買い物をしていたん・・・だ」

が、俺が言い終わる前にエリスに抱きしめられた。

抱きしめるその手はかすかに震えていた。

「景様・・・。ご無事でよかった。もし、景様に何かあったらと思って心配していました。・・・それに、景様がいらっしゃらなくて寂しかったです」

「本当に悪かった」

エリスは、やっぱり優しいんだな。

俺はエリスが涙目になっているのを見て、黙って新商品祭に行ったことを後悔した。

今度からは、エリスに言ってから行くか。

「・・・ところで、景様。その袋は何ですか？」

エリスは、俺を放すと俺の持っていた袋を指差して言った。

「ん？これか。地下1階で新商品祭をやってたんだ。そこで色々買ったんだ」
「景様、楽しそうです。でも・・・何ですか？その赤いパンは？」
俺はエリスも興味を持ってくれたのかと思い、袋の中身を見せた。
エリスも興味があるようで俺はうれしく思った。
が、これには1つ問題点があった。
「イチゴをパンに練りこんだものらしい」
「そうなのですか？・・・どこかにありそうですね」
「・・・それを言うな」
エリスの的確な指摘に言い返すこともできなかった。
おばさんたちに見られるとまずいので、鞄の中に買ったものを仕舞う。
「ところで、おばさんたちは？」
「・・・」
俺は、辺りにおばさんたちがいないので聞いてみた。いくら何でも、服を選び終えているだろう、そう思った。
だが、エリスは無言で服売り場を指差す。
「絶対、これ！！」
「趣味が悪いわよ。こっちの方がいいんじゃない？」
「男のくせに、黙っててよ」
「何ですって！？」

「・・・ずっと、あの状態なのか？」
「はい」

エリスはロボットだから疲れないはずなのだが、それでも疲れているように見えた。
エリスはこっちの服が似合うと言い争う琴美ちゃんと光。
おばさんは、どこからか椅子を持ってきて座っている。
そして、こっそりと服を籠に入れている。

「ちょっと！？お母さん、何そんなの入れてるの！？」
「そうですよ。そんなの着たら、おばさんっぽくなるってあれほど言ったじゃないですか」
「失礼ね。少し落ち着いている方がいいのよ。全く、派手で露出の多いのばっかり選んで・・・。恥ずかしいわ」
「「そんなことないもん、ねー」」
「・・・そういうとこだけ、結託するのね」

エリスを放り置いて言い争う3人を見ていて、これだと俺とあまり変わらないなと苦笑する。
もちろん、黙ってどこかに行っていた俺とこの3人とでは根本的に次元が違うのだが。

あまりにまだ時間がかかりそうな3人を見て、これではいつまで経っても埒が明かない。
俺は、そう思ってエリスに言った。

「エリス。自分で選んだほうが早くないか？」

エリスは、俺の言葉にどうしようかと考えている。

たぶん、おばさんたちが選んでくれていることに対して遠慮があるのだろう。
が、俺の考えを遥かに上回る答えが返ってきたのだった。

「景様。・・・一緒に服選んでもらえませんか？メイド服しか、私知らないんです」
「・・・」

俺は、開いた口が塞がらなかった。
もちろん、俺は女物の服のことは詳しくない。
俺が選んで、ダサい服になったりすれば折角買い物に来た意味がなくなってしまう。
エリスが服に詳しくないのは、想定外だった。メイド服しか分からないのは、問題外だ。
きっとエリスのデータ担当は後先考えずに詰め込んだに違いない、俺はそう確信した。

結局、俺とエリスはおばさんたちが選んだ服の中から数点を選び、買うことにした。
ほとんどエリスは服の違いが分からないので、琴美ちゃんと光、おばさんが選んだものを1点ずつ出してもらい、1つずつ選んでいったのだ。
それでも、かなりの量があったことに驚きだ。

15分ほどかけて服を選ぶと、残りを元の場所に戻した後レジでお金を払う。
エリスの服は3万程度で済んだな。おばさんたちが選んだ服だから俺が選ぶよりは問題ないだろう。

「それじゃあ、次は・・・」
「何故、俺を見る？」
意味ありげな視線で、俺を見る光。
おばさんは、同様の視線を向けてくるが、琴美ちゃんは顔が赤くなっている。

「下着売り場に行くわよ」
「そうか。俺は待ってるから後は任せた。エリス、終わったら迎えに行く」

少し言葉を溜めた後、光は言った。
ついて行くのもおかしい気がするし、どうせ時間もかかるだろうからデパートの外でも行くかと俺は思った。

「・・・景様はついて来てくださらないのですか？」
「いや、普通は下着売り場に男はついて行かないと思うぞ」

俺はそう言ったが、エリスはくいくいと俺のシャツを引っ張ると、下着売り場の方を指差した。

「景様。男性の方もいらっしゃいますよ」
「・・・」

そう、確かにいることはいた。
カップルのようだが、俺はどうかと思うぞ。
そのカップルはあろうことか、女のほうが着替えて彼氏であろう男がカーテンの中を覗いていた。
・・・何て都合の悪いときにいるんだ。

俺は、頭を抱えたかった。
そして、さらに俺の悩みを増やす奴らが近くにいたのだ。

「景。何、妄想してるの？・・・・エッチ、きゃっ」
「あら。私だったらいくらでも見せてあげるわよ？」
「・・・お前らな」

むしろ、俺の方が何を妄想しているのか問いたい。
光は冗談なのか本気なのかよく分からないが、とりあえず無視だ。
それに男だろうが。

「だったら、景ちゃんもつけてみたら？」
「はい？」

俺たちが、くだらないやり取りをしているとおばさんが何を思ったのか、とんでもないことを言い出したのだ。

「景様。お揃いの物を買いませんか？」
「景・・・。そ、そんな趣味が！？」
「へーえ。よく見ると似合いそうね。・・・それに、女装したら結構美人になりそうね」

おばさんの発言に、エリスは俺に一緒に行こうと言い出す。俺にはその真意が掴みきれない。
琴美ちゃんには軽蔑の視線で見られ、光は何を思ったのか、にやにや笑っている。
その視線からは、悪い予感しかしない。
そして、悪魔の宣告が聞こえたのだった。

「じゃあ、景ちゃん。行くわよ」

俺には、どう聞いても逝くわよとしか聞こえなかった。
その手は、がっしりと俺の腕を掴んでいた。
その後、下着売り場におばさんたちが俺を引っ張って連れて行こうとしたが、全力で抵抗し、難を逃れた。

・・・おばさんや琴美ちゃんを殴るわけにもいかないから、最後は悩んだ末にエリスに頼んで助けてもらったんだがな。

「おばさん、すいません。昼飯を奢ってもらいまして」
「いいのよ。気にしないで」

服を買うだけで、午後1時を過ぎてしまい、俺たちはデパートのレストランで昼食をとることにしたのだ。
服を選んでもらったお礼として、昼食を奢らせてくださいと言ったのだが、おばさんに色々と迷惑をかけて無駄に時間を使わせたから私が奢ると制された。
おばさんのことだから、きっとそれは口実に過ぎないんだろうけど。
そういう事情もあって、俺はおばさんにご馳走になっている。

そして、食事も終わり俺が水を飲んでいると、鞄から妙な音が聞こえてきた。

「ん？」
「誰からなの？」

それは携帯が鳴った音だった
鞄から取り出し、ディスプレイを見ると母さんからのメールだった。

光が気になったのか、聞いてくる。
「いや、母さんからのメールだ」
「何て書いてあるの？」
「至急帰ってこいと」

よく分からないが、緊急事態のようだったので、俺とエリスはおばさんたちに礼を言うとデパートを出た。
急いで、家に戻ると母さんが家の前で待っていたのだ。

「母さん！？」
「景ちゃん。今日、何か工事があったの？」

俺は、ようやく思い出したのだ。

「・・・そういえば今日、エリスの会社から荷物が届くことを母さんに言うのをすっかり忘れていたんだった」
「・・・景ちゃん、そういうことは先に言ってね」

母さんは、そう言うと俺に文句を言い始めた。
母さんが、俺のことを景ちゃんと呼ぶときは、比較的真面目な話ではないときだ。
だから、大体はちゃん付けで呼ばれている。
もちろん、何度も止めてくれと言っているが、一向に聞いてくれはしない。

「いい？景ちゃん。こういうことは景ちゃん1人で決めることじゃないの。今度からは、ちゃんと私にも話してね。・・・あ、お父さ

んは別にいいからね」

俺が、母さんにこのことを言うのを忘れていたために怒られていると、エリスは知り合いでも見つけたのか玄関付近の女に声をかけた。父さんの許可はいらないのか？改めて、俺は父さんの力のなさを感じた。

「三津刃さん、お久しぶりです」
「エリス。元気にしてた？」
「はい。あ、私のご主人様を紹介しますね」

そう言って、２人はこっちへやって来た。

「この方が、私のご主人様、有栖　景様です。あちらが、景様のお母様。景様、こちらがハンドメイデン社開発部主任研究者の三津刃　甘奈さんです」
「君が有栖君ね。よろしく」

そう言って、手を差し出す三津刃さん。
主任研究者という割には若く見える。

「でも、いきなり押しかけてごめんね。あ、工事終わったみたい」
「リフォームのですか？」

三津刃さんが話していると風呂場から、男の声が聞こえてきた。
どうやら工事が終わったようだ。

「ええ。風呂場と、エリスの部屋の工事よ」
「エリスの部屋？」
「そうよ。見てみる？」

そう言って、ウィンクをすると彼女はエリスの部屋に俺を案内した。
エリスは、母さんと話をしていたので、来なかった。
途中の廊下で、三津刃さんがふいに振り向いて聞いてきた。

「エリスはいい娘でしょ？まだ、不慣れな所もあるとは思うけど許してあげてね」
「いえ、とても優秀だと思いますよ。ただ、初日に追い出そうとしましたが・・・」

俺は苦笑いを浮かべ言った。俺としては、軽い気持ちで言ったのだが、その言葉を言った時、ふいに三津刃さんの顔が暗くなった気がした。
言ってからしまったと思ったが、言ってしまったことを覆せるはずもない。
だが、それもそうだろうと思う。この三津刃さんという人は主任研究者、つまりエリスの母親のような人だ。親が子供の心配をするのは、むしろ普通なことだ。
俺は、切ろうとしていた言葉を続けた。

「でも、今では大切な家族だと思っています。まだ、出会って3日ですが、それだけは本当の気持ちだと思っています」
「・・・」

俺は、その表情の変化を見て、この三津刃さんはエリスのことが心配なのだと感じた。研究者としてではなく、1人の人間、いや、母親として。
だから、俺も本心を打ち明けた。
三津刃さんは、黙って俺の目をじっと見ながら俺の言葉を聞いていた。それはまるで、俺のことを試しているように思えた。

その沈黙は、長いようで短かった。

「よかったわ」

三津刃さんはふっと表情を和らげた。

「なら、安心ね。これからもエリスのことよろしくね」

「分かっています」

エリスをよろしく、この言葉の意味は何か深い意味がある。そんな気がした。

が、次の言葉が全てを台無しにした。

「でも、手出したら承知しないからね」

「・・・出すか！」

つい、丁寧な言葉で話すのを忘れてしまった。

俺でも、初対面の人間に丁寧語くらいは使う。何故かは知らないが、使わないという印象が強いようだが。

それにしても、この変わりようは一体何なんだ？素が出たか、場を和ませようとしたのだろうが、初対面の人相手にそれは、むしろ逆効果だと思うぞ。

1階の一番奥にあるエリスの部屋と思われる部屋に着くと、ドアを三津刃さんは開けた。

そして、俺は部屋の主のエリスよりも先に部屋に入った。

俺じゃなくて、エリスを普通は連れてくるべきだろうと思う。だが、そんなことを吹き飛ばす衝撃が俺を襲った。

「・・・何ですか、これ？」

俺が驚いたのは、部屋にあった巨大な充電器のような物だった。
それは、俺のベッドよりも大きく、部屋の半分はこれで埋まっている気がした。

「エリスの充電器よ。1回7時間も充電すれば、2週間は動くから安心して。電池ももっといい物を開発中だから、そのうち1ヶ月以上充電しなくても済むはずよ」
「・・・そうですか」
「また、何か役立つものができたら持って来るからね」

そう言って、胸を張る三津刃さん。それにまだ何か持ってくる気らしい。
だが、もう1つこれだけ大きな充電器があったらエリスの居住空間はどうするのかという疑問が湧いた。それに何故俺しか連れてこなかったのかということも。

「三津刃さん、エリスの居住空間はどうするんです？それに何故エリスを連れてこなかったんですか？」
「エリスに見せたって、大して驚かないから。新鮮な反応がたまには見たかったのよ」
「・・・そうですか」

どうやらただ単に、一般人である俺の反応が見たかっただけらしい。
俺は、呆れてしまい同じような反応を示す。
それにエリスはこういうのを見慣れているから、大して驚かないという。何と言うか、育ちの違いを感じる。

「この部屋は、まあそれなりに広いから、ほらっ。まだスペースは結構あるわよ。それに、部屋が狭くて、充電器しか置けなかったら、エリスは君と寝ればいいのよ。だって、ご・主・人・様でしょ。メイドと寝ても、法律的には何の問題はないわ」
「倫理的、道徳的には大いに問題ですけどね」
「意外と堅物ね」
「軟派よりはましだと思いますよ」

悪戯っぽく俺の耳元で囁くように言う三津刃さん。
本来であれば、ドキドキするのだろうが、この人にされても何故かドキドキしない。
と言うよりも、ご主人様という単語が引っ掛かるからだろう。この言葉に俺はアレルギーを感じてならない。
そんな俺は三津刃さんの最後の言葉を聞いてはいなかった。

「・・・そういえばまだ増えるって、これ以上増やしたら、一体どこに置くつもりなんだ？」

「・・・もしかして、色々と女性に興味のある年齢の男の子に完全無視されるなんて、研究ばっかりで女としての魅力がなくなったのかな。こうなったら、次はエリスの外部オプションを開発して・・・。って！？私の考えの行き着く先って、結局こうなのね・・・」

俺は、そのうちこの家は近未来の機械で溢れてしまうのではないかと、巨大な充電器を見て思わずにはいられなかった。

俺たちが部屋から出る時、三津刃さんがやけに元気がなかったが、何かあったのだろうか？
だが、聞いてもはぐらかされただけで答えてはくれなかった。

「あ、そうそう。私のことは、甘奈でいいからね。それに普通に話していいからね。また、来るから。・・・今日は楽しかったかな？」

最後に、こう言って三津刃さんは帰っていった。

俺は、最後の一言が気になった。

そして、俺は一緒に見送りをしていたエリスに言った。

「なあ、エリス。あの人もお前を可愛がってくれていた人なのか？」

「はい。甘奈様は、色々なことを教えてくださいました。この前の電話でも、ご主人様と服を買いに行くときは、下着売り場にも連れて行くと、ご主人様が喜ばれるとおっしゃっていました」

「・・・」

・・・あの女の差し金だったのか。

だから、今日わざわざ確認に来たのか。

エリスの時折起こす問題行動はこの人たちのせいだと、俺はこの時理解したのだった。

「景様。夕日がきれいですね」

エリスは、知り合いに会えたためか、うれしそうだ。

「そうだな。・・・そろそろ家に戻るぞ」

「はい、景様」

まあ、仕方ないか。

また来ると言っていたが、今度も余計な問題を持ってくる。

そんな気がした。

こうして、俺の休日は終わったのだった。

第１４話：洋服と充電器　後編（後書き）

タイトルの意味はそのまんまでした・・・。

本編３日目終了です。
下手をすると１ヶ月に１日進まないときもあったりして・・・。

次回は、月曜日の更新です。
気が向いたら、早まります。

外伝２：彼女たちの休日（前書き）

２００８／６／３　全文差し替え

外伝2：彼女たちの休日

その日、上総野　由真と藍羽　恵麻は、巨大なテーマパークへと遊びに来ていた。

しかし、彼女たちは2人ではなかった。

このテーマパークのチケットを持っている壬生　亜樹乃。

学校で名前を知らぬ者はいないとまで言われる合唱部の唯一女性の歌姫、明月院　陽菜。

そして、生徒会長の霧生　衣。

いずれも、同じ高校に通う5人の少女だった。

そもそもテーマパークに来ることになったのは、ファミレスで偶然にも亜樹乃と恵麻、由真が会ったことが始まりだった。

ただ、チケットは5枚あり、恵麻が衣を、由真が陽菜を誘って5人となった。

たまの休日、テーマパークに遊びに行くのも悪くないと今回のチケット担当の亜樹乃は思っていた。

・・・テーマパークの入口に来るまでは。

「うわっ、あり得ない、あり得ない。すごい疲れそう・・・」
既に、彼女は戦意を喪失しつつあった。
しかし、他の４人は違っていた。
「おーい、亜樹乃。早く並ばないと遊べなくなるぞ」
「明月院さん、私、藍羽　恵麻って言います。今日はよろしくね」
「こちらこそ。私は明月院　陽菜です。仲良くしてくれると嬉しいな」
「・・・まったく子供ですわね」
亜樹乃の隣には衣が１人残っているだけであり、その衣も早く行きますわよと亜樹乃をせかす。
「何で、そんなにみんな元気なの？」
彼女の問いに、答える者は誰もいない。
「亜樹乃、ぼやぼやしてるとおいてくぞー」
代わりに、由真の彼女を急かす声が返ってきただけだった。
「・・・何で、そんなに元気なの？」
もう１度言ってみたが、誰からも返事はなかった。

「藍羽さんの、そのリボン可愛いね。どこで買ったの？」
「これは、小さい頃に誕生日プレゼントで貰った物なんだ～」

たしかに、恵麻はいつもと違い髪の左右に青いリボンで結んでいる。
彼女は、髪に何かをアクセントを付けることはしないはずなのにと、亜樹乃は思った。

何か、彼女の心境に変化でもあったのだろう。

・・・それって、恋かも。

後でそれとなく聞いてみようかな。彼女はそう思った。

少し楽しみができたと、彼女なりにわくわくしていると不意に背中をポンと叩かれた。

「亜樹乃。何ぼんやりしてるのさ？まずは、定番のあれに乗ろう」

そう言って、由真が指差したのは、このテーマパークでも屈指の絶叫系のアトラクションだった。
最近、オープンしたばかりで人気が高いため、１時間２時間は平気で待つという。

しかし、待つのが苦手な亜樹乃はどうしても尻込みしてしまう。

亜樹乃が断ると、由真は残念そうにそっかと言うと、他の3人にも声をかける。

「んー、じゃあ乗りたい人いる？」

「私乗ってみたいですわ」

返事をしたのは、衣ただ1人。

恵麻と陽菜は、ああいうのは苦手だからと断る。

「私たちは、他のアトラクションを見て回っているから、2人で乗っておいでよ～。それに携帯に連絡してくれれば、すぐに合流できるでしょ」

「そうですね、藍羽さん。壬生さんも、私たちと一緒ですね。どこ行きたいですか？」

「それじゃあ、あたしと衣先輩はあれに乗って来るから」

「それでは行ってきます。後ほど、連絡差し上げますわ」

こうして、絶叫系が得意な2人とそうでない2人のグループに分かれることになった。

「でも、こうしてみると広いよね～」

「そうだね。藍羽さん、つぎは、ここに行ってみない？可愛いぬい

ぐるみがいっぱいありそうだよ」

由真と衣と分かれた3人は、お土産物屋が立ち並ぶテーマパークの入口の方へと戻って来ていた。

結局、彼女たちはアトラクションには入らず、専ら買い物をしていた。

そしてまずは、このテーマパークの動物の耳を模ったバンドを買うと、それを3人でつけていた。

「2人ともよく似合ってるよ～」

「ふふっ、ありがとう。でも、藍羽さんもよく似合っているよ」

「何だか子供の頃に戻った気がするね」

彼女たちは、和気藹々と話に花を咲かせる。

部活動の話、最近の芸能人やドラマの話。

亜樹乃のアルバイトを転々と変わった話、恵麻の占いの話。そして、陽菜の旅行の話。

彼女たちは、時間を忘れて会話を楽しんでいた。

しかし、その忘れていたはずの時間を思い出させてくれたのは、彼女たちにとって決して良い人物ではなかった。

「ねえ、君たち女の子だけ？よかったら、僕たちと一緒にどう？」

「おっ3人とも可愛いじゃん」

所謂、ナンパである。

「ごめんなさい。私たち、友達と合流するので」

亜樹乃が断りを入れて、2人を連れてさっさとこの場を離れようとするが、相手が大抵しつこいのはお約束である。
当然のように、進路を塞ぐと下手に出つつも、その視線は獲物を狙う獣のぎらぎらとしたそれだった。
どうやら彼らはクールではないらしい。

「えー、それじゃあ、俺たちも一緒に探してあげるって」
「そうそう。こういうのは、人数多い方がいいっしょ」

相手は男が4人で、女性3人では敵わないということは亜樹乃たちにはすぐに分かることだった。
運動部に所属するのは、亜樹乃1人で、恵麻と陽菜は運動は得意な方ではない。
逃げたところですぐに捕まるのは、目に見えていた。周りに助けを求めようにも、こう人が多いと、誰かが助けると思って誰も見向きもしてくれないだろう。

八方塞となって亜樹乃たちは、弱り果てていた、その時だった。

「あっ、いましたわ」
「3人ともこんな所にいたのか。まったく、携帯くらい見なよ」

タイミングのいいことに、彼女たちのもとに衣と由真が戻ってきた。

彼女たちは、3人から連絡がないことを気にして、この3人はたぶんお土産物を売っている入口あたりにいるだろうと由真が踏んで、探していたのだ。
そして、男たちに言い寄られていた3人を見つけたのだった。
衣と由真は、亜樹乃たちを庇うように男たちと対峙すると、鋭い敵意剥き出しの視線をぶつけた。
さらに、恵麻たちに手を伸ばそうとしていた男の手を叩き落とすと、その男の体をドンと押して距離を開ける。
「ちょっと。あたしたちの連れに手出さないでくれる？」
しかし、これで諦める様であれば、端から彼らはナンパなどしないだろう。
この2人も一緒に連れて行こうと、無言で頷き合うとへらへらと2人も誘う。
「へえ、君たちも可愛いじゃん。暇なら、お昼でも一緒にどう？」
無論、このような誘いに乗るような女性はこの場に1人もいない。
5人を代表するような形で、衣は、断わりの言葉を冷たく言い放った。
「却下。この大人数で食べられる場所なんて、ここにはありませんわ。それに、今日は私たちの交流を深めるための集まり。あなたたちは邪魔ですから、どこか行ってくださる？」
これには、今まで我慢を重ねていた男たちもカチンときたようだった。
その中でも、金髪の1番気の短そうな男が衣に詰め寄ると衣を見上

げる形でまくしたてた。

「お前らに用はねえんだよ、このデカ女。俺たちは後ろの子たちと仲良く喋っていたのに邪魔しやがって。『わたくし』とか『ですわ』とかふざけてんのか？」

ついに本性を現した男1人に動じることなく衣は鼻で笑った。

「あなたたちは4人で仲良くしていればよろしいのですわ。だいたい、容姿も話術も大したことないのに、ナンパだなんて笑わせてくれますわね。集団でか弱そうな女の子を無理矢理連れて行こうなんて、男性として情けない。女性の扱い方を1から勉強してらっしゃいな」

完全に上からの目線であるが、悲しいかな、男の身長は170ある衣に比べて10センチは低いので、本人は意図していなくても上からの目線になってしまう。

その上、衣には全く歯牙にもかけてもらえずじまいで、傍から見れば情けないことこの上ない。

自分が情けなくなったのか、それとも衣の態度が気に食わないのか、あるいは両方か。

彼自身もよく分かっていないのかもしれない。彼は、あろうことか衣に対して殴りかかろうとした。

「この野郎っ！」

「おいっ、それはやめろ！」

何とか男の仲間の1人が、殴りかかろうとした男を羽交い絞めにして止める。

衣は、それを意外そうに、しかし悠然と眺めていた。
殴りかかろうとした男は、怒りが収まらないようだったが、仲間に周りを見るように促され、周りをちらっと確認する。そして、イライラしたように吐き捨てた。
「・・・ちっ、行くぞ」
周りには、人だかりができていたために、まずいと思ったようだ。男たちが、去っていくと人だかりも自然と姿を消していく。
辺りが、いつもと変わらぬ流れに戻ると由真は感心したように衣に言った。
「・・・衣先輩、すごいなあ。よくあんなのに1人で立ち向かっていって。あたしは、ちょっと無理かも」
「そんなことありませんわ。いざとなったら、私のボディーガードが対応してくれますし、あの程度なら私1人でも大丈夫です。これでも、護身術くらいは身につけていますから」
へえ、と由真は衣の話を聞いていた。
そういえば、この人、剣道部の副主将だもんなと由真は1人納得していた。上背に加えて度胸もあるし、確かにその辺の軟な男には負けない気がするのだ。
ちなみに上背に限るなら、由真の方がさらにあるのだが。

護身術にボディーガードねえ・・・と由真は、衣の努力に再び舌を巻く。しかし、衣の言葉を頭の中で反芻していると1つだけおかしい所があった。思わず、彼女の口から妙な擬音が出てしまった。

「へ、ボディーガード？」

「ええ、あそこにいますでしょ？」

衣が指差す方には、明らかに遊園地には似つかわしくない屈強そうな大男が2人こちらを見て、1つお辞儀をする。

「・・・あはは」

由真たちもよく分からないまま、彼らに軽く会釈をしたのだった。

非日常の存在を見てしまった彼女たちの間に、言いえぬ雰囲気が漂い始めてきた。

ここは、夢の国のはずなのにおかしいものがいると・・・。

そんなおかしな雰囲気を打破しようと、由真が少しわざとらしく大きな声を出す。

「そうだ。ちょっと早いけど昼にしようか。何か・・・さっきの疲れただろ？」

時計を見るとまだ11時を少し過ぎたばかりだった。

しかし、誰からか分からないままに了承の返事を返し、全員がその気になると適当なファミレスのような店を見つけ、そこへ入って行った。

食事が運ばれてきても、彼女たちの会話はなかなか弾むことはなかった。

やはり先程のことが、影響しているのか、それとも他の要因があるのか。

そのような中、亜樹乃は1つのとっておきの話題を振るチャンスは今しかないと考えていた。

「ねね、みんなってさ。学校の中でも美人じゃない？好きな子とかっていないの？」

それは、所謂恋の話。

全員の手が止まって、亜樹乃に注目が集まる。

とりあえず、亜樹乃は全員に同じことを聞いてみるが、返ってくる答えは、どれも、いない、と同じ返答。

しかし、彼女は注意深く観察していたのだ。

動揺を見せる人物を。

そして、1人の少女が亜樹乃の目に適った。

「そういえばさ、恵麻って、いつも一緒に通ってるでしょ。有栖と」

「えっ、何!?」

あからさまに、顔を朱に染める恵麻に亜樹乃はピンときた。

これは、攻めればまだボロが出ると。

「有栖のこと、どう思うの?折角だから聞かせてよ」

彼女はもう押せ押せだった。

「・・・幼馴染だよ。家が隣だから一緒に通っているだけだし・・・」

しかし、彼女の思惑とは裏腹に恵麻は、少し残念そうに言った。

その様子を見ていた由真は恵麻の肩に手を回すとまるで母親が子供に言い聞かすように言った。

「恵麻・・・そんな辛気臭い顔してたら、幸せが逃げるって」

「由真ちゃん・・・。うん・・・そうだね。ところで、由真ちゃんは好きな人いないの?」

突然、話題が自分に移ってきて由真は、一瞬どぎまぎとしたが、すぐに平静を装って話しだした。

「あたし？あたしは、そうだな・・・特にいないな。だって、近くにいるのが、景に幸樹に晃だし。ま、あたしはあんたの恋を応援するよ」
「だから、そんなんじゃないってば～」

誰が見ても明らかにも関わらず、恵麻は必死になって否定する。
ただの照れ隠しか、それとも本当にそうではないのか。

再び恵麻に話を切り返して、由真は内心ほっとしていた。
彼女は、普段は男勝りと言われるのだが、恋愛に興味がないわけではない。ただ、自分がそういう話をするのが、合わない。そう思っていた。

振った話が戻ってきてしまい、恵麻は大変困っていた。
そして、苦し紛れに彼女は、他の人に話題を再び振ってみる。

「う～・・・。そういう亜樹乃ちゃんはどうなの？」
「えっ、私？私ね・・・。相手はいないのが現状。神代は、顔はいいけど、あれだし。五味は・・・、あれも顔いいけど、性格がありえないよね・・・。で、有栖のどこがいいの？」

またまた自分に話が戻ってきてしまい、恵麻はううっと唸った。

「また私なの？・・・・・・このリボンも小学校の2年生の時に景君からのプレゼントなんだよ」
「はぁ、何それ・・・。あんたたち、既に両想いじゃない」

アホらしいと、亜樹乃は鼻を鳴らした。まさか、単なる惚気を聞くとは思っていなかったのだ。
しかし、恵麻は急に表情を曇らせると静かに言った。

「・・・ううん、違うよ。景君は幼馴染としての私は心にあっても、恋人とは絶対に思ってくれない・・・」

それは、ずっと一緒にいるからこそ分かること。

景が彼女、いやほかの女の子に振り向かない最大の理由を彼女は知っている。

諦めればいいと何度も思ったが、彼女はどうしても諦めがつかなかった。

同時に最近の景は、エリスが来てから、女の子ともよく会話をするようになったように見受けられる。

そう、まるで景の近くにあの子がいた頃のように・・・・。

良くも悪くも恵麻の想いというものを知ってしまった彼女たち。

少しばかり話しにくい雰囲気が漂ったが、ふと何かを思い出したように衣が恵麻に向かって言った。

「藍羽さんは、有栖君のことが好きなのですわね。私も少し生徒会でお話しすることがありますが、なかなか役に立つ・・・いえ、頼りがいのある方ですわ。・・・・・・それに、いざという時には・・・案外頼りになりますし・・・・・・負けませんわ」

思わず本音の出た衣に全員が苦笑いを浮かべて応じる。
ただ、最後の言葉は、ごにょごにょと言っていたので、誰も聞きとることができずにいた。

明朗快活さが持ち味の衣にしては珍しいことだった。

恋愛の話は、獰猛な野獣も黙らせる。１つ知恵をつけた由真は残る１人を気にしていた。
その彼女は、先程から話を聞いて笑みを浮かべているだけだった。
１人でも話に入ってこない人がいるのが気になる由真としては、当然話に引きずり込みたいと思っていたので、すぐに実行に移す。

「陽菜は、どうよ？男女問わず友達もいっぱいいるし、１人くらい気になる人もいるでしょ？」

これまで、話にほとんど参加してなかった陽菜に、今度はバトンが渡される。
陽菜は、そろそろ来るかなとは思っていたんだよと、苦笑いを浮かべた。
そして、折角だから・・・と前置きを置いた上で話し始めた。

「うーん・・・私は、そこまで男の子とは親しくないよ。私は、普通の恋がしたいな。好きな人と一緒に遊びに行って、色々な所に２人で行きたい。何も考えずにいられたら幸せだと思いませんか？」

陽菜の言葉に、彼女たちはうんうんと皆頷いた。

結局のところ、彼女たちはどこまでも普通だった。その中身は大き

く違っているのだが・・・。

そしてこの日、彼女たちは、パレードまで残ってゆっくりと休日を楽しんだのだった。

第１５話：喧騒なる日　校門にて（前書き）

７月３０日　本文一部加筆

第１５話：喧騒なる日　校門にて

慌ただしかった日曜日も終わり、今日からまた学校が始まった。
今日は、恵麻が部活の新入部員獲得のために先に行っているために１人での登校だ。
別に１人で登校することに対して寂しいと思うことはない。
エリスが来てからは、何かと周りが賑やかだった反動か無性に孤独が恋しいのだ。
それに、エリスは俺に何か仕事がないかと昨日の夜、鬱陶しいほどに俺の側で言い続けてきたのだ。

「景様？景様は、一緒にお風呂に入ってお背中を流すのもダメ、景様がお食事を終えた後のお皿の片付けもしなくていい、お部屋の掃除も自分でするとおっしゃっています。私は、景様のメイドですよ。何かお仕事はないのですか？景様のお役に立つことが私の喜びです」
「・・・母さんにでも聞けば、何か仕事をくれるんじゃないか？」
「いえ、そうではなくて景様からお仕事をいただきたいのです。それに私は景様のメイドです。景様のお世話が最優先事項です」
「・・・特に俺は世話をしてもらうこともないからな。母さんの手伝いでもしてくれるとありがたいんだが・・・。」
「いいえ、今日こそ景様からのお仕事をいただくまで景様のお側を離れません」

あまりに執拗に言うので、俺は眠たかったこともありこう言った。

「俺は、もう寝るからエリスも寝たらどうだ？・・・もちろん今日リフォームして新しくできた自分の部屋でな」

一瞬だけ仕事をもらえると期待したのか、エリスの目が輝いた。

が、俺の言葉に落胆した様子を見せた。
俺には、他人のためにあそこまでしようとする理由が理解できない。
「・・・明日にはお仕事くださいね」
そう言って、エリスは部屋を出て行った。

初めは、この坂を登るたびに息が切れたものだったが、今では息が切れることすらない。
学園へと続く坂を登ることにも中学、高校と4年間も通った学園だ、もう慣れてしまった。
そんないつもの坂をいつものように学校へと向かい登っていく。
そう、何もいつもと変わらないはず・・・。

・・・何だ？この感じる視線の多さは？

「あの人じゃない？」
「ああ、そうそう」
「メイドと暮らしてるなんて羨ましいぜ」
「バーカ、噂じゃ女の子連れ込んで無理やりメイドをさせてるらしいぜ」
「お前違うって。実はあの女の子は借金のかたで毎晩色々なことをさせられてるらしい」
「俺が聞いた噂じゃ、後3人はメイドがいるって聞いたぞ」
土曜日のエリスの1件は俺を学園でもトップクラスの有名人にしてくれたようだ。

四方八方からさまざまな種類の視線が飛んでくるのが分かる。
そして、俺とエリスの関係も脚色され、原型すら留めていないものすらあるな。
だが、メイドというインパクトは思いのほか強かったようで、エリスがメイドだということだけは原型を留めているようだ。
俺にとっては、何の救いにもならないがな。

朝から、学園の生徒の視線を独り占めにする俺。
少なくとも、周りから見た俺のイメージは女にメイドの格好をさせている変態とでも言うべきか。
この気持ち悪さは、しばらく続くんだろうな。
憂鬱な気分で俺は校門まで、たどり着いた。

校門には、昨日入学した高1の学生も多くいるようだった。
この時期は、校門近くの桜が満開となり、その花びらが舞っている。
そんな新入生の希望溢れる校門に、1人だけ異質な空気を纏った奴がいた。
異質な空気は、言い過ぎかもしれないが明らかに周りとは違った雰囲気だった。

「ど、どうしよう・・・」

車椅子の背の大きさからどう見ても中学生と思われる学生が、校門の辺りで1人戸惑っていたのだ。
髪は首より少し伸ばした程度。頭の右に桜の花びらのヘアピンをしている。
後姿から見るに女だろうが、俺の知り合いには見た目が女の男がいるくらいだ、油断はならない。

「あ、あの・・・すいません・・・」
「・・・」
どうやら何か困っているらしいが、誰にも声をかけられなくてさらに困っているらしい。
と言うより、あんなか細い声では大抵の人は聞き流すか、聞こえてもいないだろう。
俺も無視して行こうかと思ったが、見てしまった以上無視していくのは良心の呵責を感じる。
これも運命なんだろうと、俺は諦めて車椅子の生徒に声をかけた。
「どうかしたのか？」
俺が声をかけると、その女はこっちを向いた。
「あ、あのあの・・・すいません、ごめんなさい、許してください」
そして、俺を見るなり謝りだした。
事情が飲み込めない俺が見ていても、かわいそうなくらい震えている。
そして、また周りの突き刺さってくるような視線が痛い。
・・・そうだ、俺は目つきが悪いとよく言われていたんだったな。
どうやら、不良に絡まれたのだと勘違いをされているようだ。
「こんな所で何してるんだ？見たところ困っているみたいだが」
できる限り冷静かつ自分が考えるられる最大限の優しい声で話しかける。
俺の努力が通じたのか、車椅子の女は震えるのを止めた。

「は、はい。実はですね、車椅子が動かなくなってしまって」
この口調は癖なのか、それとも警戒されているのだろうか。どちらかと言えば、まあ後者だろう。
その女は、車椅子の車輪を指差す。
「車輪がその溝にはまったのか・・・。どういう運転してるんだ？」
俺は車椅子に乗ったことがないから詳しいことは分からない。
が、普通に通ればこの溝と車輪は垂直になるからこのようにはまることはないはずだ。
「え、えーとですね・・・。お恥ずかしいのですが、そこに桜の花びらを模したヘアピンが落ちてますよね。あれを取ろうとして、何も考えずに方向転換をしたらこうなってしまったんです」
「ああ、これか。ほら」
俺は、そのヘアピンを見つけると、持ち主に渡す。
「あ、ありがとうございます。え、えーと、目つきは悪いけど優しい方」
「貶すか、感謝するか、どっちか1つにしてくれないか」
「そ、そんなつもりじゃ・・・」
俺の言葉に今にも泣き出しそうになる車椅子の女。
「いや、特に他意はないんだが・・・」
「もしかして・・・体でお礼をしろということですか？」
「・・・どこをどう聞けばそうなるんだ？それにそんな知識をどこ

から仕入れたかはあえて聞かないでおく。お節介ついでに言うと、中学校はこっちじゃない。ここは高校だぞ」

何をどう考えたのか、俺がこの女にお礼として体を差し出せと言ったことに車椅子の女の頭ではなっているらしい。
最近の中学生はこんなにもいらない知識が豊富とはな・・・。
だが、どう見てもこの前まで小学生でしたといわんばかりの童顔の女は、わなわなと震えだす。
どうやら、中学校と高校を間違えたことが恥ずかしかったに違いない。
だが、次の瞬間。その女の叫びと共に俺の考えが間違っていたことが分かった。

「わたし、高校生です！！」
「はいはい。分かった、分かった。さっさとここから出してやるから冗談は止してくれないか」

高校生だと言い張る車椅子の女の言葉を俺は軽く受け流しながら言った。
その顔で、高校生はないと思うぞ。

「だ、だから高校生ですってばぁ。これが証拠です」

だが、しつこくも高校生であることを主張して譲らない女。
証拠だと言って、鞄から生徒手帳を取りだすと俺に見せる。

「ん？撫子学園中学校？やっぱり中学生じゃないか」
「ああっ、こ、これ違います」
「それに制服もここの高校のじゃないな・・・」
「あっ！？こ、これ中学のです・・・。ど、どうしよう・・・」

俺は慌てる車椅子の女を冷たい目で見ていた。
そこまでして、嘘をつく必要があるのかと。既に入学式を終えた新入生が間違えて中学の時の制服を着てくることが果たしてあるだろうか。
俺は、よくゲームやアニメにいる天然キャラというのは信じていない。どう見ても、計算しつくされた人物にしか見えないからだ。
だが、この場合、それはどうでもいいことだろう。

「まあ、この際お前が小学生か中学生か高校生かはどうでもいい。いい加減車椅子を動かさないとな」
「は、はい・・・」
「ちょっと、どいてもらってもいいか？」

俺は車椅子を動かそうと、少しだけ降りてほしいと言った。
いい加減に最初の目的を果たさないとな。
だが、その車椅子の女は少し表情が暗くなった。そして、言いにくそうに言った。

「す、すいません。わたし、今歩けないものですから・・・」
「・・・そうか。悪いな、気にかけなくて」
「い、いえっ。そんなことないです」

どうやら、足の怪我で歩けないとのことらしい。
だが、包帯もしていないし・・・そうか・・・。悪いことをしてしまったな。

「仕方ない、持ち上げるぞ」
「はい」

そう言って、俺は車椅子を持ち上げようとした。

「・・・重いな」

「わ、わたしは重くないです」

「おいっ、暴れるな。持ち上げられないだろ」

俺がぼそっと言ったことを耳ざとく聞き、文句を言う、少しどころか確実と言ってもいいくらいの地獄耳の女。

バタバタと暴れるもんだから、車椅子が揺れる。

だが、そうは言うものの、俺1人ではとても持ち上げられそうになかった。

そんな時、たまたま通りかかった奴がいた。

「おっ。何やってるんだ？」

「ん？幸樹か。ちょうどいい、手伝ってくれないか？車椅子の車輪がはまったらしくてな」

「ああ、分かった。由真、お前も手伝ってくれ」

俺は、通りかかった幸樹に声をかけた。

俺が振り向くことなく後ろの女を親指で指差すと幸樹は事態を把握したらしく、一緒に登校していたらしい由真を呼んだ。

「で、あんたらは何してんの？」

まだ事情を飲み込めてなかったらしい由真に俺は事の経緯を説明した。

「そういうことね。まあ、仕方ないか。手伝ってあげようじゃないの」

由真はすぐ事を理解し協力してくれた。
そうして俺たち3人で車椅子を持ち上げることにした。

「あ、ありがとうございます」

3人がかりでようやく持ち上げると、車椅子の女は俺たちに感謝の言葉を言った。

「ねえ、景。この子さ、撫子学園の子だろ？何でここにいるんだ？」

由真は、その言葉を言う女をしばらく不思議な顔で見ていたが、視線を俺に向けるとこう言ったのだ。
どうでもいいが、すぐに撫子学園の制服だと見抜いたことに俺は驚いた。
だが、どうしてすぐに分かったのかと聞くと、バスケ部の試合で何度か行ったことがあるらしい。

「ああ、こいつが言うには制服を間違えて着てきたらしい」
「ふーん」

気のない返事をする由真。
そして、車椅子の女の方へと振り返り言った。

「とりあえず、この学校の生徒だとしようか。もし、そうだとしたらあんた、その服でクラスに行く気？」
「い、いえ。家に電話して持ってきてもらいます」

どうやら、電話をすれば持ってきてもらえる身分らしい。

もし俺がそんなことをしようものなら、母さんに何を言われるか分かったもんじゃない。
いや、今だとエリスが来る可能性が高いか・・・。

「家に？」

家に電話して取ってきてもらうと言う車椅子の女に聞き返す由真。

「は、はい。そうですけど、何か問題があるでしょうか？」
「うーん、それだと何分くらい掛かる訳？」

少し車椅子の女をじっと見てから、由真は言った。

「２０分も待てば来ると思います」
「そんな待ってたら遅刻になるねえ。あんたさえよければ、誰かの制服が部室にあるから貸すよ？」
「そ、そんなことはできません。助けていただいただけでなく、制服まで借りるなんて・・・」

それに対して、遠慮する車椅子の女。
だが、由真はそれを何か勘違いをした発言をする。

「もちろん洗濯してアイロンもかけてるし大丈夫だから。じゃ、この子借りてくよ」

由真は相手の返事を聞くことなく車椅子の後ろに立つ。

「いいのか？違う学校かもしれないのに・・・」
「ああ、気にしない気にしない。１日くらい別の高校通ったって問題ないって。それじゃまた後で」

そう言って、俺の言うことも聞かず車椅子を押していく由真。
本当に別の学校だったら、どうするつもりなんだ？
入学式があった後だから、既にお互いの顔くらいは分かるだろうし、いなかった奴くらいなら分かるはずだ。
まあ、俺がそこまで気にする必要は全くないわけだが。

「なあ、景」

俺が、由真たちが行った体育館を見ていると、幸樹が声をかけてくる。

「何だ？」
「さっきの子、かわいかったなあ。お前知り合いか？」
「いや、全く知らないが」
「お前が、全く知らない女の子に声をかけるなんて珍しいな。どうかしたのか？」

確かに俺も何で声をかけたのか不思議だ。

「まあ、困っているのを見てしまったからな。放り置いていくのも人としてどうかと思っただけだ」
「そりゃあ、お前らしいな。でもよ、あの女の子本当にかわいいよな」

すぐに話を元の話題に戻す幸樹。
確かにかわいいとは思うが、幼すぎると思うぞ。だが、そう思ったとは幸樹には言わないでおく。
ただでさえ、エリスのことで噂が広まっているからな。余計な噂は

これだけで十分だ。

「そうか？あまり俺はじろじろ見てないから分からないんだが」
「いや、景はかわいい女の子に囲まれた生活を送っていて、女性を見る必要がないから分からないのかもしれないが、俺はこの目で確かに見た。断言する、あの子は巨乳だ。しかも、エリスさんと遜色ないくらいある！」
「・・・お前、初対面の人相手にそんな目で見てたのか」

幸樹は、そう断言する。
確かにエリスはそれなりにあるとは俺も思うが、初対面の人間の胸をまじまじと見るほど俺は欲望に忠実ではないし、そもそも初対面でなくともじろじろと見るのはどうかと思う。
それに、あれはどう見ても中学生、下手をすれば小学生にしか見えない。
俺は、幸樹を冷たい目で見てやった。

「・・・それよりもだ」

俺の視線に気づいた幸樹は急に話を変える

「景、お前すっかり有名人だな」
「確かにな。幸樹、お前は絶対に話しただろうな・・・」

俺は疑惑の視線を向ける。

「すまん。問い合わせが殺到してな、仕方なかったんだ」
「まあ、すぐに噂なんて消えるだろ」
「それでも、悪いな。で、今日はエリスさんは来ないのか？」
「・・・来るわけないだろ」

すぐに態度を変え、エリスのことを聞く幸樹。
幸樹のメイド好きは直ったんじゃなかったのか？
・・・幸樹のあのきらきらした目を見ている限りではどうやら俺の勘違いだったらしいな。

「また、学校来てくれないかなあ。景、また何か忘れ物してくれ」
「2度とするか」

俺は、幸樹の頼みを一蹴する。

キーン、コーン、カーン、コーン・・・・。

「やばっ。景走るぞ」
「・・・走らなくても間に合うだろ」

予鈴と本鈴を勘違いし、走って行く幸樹を俺は溜息まじりに見ていた。

一方、体育館へと行った2人はというと、バスケット部の部室にいた。

「お、良かった良かった。サイズ合わなかったらどうしようかと思ったけどピッタリじゃん」
「あ、ありがとうございます」

予備の制服のサイズはギリギリ間に合ったようだった。

「しかし、あんたスタイルいいねえ」

「そ、そんなにじろじろ見ないでください。ところで先輩さんですよね？」

「あ、まだ自己紹介してなかったっけ。あたしは、上総野　由真。2年生」

「わ、わたしは四条畷　美玖　（しじょうなわて　みく）です」

じろじろと見る由真に対して、おどおどとする美玖。

彼女は、どうやら人見知りをするか、あまり気の強い女の子ではないらしい。

美玖の先輩さんという言葉に、互いに名前を知らないということに今更気づきお互いの名前を紹介する。

「随分と難しい苗字だな。まあ、もうすぐ予鈴も鳴るし、さっさと行くか。で、クラスはどこなわけ？ついでだから、あたしが送って行くよ」

「いえ、ここからは1人で行けますから。上総野先輩ありがございました」

そう言って、美玖は行こうとするが、ふと何かを思い出したのか振り向いた。

「どうした？」

「あ、あの・・・助けていただいたお礼がしたいのですが、お二人のお名前とクラス分かりませんか？」

「ああ、あんたのことをじろじろ見てた背のでかい方が、寿々林幸樹。最初に四条畷さんに声をかけた目つきの悪いほうが有栖　景

だね。別にそんな大層な事したわけじゃないし、お礼なんてしなくていいよ」

端的な紹介だが、美玖は納得する。
どうやら、由真の紹介に間違いはないらしい。

「・・・有栖先輩ですか。あの・・・、上総野先輩本当に助かりました。お礼は必ずします。では、失礼します」
「ま、気にすんなって。・・・律儀な子だねえ」

キーン、コーン、カーン、コーン・・・。

こうして、彼女らもそれぞれの教室へと向かったのだった。

第１５話：喧騒なる日　校門にて（後書き）

今週３回目の更新。
また、登場人物が増えました。

・・・まだ増える予定だったりします。
ある程度、主要登場人物は序盤で出揃う予定です。
１回限りの登場人物ならまだ増やすかもしれませんがね。
と言うより、構想だけならどんどん広がっていきます。

そして、次々と却下しているのが、現状・・・。
さて、後何人増えるかは、私にも分かりません。

第１６話：喧騒なる日　教室にて

「ん？何だ、お前か。・・・ああ、分かった。で、どの辺りまでなら大丈夫なんだ？・・・ああ、そうか。一応聞くぞ？止めておいたほうがいいぞ、今回ばかりは俺も敵になるからな。・・・よくそこまで自分を褒めることが出来るな。なら、今日は敵同士ってわけだな。いや、いらないし、聞きたくもないぞ。・・・じゃあな」

話が長くなりそうなので、俺は携帯を切る。
今年もどうやら始まるらしい、あのイベントが・・・。

「景。さっきの子に制服貸しておいた。今度お礼に来るってさ」
「悪いな、由真。お礼って由真にか？」
「いや、違う。あたしたち3人みたい。ところで、景？」

俺と幸樹が教室に着いてから数分後、由真は俺のところへとやって来た。
そして、にやにやと気味の悪い笑みを浮かべながら言った。

「何だ？」
「すっかり有名人になってしまったねえ」
「何だ、嫌味か？」

俺は、わざとらしく言う由真を睨みつける。

「まあ、そんなとこ。で、どうするの？」

「ところで、その紙は何だ？」

俺は、由真が持っていた紙のことを聞いてみた。

「ああ、これね。見てみれば分かるだろうけど・・・」

何故か言葉を濁す由真。

だが、その表情は何故だか楽しそうだ。嫌な予感しかしない。

そして、その紙を俺に手渡す。

「・・・外国人美少女にご主人様と呼ばれている有栖　景とはいったいどんな人物なのか？」

俺とエリスの写真が大きく1面を飾っている。

これは、エリスが周りの反応に驚いて俺にくっついている時のだな。

・・・事実のような気もするが、よく読んでみると記事内容は誇大して書いている気がしてならない。

「な？これで分かっただろ？」

「・・・我々は、有栖　景の正体を探るべく直接本人に取材を申し込む予定である。次週の校内新聞はそのインタビューを掲載する。・・・何だこれは？俺の人権はないのか？」

「ま、新聞部があんたの人権なんて気にしないって。まあ、・・・その新聞部がそこにいるんだけどね」

由真に言われ、俺は後ろを振り向く。

教室の外には、カメラを持った小柄な男と紙とペンを持った大柄な男がいた。

「・・・」

「・・・」
「・・・・・」
黙ってこっちを見ているのが、不気味でならない。
「なあ、由真。これは号外と書いてあるが・・・」
「ああ、これ。新聞部が配ってた」
「・・・やっぱりそうか」
俺は、分かっていたことではあるが肩を落とす。奴らが、こんなおいしいネタを放っておくはずがない。
新聞部は、校内新聞を不定期に出しているのだが、その内容は主に生徒、先生の人気ランキングから校内スキャンダルと多種多様だ。
生徒会発表の学内迷惑部活ランキングでは、堂々の1位だ。
「あんた、ついてないねえ。ま、あたしはインタビューされても答えないから安心していいよ」
「悪いな」
キーン、コーン、カーン、コーン・・・。
そんな時、本鈴が鳴った。
「ま、頑張りなよ」
そう言って、由真は自分の席へと戻っていく。
「みんなー、おはよう」

そう言って、担任が入ってきた。
そして、俺を見るなり言った。

「有栖君。ホームルームが終わったら、私と一緒に職員室に来てくれるかしら。すごい騒ぎになってるから分かるわよね」
「・・・はい」

クラス中が俺のことを見ている。その誰しもが何か期待感を持って見ている気がしてならない。
そうだ、こいつらはほぼ全員が俺とエリスのやり取りを見ているんだったな・・・。
だが、こんな騒ぎになったのは俺のせいではないはずだが。
俺が何をしたって言うんだ？

「とりあえず、そこに座って」
「はい」

俺はホームルームが終わると担任と共に職員室へと来ていた。
と言っても身体測定等の連絡事項が少しあっただけで、すぐにホームルームは終わってしまったのだが。
そして、座るように促され、近くの誰のものか分からない教師の椅子に腰掛ける。

「私が話したいことは、他でもなくてあなたの・・・知り合いかしら？外国人の方が校内に勝手に入っていたでしょ。そのことについて聞きたいの」
「先生は、あの新聞を読んでここに読んだんですか？それとも、俺

とその外国人の人が一緒にいるのを見たから読んだんですか？」
「一応、見ていたわ。あなたたちが帰るときにちらっとだけど。他の先生方も結構見ているみたいだし」
移動中にも、じろじろと見られた俺はストレスが溜まっていたので、言葉につい出てしまう。
職員室でも視線を集める俺と担任の相模先生。
どうやら、教師の間でもかなりの話題になっているらしい。
俺は、この教師が新聞を見て呼び出したのだったら、さっさと帰ろうかと思ったが違っていたらしい。
「そうですか」
「ところで、あの子と有栖君はどういう関係なの？まあ、こういうことはあまり言いたくないんだけど、もし不適切な関係だったらこちらとしても色々と考えないといけないのよ」
エリスとの関係が不適切だったら、恐らく停学にでもなるのだろう。
が、エリスがメイドな時点で十分不適切だと思うのは、俺の思い過ごしだろうか。
「相模先生は、ハンドメイデン社ってご存知ですか？」
俺はこの説明をするのは、何度目だろうと思いながら説明を始める。
「ええ、知ってるわ」
「知っているんですか？知らないものだと思っていました」
が、以外にもハンドメイデン社を知っている相模先生。
これなら、説明も楽そうだな。

「人の興味なんて、分からないものよ？現に私の目の前に意外性の子がいるわけだし・・・」

そう言って、俺を見る。その視線は、呆れか、それとも侮蔑か。
この話題を続けるのは、正直良くないと感じた俺は少し早口で話し始めた。

「先週の土曜日に、来たあれはハンドメイデン社の商品です。どう見ても人にしか見えませんけど、ロボットです。応募したら当たってしまったんです」
「ふーん・・・」

そう言って、机にあったコーヒーを一口飲む。

「飲む？」
「いえ」
「冗談よ。真顔で答えないでよ。・・・ちょっと凹むわ」

そして、そのカップをこっちに出し、飲むかと聞いてきた。
もちろん、他人の飲んだコーヒーなんて飲むつもりのない俺はすぐに断る。

が、先生の冗談だったらしい。
俺が即答で拒否したことに、がっかりした顔をする先生。
どこまでが冗談なのか、俺には分かりかねる。

「もう話もなければ、戻ってもいいですか？この後は、身体測定でしたよね？」
「あ、ちょっと待ってくれる？１つ聞いてもいいかしら？」

「はい。何ですか？」
俺が教室へ戻ろうとすると、先生が呼び止めてきた。
「・・・仲良くするのよ」
「え？あ、はい」
唐突なことに、思わず返事が漠然となってしまう。
だが、先生はそれを言うと満足そうな顔をした。
俺には、その言葉の意味がよく分からなかった。
「こっちは、私が何とかするから、自分のことを頑張りなさい」
さらに、意味の分からないことを言う先生。
俺は、疑問を持ちつつも職員室を後にした。

「おっ、景。戻ってきたのか」
教室へ戻ると幸樹と晃が入り口にいた。
が、その顔は少し心配そうでもあり、これから何かが起きることを期待しているような顔でもあった。
「ん？どうした？」
「うん。教室に入るなら覚悟したほうがいいと思うよ」
俺は晃の警告に、ただならぬ不安を感じた。
それに教室の中が少々騒がしい気がする。

俺が2人を見ると、2人は黙って俺を見る。

「ま、頑張れ」

「どうにかなるって、景なら」

そう言って俺の肩を叩く。

だが、その目は確かに言っていた。

この教室に本気で入るのかと。

「・・・この中に、一体何があるんだ？」

俺は、そっと扉を開けた。

「君が有栖君か。そして、この手があのメイドさんの握った手・・・はあはあ」

「何するんだ、この変態がっ」

教室に入ると、いきなり鼻息を荒げ俺の手を握ってくる変態がいた。

女ならまだしも、男に手を握られても全くもってうれしくない。

ただ握ってくるなら、それは握手だろう。

だが、この男は俺の手に擦り寄ってきたのだ。

すぐにその手を、振りほどく。

手を振りほどかれた男は、相変わらず笑顔だ。

そして、何事も無かったかのように話を続ける。

「いや、いきなり失礼した。僕は生物部部長、佐野　隆之。是非、君に我が生物部に入ってもらいたい。もちろん、メイドさんと一緒

に・・・・・ぐへあっ」
「ちょっと、この変態。話が違うじゃないのよ！あっ、有栖君だっけ？ごめんね。うちの馬鹿部長が変なこと言って。あ、でも君フリーでしょ？いつでも、歓迎するからね」
「は、はあ」

メイドさんと言う所を、やたらと強調する佐野とか言う生物部の部長。
が、突如乱入した女に殴り飛ばされ、奇妙な声を残しその場に倒れた。
エリスと一緒に部活に入ってくれと言った生物部の部長を殴り飛ばした謎の女は、その殴り飛ばした部長の首根っこを掴むと、普段からこうですといった感じで引きずって行く。
あまりの出来事に、唖然とするしかない俺。
男1人を殴り飛ばしておいて、何事も無くお笑顔で勧誘できるとはな。

あの女はいつでも歓迎すると言っていたが、少なくともあのような危険そうな人のいる部活に入るのは論外だ。
それ以前にあの生物部は、きちんと部活として成り立っているのだろうか・・・。

「何だったんだ、あれ？」
「景君、おかえり～。あの人たちはね、生物部の部長さんと、副部長さんだよ～。景君、何か失礼なこと考えてない？」
「いや、考えてないぞ」
「でもね生物部は、結構人気のある部活なんだよ～」

俺の疑問の声は誰にも届かなかった。
ではなく、近くに来た恵麻が答えてくれた。

意外と恵麻は、勘が鋭いので余計なことを考えているとすぐに見抜かれる。俺のことを目を細めて見てくる。
が、そのことを深く追及してこない所が美点だと思う。

「恵麻。それ、昔あげたリボンだろ？珍しいな、それをつけてる所を始めてみたぞ」
「あ、うん。この前たまたま見つけてつけてみようかなって思ったの。似合うかな～？」
「似合ってると思うが？」
「あ、ありがとう・・・」

ふと気づくと、その恵麻は、いつもとは違い、青のリボンを左右に留めていた。
面と向かって、褒めるのも恥ずかしくぶっきら棒に言ってしまった。
だが恵麻は、何故だか顔を赤くする。
何だかこっちまで恥ずかしいので話題を変える。

「あの部活、人気があるのか？」
「うん、そうだよ～。それに他にも、色々な部活の人が来てるよ～」
「・・・」

そう言って、恵麻は教室の後ろを指差す。
そこには、１０人ほどの知らない奴らがいた。

「で、あれは一体何だ？」

俺は、とりあえず視線を外し、恵麻へと戻す。
確か、生物部が人気があるって話だったよな。

「だから、景君を勧誘に来た人たちだよ～」

「で、他にはどんな部活が人気なんだ？」
「景君、私の話聞いてる？」
「聞いてるぞ。でも、あえて聞かないことも必要なんだ」
「・・・ちょっといいかな？」
俺が現実の受け入れを拒否していると、後ろから声をかけられた。
「ん？」
振り向くと、それなりの可愛らしい顔をした女がいた。
「へ～・・・」
「俺が何かしたか？」
「別に・・・」
「とりあえず、俺が悪いなら謝るから機嫌を直してくれないか？」
恵麻は何だか不満そうで、ふんっとそっぽを向く。どうやら機嫌を損ねているらしい。
俺は、拗ねてしまった恵麻をなだめる。最近、恵麻は拗ねると昔のように飴玉で機嫌をとるようなことはできなくなってきた。
俺としても、これは由々しき問題なのだ。今度、由真にでも相談してみるか。
「あの、聞いてます？・・・この人、話聞いてないよー」
何だか近くでぼそぼそと声が聞こえたような気がする。
・・・あ。すっかり忘れていたな。
俺がそのことに気づくのとほぼ同時に、すっかりその存在を忘れて

いた女がいきなり何かを取り出し喋りだしたのだ。

「あー、私はー機械研究会のー、」

「うるさいから、黙ってくれないか？」

俺はその拡声器を取り上げると、放り投げる。拡声器を使って話し出すとは思いもよらなかった。

「ああっ！！」

慌ててその女は俺が投げ捨てたそれを取りに行った。

それを見ていたちらっと見ていた恵麻は、俺の行動に驚いたように言った。

「ちょっと景君、やり過ぎだよ～」

「そうか？機嫌直ったみたいだな？」

「別に怒ってなんかないよ～。それに他の部活の人も待ってるよ？」

恵麻の言葉が、合図になったのかもしれない。

俺が横目で教室の後ろを見ると、そこに残った奴らが一斉に俺の元へと来たのだ。

恵麻は、俺の後ろへと隠れた。誰だって、自分に関係がなくとも大人数の男が目を血走らせて迫ってきたら、逃げるだろうからな。

「柔道部に入部しろ。・・・も、もちろんメイドさんも一緒にな」

「いや、僕たち陸上部にこそメイドさんは相応しい」

「僕らはメイド同好会。是非、メイドと君にも入ってもらいたいと思ってる。君なら、僕らと趣味が合いそうだし、本物のメイドもいるから・・・えへ、えへへ・・・」

「よければ、水泳部なんてどうだい？メイドさんの水着姿を特別に

拝ませてあげようじゃないか？それに君も雑用くらいならできるだろ？」

ほぼ同時に言うもんだから、はっきり言って聞き取れない。
だが聞いている限りでは、俺はエリスのおまけか？としか思えない内容ばかりだ。

「・・・変態しか集まらないのか？」

俺の独り言は、空しく喧騒の中へと消えていく。
だが、1人だけ違う内容の奴がいた。
その男が、竹刀を床に叩きつけると、水を打ったように周りは静かになった。

「僕は、男子剣道部部長、神代　竜馬　（かみよ　りょうま）。あの清楚で可憐なメイドさんを賭けて、僕と勝負しろ！有栖　景！！」

そこには、真性のアホがいた。俺に向かって竹刀を1本投げ、もう1本の竹刀を構える。
男子剣道部の部長は確か2年生のはずだ・・・。まさか、こいつが部長だったとはな。
神代は、1年のときに同じクラスでその頃からかなり告白されることも多かったと聞く。
黙っていれば、かなりのイケメンだろうが、今のこの発言が全てを台無しにしている。

こいつらは、ロボットだということを知った上でエリスを部活に入れたいのか、それとも人間だと思って入れたがっているのだろうか。
どちらにせよ、『校則第5条部外者は許可なく校内に立ち入りを禁じる』とあるから無理なんだが・・・。

「さあ、どうなんだ！僕に勝てないと思っておじけづいたか？今なら、逃げたっていいんだぞ？」

そう言って、無駄に長い前髪をかき上げる。

だが、決闘は校則第１４条に違反するぞ。

普通は、校則を覚えるようなことはあまりしない、と言うよりしたくもない。

だが、俺が校則に詳しいのはとある人物の影響、もとい半強制的に覚えさせられた過去があるからだ。決して、俺の趣味ではないし、模範的生徒でもない。

「神代。お前、校則を読んできたらどうだ？生徒手帳に載ってるぞ」

俺は、端から勝負する気などない。

そもそも相手の得意なもので勝負をしても勝てる見込みなど皆無に等しい。

勝負をするのは、馬鹿かそれなりに格闘技でもやっている奴だけだろう。

「貴様、生徒手帳が何だ！校則がどうした！！我が愛の前にそんなものは関係ない！！！」

「・・・後ろを見たほうがいいぞ」

とりあえず、警告はした。どうせ俺の言うことなど、聞かないだろうが・・・。

それに、愛という言葉を公衆の面前の前で顔色一つ変えずに言える奴がまだこの世にいるとはな。天然記念物にでも申請してやりたいくらいだ。

だが、愛で全てがどうこうなると考えているなら、それは大きなミステイクだ。

「そう言って、不意打ちをかけるつもりだろうが、そうはいかないぞ。お前の考えなど、既にお見通し、だあっ！？」

不意に風を切る音がして、何かがピシッといい音を立てる。
すると目の前には卒倒する神代。
あれほど、警告をしたというのに、人の警告を無視するから、こうなるんだ。
俺は、呆れるしかなかった。

「俺の勝ちだな。・・・で、先輩が後輩を竹刀で殴ってもいいんですか？」

もう聞いてはいないだろうが、一応俺の勝ちを宣言しておく。
そして俺は、その神代を竹刀で殴った本人に問う。

「いいのですわ。それに敬語なんて使わなくても構いませんのよ？」
「まあ、一応先輩ですから。・・・って、そうじゃなくて、衣先輩！何してるんですか！？」
「男性が細かいことを気にしてはいけませんのよ？例え、不肖の後輩を竹刀で殴ったとしても、それは教育。愛の鞭ですわ」

殴ったことは、あなたにとって細かいことなんですね？
俺は、そう思ったが口にはしない。
それに、面をつけていない奴を竹刀で本気で殴るとは・・・。
先輩のやっていることは教育ではなく、世間では虐待って言うんだがな。

「皆さん、私の後輩が大変お見苦しい失態をお見せしたことを深くお詫び申し上げます」

そう言って、衣先輩はこの事態が飲み込めていない奴らを見据えた。無論、誰もが黙って聞いている。

美人である衣先輩に見据えられると怖いからだが・・・。いや、実際には理由が違うか。

「後は、私たち生徒会に任せてはいただけませんか？それに有栖さんの身柄は我々生徒会が預かります。それまで、一切の勧誘目的での接触を禁じます。いいですね？」

そうは言うものの、実際には「お前らはこの事態に首を突っ込むな」と言っているのだ。

それだけ、生徒会の権力はこの学校においては強いのだ。それだけでなく、現生徒会は数々の武勇伝を誇り、特に会長、副会長は畏怖の対象にすらなっている。

衣先輩の一言で争っていたはずの奴らはただ頷くだけだ。

このことからも、衣先輩がいかに恐れられて、いや尊敬されているかが分かるだろう。

勧誘に来た連中は、すごすごと退散する。

それを見た先輩は、ふーっと息を吐き、それから恵麻に話しかけた。

「では、恵麻さん。有栖さんを少しお借りしますね」

「あ、はい」

気軽にお中元を渡すような感覚で、俺の貸し借りをする恵麻と衣先輩。

「俺は、物じゃないぞ？」
「まあ、そんなことは分かっていますよ。では、生徒会室までついて来てください」

あそこに行くのか？
俺は、正直衣先輩について行くのを躊躇した。
俺がついて来ないのを見ると、衣先輩は少し苛立ったように見えた。

「ついて来なさい」
「もうすぐ、身体測定があるんですが・・・」
「・・・いいからついて来い」
「・・・はい」

先輩は、怒ると言葉遣いが変わるのだ。
俺は大人しく従うしかなかった。竹刀の餌食になるのはごめんだからな。
俺が嫌々了承すると、衣先輩は俺を引っ張って教室を後にした。

教室から離れ、俺と衣先輩の2人になると衣先輩は言った。

「あのまま有栖さんを置いておくと、混乱がさらに広まりますわ。今は三十六計逃げるに如かず。しばらくは、生徒会のもとで保護します」
「・・・それって、もしかして？」
「そうですわ、生徒会のお仕事を手伝ってもらいます。拒否は許しませんよ。それに心配されなくともすぐに教室に戻れますわ」
「・・・そうですか」

そう言って笑みを俺に向ける。が、その笑みには何か含むものがあるようだった。
俺は、ただ都合のいいように生徒会から目をつけられていたらしい。
要するに、掌の上で踊らされていただけ・・・・か。
俺は、自嘲気味に心の中で笑った。

「・・・・これで、しばらく仕事が楽になるわ」
「はぁー」

俺は、諦めて独り言を言う衣先輩の後について行くしかなかった。

第１６話：喧騒なる日　教室にて（後書き）

出番の無い人による雑談会

「四条畷　美玖です。苗字の由来は、大阪府のとある市からです。日本史を習った方なら、読み方もたぶん分かっていただけるかと・・・。え？む、無理ですか？」

「あはは、本当は四『條』畷って書くみたいだよ。読み方は『しじょうなわて』。インターネットで調べたら四條畷市は固有名詞、でも「條」は常用漢字の旧字体であり、一部の新聞等では人偏のない新字体「条」を使用しています、だってさ」

「そ、そうなんだ。で、でも、どうやら、お時間のようです・・・」

「あはは、長く喋りすぎた？でも、これ絶対に見切り発車だよね」

「そ、そうだね。み、見切り発車は良くないと思います」

注：四條畷市役所ホームページより一部抜粋。

私の中では５章に当たるお話の２話目。
全体では１７話目になります。
次の６章は真面目な話になるので、５章はコミカルにしたいところです。
果たして今後の展開はどうなるのか？試験が近くなってきたので、今のうちに書けるだけ書いておきたいものです。

第17話：喧騒なる日　生徒会室にて

「さあ、入ってください」
「・・・ここは、いつ来ても気分が悪いな。空気が合わない」

現在、時計を見ると9時3分。
俺は今、生徒会室と書かれた部屋の前にいる。
ここに来るのは、いつ以来だろうか？元々、生徒会とは全く関係のない俺が時折こうやって来るのには理由がある。

「まあっ、これでもリフォームしましたのよ？」
「どこまで、生徒会を私物化してるんですか？」

何を思ったのか、大げさに驚く衣先輩。
何か勘違いをしたらしい。それに思ったのだが、勝手にリフォームしてもいいのか？

「いいのよ、この学園の理事長は私のお婆様ですから」
「・・・」
「無視はひどいですわ・・・」

俺は、この学園の支配者の孫を無視し、扉を開けた。
そこには、無駄に豪勢なソファーがテーブルを挟んで2つ置いてあり、その上では女が1人寝転んでいた。

「あ、やっほー。景っち」
「・・・その呼び方やめてくれませんか？」
「何でよー。お姉さんに文句言うと色々とあることないこと、校内にばら撒いちゃうぞ」

そう言って、体を起こし俺にウィンクしたのは生徒会副会長の皇后崎　希望　（こうがさき　のぞみ）先輩だ。
言動は、何だか子供っぽいが、中身は純粋無垢・・・ということはなく邪心の塊のような人だ。
１５０に届かない身長、本人も認めているが成長の兆しのない身体は、どうみても高校3年生には見えない。
また、人を名前に『っち』と付けて呼ぶ。
そして、何よりも数々の武勇伝を築いた1人である。
ありとあらゆる情報を使ってな・・・。
・・・そう、この人こそが、あの新聞部の部長だ。

「おうっ、景。まあ、座ってくれ」
「深水先輩、いるならこの先輩方をどうにかしてくださいよ」
「はっはっはっ、無理無理。んなことできたら俺がとっくにしてるって」

俺が入り口でぼけーっとしていると、反対側のソファーで書類を見ていた深水先輩に声をかけられた。
深水先輩、本名は、深水　浩一　（ふかみず　こういち）と言う。
生徒会会計を務めている。
深水先輩の会計は例外として、部活に属することはできない。
予算配分を公正に行うためらしい。
ただ唯一、彼女には甘いと聞くが・・・。

「では、好きなところに座ってくださいな。もしよろしければ、私の隣に椅子がありますので、どうですか？」
「景っち。こっちおいでよー」
「そうですか。深水先輩、隣いいですか？」
「ん？ああ、構わんぞ」

俺は、特に何も考えることなく深水先輩の隣に座った。
だが不満そうに、俺を見る衣先輩と希望先輩。
居心地が悪いので、無理矢理話題を出してみた。

「ところで、衣先輩。生徒会室に来たのはいいんですけど、具体的に何をするのですか？」
「あっ、そうですわね・・・」
「・・・何も考えてないとかいうことはないですよね？」
「そっ、そんなことないですわ。・・・希望さんが折角いるのですから、直接文句を言うなりしてはどうでしょう？」

どう考えても、何も考えていないことがバレバレの衣先輩。
初めて、衣先輩と会ったときはこんな感じではなく、もっと堅物というイメージがあった。
風紀委員会と合同で、不法な同好会を排除しに行ったり、いつしか侵入してきた不審者を完膚なきまでに叩きのめしたり、学外のストーカーを退治をしたり・・・・・、何故か俺もそれに全て関わっているから不思議でならない。
1年ほどの付き合いにはなるが、今ではそんな感じは微塵もない。
きっと、少しは親しくなったのだろうと俺は勝手に思っている。

「まあ、そうですね」
「いつも思うのですが、そんなに堅苦しい言葉を使わなくてもいいのですよ？それなりに付き合いも長いわけですし」
「それでも、親しき仲にも礼儀ありですよ。衣先輩」
「仕方ないですわね・・・。でも、昔は苗字でしたから、進歩しましたわ」

確かに昔は、霧生先輩と呼んでいた気がする。

そう呼ばなくなった理由は、いつだったか先輩が名前で呼んでもいいと言ったからである。

「で、景っち。文句って新聞のことでしょ？ああ、あれ書いたの私だよ」

「！？」

いきなり会話に入ってきたと思うと、衝撃の事実をあっさりと暴露する希望先輩。

まあ、そんなとこだろうと思っていたが・・・。

「あれれ？大して驚かないんだね。お姉さん、つまんなーい」

「とても驚いてますよ。おかげで、俺も今では学内トップクラスの有名人ですから。ところで、何であんな記事書いたんですか？・・・って愚問でした」

「だってー、最近景っち遊びに来てくれないしー」

希望先輩に理由を尋ねるが、聞いている途中で分かってしまった。

あの記事を書いたのは、ただここに来させるためだったのか・・・。

だが、この先輩ならやりかねない。

何と言っても、1年に1人は先輩のせいで退学者が出るくらいだからな・・・。

もちろん、書かれた奴に同情するような理由もないわけだが。

「衣、希望。予算書ができたからチェックしてくれないか？」

「あ、うん」

「ええ」

そんなふざけた空気を打破してくれたのは、やはり深水先輩だった。

やっぱり、頼りになるのは先輩だけだ。

俺がそう思ったときだった。

「こーいちー！！」

生徒会室の扉が、ノックもせず開けられ、１人の女が深水先輩に飛びついた。

俺は席を立つと、その場を少し離れる。

「ちょっ！？苦しい、重い・・・」

「重いって、失礼でしょ？いつものことじゃん」

「いつもって、そんなことしてないだろ！？」

が、俺も衣先輩も希望先輩もいつもことだと温かい目でいちゃつく２人を見守る。

「えーっ！？私のこと愛してるって言うまで、離さないからね」

「衣、希望、景。見てないで助けてくれ！」

「いつものことですからね・・・」

「そうして死ぬまで、いちゃついてたら？」

「深水先輩。いつもご馳走様です」

深水先輩は、俺たちに助けを求めるが、俺たちの反応は冷ややかだった。

「ねえってばあ。早く、『蓮華、お前を愛してる』って言ってよー。きゃっ、私ったら恥ずかしい」

自分で言っておきながら、自分で照れる蓮華先輩。

この人が、深水先輩の彼女だ。

「そうだな・・・。また後じゃ、ダメか？」
「いーま、今すぐにだよ。もう2日も愛してるって言ってくれてないし」
「この場では、勘弁してくれ・・・」
「ダーメ。今すぐに言って。あ、もちろん棒読みだったらやり直しだよ？」

・・・この後、深水先輩がその言葉を言うまで１０分かかった。

「む、アリス。来ていたのか」
「蓮華先輩が来たときから、いましたよ」

あまりに恥ずかしいセリフを他人が見ている中で言った深水先輩は、まるで魂が抜けたかのようにぐったりとしている。
その彼女である蓮華先輩、本名は美里　蓮華　（みさと　れんげ）と言う、は反対にとても満足そうだ。
見た目はどう見ても、お淑やかでとても大人しそうに見えるが、実は風紀委員会委員長を勤めている。
実家は茶道の名家だと聞いたことがある。見た目としては、茶道は似合うと思う。
だが、蓮華先輩は衣先輩と同じく武闘派であり、怒らせれば確実に命はないと思われる。ただし、深水先輩にはとても甘い、甘すぎて見ているこっちが嫌になるくらいだ。
この先輩も、名前で呼んでいいと言われたので、深水先輩に聞いたうえで、そう呼んでいる。
そして、見かけによらず童話が大好きで、不思議の国のアリスはお

気に入りの1つらしい。
他人の目を気にすることなく、深水先輩とどこでもいちゃつくことで有名だ。
聖蓮学園1のバカップルとさえ呼ばれている。
それに、深水先輩に対する言葉遣いとそれ以外に対する言葉遣いがあまりにも違うことでも有名だ。たぶん、前者が素というのが、俺を含めた多数派だ。

「そうか、また手伝いよろしく頼む」
「え？」
「む？聞いてないのか。今日は身体測定の日・・・」
「だから、私が権力を使って景っちを呼び寄せたんだよー」

だが、先輩たちは、勝手に話を進めているが、全く俺には理解できない。
希望先輩の言うとおり、権力は、やはり振るってこそなのだと思い知らされる。もちろん、そのような力を持っていることが前提なのだが・・・。
俺が、この生徒会に度々足を運ぶ大きな要因の1つは、この無駄な所に権力を振るう先輩たちのせいだ。

「それでは、皆さん座ってください」
「衣先輩。深水先輩はまだ帰ってきませんが・・・」
「いいの、いいの。放っておいて。・・・どうせ戦力にならないしー」

希望先輩は、放っておけと言う。
だけど、魂が抜けているからって、役に立たないと言うのはどうかと思うぞ。

「では、皆さん座りましたね。では、これより対策会議を開きます。まずは、各自状況を報告してください。有栖さんは、よく分からないと思うので聞きながら把握してくださいね」
「じゃあ私から報告するよ、衣っち。私は、水泳部とアメフト部に友好的に協力してもらって・・・」
「・・・脅したんですね」
「景っち、人聞きが悪いこと言わないでよー」
「有栖さん。突っ込みは入りませんわ」
「・・・すいません」

あの希望先輩が、話し合いなどするはずもない。まず、確実に脅したんだろうな。
表情が分かりやすく変わったからな。

「じゃ、じゃあ、つ、続けるよ」
「希望先輩、そんなに動揺しなくても・・・」

言葉がどもっている。動揺が表に出やすいのが先輩の弱点だと思う。

「なーんて、冗談だよ。じゃ、続けよー」

・・・そんなわけないか。

「たぶん、水泳部は役に立たないだろうね。あの人たち、おバカさん達だし。アメフト部はどうだろー？時間稼ぎくらいかな、できたとしてもね」
「まあ、仕方ないですね」
「本当は、もっと脅す材料あるんだけどー、まだまだ取っておかないとねー。それに、景っちを脅す材料もできたしー」

「・・・」

無くなったら、すぐに補充するくせに・・・。
それに、エリスのネタは俺を脅すためにまた使うのか？

「そろそろ私も報告したいのだが・・・」
「うーん、そっかー。じゃお願い」
「む、何か引っ掛かるが・・・。では、風紀委員会から報告する。ターゲットは教室を脱出。現在は、見失った模様。我々の力不足、不手際により、取り逃がしたことを深くお詫びする。以上」

・・・あれを捕まえようとしているらしいが、どうやら逃げられたらしい。
風紀委員会が出てくるなんて、只事ではないのは確かだが・・・。

・・・今日は、身体測定だったな。やっぱりそうか。
やはり今年は大事になってしまったらしい。

「あー、先輩」

俺は、誰に言うわけでもなく言った。

「もしかして、あの七不思議の筆頭、もとい唯一実在する、あれですか？」
「・・・そうだ」
「そうだよー」
「そうですわ」
「・・・」

3人とも、俺の言うことを理解するということはもうあれしかないらしい。
俺は、去年の出来事を思い出した。
・・・また、あれの再来なのか？

そう。聖蓮学園七不思議で唯一実在するもの。
・・・五味　大助　（ごみ　だいすけ）か。
奴は普通であれば、退学確定にも関わらず退学にならない上に生徒会や風紀委員と日々戦いを繰り広げる文字通りの問題児、生徒会では、「有害生徒」などと呼んでいる。

「「・・・」」

妙な沈黙が生徒会室を支配していた。
もちろん、その原因は他でもない五味　大助だ。

「今回は、久々に私も前線に立つつもり。これ以上、あの変態を野放しにはできない」

だが、蓮華先輩がその沈黙を破り、決意を表明する。

「蓮華はまだあれとは顔を合わせていませんものね。始めは処女の如く、後は脱兎の如し。油断させてから、一気にケリをつけましょう」

ちなみに衣先輩が言ったことは、古代中国、孫子の兵法の１つだ。
初めは弱々しく見せ掛けて敵を欺き、後には見違えるような強い力を示して攻撃するという意味らしい。

ちなみに『孫子』は中国、戦国時代の兵法書で1巻13編。呉の孫武の著といわれているそうだ。

「と言う事は、希望先輩と深水先輩は待機ですか？」
「うーん、相変わらず鋭いねー。お姉さんはうれしいよ」
「・・・いや、普通に考えれば、分かりますって」
「私と浩っちは、情報収集と伝達が任務だから」
「・・・もう帰ってもいいですか？」

何だか面倒なことになりそうだ。
俺は、そう確信し帰ろうとする。
だが、希望先輩は、俺の進行方向を塞ぐ様に回り込むと、両腕を広げ言った。

「ダメだよー。景っちは、私の手伝いをしてもらうんだから。助手として・・・むしろ奴隷もありかなー」
「・・・謹んでお断りします」
「やだなー、冗談だよ。あ、もしかして本気にしちゃった？だったら景っち、お姉さんのこの胸に飛び込んでおいでー」
「・・・」
「え？無視？流すの？反応は？リアクションは？私の景っちが、どんどん反抗的になってくよー」

そう言いながら顔を手で覆う。だが、手の間から見えた希望先輩の顔がにやりと笑ったのを俺は見逃さなかった。泣いたふりは先輩の常套手段だからな。それに俺は先輩のものではない。
先輩がこうなのはいつものことだ。以前はいちいち驚き、慌てていたが、今となっては面倒になって流すことも多い。
俺が無視すると、先輩は少し寂しそうな顔をしていた。そして、拗ねた口調で一言。

「・・・衣っちと景っちのイケナイ写真でもばら撒いてやる」
「するな！！」
俺は、いい加減に無視できず叫んだ。この先輩なら、無いものですら作り出しそうだ。
拗ねていたはずの希望先輩は、俺の反応が嬉しかったらしく、子供のような人懐っこそうな笑顔を見せた。
だが、その笑顔も衣先輩の言葉ですぐに消えてしまう。

「別に構いませんけど、明日はありませんわよ？」
「えーと、・・・まじ？」
「ええ、まじですわ。本気と書いてまじと読めるくらい本気ですわ」
「それって、全く本気じゃないと思うんですけど・・・」
「有栖、細かい・・・。希望さん、次は無いと思ってくださいね」
「・・・」
「う、うん」

俺は、衣先輩の言葉で黙らされた。衣先輩に対する余計な発言は死を招くと俺はこの時学んだ。
俺を黙らせた衣先輩は、希望先輩にも警告の言葉を発する。長い付き合いらしく、それなりに相手のことも理解しているのだろう。情けも容赦もない。いや、血も涙も無い。・・・同じことか。
そして、希望先輩は、首がもげるのではないかと思うくらい力強く頷く。
暴力が言論に勝った瞬間だった。

と、誰かの携帯の着信音が鳴り響いた。それにバイブレーションのせいで携帯が机の上で少し動いている。
何と言うのか、とてもメルヘンチックな曲だった。蓮華先輩だろう

か？
思わず笑いかけたが、何とか堪える。
「・・・聞いたことない曲だな。それに何と言うんだ・・・個性的な曲だな」
俺のではないから迂闊なことは言えない。余計なことを言うならば、子供向けのアニメで聞きそうな音楽だった。
ぼそっと独り言を漏らしていたらしく、それを耳ざとく聞いていた衣先輩が俺に言う。
「個性的と言うよりも、随分と子供っぽい曲だと思いませんか？」
「え、ええ。まあ・・・。衣先輩の携帯ですか？」
「いいえ」
俺の反応は、しどろもどろだ。辛うじて同意を示したが、衣先輩のだとしたら肯定してよかったのかと思う。
それに、知らぬ間に独り言を言う悪い癖が、俺にはどうやらあるらしい。
だが、衣先輩は自分のではないとあっさりと首を横に振る。そして、俺・・・の横を指差す。
そこには、真っ赤になった希望先輩がいた。
「・・・」
「・・・」
俺のその時の顔は、ムンクの叫びのようだったかもしれない。いや、大げさなことを言ってしまったが、真っ青にはなっていただろう。
それに希望先輩が、携帯を持ったまま、ただ黙っていることがより一層不気味に感じられた。

だが、希望先輩の手は微かにだが震えていた。そして、少し震えてはいるが怒りを押し殺したような声で言った。

「・・・何でこんな時に、鳴るのよ。何？ラグビー部と水泳部からのメール？・・・こいつら、後で粛清しよっと」

最後の言葉は、語尾に音符が付いていそうなくらいに楽しげな口調で希望先輩は言った。

とりあえず、名前も顔も知らない水泳部とラグビー部の奴らに心の中で合掌する。

そうしていると、俺も心に余裕が出来てきた。どうやらとばっちりはなさそうだ、と。

「希望先輩。内容は何だったんですか？さっき言ってた、協力してくれている部活の方々ですよね。報告のメールじゃないんですか？」

「え！？あ、景っち。今の聞いてた？聞いてたよね？」

「えーと、聞いていなかったことに・・・は無理ですか・・・」

「・・・情けないですわ」

慌てた様子で聞き返す希望先輩。先輩が言った事なのか、それとも携帯の着信音を指しているのか分からない。

俺は言葉を濁した。ここで堂々と嘘を吐ければいいのだろうが、生憎この状況ではかなりの無理がある。衣先輩が、俺に失礼なことを言っているが、そんなことを気にして入られない。

そんな俺の明らかに聞いていたという答えを聞いた希望先輩は、少し考える素振りを見せていたが、突然手を叩いた。

「こほんっ。あ、メール来てるー。・・・失敗かー。えーと、後できちんと話し合おうね。これで、よしっと」

希望先輩はわざとらしい咳払いを1つすると、俺たちに対して先程の発言を言い直したのだ。
そして、水泳部とラグビー部にメールを送る。
だが、決定的に遅いし、修正はもう効かない。
後で話し合おう、そう言った時の先輩の顔は明らかに話し合うつもりのない顔だった。
表情は、少し笑っていたが、目が本気だった。

メールを送信し終えると、俺を見ていつもの口調で言った。

「あー、景っち？このことは、他言無用だよ。言ったら、お姉さん泣いちゃうからね」
「・・・はい」

俺が言ったことも、きちんと聞いていたらしく釘を刺された。
希望先輩の秘密を握った嬉しさなど、どこにも無く、ただこのことを誰かに言ったら確実に俺の学園生活は終わりを告げるな、と俺は確信した。

「衣。そろそろ私たちも行くべきではないか？」
「まあ、もうそんな時間ですの？そろそろ3年生の身体測定ですわね」

俺たちの会話が、終わったのを見計らったように蓮華先輩が話し出す。
衣先輩は時計を見ると頷く。

「希望さん、後は任せましたわ」
「了解しましたー」

敬礼し、非常に軽い口調で答える希望先輩。ふざけている様にしか見えないし、実際ふざけている。
それに対する衣先輩と蓮華先輩は真剣そのものだ。まるで、これから戦争でも起きるかのようだ。

「では、行って来る」
「お2人とも、何かありましたらすぐに連絡してくださいね」
「いってらっしゃーい」

そう言って、2人は生徒会室を出て行った。
俺たちとあの2人の間には見えない壁があった気がした。それだけ、今回は本気ということか・・・。

「・・・今回ばかりは、あいつも終わったな」

俺の呟きは、すぐに空気に溶けていき、誰にも聞かれることは無かった。

第17話：喧騒なる日　生徒会室にて（後書き）

反省会　エリスと陽菜編

「あの、ちょっとよろしいでしょうか？」
「どうかされましたか？」
「あなたが・・・メイドさんですか・・・」
「？」
「な、何でもないですよ。ところで、最近思ったんですけど、ラブはどこにあるんでしょうね？私なんて、本編に登場さえしてませんし・・・うううっ」
「ここにありますよ」
「胸ですか・・・？しかも自信たっぷりに言うなんて・・・。聞く人を間違えましたね・・・」

最近書いていて思ったこと。
上でも触れましたが・・・どこにラブがあるの？と。

一応、ラブコメなはずなのに、ほとんどラブが存在してません・・・。

でも、少しずつ入ってくると思います。
そろそろ、きっと、たぶん・・・。

外伝３－１：喧騒なる日　その中心にて

「ついにこの日が来たぜ！！」

今の俺のテンションは、天をも貫くぜ。

「とりあえず、落ち着けよ」

「何を言っている。この日は１年に１回しかないんだ。俺はこの日この時のためにあれこれと準備してきたんだ。お前も参加しないか？いや、むしろ参加しろ！」

冷めたことを言う友人に俺はこの日の大切さを力説する。

この友人は、俺との付き合いは長いはずだが、最近付き合いが悪くなってきた。

「僕まで犯罪に巻き込まないでよ。自分１人でやれば？」

「なっ！？貴様、それでも親友か！？俺とお前の友情はこんなもんだったのかああっ」

「そんなに友情を深めた覚えないし」

「うおおおおおおっ、のおおおおおっ！！」

俺は、頭を抱えた。

俺とあいつの友情ってこんなもんだったのか。

が、その友人は冷たい目で俺を見ている。

泣かない、泣かないぜ俺は。

ぐっと涙をこらえる。

「とりあえず、僕は行かないし、ついでに君のやることに巻き込まないでよ？」

「ちくしょおおおっ、裏切り者めがあああああぁぁぁぁっ！！」

とりあえず、泣いてもいいか？

追い討ちをかけるような親友の冷たい言葉を受け、俺は涙を流しダッシュした。

ここは、校門前のせいか多くの学生諸君が俺を見ているが、そんなことは気にしないのが俺流。

「ド、ドップラー効果か！？」

誰かがそう言っていた。

そして今日、俺こと、五味　大助　（ごみ　だいすけ）の戦いが幕を開けた。

俺は、教室に入るとさわやかにクラスメイトに挨拶をする。

今日も、我ながらに決まったな。

「グッモーニン？諸君」

「うわっ、変態が来た！？てか、五味がいる時点でバッドよ、Ｂ・Ａ・Ｄ」

「とりあえず、半径３メートル以内に近づかないで、何だか孕まれそうだから」

だが、挨拶をしたものの、返事は挨拶ではなかった。いきなり変態

はないだろ、変態は。それに挨拶は円滑な人間関係の基本ですよ？
このように俺は、クラスの女子諸君には、すこぶる評判が悪い。
まあ、このクラスの女子諸君の言葉から日頃の俺の行いがよく分かるだろう。

「つーか、何もしてねえのに孕むわきゃねーだろ。常識を知れ、常識を」
「あんたに言われなくたってそれくらい分かるわよ。でも、あんたに常識は通用しないじゃん」

俺が文句を言うと、まるで俺が常識がない奴とでも言いたげに反論された。

「一応、俺人間だぜ？」
「何で、私に聞くのよ。それにあんたは人間じゃないから」
「んなっ！？貴様らは俺が人間であることさえ否定するのか！？」

だが、クラスの女子諸君は皆揃って頷く。頷かないでください。
どうでもいいが、男子諸君も頷いている。お前らは黙ってろ。

「お前ら、俺のどこが人間じゃないと言うんだあああっ！？」
「全部だろ？」
「いや、水じゃなくてエロが8割を占めているかもしれんぞ」
「やばっ、私、あいつと長く話しちゃったよ・・・。妊娠したらどうしよう・・・」
「うーん、とりあえずちゃんと洗っておけば大丈夫じゃない？」
「他人事みたいに言わないでよ」
「だって、他人事だしね」

何だ、この扱いは・・・。俺は、空気感染する細菌か何かか？

と言いたいが、今までもこうだった。
それに、俺自身も認めているわけだが・・・。

「ま、今日の楽しみに比べれば小さい、小さい。・・・ぐふふ」
「ひっ！」

俺と目の合った女の子が露骨に目を避ける。
だが、その反応はいくらなんでも、傷付くんだぜ。
俺の心はガラスのように割れやすく、繊細なんだ。

・・・嘘です。誰からも心臓に毛が生えてるとか言われます。

俺は、傷心のまま席に着く。

「・・・野郎しか見えねえ」

俺の周りは、皆男子だ。
色気のかけらすら存在しない、汗臭い檻に中にいる俺。
正直、耐えることなど不可能だ。

「うがあああっ、何で周りが体育会系ばっかりなんだあああっ！！」

意味なく叫ぶ俺をクラスの皆はまたかと言う視線で見る。
新学年に進級して数日。
未だに、女子諸君には避けられっぱなしなんだよな。

「体育会系で悪かったな、変態」

「そう思うなら、退いてくれるとありがたいぞ」
「それは無理。このクラスの女子を見てみろ」
そう言われたから、見渡してみる。
ない、ない、ない・・・。
「ぺった・・・いや、ない・・・、まな板？」
「いや、お前の言いたいことはよーく分かるが、今俺の言いたいこととは全然違う。それに、ストレートに言いすぎだぞ、お前は」
「ま、このクラスに色気のある女子はいないから、興味０。むしろ女子ですらないと俺は思ってるし、無いものを求めても仕方ないことだろ」
「確かに、色気がないことは否定できないな。何でこのクラスには、色気のある女子がいないんだろうな」
俺が言いかけた言葉を理解するとはなかなかやるな。
そう言って、俺の言葉に同意する友人Ｂ。
こいつは、エロさを表に出さないむっつりスケベなタイプだ。
が、盛り上がる俺たちを一瞬で凍りつかせる声が聞こえた。
「ふーん？」
「あ、いや・・・言葉さん・・・。こっ、これは言葉の綾ってやつだよ」
振り向くとそこには、１人の女子生徒。
慌てて友人Ｂは弁解をするが、言った後にしまったという顔をする。
友人Ｂは冷たい目で見られ、冷や汗が止まらない。
情けない、俺は全く動じてないはずっ！！・・・だがどうして頬を冷たい液体が流れる？

「へーっ、面白いこと言ってくれるわね。偶然かな？私の名前も言葉　綾　（げんば　あや）なんだよねえ・・・。分かって言っているのかな？」
「偶然、偶然。だよな、五味？」
「友人Ｂはわざと言っているぞ。それに、こいつがお前の胸がまな板だってさっき言ってたぞ」
「言ってねえええっ！！いつも、お前が言ってるだろうが」
「はっ、知らんな。この期に及んで責任を擦り付けようとは笑止千万。大人しく制裁を受けるがいい」

責任を擦り付け合いをする醜い俺たち。
そんな俺たちを見て、いらいらするまな板。
だが、死んでも本人に向かっては言えない、俺チキン。

「あー、もうっ！！うるさい！！！」
「ぐあっ」

イライラが爆発し、殴りかかってきたまな板。あ、これじゃあ、他の女子諸君と区別できねーな。
俺は本能的にそれをかわした。
しかし、友人Ｂはその鉄槌を食らってしまったようだ。力なく机へと倒れる。

「な・・・分かっただろ？」
「あ、ああ・・・。お前の犠牲は忘れん」

そう言って、俺は亡き友に合掌する。
このクラスの女子は凶暴かつ力も持ち合わせた者が多い。言葉、もといまな板はその典型例だ。

「女房は死んだ、俺は自由だ！」
「勝手に殺すんじゃねえ。つーか、俺はお前の女房じゃねーし、それに声に出して言う所がわざとらしいぞ」
俺は、ガッツポーズをする。だが、友人Bは生きていた。俺の好みの大前提は女の子だ、間違っても男には惚れん。
「おお、友人Bよ。生きていたか。俺だって、男と結婚するのだけは勘弁したい」
「誰が、友人Bだ。Aは誰だよ？って、その前に俺の名前を覚えてないだろ！？田中だ、た・な・か。簡単なんだから、いい加減覚えろ！」
どうやら、友人Bの本名は田中だったらしい。
こいつと出会って数日、俺の話を聞いてまともに突っ込んでくれる唯一の男子生徒。希少な存在だ。
「そうだ、友人Bは田中だったな」
俺は、1つ賢くなった。
野郎の名前など覚えていても何も特にはならん。が、女子は初日で全員覚えたけど・・・。
「俺、未だにこんな奴が学年トップだなんて信じられないんだけど・・・」
「それは、私も同感。1位が、これじゃあね」
「ま、君たちは変態以下ということだよ」
呆れる低脳な2人に俺は、踏ん反り返って言う。

「「そんなことで、威張るな（じゃないわよ）！！」」
「・・・ごめんなさい」

すぐに謝る俺は、ただのチキンです。
だってー、これ以上言ったら殺すって目を2人ともしているだもーん。

ああ、ダメだ。言ってて気持ち悪い・・・。

「田中。俺、ホームルーム休むって、先生に言っておいてくれ。大事な用があるからって。じゃあ、行って来るぜ」
「今年もかよ。ま、頑張れ」

そう言って、俺は席を立ち歩こうとする。
田中の投げやりな応援、確かに受け取った。
しかし、どうせなら女の子に言ってほしい。

「いってらっしゃーい。・・・じゃなくてっ、ちょっと待ちなさい！」
「ぐえっ、何をする言葉！？俺は、これから大切な用事があるんだ。それに1人ボケツッコミは寒いから止めてく・・・ごめんなさい」

だが、送り出してくれたはずのまな板にカッターシャツの襟を掴まれ止められる。
女の子と言っても、俺にだって相手を選ぶ権利くらいはあるはずだ。
首に思いっきり襟が入って苦しい。

それに1人ボケツッコミはつまらんと言ったら、睨まれました。
俺にここまで関わる女子は良くも悪くもこいつだけだ。

「ねえ、どこ行くの？」

まな板が色っぽく囁くように言う。

女の子に耳元で囁かれるのは、うれしいはずだ。

だが、寒気しかしないのは何故だ？

「もちろん、今日の下調べでございますよ」

俺は、包み隠さず申告する。口調がおかしいのは、気のせいだ。

だが、こんなことを言ったくらいで、俺の計画は止められない。

「はぁー、今年も本気でやる気なの？」

呆れたように言うまな板。

一瞬手の力が弱まった今がチャンスだ。

「じゃ、そういうことだから。いってくるぜ、まな板！」

「あっ、いつの間に！！っ！？まな板って呼ぶなあああっ！！」

手を振りほどくと、一目散に教室の扉から逃げ出す。まな板は何故か胸を手で隠しながら悔しそうに叫んだ。ない胸を隠しても、元々ないんだからいいと思うがね。

俺はこの教室に、しばらく戻ることもないだろう。

俺の戦いはこれからが、本番だ。

８時３７分　携帯による連絡

「・・・もしもし、あの変態を取り押さえるのに失敗しました。あ、はい。そうです。すいません。私も全力で叩き潰しますので。ええ、風紀委員会の名において、今年は絶対に阻止します。それに、・・・まな板って呼んだこと、後悔させてやるんだから」

どう考えても、個人的な恨みで五味　大助を追う者もいるのだが・・・。

８時２８分　携帯の会話

「景、ちょっといいか？ま、今年はお前も生徒会に招集されることは間違いないと思って電話したわけなのだよ。いや、別に喋ってもいいんだが、あのことだけは黙ってくれないか？例の秘密の隠れ場所のことだ。すまんな。止めておけ？俺を誰だと思ってるんだ？頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群で本能に忠実に生きる男、五味大助様だ。ん？まあ、お手柔らかにお願いしたいと思っているのだよ。写真撮ったらいるか？それとも土産話にするか？って！？おいっ、勝手に切るな！」

大助もまた誰かに電話していたのであった。

だが、電話の相手に切られたらしい。

「用件は伝えたから、後は俺次第だ。待っていてくれ、天使ちゃんたち！！」

そうして、大助は駆け出していった。

８時３９分　１階西側廊下

びくっ！？

「はっ、何だ！？・・・気のせいか」

俺は、今何かとてつもない電波を受信した気がしたのだが、気のせいのようだ。
持っていた手鏡で確認すると、髪の毛がとある妖怪の如く立っているではないか。
ワックスを使ったわけでもないのに一体・・・？
まあ、いいや。それよりも気になるのは・・・。

「・・・しかし、この張り紙は一体なんだ？あからさまに怪しいだろ」

教室から逃げ出してから数分。
俺は、とある掲示板の前にいる。
そして、掲示板に張ってあった、ある張り紙の前に立ち止まっている。

「水着ショーを開催します・・・。って、誰がこんなものに、こんなものに・・・」

だが、俺はがっくりと膝をつく。
罠だと分かっていても行きたい、行きたい・・・。

「だが、俺にはやらねばならんことがある！！・・・ということで、・・・あ、もしもし、俺だよ、俺。えっ、俺って誰だ？あ、ちょっと待て！切るな、切るなあああっ！！」

今日は、電話を切られる運命なのか？

８時４３分　水泳場

「亜樹乃。ねえ、これ引っ掛かると思う？」
「うーん、どうだろうね？でもでも、捕まえないと面倒だし」
「ま、そっか。おいっ、野郎共、よく聞きな！我々、水泳部があの変態を捕まえて、部費アップを勝ち取るんだ。いいな、ヘマするんじゃないよ！！」

１人の女子の扇動で、俄然盛り上がる男たち。
そう、ここは水着ショーの会場。プールだ。

「「うおおおっ！！！」」

だが、目的の五味　大助は現れなかった。

「・・・」
「あはは・・・。来ないね」
「亜樹乃・・・それ言わないで・・・。これってさ、あいつに来てほしいとは思わないけどさ。・・・来ないと来ないで・・・何か負けた気がする」
「そ、そうなんだ・・・。あはは・・・」

割と乙女心は複雑らしい。亜樹乃はただ苦笑いを浮かべるだけだった。

彼らがスタンバイしてから5分は経っただろうか。
ふいにドアを水泳場の扉を開く音が聞こえた。それは、小さく微かな音だった。

「捕まえろおおおっ」
「ん？のわっ！？」

誰が号令をかけたのかは分からなかった。
ただ、隠れていた男子が次々と入り口に殺到し、侵入者を押しつぶす。

「ありゃりゃ・・・。ねえねえ、あれ潰れちゃったんじゃない？」
「かもね。まあ、いいわ。みんな、退いて」

亜樹乃は、男たちが積み重なったピラミッドを見る。何かキモイ、と思ったことは口にしない。
同じようにそれを見ていたもう1人の女子は男子はそこを退くように言った。だが、彼女は亜樹乃と対照的にどこか満足そうだ。
徐々に、その潰された人間が見えてくる。それと同時に皆の期待が高まっていくのが分かる。
が、そこにいたのは・・・。

「・・・」

「「部長！？」」

水泳部の部長だった。
どうやら、電話の相手はこの人だったらしい。
ちなみに電話の内容はこうである。

「だが、俺にはやらねばならんことがある！！・・・ということで、・・・あ、もしもし、俺だよ、俺。えっ、俺って誰だ？あ、ちょっと待て！切るな、切るなあああっ！！」
「うるさい、本気で切るぞ」
「まあ、待ってください。水泳場で水泳部が何やら面白そうなことをやってるんですが・・・知ってました？」
「いや、初耳だ」
「もしかすると・・・先輩を部長から引き摺り下ろそうとしているかも・・・」
「何！？今すぐ、確かめねば。すまん、助かったぞ」

この部長は、どうやら部長職に固執しているようだ。

「あーあ・・・。これどうしようか？」

目を回す部長を見下ろす水泳部員たち。
その表情はもちろん冴えない。

「・・・部費獲得できなかったな」
「何で、部長が来るんだよ」
「この人呼ぶといつも何か起きるから呼ばなかったのに・・・」

部長の心配など、そこには一切存在しない。

「帰ろうよ。もう無駄みたいだし」
「そうだね、亜樹乃。みんなも悪いね。・・・一応、結果だけでも報告しておかないと」
「別に気にすんなよ。みんなで決めたことだしな」
「そうそう。今更謝るなよ。体育祭や球技大会がまだある！」

今回の作戦のリーダーらしき女性が謝るが、誰も気にする様子は無い。
むしろ、皆ポジティブだ。失敗にもめげないが、反省もしない。終わったことは全て水に流す。これが、水泳部だった。
彼らは気絶した部長のことなどすっかり忘れ、各々教室へと戻っていった。

9時11分　1階渡り廊下付近

「うおおおおおっっ！！！？」

俺は今、風になっている。
その理由は簡単。ラグビー部の連中に追い掛け回されているからだ。中庭でばったり、こんにちは。そのまま、追いかけっこに突入。つーか、暑苦しい。うざい。臭い。何故、この部に麗しい乙女はいないのですか！？
逃げながらも、後ろを振り返る。もちろん走ることを止めることは無い。
「はっはっはっ、追いつけるものなら追いついてみたまえ。愚鈍な

諸君。もはや俺に触れることすらできようだね？」

俺は調子に乗って、相手を挑発するくらい余裕がある。さっきから追いかけてくるのはいいが、全くといっていいほど追いつかれる気配が無い。

第一、今の俺を倒せるものなど皆無。戦車にだって生身で勝てるぜ。

・・・嘘、嘘。そんなことできたら、人間じゃねえだろ。

虎なら、素手で殺れるはずだがな。・・・それも嘘。

しかし、退屈だな・・・。ちょっと、挑発してみるか。俺はスリルを楽しむ男なのだから。

だが、ある友人はこう言う。「ただのマゾだろ？」と。

「どうせなら女の子に追いかけられた方がうれしいぞ。お前らみたいな男なんてお呼びじゃないって事。早く帰ってママのおっぱいでも吸ってな。おしーり、ペンペン！」

さらに舌を出して、べーっとしてみた。ついでに尻も叩いてみた。

だが、俺が調子に乗ったせいで、ラグビー部の連中が怒りによって覚醒したらしい・・・。

げっ、やばっ！？速度上がりすぎだろ、こいつら！？

「あの野郎、調子に乗りやがって。待てえええっ、ぶるわあああっ！！」

「あいつらを俺好みの可愛い女の子だと思えば、そうだ、女の子と思えば・・・・・絶対無理！どんなに妄想逞しい俺でも無理！！」

「何ごちゃごちゃ言ってやがる、変態がっ！！大人しく投降しろっ！！」

再び逃げ出す情けない俺。出来る限り、他の事を考えれば疲れない

はず・・・・。
俺を追いかけてくるラグビー部の連中を女の子と思い込もうとするが、全然無理だった。
あの、濃い顔、野太い声、テカテカと光る汗・・・どこにも女の子と思える要素がねえええっ！！
絶対、あの汗でベタベタの手で俺の繊細な肌に触れてほしくない。
つーか、俺も少し汗かいてきてるし、汗。何かべたつくし・・・。
あいつらと同類じゃん！

「のおおおっ！俺は、俺は・・・あいつらとは違うんだあああっ！！」
そう言いながら、横から飛び出してきたラグビー部を次々と避ける。
見える。俺には道が見えるぞっ！避けて、避けて、これでもかというくらいに避ける。

そうしているうちに、1人の男がついに倒れこんだ。それがきっかけとなったのか幾人かが、同じように倒れた。
・・・何だ、もう力尽きたのか？

「ぜえぜえ・・・。何だ、あの・・・変態は？無理だ、俺たちには無理だ・・・」
「先輩、ここまで来て諦めていいんですか！！」
「いや、俺はここまでのようだ。後は、お前たちの世代に任せる。もう1度、花園に行きたかった・・・」
「先輩？先輩！？先ぱーーーーい！！」
「くっ、ダメだ。先輩は・・・もう・・・」

後ろを振り返ると、もう誰も追いかけてこなかった。
何なんだ、あの無駄に熱い奴等は？

「アホは、放っておくに限るな。俺に奴等を労わる心はない！」
俺はもう後ろを振り返らない。
このセリフ、ちょっと、かっこよくね？・・・だが、自分で言うと空しいもんだ。

「ちくしょおおおっ！！先輩の仇、覚悟しろ！五味　大す・・・け？」
「いねえ！？どこ行った？」

だが、彼らが気づいたときには、決定的に遅かった。
もう、五味　大助はそこにはいないのだから。

９時３４分　１階渡り廊下

「くしゅん・・・」
「どうした、衣？」
「いえ、誰かが私の噂をしたような気がしましたものですから」
「では、何故、早速携帯でメールを打っているのだ？」

誰かが噂をしているのですね。ですが、私はすぐにその相手が頭の中に浮かびました。
万年幼児体型にして、口だけは達者な希望さんですわ。
私は、すぐにメールを打ち始めます。『今私の噂をしていませんでしたか？』と。

「犯人なんて決まってますもの」
私は、蓮華さんの疑問にきっぱりと答えます。しばらく私の顔を見ていらした蓮華さんもすぐに理解したようです。
「・・・希望か」
「ええ」
私と蓮華さんの会話はすぐに終わってしまいます。
それは、仲が悪いと言うわけではないのです・・・。
その原因は、先程から私たちの目の前にありました。
「これは・・・どうしましょう？」
「ああ・・・どうしようか？」
思わず蓮華さんがいつもの口調から深水さんにしか使うことの無い口調に戻るくらいに衝撃的な光景だったのです。
「先輩！申し訳ありません！！俺たちは奴を追えませんでした！」
「もういい、もういいんだ。全ての責任は俺が取る！お前たちに責任は一切無い」
「先輩。罰なら俺たちが受けます！先輩たちに受けさせるわけにはいきません！先輩たちがいたからこそ今の俺たちがあるんです。先輩たちのいないラグビー部なんてありえないんですよ！！」
「俺は、俺は・・・お前たちのような後輩を持って幸せだ！！」
「俺たちも、素晴らしい先輩と一緒にいれることを幸せに思います！！まだ先輩たちには引退させません！もう1度、花園へ行きましょう！」
「うおおおっ！！」

涙ながらに語りあうラグビー部の皆さん。
そして、がしっと男同士で抱き合いましたわ。互いを確かめるような熱い抱擁。
私は、この光景を見ているだけで、少し・・・吐き気がしますわ。

「・・・青春だ」
「・・・鬱陶しいだけですわ」

蓮華さんは、どうやらこういうのがお好みのようです。
ですが、私はこの光景を見て顔を背けました。別に男性同士が抱き合っているのが嫌いとかではなく、単に暑苦しいのが嫌いなのです。

「ここにはいませんわね。次に行きますわよ」
「そうだな」

五味　大助。これほどの力を持っているなんて・・・。
・・・侮れませんわね。
私は、さらに変態打倒の決意が固まるのを感じました。

外伝３－１：喧騒なる日　その中心にて（後書き）

注意：この外伝の主人公は少々変態です。

今更と思いますが、こんなことは前書きに書けばいいと思う。
今回も読んでくださった皆様、ありがとうございます。

いつもとは少し違った雰囲気になっているかもしれません。
まあ、主人公が主人公ですので・・・。
一応、抑え気味にしてみました。（抑えたのか、これくらいにしかできないのかは別として）

１人でも楽しんでいただけたら、幸いです。

第１８話：喧騒なる日　生徒会室にて２

「うーんっ」

希望先輩は、衣先輩たちがいなくなった途端に背伸びをする。
俺は、それをソファに座りつつ眺める。いつもは、緊張状態なのか、と思う。

「全く・・・、暴力で言論を弾圧するなんて、民主主義に反してるよ。暴力で何でも解決しようというあの態度。サルだよ、サル。脳が筋肉でできてるのよ、きっと。あ、それとも、お嬢様だから私のような貧乏人は眼中に無いてっか？それに、あの嘘くさいお嬢様ですって言わんばかりの言葉は何？あれがデフォルトだったら、まじ笑える。無駄に背はあるくせに胸はぺったんこだしー。あははっ。・・・って、言ってて空しいよー。何か私、バカみたいだよー」

そして、ここぞとばかりに衣先輩の悪口を言う。衣先輩が聞いていたらと思うとぞっとするが、幸運にも外出しているためにこの部屋にはいない。
このように衣先輩と希望先輩は仲がいいのか悪いのかはっきりしない部分がある。
だが、最後の言葉はトーンがかなり落ちていたような気がした。

・・・空しいなら、言うなよ。

「はぁー、すっきりしたー」

一通り衣先輩への悪口を言い終えた希望先輩は、すっかり元通りだ。
俺は、そんな先輩を見てドキドキしていた。

何と言うのか・・・危ない橋を渡っているなと思ったのだ。衣先輩が聞いていないことを願うしかないな。
・・・血を見るのは御免だ。

「・・・」
「景っち。なーに？その、何だか俺の方が寿命が縮まりました、と言わんばかりの目は？」
「分かってるなら、言わないでください」
俺の視線の意味を的確に捉える先輩。
流石に新聞部部長だけはあるな。無駄に観察眼だけは鍛えてある。

「まあ、悪口言ってた私が言うのも、難だけど・・・それなりに衣っちとは仲はいい方なんだよー」
「分からなくもないです」
「うん、よろしい。お姉さん、物分かりのいい子は嫌いじゃないよー」

そう言って、立ち上がると俺の頭を撫でる。
小学生に撫でられているみたいで、かなり複雑な気分がする。

「止めて下さい」

俺はその手から逃れる。
払おうかと思ったが、以前それをやったところ泣かれた。嘘泣きだったが・・・。
それでも周りの視線は突き刺さるように痛く、当時の俺は今のように先輩がこんなんだとは知らなかった上に、嘘泣きだと気づいていなかったので慌てふためいていた記憶がある。

だから、今回は横にズレた。

「むー」

「うぅっ・・・・」

何だか、先輩はむくれているが、そんなことはどうでもいい。

横から、声がしたが・・・。

「おかえりなさい、深水先輩」

どうやら魂が帰ってきたらしい。

が、まだ顔が少し青白いような気がする。

「・・・婆ちゃんに帰れって言われた」

「・・・優しいお婆さんですね」

いつもような元気がない深水先輩。まあ、あれは仕方ないよな。

それにしても、三途の川まで行ったのか・・・。

「ああ、優しい人だった・・・。亡くなってもう１０年は経つ。今でも、こうして俺を助けてくれるんだ。・・・景、何でそんなに人を珍獣を見るような目で見る？」

「・・・いえ、毎度の臨死体験ご苦労様です」

「蓮華は、最近周りの目を気にしなくなってきたからなあ・・・。所構わず抱きついてくるから、時折、机の角とかで頭打ったりするんだよな、って聞いているか？」

「・・・いっそ、臨死と言わずに死ねば？」

「んなっ！？」

三途の川から戻ってきた深水先輩は、いきなり惚気始める。

それに嫌気が差した希望先輩が、死ねと吐き捨てる。
それにあからさまにショックを受ける深水先輩。と言うより、彼氏彼女のいない奴に毎回、毎回惚気ないでほしい。これでも尊敬している数少ない男の先輩の1人なのだ、この惚気さえなければ・・・。

俺の知り合いの男の尊敬している先輩は2人いる。
1人は、この深水先輩。もう1人はバイト先の先輩。両者とも彼女持ちという羨ましい身分だ。別に彼女がいるからではない。
仕事も出来る上に、他人に対しても常に気配りを忘れない。但し、深水先輩はたまに忘れて惚気ることもあるが・・・。

ただ、バイト先の先輩の方は、深水先輩とは違い、全く彼女の話はしない。その理由は先輩の性格もあるが、むしろその彼女に問題があるような気がする。彼女がいると知ったのは、バイト先にその彼女が押しかけてきたからであり、いつもあまり表情を変えない先輩の苦々しい顔を俺は忘れないだろう。

俺にも早く春が来ないだろうか・・・。
この先輩の惚気っぷりを見ていると、つくづくそう思うのだが、残念ながら俺には肝心の相手がいない。

「・・・俺の春は一体どこにあるんだ？」
「さあ？・・・ううんっ、探せばあると思うよー」
「・・・」

俺の独り言に希望先輩は、ぼへーっと答える。だが、すぐにフォローの言葉を付け加える。
あまりにも適当に答えたその言葉を聞いていると、まだ俺の春はこないような気がした。
むしろ、遠のいた気さえする。何せ、即答されたくらいだからな・・

・。

と、そんなことを考えていると再びあの着信音が生徒会室に鳴り響く。

「・・・」
「・・・」
「あ、衣っちからだ」

流石に2度目にもなると、もう普通の対応だな。先程のように慌てる素振りは全く無い。
そして、メールを読み上げる。

「えーと、今私の噂をしていませんでしたか？だって・・・」
「っ！？」

俺と希望先輩の額には、少し汗が滲んだ。
この状況を理解していない深水先輩だけは頭に疑問符を浮かべていた。
これが、女の勘ってやつなのか！？あまりの鋭さに驚く俺と希望先輩。

「・・・ま、まあ、気にしないでおこうよー？」
「は、はあ・・・」

無理に明るく振舞おうとする希望先輩。
声、裏返ってますよ。

「お仕事頑張ってねー、っと。これで送信っと。あ、そうそう、景っち？衣っちのノートパソコン取ってくれる？」
「ん？ああ、これですか」
「ありがとー」

急に真面目な雰囲気に戻る希望先輩。
俺は、衣先輩の机の上にあったノートパソコンを希望先輩が座っている前へと置く。
そして、後ろからその画面を覗き込んだ。

「・・・何ですか、これ？」
「それは、この日のために作った監視プログラム、ツヴィンガー・ツヴァイだ。味方の位置を正確に把握することは大切だからな」

覗き込んだ画面には、学園中の見取り図と、点滅する数種類の点が存在していた。
赤、青、緑、・・・ピンク。

「・・・ところで、これは何を示しているんですか？」

俺は、疑問に思って聞く。
深水先輩は、もったいぶった素振りを見せる。

「説明したいのは、やまやまなんだが・・・」
「じゃあ、お姉さんが1から説明してあげるよー」
「いいんですか？」
「いいよー」

俺たちの会話に希望先輩が割り込んできた。
ちらっと、深水先輩を見ると・・・何だかバツの悪い表情をしてい

た。
きっと、あの言葉の後に説明してくれるつもりだったに違いない。
後で、フォローしておけばいいか。

「それで、これは・・・」
「あ、これね。赤は、協力してくれている剣道部の子たち。青は風紀委員。緑は衣っちと蓮華っち」
「学内隈なく・・・いる訳ではないんですね」
「まあ、人数が足りないんだ。ただ、保健室は1階だ。3階や屋上には配置する必要はないと思ってな。まあ、一応2階にはそれなりに配置してはいる」

深水先輩が言う。
確かに、保健室は1階だ。だが、あいつのことだ。常識が通じないんだよな・・・。

「・・・」
「どうした？」
「どうしたのー？」

俺が、急に黙るものだから先輩たちに心配をかけたらしい。

「いえ・・・。一応知り合いなんですけど・・・、あいつに常識は通用しませんよ？」

俺は、実際にそういうとこを見たことがあるので、よく分かる。
とりあえず、普通の人間であるという概念で見てはいけない。

「景っち。一応、あれも人間なんだから、テレポートしたり、空を飛んだりするわけじゃないんでしょ？」

「・・・まあ、そうですが。それにしても校門には誰もいないんですね」

俺は、この話をさっさと切ると再びパソコンの画面に目をやる。
別にこの話を続けたいわけではない。元の話題へと戻す。

「別に出て行ってくれる分には、こっちとしては問題ないわけだし。
衣っちとか蓮華っちは割と殲滅したがってるけど、基本的にこの2人の例外を除いては、みんな持ち場を離れることは無いよー」
「さいですか」
「さいです、さいです」

割と合理的に考えているようだが、果たしてそれが吉と出るか凶と出るかは、俺にもよく分からない。
ただ、そこに漠然とした不安を感じざるをえなかった。

「守るだけで勝てますかね？」

俺はその不安を口にした。
だが、希望先輩は不敵な笑みを浮かべる。それは、余裕の表れか、それとも焦りを隠したからなのか。

「そのために景っちを呼んだわけですよー」
「？」

いきなり俺を呼んだ理由を暴露する希望先輩。横では、深水先輩も頷いている。
だが、俺にはさっぱり分からない。
そんな俺を見て、希望先輩は人差し指をこちらにびしっと向けた。

「ちっちっちっ、甘いよ景っち。守るだけなら、別に衣っちも蓮華っちもいらないのー。さっきも言ったでしょ、衣っちとか蓮華っちは殲滅したがってるって」
「確かに言いましたね」
だから、何だと言うのだろう？
俺は未だに理解できない。
「つまりー、景っちはある程度、あれと関わりがあるでしょ？隠れそうな場所とかを教えてもらおうと思って呼んだんだよー。あ、でも。言い方は悪いかもしれないけど、友達を売りたくないって言うなら別に言わなくてもいいよー」
「・・・そういうことですか」
ようやく俺は希望先輩の言いたいことが理解できた。
確かに、俺の方があいつには詳しいからな。
「分かりました。俺としてもあいつに警告はしましたから、今日は敵同士ですよ」
「そっかー。景っちも意外と変わったお友達持ってるよね」
「・・・否定はしません」
変な友人・・・か。確かに去年同じクラスだったとは言え、何故友人になったのだろうか？
・・・類は友を呼ぶ？もしかして、俺も変態予備軍だったのか？
・・・友人をやめた方がいいだろうか。俺は今ちょっとだけ真剣に今後の身の置き方について悩んでしまった。
「じゃあ、そろそろ話を始めますね。まだ保健室には現れていない

ということを考えると、体育館裏が怪しいですね」
「どうしてだ？」
深水先輩の言うことはもっともな話である。
体育館は、保健室からはもっとも遠い場所な上に、その裏は1本道なために挟まれたらまず逃げ場は無い。
リスクの決して低い場所ではない。

「木々が多いので、隠れる場所も多いですから。ただ、木の上に注意すれば問題ないと思います。後は、屋上のタンク裏と非常階段、部室棟の各部屋。ここは何か道具をしまってある可能性があると思います。この時間に人が来る可能性はかなり低いですから。特に活動状況が怪しい所を中心に見たほうがいいです。後、念のために保健室を調べておくほうがいいと思います。まあ・・・あと1つ、これはどうかなと思うことがあるんですが・・・」

ただ、最後の1つだけは言葉を濁してしまう。
俺はそこまで、内部構造に詳しいわけではない。それに、これを知っているのは、おそらく工事業者くらいしかいない。
希望先輩は、俺を気遣ってくれているのか、いつもよりも声の音量を下げて聞いてきた。

「景っち。可能性があると思ったら、全部言っていいよ。どうせ探すのは私たちじゃないし」
「じゃあ、一応・・・」

俺はその可能性を、一応言っておいた。
先輩たちは、しばらく考えていた。確かに、これは俺自身もどうかと思う。が、ありがちな話でもある。

「分かった。全部、衣っちに伝えておくよー。ちょっと待っててー」
2人とも真剣に考えていたが、希望先輩は顔を上げるとそう俺に言った。
そして、携帯で衣先輩と話し始めた。

「しかしまあ・・・あいつについて詳しいな。あれか？」
「いえ・・・何と言うんでしょう・・・。あ、少なくともあれではないです。」

あれはないだろ、あれは・・・。
深水先輩の言葉を俺は全否定する。俺があいつのことをそれなりに分かるのは、去年何度か遊びに付き合ったからだ。もちろん、こんな犯罪まがいの行為ではないけどな。
だから、それなりにやりそうなことは分かる。

「大助って、キャラが濃いからね。印象だけは残るんだよね。良くも悪くも・・・」

これは、あいつの1番の親友の言葉だ。
付き合いが長いらしく、達観した様子だったのを覚えている。

「ん？何か動きがあるな」
「・・・」

先輩の言葉に俺もパソコンを覗き込む。
よく見ると、中庭辺りでの赤い点の動きが激しい。

「多分、今はここにいるんでしょうね」
「だろうな。希望、今ターゲットは中庭だと伝えてくれ！」

「あー、はいはい。聞こえたでしょ？うんうん、よろしくねー。ばいばーい」

適当に受けると、これまた適当に伝える希望先輩。
伝言ゲームか、これ？

そんな時、ふいにドアをノックする音がした。

「勝手に入っていいよー」

さっきから、適当かつ軽い希望先輩。
携帯電話をソファーに放り投げながら答える。
だが、携帯は柔らかいソファーでバウンドし、再び空を舞う。
それに希望先輩は気づくがもう遅い。運が悪いとしか言えないだろう。

「あー！？」
「・・・」

携帯、床に落ちたな・・・。
落とすと、端に傷が付くんだよな。俺は2年前に買った携帯を取り出す。

「・・・そろそろ買い換えようか」

俺は、乱雑に扱ってきたせいで傷だらけになっている携帯を見る。
2年で傷だらけになるのは、きっと物持ちが悪いのだろうと思う。

「あーっ！？ディスプレイに傷がついた！？この前買い換えたばっ

かりなのに！」

落ちた携帯を手に取ったままの格好で固まる希望先輩。

まあ、買って1ヶ月も経たずに傷つけてるよりはましだよな・・・。

「失礼します、・・・え、え～と・・・」

そして、ドアが開いた。

入ってきた奴は、お前らは一体何をしてるんだ、と目で訴えかけてきた。

携帯を持ったまま半泣きの希望先輩、奥側のソファーでじっとパソコンを見て我関せずの深水先輩、そして希望先輩にどう言葉をかけようかと思案する俺。

特に、入り口付近が俺と希望先輩のせいで異空間と化している。確かに入りにくい空間だと思う。

だが、希望先輩が部屋に入ってきた人物に気づく様子は無かった。

「あ・・・ああ・・・携帯が・・・新しい携帯がー・・・」

いつもなら、何か作業をしていても必ず気づくはずだが、今回は相当ショックだったらしいな。

俺は、俺の携帯と希望先輩を交互に見やっていた。

・・・互いにボロボロだ、と。

第１８話：喧騒なる日　生徒会室にて２（後書き）

すっかり忘れていましたが、６月２８日の更新時に１００００アクセスを達成しました。
これも、来て頂いている皆様のおかげです。
本当にありがとうございます。

そして、今回の話ですが、割とまったりとした普通の話です。
急展開とか全くありません。
ちなみに本編主人公と外伝３の主人公は友人です。どうでもいいことですが。

５章の喧騒なる日は、あと本編で２話。外伝で２話あります。
１つのエピソードが無駄に冗長になるのが、私のクオリティーです。

外伝３－２：喧騒なる日　その者、逃亡中にて

９時４４分　第１校庭　保健室外

私は今、希望さんと電話で話しています。
有栖さんも、こちらの味方になってくださったようです。そのお蔭もありまして、私の元に情報がそれなりに集まってきました。

「まあ、そうですの？ええ、聞こえてますわ。私たちもすぐに行きますわ。引き続きお願いしますね」
「どうした？」
「中庭に現れたそうです」
「では、行くとしよう」
「先輩、待ってください！とおっ・・・。っ！？」
「・・・」

電話を終えて、私たちが中庭へ向かおうとしますと誰かが呼び止めてきました。
辺りを見回すものの、どこにも姿がありません。ですが、上から女の子の声がしたと思うと、何かが降ってきました。
その降ってきた方に向かって蓮華さんは音も無く足を突きつけました。・・・顔に当たりそうですわ。

「足を下ろしなさい、蓮華さん。はしたないですわ」
「・・・それもそうだな」

蓮華さんは、私がそう言うと高く上げた足を下ろします。足を向けられた相手の方は、今にも泣きそうです。
蓮華さんは、スカートが短いのですからそのようなことをするべき

ではないと思いますわ。パンツが見えていますし・・・。

「・・・た、助かりまぢた」

「ところで、あなたは一体何をしているの？」

私は、言葉が少しおかしいとかそういうことは無視して問いかけます。

この子、風紀委員の子ね。剣道部じゃなくて、良かったですわ。２人も問題児、もとい変人は要りませんものね。

小さくて可愛らしいとは思うのですが、木の上から落ちてくる時点で、変ですわ。

「いえ、先輩方に報告しようと思いまして」

「何？」

「先輩、今のところ異常ありません。引き続き監視を続けます」

「・・・不審者と間違えられないように気をつけてくださいね」

それだけのために？しかも木の上から？この子、頭大丈夫でしょうか？私は少し心配になりました。

・・・これは他所に置いておきましょう。今は、他に考えるべきことがありますものね。

保健室は、今３年の身体測定の時間ですわ。来るとしたら、この時間と思ったのですが・・・違ったようです。

あら？そういえば・・・中庭でしたね。これはうっかりしていました。急がなくてはなりません。

９時４１分　中庭

俺は、ラグビー部から逃げて中庭へとやって来ていた。
いつも、ベンチに座って飯を食う奴の溜まり場の１つでもある。
中央にはここは学校なのだろうかと思わせる噴水がある。ちなみに屋上から覗くと時計になっているらしい。全くもって無駄な機能だ。
そして、噴水に沿って花壇がありそこには誰の趣味かは知らんがさまざまな花が咲いている。
花壇は０，３，６，９時に位置する部分が通り道になっている。噴水の淵に座って飯を女の子と食べたいと思う今日この頃。

いつもはそんなのどかな中庭なのだが・・・。

「完全武装かよ、おいっ！？」

俺は周りを取り囲む変人どもに叫ぶ。
俺は今、全身を防具で覆った不審者たちと遭遇してしまった。
もしかして、貞操のピンチ！？

「誰が不審者だ！！お前の貞操など、死んでもいらんぞ！」
「お前、勝手に俺の頭の中を読むんじゃねえ。それにその前に、お前らのような不審者に俺の貞操はやらんぞ」
「ああ、もうっ！？普通に喋ってるから！？お前の貞操なんていらないから！ついでに、大人しく死んでくれると、尚のことありがたい！」

そこまで力説されると、俺だって頭にくるぞ。
だが、冷静に周りを見ると、５人に囲まれており、しかも全員防具で覆っていて誰なのかが分からねえ・・・。そうは言うが、俺の勘では女の子が２人ほどいる気がする。
その女の子だと思う子にじっと目を凝らしてみるが、全くもって何も見えない。まあ、透視できるなら、とっくの昔にやっているけど

な。
俺の目にも、赤外線を是非とも！
「ちょ、ちょっと！？じっと、こっち見ないでよ。このど変態っ！！」
「・・・79」
「っ！？」

俺の視線にさすがに気づいたらしく、わなわなと震える不審者A。
そして、俺を驚いた様子で見ていた。剣道の面は決して表情が見えないわけではないからな。目を凝らせば見える。
だが、そこまで動揺されると俺も困るぞ。まだ、俺何も言ってないし。

「・・・当たってるし」
「何が当たったんだ？腹でも壊したのか？それとも言えない様な事か？」
「そうそう、実は今日ねって・・・何言わせんのよ！！」
「ナニ言ってんのよ！！」

こいつは絶対にアホだ。だが、10年くらい磨けば突っ込みの芽が出るかもしれない。
もう少しからかって遊んでみるか。

「お前、さりげなく別の意味で言ってるだろ！？」

だが、余計な突っ込みが外野から入った。
それに、そろそろ感づかれてもおかしくない頃か・・・。
女の子と会話できる数少ない機会を逃すのは、おしいが仕方あるまい。

「さりげなくじゃない、あからさまにだ！！」
「なお悪いわっ！！」

俺は、胸を張って誇らしげに言う。
こいつ、気づくとはなかなかのエロよのう。
しかし、この学校はむっつりばかりだな。もっと、オープンでいるべきだと思うぞ。

「むっつりスケベが、何を言う。だが同志よ、我がオープンエロの世界へウエルカムッ！」
「勝手に引き入れるなっ！常にオープンなそんなことをお前に言われたくない！！」

俺は両腕を広げ、歓迎の意思を示す。だが、このむっつりは拒否する構えのようだ。
だが、貴様は１つ大きなミスを犯した。

「・・・むっつりであることは否定しないんだ」
「あっ！？いやっ、その・・・」

明らかにしまったという顔をする我が同志。ふっふっふっ、やはり俺の目に狂いは無かったようだ、同志よ。
我が同志には他の４人の冷ややかな視線が突き刺さっている。
そして、茹蛸のように、いやポスト、リンゴ、血のように・・・とりあえず真っ赤になったということが言いたい。

「これはだな・・・その・・・そう、言葉が少し足りなかったんだ。決して、俺はむっつりなんかではない」
「じゃあ、ゲイだな。男はむっつりか、オープンしかいないはずだ。

男は皆スケベなんだ。スケベじゃない男は、男として大切なものを失っているのだよ。残念だ、俺はゲイを同志に迎えることはできない」
「何でそうなる！？って、お前らまで何だその目は！？味方じゃないのか！？俺はゲイじゃない、ノーマルだ。普通にかわいい女の子が好きだし、どちらかというと胸の控えめな子がタイプなんだ！」
冷ややかな視線に耐え切れなくなった我が同志にどうやら精神に異常をきたしたらしいな。だが、こんなことで我を忘れるとは、打たれ弱いにも程があるぞ？
仲間の突然の告白に唖然とする４人。
俺は、がっくりと膝をついた同志に歩み寄る。

「俺は、俺だけは味方だ」
「五味・・・お前・・・」

そう言って、肩に手を置くと・・・突き飛ばした。

「なっ！？」
「はっ、バカめ。お前が俺と同類だったということだけは覚えておいてやるぜ」
「貴様・・・。諮ったな！」

突き飛ばされてから、気づくとは間抜けにも程ってもんがあるだろ。それに今頃気づいてももう遅い。防具を着込んだあんなのに追いつかれるほど、俺は足は遅くない。
俺は意気揚々と走り出す。

保健室に向かって。もちろん、策が無いわけではない。

全ては計画通りってわけだ。

「あの角を曲がれば、保健室だ！」

そして、俺はその角を曲がった。

「・・・あ」

「あら？」

「む」

だが、その先にいたのは最も会ってはならないこの学園の武闘派生徒会長と風紀委員会委員長だった。

生徒会長のすらりと伸びた白い足が短いスカートから覗いているのが堪らないし、あの小さな風紀委員長の頭を撫でてみたいとも思う。それよりも2人ともスカート短すぎじゃね？俺としては大歓迎なんだけど。足がまぶしくておじさんは直視できま・・・す。むしろ、ガン見ですとも。

「まあ、こんなところで出会うなんて奇遇ですわね。・・・探す手間が省けましたわ」

「うむ、そうだ」

どうやら、敵さんは殺る気満々のようだ。

ここは回れ右をして逃げるしかないよな・・・。だが、簡単に敵に背を向けてもいいのか？

「やあ、生徒会長さんに風紀委員長さん。今日もお美しいですね。・・・胸は無いけど。それに今日の天気はお二方の美しさをさらに際立たせるような青空ですね。それでは、失礼しま・・・すっ」

ということで、爽やかな笑顔を浮かべ、普段のノリで挨拶をしてみる。
そして、言い終わるのが早かったか、それとも逃げ出すのが早かったかは分からないが、俺は逃げ出した。

「衣。追うぞ」
「ええ、分かっていますわ。・・・人が気にしていることを、よくもぬけぬけと・・・」

生徒会長が、拳を握って震わせているぞ、おいっ！？聞こえてたのか！？
だが、まだこんな所でゲームオーバーになってたまるかよっ！！
俺は、自分の勘をフル回転させる。見える、見えるぜ。体育館裏なら誰もいない。
俺はしばらく身を隠すことにした。今は3年の時間だ。1番見たいとは思うが、結局の所、問題は無い。
策は決して1つじゃない。そのことを思い知らせてやるぜ。俺は逃げたわけじゃない、戦略的撤退だ。そう心に言い訳をしながら。

9時56分　体育館裏

風が新緑の葉に当たる音がする。

告白の定番の場所の1つでもある体育館裏。
この学園ではどうだかは俺は知らない。だが、木が等間隔に生えており、下には低木が茂っている。

「・・・何やってんだ、俺？」

俺が、生徒会長と風紀委員長から逃げ出して、数分。
俺は、今体育館裏の木の上にいる。まさかここを見るわけはないだろうと考えた結果だ。
息を潜め、時が来るのを待つだけ・・・。
ただ、時間は経てば経つほど俺にとっては負けとなってしまう。
そう言うが、事は慎重に運ばねばならない。まさに綱渡りだ。
「確かにこっちに来たと思うのですけれど・・・」
「私もそう思う。だが、いないようだな・・・」
がさがさと低木の中を探している。
それを見た俺は笑いをこらえるのに必死だ。
だが、それが間違いだった。笑いをこらえたのは良かったのが・・・。
ブッ!!
「・・・」
「「・・・」」
押さえていなかったもう1つの穴から音が漏れ出したのだ。
当然、俺の存在はバレバレ。下から呆れた顔で見上げる2人がいた。
「そこにいたか。今すぐ降りて来い」
そう言って木を揺すり始める風紀委員長。
俺は枝にしがみつき抵抗する。落ちたら死ぬ。殺される。

「さっさと落ちてこい。・・・ふんっ」
「おわっ！？ありえねえ！！」
風紀委員長は少し後ろへ下がると木に向かって駆け出した。
逸れの意味する所を察した俺は、隣の木に飛び移る。何とか飛び移るのに成功しガッツポーズをとる俺。決まったな。

「はあはあ・・・。木に飛び蹴りはない・・・だろ？」
「お前の方がありえない。どうやったら飛び移れるんだ？」
「はっ！人間に不可能は無い。ふはっはっはっ」
「動機は不純ですけどね」
「動機はどうであれ、お前たちにはできまい。はーはっはっはっ・・・うわあっ！？ぐへっ・・・」

調子に乗って両手を離したところ落ちてしまった。だが、すぐに体を起こす。
その時だった。俺の頬を掠めるように何かが飛んでいった。
俺の超人的反応速度でなければ避けられなかったに違いない。

「マトリックス！はっ、そんなもん当たるかよ」
「・・・やってもいないことを言ってはいけませんわ」

俺は、軽々・・・とではないがそれを避けた。そんなもんがこの俺に当たるはずがない。俺にはオーラがあるからな。ほら見ろ、外した木刀が木に突き刺さって・・・。
木刀が木に突き刺さる？それ、木刀じゃねーのかよっ！？俺は少しの間、木に突き刺さり刃の部分が光に反射するそれを見ていた。
頭がどうしても認識しようとしなかったが、無理矢理認識すると同時に慌ててその真剣を投げてきた人物と距離を取る。

「真剣かっ！？」
「・・・ちっ。その剣が、あなたの血を吸いたいと言っていますわ。あなたの血を吸わせてくださいな」
今、「ちっ」って言いましたよ。生徒会長が「ちっ」って、どうなんです、奥さん？
だが、俺は物事を良いようにしか捉えない男だ。さまざまな脳内検閲にかかり、最後の言葉だけしか俺には聞き取れなかったようだ。
「最後の言葉だけなら、何だかエロい・・・。最後の言葉だけなら喜んで！！」
「許可が出たようですので、では遠慮なく」
そう言って、生徒会長は真剣を引き抜い・・・真剣を・・・。
「あら？抜けませんわね」
「「・・・」」
どんな力で投げたんだ、おいっ！！
「本気で殺す気かっ！？つーか、それ銃刀法違反。俺が逮捕しちゃうぞ？」
「死ね。今すぐに自害しろ」
銃を撃つ真似をしてみる。だが、顔色1つ変えずに死ねと言われてしまった。どうやら俺の冗談が通じないようだ。
むしろ、本気でキレてるっぽいな・・・。俺はとりあえず、本能的に2人から距離を取る。

間合いに入ってしまったらアウトだ。
「介錯をお願いできますか？」
「ふざけているのか？腹を切れと私は言ったのではない。自害しろと言ったはずだ」
ったく、冗談が通じない連中はこれだから困る。
折角、相手に合わせて話しているというのに。遊んでる場合でもないか。
俺が演技派だってとこを見せてやる。演劇部で助っ人をしたこともある俺の実力見せてやる。
「死ね死ね、うるせえんだよ。俺がちょっと下手にでりゃいい気になりやがって。けっ。大体、その喋り方が気にくわねえ。お嬢様言葉なんて時代遅れもいいとこだ。それにあんた、ふざけてんのか？死ねと言われて死ね奴がどこにいる？言葉は選んでから喋るんだな」
俺が急にキレ出したもんだから、言葉が出ないみたいだな。
だが、風紀委員長の方が先に立ち直ると、俺を睨みつけ語気を強めて言った。
語気とは反対にその両目は確かに俺を捉えてはいたが、永久凍土のように冷たい瞳だった。
「逆ギレか。もう少しましな奴かと思って・・・」
「いないだろ？」
だが、俺はその言葉を遮る。
風紀委員長は黙ったが、今度は生徒会長が喋りだした。
「・・・」

「あなたが騒ぎを起こさなければ、こんなことにはなりませんわ」
「言葉を慎みたまえ。君たちは五味　大助の前にいるのだぞ。あ、やべっ。この見た映画のセリフぱくっちまった」

と言うのは嘘でいつ言おうかとチャンスを伺っていたわけですよ。
これも全て予定調和ということなのだよ。
俺の最後の言葉にわなわなと震えだす2人。
ようやく俺がふざけていたことに気付いたらしいな。顔が真っ赤になってるぜ。
もう1つ爆弾を投下してやろうかな。とびきりのやつをな。

「そうだ、ふざけすぎたお詫びに1つ良い事を教えてあげよう。会計さんと景の好みのタイプをね」
「「っ！？」」

・・・あからさまに態度が変わりやがった。さっきは怒りで真っ赤だったが、今は恥ずかしさで真っ赤のようだ。
正直、俺もこんな風に他人に思われたいもんだ。ま、無理って事くらい分かっているけど。

「その情報確かか？」
「蓮華さん！？」
「い、いや・・・冗談だ、冗談」
「嘘ですわね。私の目を見て答えてください」
「いやだな・・・私が嘘を付いているはずなど・・・ない・・・」
「・・・嘘つきですわ」

この間に逃げればいいのだろうが、面白いので見物中。
油でも注いでみるとするか。

「で、どうする？まさかとは思うけど、本人に聞いても言うかどうか・・・。この話は本人からは固く口止めされてるんだよなあー」
物凄くわざとらしく言う俺。俺は基本Mだが、たまにSになることがある。
これはこれで楽しいのだ。

「くっ・・・。この場においては見逃す。但し、次に会ったときは容赦をする気は無い」
「決まりだな。で、生徒会長さんはどうする？別に俺は構わないけど」
「・・・仕方が無いですわ。ただ、嘘だったら霧生の名においてあなたの存在を社会的に抹消してさしあげますわ」
・・・あんまし敵にしない方がよかったか？
だが、そんなことを表面には出さない。

「交渉成立だな。毎度あり」
いつものように軽い口調で答える。

「ふむ、そうだったのか」
「試してみる価値はありそうですわ」
俺の言ったことは、本人から直接聞いた話だから嘘ではない。
さてと、そろそろ動き出すとしますか。もうすぐ2年生の時間だからな。

「では、これにて俺は失礼します。・・・・・・。ごきげんよーう」

そう言って、俺は木に登ると学園の外壁を飛び越え、外へと逃げ出した。

「外に逃げましたわ」

「全員に連絡する。奴は外に逃げた。侵入できそうな場所は全て固めてくれ」

「私たちも行きますわよ。あ、そうですわ。・・・もしもし？」

「行ったみたいだな。・・・俺の方が一手先を読んでいるんだぜ」

俺は先程飛んだはずの木の上で体育館裏から去っていく2人を見ながら、意地悪くほくそ笑む。

「さて、ミッション開始といきますか」

時計を一瞥し、俺は再び走り出す。

外伝３－２：喧騒なる日　その者、逃亡中にて（後書き）

外伝３－２になります。
アホな話第２弾です。実は、時間を入れてしまったことに今更後悔しています。書き辛い事この上ないです・・・。本編との時間合わせが・・・。

試験、レポートで忙しくなってきたので、しばらくは週１更新になりそうです・・・。

ついでに、休憩時間はニコニコ動画なんぞ見てて、ストックも切れている状態です。

今回も読んでくださった皆様ありがとうございます。
楽しんでいただけた方が１人でもいらっしゃれば私はＰＣの前で喜ぶと思います。

第１９話：喧騒なる日　廊下にて（前書き）

８月２日　本文一部加筆

第１９話：喧騒なる日　廊下にて

「この恨み、どうしてくれようかなー。・・・どこに八つ当たりしようかなー。どれにしようかなー。・・・・・」

ぶつぶつと何かを呪文のように唱えている希望先輩はとりあえず置いておこう。

「ど、どうかしたの？」

そう言って、入ってきたのは恵麻だった。心なしか、俺たちを変なものでも見るような目で見ているような気がしなくも無い。
まあ、希望先輩がああだから仕方が無いといえばそれまでかもしれない。

「いや、特に気にすることはないぞ。それより、何か用か？」
「うん。先生が呼んでるよ～。そろそろ戻ってきなさいって」

どうやら俺を呼びに来たらしい。
まあ、確かにそろそろ戻っても問題ないだろう。衣先輩が釘を刺してくれてるし、希望先輩の新聞部も動かないだろうしな。
そう思うと、ここに来た意味があったのかと思うぞ・・・。

「そうか、分かった。すぐに戻るから先に戻っていていいぞ」
「どうせなら、一緒に戻ろうよ～」

俺は、そう言ったが、恵麻は戻らなかった。それに、顔が何だか不満そうだ。
俺が戻らないとでも思っているのか？１６年の付き合いなのに信用

がさほど無いらしい。いや、１６年の付き合いがあるからかもしれないが・・・。

「希望先輩、希望先輩・・・」

俺は、もう戻りますと伝えるために希望先輩を呼んだ。
だが、未だに携帯のことでショックを引きずっているらしく、反応が無い。

「希望先輩！！」
「わっ！？」

俺は、先輩の正面に回りこむと思い切り叫んだ。
深水先輩まで、こっちを向いて驚いている。まあ、普段は大声なんて出さないからな。

「え？あれ？どうしたの？」
「とりあえず、戻ってきたみたいですね」

あたふたとする姿は普段は見ることはできない貴重なものだ。

「景君。希望先輩って、こんな人だっけ？」
「・・・今、ここにいるのは実は生き別れの双子の姉妹なんだ。つまり別人ということだ」
「へえ～」

俺は今の先輩の状況を頭に思いついた言葉で表現した。
その姿を見た恵麻も戸惑っている。
でも、恵麻は会ったことがあったか？まあ、会ったことがなくても、大体の人が抱いているイメージとは違うはずだよな。

「本人だよー！。勝手に妹を作らないでよー」
「妹限定なんですね・・・。姉という選択肢はないんですか？」
「景っちは姉がタイプっと。メモしとこっとー」
「・・・景君はきれいなお姉さんが好きなんだね」
「・・・勝手に話を進めるな」

どうやら俺の指摘が誤解を招いてしまったらしい。
確かに不用意な発言ではあったが、そこに食いつくとは思わなかった。水を得た魚のように急に元気になったな・・・。
だが、これ以上勝手に話を進められると、年上が好きだと誤解されかねない。

「じゃあ、景っちの好みの女性について告白してもらっちゃいましょー」
「・・・じーっ」
「・・・俺、そろそろ用事があるので帰ります」

不利を悟った俺は2人に背を向け生徒会室を後にしようとした。
何だ？その期待に満ちた眼差しは？しかも、声に出して言っているしな・・・。

「誰が帰っていいって行ったのかな？」

俺が生徒会室の扉のドアノブを掴もうとした時、希望先輩に肩をがしっと掴まれた。この小さな体のどこにこんな力があるのか不思議なくらいだ。
表情は笑っているはずなのだが、かえってそれが不気味に思える。
それに恵麻は俺を連れ戻しに来たんじゃなかったのか？

「・・・」
「もうちょっと、ゆっくりしていこうよー。お姉さん、興味あるなー。景っちの好みのタイプ」
にやにやしながら言う希望先輩。
恵麻は興味無さそうな様子・・・じゃないな。何故、そんなに目を輝かせているんだ？
「深水先輩。どうにかしてもらえませんか？」
俺は深水先輩に助けを求めてみる。この部屋にいる最終にして唯一の希望だ。
「俺もむしろ気になるぞ。是非とも聞かせてもらいたいな」
「・・・」
・・・ブルータスよ、お前もか。
・・・3人しかいないから四面楚歌と言っていいのかは微妙ではある。
だが、俺の希望は無残にも打ち砕かれた。
俺が好きな女のタイプはそんなに気になるものなのか？
「・・・恵麻。お前は知ってるから別にいいだろ？」
「え？ま、まあ、そうなんだけど・・・あれは卑怯だと思うよ～。他にはないの？」
「何？何？恵麻っちは知ってるの？」
「え、ええ。まあ・・・」
俺は、昔恵麻に好みの女のタイプというのを話したことがある。ま

あ、小学校の頃の話ではあるが、今もそれは変わることは無い。
恵麻は、希望先輩の追求に目を逸らし、言葉も濁した。
言っていいものかどうか悩んでいるのだろう。

・・・母親だということを。

もちろん、他にも好きなタイプというのはある。ここで言うつもりはないのだが。
母さんに対しては、好きなタイプというよりは尊敬の念の方が強いかもしれない。
それでも1つの理想像として存在している。マザコンと言われてしまえばそれまでの話だがな。

「ねえ、ねえー。誰なのー？興味あるなー。教えてほしいなー。教えてくれたらとっておきの話を教えてあげるんだけどなー」

そう言うと、希望先輩は恵麻に耳打ちをする。
何を言われたのかは知らないが、恵麻の顔がみるみる真っ赤になっていくのだけは分かった。

「希望先輩。絶対に他の人には言わないでくださいね」
「分かってるよー」

「・・・実はですね。景君は、女性の好みは幅広いんですけど、どちらかというと同年代から下の方が好みみたいなんです。この前、遊びに行ったときに景君の部屋の本棚にそういう本が数冊・・・」

「ええっ！？うそー！？」

恵麻がこちらをたまに見ながら、ひそひそと希望先輩に囁いている。
俺を気にするなら話さなければいいと思うんだが。
それを聞いた希望先輩は俺を凝視しながら叫んだそして、眉をしかめ、しきりに何か考え事をしている。時折、俺をちらちらと見てはまた考えにふけっている。
恵麻が何を話したのかはおおよそ見当が付く。だが、この反応は一体何なんだ？

「・・・景っち。うんうん、やっぱり健全な男の子だったんだね。でも、・・・っちは、厳しいかもねー」
「どうかしましたか？」
「ううんっ、独り言だから気にしないでー」

確実に、こいつマザコンかよ、という目で見ていたな・・・。

いや・・・健全？・・・もしかして、もう1つの方なのか！？

「・・・人の趣味は人それぞれだからね。私は・・・そういうことはあまり言わないから。私、秘密にしているからね！」
「何で、そこで遠い目をするんですか！？」
「景君・・・」

希望先輩は何故だかは知らないが、拳を握り締め力強く宣言する。
だが、俺の方を見ようとはしなかった。
戸惑う俺の肩に恵麻が手を置いてきた。

「恵麻？一体、何を言ったんだ？」
「・・・本」
「・・・」

たった一言ではあるが、その一言の意味を瞬時に理解することができた。
その瞬間、俺の心にピシッとひびが入った音が確かに聞こえた。俺は足の力が抜け、立っていることができなかった。
崩れ落ちた俺の肩にそっともう1つに手が置かれた。希望先輩の手だった。

「景っち。秘密にしておいてあげるから、また生徒会室においでよー」

顔を上げると、そこにはにやにやと意地悪く笑う希望先輩の顔があった。
俺は所詮この人の掌の上で踊っているだけなのか？
しばらく俺の顔をにやにやと眺めていた希望先輩だったが、突然手を叩くと恵麻に話しかける。

「あっ、そうそう。恵麻っち、耳貸してー」
「えっ？あ、はい」
「・・・」
「・・・」

ぼんっという音が立ちそうなくらいに即座に真っ赤になる恵麻。
あれか？割と流行っているかもしれない同性愛なのか？
俺は同性愛は好きではない。これだけは、はっきりと言える。何故なら、付き合える可能性が2人分減るわけだからな。
まあ、こんなことを考えている俺と付き合ってくれる女がいるかと言われればそれまでの話だ。

「・・・ということだから、頑張ってねー」

「・・・はい」

よく分からないが、がっしりと握手をする2人。

「・・・深水先輩。先輩だけ蚊帳の外じゃないですか？」

「・・・言うな」

俺は、その光景を無視して1人寂しそうだった深水先輩に声をかけた。

・・・俺も、すっかり忘れてたなんて言えない。

「じゃあ、帰ります」

「また来てくれよ。俺1人だと、正直つらい」

「・・・善処します」

深水先輩が思わず漏らした本音に苦笑するしかない俺。

同じように苦笑する深水先輩。よくまあ、この生徒会でやってられるなと思ってしまう。

「恵麻。・・・帰るぞ」

俺は未だに希望先輩とがっしりと手を握り合っていた恵麻に声をかける。

いつまで握り合ってるんだ？しかも、見つめ合っているし・・・。

本当にそっちの気があるのではないか。その光景を見て、俺はそう思わずにはいられなかった。

「あ、うん。先輩ありがとうございました」

「頑張れ、先はまだ長いからねー」

謎の笑みを浮かべる希望先輩に見送られつつ、俺たちは生徒会室を後にした。

「ねえ、景君。今日何だか風紀委員の人が多くない？」
「ん、そうだな」
俺は特に興味も無いことなので、適当に相槌を打つ。
確かにさっきから風紀委員や剣道部が行ったり来たりを繰り返している。

「今日は身体測定だろ。あれが出るんだ、今年も・・・」
「あ、あれね・・・。何で退学にならないのか不思議に思うんだけど、どうしてだと思う？」
「・・・あいつ、頭だけはいいからな。どうせ、合格実績を上げたいという先生方の思惑があるんだろ」

恵麻が引きつった笑顔をこちらに寄越す。声も若干震えて聞こえるのは気のせいではないはずだ。
俺は、特に先生方という所を強調しておく。
確かに今までのあいつの行動を考えれば誰だって、特に女はこんな反応を示すに違いない。
『あれ』と呼ばれる俺の友人、五味。基本的に名前を呼ぶことさえ嫌う者がいるためにこの呼び名が定着してしまっている。
そのことを、以前直接本人に聞いたことがあった。

「『あれ』、か。まあ、俺もそう呼ばれる理由が分からないわけじゃないから、気にしちゃいない。まあ、あれだろ。親愛の情を持っ

て呼んでくれてるんだろ？」

相手が何を思って付けたのか分かっているくせに、その上でいい様にしか解釈しない生粋のアホだと俺は思っている。
だが、時折その無駄な前向きさが羨ましくも思えるのだから、俺自身は未だに友人だと思えるのだろう。

「へえ～。じゃあ、この話は終わりにしてっと。景君、もしよかったらなんだけど・・・料理部なんてどうかな～？」
「それは、本気で言ってるのか？」
「うん・・・本気だよ～」

いい加減、あいつの話をするのも嫌なのだろう。恵麻はあいつの話題を終わらせると話を部活動の話へと移した。
確かに悪い話ではないと思う。俺自身、料理に興味がないわけではない。むしろ、色々と食べ歩くのは好きなほうだ。
だが、俺に料理部に入らないかと言うのは、無謀だと思うぞ。しかも、少し躊躇していたしな。

「・・・俺の料理の腕を知っているお前がか？」

そう、俺は何を隠そう料理が壊滅的に下手なのだ。普通に作ればいいのだろうが、作っていると何故かインスピレーションが湧いてくるのだ。むしろ、天の啓示だろうか？
それはどうでもいいが、何か新しいこと、人とは違うオリジナルを作りたくなるのだ。
そして、それはうまくいく。根拠もないのにそう思えてくる。・・・
それが失敗の元とも知らずに。

「で、でも・・・料理部に入ればきっと料理も上手になるよ～。・・・

・たぶん」
「恵麻。何故、最後に俺の目から視線を逸らすんだ？」
「・・・えーと、何でだろうね？」

恵麻が俺の料理が不味いということを知っているのは、昔俺がまだ台所に立っていた頃に1度食べたことがあるからだ。
今から数年前の話だ。当時の俺は、料理に興味を覚え、試しにカレーを作ってみたのだ。
見た目はそこそこだったが、味見をしたところ味は悪くなかった。
我ながら上手にできたと思い、恵麻を呼んで味見をさせてみたのだ。
恵麻もおいしいと言ってくれた。だが、一口食べた後、用事があるからと言って帰ってしまったのだ。
だが、初めて作った料理がおいしいと言われ、調子に乗った俺は父さんと母さんにも夕方に食べてもらった。

「ぐふっ！？」
「・・・け、景ちゃん・・・2度と台所に立っちゃダメよ・・・」
「ええっ！？父さん、母さんしっかりしてくれ！」

その場で食べたものを吐いた父さん。母さんは涙を流しながら口の中のものを飲み込んでいた。それを飲み込んだ後、母さんに震える声でそう言われた。あの時、父さんも母さんも俺を何か宇宙人でも見るかのような目で見ていたな。

それに今思えば、恵麻の笑顔は引きつっていたような気がしなくもない。だが、浮かれていた俺が気づくわけもないのだ。
そして、翌日。台所に行くと張り紙がしてあった。

男子、厨房に入るべからず。

これは前現代的な意味ではなく、俺に料理を作らせないという意味らしい。
それに父さんは、もともと料理なんてしない。
ただ、その日以来、俺が台所に立つのは皿洗いをするときくらいになっている。

「恵麻の好意だけはもらっておく。今、お前や俺の両親に俺の料理を食わせていたことを思い出していたんだ・・・。あの悲劇をまた起こしていいものかと思ってな」
「・・・そ、そうだね。ごめんね、変なこと言って」
「いや、本当のことだから気にするな。」

恵麻が余計なことを言ってしまったという顔になってしまっている。
それは俺に対して余計なことを言ってしまったというよりも、自分で話題に出しておきながらあの時の思い出が甦って気分が悪いといった感じだった。

「・・・やっぱり今思い出しても気持ち悪いよ。私、景君に汚されちゃったよ～」
「大事なとこを省略するな。味覚は別におかしくなってないだろ？」
「でも、景君はおかしいよ～」
「勝手に言ってろ。俺よりも不味い料理を作る奴が・・・」

アホなことを言う恵麻の言葉を訂正する。汚されたって・・・誰がそんな鬼畜な真似をするか。
そして、俺は恵麻に俺よりも不味い料理を作る奴がいると反論しようとした。
だが、よく考えるとそんな奴いただろうかと疑問に思った。
その時、言葉に詰まった俺の脳裏に1つの風景が俺の中に甦った。

「うえっ！？おまえ、これなんだよ？まずいっ。たべものに謝ったほうがいいくらいだって」
「ふえっ！？いっしょーけんめーつくったのに・・・うううっ・・・」
「うっ・・・わかったよ、たべるからさ。泣くのはなし。いいか」
「・・・うんっ！あしたも作ってくるね」
「うそ泣きかよー。それにもう作んなくていいから・・・」

それは懐かしいような知らないような・・・そんな思い出だった。顔も名前も思い出せない誰かがお弁当を作ってきたんだった。それは未だかつて食べたことがないくらいに不味く、衝撃的だったのを思い出す。

・・・でも、あの子はいったい誰なんだ？

「・・・だからね、呼びに来たんだよ～」
「・・・」
「ねえ、景君？どうしたの？ぼーっとしちゃって」
「ん？いや、ちょっとな・・・」
「ふ～ん。じゃあ、早く教室に戻ろう。先に行くよ～」
「あっ、待て。恵麻」

恵麻に肩を叩かれようやく俺は話しかけられていたことに気づいた。そして、恵麻は俺を追い越すと、こっちを向いて競争だと言った。何時まで経っても、子供だな。だが、それに反応する俺もまだ子供ということだ。

「・・・」

教室の前まで戻ってきた時、ふと開いた窓から風が吹いてきた。
あの記憶の中でもそういえば、風がこんな風に吹いていたな。
・・・俺は顔に当たる風が今日はなんだか心地よくもあり、また懐かしい気もした。

第１９話：喧騒なる日　廊下にて（後書き）

祝！本編２０話達成。

外伝がいくつもあるせいで、遅ればせながら本編がようやく２０話になりました。
そして、次話と外伝３－３にて喧騒なる日も終わりです。
脈絡なく長い話になってしまいましたが・・・。

現在は外伝３－３を書いております。
レポートに期日が迫っているので、今週も週１更新です。
このまま週１更新になりそうですけどね。
夏休みは、ある程度更新したいものです。

第２０話：喧騒なる日　その終焉にて

「・・・ようやく終わりましたわ」
「そうだな・・・」

そう言って、彼女たち2人は生徒会室に戻ってきた。学園中を走り回っていたためか少々疲れているようだ。
結局、その後の報告により諸悪の根源を取り逃がしたことを知ったものの、今回は彼女らの完全勝利と言っても過言ではない。その証拠に達成感に満ちた顔をしている。

「おかえりー。お疲れ様ー」
「ありがとうございます」
「すまんな」

希望が、2人にお茶を持ってくる。
戻ってきた2人を労っている様だが、その表情からは労いの表情は伺うことはできない。
むしろ、この状況が楽しくてしょうがないといった感じだ。顔が緩んでいる。

「戻ってきて、早速で悪いんだが、さっさと予算承認してくれないか？今日までに承認もらえないとそろそろやばいんだ」

そして、疲れた2人をまったく気にすることもなく深水は言った。
こちらはこちらで忙しいのだと、彼女のことすらも気に留めない。
仕事を始めると周りの見えなくなる深水にあからさまに頬を膨らませる。

「こーいちー・・・。何か言うことはないわけ・・・？」
「ああ、そうだな。お疲れ様」
「ひーどーいーっ。他に言うことがあるでしょ？」
「何だ？」
「ああっ、もうっ！そんなに疲れるまで頑張るなんて偉いよとか、君は世界一の彼女だよとか、言うことはいっぱいあるのにーーーっ！！」
「はいはい」

だが、蓮華の言うことを適当に聞き流す深水。
ちらっとだけ蓮華の方を見たが、すぐに書類へと目を落とす。そんな深水の反応に蓮華はついに我慢の限界を突破してしまい、突飛な行動をした。

「ちょっとーっ！私の話聞いてよーっ！」
「うわっ！？何するんだ！？ああっ！？俺がまとめた書類が・・・」

いきなり深水の目の前に現れたかと思うと、深水が手に持っていた書類を奪い取るとそれを放り捨てたのだ。
蓮華の後ろでは、桜吹雪のように書類が舞っている。時期としては、桜も散る頃だ。
その場に崩れ落ち、ひらひらと舞う書類に手を伸ばす深水。もちろん届くはずも無い。
あれをまとめるのに1週間かかったのに・・・とぶつぶつと言いながらも口元は笑っている。笑うしかない、笑うしかないと。そして、目にはきらりと光るものがあった。

「仕事と、私とどっちが大事なのっ？何で、すぐに答えてくれないの？ねえ、どうして？馬鹿、バカ、ばか、バカーーーッ！！」
「えっ答える時間なんてくれてな・・・いっ！？ぐえっ！？うっ！・

・・」

興奮した蓮華は周りが見えていないようだ。この部屋には2人しかいないかの如く周りを無視して暴走している。

「・・・バイオレンスカップルですわね」

「違うよー、衣っち。DVだよ、これ・・・」

冷静に分析をする衣と希望。彼女らはただ自分たちに矛先が向かなければそれでいいのだから。

割と薄情な2人はお茶を啜りながら、孫が遊んでいるのを見ているかのように、のんびりと過ごしていた。

「なあ、景。今思ったんだけどよ、身体測定の日なんて、男女別で時間決めときゃよくねーか？」

「来年からは、そうなるらしいぞ」

「じゃあ、何で今年はいつも通りの登校時間だったわけ？」

「・・・確実な証拠が欲しかったらしい。これで、反対する奴はいなくなるだろうしな。要は生徒会としては、あいつが騒ぎを起こしてくれたほうが好都合だったわけだ」

「へーっ、まあどうでもいいけど」

騒がしい学校での1日も終わり、これから俺はバイトだ。

晃も今日は同じ時間帯に入っているのだが、少し用事があるから先に行ってくれと言っていたので、こうしていつもと変わらない顔ぶれで帰ろうとしていた。

どうせ、晃の用事も部活絡みだろうけどな。

「景様、お迎えに参りました」

だが、校門に不本意であるが見慣れてしまった顔があったのだ。遠くからでもはっきりと分かる銀の長髪、蒼の瞳。明らかに日本人ではないことが一目で分かってしまう。
服装は普通だったが、ご丁寧に頭にはカチューシャを乗っけている。

「・・・」
「エリスちゃん、こんにちは～」
「おおっ、エリスさん！」
「よかったねえ、お迎えが来て」

他の3人はうれしそうだが、俺は全くうれしくない。嫌らしい笑みを浮かべてこっちを見るな、由真。
それにどうして、エリスが学校に来ているんだ？その前に、もう来るなって言わなかったか、俺？

「なあ、エリス？ここに来るなって言わなかったか？」
「確かに学校に来るなとは言われましたが、ここは学校の外ですから」
「・・・誰の入れ知恵だ、って母さんか・・・」

念のために確認をするが、どうやらエリスは学校の中でなければいいと解釈したらしい。
だがその時、俺の頭の中には、意地悪く笑う母さんの顔が思い浮かんだ。そもそもエリスがこんな解釈をするわけが無い。

「はい、お母様の助言です。後は、たまたまいらしていた恵麻様のお母様もお迎えに行ったら、景様が喜ぶとおっしゃるものですから」

・・・おばさんもいるのか。2人して俺が困ることを期待してエリスの唆したに違いないな。

「・・・土曜日のことをもう忘れてるのか？」

「ええ、もちろん覚えていますよ。ですが、あまりにもお2人とも真剣におっしゃるものですから・・・。あの、ご迷惑でしたか？」

「・・・」

俺は無言で頷く。ここは否定するのがいいのかもしれないが、そんなことをすれば問題を先送りにするだけで何の解決にもならいはしない。

それを見たエリスは苦笑いを浮かべる。俺も同じく苦笑いだ。

加えて、その引きつった笑顔が意味していることは母さんたちの真剣な眼差しを思い出してのことだろう。あの2人は妙に子供っぽいところがあるからな・・・。

よっぽど、恵麻の方が大人だよな。そう思って、恵麻を一瞥する。

実はお前の方が親なのではないか、と。・・・さすがに無理がある か。

「えっ？何？」

「いや、何でもない」

思わず恵麻と視線が合ってしまったが、適当にごまかす。

再び、エリスの方に視線を戻すと、エリスはふと何か思い出したらしく、俺の手を握ってきた。

「結婚してください」

「「ええっ！？」」

「・・・」

そして、いきなり何の前触れもなく衝撃的な発言をしてきたのだ。
そのエリスの唐突な発言に周りの空気が凍りついた。
恵麻や幸樹、由真は当然のごとく驚いているが、たまたま通りかかった奴らも今の発言で、皆立ち止まってこっちを見ている。
俺は、衝撃のあまり言葉が出なかった。それに一瞬心臓が止まりそうになるくらい、どきっとしたぞ。

「えっ？あの・・・。違いますってば。まだ続きがあるので、ちゃんと聞いてください」

周りの空気が止まったことに怪訝そうな表情をしていたエリスだったが、自分が何言ったのか、すぐに理解したようで慌て始める。
だが、ふーっと息を吐くと、気を取り直して話し始めた。切り替えが早いだろと俺は内心毒づく。俺1人動揺していたなんて何か格好悪いぞ。

「結婚してください、と先程こちらの学校の生徒の方に求婚されたんです」
「もう1回言ってくれるか？」
「ですから、こちらの学校の生徒の方に求婚されたんです」

はっきりと言い切るエリス。だが、俺の脳は現実離れした事態に拒否反応を示したらしい。すっかり先程の動揺は治まってしまった。
今はただ驚愕するしかない。
俺はもう1度聞き直したが、返ってきた返答は同じものだった。世の中、間違ってるだろ。そう思わずにはいられない。
確かに、見た目は人間のようだが実際はロボットなんだけどな・・・。求婚したという奴に少しだけ同情する。

「そいつは初対面か？」
「はい。ですけど、制服が景様と同じでしたので、すぐにこちらの生徒の方だと分かりました」
・・・何となくだが、誰だか見当がつくな。
「・・・そいつの名前は五味とか言わなかったか？」
「あ、よく分かられましたね。そうです、ゴミ様とおっしゃいました。ですけど、ご自身をゴミとおっしゃるなんて変な方ですよね？」
「それが、苗字だ。まあ、そう言ってやるな・・・。それにあいつのすることをいちいち気にしていたら疲れるぞ」
やっぱりそうか・・・。恵麻たちを見ると、同じように呆れていた。人の苗字をゴミと間違えるなんて有り得ない話だ。
・・・だが、あいつは生徒会や風紀委員会から逃げていたんじゃないのか？いきなり、初対面の人間に告白を通り越して、結婚の申し込みをするとは確かに世間一般の常識の及ばないあいつらしい気もする。もっとも、エリスは人間ではないから、この常識は及ぶのか何とも言い難い。
呆れる俺たちを余所にエリスは事態をよく飲み込めていないらしく、小首を傾げる。
「・・・はあ。景様がそうおっしゃるのであれば、気にしないことにします。あと、景様。私はロボットですから、疲れなんて感じませんよ」
エリスはロボットだから疲れないと反論する。だが、俺が言いたいのは精神的に疲れるということだ。ん？精神的に疲れる？
・・・何か引っ掛かるような。・・・そうだ。

しかし、ここで俺は重要なことを思い出す。ロボットだから、心もデータなんだということに。しかし、どうも人間のように思えて仕方ない。行動がどうも人間臭いのだ。きっと、よく人の行動パターンを研究したのだろうな。
俺はエリスがロボットだとまだ数日前に知ったことだというのに、すっかり忘れてしまっている。まだまだ春休みボケが直らないらしい。心の中で自嘲する。

「そうだったな、エリスはロボットだから疲れないよな？」
「ええ、もちろんです」

胸の前で両手を握り締める仕草を見せるエリス。

「ねえ・・・景君」
「どうした、恵麻？」

エリスと話していた俺に遠慮がちに恵麻が肩を叩いてある方向を指差す。
・・・しまった。
俺の今の気持ちを表現するならこの言葉が一番だろう。
周りにはいつの間にか多くの野次馬が集まっていた。そこっ、携帯で友人を呼ぶな！
・・・これ以上目立ってどうする？俺は自らの迂闊さを呪うことしかできない。

「・・・そろそろ帰るか？」
「そ、そうだね・・・」
「はい、景様」

俺は囁く様な小声で話しかける。
恵麻もエリスもこの状況がよく理解できているらしく苦笑いだ。
今日は、苦笑いばかりする日だ・・・。
俺たちは、校門を離れ下り坂を駅へ向かって歩き始める。

「そうだ。エリス、迎えに来てもらったところ悪いんだが、今日はバイトだから先に帰ってくれ」
「それでしたら、私もついて行ってよろしいですか？メイドとして、景様のことをもっと知ってきておきたいんです」
「いや、俺のことを思うならついて来るな」

その途中、エリスがバイト先に来たいと言ったが、きっぱりと拒否した。
これ以上俺の心の平穏を奪う気なのかとつい睨んでしまった。
だが、話を聞いていた由真がエリスに何やらひそひそと耳打ちをする。エリスは、それを聞いて何故か納得した表情になった。

「・・・連れて行ってくださらなければ泣きますよ？」
「・・・エリス。・・・確信犯だろ」

エリスは、楽しそうにそう言う。由真や恵麻と仲良くなったのはいいことだと思うが・・・。
エリスだけには、いつまでも純粋でいてほしいものだと、思わずにはいられない。これ以上、由真みたいなのはいなくていい。
そんなことを考えながら俺はすっと目を細め、冷たく言い放つ。大体あからさま過ぎる行動は好きではない。そのためか、つい自然に言葉に出てしまったな。
それに、ここではっきりと物事を言っておかないと、なし崩し的に物事は進みかねない。
だが、冷めた口調ではあったが正論を言った俺に対して非難が嵐の

ように起きた。

「景。お前は女の子にもっと優しくしないと、な？エリスさんがかわいそうだろうが」

「女の子を泣かせちゃうのは良くないだろ？外見では泣いていなくても、エリスが心の中で泣いていることに気付いてあげなきゃ。景、お前は男だろ？それに、ご主人様なんだしさー」

「景君。私も良くないと思うよー」

・・・いや、そもそも泣いてないから、と喉まで出かかった言葉を飲み込む。

これ以上言った所で、不毛な争いになることは目に見えている。

それに、俺では口喧嘩で恵麻や由真に勝ち目があるとも思えない。

「・・・」

俺は理不尽だと思ったが、それらを無視し黙って続け坂を下っていく。

しばらくは、しつこく騒ぎ続けていた４人だったが、あまりに反応を示さない俺に飽きたらしく話題を変え、のんびりと話していた。

俺はその４人を後ろから見ながらついて行く。

俺が、こういう性格だと知っていて、尚且つ付き合ってくれているのだからこいつらは相当なお人よしだな。

「まったく、景のとこなんていないでさ。うちに来なよ。景といるよりは楽しい生活は保証するよ」

「だったら、俺のとこに来ないか？景よりも大切にするから」

「私のところに来たらいいんじゃないかな～。景君の家のお隣だし、すぐに景君の家にも行けるよ～」

「い、いえ。私は景様のメイドですから。それに景様は普段からあ

んな感じの方ですが、本当はとても優しい方なんですよ」

・・・訂正。こいつらはお人よしでも何でもない。ただの物好きか、俺をからかいたいだけの善人ぶった、ただの偽善者だ

だが、エリスはやっぱり心優しいな。これで、もう少し常識があれば完璧なんだが。

「どうせ、メイド萌えの変態だって。景だけは違うと思ってたのになー。男子ってやっぱ不潔だよね。なっ、恵麻」

「え、え～と・・・あはは・・・」

俺に聞こえるように、さらにちらりちらりとこちらの様子を伺いつつ言う由真。

途中から棒読みになったせいで、言っていること全てが白々しいぞ。

俺が黙っていればいい気になって・・・。

しかし、黙っていた俺にも限界というものがある。

「そうそう。エリスさんもあんな変態のとこにいないほうがいいって。それに景はな・・・ぐえっ！？」

「・・・次は無いと思ってくれ」

「・・・あい」

「け、景様・・・少々やり過ぎではないでしょうか？」

「いや、そんなことはない」

「ですが・・・」

「そんなことはない」

「景様がそうおっしゃるのでしたら、構いませんけど」

エリスは、幸樹を心配するが俺にはそんな心は一片たりともない。きっと、あのことを言おうとしたに違いない。あれ自体はもうないが、好き好んで公開されるつもりもない。

その幸樹はというと、蛙がつぶれたような声を出し、頭からコンクリートの地面に突っ込んでいる。別に漫画みたいに気絶することはない。
それでも、勢いをつけて飛び蹴りをしたから、１メートルくらいは吹っ飛んだだろう。
それに土ではなく、コンクリートだから余計に痛いだろうな。他人事のように冷静に観察しているが、これは他人事だ。飛び蹴りをしたのは、あくまでも自らの保身のために過ぎない。
時に人は、自らを守るために鬼とならねばならない時があるのだ。

「景の専制反対！景の横暴を許すな！」
「何だ、もう復活したのか？ついでに、何だ。そのどこかの政治団体かどこかの野党が言いそうな言葉は？」

「いや、なっ？」
「なっ？と言われても良く分からないんだが？」
「こっちにちょっと来い！」

そう言って、幸樹は俺を連れて恵麻たちから離れる。額から血が流れているが、あえて互いにそのことには触れない。
そして、俺がかろうじて聞きとれるくらいの小声で話し始めた。

「エリスさんを譲ってくれないか？もちろん、タダとは言わん。そうだな・・・」
「幸樹。そういうことはエリス本人に言ってくれ。俺はエリスの主人なんかになった覚えは無い」
結局その話なのか？予想して無いとわけではないが、予想通りとい

うのもまた驚くものだ。
そういえば、もう1人知られたら、俺の所に来そうな奴がもう1人いるような気がする。まあ、放っておこう。今日は来ないはずだからな。
何故か、俺は皆からエリスの主人と思われているが、そもそもそんなものになった覚えが無いんだがな・・・。

「お前はそう言うけどよ、エリスさんはお前のことを主人だと思っているわけだろ？そこんところはどうなんだよ？」
「確かに俺のことを主人だと思っているらしいが、俺は新しい家族としか思ってないぞ。むしろ、様付けは止めてくれるように言っているんだが、聞いてくれないのが現状だ。そうだな、エリスが行きたいというならそれも別に構わないし、引き止めるつもりもない」
「・・・んー、まあ、それもそうだよな。でも、これだけは言っておく」
「ん？何だ？」

幸樹の言葉にも一理あると思うが、それを俺は否定する。要は海外から俺の家にホームステイで来たようなものだろうか？
エリスが家にいる間は家族として扱う。エリスが出て行きたいのであれば、止めるつもりはない。・・・ま、いつまでこう言っていられるかは分からないけどな。
俺が返した言葉に、幸樹は珍しく真剣な顔付きになる。そして、言葉を少しだけ溜める。

「・・・もし、嫌になって売る気になったら真っ先に連絡してくれよ」
「安心しろ。そうなることはないだろうし、もしそうなってもお前だけには連絡はしないから」
「何でだあっ！？」

それは、お前だと不安だからだ。そう思うが口に出すことはしなかった。興奮している幸樹にこれ以上何を言った所で、火に油だ。
俺は、幸樹の肩を1度だけ叩くとそれ以上は何も言わず立ち去る。

「景、ちょっとこっち来て」
「今度は由真か？」
「すぐに話は終わるから」

俺が由真たちのところに戻ると由真が俺を手招きする。
さっきまでずっとにやけていた筈だが、今は至って真剣な表情だ。
何だかデジャブを感じるような・・・。
そして坂を下り、恵麻とエリスから少し離れると振り返って恵麻たちの様子を伺うと、囁くような声で話し始めた。

「今日、バイトだったよね？」
「そうだが？」
「エリスにバイト先知られたくないんでしょ？だったら、取引しようか」
「要求は何だ？」

いつもとは打って変わり、女のような声色で話をする由真。だが、いつもの男のような話し方に慣れている俺としては、それがひどく気持ち悪い。・・・そういえば、もともと女だったな。
しかし、由真は気まぐれな性格だからな・・・。いや、現実的というのか、もしくは打算的な性格なのかもしれない。

「・・・ん？」
「何ぶつぶつと言ってんの？明日、お昼奢ってよ。これなら安いだ

ろ？」

俺があれこれと考えていると、由真が俺の顔を覗き込んできた。俺が反応を示すと、怪訝そうな顔をして離れた。
そして、意地悪そうな笑顔をしながら右手をこちらに出す。１週間とか言わない所が由真らしい。
悪く言うなら、足元を見られている気がする。俺が要求を呑む程度の的確な要求をしてくる所が嫌らしい。

「分かった」
「交渉成立ー。それじゃあ、エリスはあたしが引き止めておくから、さっさとバイトに行きなよ。助かるよ、今月色々と出費があってピンチだったんだよね」

俺は渋々頷く。その瞬間、由真は表情を緩ませると、
だが、４月の初めでピンチとは一体どんな金の使い方をしているんだ？

「後は、任せるからな？」
「はいはい、任せておきなさいって」

由真は、手をしっしっと動かし、さっさと行けと口パクで言った。
そして、俺に背中を向けると恵麻たちに見えないように右手の親指を立てる。
俺は、それを見ると感謝しつつ坂を脱兎の如く下っていった。

「ああっ！？景君が逃げた！」
「はーい、ストップ、ストップ。って、あれ？エリスは追いかけないの？」

「景様の居場所なら、すぐに分かりますから。今日は止めておきます」
「・・・あんた、実は黒いね」

俺が家に帰ってきたのは、日も沈んだ午後7時のことだった。

「ただいま」
「おかえりなさいませ、景様。コンビニでのアルバイトお疲れ様です」
「いや、今日はそんなに客は来なくて暇だったから、晃や吉田さんとずっと話してたな」

家に戻ると、いつものように玄関でエリスが待っていた。・・・これが、いつもと言ってしまうようになった俺は既に戻れない場所に足を踏み入れた気がしてならない。
エリスと廊下を歩きながら話していたのだが、何かエリスの言葉に違和感を感じた。

「・・・コンビニ？どうして、俺がコンビニでアルバイトをしていることを知ってるんだ？」

そう、俺が家に戻ってきて最初にエリスが言ったこと。
俺は、コンビニでアルバイトをしているなんて言った事はない。それに知ってるのは、あの中では由真くらいだ。たまたま、俺がいる時間に来たことがあるからだ。
だが、同じ友人である幸樹や恵麻には話したことはない。特に聞かれもしないからな。

「私はロボットですから。ＧＰＳ機能で、景様の位置はいつでも詳細に掴めます」
「・・・何だ、その後付けされたような設定は？」
「いえ、ＧＰＳ機能は最初からありますよ」
「そうじゃない・・・、いや、もういい」

俺は、呆れて物も言えない。エリスは俺の言葉に不思議そうに首を傾げるが、そんなことはどうでもいい。
最近のロボットはそんな機能までついていたとはな・・・。俺の携帯には、そんな機能は・・・あったな。あまり使わないのに無駄に高機能な俺の携帯をポケットから取り出す。

「携帯に発信機なんて、そんな古いことはしませんよ。直接、景様自身の居場所を知ることが出来ますから。契約したときに景様の身体データを、後は髪の毛からＤＮＡを取り込んでありますので、万が一にも景様を別人と取り違えることはありません」

俺が携帯を取り出したことを、どうやら発信機が付いているのか調べようとしているのと勘違いしたらしいが、そもそも発信機がついてるかなど分かるわけがない。外見上、何の変化もない携帯だ。分かったら、俺は一般人ではないだろう。

胸を張って、最新のテクノロジーを自慢するエリス。だが、俺には全く理解できない。
１つだけ分かるのは、どこにいてもエリスの監視の目が届くということだ。

「あ、私はお母様の手伝いに戻りますので、着替えたらすぐに降りてきてくださいね。もう、ご飯ができると思いますので」

「・・・契約したのは、やっぱり間違いだったのか？」

俺は、リビングへと入っていったエリスに聞こえないようにぼやいた。

そして、もう1度話し合いをするべきだろうと何度目か分からない決意をするのだった。

第２０話：喧騒なる日　その終焉にて（後書き）

気がついたら、文字数が増えており冗長になっておりますがお許しください。

本編は、これにて終了。
次回更新は、外伝の最終話になります。
今回も読んでくださった皆様ありがとうございます。１人でも楽しんでいただけたら嬉しく思います。

「本編」次回予告？

「じ、次回予告ですか・・・。どうしよう、どうしよう。何も考えてませんよー」
「美玖は黙ってて。ボクが紹介するから。次回の話はボクたちの話だよ。ボクたちの鬱陶しい、・・・いえ、優しい？お父様が暴走するんだよ」
「な、何で疑問なの？」
「あはは、どうしてかな？だって、うざいじゃん？」
「わ、わたしはそんなこと思ってないよ。・・・でも、ちょっと鬱陶しいかもです」

外伝３－３：喧騒なる日　祭りの終わりにて

１０時８分　校外

「・・・やられましたわ」

私は、外に置いてあった物を見て驚愕しています。
まさか、ここまでして覗きを敢行しようとするなんて・・・。

でも、彼。人生を無駄遣いしていますわ。
もっと、情熱を他の事に向けてくだされば よろしいと思いますのに・・・。

ですが、彼からはいい情報を聞くことが出来ましたわ。
私は不謹慎だと思いますが、内心うれしくも思っていました。

「後で試してみましょう。皆さん、既にあれは中に戻っています。そろそろ保健室に突撃して来る可能性が高いですわ。例の作戦に移行してください」
「「了解しましたっ！」」

ここに生徒会の反撃が始まった。

１０時１５分　正門外

「景だな・・・」

俺は想定外の出来事に困っていた。

ミッションを始めるべく俺は小道具の隠し場所へと向かった。
だが、そこには何も残されてはいなかった。俺の考えを先読みして行動できるのは、幼馴染と親友の景しかいない。
幼馴染の方は、今回は関わってきてないはずだ。

「どうも、お疲れ様でした」
「いえ、また何かあったらいつでも伺いますとお伝えください」

後ろでは、警備員のおっさんと工事業者らしき人が挨拶をしている。
互いに人がいいというのか、腰が低いのかは知らない。だが、そこまで両者が遜っていると滑稽にすら思える。
俺は、その互いに頭を下げあうやりとりを見ながら今後のことを考えていた。

「・・・さて、どうしたもんだかねえ」
「あの、少しお時間を頂いてもよろしいでしょうか？」
「っ！？」

いきなり背後から声をかけられ、驚きのあまり声すら出せない。
だが、こんな声の女子は学園にはいなかったはず・・・。
俺は、恐る恐る振り返った。

「・・・」

思わず声を出すことも、声をかけることすらも忘れて見惚れてしまった。
そこには、銀髪蒼眼の美少女がいたのだから。
髪は腰まで達しているが、さらさらと風になびいている。意味があるのかは別として、頭にカチューシャが乗っかっている。

が、至って服は普通の今時の女の子の服装だったし、メイド服ですらない。たぶん、趣味なんだろう。

「あ・・・あの」

「あうっ！？あ、いえ、失礼しました。ところであなたのお名前は？」

しばらく彼女に見惚れていたが、その彼女の言葉で現実へと戻る。しまった、変な声を出してしまったじゃないかっ。こんな子にお世話してもらいたいなあとか、むしろ、あんなことやこんなこととかしたいだなんて考えてないからな。

「エリスです。エリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ型と申します」

エリスさんというのか。

そのエリスは優雅に俺に一礼する。一挙一動全てに人を惹きつける魅力があるような気がした。俺の好みのタイプのど真ん中だ。

「俺は、五味　大助と申します。麗しきレディよ、是非この私めと結婚していただきたい」

意味は無いが、俺の歯が白く光る。

じっと、目の前のエリスさんを見つめる。なかなか胸もあって、腰はくびれいている。それに安産型のように思える。昔風に言うなれば、ボンキュボンだな。

するとエリスさんが、静かに口を開いた。

「私は、既にこの身を景様に捧げておりますので無理です」

「ははは・・・」

表情１つ変えることなく言われてしまうとは・・・。既に、そんな仲の人がいるとは・・・。いや、これくらいの美人なら恋人くらいいても当然か。
毎晩、毎晩、あんなこととかこんなこととかしてるのかあああっ！？いや、とりあえず落ち着け俺。妄想で発狂するなんてイタイだけだよな。
それにしても、はっきりとふられてしまったな・・・。
だが、１つ気になることがあった。その名は、我が親友の名ではないか？

「ん？景様？」
「はい、景様をお迎えに来たのですが、まだ終わっていないみたいですね」
「景様っていうのは・・・有栖　景のことか？」
「はい、そうですけど？」
「何いいいいっ！？」
「ええっ！？」

俺の呟きに反応するエリスさん。景の野郎。いつの間にこんな彼女を作りやがった！？
急に叫びだした俺に数メートルは離れたエリスさん。そりゃ、当然の反応だ。
いきなり叫びだす奴の傍になんていたくない。

「あの野郎っっっっ！！もう、手をつけた女の子がいたとは？万年○○同盟の規則を破るとは許せん！！」
○○の部分は、勝手に想像するといい。ちなみに勝手に俺が同盟を結んだものであって、強制力はないが、それでも腹立たしいぞ。
俺の怒りは今頂点に達した。

「って、こんなことをしてる場合じゃない！」
だが、脳裏にふと去年見た光景が浮かんだ。不思議なことに俺の怒りは静まっていくのが分かった。
あのヘブンに今年も行くんだった。はあはあ・・・。

「あ、あの・・・涎出てますよ」
「・・・ああっ！？拭きました、これで大丈夫」
エリスさんに向けて右手の親指を立てる。そして、片目を閉じてウィンク。
だが、エリスさんは反応に困っているらしい。笑顔が引き攣っている。

「では、私は忙しいので残念ですが、この辺で失礼させていただきます。また今度お会いできるといいですね」
「・・・そっ、そうですね」
俺は右手を挙げ、エリスさんに手を振る。エリスさんは、胸の前で小さく手を振っていた。
そのほっとしたような顔が俺には印象に残った。

１０時２７分　１階裏庭

「・・・全部回収されてるとは、とんだ誤算だ」
俺は、茂みに潜んでいる。そう、これから最後の仕上げへと移ろうとしている。

しかし、道具が全て回収されていたのだ。俺が持っていては持ち物検査があった時にやばいから隠していたのだが、どうやら裏目に出たらしい。

ああ、俺のビデオカメラが・・・。

「だ、だが・・・まだ俺にはとっておきのが残っているんだ」

俺は拳を握り締める。

今、俺が茂みに隠れているのはそのためだ。

あの隠し場所だけは、絶対に分からない。

「どうやら、いなくなったようだな。そろそろ時間も時間だ」

巡回に来ていた奴らが通り過ぎるのを見届けると俺は茂みから出る。

そして、真っ直ぐ目的の場所に向かう。

「このネジを外せば・・・あれ？外れないな。このっ、外れろっ！」

「お探し物はこれですか？」

ふいに後ろから声をかけられ、差し出されたものを俺は見た。

「ああ、それです。そのビデオカメラです。すいません、本当に助かりまし・・・た？」

「それは良かったですわ」

「・・・あはは、生徒会長じゃないですか。こんな所で何をしているんですか？身体測定の時間ではないのですか？」

そして、顔を上げてその親切な人にお礼を言おうとする。

俺はその顔を見ると5歩ほど後ろに下がろうとした。しかし、腕を

つかまれ逃げることが出来ない。

「それに俺みたいな変態の腕を掴んでいたら悪い菌に感染しますよ？」

「あなたは言動こそ病的ですが、見た目は普通ですわ。それに、あなたは空気感染する病気をお持ちですの？でしたら、お父様のお知り合いの方に、良い医者がいますから紹介しますわ」

「・・・結構です」

冷や汗を流しながら俺は言う。

流石に、小学生みたいな何とか菌なんていうくだらないことは通用しないらしい。

軽く流されたことが、この上なく悔しい。

「ここから、中を通って保健室の天井裏へ行こうなんてよく考えましたわね」

「褒めて頂き光栄です」

「・・・褒めてませんわよ」

呆れたように溜息をつき、俺を小馬鹿にしたように見る生徒会長さん。

だが、何かを思い出したのか携帯でどこかに電話をし始める。その隙に逃げようとするが、予想以上に握力が強く、逃げることは叶わなかった。

「暴れないでいただけます？あっ、こちらの話ですので気にしないでください。はい。では、お待ちしております」

必死に俺の腕を掴む手を振りほどこうとする俺を明らかにうざいといった雰囲気を丸出しにして睨みつける生徒会長さん。

何で片手相手に俺勝てないんだ？運動部には入ってないが、これでも体力には自信があるんだが・・・。

「ところで、五味さん」

「・・・はい」

軽く俺が鬱な気分に陥っていると、生徒会長さんが周りに人がいないのにも関わらず小声で話しかけてきた。

「ＢＬに興味ありますか？」

「は？」

「ですから、ＢＬです」

「天地が引っくり返ってもありえません。って、天地が引っくり返ったらありえるのか？いや、そうじゃない。何でいきなりＢＬ！？」

話の内容を聞いてただ驚くしかない俺。

頬を赤らめて聞いてくる生徒会長が可愛らしく見えるじゃ・・・いやいや、そんなことはない。一瞬だけ浮かんだ邪心を頭を振って打ち消す。

むしろ、その笑顔が酷く恐ろしい。

「別に私は興味ありませんわよ。異性しか恋愛対象には見てませんもの。ですが、私の知り合いの方に、同性の方しか愛せないという方がいますの。五味さんの反応を探るために聞いてみたのですが、どうやらノーマルのようですね。蓮華さんとも相談したのですが、罰はやはりトラウマになりそうなものがいいと思いますわ。先ほど五味さんを校門で偶然お見かけして、ずっと後ろにいたのですが、気づきませんでしたか？五味さんが茂みに隠れている間に」

「そうですか・・・」

「すいません、生徒会長遅れました」
俺が、この生徒会長は絶対にSだと思っていると、遠くから聞き覚えのある野太い声が聞こえた。
「げっ！？」
「あら？もう来たの。早いですわね」
「期待に胸躍らせ、全力で参りました」
・・・何故、あいつがここにいる？
俺は考えられる最悪の事態を想定し、身震いする。武者震いなんかじゃない。悪寒だ。
「野球部部長の帆茂先輩が何故こちらにいるんですか？」
「分かりませんか？所謂ショック療法というものですわ」
「何がショックなのか、全く理解できない、もとい理解したくありません」
「すぐに理解できますわ」
俺は念のために、何故ここに帆茂先輩がいるのかと生徒会長に聞いておく。
その問いに返ってきたのは、生徒会長の嫌味なまでの笑顔と爽やかな声だった。
俺は、確信した。これは想像通りの悪夢が起きると・・・。
「では、後はお任せしますわ」
「お任せください」
そう言うと、帆茂先輩が俺を腕を掴む。
それから、生徒会長は俺の腕を放すと、俺たちに向かって手を振る。

そして、くるりと反転するとそのままこちらを顧みることなく去っていった。

「じゃ、始めようか」

生徒会長が見えなくなると、帆茂先輩の目が変わった。

「・・・」

「黙っているということは肯定ということだね。嬉しいよ、僕の愛を受け取ってくれ」

そう言って、この先輩は事もあろうに俺を押し倒そうとするではないか！？

「嫌に決まってるだろうが、このゲイがあああああああああっ！！」

「うおおおおおおおっ！？」

「あら？まあ。もう始まったのね。・・・おぞましい」

遠くから聞こえる叫び声を、背にし彼女はほくそ笑む。

「据膳食わぬは男の恥ですわね。相手が女性でないのが頂けませんけど」

用法が違いますね、と暢気に呟きながら彼女は携帯を取り出すと、どこかへと電話を始める。

だが、相手が出なかったらしく顔をしかめると不機嫌そうにまた歩

き出した。

１１時０２分　??

「ぜえぜえ・・・何とか貞操は守った」

今、俺は暗闇の中にいる。
俺の荒い息遣いだけが、支配する世界。それを俺は無理矢理抑えようとする。

「・・・ここなら、見つかることはないだろ。だが・・・」

俺は、言葉に詰まる。
言葉に出そうとするだけで、さっきの記憶が甦る。何故だ?消去したはずなのだが・・・。

「やっぱりここにいたんだ」
「っ!?」

俺が、トラウマになりそうな記憶を消そうと躍起になっていると、突然目の前の扉が開いた。
一瞬言葉を失ったが、そこにいたのは・・・。

「おおっ、我が幼馴染にして親友の晃ではないか!?」
「昔から大げさだよね・・・。もう美術準備室の黒板裏に隠れなくてもいいと思うけど。帆茂先輩はいなくなったし。僕はバイトがあるから、もう行くけど、言葉さんには気をつけて帰りなよ。それに

いい加減に、好きなら好きと告白したらいいんじゃないの？気付いてないのは本人だけだと思うよ」

俺の幼馴染の晃だった。

朝は巻き込むなと言っていたが、何だかんだでこうやって俺を助けてくれる善人だ。

こいつもまた俺の隠れ場所が分かる友人だ。景よりも付き合いが長い分、俺が何をするのかよーく理解している。

「ん？何を言ってるんだ？」

だが、そんな俺のことを理解しているはずの幼馴染から聞き捨てならない言葉が発せられた。

俺は、その言葉に疑問という以外の感情を持つ事はなかった。

「小学生じゃないんだから、好きなら好きと言ったらいいんじゃない？」

「ちょっと待て。何故、そうなる？俺があのまな板が好き？笑わせるなよ、晃。俺が好きなのは、グラマーなお姉さまだけだ！！」

晃は俺をじっと見ると溜息をつく。そして、選りにもよって告白をしろと言うではないか。

俺は、晃の言葉に語気を荒げ反論する。

「はあー、大助って、昔から救いようのない馬鹿だよね・・・。まあ、いいよ。いつか僕の言うことの意味が分かる日が来るから」

「絶対無い。俺の意思はダイヤモンドよりも固いからな」

俺に何を言っても無駄だと悟ったのだろう。晃は、また溜息をついて、首を横に振った。あえて言葉にはしないが、もうお手上げと言

いたいようだ。
そんなに溜息をつくと幸せが逃げると言いたいが、言えばお前に言われたくないと言われるだけだ。俺は空気が読めるんだぜ？
俺の言葉に晃は何も反応しない。しばらく妙な沈黙がその場を支配する。そんな中、晃は冷めた目で俺を見ている。その瞳に何の感情も見えないのが恐ろしい。
・・・俺が、全く空気を読めてないことがよく分かる。自覚はあるんだ、これでも。自覚が無いのはまずいだろ？
「・・・まあ、いいや。これ以上言っても無駄だし。あ、そうだ。今年の夏は色々と遊びに行くから、ちゃんとバイトしないと足りないかもよ」
「それは押し付けではないか？まあ、バイトはぼちぼちするから安心しろ。俺は海、プール希望だと景に伝えておいてくれ」
晃はまた溜息をつくと、もう諦めたと投げやりな感じで話し始めた。しかし、ふと何か思いだしらしく話を急に夏休みの話へと変えた。去年もバイト代を使って、海に山にと遊びまくった記憶がある。俺と景、晃、幸樹の４人という色気の無い面子だったが、普段は出来ないバカをたくさんした。
「分かった、伝えておくよ。後さ、１つ聞いてもいい？」
俺が去年の夏に思いを馳せていると、晃が俺に真顔で尋ねてきた。
「あそこのサイズ以外なら聞いてもいいぞ」
「ごめん、やっぱり君に聞くには愚問過ぎるからやめておくよ。じゃあ、また明日」
「あ、ちょっ！？気になるだろっ！！」

ふざけたのが間違いだったのだろうか？晃は、後ろを向くと美術準備室の扉へとゆっくりと歩いていく。俺は、晃の背中に声をかけた。だが、晃は俺の叫びを無視し、小走りに美術準備室から出て行った。美術準備室には、ぽつんと残された俺しかいなかった。

１５時２７分　スーパー

「・・・うちの親は、俺を便利屋か何かと勘違いしているのか？」

俺は、ぶつぶつと文句を言いながらも、母君から頼まれた品を買い物籠に放り入れていく。

１人で飯を食った後、しばらく当ても無く散歩をしていると、帰りに買ってこいと、品物が書かれたメモのようなメールが送られてきた。

「卵・・・は放り入れたらまずいわな。で、後は・・・ん？これは？」

俺が、メールを見ながら残りの品を探していると、ある品物が目に付いた。

「・・・これも買うか。明日持っていたら、きっと楽しい事が起きるだろうからな」

俺はその商品を迷うことなく、籠の中に入れた。

翌日、教室

「グッモーニン？諸君」

今日も俺は爽やかに挨拶をする。
昨日の事は、昨日の事。引きずらないのが俺流。

「どの面下げて、そんなことが言えるのかなあ？」

だが、引きずっている奴もいるわけで・・・。

「こめかみに指を当てて、どうした？」
「あんたのせいでしょ、あんたの。まあ、いいわ。この場で死になさい」

見るからに不機嫌なオーラを出し、俺の所に言葉がやって来た。
そして、俺の肩をがっしりと掴む。骨に指が当たって痛い。まあ、俺は自称Mだから何の問題もないがな。

「まあ、落ち着け。昨日は俺が悪かった。そんなお詫びの印として、いい物を持ってきたんだ。受け取ってくれないか？」
「あ、あんたが謝るなんて珍しいわね。一体、どういう風の吹き回し？」

言葉は、俺を訝しげそうに見ている。そんなに俺が素直に謝ったことがおかしいのか？
周りのクラスメイトの諸君も驚きが隠せないようだ、ざわざわとしている。

「特に他意はない。まあ、俺も子供だったと反省しているわけだ。良かったら受け取ってくれないか？」
「分かったわ。私もちょっと取り乱しすぎたと思ってるの。でも、もう言わないでよ」
「折角だから、開けてみてくれ」

俺が、謝ると何故かは知らんが、向こうも謝ってきた。
そして、俺はプレゼントを開いてみてくれと言った。言葉は、特に不審に思う素振りも見せずに、包み紙を破いた。

「・・・」

言葉は、その中身を見ると表情が凍りついた。
固まってしまった言葉を心配した彼女の友人が、その商品を覗き込む。

「・・・」

その友人も同じように固まってしまった。
言葉の手が震えているのが、俺には分かった。

「それが、俺からの謝罪の印だ」

俺は笑いながら言った。だが、すぐにその笑いは止まってしまう。

「ふーん。・・・豊乳麺ねえ」
「どうだ、我ながらいいプレゼントだろ？昨日、うちの近くのスーパーで見つけたん・・・」
「言いたいことはそれだけかな、五味君？・・・余計なお世話よ！！」

「ぐへあっ！！」

俺は我ながら、いい物を贈ったと心の中で自画自賛する。きっとまな板であることを気にしているのだろうからという俺の配慮だ。俺は自己満足で気分が良かったから気がつかなかった。カタカタと肩を震わせる言葉に・・・。

最後に見たのは、言葉の拳だった。そして、意識がブラックアウトした。

「ねえ、拳で愛は語れないよ？」

「誰がこんな奴のことが好きになるのよ？・・・これは貰っておくけど」

「やっぱり、好きなんでしょ。告っちゃえ。あれも絶対脈ありだって」

「無い。絶対無い」

そんな会話が繰り広げられていることなど、気絶している俺が知る由もないのだった。

外伝３－３：喧騒なる日　祭りの終わりにて（後書き）

全体的に物凄く失敗したなあと思う作品です。

登場人物や事件をうまく表現し切れなかったと反省しきりです。

しばらくは本編をしっかり書かないといけませんね。

今後の予定

次章は、新たに登場した車椅子の女の子の話。

次々章は、主人公のバイト先の話になります。

こうして自分を追い込めば、やれるはず。

きっと、私はやればできるはずです、やれば・・・。

第２１話：小さな勇気、小さな一歩　その１（前書き）

８月６日、本文セリフ、１つ修正

第２１話：小さな勇気、小さな一歩　その１

広い廊下を、車椅子の少女が歩いていく。歩いていくというのは、語弊があるかもしれない。
その少女は、ある部屋の前までやって来ると、その扉をノックする。すると、中から男性の声がする。彼女は、その「どうぞ」という声がかかると中へと入っていった。

「お父様、お母様。少々お時間をいただけないでしょうか？そんなに時間はかけませんので」
「どうした、美玖。言ってみなさい」

回転椅子に座っていた恰幅のいい男が書類に目を通すのを止め、くるりとこちらを向く。年は、５０に近いだろうか。眉間には深い皺が刻まれている。
だが、見た目に反して声色は至って温和であった。
そして、その傍らには、４０代半ばだろうか。だが、美しさを失っていない女性が凛と立っていた。
書類を持っていることから、仕事の話をしているのだろう。

「はい。実はうちに招待したい方々がいるのです。今日、困っている私を助けてくれた方々なのですが」
「うむ、それは是非うちに招待する必要があるな。だが、今週は私も忙しくてな。日曜日なら都合がつきそうなのだが。私も、親としてきちんと礼がしたいからな」
「ええ、私はいつでも構わないわ」
「でしたら、先輩方の都合を聞いてみますね。それでは、失礼します」

美玖は両親から許可を貰うと書斎から出て行こうとする。
だが、彼女の父親は娘の背中を見送っていると、ふとあることに気付き、娘を呼び止める。

「ところで、招待するのは男か？」
「3人ですけど、男性が2人です」

美玖は、突然呼び止めた父親を不思議そうに見ながら言った。
美玖が男性と言った途端、父親の表情があからさまに曇った。

「ううむ・・・」
「あの、お父様。どうかなされました？」

美玖は、何故父が表情を曇らせたか理解できず、父の前まで戻ってきた。
その様子を、じっと見つめる母。その表情は、既に全てを理解をしているようだった。

「男はいかん」
「どうしてですか？」

態度を翻し、きっぱりとダメだと言い切った父親に美玖は、その目をじっと見ながら言った。

「うっ。それはだな。青少年は皆変態だからだ。妄想で何を考えているか分かったもんじゃない」
「じゃあ、いいです。お父様がいない時に来ていただきますから。いいですよね、お母様」
「ええ、もちろんよ。こんな訳の分からない中年、他人には見せられないもの」

娘がじっと見つめるので、たじろいだ父親だったが、すぐに気を取り直すと断言する。
しかし、美玖は大した理由もなく反対する父親に見切りをつけると、母親に承認を求める。
彼女の母は、考える素振りを見せることなく賛成する。自分の夫であるはずの男性をぼろくそに言うあたりで、この家の権力構図がお分かりいただけるだろう。

「おっ、おいっ！私は無視なのか？」
「何を言っているの、あなた？あなたは我が家の大黒柱よ。娘が彼氏の1人や2人連れてきたところでいちいち騒いでどうするの？全く何でこんな人と結婚したのかしら。あら、私ったらつい本音が」
「嘘つけっ！」
「・・・たまたま通りかかったら、騒がしいから何かと思って来てみたら・・・。何、喧嘩？んなもん、余所でやれよ。騒がしくていい迷惑なんだよ！」

父親は、自分を無視して話を進める2人に危機感を抱き声を張り上げる。
彼の妻は、一応妻として夫をフォローするが、気分が悪いのかつい本音が出てしまう。言ってしまってから、あらと照れるふりをするが、それも計算のうちだ。
どこまでが、彼にとっての嘘なのだろうか。・・・たぶん、全てであろう。
そんな所にもう1人の彼らの娘、紫がやって来た。ちょうど通りかかった所、両親が（主に父親だが）大声で叫んでいたのが気に食わなかったらしい。

「お母様、わたしはそんなに節操無しではありません！」

「ううん・・・それは言葉の綾よ。気にしないで。それに紫、その言葉遣いはお父様だけにしなさい」
「分かってる。お母様に言ってはないから」
「・・・」

美玖は、母親のある言葉に噛み付く。そして妻はそれを軽く流し、紫に注意する。圧倒的に注意する方向性を間違っているわけなのだが。
しかし、もう父親に何も言う力は残っていなかった。
この家出て行こうかな？そう思ったが、喜んで見送られそうなので言うのは止めておいた。
そして、心の中で涙を流した。

「うわっ・・・。いい年して泣いてるなんて、きもいんだよ。泣けば解決できるとでも思ってるわけ？」

だが、どうやら知らぬ間に彼は泣いていたらしい。それを見た娘の紫は汚いものでも見るような目で辛辣な言葉を言う。
娘の追撃はさすがに堪えた。一言、一言に彼は涙した。
今はきっと反抗期なんだ。昔は可愛かったなあと思いながら。

「せ、先輩。今度の日曜日お暇でしょうか？お礼がしたいのですが、是非うちに来てもらえないでしょうか？両親に話したのですが、是非ともお礼がしたいと言っているものですから」
「あたしは暇だけど・・・景、幸樹はどう？」
「俺は、いつでも暇だぞ。景はどうなんだ？」
「特に用は・・・あるな。エリスに街を案内する約束があるんだっ

た」

大助が起こした騒動から、数日が経った。
あの日、車椅子が引っ掛かっていた女が俺たちの教室にやって来て、お礼がしたいので是非家にと招待しに来たのだ。
特に用事は無いと言おうとしたが、喉から言葉が出掛かったところで、約束を思い出す。

「ところで、後ろにいるのは・・・姉か？」

だが、俺は気になって仕方が無かった。後ろでずっと何も喋らない女のことが。
とりあえず、見た目はそっくりだから姉妹であることは間違い無さそうだ。とりあえず、雰囲気が姉の様な気がしたので、話題転換も兼ねてそう言ってみた。

「い、いえ。双子の妹の、紅玲奈です」
「・・・四条畷　紅玲奈　（しじょうなわて　くれな）」

どうやら俺は、人を見る目が無いらしい。双子なのだから、2分の1の確率で当たるはずなんだが・・・。
後ろの女は妹らしいが、見た目は似ているようだが、性格はあまりに違うようだ。
だが、人見知りが激しいのか、後ろでもじもじとしている。

「す、すいません。紅玲奈は人見知りが激しいものですから」
「別に気にしてはいないが・・・」
「あっ、あの・・・やはり気に障られましたでしょうか？」

双子の妹の名前が紅玲奈ということは分かった。

だが、話している車椅子の姉。どうしても名前が出てこない。その前に自己紹介されただろうか？もし、そうであれば数日前の出来事だ。とても失礼になるだろう。
俺がそのことで悩んでいると勘違いをされたらしい。車椅子の姉は不安そうに上目遣いで俺を見つめてきた。

「・・・もし自己紹介をしていたんだったら謝る。あんたの名前が分からない」
「そういえば、俺も知らねえ」

いつまでも悩んでいても仕方がないので、俺は意を決して聞いてみた。
俺の言葉に、幸樹も同調する。助けたはいいが、名前なんて聞いた覚えはないからな。

「あう・・・。そそそ、そういえばまだじ、自己紹介してませんでしたよね。こちらの上総野先輩には、既に自己紹介は済ませていたのですっかり失念していました。わたしは、四条畷　美玖と申します。先程紹介しました紅玲奈の姉です」
「そんなに慌てなくてもいいと思うんだが・・・。俺の名前は有栖景」
「俺は寿々林　幸樹だ。よろしくな、美玖ちゃん、紅玲奈ちゃん」

自己紹介を忘れていて、パニック状態に陥ってあたふたとする姿は小動物のようだ。
だが、すぐに気持を切り替えるとすらすらと馬鹿丁寧な言葉で自己紹介をする。
俺と幸樹も簡単に名前を名乗る。幸樹は後ろの妹にも挨拶するが、妹の方は無反応だった。幸樹は無視されたことに少々顔をしかめたが、すぐに切り替えるともとの表情に戻った。

「え・・・えーと、有栖先輩に、寿々林先輩ですね。よろしくお願いします」
「「こちらこそ」」
またも丁寧に頭を下げられ、俺たちもつられて頭を下げる。
「ところで、有栖先輩は用事があるとの事でしたけど・・・」
「ま、まあそうだな」
俺がはっきりと言わないのは、要するにエリス関連の話だからだ。噂になってからは、エリスの話に関しては極力避けるようにしている。自ら地雷を踏む必要がどこにあるだろうか。
それに、何故かこの姉は苦手だ・・・。
「どのような用事なのですか？差し支えなければ、お聞かせください」
俺がこの話題を避けたいのに気付いていないのだろう、美玖はなおも食い下がる。
この姉と会話していて、ふと気付いた。俺はどうやら勘違いをしていたらしい。
エリスの話をするのが嫌で、口数が減ったように感じていたのだが、どうもこの車椅子の姉の話し方がエリスに似ているのが、嫌だったんだ・・・。
・・・どうも、丁寧に話されると落ち着かないな。
「・・・もしよかったら普段話すような言葉で話してくれてもいいからな」

俺は、あくまで平静を装って言う。
メイドのことを思い出すから、止めてくれなどとは口が裂けてもいえない。言ったら最後、由真や幸樹に馬鹿にされ続けるだけでなく、どうせこいつらが広げて学校中の噂となって居場所がなくなってしまう。だから、言うくらいなら死ぬ。

「あ・・・。あ、あのっ・・・これがわたしの普段の会話で使う言葉なんです。だから、気にしないでください」
「同級生にもか？」
「はい、そうです。・・・有栖先輩。できれば皆さんが揃う時が良いと思うのですが、いつでしたら都合がつきますか？」

俺は、当てが外れてがっかりする。しかも、気遣ったと勘違いをされてしまっているようだ。さらに、その丁寧な言葉を続けて話す。そして、俺にとって厄介な姉は再び話を元に戻した。こういう状態だとむしろ、ずっと後ろで何も話さない妹の方に好感が持てる。

「ねえ、景？それって、あんた1人で案内するわけ？」
「まあ、そうだな。さすがに1日で周りきれはしないから、次の日曜もまた案内するんだけどな。さすがに、買い物をする場所しか知らないというのも可哀想だから、仕方ないだろ」
「ふーん、だったら来週はあたしも付き合うからさ、今週はこっちの方に行けばいいじゃん。エリスも連れて行けばいいだけでしょ。美玖と紅玲奈は1人増えても構わない？」
「えっ・・・あ・・・はい。わたしは別に構いませんが」
「・・・私も別にいい」

俺が何かうまくエリスの話をせずに断る方法はないかと思案していると、由真が俺に尋ねてきた。
いつの間に呼び捨てになったのだろうかとも思うが今はどうでもい

い。由真はエリスも連れて行けばいいという。
関係ないエリスを連れて行くのは迷惑だろと思うが、招待してくれる姉妹は特に大丈夫だという。断る理由が見つからなかった。
俺は部活をやっていないことは由真はよく知っている。それに休日は大抵家にいるか、暇つぶしに駅前のデパートにいることが大半だ。

「と、言うわけで決まり。・・・景がエリスのことをあまり話したくないのは分かってる」
「・・・由真、お前」
「だから、この際話しまくっていい？」
「・・・」

やや強引だが、由真は俺の予定を決めてしまう。
そして、俺がエリスのことを触れないようにしていることを見抜き、そっと小声で言う。
こいつはこいつなりに気を使ってくれていたのか、と俺は感謝の言葉を述べようとした。
だが、こいつはそんな奴じゃなかった。ずっ扱けそうになったが、キャラではないから止めておく。

「やだなあ、冗談だって。景の嫌がることをあたしが本気ですると思う？」
「するな」
「するだろ」
「・・・絶対にする」
「ははっ・・・ははは・・・。こりゃ1本取られたねえ」

俺が、怒っているのが分かったのか、由真は慌てて自分をフォローする。
そして、本人と車椅子の姉以外の3人からすると言われ、少々落ち

込んだようだった。
特に、ほとんど会話に参加しなかった妹の方に言われたのが、大きかったのだろう。

「あ、あたし用事を思い出したから、もう行くよ。じゃあ、後はよろしく」

そう言うと、小走りに廊下を駆けていき、すぐに見えなくなった。

「・・・え・・・えーと、わたしどうしたらいいんでしょうか？」
「放っておいていいぜ。大丈夫、休み時間が終われば、けろっとしてるからよ」

どうしたらいいのか分からずに、おろそろとする車椅子の姉に幸樹は笑いながら気にするなと言う。
俺もそれに関しては同じ意見なので特に何も言うことはない。

「ところで、どこに、何時に集合なんだ？」

俺は、気になることを車椅子の姉に聞いた。
これが分からないとそもそも行くに行けない。

「えっ、わたしに聞いているんですか？てっきり、そちらの寿々林先輩に話しかけているものだと思いました。あっ、呼び方決めてませんでした。わたしのことは美玖って呼んでください。妹の方も紅玲奈と呼んで構いません」
「・・・別にいい」
「分かった」

車椅子の姉に聞いたつもりだったが、全く反応しなかったのでしば

らく見つめていると、ようやく反応を示してくれた。どうやら、俺が幸樹に話しかけているものと勘違いしていたらしい。
姉の美玖の言うことに、興味無さげに頷く妹の紅玲奈。
妹の紅玲奈にどっちだよと言いたいが、いちいち言うのも面倒なので、適当に返事をしておく。

「じゃあ、俺のことも幸樹でいいぜ」
「ところで、四条畷。結局、どこに、何時に行けばいいんだ？」

何故か、幸樹が言う。
俺は特に気にすることなく、話を進める。別に内心くらいは、名前で呼んでもいいかと思うが、いきなり名前で呼ぶのもどうかと思うので、とりあえず苗字で呼んでみた。

「そ、そうですねー・・・・」
「１１時に」
「・・・１０時に」

「「・・・」」

ものの見事に姉妹でばらばらな答えが帰ってきた・・・。
２人とも気まずそうに黙るが、美玖は何故か俺を睨む。ふと、それ以外に視線を感じ、少し顔を上げると、紅玲奈もこっちを睨んでいる。

「今のは、有栖先輩が悪いです。わたしたち２人とも四条畷です」
「・・・有栖先輩が悪い」
「ああ、お前が悪い」
「頼むから、場をかき乱すのはやめろ、幸樹」

その場にいる全員から攻められ、思わずたじろぐ。
だが、便乗する幸樹には文句を言う。お前は関係ないだろ。
「ですから、名前で呼んでください。そうすれば、間違いは起きませんから。それに、他の方にも名前で呼んでもらっています」
「・・・うん、それがいい」

にこにこしながら言う双子を見て、俺は諦める。そもそも名前で呼ばせる理由が分からない。要するに苗字だとどっちか分からないと言いたいのだろう。
それだったら四条畷姉、妹でもいいと思うのだが、言っても反対されそうなのでやめておく。それに、この呼び方は何だか個性を無視しているようであまり気乗りしない。

「分かった。で、美玖。どこに、何時に集合だ？」
「そ、そうですね。では、１０時半に学校の最寄駅ではどうでしょうか？」
「そうだな。由真には後で俺から伝えておくから、安心してくれ」
「は、はい。では、また日曜日に」
「・・・うん」

俺は仕方が無いので、名前で呼び、集合場所、時刻を聞く。
美玖は、結局紅玲奈の意見と妥協した案を提示してきた。
俺は特に文句はないし、幸樹も特に不満は無さそうだった。

「いつでも遊びに来てくれよ。俺も景も由真もみんないつでも歓迎だからよ」

幸樹は2人に手を振る。
俺は、呆れてその様子を見ていた。美玖は丁寧にも手を振っていた

が、妹の紅玲奈は完全に無視していた。
幸樹の背中が、少しだけ哀愁を漂わせているように見えた。

第２１話：小さな勇気、小さな一歩　その１（後書き）

久しぶりに週２の更新です。
いつ以来だろうか？
今週末は、忙しくて書く時間があまり確保できないのが、残念です。
結構、書いている時間って好きなんですけどね。

今回も１人でも楽しんでいただければ嬉しいです。

次回予告　尚、予告は警告なしに変わることがございます。あらかじめご了承ください

「景様、景様。本物のメイドですよ」

エリスは嬉々として言う。今まで外の世界に触れることの無かったんだから、その気持ちは理解できなくも無い。

「・・・じゃあ、エリスは何なんだ？」

だが、俺は思う。本物ってことはお前は偽者なのかと。

第２２話：小さな勇気、小さな一歩　その２

「ということで、エリス。今週の日曜日は俺の友人の家に遊びに行くことになった。街案内は来週に行くことになった。由真も来てくれるらしいから。悪いな」
「話が唐突過ぎます、景様。一応、説明していただけますか？」
「・・・そうだな」

美玖と紅玲奈の家に招待され、遊びに行くことになった日の夜。
俺は夕食後、エリスを呼ぶと予定が変更になったと伝えた。
だが、エリスは不満そうな様子で俺に座るよう促し、俺が座るのを見ると自分も座る。
今回は、俺は全面的に悪いので素直に従う。

「では、まずは説明をお願いします」
「それはさっきも言った。・・・まあ、それは置いておくとして。どこから話せばいいんだ？」
「あら？今日は立場が逆ね」
「・・・」

もう１度、エリスは同じ事を言うから、呆けているのかと思い、それはさっきも言ったと言うと睨まれる。
今日の俺の立場って弱いと思っていると、母さんが横槍を入れる。
逆も何も、俺はいつも対等にエリスに接しているからそんなことはない。

そう思っているのだが、他人から見ると違うものなのだろうか・・・。

「仕方ない、数日前の朝の出来事から関係あるところだけ話すから、よく聞いて理解してくれ。ついでに聞き直すのは無しだ。1回で聞き取ってくれ」
「大丈夫です、景様。私はロボットですから」

こうして、俺は四条畷姉妹の家に遊びに行くことになった理由を説明し始めた。

「景様、偉いです。困った人を助けるなんて。こんなにいい人だったなんて初めて知りました。あっ、いえ・・・。景様がいい人だということは私はよく存じてますよ。・・・別に大した意図はありません。あ、私、お仕事があるので、これで失礼しますね」

エリスは、俺の話を聞いて感想を漏らすが、どう聞いても俺の悪口にしか聞こえない。
俺が半眼で睨むとようやく気付いたらしい、慌ててフォローするが決定的に遅い。
フォローが間に合わなかったと悟ったのだろう。エリスは、何かを思い出したふりをして立ち上がると台所へと逃げていった。

「最近、エリスが俗染みてみたな・・・。いいことだと思うが・・・何だこのすっきりとしない気分は・・・」

俺は、エリスの背中を視線で追いながらそう思った。
・・・うるさいのが1人増えたからか？

「・・・そうか、今週の日曜日に来るのか」
「はい。どうかされましたか？」

「男も来ると言うんだぞっ！？ああっ、私の娘が汚されていくのを見るのは嫌だあっ！」
「・・・うわっ、キモイよ。このおっさん」
景がエリスに事情を説明していた頃、ある男が悩んでいた。
そして、その愚痴を聞く女性は、いきなり叫びだすその男を見てドン引きだった。

「ところで、例の物は持ってきてくれたか？」
「あ、はい。こちらです」
そう言って、彼女はその書類を手渡す。

「あと、1つ興味深いデータがあるのですが」
「何だ？」
「その男のうちの1人は、メイドを雇っているそうです」
「そうか、そうか。うちにもいるからな。って、何！？」

そして、彼女が面白いことを報告すると、その男は初めは気付かなかったが、すぐに驚く。
唾が飛んできたと、彼女は不機嫌そうな顔になるが、そんなことに興奮している男は気付かない。
彼女は黙ってハンカチで顔を拭く。

「有栖　景。こいつか、変態は！うちに娘に手を出して・・・許さんっ。目に物見せてやる・・・」
「・・・。では、私はこれで失礼します」
もう見ていられないと、彼女は部屋を後にした。
正直、この仕事も辞めてもいいかとも思うが、変なのはこのおっさ

んだけと言い聞かせる。
給与の待遇はいい上に、他の同僚や奥さんに娘は割と普通だ。
しかし、それをマイナスに出来る1人の男がいる。
それに、辞めると言っても、ニートにはなりたくないし、かといってこれ以上の高給取りにもなれそうもない。

「10年勤めたら、あとは定年まで真っしぐらよ。わっはっはっ」
コックの風瀬さんがこんなことを言っていたと彼女は思い出す。
何だかんだで30年になると豪語しているなとも・・・。

「長良さん、ちょっといい？」
「ひいっ！？・・・あ、奥様。何でしょうか？」
「だ、大丈夫？それはそうと・・・今、あの人と話してたでしょ？何の話かなって思って。別に話してくれなくてもいいのよ、別に、ねっ？」
「・・・」

彼女が30年勤めると、ああなるのかと考えていると、背後から肩を叩かれる。
彼女は、以前働いていた会社でクビになったことがトラウマになっているのだ。その時も、上司に肩を叩かれ、明日から来なくていいからと言われたのだ。
長良と呼ばれた女性は、空調管理がなされている屋敷の中で熱くもないのに汗がにじみ出てくるのを感じた。

「・・・話します。むしろ、話させてください」

彼女はすっかり怯えており、辞めようかなどと考えていたことはすっかり頭の中から消え去っていた。

日曜日。俺がエリスともに待ち合わせ場所についたのは１０時のことだった。
既に由真は着いており、俺とエリスに向かって手を振る。

「・・・景。あんた、とても目立ってる」

だが、俺たちが由真の側に行くと由真は呆れたように言った。

「・・・それは分かっている」

俺もその理由についてはよく分かっているつもりだ。エリスの見た目はとても目立つ。買い物に行くときも、商店街を歩いていると浮いているのがよく分かる。
それに、ロボットではあるが、外見から見れば外国産の美人だ。俺なんかが隣にいたら、妬まれるのも無理はない。
分かっていないのは、当の本人だけというのだから苦労させられる。

「あの、どうかされましたか？」
「・・・何でもない」
「まあねえ」

エリスは不思議そうに俺たちに尋ねるが、俺は適当に流し、由真は苦笑するのみだった。

「え・・・えっ？あの何か言ってくださらないと分からないですよ」

エリスは、笑う俺たちに戸惑いおろおろとしている。
口調から察するに、少々怒気も含まれているようだった。

「あのさ、エリス。一言だけ言っておくよ。自分を良く知ること。あとは景に聞いて」
「由真。お前逃げる気だな。それに俺に厄介事を押し付けて・・・。恵麻がいれば味方になってくれるんだが・・・」
「いつも『あいうえお』言ってる景の味方なんてしないって」
「・・・それもそうだな。だが、由真も『天然腹黒』だとか『存在感が無い』と影で言っているのを俺が知らないとでも思っているのか？」
「ああ、それなら本人にも普通に言ってる」
「奇遇だな、俺もだ」

俺は、エリスに真実の一部だけを伝えておきながら核心部分を話さない由真に、苛立ちを隠せない。
恵麻がいれば、由真を止めてくれると思うのだが、不幸なことに恵麻はいない。
そして、子供のような言い合いをする俺たち2人。完全にエリスは蚊帳の外だし、そもそも恵麻に至ってはとばっちりもいいとこだ。

「はくしゅん・・・。風邪かな～」
「お姉ちゃん、どうしたの？」
「ううん、何でもない。誰かの噂かな～」
「・・・きっと、そうだよ。景お兄ちゃんが『あいうえお』とか言ってたり、由真お姉ちゃんが『天然腹黒』『存在感が無い』とか言われてるんだよ」
「・・・琴美、言っていいことと悪いことがあると思うよ」
「あはは・・・ごめんなさい・・・」

「・・・エリスがメイドということを、もうあいつらも知っているんだろうか？」

ふと俺は、頭によぎったことが口に出た。

「知ってるでしょ。だって、景は今やうちの学校でも3本の指に入るほどの有名人だからねえ。3歌姫は1括り、あと変態×2。・・・ぷっ」

「・・・その変態の1人が俺なのか？」

耳ざとくそれを聞いた由真は、俺を指差し笑いをこらえて言う。だが、全くもってこらえ切れていない・・・。

「そりゃ、会話の流れからしてもそうでしょ」

「・・・せめて、考えてから言ってくれ。即答されると、正直きつい・・・」

「それに事実なんだから、考えたって変わらないって」

「・・・」

もう俺には言い返す気力は残っていない。

薄々感じてはいたが、エリスの1件は予想以上に大きな反響を呼んでいるらしい。

ということは、あの姉妹も知っているのか？

・・・俺は、この時帰ろうかと思った。

「景様。見てください」

俺が、すっかり落ち込んでいるとエリスが俺の肩を叩き、駅前の道を指差す。

「・・・高そうな車だな」
「そうですね」
「ああ、そうだな」

「「っ！？」」

1台の高級車が、こちらに向かって走ってくるのが見えた。
普段は学生が多いものの、休日はあまり人も多くない駅前に似つかわしくない車だった。
どこかで見たような車だが・・・。俺がそう思っていると、不意に背後から男の声がかかり、思わず俺とエリスはぎょっとして後ろを向く。

「よっ・・・何でそんなに驚くんだよ？」

幸樹は逆に驚いている。
いきなり驚いて顔をして振り向かれれば、驚くのも無理は無い。

「いきなり後ろから声をかけるからだ」
「ずっと俺後ろにいたんだぞ。由真はとっくの昔に気付いているのに、何でお前は気付かないんだ？」

俺は、すぐに落ち着くと幸樹に文句を言う。何の前触れも無く声をかけられれば誰だって驚くはずだ。
それに対して、幸樹は由真はとっくの昔に気付いていたと言う。俺が由真を見やると、由真は大きく首を縦に振って肯定の意を示した。

「・・・」
「ほらみろ」
「ですが、寿々林様」

俺が、反論できずに黙っていると、幸樹は得意げになる。
だが、横からエリスが口を挟んだ。

「どうした、エリスちゃん？」
「私は大丈夫ですが、景様の心臓が止まったりしたら、どう責任を取っていただけるのですか？」
「へ？」

幸樹は、エリスに話しかけられたことが嬉しいのか、表情が緩んでにやにやしている。正直、気持ち悪い。
だが、エリスがいつもとは違った強い口調で幸樹を咎めると、幸樹は鳩が豆鉄砲を食らったような顔になる。
それを離れて見ていた由真も俺の横にいつの間にかやって来ていた。

「心臓は意外とデリケートなんです。いきなり脅かされて心臓が止まってしまう人だっているんですよ」
「いやあ、景はないだろ。案外、強心臓っぽいしよ」
「絶対無いと言い切れますか？」
「いや・・・絶対とは言い切れないけどよ・・・」

エリスに問い詰められ、段々と歯切れが悪くなっていく幸樹。

「そうでしたら、次からそういうことはしないでくださいね？」
「は、はい。・・・すいませんでした」
「分かっていただければ嬉しいです。あ、景様。まだお時間もありますので、皆さんの分の飲み物を買ってきます」

そして、幸樹はついにエリスに謝った。何と言うのか・・・聞いていると俺が過保護の坊ちゃんみたいだ・・・。
エリスは、幸樹が反省したのを見ると、幸樹に笑顔を向ける。そして、皆のジュースを買いに駅前のコンビにへと入っていった。
幸樹はというと、エリスの笑顔に見とれたのだろうか、魂が抜けたようにぼーっとしている。

「・・・ねえ、景？エリスってああなの？」
「いつもは違うな。だが、最近俗染みてきたからな・・・。・・・・俺の母親に似てきた気がする」
「・・・ああ・・・確かに」

俺が、エリスの行動に唖然としていると、横から由真にわき腹を肘で突かれた。
どうやらエリスがいつもああなのかが気になったらしい。
俺は、とりあえず今まで感じたありのままを話すと由真も納得する。

「ん？何だ、由真。まだ用があるのか？」
「あたしは何もしてないけど？」
「あ・・・あの・・・こんにちは、有栖先輩、上総野先輩」

由真と話し終えたその時、今度は指でわき腹を突かれた。大して痛くも、むしろむず痒く感じ、どうせ由真の悪戯だと思い、由真に尋ねる。
だが、由真は違うと言って首を横に振った。
すると、もう1度今度は2度わき腹を突かれる。
そして、その突かれたほうを見ると、そこには美玖がいた。
俺と由真がそっちを向くと、何故か申し訳無さそうに挨拶をする。

「「・・・こんにちは」」

俺と由真も遅いながらも挨拶をする。

「き、気付いてもらえて良かったです。何度かお呼びしたのですが・・・・だ、誰も気付いてくれなくて・・・」

「・・・すまん」

「ごめんな、美玖」

泣きそうになりながら言う美玖に思わず俺たちは罪悪感を感じ、頭を下げる。

同時に、呼ばれても気付かないほどに馬鹿騒ぎをしていたのかと恥ずかしくなる。由真も同様なのか顔を伏せる。

「い、いえ。そんなつもりで言ったわけではなくてですね、あ・・・うー・・・」

俺たちが謝ると、美玖はおろおろとして言葉に詰まった。

何だか誤解されているらしい。どうにか誤解を解こうと俺が口を開きかけた時、遠くから声が聞こえた。

「景様ーっ。ジュース買って来ましたよ。あの・・・こちらの方はどなたですか？」

エリスが小走りで、ジュースを手に持ってこちらに駆けてきた。

そして、走ってきたにも関わらず息一つ乱すことなく、俺に美玖のことを聞く。

「今日お世話になる、四条畷　美玖だ。美玖、こっちはエリス。・・・」

「は、はじめまして、エリスさん。美玖と気軽にお呼びください。あ、あの・・・有栖先輩。差し出がましいようですが、エリスさんは・・・メイドさんなんですよね？」

俺は美玖にエリスのことを紹介するが、どういう関係なのか言おうとした所で言いよどむ。

メイドだと言ったら、まずひかれる事は間違いない。例え、美玖が知っていたとしても、自分の口から言うつもりはない。

だが案の定、美玖もエリスが俺のメイドだと知っていた。

「で、ですけど、気にしませんよ。わたしの家にもメイドがいますから。むしろ、親しみが持てます」

「そうなのか？」

「は、はい。わたしたちメイド仲間ですね」

「・・・そんな仲間になりたくはないな」

どうやら、美玖は観点がズレているらしく、俺の家にメイドがいることにあまり疑問を感じておらず、何故だか好意的に受け取っているらしい。

そして、メイド仲間、おそらくはメイドを雇っている仲間のことだろう、だと言った。

だが、俺はそんな仲間になりたくはない。だが、それを言うと泣くような気がしたので聞こえないようにぼそっと言うだけに留めておいた。

「あ、あの・・・有栖先輩？何か言いましたか？」

「いや、特に言ってない」

「じゃ、じゃあ、わたしの空耳ですね」

そう言ってにこりと可愛らしい笑みをこちらに向ける。それを見て

俺は言わなくてよかったと確信する。

「景様、景様。本物のメイドですよ」

「ああ、そうだな」

会話を終わったことを察したエリスが俺の服の袖を引っ張る。俺が振り向くと、どこかで見た、いやあれは・・・美玖のとこの高級車だな。道理でどこかで見たと思ったんだ。ということは結構待たせたんだな・・・。

そう思いながら高級車の前の女に視線を向ける。不本意ではあるが見慣れた服を着た女がいた。・・・メイドか、あれ？

そして、エリスもメイドを見つけるとメイドがいると嬉々として言う。今まで外の世界に触れることの無かったんだから、その気持ちは理解できなくも無い。

「メイド服着てますよ。まだ、本物がいるんですね」

「・・・じゃあ、エリスは何なんだ？」

だが、俺は思う。本物ってことはお前は偽者なのかと。

だが、興奮して目を輝かせているエリスには俺の声は全く届くことはなかった。

「なあ、由真？幸樹はどうするんだ？」

「放っておけば？」

ふと、俺は幸樹のことを思い出し、由真に尋ねる。由真は放っておけと言うが、人道的にどうかと思う。

結局、じゃんけんで負けたほうが呼びに行くということになり、結

果由真が負けた。
俺に文句を言いながらも由真は幸樹の側まで行くと、幸樹の背中を思い切り蹴飛ばした。
そして、幸樹をずるずると引きずってきた。
美玖は苦笑していたが、車の後部座席に乗ってくださいと言い、俺たちは車へと乗り込んだのだった。

第２２話：小さな勇気、小さな一歩　その２（後書き）

今回の話はまた何の事件もありません。家にすら到着しません。

・・・私は読者に根気を求めているのだろうか？

今までを振り返り、ふとそう思いました。

また、今回から次回予告は出ていない人物に任せます。（読者は元より、私も忘れそうなので・・・）

２４話予告

「まあ、私が次回予告をしなくてはなりませんの？」

「衣先輩、こんにちは。あ、はじめまして、壬生　亜樹乃です」

「こちらこそ、はじめまして・・・ではないですわ。もう私たち会ってますわよね？」

「・・・あれあれ、そうだっけ？衣先輩、まあまあ落ち着いて。はい、紅茶」

「ありがとう・・・そうではなくて、次回予告ですわ」

「そうそう、そうでしたー。・・・うーん・・・次回も見てねー」

「・・・他に何か思いつかなかったのですか？」

２４話真予告

車に乗って四条畷家へ向かう景たち。

そこで出会う新たな少女。そして、彼女の秘密とは？

そして、現れた四条畷姉妹の両親。景たちの運命は如何に！？

「ところでよ、東京ドーム何個分ってよく聞くけど・・・実際どれくらい広いんだ？」

尚、予告は告知なしに変更されます。

第２３話：小さな勇気、小さな一歩　その３

「すげえ車だな？いくらするんだ？」
「いきなりお金の話をするなんて、幸樹、あんたバカじゃないの？」
車に乗り込むと、幸樹は興奮気味であちこちペタペタと備品に触りながら美玖に聞く。
だが、由真が幸樹を諌める。俺も気にはなるが、大して親しくもないのに聞くのは不躾だと思う。
「い、いえ・・・気にしないでください。でも、わたしもよく分からないんですよ。天河さん、分かりますか？」
美玖はやや苦笑いを浮かべて、運転手に聞く。
「色々と含めて２０００万ほどと聞いております」
「・・・」
運転手は、さらりとさも当たり前と言わんばかりの口ぶりだ。
幸樹は思わず息を呑む。そして、さっきとは一転して大人しくなり、黙ってしまった。
「寿々林先輩。そ、そんなに緊張なさらないでください。よく聞かれることですから。あ、そうだ。まだ、皆さんに紹介していませんでしたね。今、話したのは運転手の天河さん。そして、わたしの右隣に座っているのが、メイドの長良さん。左に座っているのが・・・あ、あれ？いませんね。天河さん、しよりはどちらにいますか？」
「しより様なら・・・」

「ばあっ！！」
「おわっ！？」

幸樹が黙ってしまうと、誰も言葉を発せず、重い空気が漂い始める。
さすがに、べたべたと触ったことを後悔したらしい。
その様子を見ていた美玖は、その空気を打破しようと、優しい声で幸樹を慰める。
そして、話題を変えるためなのか、それとも本当に忘れていたのか、運転手とメイドを紹介していなかったことに気付いたようで、その人たちの紹介を始める。
だが、最後に紹介しようとした1人がいないことに気付き、きょろきょろと探し、見つからないと運転手に聞く。
美玖の問いに対して、その運転手が言おうとしたその時だった。
幸樹の背後から、1人の女が飛び出して、大声をあげる。幸樹は、いきなり脅かされ思わず間抜けな声を出す。

「しよりっ！」
「あー、おねえちゃん。・・・ごめんなさい」

美玖は、幸樹を脅かした女を叱る。それに対して、素直に謝る女。
よく見ると、数日前に会った妹の紅玲奈だった。
だが、紅玲奈はあまり喋らない印象があるのだが、今日の紅玲奈は見た目の割には、どう考えても行動が子どもっぽい気がする。

「・・・ん？美玖、ちょっと聞いてもいいか？そいつはこの前会った紅玲奈だよな？」
「えっ・・・ええ・・・」

俺は、気になって美玖に聞いてみるが、美玖は目を泳がせて曖昧に答える。

聞いてはいけないことを聞いたのだろうかと、俺は心配になった。

「ワタシは、しより。でもね、景おにいちゃんが言ってるみたいに紅玲奈でもあるんだよ。ワタシは、梓依であって、乙女でもあって、紫でもあって、紅玲奈でもあって、そして、しよりでもあるんだよ。ワタシたちは多重人格なんだよ」

「・・・しより・・・良いの？」

「うんっ」

美玖が、言いよどんでいるとその隣に座っていたしよりは、何も考えていないのか能天気に、にこにこしながら重大なことを言った。

美玖は、はっとした表情でしよりを見やるが、しよりは大丈夫と首を縦に振った。

「「・・・」」

俺たち4人は、いきなりの告白に黙り込む。

「あ・・・あの・・・あまり気に留めないでいただけるとありがたいです。い、いきなり、この子が変な話をしてしまってすいません」

また、車内の空気が重くなった。・・・気がするのではなく、なった。

当事者であるしよりは全くこの空気が読めないのか、暢気に俺たちを見てにこにこと笑っている。

とりあえず、笑っているのは、しよりだけだ。運転手もメイドもあまり表情には出さないものの、正直苦々しい表情を隠せてはいない。

このことを知っているみたいだな。

美玖が謝っているのが、痛々しく感じた。俺が余計なことを言ったのが、いけなかったのだろう。

「美玖・・・何て言ったらいいのか分からないが・・・あまり触れてほしくないことに触れたみたいで・・・ごめん・・・」
「ううん、景お兄ちゃんは悪くないよー。ワタシが知ってほしいから言ったの。みんなお友達なんだよ。お友達には隠し事はしないの。・・・景おにいちゃん、幸樹おにいちゃん、由真おねえちゃん、エリスおねえちゃんは他のみんなみたいに、離れて行ったりしないよね？」

俺は、きっと原因は俺なんだと感じ、美玖に頭を下げた。
すると、美玖が口を開く前に、しよりが話し始めた。最後の言葉を言うとき、しよりが一瞬言葉に詰まったのが分かった。
もちろん俺には、この姉妹の過去のことは全く分からない。だけど、この多重人格のせいで人が寄り付かなかったということくらいは分かる。

「・・・大丈夫だ。俺たちはもう友人だ。幸樹も由真もエリスも・・・それに他にもたくさん友人はできるさ。そのままのしよりを認めてくれる人がきっと現れる。俺たちがそうなってみせるから」
「・・・景おにいちゃん・・・」

俺は、中腰になってしよりの頭をぽんぽんと軽く叩く。
しよりは、俺のことを不思議そうに見上げていたが、意図が伝わったようで嬉しそうにはにかむ。

「何臭いこと言ってんだよ？ったく、空気が重くなるだろ。まあ、景の言うとおりだ。これからよろしく、しよりちゃん」
「そうそう。あたしらに難しいこと言われても分かんないし。それに人生楽しく過ごして何ぼでしょ」
「はい、私でよろしければ、お友達になっていただきたいです」

幸樹が俺の背中を思いっきり叩いてから言う。俺は、むせて咳き込み、少々涙目になって幸樹を睨みつける。
それを見ていた由真とエリスも次々と話し始め、車内の空気が軽くなったような気がした。
背中が痛いが、俺は幸樹には感謝してもいいかと思った。

「美玖様、しより様。いいお友達をお持ちになりましたね」

メイドの長良さんがしみじみと言う。
運転手の天河さんも、うんうんと頷いている。

「はいっ」
「うんっ」

長良さんの言葉に2人とも満面の笑みで答える。

「皆さん、そろそろ到着します」

車内の空気がようやく明るくなったとき、四条畷家へと俺たちは到着した。

「・・・なあ、景。この門でかくねえか。それに中も広そうだぞ」
「幸樹、分かったから落ち着け」

そして、正門の前へと車はやって来る。すると、門が重い音を立てて、開く。
中を見ると、立派な庭があり、その奥には西洋を意識したであろう邸宅があった。
幸樹は、やたらと興奮しているが、みっともないと思わないのだろ

うか？

「景様、とても広い庭ですね。一体、どれくらいの広さなんでしょうか？」

「・・・さあな」

「庭の広さは分かりませんが、土地は東京ドーム1個分はあるそうです」

隣を見るとエリスもまた目を輝かせ、興味津々に外を見つめている。

・・・エリス、お前もか。

幸樹よりは控えめではあるが、明らかにはしゃいでいるエリス。こう見ていると、エリスも年相応なんだと思う。

ん？年相応・・・。年相応か・・・、エリスは一体どの程度の年齢なのだろうか？

俺が思うに、俺とそう変わらない年齢に設定されているはずだ。実際には、どうかは知らないが。

「ところでよ、東京ドーム何個分ってよく聞くけど・・・実際どれくらい広いんだ？」

「あんたね・・・、どうしてそうくだらないことばっかり気にするの？」

「由真。お前は気にならないのか？」

「広いってことが分かれば、それでいいんじゃない？あたしはそう思うけど」

横では、幸樹と由真が美玖の言った東京ドーム1個分という話で会話をしていた。

幸樹は気になっているようだが、由真は全く気にならないらしい。

この辺りは、性格がよく現れている。

「東京ドームというのはですね。面積が４６７５５平方メートルあります。これが所謂東京ドーム１個分の広さということになります」
「・・・あ、エリスさん。説明ありがとうございます」

エリスが、東京ドームの広さを説明すると、美玖はわざわざ礼を述べる。
ただ１つ言えるのは、そもそも東京ドームを知らない人にとってみれば説明にならないということだ。
ちなみに俺もそれがどれだけ広いのか皆目見当がつかない。

こんなくだらない会話をしていると、ふと大きな木が俺の目に留まった。

「さあ、皆様。到着しました」

だが、俺が美玖に聞こうとしたとき、残念なことに邸宅の玄関に車が着いてしまった。

・・・あとで、聞けばいいか。

「では、私は車庫に車を入れてきます。あとは、長良さん、よろしくお願いします」
「はい、分かりました。それでは、皆様どうぞこちらへ」
そう言うと、運転手の天河さんは、車庫へと車を仕舞いに行った。

そして、メイドの長良さんに案内され、と言っても玄関は目の前だ。迷うことはない。

そして、俺たちが中へ入ろうとした時、ふと手に暖かい感触がして、振り返るとしよりが俺の手を握っていた。

「・・・」

「・・・」

お互いに無言ではあるが、俺は苦笑い、しよりの方は満面の笑みだ。多重人格のために行動は確かに子供っぽいとは思う。だが、見た目は双子の姉の美玖よりも大人に見えるのだ。正直言って、恥ずかしい上に、親に見られたら何と言われるか分かったものではない。

「・・・どうかしたのか？」

「手、つなごー」

わざとらしく舌足らずな言葉で言う所が何だか嫌らしい・・・。しかも、手を握ってから言う所も計算されつくしている気がする。それに上目遣いで見られると、どきっとするよりも何か犯罪者になった気分しかしない。

「あれれ？景、いつの間に、仲良くなったのかな？やっぱりあんたロリコンだったんだ」

「・・・好きでこんなことしているわけじゃない」

「やっぱり、ワタシのこと嫌い？」

「そうじゃなくて・・・」

俺がしよりと手をつないでいる所を見た由真は真顔で俺をロリコン扱いする。

それを否定すると、今度はしよりが泣きそうな顔で嫌いかと問う。
俺は、言葉に詰まる。

「なっ！？しより、ダメだよ、有栖先輩を困らせたら」
「うー、そんなことないもん。景おにいちゃん、困ってなんか無いよね？」
「あ、有栖先輩。こ、困ってますよね？」

そこに、美玖が助け舟を出してくれて、助かったと思ったのも束の間。しよりは俺に話を振り、美玖も俺の目を見て言う。
俺はほぼ同時に真逆のことを聞かれ、思わずたじろぐ。

・・・妙な知り合いが増えたもんだ。俺は深く溜息をついた。

「おおっ。美玖、しより。おかえ・・・り」

なかなか俺たちが、家の中へ入らないでいると、玄関の扉が開き中から中年のおっさんが出てきた。
そして、俺の周りでぎゃーぎゃー喧嘩をしている姉妹を見て固まった。

「あらまあ」

その後ろには口に手を当てて驚くおばさん1名。
だが、こちらは大して驚いていないようにも見える。目が合うと、軽く会釈をされた。

「お父様、お母様。ただいま」

「ただいまー」
「「っ！？」」
おばさんの声に喧嘩していた姉妹が振り向くと、ただいまと挨拶をする。
俺たち４人、特に俺は唖然とする。
「・・・・」
四条畷姉妹の父親は、無言で震えている。もちろん、これが感動しているからということは無論ない。
状況を考えれば、著しく最悪なことがよく分かる。
可愛がっている娘が、どこの馬の骨とも分からない男と手をつないでいたら、頭にくるだろう。しかも、姉妹ともに手をつないだこの状態ならば、尚更だ。
「はじめまして。俺の名前は有栖　景です。ご招待頂きありがとうございます」
俺は、とりあえず美玖としよりに手を離してもらい、両親に挨拶をする。
俺が挨拶をすると、残りの３人も挨拶をする。
「娘たちが大変お世話になったそうで。私は、美玖、しよりの母で、四条畷　久美子　（しじょうなわて　久美子）と申します。そして、あっちにいるのが、夫の玄太郎。早い話が、父親ね。あなたも挨拶しなさい」
「・・・私が、四条畷　玄太郎　（しじょうなわて　げんたろう）だ」

母親は、笑顔で挨拶するのだが、父親の方はあからさまに嫌そうにむすっとした顔で挨拶をする。
歓迎されていないことだけは、よく分かった。

「こんな所で立ち話もお客様に失礼ですね。さあさあ、中に入ってくださいな」

母親に先導され、俺たちは家の中へと入っていく。

「君は確か有栖君だったね。ちょっと残ってくれるかい」
「景様が中に入られないのなら、私も残ります」
「いや、大した話でもないですよね？そういうことらしいから、先に行っていてくれ」
「はい」

だが、父親に呼び止められ、俺だけ残ることになった。
エリスも残ると言うが、エリスに関係ない話で残すのも悪いので先に行ってもらう。
そして、父親と2人きりになると、父親は話を始めた。

「・・・まずは、はっきりと言っておこう。私は君が嫌いだ。ちょっと気になって君の事を調べさせてもらったよ。そしたら、どうだい。メイドなんぞを雇っている変態じゃないか。昔は、天使のように可愛かった娘たちが穢れたのも君のせいだ。二股か！？二股なのか！？君は最低な男だ。娘の心を弄ぶ、人間のクズだ。私は君を家に入れることを認めることは出来ない。今すぐ帰ってくれ」

・・・本当にボロクソに言ってくれるな。
俺は、そこまで調べているなら、エリスの正体も調べておけと思うが、面倒なので口には出さない。

それに、俺が変態なら、人間にメイドさせてるあんたはもっと変態だ。
加えて娘の反抗期を俺のせいにするな。
あまりに自己中心的で支離滅裂な言葉に、さすがに俺も頭にくるのだが、俺以上に頭にきた人がいたらしい。

「・・・あら・・・」
「・・・」

気がつくと、このおっさんの奥さんが背後に立っていた。
どうやら、気になって戻ってきたらしい。怒りを隠しきれていないのか般若のような顔をしており、肩が震えている。
おっさんは俺をボロクソに言っていた時の勢いはどこに行ったのだろうか？今は、顔が真っ青で、口をパクパクさせている。声が出ないらしい。

「有栖先輩。遅いので心配になって戻ってきたんですけど・・・お父様がご迷惑をかけてしまったようで・・・た、大変失礼しました」
「なっ、美玖！私は、この少年に迷惑などかけていない。むしろ、迷惑をかけられているのは美玖のほうじゃないか」
「・・・お父様、言い訳は恥ずかしいので止めて下さい。有栖先輩、しよりも待っていますし、行きましょう」

俺が、いきなり状況が変わったことについていけずにいると、美玖が扉を開けてやって来た。
どうやら心配になって戻ってきたらしい。美玖は、俺に話しかけた後、父親を睨むと強い口調で言い放つ。
その父親は、娘にも怒られうろたえている。

・・・お前の親父変わってるなと言いたいが、嫌味を言いそうなので止めておく。
もう2度とここには来ないだろうから会うこともないし、何よりも人の親を馬鹿にするのは良くないよな。

「あとは、私がきっちり叱っておくから、美玖は有栖さんを案内なさい。・・・有栖さん、ごめんなさいね」
「いや、俺は気にしてませんから」

こうして俺は、美玖ともにその場を後にするのだった。

第２３話：小さな勇気、小さな一歩　その３（後書き）

今週は２回目の更新。

次回予告？

恵＝恵麻　陽＝陽菜

恵「最近、私出番ないよ～」
陽「恵麻さん、それを言うと私なんて本編にすら出てないよ」
恵「しよりさん・・・多重人格だよね。由真ちゃんも、美玖ちゃんも個性がありそうだよね～。エリスちゃん人間じゃないし・・・」
陽「私たちみたいな無個性ってつらいですよね・・・」
恵「陽菜ちゃんが、そんなこと言うと私の存在価値がなくなるだけど・・・」
陽「・・・でも、よく考えたらそこまで個性の強い子って、周りにいないよね？」
恵「・・・あはは、意外とポジティブなんだね～」
恵＆陽「「・・・」」（あっ、次回予告忘れてた）

２５話真予告

現れた新しい人格。
そして、明かされる美玖の秘密。彼女の願いとは・・・。

第２４話：小さな勇気、小さな一歩　その４

俺は、ようやく家の中に入ると、そこはある意味別空間だった。
隅々まで、掃除の行き届いているであろうきれいな廊下。
そして所々に置いてある、絵画や装飾品。金ぴかな物がないところが、俺としては趣味が悪くないと思う。
壁に掛かっている絵画は、主に風景画が多く、その絵はどれも見ていて何か安心できるというか落ち着くものだった。途中の部屋の前に甲冑が置いてあったのが気になったが、まあそれは置いておこう。

そして美玖は、俺の前を案内するために進んでいる。
他の奴等は、先に部屋に通されて、そこで待っているらしい。

「押そうか？」
「い、いえ・・・大丈夫です」
「結構大変だろ？気にするな、場所さえ教えてくれれば、そこまでは押していくから」
「そ、そうですか。では、お言葉に甘えて」

だが、美玖は車椅子を自分で押しているので、ちょっと疲れているように見えた。
そこで、俺が車椅子を押すことを提案する。最初は断られたが、もう1度言うと、少し考えてから頷いた。
その後、美玖の車椅子を押しながら、俺は色々と美玖に尋ねてみた。

「ところで、随分広い家だが一体何人くらい住んでいるんだ？」
「えーと・・・わたしたち家族と住み込みの方を含めて・・・１０人ですね」

まずは、この家に何人住んでいるのか聞いてみる。あまり人を見ないのだが、それなりに人はいるはずだ。
美玖は、・・・さんと・・・さんと・・・などと口に出しながら数えていた。思ったよりも、人を雇っていないなというのが、俺の率直な気持ちだ。
知らない人も、数人含まれていたのでそのうち会うことになるのだろう。

「意外と少ないんだな。もっと、お手伝いさんがいっぱいいるものだと思っていたんだが」
「うちは信用の置けない方は雇わないんです。最近は世の中物騒になってきているとお父様もお母様も言っていますし」

・・・物騒なのは、あんたの親父だ。

「しかし、こんなに広い家を毎日掃除するのは大変じゃないか？」
「掃除していない部屋は、ほとんど掃除なんてしていませんよ。１人で屋敷中を掃除できるような人間なんていません。人に見える部分だけきれいであれば問題ないです」

・・・ああ、だから今日はきれいなんだな。

「この後は、一体何をするんだ？」
「そうですね・・・まだお昼には早いですし・・・わたしたちの部屋にでも案内します」

俺の質問に美玖は顎に人差し指を当てると、少し考えてから振り返るとそう言った。
・・・何で、あのおっさんが頭に浮かぶんだ？

「・・・あのおっさん・・・いや、親父さんが怒りそうな話だな」
「い、いえ別に問題ないです。・・・おっさんとでも好きに呼んでください」

・・・おい、あんたはそれでいいのか？

「いや、良くは無いと思うぞ・・・。・・・おっさん言った俺が言えるセリフではないと思うけど。今、美玖は反抗期なのか？」
「うーん・・・反抗期というよりもあまりお父様が好きではないという方がしっくりくるかもしれません」

・・・はっきりと言い過ぎだよな、これは。俺は思わず苦笑いをするが、将来俺もこういわれる時が来るのかもしれない。

「・・・」
「あ、有栖先輩、ここです。ど、どうかされましたか？」
「・・・いや何でもない」
「そ、そうですか・・・。やはりお疲れなんですね？」
「そんなことはないぞ。ただ、少しだけ自分の将来に不安を覚えただけだ」

ふと、俺が考え込んでいると、目的の部屋に到着したらしい。中からは、幸樹や由真の声が聞こえてきた。
ぼーっとしていた俺を見て、美玖は父親のせいだと思ったみたいだ。少し申し訳無さそうに項垂れる。
俺は、心配させまいと本当のことを言うと、美玖は不思議なものでも見るようにきょとんとした。

「有栖先輩は、もう将来について考えているんですね。わたしはまだ将来についてなんて考えたことありません。今を生きるのに精一

杯ですから」
「俺もそうだぞ。でも、今を精一杯生きていれば、きっと進むべき道が見つかると思う。逆に言うなら、そこから逃げてしまったら進むべき道なんて見つかるわけが無いよな」
「そうですね・・・そうですよね。じゃあ、入りましょうか」

美玖は感心したように言うが、別に大したことを考えて生きているわけではない。他人に偉そうなことを言えるほど、夢があるわけでも、まして目的もない。あるのは、ただ漠然とした何か。それが見えないから、それを見たいから、俺は今を精一杯生きるのかもしれない。
だが、今俺が考えていた未来は、実現したくない未来だ。
俺の話を聞いていた美玖の表情が一瞬だけ曇ったように見えたが、すぐにその表情は消えてしまい、笑顔が溢れんばかりの表情に戻った。

・・・気のせいだったのだろうか？

俺は疑問を残しつつも、応接室へと入っていった。

「では、お嬢様。私はこれで失礼します。また、昼食が用意できましたら、お迎えに参ります」

そう言うと、長良さんは部屋を出て行った。

「景様。やはり本物のメイドは違いますよね。私、今日はたくさん勉強します」

エリスは、長良さんが出て行った扉を熱心に見つめていた。
連れてきてよかったのだろうか？と疑問に思うが、まあいいのだろう。いや、いいに決まっている。

「そうだな、好きなだけ勉強すればいい」
「はい」

俺が、もうお好きにどうぞと投げやりに言うと、エリスは心底嬉しそうに笑った。
メイドの勉強なんて、俺も両親も望んでいないのにな・・・。そんな俺たちの思いに気付かずに1人空回りしているエリスを見ていると、家族になることはできないかもしれない・・・そう思った。
メイドであることが、彼女の生きがいであるなら、それを誰が止められるというのだろう・・・。

「ところで、何を勉強するんだ？」
「そうですね・・・うーん、色々とです」
「要するに何も考えていないと」
「そうでもないです。掃除の仕方とか聞きたいですし、メイド服の着こなし方とかも知りたいです」
「はあっ！？」

俺は、ふとエリスが何を学ぼうとしているのか興味を持ち聞いてみた。
エリスは色々あるというので、本当は何も無いのではと聞くと、少し怒ったように具体的にやりたいことを言ってくれた。
それを聞いた俺は、自分の耳を疑った。前者はまあいい。だが、後者はふざけているとしか思えない。そもそも、あんな服に着こなしとかあるのか？

「どうした、景？いきなり大声出して。さては、エリスちゃんにセクハラで訴えられたな」
「幸樹・・・どう考えたらそうなる」
俺が大声を出したせいで、部屋にいる皆がこっちを見ていた。
そして、幸樹が皆を代表するような形で俺に何があったのか聞いてきた。だが、俺が答える前に勝手に妄想で答える。
もちろん、合ってなどいない。

「へえー、有栖は変態なのかー」
「・・・なあ、幸樹。これは中身が違うよな？」
「ああ、絶対に違うぞ、こいつは・・・」
「で、誰？」
「ああ、うちは乙女。多重人格の１つや。でも、あまりうちは出てこんから、あれやな・・・レア者ちゅうわけよ」

いきなり変態呼ばわりされたので、俺は振り返る。
まず、由真を見てみるが首を横に振る。次に、美玖を見るが同じ様に首を横に振った。
・・・最後に、まさかとは思うがしよりを見ると、何だか様子が違っていた。
まず、何だかイントネーションがおかしい。幸樹も由真も気付いたらしく、由真が思い切って名前を聞く。
由真の聞き方は、あまりいいものではないが、乙女は特に気にする様子も無かった。

「何？有栖はそんなに女の子触りたいんか？だったら、うちでも触るか？美玖とは違うて貧乳やけど。美玖のは大きいでえ。あっはっはっ」

・・・どこの変態だ、あんた。
俺たちは、呆気に取られる。幼児化の次は、妙なエセ関西風エロ親父。まだ、しよりの方が会話がしやすい。

「乙女。お客様の前で、そんなはしたない言葉を言ってはいけないといつも言ってるでしょ！」
「ああ、もうっ。それくらい分かってる。はーい、タッチ」
「きゃあ！？」

美玖が、暴走する妹を叱るが、乙女は全く反省する様子も見せずに美玖の胸を揉む。
ぼんっという音が、立ちそうなくらいに瞬時に美玖は顔を真っ赤にすると、部屋中に響き渡る声で悲鳴をあげ、俺の後ろへと隠れる。

「やっぱり、ええ乳してるわあ。上総野の姉ちゃんは、あんまなさそうやし・・・」
「ああっ！悪かったねえ」

美玖が、いなくなると矛先を由真へと向けるが、胸を見ると鼻で笑う。それを見た由真は、今にも飛び掛りそうだったが、残る理性で何とか耐えているようだ。

・・・俺たちどう反応すればいいんだ？
隣の幸樹を見るが、肩をすくめ笑う。お手上げということか。

「ほな・・・残っとるは銀髪の姉ちゃんやね。どんな感じなんやろうね」
「・・・美玖、少し庭を見てもいいか？何かここに居辛くてな」
「そ、そうですね・・・。では、わたしが案内します」

手をわきわきとさせて、エリスに近づいていく乙女。エリスは、その異様な女に威圧されたのか、どんどん後退していく。
容易にこの後のことが想像できる。何となく居辛い空気を感じたので、気になって庭でも見てみようと思った。
美玖に聞いてみると、案内してくれるようだ。俺と同じ居辛いのだろう。だが、あれは放っておいていいのか？

「いろんな意味であれは放っておいていいのか？」
「あ・・・ええ、た、たぶん大丈夫だと思います。あの子のスキンシップは、少々度が過ぎることもありますけど・・・。そ、それに1日1度しかしませんから」

俺は、どうしても気になってしまい、美玖に聞いてしまった。
美玖は、顔を引き攣らせながら大丈夫だと思うと言った。言葉も、途切れがちでどう聞いても安心できない。最後は、無理矢理作り物の笑顔で俺を見据えていた。

・・・絶対大丈夫じゃない。

「「・・・」」

俺と美玖は黙って、部屋を出た。
扉を閉めるときに、幸樹が頑張れと口パクで言っていた。
・・・何を頑張れと？

俺たちが部屋を離れた直後、その部屋から誰かの悲鳴が聞こえた。

「すごいな、毎日手入れしているのか」
「はい、そうです。そ、そうだ。有栖先輩はお花に興味はありますか？中庭にはきれいな花がいっぱいあるんですよ」
俺と美玖は、玄関先の庭へとやって来ていた。
美玖が言うには、ここ以外に中庭でも、家庭菜園やガーデニングもしているとのことだが、そこにはあまり興味はなかった。
「俺は、花を見ているよりもこういう所の方が好きだな。何というのかここは落ち着く場所だな」
俺は、先程の部屋の状況を思い出して言った。あの乙女とかいう女の行動はかなり突飛なものだった上に、こっちが見ていて顔が熱くなる。
見ていたいという気持ちがないわけではないのだが・・・恥ずかしさの方が勝ってしまう。
「有栖先輩もそう思いますか？わたしもここが好きなんですよ。昔からよくここで寝転んで、空をぼーっと見上げたり、お昼寝したり。あ、あとですね・・・」
美玖もまた、俺と同じ様にここが好きらしい。まあ、俺よりもずっと前から好きなんだな。
嬉しそうに美玖は話しながら車椅子で近くの木の下へと移動した。
「なっ！？おいっ、・・・大丈夫なのか？」
「くっ・・・うっ・・・は、はい、だ、大丈夫です。あ、すいません」

美玖は木につかまり、自分の足で立とうとした。
俺は、しばらく美玖が何をしたいのか、よく分からなかった。だが、バランスを崩しかけた美玖を見て、我に返ると、美玖を背中からそっと支える。
美玖は、ほっとしたように俺を見た後、礼を言う。

「いきなりどうしたんだ？」
「・・・あ、あのですね。よろしければお話聞いていただけますか？」
「そんなに改まってどうかしたのか？俺でよければ聞くぞ」

俺の質問に美玖はしばらく黙っていた。何かまた不味いこと言ったのだろうかと、俺が思っていると美玖は何かを決意したようにぽつりと言った。
蚊が鳴くようなか細い声だったが、何とか聞き取ることができた。あまりに改まって言われたので驚いたが、話を聞いてみようと思った。そういえば、まだ名前くらいしか知らないからな。

「座っていてください、な、長い話ですから。・・・実は、私は元々歩くことが出来ない訳ではないんです。ただ、1年前に交通事故に遭って以来こういう状態になってしまって・・・。それからのわたしは、外にもあまり出ずに家の中ばかりで過ごすようになりました。リハビリもこけてばかりで嫌になっちゃって・・・。両親も少しずつやればいいって言ってくれます。わたしのことを気遣ってくれて・・・でも、それにわたしは甘えていたんです。それに、わたしがこういう状態になってから、みんな腫れ物を扱うようにわたしに接するんです。学校の先生も、友達も・・・家族でさえも・・・。有栖先輩たちもそうでした。理由は分かるんです。けど、心の中ではずっと納得できなかった。どうして・・・どうしてわたしだけが・・・って。今考えれば、周りが良く見えてなかったんですね。で、

ですけど・・・わたしはずっと思ってるんです。また歩くって・・・もう1度歩くんだって。歩けるようになれば、きっと両親も妹も喜んでくれます。だから、家から見えないこちらの庭には、歩くための練習でよく来るんです。両親は、わたしが諦めたと思ってますから・・・驚かせたいんです。・・・もし、もう1度歩くことが出来たなら・・・その時は・・・わたしも皆さんの輪に加えてもらえますか？・・・わたし、友達が少ないので」

俺は、美玖の話をただ黙って聞いていた。何故、俺に言いたくなったのかは分からない。

だが、人に話したくなることもあるのだろう。昔の俺のように・・・。

美玖は、この話をしている間、初めは時折辛そうな表情もしていたが、最後にはその表情はもう無かった。

ただ、車椅子のせいでなかなか友人と遊べなかったことは、寂しかったのだろう。最後の言葉を言うとき、美玖は心配そうに俺を見ていた。

「あ、いたいた。美玖ー」

しかし、美玖がちょうど話し終えた時だった。妹が、美玖を呼んで駆け寄ってきた。

俺は美玖への答えを言い損ねてしまった。そういえば・・・また言葉遣いが違う様な気がする。

「梓依、どうしたの？そんなに慌てて」

「美玖、昼食の時間だよ。有栖先輩もぼーっとしてないで、ほら行くよ！」

「・・・さっきとは違うよな？」

梓依？あの妙に行動や口調の幼いしよりとは違うのか。
美玖を迎えに来た梓依は、言動を見ても姉のように思える。
俺は、とりあえず本人に確認を取る。

「美玖がお世話になったみたいだね。私、梓依。人格の中では、一番出ている頻度が多いよ、あはは。ここにいるってことは・・・美玖がやっていることを知っているんだよね。誰にも言わないでよ、約束！」
「分かった、誰にも言わないから。俺でできることがあれば手伝うからな」
「あ、ありがとうございます」

俺の予想通り、また人格が違ったのが出てきたらしい。どうやら、これが主要人格のようだ。
意外にも、元気で少しうるさそうな感じの女だった。
その梓依は、美玖がここで何をしているのか知っていたらしい。そして、俺を一瞥した梓依は、俺に黙っているようにと口止めする。笑顔も垣間見えるので、それなりに信頼はされているらしい。
もちろん、俺は誰かに他人の秘密を言うつもりもない。その上で、俺は余計なお節介心からいつでも手伝うと言っておいた。俺の言葉に、美玖は嬉しそうに笑った。

・・・だがきっと、美玖は1人・・・いや梓依たちとやり遂げるだろうけどな。

「そ、そうです！」
「どうした？」

ぼーっと考え事をしていたからだろうか。いきなり大声を出した美玖に俺は驚く。美玖の隣にいた梓依も目を真ん丸く見開いている。

「て、手伝ってくれるんですよね？でしたら・・・これです」
「携帯？」
「はい。先輩は持ってますか？」
美玖は、手をぽんと叩くと、携帯をポケットから取り出した。
・・・その年で・・・ジュニア携帯かよ・・・。
そして、俺に持っているかと聞く。

「あまり使わないが持っている」
「そ、そうですか。あ、あのアドレス登録してもいいですか？わたしの携帯だとアドレス以外のメールが来ないんです」
「・・・ところで、どうやって登録するんだ？その携帯は使ったことがないし、あと俺は打つのが非常に遅い」
俺は、携帯を初めとして機械類にはあまり強くはない。キーボードだって未だに指一つだ。
以前、晃にブラインドタッチを見せてもらったことがあるが、正直言ってあれは無理だ。
もうすぐ食事だからあとでもいいかと俺は美玖に言おうとした。

「だったら、私がやるから。ちょっと携帯貸して」
俺が美玖に言おうとしたときだった。しびれを切らしたのだろうか、梓依が右手をこちらに出す。
俺が大人しく携帯を渡すと、信じられないほどの速さでアドレスを打ち込んでいく。
「・・・」
「さすが、梓依だね。わたしの何倍もすごいよ。あ、有栖先輩のア

ドレスも入ってます」
「あ、はい、これ。・・・あとさ、美玖。いい加減その携帯替えた方がいいよ。子供っぽいから。・・・有栖先輩は、まずは携帯くらい使えるようになったほうがいいですよ。ほとんど電話しかしてないでしょ？今時、高校生で携帯を電話程度にしか思ってないのは珍しいよ」

そして、打ち終わると俺と美玖にそれぞれ返す。
美玖は、感心したように梓依を見る。だが、梓依にとってはそれが当たり前のようだった。
携帯を渡した後に、呆れたように笑いながら俺と美玖に言った。

「まあ人それぞれだから、いいと思うよ」

・・・さりげなくバカにしてるな。
俺は、そう思ったが口には出さなかった。少なくとも、親切心でやってくれたのだろうから。

「ありがとうな」
「べ、別に・・・感謝されるよう事じゃないよ」
「ううん、梓依はいい子だよ」
「・・・」

俺たちが、梓依に感謝するとうるさかった梓依が顔を赤くして黙る。

「そうだ、さっきの話なんだが、歩けるようにならなくても俺たちは友人になれると思うんだが・・・。由真も幸樹もそんなこと気にしないぞ」
「そ、それもそうですね。でも・・・けじめです」
「そうか・・・。まあ、さっさと戻らないと文句言われそうだし、

戻るか。」

俺の言葉に、美玖は静かに頷いた。だが、静かに、けれども意思をしっかりと持った凛とした声で言った。

俺は、それ以上言葉を続けることはできなかった。そして、美玖に一声かけるとその車椅子を押し始める。

「あっ、ちょっと待ってよ！」

梓依は慌てて俺たちの後を追ってきた。応接室に戻るまでの間、俺たちはしばらくエリスのことや姉妹の両親の話などをして会話を楽しんだ。

応接室に戻ると、涙目のエリスが俺のところへ駆け寄ってきた。だが、梓依を見ると、ひっ、と短く叫んで俺の背後へと隠れた。そして、俺の肩辺りから、少しだけ顔を覗かせる。

「景様、ひどいです。私が酷い目に遭っていたというのに、どこかに行ってしまわれるなんて・・・」

「・・・悪かった。だから、泣くな」

・・・一体、あの乙女は何をしたんだ？具体的に聞こうかとも思うが、傷口に塩を塗るような真似をするのも可哀想だ。

俺は、エリスが落ち着くようにと、頭を撫でる。

「・・・あはは、何か乙女が色々とやったみたいで・・・」

「・・・そ、そうみたいだね。」

いきなり俺の背後に隠れたエリスを見て、美玖も梓依も苦笑いを浮かべる。
美玖は、起きたことが予想できるのだろう。それに、梓依は当事者だ。

「ねえ、景。あんたも隅に置けないねえ。で、どっちが本命？やっぱり美玖。それとも、妹たち？」
「俺は、断然美玖ちゃんだけどな」

気がつくと、由真が近くに来ており、肘で突かれる。
そして、何故か聞かれていないにも関わらず幸樹が答える。
・・・こいつら、本人を目の前によくも言えるもんだ。

驚いているよなと思いつつ、視線を姉妹に戻すと案の定、美玖も、梓依も驚いて目を丸くしていた。

「あはは、で、有栖先輩はこの中だったら誰が一番？」
「・・・」

皆が俺を注目しているのがよく分かる。美玖は、黙っているが興味ありそうだし、由真は期待の眼差しを送ってくる。
俺の背後にいるはずのエリスからも視線を感じる。梓依もまた、興味津々に俺を見つめている。
俺の恋愛事を聞いてどうするんだ？まあ、単純に普段何考えているか分からない俺の好きな人に興味があるということだろうな。

・・・さて、どう答えれば納得させることができるのやら。

選択肢はいくつかある。

まずは、幸樹。まあ、ネタだ。
これを言うと、まず間違いなく四条畷姉妹はひくだろう。
由真は、喜んで学校中に言いふらしそうだ。なら、まだメイドを雇っている変態の方がましだ。

次に、ここの４人。
エリスはロボットとはいえ、この場合の勘定には入っているに違いない。
エリスを選ぶと、間違いなくメイド好きの変態の噂が真実になりかねないので、まず無理。
他の３人は・・・選んでしまうと迷惑がかかるだろうからな・・・。
それに冗談が通じないことはないだろうが、冗談で選ぶのは弄んでいる気がしてならない。よって、却下。

最後に・・・そろそろ来るよな・・・。

「あら、楽しそうなお話ですね。では、皆さんお揃いのようですので、ご案内します」

・・・やっぱりだ。俺はついてるな。
俺は、思わず心の中でガッツポーズをとる。
ちらりと皆を見ると、不満顔だらけだった。特に由真と梓依が不満そうだった。

「飯みたいだから、早く行くぞ。俺はお腹がすいて仕方ないんだ」

結局、俺はこの後も有耶無耶にして答えることはなかった。
ちなみに、３番目の選択肢は・・・長良さんだ。
彼女が昼食の準備が整ったと来れば、有耶無耶に出来るからな。

第２４話：小さな勇気、小さな一歩　その４（後書き）

読んでいただいた方々ありがとうございます。
ちょっと長い話になってしまいました。

小さな勇気、小さな一歩は、あと3話で終わりです。

第２５話：小さな勇気、小さな一歩　その５（前書き）

２００７年８月１８日　後書きの数字を変更。
２００８／６／１３　本文一部修正

第２５話：小さな勇気、小さな一歩　その５

四条畷姉妹の家に遊びに行った翌日。

俺はまたいつもように、恵麻とともに登校していた。

「なあ、恵麻。もし、俺が交通事故に遭ったら、リハビリ手伝ってくれるか？」

「え・・・えーと、景君どうかしたちゃったの～？うーん、でも手伝ってって言われたら手伝うと思うよ～。じゃあ、私がリハビリしなくちゃいけなくなったら、手伝ってくれる？」

俺は、昨日のことを思い出し恵麻に聞いてみた。

唐突なことを聞いたせいだろうか、恵麻は言葉に困っていた。

考えなくても恵麻が困るのも当然だろう。いきなり朝から不吉な話をする男がいたら、嫌だろう・・・。そもそも何で俺はこんな話をしているんだ？

だが、恵麻は少し考えてから真剣な顔をして言った。そして、俺にも同じ質問をする。

「そうだな、手伝ってくれと言われたら、必ず手伝うだろうな」

「困ったときはお互い様だよ～。それが、幼馴染で・・・友達の私たちだよ～」

「・・・友達か」

「えっ！？」

「俺は、少なくとも親友だと思っているんだがな」

「・・・え・・・ああ・・・そうだね、私たち親友だよね～」

恵麻の問いに、俺は恵麻と同じ様に答える。

それに対して、恵麻はいつもと同じ笑顔で俺に言った。
だが恵麻の口から友達という言葉が出てきたことに俺は、少しがっかりとした。
少なくとも俺は、親友だと思っていたからだ。恵麻は、俺の言葉を聞いて、少し慌てた様子だった。そして、俺に対して悪いという感情が出たのだろう。沈んだ顔をしていたが、すぐに明るい表情に戻って言い直した。

俺は、恵麻の慌てる様子を見ながら、ラブコメのような展開でもあればなと、ふと思った。
だが、頭を振ってその妄想を打ち消す。・・・俺は浅ましい上に、楽がしたいと思っているんだな。
現実には、そんなことは絶対にない。俺は、心に言い聞かせる。

「け、景君・・・。大丈夫？」

恵麻が、急に頭を振った俺に対して苦笑いを浮かべて見ていた。

・・・次からは、話題を考えてから話をしよう。

「おうっ、景、恵麻ちゃん。おはよう」
「恵麻、景。おはよう」

教室に入ると、幸樹と由真が何やら楽しげに話をしていた。
だが、幸樹が俺たちに気付くと声をかけてくる。それに続けて、由真も俺たちに挨拶をする。

「由真、寿々林君、おはよう」

「おはよう」
俺と恵麻も、目の前の2人に挨拶をする。
相変わらず教室の中は色々な奴が居る。友人と話している者、本を読む者、携帯でメールを打ったり、遊んだりしている者、そして、寝ている者。
思い思いに朝の残り少ない時間を過ごしていた。

「そういやさ、景。あんたがいない間にさ、面白いことがあってねえ。聞く？」
「げっ！？それは止めてくれ」

俺が、自分の席に戻ろうとすると、由真に呼び止められる。
にやにやとした笑顔で、俺に聞いていけと言う。その言葉に、幸樹が何故だか焦りだす。

「昨日、幸樹があのあと、あんたのことをつけようとしたしたんだけどさ、失敗してねえ。エリスを追いかけてる乙女にぶつかって押し倒すような形で扱けたんだ。んで、そしたら大声で悲鳴上げられて・・・長良さんだっけ。あの人にこっ酷く叱られて。あたしは、横で笑いを堪えるのに必死だったけどね」

その話を聞いていた俺は幸樹に同情した。由真は、状況を分かっていた上で、あえて真実を言わなかったのだと。
まあ、叱られただけで済んだなら良かったと思うけどな。だが、俺は1つ気になったことがあった。
・・・でも、エリスじゃなかったのか。それなら何でエリスが怯えていたんだ？

「なあ、由真？それならエリスが怯えていたのはどうしてだ？」

「あれは・・・乙女が怖かっただけでしょ。別に何かされたわけじゃないから、安心していいよ」

・・・まあ、確かにあんな風に襲ってくる人に会ったのは初めてだろうからな。

「ようっ、晃。今日も遅いな」

「うん、ちょっとね。僕も僕で忙しいんだ」

「おはよう、晃。新入部員はの勧誘はどうだ？うまくいってるか？」

「うーん、まあまあかな。５人くらい入部してくれたよ」

俺たちが話していると、晃が遅刻ギリギリで教室に飛び込んできた。俺と幸樹は、晃に挨拶をする。

息がほとんどあがっていないのは、常日頃遅刻寸前だからに違いないだろう。

「ところで、恵麻の部活はどうなんだ？」

「そうだね～、料理部は・・・見学が１７人くらいかな。入部してくれそうなのは・・・３，４人かも」

「意外と少ないんだな。由真はどうだ？」

「あたしのとこは・・・１０人は入部確実だね。あと、何人か迷ってる子がいるけど」

「・・・強引に入れるなよ？」

「入れないって」

晃の部活の勧誘の話を聞いた俺は、恵麻や由真にも話題を振ってみた。

この学校は、妙に部活、同好会の数が多い。だから、人数を集めるのは大変で、掛け持ちをしている奴もたくさんいる。

また、部活に入っていない生徒への勧誘も多い。１人でも多くの部

員を集めようというわけだ。
その原因は学校の独自の部活動・勉学制度にある。まあ、これは追々話すことになると思う。

「幸樹は野球部だったよな。何人くらい入ったんだ？」
「今年は、１３人だな。あとはマネージャーが２人。今年は、まあまあな方かもしれない」

最後に、幸樹にも聞いてみる。
幸樹が言うには、毎年ぎりぎり９人くらいしか入部しないらしい。
そして、幸樹と話していると、チャイムが鳴った。
俺たちは、話を切り上げるとそれぞれの席へと戻るのだった。

「・・・授業はやっぱつまんねーよな」

昼休みになり、俺は幸樹と晃とともに学食に来ていた。
幸樹は、授業が始まったことが不満のようだが、学生である以上、仕方がないというものだ。

「まあ、それ言ったらお仕舞いだから」
「晃の言うとおりだ。まあ、楽しくないのは分かるが」

男同士で、つまらない会話をしていると聞き知った声が、後ろから聞こえた。

「あ、有栖先輩。メール見てくれましたか？」
「ん？ああ、美玖と・・・梓依か？昨日は楽しかった。ありがとな。・・・ところで、いつも学食なのか？」

「い、いえ。楽しんでいただけたなら嬉しいです。へえー・・・」
「たまにはいいかなって思ったんだよ。でも、有栖先輩、私のことよく分かったね」

振り向くと、そこには美玖と車椅子を押してきた梓依がいた。
俺は、とりあえず昨日の礼を述べる。そして、2人にいつも学食なのかと聞いてみる。いつも混んでいる学食は、車椅子ではどう考えても辛い。
すると2人同時に話し始める。美玖も梓依も俺が1度で誰か当てたことに驚いているようだった。
だが、昨日、最も表に出ている人格だと言われたから、何となく梓依と言ったまでで分かるわけではない。

「・・・ところで、メールって何だ?」
「あ、あの・・・朝送ったと思うんですけど・・・」
「・・・」

美玖が遠慮がちに言う。
俺は黙って携帯を取り出す。・・・確かに新着メールが確かに1件届いている。
そこにある名前には、四条畷と名字だけが無造作に載っていた。

・・・。

とりあえず、誤魔化すために笑ってみる。

当然、そんなことで誤魔化せるはずもなく梓依は呆れたように俺を見てから、溜息をつくと言った。

「・・・あのさ、有栖先輩。普通は、休み時間くらいメールチェッ

クしない？」
「普段からあまり見ないからな」
開き直って言ってみたものの、梓依の目には、笑ってないでさっさと見ろという心情がありありと表れていた。
だが、すぐに話にならないと思ったのだろう。梓依は、お手上げと言わんばかりに話題を変える。
「ふーん、まあいいよ。空いてるとこないんだけど、相席してもいい？」
「俺は別に構わない。もう、そろそろ行こうかと思っていたからな。幸樹、晃はどうだ？」
「俺は大歓迎」
「僕も別に」
そして、俺たちは5人で飯を食うことになった。梓依は美玖に何が食べたいか聞くと、食券を買いに行ってしまった。
「ということは・・・まだ知りませんよね、メールの内容」
「う・・・まあ・・・そういうことだな」
既に1人食事を終えている俺は暇なのだが、隣に座った美玖は、そんな俺に先程の話題を蒸し返す。
よく分からないが、口が尖がっているような・・・態度がとげとげしいような・・・。
「メールはコミュニケーションだと思うんです。無視されたかと思いました」
「今見るから」

非常に憤慨しているのだろうか、いつものように言葉にどもりがない。
口調は同じなはずなのに、どうしてこうも怒っている様に聞こえるのだろう？
俺は、その原因となった、今となっては忌々しいメールを見る。

「でもよ、景。お前、いつ美玖ちゃんにメアド教えたんだよ？」
「・・・飯食いながら喋るな。アドレスは昨日遊びに行ったときに交換してもらった」
「何！？お前、ズルくないか？いや、せこい。否、羨ましいぞ、こらっ！」

メールの内容に目を通そうとしたとき、幸樹がふと疑問に思ったのだろう、何故美玖が俺のアドレスを知っているのか聞いてきた。
俺が、ありのままを話すと幸樹は、羨ましそうに箸を噛む。・・・だから、行儀が悪いだろ。
それにしても晃はさっきから黙っているが、隣の幸樹を痛々しいと思いつつ飯を食っているに違いない。そもそもさっきから会話に入ってくる気配がない。

「・・・口に食べ物が残っているのに喋ると、汚いから落ち着いたら？」
「・・・」

晃の言葉に美玖は相変わらず笑顔ではあるが、少し歪んだ笑顔でこくこくと頷く。さすがに美玖にまでも同意されるとは思っていなかったのだろう。幸樹は、黙って残った昼飯を食べ始める。

「お待たせ、美玖。持って来たよ」

「ありがとう、梓依。あ・・・席足りないね。・・・あはは」
「じゃあ、俺が退くか。ここ４人掛けだしな。そうだ、美玖。あとで、メール見てから送っておくから。幸樹、晃、俺は少し用があるから先に戻るから」

そうこうしているうちに梓依が、２人分の昼食を持ってきた。
どうやら、パン類を中心にしているみたいだ。
俺は、お盆を持って立ち上がると梓依に席を譲る。そして、俺は４人に「じゃあな」と言ってその場を後にした。

食堂を後にした俺はいつものように少し丘になっている校庭の端へとやって来た。
ここは、木々が数本生えている上に、風通しもよい。それに加えて、屋上ほどではないが、街が見下ろせる。
俺は、晴れた日はいつもここに来て意味もなくぼーっとしているのだ。

「・・・って、今日は先客がいるのか」

いつもはここにはあまり人はいないはずなんだが・・・。
俺は、いつものポイントの近くまでやって来ると、楽しそうに会話する集団が目に入った。

・・・帰るか。そう思い俺は踵を返す。

「あら？景じゃない。おーい！」
「・・・お前か」

だが、誰かが後ろから大声で俺のことを呼ぶ。
それを無視するわけにも行かず、俺は近くまで行く。

「酷いじゃない、お前かって」
「まあ、そう言うな、光。こんな所で何してるんだ？」
「たまには、こっちでお昼もいいかなあ・・・なんて思ったのよ」

そこには、光を初めとした合唱部の面々が6人ほどいた。皆、いきなり現れた俺のことを見ている。
よく見れば、合唱部トップ3の姫が皆揃っていた。・・・まあ、2人は男だが。

それにしても気紛れか。俺も運が悪いもんだ。

「そっか、邪魔して悪かったな」
「何か用があったんじゃないの？」
「いや、いつものようにぼーっとしに来ただけだから」

友人同士の談笑の邪魔をするのも悪いと思い、俺はさっさと会話を切って帰ろうとする。

「なら、寄ってけ。お菓子もたくさんあるし、それに・・・ハーレムだ」
「・・・そうですね、有斗先輩」

だが、俺を呼び止めた人がいた。・・・合唱部部長の有斗先輩だ。
ちなみにハーレムと笑いながら言うが、特に周りは気にもしてないようだ。人望が厚さでは、校内でも1，2を争うからな。
だが、呆れて物も言えない。・・・だから、何だと言いたい。

「ふむ・・・ハーレムは嫌いか。君は男好きなのか？だったら、２人は男だ」
「何で親指を立てるんですか・・・。あと、俺はノーマルですから」
「それは知っているとも。メイド好きということも知っている。まあ、冗談はこれくらいにしておいて・・・どうだい、折角来たんだ、お菓子食べていかないか？たまには、いつもの面々以外にもお菓子を食べてもらいたくてね。君の性格だと、ここで帰るとは言いにくいだろ？」
「まあ、無駄足になりますけど、それはそれ。邪魔になると悪いですから。じゃあ」

俺が、呆れたように言うと、有斗先輩は右手で親指を立てて片目をウィンクしながらゲイなのかと言った。
だが、俺が反論すると冗談だと言って笑い、エリスのことを持ち出す。
・・・この人も知っているか。俺の周りの空気が悪くなったことを悟ったのだろう。
有斗先輩は、すぐに元の話に戻す。
俺は、さすがに部外者が入るのもどうかと思い、俺は丁重に断る。

「みんなは特に問題あるか？」
「いえ、ないです」
「私もないです。それに・・・有栖君なら問題ないでしょ。面白い話も聞けそうだし」
「うんうん、そうだね。陽菜はどう？」
「私も別にいいよ。有栖さん、どうですか？みんなオーケーですけど」

だが、有斗先輩は皆に同意を求める。１人くらい嫌がる奴がいてもいいと思ったのだが、皆特に嫌がる様子もない。

・・・有斗先輩、人に同意を求めるのは卑怯だと思うんだが。
そして、明月院さんが、俺にどうかと再度聞いてくる。

「それならお邪魔させてもらうかな」
「はーい、1名さまご案内」
「・・・気持ち悪いから止めろ」

俺が押し切られる形で承諾すると、意味もなく光が、まるでどこかの居酒屋かファミレスのように言う。
・・・こいつは、見た目も声も女みたいなんだよな。

「よし、今日は特別ゲスト有栖君を招いた。君は噂の人物だ、是非色々と聞かせてもらいたい。・・・まずは、その前にそれが食べたいかい？好きなものを選んでくれ」

俺は、光と明月院さんの間に座ることになった。
有斗先輩は、俺が座るのを見届けると、俺にお菓子を勧める。俺は、適当にいくつか貰っておく。

「有栖君、お皿どうぞ」
「悪いな、明月院さん」

俺がお菓子を取ると、隣にいた明月院さんが皿を取ってくれた。

「じゃあ、有栖君の話を聞く前に僕らの名前くらいは名乗っておくよ。僕は、響　有斗　（ひびき　あると）。あまり似合ってないけど、合唱部の部長をやってる」
「私は分かるよね。西方　光よ」
「私は、明月院　陽菜　（めいげついん　ひな）。有栖君と同じ2年生だね」

順々に、6人の自己紹介をされる。ちなみにあとの3人は、3年の加藤さん、2年の山岡さん、同じく2年の鈴木さんらしい。

「それでは、張り切って、遠慮せず、包み隠さず話していいから。僕らは口は堅いほうなんだ」

「・・・」

今思えば、何故ここに居るのだろうと思う。後悔先に立たずとはこのことだ。

だが、今更逃げるわけにもいかない。

そして、俺には1つ言える事がある。口が固いという奴に限ってお喋りだということだ。

にこやかで温和な表情を崩さずにしれっとそんなことを言えるとは、有斗先輩は正直恐ろしい人だ。

「休み時間もそこまでないから、掻い摘んで話すからな」

そう言って、俺は誤解を解く意味でも話し始めた。

俺はあまり長く話したくなかったので、2，3分ほどでまとめておいた。

「結局、馴染んでるんだ」

「確かに先輩の言うとおりです」

話し終わった時、加藤さんが言った。

それに鈴木さんも同意して頷く。周りの人もみな頷いている。

「・・・有栖君。気にしないでね。みんな悪気はないから。でも、

ちょっと気になるなあ。まだ時間もあるし質問いいかな？」
「ん？・・・まあ構わないが・・・」
俺のことを心配してくれた明月院さんの優しい言葉が身に染みる。だが、俺は後悔することになる。最も興味を持っていたのが、この明月院さんだったのだから。
根掘り葉掘り聞かれ、それに加えて周りがさらに聞いてくるものだから、たまったものではない。
・・・結局、真実を9割、嘘1割ほどで話す羽目になった。
いつもは、よく休んだと思える昼休みも今日に限っては、疲れが余計に溜まったように思えた。

第２５話：小さな勇気、小さな一歩　その５（後書き）

今日は、都合により早めの更新です。

今回も、または初めての方も含めて、読んでいただきありがとうございます。

小さな勇気、小さな一歩も残り２話となりました。現在、全３３部分、本編２５話目になります。

さて、ここまで全話読んだ強者はいらっしゃるのでしょうか？未だに作中は４月です。まだ春です。

いい加減飽きますよね？高校生が主役の連載物で、２５話で４月って・・・そうないかもしれません（苦笑）。

それでも、たった１人でも全話読んでくださった方がいたら嬉しいなあと思います。

雑談会

衣＝桐生　衣　皇后崎　希望＝希　深水　浩一＝浩

衣「・・・また、私はここにしか出番がないのですね」

希「衣っちは仕方ないよ。今は生徒会は色々と忙しいんだから」

衣「でも、今回の話でしたら、私の出番もあったのでは？」

希「うーん・・・無理でしょ」

衣「それはどうしてかしら・・・。ここは１人くらい退学にしたほうがよろしいのかしら？」

希「・・・それは私の十八番なんだけど」

浩「・・・お前ら・・・時間が無いから、真面目に働いてくれない

か？」

たまに書いていないと登場人物なんて忘れます。
次回更新は、小さな勇気、小さな一歩の最終話です。

第２６話：小さな勇気、小さな一歩　その６（前書き）

２００７．８／２６　本文ミス修正、一部変更。
２００７．８／３１　本文描写一部追加。

第２６話：小さな勇気、小さな一歩　その６

「・・・明月院さんはあんな人だったんだな。人間、イメージと実際とは違うものだよな」

俺は、５分前に教室へと戻ってきた。

合唱部の人たちと長話をしていたせいで、メールを見損ねてしまったので、今見ている。

それにしてもエリスのことを一番興味を持っていたのは、意外にも明月院さんだった。見た目は、大人しそうに見えるのだが、ただのイメージだったらしい。

まあ、イメージよりも印象はいいと思う。

「・・・」

メールの内容はこうだった。

今日の放課後お暇ですか？もし、お暇でしたら付き合ってほしい所があります。

お返事お待ちしてます。

特に絵文字があるわけでもない、用件だけが書いてある簡潔なものだった。

・・・さてと、返信しておくか。

俺は、美玖にメールを送っておいた。メールを送ってすぐにチャイムが鳴り、教師が入ってきた。

「お前ら、さっさと座れ！最初に言っておく。課題をあとで配るから明日までにやっておくように」

まだ騒がしい教室内の生徒に向かって怒鳴る古文教師の深井田。彼は、「ふかいた」。決して、「ふかいだ」ではない。ただ、この教師、女だけには甘いという男子にとっては悪名高い教師だ。大半の男は、後者の方で呼ぶ。俺もそうだ。

・・・この授業、暇なんだよな。そもそも古文が何の役に立つのか未だに理解できない。

「・・・ん、メールが帰ってきたな」

古文が始まって、数分後メールが帰ってきた。

・・・校門に集合か。それよりもあいつも授業中じゃないのか？

結局、俺は教師の話など聞くこともなく古文をやり過ごした。

放課後になり俺以外の４人は部活があるので、教室で別れた俺は１人校門へと向かった。

「・・・すっかり桜も散ったもんだ」

「そうですね」

「男が花見て感傷に浸ってるなよ。気持ち悪い」

どこからか知っている声が聞こえてきた。まだ校門にそれらしき姿はなく、俺は周りを見回してみた。既に桜は散ってしまい、木々は

寂しくなっていた。この辺りの木は、桜がほとんどだから仕方がないと言えばそれまでだ。

「・・・美玖と・・・また違う奴か？・・・久しぶり・・・でもないな。昨日も今日の昼も会ったし・・・こんにちは・・・だな」

声で分かったのだが、横を見ると、美玖と性格が違う別人格がいた。独り言を聞かれて恥ずかしい俺は、挨拶が無茶苦茶になってしまっている。

それでも気を取り直して尋ねることにした。

「・・・で、名前は？」

「紫（ゆかり）。ああ、名前は言わなくても分かるから。有栖　景先輩。あ、そうだ・・・ボクのことは紫って呼んでいいから。みんな名前なのにボクだけ苗字ってのもおかしいでしょ？　その代わりに景先輩って呼ぶから。いいよね？」

「それは別に構わない」

紫は、梓依に比べるとむすっとしていて、俺からすると少し話しづらい。

ただ、名前で呼んでくれるところを見るとそこまで嫌われているわけでもないのかもしれない。

だが、美玖は、紫が俺に迷惑をかけたと思ったのか、車椅子から落ちそうになる勢いで謝ってきた。

「す、すいません、有栖先輩。紫は口は悪いかもしれませんが、本当は心優しいいい子なんですよ」

「別にいい子じゃないし。・・・くだらないこと言ってないで早く行こう」

「・・・紫は・・・美玖が嫌いか？」

「え？そんなわけないよ。ボクにとって大切な姉だよ。・・・って、景先輩。何くだらない事言わせてるのさ」
紫は照れているのをひた隠しにしたいのか、そっぽを向いて先に歩き出した。
俺と紫の話を聞いていた美玖は、紫に嬉しそうに笑顔を見せる。そして、紫の背中に向かって言った。
「で、でも私は嬉しいよ、紫。それにくだらない事じゃないよ」
「う、うん。そうだね」
紫もその笑顔に対しては、何も言い返せない。曖昧に頷くだけで、毒気が抜かれてしまったみたいだった。
姉妹っていうのはいいものなんだな。俺がしばらく姉妹の会話を眺めていると、その視線に気がついた美玖がかーっと真っ赤になった。すっかり忘れていたみたいで、バツが悪そうだった。
「あっ・・・す、すいません、有栖先輩。駅とは反対側になりますけど・・・大丈夫ですか？」
「俺は元々帰宅部だ。家に帰ってもすることはないから大丈夫だ。それにバイトも今日はないから」
「へえ、景先輩バイトしてるんだ。ボクもバイトしたいんだけど、あの親父許してくれないんだよね。ボクの愚痴を聞いてもらうのはまた今度にしてっと。じゃあ、ボクが車椅子は押すから。景先輩ついて来て」
どうやら、父親にバイトは禁止されているようで、俺のことが羨ましいみたいだった。
そして話を切ると俺を手招きし、紫は美玖の車椅子を押し始め、どこかへと進み始めた。

学校から15分は歩いただろうか。
学校全体が見渡せる丘に目的の場所はあった。

「ところで、公園で何をするんだ？」

どうやら目的の場所にたどり着いたみたいだが、何をするのかよく分からない。
散歩でもするのかと思ったが、それなら俺を誘う必要は全くないし、そもそもこんな所に来る必要がない。
公園にはどこかおばさんグループがいて、子供を遊ばせながら、本人たちは会話に興じていた。

「え、えーと・・・リハビリです。あ・・・あの前に言いませんでした？」

美玖は、俺が何気なしに聞いた言葉に、少し悲しそうな顔をする。
まるで今まで知らずについて来たんですか？と言いたげだった。

「あ、ああ・・・。聞いたような気がする」

俺が曖昧に答えると、紫が呆れたように両手を広げて言った。

「もう呆けてるの？とりあえず、若いうちからも痴呆って進むみたいだから気をつけたほうがいいんじゃない？」
「・・・何だか馬鹿にされている気がしなくもないが・・・まあ、それは置いておこう。ところで、2人とももう学校には慣れたか？」
「は、はい。車椅子ということで最初は奇妙な目で見られましたけ

ど、今はそうでもなくなりました」
「ボクは・・・今でも変なものでも見るような目で見られるときがあるかなって思う。あと、景先輩。気がするんじゃなくて、そうだからね」
紫は結構きつい性格をしているな。
だからと言って怒っても仕方がない。多少、鬱陶しく思うけどな。
終始どこか面白くなさそう表情では良い感情を抱くのは難しい。
「あっ、そうです。わたしたち園芸部に入部したんですよ」
「ボクは、どちらかというと野菜とかの方が好きなんだけど・・・あの部、花しか植えてなくってね・・・。って、景先輩話聞いてる？」
そんなことを考えていたものだから、自分から話題を振っておきながら、俺は2人の話などほとんど聞いていなかった。
ハッとした時には、すっかり話題は変わっていた。
「聞いてない・・・こらっ、ぼーっとするな！」
いきなり俺は紫に脅かされ、情けない声を出した。
「うわっ！？って、何だ・・・紫か・・・」
ま、こんなことをするのはこの場では紫しかいないだろう。
俺がびっくりしたのに、美玖が少し驚いていたが、すっと息を吐いて吸って、気持ちを落ち着けるようにしてかどこか心配そうに話しかけてきた。
「・・・有栖先輩・・・あ、あの・・・体調が優れないんですか？」

「姉貴は心配しすぎ。景先輩、さっきからあっちのおばさんをちらちら見てただけだから」

それを聞いた美玖は目にうっすらと涙を浮かべながら言った。

「あ・・・う・・・。もしかして、人妻がタイプですか？」

・・・何だか物凄い誤解をされているようだ。

「・・・いや、人妻は俺のタイプじゃない・・・って、何でお前らにそんなことを話さなくてはいけないんだ？」

「景先輩、1人ノリツッコミは寒いよ」

「あ・・・あはは、そうですよね？有栖先輩は、おばさんは趣味じゃないですよね」

「ところで、リハビリと言ったが、何をするんだ？」

俺としては、紫に文句の1つも言いたいがこれ以上言っても時間の無駄になりそうなので、今日の目的を尋ねた。

「・・・すっかり忘れてた。でも、景先輩がボクたちを無視しておばさんなんか見てるからだよ」

「だから、その話題を持ち出すな」

また話を蒸し返す紫に俺は苛立つ。見ていたことは事実だが、俺だっておばさんに興味なんてない。それは向こうも同じことだろう。だが、俺以上に美玖は苛立っているようだった。

「紫、それに有栖先輩。あまり時間も無いですし、そろそろ始めませんか？」

言葉では優しく言うが、何と言うのか目がもう笑っていなかった。

「あ、ああ・・・」

「そ、そうだね・・・」

俺も紫もすっかり気圧されて大人しく従った。

それから少し場所を移動して、俺たちは子供たちが遊ぶような遊具のある場所へとやって来た。

幸い、子供はほとんどおらず、俺たちの貸し切り状態になっている。

ところで、これから何をするのだろう。まさか、遊ぶのだろうか。

そう思っていると、

「ここの公園ね・・・ほらあれ」

紫は苦笑いを浮かべながら、近くの平行棒を指差した。

「平行棒？」

「そうそう。あれでいつも美玖は歩く練習をしてるんだ」

どうやらいつもはあれで練習しているらしいが・・・普通は公園に平行棒なんてないだろ。

その前に誰があれで何をして遊ぶのかが知りたい。

今回ばかりは、そのおかげで練習が出来るわけだが。

「今日もあれで練習か？」

「ううん、今日は折角景先輩に来てもらったからボクたちが両脇から支えて少し長い距離を歩こうかなって思ってる」

「それ危ないと思うぞ。もし、俺かお前がバランスを崩したら美玖が怪我をすると思うんだが・・・」
俺は紫の言うことに不安を覚えた。
しかし、紫は静かに首を横に振った。
「姉がやりたいって言ったんだ。それにバランス崩しても、ボクか景先輩が下になれば姉貴は怪我しないって」
「あ、あのですね・・・わたしが無理言ったんです。紫はただわたしに協力してくれているだけなんです。それにわたし、ほんの少しなら歩けるんです。まだ1メートルくらいですけど」
楽観的に言う紫に俺はまだ不安を拭うことが出来なかった。
だが、俺たちの会話を聞いていた美玖は、とてもやる気のようだった。
・・・しかし、もう1メートルも歩けるのか。
「別に恥ずかしいことでもないだろ。もう1メートル歩けるなんて努力している証拠だな。でも、いいのか？怪我しなくても、制服は汚れるぞ？」
嬉しそうな美玖の気持ちは分からなくもないが、俺はいまいち気乗りがしなかった。
もちろん美玖のやる気に水を差す真似はしたくはないのだが。
そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、美玖は少し作ったように真面目な顔をして言った。
「それは大丈夫です。制服は数着同じサイズの物がありますし、それに有栖先輩が手伝ってくださるなら、こけることもないと思います」

「・・・分かった。正直、ここまで美玖がしつこいとは思わなかった。俺も何でも手伝うと言ったし、仕方ないか。もし、怪我をしたら俺が責任を取るから安心しろ」
「怪我なんてしませんよ。紫も有栖先輩もいますから」

美玖のやる気に、俺は押し切られてしまった。美玖がそこまで俺のことを信頼してくれるのなら、俺はそれに答えるべきなんだろうな。俺と紫は美玖の肩を支える形でそれぞれ反対側に立つと、美玖は俺たちの首に腕を回し立ち上がる。

「・・・」
「・・・お、重くなんてないですよね？」

・・・先回りされてしまった。いつから、美玖は人の心が読めるようになったんだ？
だが、俺は重いなんて思ったつもりはない。ただ、意外と・・・。

「2人がかりだから、大して重くないな」
「・・・そ、それって1人だと重いということですか？」

そこまで体重って気になるものなのだろうか？
まあ、俺にはよく分からないが、女は気にするのかもしれないな。

「あー、はいはい。姉はそこまで。じゃあ、ゆっくりと歩くよ」

紫が美玖の暴走を止める。
そして、俺たちは美玖を支えながら1歩ずつゆっくりと歩き始める。
美玖のペースは、はっきりと言うと遅い。
それでも、美玖は真剣な表情で1歩1歩俺たちに支えられながらも

歩いていく。

黙々と１００メートルは歩いただろうか？たった１００メートル、それも俺たちの支えがあった。だが、確かに美玖は自分の足で歩いた。

車椅子が少し遠くに見えた。俺は、それが車椅子からの自立のように思えた。

さすがに１００メートルも歩いているとだんだんと美玖の額には、汗が滲み出て、そして息遣いも少し荒くなってきた。

そろそろきついか。紫を見ると、俺と同じ事を考えていたようで、美玖に一声かけた。

そして俺たちは木陰で少し休憩をとることにし、美玖を木陰に腰掛けさせると、俺は車椅子を取りに戻った。

「つ、疲れました・・・」

「よく頑張ったな。少し休んだらもう１度挑戦してみるか？」

「は、はい。次は２００メートルです」

「ごめんね、面倒なことにつき合わせて。私１人だと結構大変でね。２人がかりでやると、両肩支えられるでしょ。それに私１人じゃ少し長くなるだけで辛くなるんだよね。美玖も気使ってもういいって言うし」

話を聞いてみると、リハビリではいつも１０メートル程度を往復しているそうだ。

そして、この前１００メートルを歩けたので、今日ここに来たと話してくれた。

「・・・でも、どうしてここなんだ？確かに街も見渡せて綺麗だと

は思うが、わざわざ来る所でもないんじゃないか？」
「ここは、よく美玖とボクらが遊びに来た場所だから。親父も昔は鬱陶しくなくて、一緒によく遊んでくれたんだ」
「懐かしいね、こうして一緒に来るのも。あと、何回こうしてみんなで来れるかな・・・。こうやってずっと同じ景色を見ていたいですね。例え・・・それが叶わない願いだとしても」

俺たちは同じ景色を見ているのに、抱く感情はそれぞれ違う。
単に美しさを感じる者、過去を懐かしむ者、そして、未来に思いを馳せる者。
美玖の言葉を最後にしばらく俺たちは黙ってしまった。遠くでは、小さな子供の無邪気な笑い声が聞こえる。

「・・・何だか、しみじみとしてるな・・・俺たち。ひどく年をとった気がする。縁側で孫が遊ぶのを見ている爺さんの気分だ」
「そ、そうかなー・・・。景先輩・・・孫ってボクたち？」
「え？わ、わたし、孫ですか？」

喩えが悪かったのか？
意外そうな顔で見られると俺が傷つくんだが・・・。この姉妹・・・冗談が通じないんだな。

「そろそろ始めるか。時間もそうないからな」
「そ、それではまたお願いします、有栖先輩、紫」
「・・・うわっ、逃げたよ。じゃあ、景先輩、そっちちゃんと支えてよ」

また、俺たちは美玖を支えて歩き出す。
俺たちが歩いているのは、あくまでも公園の遊歩道だ。散歩している人やジョギングをしている人もいる。

何だか物珍しいものを見るような目をする奴、状況を察して頑張れと言ってくれた老夫婦、そして何故だか俺にだけガンを飛ばす同じ学校の男。
たった２００メートルの間に、随分と色々な人に会った。
普段は、公園なんて行かないから気付かなかったが、公園にいるのは子供だけじゃないんだな。

しばらく練習をしているとだいぶ美玖が疲れてきているのが分かった。
ちょうどすぐ側に自動販売機があったので適当な飲み物を見繕って持って行くことにした。

「・・・無理しすぎじゃないか？ほらっ、疲れただろ」

俺は、また車椅子を持ってくると美玖に言った。
さすがに休み無しではつらいと思うのだが、美玖は結局最後まで止まることはなかった。

「わわっ！・・・い、いきなりほっぺたに冷たいジュースを押し付けるなんて・・・。びっくりしたじゃないですか」
「ボクにはないの？・・・あ、ありがとう」

自分だけ飲み物がないと早とちりした紫にもジュースを渡すと、早とちりを恥じたらしく顔を赤くしてジュースを黙ってひったくるように受け取った。

「すっかり夕方だな」

買ってきたジュースを飲みながら俺は辺りが夕陽で真っ赤になって

いることに気付いた。
思わず口にしてしまうと、美玖も同調するように笑顔を見せる。
「そ、そうですね。有栖先輩、今日は本当にありがとうございました」
「手伝ってくれてありがとう」
紫はジュースを飲みながら、素っ気無く言った。愛想がないように思えるが、照れているだけのようにも思えた。
3人で景色を眺めていると、段々と陽が落ちていくの分かった。
そこで俺はふと気になったことを聞いてみた。
「ところで、どうやって帰るんだ？」
「車です。ちょっと、電話しますね」
美玖が、そう言った時だった。
「その必要はないわ」
背後から、聞き覚えの有る声が聞こえた。
「お、お母様！どうしてここに？」
「天河に聞いたのよ」
その後ろでは、天河さんが美玖に頭を下げていた。
ああ、天河さんはここにいることを知っていたんだな。
「・・・黙っていたことは悪かったと思います。ですけど・・・」
「その先まで聞く必要はないわ」

「ちょっと待って、お母様！話だけでも・・・」
美玖の表情が曇り、紫は美玖を庇おうとする。
だが、母親から出た言葉は2人の考えていたものとは違ったようだ。
「美玖・・・あなた・・・歩けるようになったのね」
美玖も紫も驚きの表情を隠すことが出来ない。今まで隠れてやっていたことがバレているのだから。
「美玖・・・ここまで歩いてこれる？」
「う、うん。あ、あの・・・景先輩、紫。立ち上がるまで手握ってもらえますか？」
母親は、美玖に近づくと、その1歩前、その手が届かない辺りに立った。
歩いて行くといっても、たった1歩踏み出せばそれで終わりだ。
それは俺から見れば小さな1歩でしかないだろう。だが、美玖や紫、2人の母から見れば、それは大きな1歩だ。
そして、美玖は紫と俺の手を借りると立ち上がる。完全に美玖が立ち上がるのを見て、俺たちは手を離す。
しばらく美玖は1歩を踏み出せずにいたが、よしっと言うと右足を前に出した。
だが、美玖が1歩踏み出したとき、バランスを崩してしまった。美玖の足が震えているのに俺が気がついた時には、もう遅かった。
俺たちは息を呑んだが、そのまま母親が抱きとめる。
「よく頑張ったわね。美玖、大きくなったのね」
「・・・」

美玖は母親の胸で声をつまらせて泣いているようだった。
・・・ん？何か今後ろの木の裏に人影が見えたような。
気のせいか？

「有栖さん、よろしければお送りしますわ」
「い、いえ・・・ご好意だけ頂いておきます」
俺は丁重に断ったのだが、このあと2度同じ事を言われた。
それでも、ここに残る理由が俺にはあった。
美玖や紫が、車に乗って帰るのを見送ると俺は再び公園内へと戻る。

「・・・で、いつまでそこにいる気だ？」
「何だ、君にはバレていたのか」
俺が声をかけるとどうやら諦めたのだろう、木の後ろから中年のおっさんが出てきた。

「・・・何でこそこそと、まるでストーカーか、誘拐犯みたいなことしてるんだ？」
「そう見えるのかい？」
「あまり言いたくないが、そう見える」
「・・・有栖君、君、口調が前と違っていないか？」
「変態に敬語なんて使わない」
「ガーン」
俺がきっぱりと言うと、口を開けたままの呆けた顔でショックを受

ける中年のおっさん。
・・・ガーンって、口に出すな。

まあ、それはいい。だが、何故このおっさんは美玖の前に姿を現さなかったのだろう。

「ところで、親なら一緒に祝ってやればよかったと思うんだが」
「まあ、そうしたいのも山々なんだけど、娘たちからは煙たがれてね。私はただ見守っているだけでいいんだ。例え、彼氏を紹介してもらえなくても、結婚式に呼んでもらえなくても・・・娘たちが幸せならそれでいい。私は嫌われていても構わない」

随分と苦労しているんだな・・・。
それでも、美玖と紫のことが好きなんだな。
俺は正直、このおっさんのことを少しだけ見直した。

「だから、君も娘たちの友達になってほしい。娘たちは、色々とあって友達があまり多くなくてね。家でも結構寂しがっているんだ。君たちを招待したときは数日前から楽しそうでね。私も嬉しかったんだ」

・・・じゃあ、何で俺だけ帰れとか言われたんだ？
喉まで出掛かった言葉を俺は飲み込む。今ここで言うことでもないよな。

「もう友人だ。この前一緒にいた由真も幸樹もあいつらの友人だし、それに美玖や紫ならすぐに友人も増えるだろ。あれだけ一生懸命なんだからな。それは、あんたの方が知っているだろう？」
「それもそうだな。・・・懐かしいな、私も昔はここで娘たちと遊んだものだよ。そして、今日みたいに夕陽が沈むのを見て家まで帰

ったものだ。・・・娘たちにとってみればどうでもいいことかもしれないけどね。・・・もう遅い時間だし、駅まで送っていこう」

夕陽を見て、おっさんは1人過去を懐かしむ。

・・・美玖たちも懐かしんでいたな。

思春期とか仕事が忙しいとか理由にしておっさんが逆に離れていったのかもしれないな。きっと、娘との付き合い方が分からない不器用な男なのだろう。

駅までの車内で俺もおっさんも一言も喋ることはなかった。

駅まで着いた俺は、おっさんに礼を言うと車から降りる。その時、背中越しにこれからも娘と仲良くしてほしいと一言だけ言われたのが印象に残った。

その言葉を言うと、おっさんはタクシーを出した。タクシーは、再び街の中へと消えていった。

もうこんな時間か。・・・明日は宿題があったな。恵麻に写させてもらうか。確かプリントは・・・。

「あっ、プリント忘れた・・・」

こうしてプリントを忘れたことに気付いた俺は、また坂を登ってプリントを取りに行くことになった。

当然、帰るのが遅くなり、連絡も忘れていたせいで、母さんに飯が冷めたと文句を言われてしまった。

・・・やっぱり親って煩いだけだな。

第２６話：小さな勇気、小さな一歩　その６（後書き）

この話は、今回で終了です。
新しい登場人物ということで長くなってしまいました。

また、先週はプロローグや１話を修正しました。
と言っても、大した修正ではありませんし、本文内容が変わった訳ではないです。

本編後の雑談（今回から、これをタイトルにします）
大＝五味　大助　綾＝言葉　綾　田中＝田中　（外伝３より）

大「何で、この高貴で麗しい俺がこんな所に、しかもこんな奴とでなくちゃいけないんだ！」
綾「それはこっちのセリフよ。だいたい、生徒会長も勝手過ぎるのよ！ああっ、もうっ。この怒りどうしてくれよう」
大「・・・お前、テンション高いな。それはそうと・・・俺のプレゼント食べてくれたか？」
綾「あ？」
大「ごめんなさい、余計なこと言いました。・・・これさえなければ可愛いのに」

綾「・・・食べたわよ。でも、全然効果ないじゃない。この嘘つき」
大「さっきから何言ってるんだ？まあ、ブツブツうるさいまな板は置いといて、今日は、学校の美女について語ろうと思う。ただ、俺好みの女の子しか語らないから要注意だ」
綾「・・・そもそも女を胸でしか判断しないのが間違ってるのよ。

確かに私は無いけどさ・・・」
大「やっぱりボンキュッボンは外せないな。まずは1年生から・・・」
田中「お前ら、少しは自重しろ！！・・・って、何で俺だけ苗字なんだあああっ！？」

次回予告

メイドさん、アルバイト先へ来る

タイトルですが、これが全てです。

第２７話：メイドさん、アルバイト先へ来る（前書き）

２００７．８／２６　本文ミス修正、脇役の名前の変更、言葉の修正
１０／２０　細かな設定変更

第27話：メイドさん、アルバイト先へ来る

「エリスちゃん、悪いけど洗濯物取り込んでおいてくれる？」
「分かりました」

ある日の夕暮れ時。
エリスは、景の母親に頼まれて洗濯物を取り込んでいた。

エリスもこの家に来てから半月ほどが経つ。
最近はいつも洗濯物を取り入れるのはエリスの仕事になりつつある。

「これで全部ですね」

エリスは、洗濯物を全て籠に入れると1階へと持って降りる。

「あら、エリスちゃん、ありがとう」
「そんなことはないです。では、これを畳んでおきます」
「エリスちゃんがいると本当に助かるわ。うちの男共は手伝いなんてろくにしないんだから・・・。まあ、景の場合、料理は禁止してるんだけど、それ以外のことくらいは手伝ってほしいわね」

エリスは洗濯物を畳みながら、母親は夕ご飯の準備をしながら思い思いに話している。
実際には母親の愚痴をエリスが聞いているだけなのだが。

「ですが、景様は今日もバイトなのですね」
「そうね、でもあの子、何をしているのか教えてくれないのよね」

そして、話題は景のバイトのことへと移る。

母親は景のバイトの内容までは知らないようで首をひねる。知りたいのは山々なのだが、無理矢理聞くつもりもないようだ。

「・・・今度行ってみようかな」

エリスはそっと呟いた。

「・・・本当に来る気なのか？」

俺は、レジに立ちながらそんなことを考えていた。

昨日、俺が家に帰るとエリスがバイト先を見てみたいと言ってきたのだ。

もちろん、その場で拒否したが、エリスのことだから来るのかもしれない。・・・いや、来るな。

「憂鬱そうだけど、何かあったの？」

「まあな・・・」

俺は、晃に昨日の出来事を話す。話を聞いた晃は苦笑いを浮かべる。1年と少しの付き合いになるが、昔から晃はできないと感じると苦笑いを浮かべる癖がある。

普段から大人しい性格だが、付き合いは悪いほうではない。よく幸樹も加えた3人で遊びに行くこともある。

それに、知っている人は多くないのだが、晃はあの変態、大助の幼馴染だ。だが、このことを言うと怒るので、俺はあまり言わないことにしている。

「エリスさんだったら来るね」
「だろうな・・・。エリスは俺のバイト先を知っているみたいだし・・・」
「景は教えてないんでしょ？だったら場所が分からないと思うんだけど」
「いや・・・ＧＰＳだそうだ」
「・・・すごいね」

俺と晃は今同じ場所でアルバイトをしている。
俺がここでバイトを始めたのは、高校に入学してすぐのことだった。そこの面接の日、俺は幸樹と出会った。同じ高校だということを知った俺と晃は接点も多かったからか、それなりに話すようになったのだ。
そして、今に至る。

「おいっ、景、お客さんだ」
「吉田さん、こんにちは。俺に客・・・ですか」
「こんにちは。景・・・考えなくても絶対そうだよ」
「何だ、景。彼女が出来たのか？それにしても、すごい美人じゃないか。しかも外人で日本語ペラペラ。お前が離れてる間は僕が代わるから、行って来い。彼女は大切にしないとな。あ、でもすぐ戻って来いよ。僕は、今時間じゃないから」

俺が晃に昨日のことを話していると、バイト先の先輩、吉田さんが俺を呼んだ。
どうやら俺に客が来ているようだが・・・どう考えてもエリスしか当てはまらない。
横にいる晃を見ると、やっぱり苦笑いだった。こいつは誰が来たのか分かっているようだ。
だが、吉田さんだけが、俺たちの言っていることが分からないよう

で首をひねっていた。
できれば一生知らないでいてほしい。

「吉田さん、晃。俺、ちょっといってきます」

俺は、吉田さんと晃に見送られながら、外へと出た。

「・・・やっぱりエリスだったか」

俺は相手の顔を確認するなり全身の力が抜ける。
確信はあったが、最後まで認めたくなかった現実がそこにはあった。
エリスは、レジの位置から死角になる電柱の所に立っていた。

「はい、エリスです。景様の仕事ぶりを見たいと思って、来てみましたがご迷惑でしょうか？」

はい、ご迷惑です。
そう言ってやりたいが、ここで追い返すと後々面倒なことになりそうだ。家に帰って文句を言われるのは、勘弁してほしい。
それにわざわざ来たエリスを追い返すのも忍びない。

「・・・大人しくしてろよ。あと、お前はここでは海外からホームステイに来たということにする。間違っても、・・・メイドなんて言うな。それに様は絶対につけるなよ。そうだな、さん付けが適当だろう」
「でも、私はメイドです。それに、様付けに慣れてしまっていますので」
「まあ、エリスが家の手伝いをしてくれることには感謝しているが。

それとこれとでは話が別だ。頼むから、そう言ってくれ。この通りだ」

俺は、エリスに頭を下げる。

メイドなんて言われた日には、バイト先も安寧な場所ではなくなる。俺は、自分の安寧な居場所と立場を守るのに必死なんだ。最低だとか言われても、それは知らない。

学校には、恵麻や幸樹を初めとした友人がいるからいいが、バイトはそうでもない。吉田さんはまだしも、他の人にバレたらまず冷たい目で見られる。

「そ、そこまでしなくても・・・。私は、景様のためのメイドです。景様の言いつけ通りに致します」

「そうか、ありがとう。でも、どこから来たことにするか？」

だが、ここで1つの問題に俺は気付いた。

ホームステイと言っても、どこから来たのかすら分からないのでは怪しすぎる。

「私の見た目だと・・・どうでしょうか？」

「オーストラリアとかはどうだ？フランスとか、イギリスも悪くないな。でも、銀髪碧眼なんている・・・のか？」

「それは・・・景様の知っている国ですね。では、オーストラリアにしましょう。それに、その辺りはどうにでもなりますよ」

俺にとって、最もネックとなったのはエリスの容姿だった。

銀髪碧眼なんて、そういるものではないだろう。とりあえず、それっぽい国を挙げてみるが、いざとなると有名な国しか頭に浮かばない。

結局、エリスはオーストラリア人ということになった。・・・そも

そも人じゃないんだがな。

「吉田さん、すいません。今戻ります」
「おっ、もう戻ったのか？もうちょっと話していても良かったんだぞ」

俺は吉田さんと交代し、レジへと戻る。
そして、エリスを呼ぶ。

「吉田さん、紹介します。こいつはエリス。俺の家にホームステイに来ています」
「何だ、彼女じゃないのか。僕は、吉田。よろしく」
「はじめまして、吉田さ・・・ん。私はエリス・メイデン・・・と申します」

・・・いきなり危ないな。何とかセーフだったが。
いきなり様付けで言いそうになったり、ロボットのタイプを言いそうになったりするエリスを見ていた俺は冷や汗が頬を伝うのが分かった。
とりあえず、吉田さんが信じてくれたから良しとしよう。

「エリスは、こっちに来てまだ半月くらいなんです。色々と日本のことを勉強しているんです」
「そうなのか。今は店長も出かけてるし、規律にうるさいのもいないからゆっくりしていくといいよ」
「はい、そうさせていただきます」
「しかし、景。随分と丁寧な言葉を使うんだな？」

俺は嘘と真実を混ぜてエリスの紹介をする。

だが、吉田さんはエリスの丁寧語が気になったらしい。不思議そうに俺に尋ねる。
・・・しまった、それがあった。俺は内心焦るが、今更どうしようもない。

「そのことについては、私から説明します。簡単に言うと、汚い言葉遣いをするよりも丁寧なほうが反感を買いにくいと、学校で言われたからです」
「そうなのか。でも、留学生の割には日本語上手だな？」
「以前、日本に住んでいたこともありますから」
「そりゃあ、上手になるよな」

・・・エリスがうまく嘘を言ってくれて助かった。俺は安堵し、大きく息を吐く。
エリスは、うまく言ったといわんばかりにウィンクを俺に送る。

「景さ・・ん。私はどこにいればいいでしょうか？」
「・・・そうだな。店長もいないらしいから、中にいればいいんじゃないか？吉田さん、エリスお願いできますか？」
「ん？ああ、別にいいけど」

・・・景様と呼ばれたら、今までの苦労が台無しになる所だったな。ん？まだ、まずいことがあるような・・・。
まず、エリスは人ではなくて、ロボット・・・いつも家では手伝いをしてくれていて・・・いや、これは違う・・・もっと根本的なことだ。
エリスは、・・・食べれないんだった！？あの中、お菓子やらジュースやらが色々とあるんだった。
俺は、慌ててエリスを呼び止めると、エリスを連れていったん外に出る。

「ど、どうしました？」
「悪いな、エリス。１つ言い忘れていたことがあった。お前、食べれないし、飲めないよな」
「あ・・・そうでした。どうしましょうか？私は、食事とかはできませんし・・・」
「・・・・自然な形で断ってくれればいいと思う。でも、どうせなら食事をしてエネルギー補給とかできればよかったのにな。そうすれば、エリスも俺たちと一緒に食事の時間を楽しく過ごせると思うんだが・・・」

俺は、エリスに申し訳なく思った。
家の手伝いを一生懸命してくれているにも関わらず、俺たちがエリスにしてあげられることは少ない。
食事の時も、エリスは俺たちといるが少し遠慮していることを俺は知っている。・・・たまに羨ましそうな視線を感じると、いたたまれなくなる。
その時、エリスを見るといつも一瞬だけ寂しそうにしているのだが、俺と目が合うとすぐに笑顔に戻ってしまう。
・・・まだまだ俺も信頼されていないんだといつも思ってしまう。

「景様。それはＳＦの読みすぎだと思います。・・・それに私はいつも楽しいです。景様やご両親、景様のお友達・・・皆さんが私に優しくしてくれます。私は、幸せなんですよ」

俺は、エリスの言葉を黙って聞くことしかできなかった。
だが、今は表面上の言葉を信じたいと思う。エリスが幸せなんだというその言葉を・・・。

俺はいつかエリスの本当の笑顔を見ることが出来るだろうか？

「すいません、吉田さん」
「別にいいさ。今日はあまり客も来てないし」
「あとは、お願いします」
「まあ、裏は何もないんだけどね」

俺は、勝手に出て行ったことを吉田さんに謝るが、吉田さんは全く気にしていないようだった。
エリスは、吉田さんに案内され、裏の休憩所へと入っていった。

「景も苦労してるね」
「まあな。客が来たみたいだ。いらっしゃいませ」

しばらくの間、今まで客が来なかったのが嘘だったかのように、客が入り始める。
俺たちは、話す暇すらなく、ひたすら働くのだった。

「・・・ようやく一段落か」
「そうだね」

俺たちは客がまた来なくなったので、一息つく。

もう分かっているかもしれないが、俺のアルバイトはコンビニの店員をやっている。
ここは学校に近いから、楽だと理由だけでバイトをしている。
今考えれば、よく雇ってくれたなと俺は思う。そこは店長の人柄なんだろうけど。

「でも、よくもまあ、ああ嘘がほいほいと出てくるよね。感心するよ」
「嘘でもないぞ。嘘を誤魔化す時には、本当のことを入れた方がいいらしい」
「たまに聞くね、それ。でもさ、エリスさんのことって、バレると思うよ。だて、一応世界初のメイドロボなんだから」

・・・ああ、そういえばそうだったな。
俺は晃に言われて、はっと気付いた。頭を抱えたくなるが今更どうにでもなるわけでもない。

「でも、あまり今まで気付かれたことないな」
「まあ、発表されただけだし。それに、マスコミにも公表されてないからね。そのうち、嫌でも有名になりそうだけど」
「ん？どういう意味だ？」
「最近始まったバラエティ番組で、人気アイドルの片宮　莉子　（かたく　りこ）が珍しいものに会いに行くっていう企画が持ち上がってるって噂があるらしいよ。そういうのにうちの学校の人がエリスさんのことを応募したら、絶対食いつくと思うんだ。うちの学校って、ファンクラブがあるでしょ」

・・・人気アイドル？片宮　莉子？
俺は、頭の上に疑問符を浮かべる。俺はあまり音楽番組は見ないので、そういうことには疎いのだ。
だが、学校内にあるファンクラブのことは俺も知っている。
俺たちの学校最大の同好会だ。いつも何をしているのか全く分からない連中だが、知りたいとも思わない。

「それは迷惑だな。そうは言っても、俺が拒否すれば何の問題もな

いと思うが」
「・・・まあ、普通はそうだね。だけど、あの番組は、アポ無し取材が売りだって聞いたよ」
「・・・何だそれ・・・。まあ、でも、来るわけないだろ」
俺は、大して気に留めもしなかった。第一、アイドルがロボットなんかに興味を示すとも思えない。
それに、来た所で相手にするつもりもない。・・・だが、実際に来たら慌てふためくのは目に見えているけどな。

「まあ、それもそうだね。・・・いらっしゃいませ」

「こんにちは。景君」
「こんばんは、若菜さん」

俺たちが、テレビ番組のことを話していると、急に晃がいらっしゃいませと言った。
しまったと思い、俺はいらっしゃいませと言うつもりで振り向くと、そこには若菜さんがいた。
店長がいたら、あとで店長に怒られる所だったな

「景、知り合い？」
「晃は会った事ないのか？この人は若菜さん。吉田さんの彼女だ」
「うんうん、よくできましたー。はじめましてだね、私は若菜　三千夜　（わかな　みちよ）。工　（たくみ）の彼女だよ、よろしくね、綿野君」
晃は会ったことがないようで、きょとんとしている。
若菜さんは、俺たちのやり取りを子供を見る母親のように微笑ましそうに見ていた。

・・・と言うよりも、本当に子ども扱いだからな、この人は。
もちろん俺の直接の知り合いではないので、きちんと説明し、若菜さんが自己紹介をするとようやく晃は理解した。

「よろしくお願いします。ところで、景？工さんって誰？」
「・・・吉田さんのことだぞ」
「ふーん・・・って、本当なの！？」

晃は、若菜さんの言った彼氏のことが分からないらしいので、俺が教える。
すると、あまり興味無さそうに若菜さんを見たが、もう1度今度は驚いた顔でこっちを見た。
若菜さんは、晃があまりに驚くものだから、少し驚いた表情を見せる。

「本当だよ。彼は吉田　工　（よしだ　たくみ）って言うの」
「いつも吉田さんと呼んでいたので、気付きませんでした」
「あ、そうそう。普通に話していいよ・・・って年が離れてて難しいかな」

晃に説明する若菜さんを見て、何て切り替えの早い人だと改めて思う。
・・・晃は、初対面の人とはあまり話さないからな。さっきから、どうにかしてくれと視線を送ってきている。

「ところで、若菜さんは吉田さんに会いに来たんですよね」
「・・・。そうだよ、やっぱり賢いね、景君は」

俺の言ったことが、図星だったようで顔を真っ赤にする若菜さん。
でも、すぐに落ち着きを取り戻すと、いつもように子供を扱うよう

な言葉へと戻る。

「吉田さんは、中にいますから」

俺が、裏を指差すと、いつものように若菜さんは中へと入って行った。

・・・いつも・・・って、本当はいけないんだけどな。

「景、ちょっと待ってよ。今、吉田さんってエリスさんと2人きり・・・」

「あ・・・」

晃の言葉で俺は気付いたが、もう決定的に遅い。

中からは、若菜さんが吉田さんを怒る声が聞こえる。

俺たちは、お互いに見合わせると、開いたままになっていた扉をそっと閉じた。

それから20分は経っただろうか。

表情からは察することは出来ないが、明らかに怒り心頭の若菜さんとすっかり萎縮した吉田さん、それに何が起こったのか理解できていないエリスが出てきた。

吉田さんは俺たちの後ろに隠れると、俺たちを盾にするようにして若菜さんと対峙する。

「ねえ、工。私怒らないから正直に話して。絶対に怒らないから」

・・・こういう時、素直に言ったところで怒られない確率はほぼ0

だ。
そうは言っても、言わなければさらに相手は怒るわけなのだが・・・。

「景さ・・・ん。何だか、その方が可哀想です。きちんと説明してあげたほうがいいと思います」
「・・・そうだな、エリスの言う通りだ。・・・若菜さん、俺の話を聞いてもらえます？」
「・・・お姉さんも大人だし、聞いてあげるね」

俺は、吉田さんにも悪いし、エリスにも頼まれてしまい、少々怖いのだが若菜さんに説明することにした。
エリスは、今日たまたまここに来ていること。俺の家にホームステイに来ていること。そして、吉田さんとは何も関係のないことを若菜さんに話した。
若菜さんは、初めは訝しげに聞いていたが、俺が真剣に言ったことも功を奏したのだろう。
最後には、納得してくれたようだった。

「・・・ちょっと私も大人気なかったね。ごめんね、仕事の邪魔して」
「何故、俺たちに？」
「それは・・・ね。いくら何もないからといって、私のような彼女がいるにも関わらず、他の女の子と2人きりでいるのは許せないのですよ」

・・・それ答えになってないんじゃ？
だが、俺はそれ以上は聞かなかった。若菜さんの目が笑っていなかったからだ。

「あ・と・で、ゆっくり話そうねー」
「・・・ああ」
若菜さんがにこりと微笑んで言うと、吉田さんは項垂れて力なく返事する。
「お2人とも仲がよいのですね、景さ・・・ん」
「もういいから、エリスは黙っててくれ」
俺は、この原因の一翼でもあるエリスの鈍さに呆れる。
まあ、普段は見ていて暑苦しいくらいのカップルだが、今の空気は冷え切っている。
「・・・仕事しようよ、景」
そんな中、晃の呆れた声が空しく響いた。
俺は、つくづく思う。・・・客がいなくて・・・助かったと。

第27話：メイドさん、アルバイト先へ来る（後書き）

今週より、作者の感想は止めることにします。昔の物は歴史ということで残しますが。
ここには、事務的なことと、本編後の雑談のみの掲載します。
今週も読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本編後の雑談

甘＝三津刃　甘奈　（外伝1）　先生＝相模　仁美　（景たちの担任）

甘「はじめまして」
先生「こちらこそはじめまして。こうしてお話しするのも初めてね」
甘「本編じゃ会うこともないですから。でも、いいのかな？私たちのような大人がこんな所で話してて。私、仕事休憩して来てるんですよ」
先生「あら、私もよ。授業を自習にしてきてるのよ。だから、長話が出来るわね」
甘「それは絶対ダメだと思います。てか、すぐに戻って職務を全うしてください」
先生「・・・あなたに言われたくないけど」

甘「うちの上司もこんなのなんだよね・・・。はあー・・・世の中には似た人が3人はいるって言うけど、こんなとこで会うなんて。絶対、気が合わないな、あの先生とは」

第２８話：休日のラプソディ　前編

・・・。

今の俺の気持ちを表すとしたら、これで十分だと思う。

今日は、エリスに街を案内するために、中心街の方へとやってきたのだ。

俺と恵麻にとってみれば、毎朝通る場所ではあるが、エリスにとっては何もかもが珍しいのだろう。あちこちをきょろきょろと見ている。

エリスが嬉しそうにしているのを見て、俺たちは連れてきてよかったと思う。

だが、そんな気分とは対照的に俺たちは今少々げんなりとしている。

道行く人がエリスとその横にいる俺たちをじろじろと見ているのだ。

おかげで精神的にかなり疲れている。

「次はどうする？」

俺たちが最初に訪れたのは、若い女向けの服を売っている店だった。

服に全く興味の無い俺は外で１時間ほど待たされる羽目になった。

そもそもエリスは食べ物を食べることが出来ないので、そういう所は外して回っている。

この後は、ゲームセンターや大型のショッピングセンターにも行く予定だ。

ついでに帰りに商店街で買い物をしていかなくてはならない。
「あら、商店街に行くの？だったら、お醤油と・・・を買ってきてくれる？」
・・・ちゃっかりしてるよな、俺の母さんは。
商店街のことを考えて、思わず母さんに言われたことを思い出すと、俺は意味も無く苦笑する。

「しっかし・・・何でこんなにじろじろ見られるかねえ・・・。あたしら、動物園のパンダか？」
「由真ちゃん。私たちが見られてるんじゃなくて、エリスちゃんが見られてるんだよ～」
由真がだるそうに言うと、恵麻が問題を意識していないのか能天気に言う。
・・・恵麻、お前の言っていることは半分は合ってる。だが、俺以外はじろじろと見られてる気もするぞ。
いや、そうではない。俺も突き刺さるような視線は感じるわけなのだが・・・。

「私が見られてるのですか、景様？」
「・・・様は止めてくれ。俺が変態扱いされるだろ」
「景・・・もう遅いよ。学校じゃ、あんた変態だから」
・・・やっぱり俺は変態扱いだったのか！？
もう分かってはいたことだが、直接言われるときついな・・・。由真に肩を叩かれるが、全く慰めになってもいない。
それにエリスは、子供のような笑顔で俺を見ているが、その何も分

かっていない顔が、時々嫌になる。・・・ハンドメイデン社にクレームつけた方がいいのか？

「け、景君。・・・大丈夫。私は少なくとも信じてるよ～」

「・・・俺から距離を取って言う言葉か？それは・・・」

恵麻が、俺をフォローしてくれるが、言動と行動が全く正反対で意味を成していない。

俺は嘆息しつつ、次の目的地へと行くぞと声をかけると歩き出した。

「次は、俺のお勧めだ」

俺は、自信たっぷりに言った。

ここは、駅の近くのゲームセンターだ。中学生の頃は、恵麻と遊びに行くこともあったが、最近はめっきり来なくなった。

それでも、俺はたまに遊びに来ることもある。

今日は休日ということもあってか、少し子供の数が少ないような気がする。

隣町に、遊園地が出来てからは、客足が遠のきつつあると昔、吉田さんが言っていたな。

今更の話だが、俺と吉田さんはここで初めて会った。当時、ここでバイトをしていた吉田さんが話しかけてきたのが、きっかけだった。

それ以来、何度か通っているうちに話をするようになり、去年コンビニで偶然再会したというわけだ。

「はあ？ゲーセン。エリスには合わないと思うけど」

「そうか？でも、エリスには色々なことを知ってほしいからな。ここは、不良とかもあまりいないから安心だぞ」

「でも、懐かしいよね、ここ。昔は良く遊んだもんね。景君は、ＵＦＯキャッチャーが下手で何回やっても取れなかったよね～。私は最近はあまり来なくなったけど・・・」

恵麻も覚えていたか。ここ数年は来ていなかった筈だが、記憶には残っているようだ。

・・・どうでもいいことを思い出して。

それを聞いた由真が、ぷっとわざとらしく吹き出して笑った。

恥ずかしいやら頭にくるやらで、俺はそっぽを向く。

「そんな過去の話はどうでもいいだろ。エリス、入ってみるか？」

「はい。私は、そのＵＦＯキャッチャーというもので遊んでみたいです」

エリスは、どうやら俺たちの話を聞いて、ゲームセンターに興味を持ってくれたようだ。

俺は少し恥ずかしい思いはしたが、良しとするか。

ＵＦＯキャッチャーを珍しげに見る、エリスに俺は微笑ましいものを感じる。

だが、突然振り向くときらきらした目で俺にＵＦＯキャッチャーをやってほしいと言った。

「これがそうですか？景様、やって見せてください」

やっぱり俺に言うのか。

俺は本当に苦手なんだよな・・・。

そう思ったとき、１つの考えが浮かんだ。ずっとにやにやと笑って

いる由真にやらせようと。

「そうだな。俺は下手だから、由真に手本を見せてもらってくれ」

俺にとってはささやかな反撃だった。

だが、自信ありげに由真は答えた。

「ふふん、景。言っとくけど、あたしはこういうの得意だから」

・・・失敗したら、散々笑ってやろう。俺はそう思った。

「・・・」

「あれ？景、こんなのもできないんだ」

俺は、今がっくりとしている。

目の前には、ぬいぐるみを抱えた笑顔の恵麻とエリス。俺も、何だかよく分からない人形を１つ貰った。

１０回中９回成功って何だよ・・・。俺は、内心でそう吐き捨てた。

最後の１回はわざと適当にボタン押しやがって・・・。

「景様。由真様は、随分とお上手ですよね」

「・・・そうだな」

エリスの言葉を認めたとき、俺は完敗を喫したのだった。

「結構楽しいねえ。あ、そうだ。次はあれやろう」

そう言って由真が指差したのはレーシングゲームだった。俺を見るとまだにやにやが止まらないらしい。顔が緩みっぱなしだ。
だが、俺はレーシングゲームを見て、また顔が引き攣る。
・・・俺、あれも苦手なんだよな。

だが、逃げるわけにも行かず大人しくついて行く。

「折角だから、みんなで対戦しよっか。まずはじゃんけんで2人ずつ対戦して、買ったほう同士、負けたほう同士で対戦するわけ。順位もばっちり分かるというわけだよ」

俺の方を見ながら言う由真に俺は、ある決心をした。
・・・こうなったら意地でも、由真に勝ってやる。

「面白そうだね～。景君、エリスちゃんもやるでしょ」
「ああ」
「はい。ところで景様。これはどのように動かすのでしょうか？」

由真の提案に俺たちも乗り気だ。
だが、エリスは操作の仕方を知らないようで、練習ということも兼ねて、何度か動かしてみることになった。

練習が終わると、由真が唖然とした顔で俺のところへやって来た。

「・・・ねえ、景。一応確認したいんだけどさ。エリスって、こういうとこ来てないよね？」
「ん・・・ああ」

俺たちは、平等に3度ほど練習した。
初めの1回は大してタイムは変わらなかった。だが、2回目以降どうやってもエリスに勝てない。
俺だって驚きだ。俺たちでは、相手にすらならない。それほど、エリスの腕前は圧倒的だった。

「景様、慣れると意外と簡単ですね」

エリスが嬉しそうにこっちを見る。
じゃんけんの結果、最初の勝負はエリスと恵麻で行うことになった。
そして、今ちょうど終わった所なのだが、結果は言うまでも無くエリスの圧勝。

「・・・ロボットってすごいんだな」

俺の言葉に恵麻と由真は大きく頷くのだった。

「じゃあ、次はそこのショッピングセンターに行くよ～」

ゲームセンターを後にすると、次は恵麻のお勧めであるショッピングセンターへ俺たちは向かった。
結局、俺は何とか由真に勝ったものの、エリスには手も足も出なかった。
ちなみに恵麻と由真の対決は恵麻の勝利だった。
だが、俺は由真を笑う気はもうない。本当は、格ゲーもする予定だったのだが、そんな元気は皆残っていないみたいだった。

後で知ったのだが、エリスの学習機能は1度で大抵のことを覚えるとの事だった。そして、3回も反復したものだから素人の俺たちでは勝てないと、エリスが教えてくれた。

そろそろ12時か。昼飯はどうしようかと考えていると由真が話を切り出した。

「ところでさ、昼はどうする？」

「そう・・・だな」

俺は、エリスは食事ができないので、食事中どうしても俺たちが食べているのを見ていなくてはいけなくなるので躊躇してしまう。エリスがたまに家の食事の時に寂しそうにしているのを知っている俺としては、さっさと食べて話でもしていた方がいいと思ったのだ。

「景様。私のことは構いませんから、お昼を食べに行きましょう。お食事中でも会話は出来ますよ」

だが、エリスは俺の考えが分かったようで、いつものように笑顔で言った。

でも、最後の言葉・・・じゃあ何故エリスは時折寂しそうな顔をするんだ？

俺がエリスのことを考えていると、由真が俺の前に何かを突きつけた。

それを由真から渡されると見てみる。

「じゃーん、そんなこともあろうかとあたしは来るときにクーポンを貰ってあるんだよねえ。まあ、エリスにあんたが気使うのは分か

るけど、あたしらだけ他の物食べるってのも寂しいじゃん。それに、会話は食べながらでもできるって」
「そうだよ～。私たちも一緒に食べるよ～」
「ということで、決定。じゃあ、景。早く買って来て。あたしはこれのセットで」

どうやら、由真も恵麻も俺たちに気を使ってくれているようだった。
・・・でも、都合よくパシリにされただけのような気もしなくもない。

「景様。いってらっしゃい」

手を振るエリスに見送られた俺は、仕方無しに昼食を買いに行くことにした。

俺が、皆の分の買い物を済ませて戻ると、慌てた様子の男たちとすれ違った。
何だかひどく怯えていたようだったが、一体何があったのだろうか？
・・・もしかして、3人に何かあったのか？

俺は、小走りでさっきの場所まで戻った。

「おーい、景。意外と早かったじゃん」

俺を見つけると、大声で手を振りながら由真を見て、とりあえず俺は安心する。

「景君、おかえり～」
「景様、おかりなさいませ」
恵麻もエリスも俺に気付くと、こちらに向かって手を振る。
・・・何だ、あれは関係なかったのか。

「結構重いぞ。それに４人分も１人で頼んだから、店の人に変な目で見られたぞ」
「はいはい、そう文句言わない。あ、そうだ、景、聞いてよ」
俺は、３人の下に戻ると、ベンチに買ってきた物を置く。
そして、恵麻と由真に頼まれた物を手渡す。
由真は、それを受け取ると、何か思い出したように話し始めた。恵麻やエリスは苦笑いを浮かべている。

「何か遭ったのか？」
「そうなんだよ。何かさ、景がいなくなった後に、変な男に声かけられてね」
・・・さっきすれ違った奴らか？俺はその顔を思い出そうとするが、大して印象に残っておらず、金髪が１人いたという程度しか覚えていなかった。
あ、そういえば、あいつ鼻血出してたな。
「どっか、飯でも行かないかだって。あたしらが断ってもしつこくってね。で、最後には、無理矢理腕を掴んできて、連れてこうとするのよ、最低でしょ」

ハンバーガーを食べながら、苦々しげに言う由真を見ながら、俺は1つの疑問を覚えた。

「でも、ここにいるよな。その後はどうなったんだ？由真が撃退したのか？」

「ああ、それね。それを今から話すから」

先程とは打って変わって、笑顔に戻る由真。

恵麻もエリスもお互い顔を見合わせると笑顔だ。何だか、俺だけが疎外感を感じる。

そして、由真はもったいぶったように話を始めた。

「ああ、そうそう。言っておくけどあたしが撃退したんじゃないから。見た目で決めないでくれる？・・・じゃあ、話の続きを始めるよ」

・・・状況が分からなかったら見た目で判断してしまうものなんだぞ。

それにこの中では、どう考えても由真が、喧嘩ができそうだ。余計なことを言って話が長引くのも嫌なので、ここは黙っておこう。

「強引に恵麻とエリスの腕を掴んだわけよ」

「・・・お前は掴まれなかったのか？」

「そこっ、黙ってる」

・・要は掴まれなかったわけだ。由真の表情を見て俺は確信する。

その上1人だけだったということに、一種の劣等感みたいなものを抱いているのだろう。

由真は、笑う俺を睨むと、こほんと咳払いをしてからまた話を始め

る。

「話続けるよ。もう面倒だから、結論を言うけど、エリスが引っ張られた拍子にこけて、相手の顔にヘッドバッドをして、流血させちゃったんだよねえ」

「はあ？」

「ま、信じられないのも分かるけど事実だから」

あまりの突拍子のない話に俺は、恐る恐るエリスの顔を見る。

そのエリスは、俺の視線を受けると何だか照れくさそうにしていた。

・・・おい・・・ひどい話だな。俺は、その被害者に哀れみを覚える。

一応、ロボットだから頭は固いんだよな・・・人よりも・・・。

「それで、相手が逆上した所をあたしが返り討ちにしたってわけ」

「結局、お前がやったんじゃないか」

オチは、結局由真か。

とりあえず、相手が悪かったな。どこの誰かも知らないが、俺は心の中で合掌しておいた。

由真と話していたせいか、俺はいつもよりも食事の減りが遅かった。

そんな俺を心配してエリスが声をかけてきた。

「景様、さきほどからハンバーガーの量が減ってませんが・・・もしかしお体の具合がよろしくないとか・・・」

「・・・いや、血生臭い話を聞いて、少し食欲が失せただけだ」

ほんの冗談で言ったつもりだったのだが、エリスは本気にしてしまったようで、おろおろとしてしまっている。

その時、俺の食べかけのハンバーガーが視界から消えた。

「そう、だったらあたしが貰う」

「ああっ！？」

慌てて消えた方向を見ると、由真が俺のハンバーガーを奪い取っていた。

止めようとするも既に遅く、俺の昼食は由真に食べられてしまった。

・・・恵麻が何だかうめき声をあげているが、喉にでも詰まったのだろうか。エリスが背中を叩いていた。

「・・・」

まだ半分以上残っていたのにと、俺は嘆く。そんな俺の気も知らず、由真は暢気に食った食ったとおっさんのように笑いながらお腹を叩く。

そして、俺の手元に残ったものといえば、ジュースとポテトしかなかった。

俺の昼食って、これだけか・・・。つい、愚痴の1つも言いたくなってしまうようなどう考えても作り置きで油が染みているポテトを頬張る。

・・・げ、これ・・・塩かかってない・・・。

俺は涙しながら、その余りも食べたのだった。

「景君。よかったら・・・私食べきれないからあげるよ」

何故か、恵麻が照れながら言う。
だが、俺はそんなことを気にすることなく喜んで受け取ると食べ始める。

・・・ん？これって食べかけだよな・・・。由真も俺の食いかけ持っていったし、恵麻のも・・・。これは間接キスなのか？
そう思ったが、俺だけ意識するのも恥ずかしいので口には出さない。
俺は黙って、その貰った残り物を食べると、ジュースを飲み干した。
そして、由真にもどうせだからと思い、目的の場所を聞いてみた。

「ところで、午後はショッピングセンターのあとは、由真のお勧めって聞いたが、どこに行く気だ？そもそも、お前は地元じゃないだろ」
「そう、焦らなくてもすぐに分かるって」

だが、俺の質問に答えることなく、はぐらかされてしまった。
・・・何だか極めて不安だ。由真が俺を見て笑ったのが、特に。

第２８話：休日のラプソディ　前編（後書き）

まず初めに、２００００アクセス達成しました。
本当にありがとうございます。もう、感謝としか言いようがありません。
これからも読んで頂ければ、私としては嬉しく思います。嬉しさのあまり勝手に祝って、番外編も書いているので、そちらもよろしければどうぞ。

本編後の雑談

晃「大助は四季で言うなら、どの季節が好き？」
大「俺か？俺は夏だな」
晃「・・・理由聞いてもいい？」
大「ああ、我が幼馴染にして親友のお前になら打ち明けてもいいか。その理由は、ずばり女の子の水着姿を拝める季節だからだ。大して何ら下着と変わらないのに、見ていても怒られない。あれだけの露出を見られるなんて、俺は男としては感激せざるをえない」
晃「ごめん、聞いた僕がバカだったよ・・・」
大「まあ、待て待て。まだ、話の続きがある。それに夏は服が薄いことが多いだろ。女の子の下着が透けて見えるのがもう・・・たまらない。今の季節の制服もそうだよな」
晃「そんなに真剣に言うなんて・・・。・・・僕は、友達だけじゃなくて、幼馴染もやめたくなってきたよ」

第２９話：休日のラプソディ　後編

俺たちは、昼食にファーストフードを食べた後、すぐ近くのショッピングセンターへと入った。
休日の昼ということもあってか、人も多く家族連れやカップルなどでごった返していた。

「あはは・・・今日は混んでるね～」

恵麻の乾いた笑いに俺たちは頷く。
・・・何だか、エリスが迷子になりそうだ。
俺はそう思い、エリスに言っておく。

「エリス。恵麻か由真の手を繋いでおいたほうがいいぞ。こう人が多いと、迷子になりそうだ」
「景様。いくらなんでも迷子になんてなりませんよ」

余計なお節介だったのか、エリスは頬を膨らませ、少し怒ったように言う。
恵麻も由真もそんなことは微塵も考えていなかったようで笑っている。

「だったら、景。あんたが手繋ぎなよ。あたしらに押し付けないでさ。あんたのとこのメイドなんだから」
「えっ？・・・いいな～」

由真に言い返されたことは、もっともなので俺は何も反論できない。
だが、由真の隣では、恵麻が何だか羨ましいような、残念そうな顔していた。それに何かぶつぶつといっている。

もしかして、頼んでみたら意外といいと言ってくれるのではないか。
俺はダメもとで恵麻に頼んでみる。

「そうだ、恵麻。よかったら手を繋いでくれないか？」
「えっ！？景君と？」
「いや・・・俺じゃない、エリスだ」
「そ、そうだよね。・・・うん、いいよ～」

何だか複雑そうな顔をして少し俯いていたが、顔を上げると笑顔で俺のお願いを認めてくれる。
だが、・・・何故俺と手をつなぐなんていう間違いを。
確かに昔は、一緒に手を繋いで幼稚園には行っていた。まあ、あれはむしろ繋いでいたのではなくて繋がされていたというほうが正しい。
俺の母さんも、恵麻といれば安心だと思っていた節があったからな。

「エリスは、恵麻の手を離すなよ。迷子になったら面倒だからな」
「ですから、迷子になんてなりません」

エリスが珍しく怒っているが、人の世話は焼きたがるのに、自分の世話は焼かれたくないようだ。
・・・何だかロボットも複雑なんだな。俺は、苦笑しながら思った。

人混みの中を俺たちは流れに沿って進むしかなかった。
本当は、色々と立ち止まって見たいのだが、流れに逆らうことも出来ず、ウィンドウショッピングさえもままならない状態だった。

「・・・ここはもういいよな」

俺の問いに無言で頷く恵麻と由真。エリスは、よく分からないといった表情をしていたが、俺たちの顔を見ると、察してくれたようで1度大きく頷いた。

俺は、外に出ると空を見上げ、ほっと一息つく。

その時、何かが視界に入った。もう1度上を見上げると、春の大感謝祭と書かれた垂れ幕が掛かっていた。

・・・これのせいか。俺は1人納得する。恵麻は新聞とか読まないだろうからな。

そういう俺も、1面とスポーツ覧、テレビ覧しか見ない。広告はいつもその辺りに放置しているが、母さんとエリスが読んでいる。

「ああ、やっぱり外はいいねえ。あたし、あんまり人混み好きじゃないんだよね。ってことで、次はあたしのお勧めって訳だね」

「そうだよ～。由真ちゃんはどこに連れて行ってくれるの？」

恵麻の期待の眼差しに由真は胸を張って言った。

「着いてからのお楽しみだよ」

何故か、由真は俺を見て言ったのが不安だった。恵麻も気付いたようで、何だか不思議そうな顔していた。

すると、由真は恵麻に何やら耳打ちをする。話を聞いていた恵麻の顔が少し赤くなると、俺はさらに疑念を深めた。

由真は時計を見ると、先頭に立って歩き始めた。

俺はエリスの横に立って、エリスと話しながら歩いた。

そして、その目的地へ行く途中、俺は気になったことをエリスに聞いてみた。

「エリスは今日が感謝祭だって知っていたのか？」
「はい、もちろんです。ただ、食料品は安くもなかったのであまり気には留めていませんでしたけど」

・・・聞いておくべきだったか？俺は、少し後悔した。

由真の案内で駅前を通り過ぎてから5分。

俺たちは、駅の南口の方へとやって来ていた。
南口近辺は、主に若者向けの店が並んでおり、その競争も激しいという。
1年経てば、半分は店が変わっているなんてことは日常茶飯事だ。
俺と恵麻は北口から帰るので、なかなかこちらに来ることはない。
・・・心配事もあるが、楽しみでもあることは否めない。

「ところで、そろそろ着くのか？」
「うん、そうだね。この道を行けばあるよ」

含み笑いをする由真が、どうしても気になる。

「あ、景。着いたよ」
「・・・ここ・・・か？」

俺は、その店を見て、来た道を引き返そうとする。
だが、由真は俺の服の襟首を掴んで離さない。

由真の見なくても、その表情が楽しさで緩みっぱなしだということが分かる。

「景様、どうかされたのですか？お顔が真っ赤ですよ」

そんなこと言われなくても分かってる。今回ばかりは、エリスの心配も余計なお世話だ。

すると、顔を真っ赤にして取り乱す俺を可哀想に思ったのだろう。恵麻も助け舟を出してくれる。

「由真、やっぱり景君、恥ずかしがってるよ～。やっぱり待っててもらおうよ～。何だか可哀想だよ」

「しかし、景もだらしないねえ。男なら堂々としてればいいんだってば。女の子の下着くらい見たってどうってことないでしょ」

由真が明らかに俺を挑発していることは分かる。

だが、確かに入ってみたいという気持ちがないわけではない。０だと言ったら、そいつはゲイだろうな。

・・・もし、俺に世間体、外聞を気にしない性格ならば喜んで入るかもしれない。

「どうってことある。大体店の前にいること自体恥ずかしいんだぞ」

俺は、由真に反論する。事実、俺のことちらちらと見て笑っている人が気になるのだ。

ランジェリーショップに普通は男は入らないだろ？

俺が、周りを気にする素振りを見せると、由真は急に笑い出す。

「やっぱり期待通りの反応をするねえ、景は。連れてきて正解だよ」

「・・・俺は、その辺りにいるから、終わったら携帯で呼んでくれ」

俺は、由真たちが何か言う前にさっさと立ち去る。

しばらく俺は1人で、周りの店を見ながら歩いていた。しかし、特にお金を持ってきたわけではないので、買えそうにないのが残念だ。今度は、1人で買い物に行くか。いくつかの店の場所を記憶しながら、そう思った。

そして、俺は時間を潰すために近くに本屋へと立ち寄る。

そこで、俺の目にある本が止まった。

・・・サルでもできる料理。読めば出来る3分クッキング。今週のおかず。・・・。

「・・・料理本でも買って、母さんがいない時に作ってみるか。さすがに俺でも本があれば、作れるはずだよな」

俺は、これだと思う本を手に取るとレジに向かった。

その本を買った俺は、終始浮かれた気分だった。あとは、母さんがいない日を待つだけだ。

もう時間も結構経ったよな。

ふと時計を見るが、まだ30分しか経っていないことに気付いた。

「・・・まだ時間がかかるよな」

俺が、そう漏らしたとき、ポケットに入れていた携帯が震えた。

携帯を見ると、もう選び終わったから戻ってこいと、由真からメールが届いていた。

意外と早いんだな。俺はそう思い、由真たちのいる店の前へと向かった。

「おーい、景。こっちこっち」

由真が俺を見つけると、大きく手を振りながら俺の名前を呼ぶ。
だから、下着ショップの前で俺の名前を呼ぶな。

俺は、由真たちの所へ着くと正直な感想を言ってみる。
すると、由真は真顔で俺に問う。

「意外と早かったんだな。もっと時間がかかると思っていたんだが」
「景、何かエロいこと考えたでしょ？別にあたしらの買い物じゃないからねえ。エリス１人だけだから。でもさ、景聞いてよ。案外、エリスってスタイルがいいんだよ」

由真の言うことを意識しないこともないから、俺は事実ではないと言い切れない。
・・・スタイルがいいことくらい、俺も知ってるけどな。
俺は、そんなことを考えた自分を嗤う。しかし同時に、男だから仕方ないよなと思う。

「ところで、今日はこれで終わりか？」

俺は、由真の話を途中で遮って聞く。
・・・これ以上、聞いているとそれしか考えられなくなりそうだった。
由真はしばらく俺のことをじっと見ていたが、急にしたり顔で話し始めた。

「ははーん・・・景、顔が真っ赤になってる」
「・・・そんなわけない」

「やっぱり景は男の子だねえ。本当に意識しちゃって」

・・・カマをかけられたのか。はめられたという思いが体中を駆け巡る。

だが、俺自身も顔が熱くなるのを感じた。俺は言われると余計に意識してしまうのだ。

そんな俺を恵麻とエリスは、冷たい目で見ていた。

「景君、・・・エッチ・・・」

「景様・・・」

エリスは、俺の名前を呼んだだけだっただが、言いたいことは恵麻と同じだろう。

俺を蔑む目を見れば分かる。

・・・何とかして話を変えないと。

「さっきも聞いたんだが、今日はこれで終わりなのか？」

俺が恵麻と由真に聞くと、2人とも少し考えると首を横に振った。

これ以上、市内で行く所はないか。あとは・・・少し郊外になるから時間が足りないな。

今日行かなかった所は、また今度行けばいいか。

俺は、もう用事がないなら帰るかと思ったが、ふと買い物をしなくていけないことを思い出した。

「そうか、なら駅まで由真を送ったら、い・・・商店街で買い物して帰るか」

「はい、景様」

「あ、私も付き合うよ～」

由真だけは、違う所に住んでいるので帰ることになってしまった。
帰りがけに、付き合いが悪くてごめんと言っていたが、仕方のないことだと思う。
それに、俺も恵麻も由真が付き合いが悪いなんて思ったこともない。
むしろ、休日にわざわざ来てくれたことに俺は感謝するべきだな。

「じゃあ、また明日ー」
「由真ちゃん、また明日〜」

俺たちは由真を駅で見送ると、駅前の商店街へと向かった。
ここの商店街は、駅前のデパートやコンビニとの競争で昔ほど活気はないと母さんが言っていた。
それでも、スーパーが入ってきたり、毎年7月の終わりと年末にはくじ引きをやっていたりするので、まだ活気は残っているように思える。
そして、毎年7月の七夕には商店街主催の祭りである、星祭には、この辺りの人が多く訪れてごった返す。
俺も恵麻は昔からよく遊びに来ているし、祭りの時には幸樹や由真、晃も一緒に遊んでいる。

俺たちは、大きなアーケードを潜り、商店街を入った。
時間は4時を過ぎた頃で、タイムセールには少し早い時間帯のせいか、まだ買い物客は少ないように思える。
俺は、帰りはいつも商店街を通るのだが、行きは商店街は自転車も多く通り邪魔なので、一本隣の道を通っている。ここを通るのは雨の日くらいだ。

「ところで、エリス。今日は何を買うんだ？」
「今日は、カレーだそうです」

俺は、何を買うのかエリスに聞くとカレーだと答えた。
そこで、まず俺たちはすぐ目の前にあった八百屋へと行く。
すると、エリスを見つけたおじさんが声をかけてきた。

「おおっ、エリスちゃん。今日も買い物か、偉いねえ」
「こんにちは」

おじさんに声をかけられると、エリスもそっちを向いて挨拶をする。
俺が行く必要はないな。いつもとは違うエリスを見てそう思う。

「ねえ、景君。さっきから気になっていたんだけど、その本、何の本なの？」

恵麻が、俺が手に持っていた本を見ながら言う。

「料理の本・・・・あっ・・・・」

俺は、素直に答えてから後悔した。
案の定、恵麻は驚いて、俺の顔をまじまじと見る。そして、恐る恐る俺に聞き返す。

「景君、もしかして・・・・また料理作るの？」
「ああ、そうだ。・・・・母さんには言わないでくれ。また、うるさいから」

俺が、恵麻に頼み込むと恵麻も俺のしつこさに観念したようで、誰にも言わないと約束してくれた。
そこで、俺は図々しくももう１つ恵麻に頼んでみることにした。

「もし、よかったらまた味見してくれないか？」
「え・・・」
そう言った瞬間、恵麻の苦笑いが固まった。
何だか、ショートした機械のようだった。まあ、1度俺の料理で痛い目を見ているからな・・・。
ちょっと無理言い過ぎたか。空気を重くしてしまったことをまたも後悔した俺は、慌てて恵麻に言い直す。
「今の冗談だ、忘れてくれ」
だが、恵麻はしばらくの間、悩むとおずおずと言った。
「・・・景君さえよかったら手伝うよ～。景君1人だと危なそうだから・・・」
「でも、いつになるか分からないけどな。その時は、よろしくな」
「いつでも手伝うからね～」
俺は、恵麻の心遣いが嬉しかった。昔は、こんなに人に気を使うような性格じゃなかったのに、年が経つとこうも変わるものなんだな。
俺たちの話がちょうど終わったとき、エリスが袋に野菜を詰めて戻ってきた。
「景様、恵麻様、お待たせして申し訳ありません。見てください、景様。おまけでもらっちゃいました。いつも、私が買い物に行くとおまけをくださるんです」
エリスが喜び勇んで、袋の中身を俺に見せる。
そこには、どう考えてもいらないくらいの野菜が入っていた。

「・・・」

だから、母さんはエリスを買い物に連れて行くのか・・・。
ということは、他でもおまけを貰っているのか？

この俺の予想は、すぐに現実のものとなってしまった。

「エリスちゃん、１００グラムおまけね」
「おうっ、エリスちゃん。いちご持ってきな」
「あら、エリスちゃん、こんにちは。ちょっと待ってて・・・はい、いつものコロッケ。おばさんによろしく言っておいてね」

・・・何と言うのか・・・そんなのありか？
恵麻も最初は笑っていたが、段々笑顔が引き攣っていき、最後には唖然としていた。

「・・・ねえ、景君。いいのかな・・・これで・・・」
「店の人の好意だからいいんじゃないのか・・・」

俺は恵麻にそう言ったものの、内心では良くないんじゃないかと思った。
そして、エリスに全部持たせるのも悪いので、俺はいくつかの袋を渡してもらった。

「景様、恵麻様、すいません。お手を煩わせるようなことをしてしまって・・・」
「そんなことないよ～。私たち友達だよ。でも、私１つしか持ってないから」
恵麻は１つしか持っていないことを気にしているみたいだが、俺か

らすれば持ってくれた事自体ありがたい。
いくつかの荷物を俺たちに渡したエリスは俺たちに持ってもらうことを初めは嫌がっていたのだが、俺たちが押し切る形で荷物を持つことにした。

「恵麻の言うとおりだ、気にするな。むしろ、こんなにおまけやら貰ってしまったことの方が気になるんだが・・・ちゃんと礼は言っているのか？」

だが、俺がずっと気にしていたことを聞くと、エリスはさも当然ですよといった風に言った。

「もちろんです。最初は断るのですが、いつも押し切られてしまうんです」
「エリス・・・訪問販売とかには、気をつけるんだぞ」

押しの弱いエリスに俺は注意しておく。
エリスは、きょとんした顔をしたあと、すぐに笑顔に戻ると、はい、と返事をした。
俺は、何も考えていなさそうな笑顔に、大丈夫じゃ無さそうだと思わず苦笑する。
俺の苦笑をどういう風に理解したのか知らないが、エリスはもう1度俺に微笑むと言った。

「景様、そろそろ帰りましょうか」
「うん、そうだね～。帰ろう、景君」

恵麻もいつの間にか、エリスと並んで俺の前に立っていた。そして、エリスと互いに見合うと何がおかしいのかふふっと笑いあう。

しばらく歩き商店街を抜けると、近所の公園が見えてきた。
・・・西日がまぶしいな。ふと公園の時計が目に入った。その公園の中心にある時計はちょうど5時になろうとしていた。
そして、5時のチャイムが鳴り始めた。すると、恵麻は立ち止まり公園の方を見ながら言った。

「懐かしいね、昔はここでもよく遊んだよね～」

後ろを向いたままの恵麻の髪が風になびいている。そのなびいた髪を、荷物を持っていない左手で押さえようとする。
夕陽が当たり、恵麻が少しだけ輝いて見えた。・・・16年も幼馴染をやってるけど、随分と大人になったよな、恵麻も。
幼い頃に比べて随分と綺麗になった幼馴染を見て、素直にそう思った。
あ、そうだ・・・、礼を言わないといけないな。

「・・・そうだ、恵麻。さっきから言おうと思っていたんだが、悪いな。今日は1日付き合ってもらった上に、荷物まで持たせてしまって」
「えっ、いいよ～、そんなこと。それに、私も楽しかったよ」

恵麻は、俺が声をかけると振り向いた。
だが、太陽の光が目に入るせいか、少し目を細めていた。そんな仕草に少しドキッとしたのは、きっと夕陽のせいだな。
俺は、恵麻から視線を逸らし、公園の方を見ながら言った。

「話変わるけど、ここ恵麻の言うとおり懐かしいな。確か、小学校の3，4年くらいまではよくここに来てたんだよな」

俺も、この公園は懐かしいと思った。

いつもこの公園の前を通るのに、この公園で遊んだ記憶は小学校の頃のものしかない。
・・・こんな所でぼーっとしている場合じゃないな。エリスに声をかけようとしたとき、俺は声をかけられなかった。

「・・・」

エリスもまた、公園をじっと見ていた。
だが、俺たちと同じ昔を見ているように思えるのは考えすぎだよな。
エリスはまだ作られてから1年しか経っていないのだから。

「・・・過去を懐かしむようになったら、おっさんだよな」

俺は、ふっと溜息を吐いた。
少し風が出てきたせいか、少し肌寒くなってきた。・・・そろそろ帰るか。

「恵麻、エリス。ぼーっとしてないで帰るぞ」
「あ、景君、待ってよ〜」
「景様、置いていかないでください」

恵麻とエリスの声が後ろから聞こえた。
さすがに荷物を持っているためか、あまり早くは走れないようだった。
・・・俺は、卵を持ってるから走れないんだけどな。俺は、卵のことを気にしながら歩いていく。

「景君、置いていくなんて酷いよ〜」

「景様、女の子を置いていくなんて酷いと思います」

だが、1分もしないうちに恵麻たちに追いつかれた後、家に着くまで散々文句を言われたのは言うまでも無い。

第２９話：休日のラプソディ　後編（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

現在、本編の修正を行っております。読みづらさはあまり変わらないかもしれませんが、少しでも読みやすくなればと思っております。

本編後の雑談

エ＝エリス　景＝有栖　景

エ「景様は、去年の夏休みをどう過ごされたのですか？」

景「いきなり薮から棒だな・・・。去年は、遺跡を見に行ったり、田舎に帰ったりしていたな。ところで、何でそんなこと聞くんだ？」

エ「景様のことをもっと知っておきたいからです。ところで、海には行かなかったのですか？」

景「去年は、台風が来て行かなかったんだ」

エ「では、景様に質問なのですが、先ほど映画で言っていたのですが、大きい胸が好きな男の人はマザコンというのは本当なのですか？」

景「・・・自分で考えてくれ」

第３０話：七不思議を探しませんか？（前書き）

タイトル間違えてました・・・。
１０／１３　後書き一部変更

第３０話：七不思議を探しませんか？

・・・。

・・・・・。

はじめましてだよね。名前なんていうの、お友達になろうよ。

ええっ、嫌？そんなこと言わずにお友達になろうよ。

私はね、・・・・。

ふーん、ありす　けい君だね。じゃあ、けいでいいよね。

なれなれしい？どういう意味？教えてよー。

・・・懐かしい夢を見た。

昔、俺が恵麻以外に友人がいなかった頃の話だ。

俺は、昔から人見知りが激しくろくに友人なんてものはいなかった。

いつも砂場で１人で遊んでいるか、幼稚園の庭の隅でぼーっとしているかのどっちかだった。

そんなある日、あの子はやって来た。

その子は、明るくてすぐに恵麻や他の奴らとも仲良くなった。

そして、遊びに誘われても何度も断った俺とも友人として接してく

れた。彼女経由で友人となった奴もいたから、俺の人生の1つの転機とも言える出会いだった。

だが、そんな大切な人だったはずだが・・・名前を思い出せない。

そして夢から醒めたとき、俺はすっかり内容を忘れてしまっていた。

それは、昼休みのことだった。

いつものように、学食で飯を食った後、教室へ戻ると教室内に見知った顔があった。

恵麻や由真と何やら楽しそうに会話をしていたが、恵麻が俺に気付き、俺の名前を呼ぶと、美玖もまた俺の方へ振り向いた。

どうやら、俺に用事があったようで、俺を見つけるとこちらへとやって来た。

「景先輩、こんにちは」

俺の前までやって来た美玖に頭を下げられる。同じ様に少しだけ意地悪で俺も頭を下げてみると、案の定、美玖はあたふたとし始める。

「こんにちは」

「そそ、そんなに改まってもらわなくても・・・」

・・・ちょっとやり過ぎただろうか。俺は美玖の期待通りの行動にそう思った。

それに恵麻と由真が視線で訴えてきてるしな・・・。

あまりに申し訳無さそうにするので、俺も少しばかり罪悪感を感じてしまう。

「今のはほんの冗談だ、悪かった。・・・ところで今日は美玖1人なのか？」

俺は、さすがにやり過ぎたと美玖に謝ると、話題を変える意味もあって何故1人なのか聞いてみた。

すると、美玖はころっと表情を変えるとそうだと言って、ついて来てほしいと言った。

休み時間は10分ほどしか残っていないのだが、すぐに終わると言われたので俺は美玖の後について行くことにした。

だが、何の話か気になり途中の廊下で聞いてみた。

すると、美玖は少し間を置いてから話を始めた。

「景先輩は、七不思議ってご存知ですか？」

美玖が、真剣な顔をして聞くので思わず苦笑する。

「あ、あの・・・わたし何か変なことを聞いてしまったのですか？」

俺が、唐突な話に思わず苦笑したせいで、美玖は落ち込んだ顔をする。

それを見た俺はしまったと思い、慌ててフォローに走る。

「いや、そうじゃなくて・・・いきなり七不思議の話をされたからな・・・」

俺が言葉を濁すと美玖は不思議そうな顔をした。

俺が言葉を濁したのは、七不思議の内容自体にある。
実際には6つしかなくて、7つないということが七不思議の1つという安易なものある。・・・おそらくデマであろうものや既に解決されたものもある。
だが、その中には知らないほうが幸せだと思えるものが1つだけあったりもするんだよな・・・。俺は、美玖の学校生活のことを思うと少し心配になる。

「・・・じ、実はですね・・・今日はそのことで先輩に聞きたいことあったんです。あ、あの・・・押してもらってもいいですか？」
「別に構わないが、どこに行けばいいんだ？」

やっぱりそうなのか・・・でも七不思議に興味を持つ年齢じゃないと思うんだが・・・。でも、仕方ないか・・・見た目は子供、中身も子供だしな。

「中庭です。そこで、梓依も待っていますから。では、お願いしますね」

楽しそうな声で言う美玖の言葉に俺は、黙って頷くと美玖の車椅子を押し始めた。
そして、俺は車椅子を押しながら美玖の指示通りに中庭へと向かった。

「・・・知らぬが仏ということあるんだがな」
「・・・あ、あの・・・景先輩、何か言いました？」

俺は、何も言っていないと言っておいた。
これだけ楽しそうにしているのを潰すのもよくないと思ったし、俺も、美玖がわくわくしているのを隠せない様子を見て、諦めたしま

ったからだ。

1階の職員室前を通り抜け、体育館への渡り廊下を曲がると俺たちは中庭へとたどり着いた。
そこの銅像の前には、梓依が座っており、俺たちを見つけるとこちらへと駆け寄ってきた。

「美玖、遅い。一体、何やってたの？全くボクがついてないとダメなんだよね」
「今日は紫なんだな」
「景先輩、こんにちは。ボクで悪かったね」

そう言って悪態をつく紫だが、すぐに表情を崩すと、こっちに来てと言って銅像の所へ走っていくと俺たちを手招きした。

「その銅像がどうかしたのか？」

俺は、紫に追いつくと紫が笑いながら頭をポンポンと叩いている銅像を見て言う。
すると、俺の後ろから追いついてきた美玖が紫が言おうとする前に話し出した。

「これが、七不思議の1つだと聞いたのですが、どう見ても普通の銅像ですよね？」
「・・・そうだな」

俺は、視線を逸らして答えた。
確かに、この銅像も七不思議の1つだ。夜中にこの銅像が光っているのを見たと言う奴が何人もいるのだ。

俺たちも真実を確かめるべく、夜中の学校に侵入したことがあったが、その時は・・・。
だが、俺の思考は急に声をかけてきた人によって止められた。

「こんにちは、有栖君」

俺に声をかけてきたのは、つい先日会った明月院さんだった。普段は、友人や取り巻きといることの多い彼女だが、今日は珍しく1人だった。
そんな明月院さんは、俺の隣でじっと見つめる美玖の視線に気付くと、そちらにふっと微笑む。だが、美玖は、びくっとして何故か俺の後ろに隠れてしまった。

「あれ？そちらの女の子は、知り合いなんですか？」
「まあ、知り合いだな。車椅子の方が、姉の四条畷　美玖。銅像の所にいるのが妹の四条畷　紫だ。所謂、双子だな」
「へえー、そうなんだ。でも、有栖君、その子に好かれてるね。・・・コホッコホッ」

俺が代わりに紹介すると、美玖は俺の後ろから頭だけを出して頭を下げる。
紫は全く相手にもしていないようで目もあわせなかった。
2人の反応に少し苦笑いを浮かべ俺を見る明月院さん。彼女はあまり人に嫌われるタイプではないので、少し戸惑っているのかもしれない。

「大丈夫か？風邪なら、あまり外に出ないほうがいいぞ」

俺は、急に咳き込んだ明月院さんを心配して声をかけたのだが、明月院さんは笑って大丈夫と言った。

そして、明らかに話題を変えるように俺たちに質問をぶつけてきた。

「あ・・・ありがとう。でも、平気です。ところで、有栖君たちはここで何をしているの？そろそろ授業始まると思いますよ」

・・・つまり、あまり触れるなということだな。俺は、そう理解するとその話に乗っかる。

「明月院さんは、七不思議って知っているか？」

俺は、至って真面目な顔をして言った。明月院さんは、初めは目を何回も瞬きさせて俺のことを見ていたが、やがてくすりと笑うと言った。

「意外だね、有栖君、そういうのにはあまり興味ないと思っていたんだけど」

勘違いされると困るので、俺は慌てて言葉を付け加える。

明月院さんは人に言いふらすようなタイプの人間でないことくらいは知っているが、自分のかっこ悪い部分や良くない部分というのはあまり見せたくない。

「いや、俺は興味ないんだが、そこの2人が興味があるらしくてな」

明月院さんは、しばらく黙ったまま考え込んでいたが、1つ咳払いをすると1つの提案を出してきた。

「よかったら、放課後に七不思議の1つに案内するよ。どうかな、美玖ちゃんに紫ちゃん？」

突然の提案に美玖も紫も戸惑っているようで、互いに顔を見合わせている。
明月院さんも返事がないため、段々と表情が曇っているいくように見えた。
・・・何だかマズイよな。そこで、俺は双方に助け舟を出すことにした。

「折角だから、案内してもらったらどうだ？明月院さんは俺の知り合いだし、とても親切で優しいから、そんなに心配しなくていいぞ。それに俺よりも学校にも詳しいと思う」

俺はそう言うと、美玖と紫の反応を待つ。紫は相変わらず興味が無さそうな様子で、指弄りをして遊んでいた。
だが、俺の言葉を真剣に聞いていた美玖は少し悩んでから、こう切り出してきた。

「そ、それなら景先輩も一緒にどうですか？紫もそれならいいよね」

美玖が紫に聞くと、紫も迷うことなく言った。

「そうだね。ボクもそれなら賛成だな。やっぱり知らない人と一緒に行くっていうのは不安があるから」
「では、決まりですね。放課後、第1音楽室の前で待ってますね」

・・・ちょっと待て、俺はまだ何も言っていない。
だが、勝手にまとめてしまった明月院さんは、俺によろしくお願いしますと言い残すと、先に高校棟へと戻っていった。
俺の意見など眼中にないのだろうか・・・。
既に姿のない明月院さんを見送った俺に、紫は俺の背中を叩きなが

ら言った。

「景先輩、良かったじゃん。こんなに美人ばかりと一緒に校内散策だよ。これってデートだよね」

俺は、その言葉に文句の1つでも言ってやろうと振り向いた。
確かに可愛いとは思うが、美人ではないだろうと。
だが、俺が振り向くと同時に嫌らしく笑った紫がいた。そこで俺は確信した。絶対に俺も巻き込むつもりだったのだと。

ドタキャンしようか。そう思ったが、そんな俺の考えなど既に読んでいたのだろう。
紫は意地悪く笑いながら、歌を口ずさむように楽しそうに言った。

「景先輩、必ず来てよ。そうじゃないと迎えに行くから。それで、責任取ってって大声で叫ぶからね」

それは俺にとっては、死刑宣告のようなものだった。
当然、世間体を気にする俺は、行くという以外の選択肢は残されていなかった。

「遅い、景先輩。一体何時だと思ってるの？」

第1音楽室に着いて早々俺は、紫に文句を言われてしまった。
俺が遅れてきたのは、幸樹や大助と話をしていたからだ。
遅れてきたことに変わりはないので、紫に謝ると意外そうな顔をさ

れた。
そして、慌てたように早口で言った。
「そ、そんなに気にしてないから。それより早く行こうよ」
・・・何なんだ？
俺は、美玖や明月院さんを見るが、２人ともお互いに見合って曖昧に笑っていた。
「それでは、行きましょうか」

音楽室に入ると、既に何人かいるようで、明月院さんはその人たちに挨拶をしていた。
この第１音楽室は、主に合唱部が部活で使用している部屋だが、授業でも使用する部屋だ。
第２音楽室も、使用することもあるが、あちらは選択科目で選んだ奴らが利用する教室になる。
部活動では、軽音の溜まり場になっていて、毎日がライブ状態だ。
美玖は、音楽室に入るときょろきょろと周りを見ており、１人だけ小学生が混ざっているみたいだ。
「景先輩、す、すごいですね、この太鼓。あ、リコーダー、懐かしいです。確かリコーダーって、好きな子のものを舐めたりするんですよね」
何だかひどくはしゃいでいるが、楽器が好きなのだろうか。
だが、楽器自体間違っているし、リコーダーに対する認識も何だかおかしい。

紫も、俺と同じ様に思ったようで、呆れたように興奮気味の美玖に注意する。

「美玖・・・それ違うって。あと、もうちょっと落ち着きなってば・・・」

だが、美玖は全く聞いていない。

「・・・あっ、これも懐かしい」

しかし、相変わらずこの教室は音響だけはいいな。話し声が、少し反響して聞こえる。

それに先ほどから誰かが、ピアノを弾いている。名前も顔も知らない奴だが、その音は静かでほっとできる曲だった。

「こっちのピアノは・・・関係ないな」

教室に堂々と置かれているピアノは、相当高価な品らしく、何でも軽音部のＯＢが自費で購入して学校に寄贈した物だそうだ。

何と言うのか・・・軽音出身なら、他の楽器を寄贈すればいいと思うのは俺だけだろうか。

だが、グランドピアノに用があるわけではないので、そこから視線を外し、美玖を探すがいない。

ふと視線を背後から感じ、振り向くとそこには美玖がいた。何だか目が輝いていて、遠足に来ている小学生みたいだった。

「あ、あの景先輩。ところで、ここの七不思議は何なんでしょうか？やっぱり、作曲家の顔を動くとかでしょうか？」

そうだった・・・。美玖がはしゃいでいるからすっかり忘れていた。
俺は、本来の目的を思い出すと、美玖に声をかけた。

「ああ、そうだ。そこにあるのが、七不思議の１つだ」

俺が、ある電子ピアノを指差すと、美玖が目を輝かせ、そちらを見た。
だが、何の変哲もないピアノに少しがっかりしたように俺を見る。

「こ、これですか？」

そこへ、明月院さんが登場すると笑いながら言う。

「ええ、そうですよ。これが七不思議の１つ、夜、勝手に演奏するピアノだよ」

美玖が知らないことが面白いようで、明月院さんだけでなく、音楽室にいる明月院さんの友人や先程までピアノを弾いていた女も笑っていた。
馬鹿にしているというよりは、好奇心旺盛な小さな子供を見て、微笑ましいといった感じであった。

美玖は自分が何故笑われているのか分からないようで、小首を傾げると俺と紫を見る。
だが、俺たちはどう答えたらいいものかと互いに顔を見合わせるが答えは出ない。

「・・・どう答えたらいいんだ？」

すると紫は、肩をすくめるとこっそりと美玖に聞こえないように言

う。

「さあ？ボクに聞かないでよ。ところでさ、これは何が原因なの？知ってるでしょ、景先輩も周りの人も」

・・・何だ、分かっているのか。

俺は、苦笑すると紫にそっと話した。話を聞き終えた紫は、何だと言わんばかりにつまらなそうな顔をした。

まあ、元が元だからな・・・。

紫は完全に興味を失ったようで、先に帰ると言うと音楽室を出て行ってしまった。

後に残された俺たちは、紫の後姿を黙って見送った。

そして、明月院もまた何が何だかよく分からないようで、混乱しているようだった。

たぶん、紫の気持ちを考えずに連れてきてしまったのだと思っているのだろうな。

「有栖君、あの・・・紫ちゃんに私、何か失礼なことをしてしまったんですか？」

「す、すいません、紫が失礼なことをしてしまって・・・」

明月院さんが頭を下げると、美玖は紫のことを明月院さんに謝る。

美玖が、慌てて頭を下げると、また、そんなことはないと明月院さんが私の方が何かいけなかったんだと頭を下げる。

そして、片方が頭を下げると、もう片方が頭を下げるという負の連鎖に突入する。

・・・互いに謝ってばかりで、一向に埒が明かない状態になってし

まったな。
もちろん、２人とも自分が悪いと思っているものだから、治まる気配がない。
誰かが止めてくれないだろうか、そう期待するが、誰も止める様子もない。
むしろ、この光景を楽しんでいるようだった。
ふと時計を見ると、４時を過ぎた所だった。あとは、確実に見て回れる鏡と、トイレを回るか。
俺は、未だに互いに頭を下げている美玖に声をかけた。
「そろそろここはいいよな。次は、鏡とトイレが近いから行こうと思うが、どうする？」
「え、あ・・・そ、そうですね。はい、お願いします」
美玖は、最後にもう１度美玖や他の部員に頭を下げる。
皆、笑顔で美玖に手を振るとそれぞれの作業に戻った。と言っても、ほとんど話をしているだけだったが。
俺たちは、音楽室を後にすると、扉が開き、明月院さんが中から出てきた。
「私もついて行ってもいいかな？」
「俺は別に構わないが」
視線を美玖に向けると、美玖もどうぞと言った。
・・・しかし、明月院さんも七不思議に興味があったなんてな。意外だ。

俺たちは、3人でその後、校舎の西側へと向かった。
幽霊が映ると言われる鏡は2階と3階の踊り場に、トイレは4階の最奥、倉庫の横にある。

幽霊が映る鏡というのは言わなくても分かると思うが、ただの迷信に過ぎない。
信じている奴なんていないし、俺も信じていない。
美玖の感想も「普通の鏡ですね」と至って普通の反応だった。

そして俺たちは最後に4階へとやって来た。
この階は、俺たち2年の教室がある階ではあるが、通称西館と呼ばれるここは生物室や物理室といった部屋があるが、今日はあまり人影が見当たらなかった。
今日は、揃って部活動が休みのようだ。

廊下を歩いて、角を曲がるとそこはあまり人が来ない倉庫横のトイレがあった。
トイレの横には、1つ埃が綺麗に乗った机が置いてある。

俺は、トイレの入り口で立ち止まると何の感慨もなく美玖に言った。

「で、ここが問題のトイレだ」

何で、ここにトイレがあるのかと思うが、衣先輩に聞いたところ、昔ここは生物室だったらしい。
だが、改修に伴い教室を移転し、余ったここは倉庫になったのだという。
その時、トイレをなくすのを忘れたために今でもあるという嘘か本

当かよく分からない話だった。

「明月院さんと2人で行って来てくれ、俺はここで待っているから」

俺が行くのを渋ると、美玖は理由が分からないようで、首を傾げる。

だが、明月院さんは分かってくれたようで、美玖に言った。

「ここ、女子トイレなんですよ」

美玖は、ようやく合点がいったようだった。

そして、俺が入れないと分かると話を、七不思議の内容を尋ねた。

「ところで、ここはどのようなものなんですか？」

俺は、美玖に説明しようとすると、誰かが先に話し始めた。

「ああ、それは・・・ここは、通称血のトイレっていって夜になると真っ赤な水が流れるのじゃ。そうは言っても、錆びた配管のの鉄が一緒に流れているだけじゃがの。血の臭いというのも、単に鉄の臭いじゃ」

俺は、話そうとしていたことを先に話され、少しばかり不満だった。

でも、誰だ？

「・・・」

明月院さんか？俺は視線を向けるが、明月院さんは首を横に振った。

態度を見る限り、嘘をついているようには見えない。

念のために美玖にも確認するが、美玖も首を横に振る。

美玖は、少し顔を青くしながら言った。

「景・・・先輩ではないですよね・・・。明らかに女の人の声でしたし・・・。それに口調も変でした・・・」

明月院さんもこくこくと頷くと、震えた声で続く。

「あ、有栖君、四条畷さん。何だか、不気味ですし帰りませんか？」

俺も不気味に感じたので、その意見に頷いた。

また、今度来ればいいか。

1度だけ俺は、その場所を振り返ると後にした。

そこには、何もなかった。

ただ、寂しげな廊下があるだけだった。

「また会いましょうね」

階段を降りるとき、ふとそんな音楽の調べのような声が聞こえたような気がした。

他の2人は聞こえなかったようだったから、気のせいなんだろう。

・・・ちなみに残りの七不思議は、美玖には教えなかった。

と言うよりも、美玖が聞きたがらなかった。きっと、よく分からない声を聞いたからだろうな。

まあ、一応言っておくと、後は、光る校長像、夜中に徘徊する女の

幽霊、そして何故か退学にならない変態という3つが残っていたのだ。
光る校長像は俺たちの悪戯なのだが、それはまた今度機会があれば、教えようと思う。

第３０話：七不思議を探しませんか？（後書き）

本編後の雑談

幸「最近、俺出番なくねえか？」
晃「そうかな？」
幸「ああ、絶対そうだ。・・・まあ、文句言っても仕方ねえよな。ところで、晃。お前のとこ、何人入った？」
晃「うちは・・・3人かな。で、そっちは？」
幸「野球部は、２２人だ。あとは、マネージャーが3人。すぐに辞めないといいんだけど・・・期待できないんだ」
晃「・・・確かにそれは言えてる。ところでさ、幸樹は大丈夫？」
幸「ん？ああ、大丈夫だぜ。守りは堅いって言われるからよ」
晃「・・・良かったね」

第３１話：部活動調査　前編

放課後、生徒会室に来るように。

呼び出しをされたのは、その日の昼のことだった。

生徒会長である衣先輩自らの呼び出しだったために俺だけでなく、一緒に昼を食べていた幸樹と晃も何事かと顔を見合わせていた。

そして、放課後。

俺は生徒会室の扉の前にいた。

いつもパターンであれば、大体生徒会の手伝いをさせられるのだろう。

「・・・何だか嫌な予感しかしないな。それに今の時期は・・・」

俺が、入るのを渋っていると背後から声をかけられた。

驚いて振り向くと、そこには色々と資料を持った衣先輩がいた。

「あら、有栖さん。ちょうどよかったですわ。ちょっと、そこのドア開けてくれませんか？」

両手が塞がっているために扉を開けることが出来ないようだ。

俺が、扉を開けると、中には既に生徒会の面々が揃っており、俺を見つけると、皆に挨拶をされた。

・・・今から、帰りますと言える状況ではないな。

意志の弱い俺は、なし崩しにまた手伝いをすることになったのだ。

俺は、希望先輩の隣に座らせてもらった。
今日は、いつもメンバー以外にも、会計監査や書記の人がいた。

「ごめんね、会長のわがままに付き合わせて」
「ふん、別にこいつだって好きで来てるんだからいいだろ」

ちなみに、前者が書記、後者が会計監査の人だ。
・・・後者の反応は、俺みたいな部外者が当然のようにいることに対する不満だろう。
正しいとは思うんだが、本人の前でやらないでほしい。

希望先輩は苦笑いを浮かべると、おどけるように言った。

「賢っち、堅物ー」
「お、俺は、当然のこと言ってるまでだ」

・・・分かりやすいな。
誰もが分かるくらいに顔を真っ赤にして、そっぽを向く監査。
希望先輩が好きらしいのだが、その思いが報われたことはない。希望先輩が、苦手だと前に衣先輩に漏らしていたのを聞いた事がある。

まだ会議が始まらないためか、皆集中力が切れているらしく、思い思いに話している。
すると、衣先輩がガタンと音を立てて席を立つ。

「うるさいですわ。そろそろ始めますわよ」

衣先輩は、段々と騒がしくなる生徒会の面々を一喝する。

俺たちは、黙って話を聞く。・・・怒らせたら、何をされるか分かったものじゃない。

皆が黙ると衣先輩は満足したように話を始めた。

「今日は、皆知っているように、部活動調査を行います。去年は、6月に行いましたが、今年は抜き打ちで行い、実体のない部及び同好会は即刻停止処分にします。以上ですが、何か質問は？」

質問は？と言われても、鋭い視線を向けられていては質問がしづらい。

だが、同じ雰囲気を持つ蓮華先輩だけは、物怖じすることなく衣先輩に許可を求めることなく聞いた。

「ところで、全員で行くわけではないのだろう？この人数では2組に分けるのか？」

「ええ、そうよ。監査の伊戸さんは用事があるとのことですから、代わりに有栖さんに参加してもらいます」

衣先輩の言葉に申し訳無さそうに、皆に丁寧に頭を下げる監査。

だが、俺には頭を下げることなく無視する。

・・・かなり嫌われてるんだな、俺は。思わず、苦笑する。

監査がお先に失礼しますと出て行くと、衣先輩はまた話を続ける。

「先程の続きですが、私と赤羽さん、有栖さんの3人と、希望さん、深水さん、蓮華さんの3人の組に分けますわ」

衣先輩が組み分けを発表すると、当然の疑問を希望先輩がぶつける。

「何の基準で分けたの？」
「・・・きちんと調査が出来る人と、万が一の事態に備えての武術経験者、それにおまけですわ」
希望先輩は、衣先輩の答えを聞くと、意味ありげに俺と深水先輩に視線を向ける。
だが、俺にはその視線の意図がよく分からない。

「私は、こーいちと一緒ならどういう組み合わせもオッケーだよ」
蓮華先輩は、深水先輩を一緒であれば、どういう組み合わせでも構わないらしい。能天気に深水先輩に、俺たちの前にも関わらず抱きついていた。
だが、俺はその組み合わせを聞いて頭をひねった。
・・・ところで、調査が出来る人が、赤羽さんと希望先輩。武術経験者は衣先輩と、蓮華先輩。
・・・俺は・・・おまけ・・・なのか？
「・・・」
ほぼ同時に、同じ結論に達したらしい深水先輩と目が合うと、深水先輩は、蓮華先輩に抱きつかれながら黙って首を振った。
その視線は確かに言っていた。
俺たちの扱いは、所詮こんなものだと。

・・・確かにその通りだな。

生徒会室の前で、もう一方と二手に分かれた俺たち3人は、まず料理部へと向かうことにした。

そもそもこうやって生徒会が、調査をするには訳がある。
この高校には、大小１００以上の部、同好会があって、１人１部活制のため、必ず部、同好会に入る必要があるのだ。
そして、部費も人数と実績及び体育祭、球技大会により支給されるために、部員の獲得競争も激しくトラブルも毎年絶えない。

そのため生徒会が定期的に行っているのが、生徒会による罰則とこの部活動調査だ。
規定に反するような勧誘は部費カットをされたり、部、同好会の存続理由がないにも関わらず存在するもの、過激なものは強制解散させられる。

まあ、こういったことができるのも生徒会の権威が強力だからできることなんだが・・・。

家庭科室の前までやって来ると、赤羽さんが思い出したように俺に言った。

「あ、そうそう。有栖君は見学しておいて。来年の仕事の参考になるよ」
「え？来年？」

俺が聞き返すと、赤羽さんはさも当然といったように指を鳴らした。
「当然、君は来年は生徒会に入ってもらうから。あ、大丈夫、会長じゃなくて、私の後継だから」
「・・・何だか決まったように言ってますけど、選挙に当選しないといけませんよ」
だが、俺の言葉を予め予測していたのだろう。赤羽さんは、間髪いれずに言う。
「ああ、それなら大丈夫。書記は2人とも前任の推薦だから」
俺は、生徒手帳をめくって校則を確かめる。
ペラペラとめくっていると、生徒会に関する条項を見つけた。
「・・・そんな条項はないな」
「あるわけないじゃん、それに今年は私しか書記がいないから、無問題」
・・・既に決定事項か！？
冗談で言っているとは思えない赤羽さんの様子に俺は一抹の不安を覚えた。
衣先輩も、何も言わずただ俺を見て頷くだけだった。
「ええ、私としては会長になってもらいたいのですけど・・・仕方ないですわ」
溜息って、俺に何を期待してるんだ！？
今日ほど生徒会と関わったことを後悔したことはなかった・・・いや、後悔の連続だったような・・・。

「あ、そうだ。さっさと終わらせて3人で何か食べようか？」
「そうですわね。今日は、ケーキ食べ放題の日ですわ」
・・・俺は完全無視か？まあ、いいや。
俺は、開き直ると後ろで話している2人を無視して料理部が使用している家庭科室の扉を開ける。
「失礼します、生徒会です」
後ろでは、慌てた声がするが気にする必要はない。だが、俺が声をかけても奥から返事がない。
それよりも、中では大騒ぎをする声が聞こえ、何かが焦げた臭いがする。
そして、しばらく経ってからようやく中から、少し目に涙を浮かべて、ゲホゲホと咳き込みながら恵麻が出てきた。
「・・・はい、何の用ですか？・・・って、景君！？」
「なあ、恵麻。何があったんだ？」
何だかいつもよりも声ががらがらとしている気がするな。俺は恵麻の状態を心配するが、恵麻はただ苦笑いを浮かべるだけだった。
恵麻の顔を所々すすっぽくなっている所を見ると、近くで巻き込まれたのかもしれない。
・・・何が起こっているんだ？
「・・・藍羽さん、何があったのですか？」

そう思ったのは俺だけではなく、いつの間にか背後にいた衣先輩と赤羽さんも同じだったようだ。
恵麻と後ろの煙とを交互に見ながら疑惑の視線を恵麻に向ける。
その視線を向けられた恵麻は避けるようにちらりと後ろを見ると、何だか困ったようでとりあえず笑った。

「え・・・あはは・・・えーと・・・」

恵麻の反応を見た衣先輩たちは顔を見合わせると、恵麻を押しのけるようにして中へと入っていった。
残された恵麻は状況が理解できないようで、俺に聞いてきた。

「ねえ、景君。今日は、何で衣先輩たちが来たの？」
「ああ、今日から部活動調査だそうだ」

だが、恵麻はあまり興味はないようで、もう1度後ろを確認すると俺を上目遣いで見ながら言った。

「ふーん、そうなんだ。・・・あのね・・・景君。・・・クッキー焼いたんだけど、どうかな？」

もしかして、あの黒煙の原因なのか？
俺は、そんなものを食べさせられるかと思うと気が気ではなかった。
料理上手の恵麻がそんなヘマをするとも思えないが、どうも焦げた臭いが気になって仕方がない。

「・・・恵麻・・・一応聞くが、それは黒こげクッキーだとか言わないよな」
「そ、そんなんじゃないよ～」

恵麻は、ぷいとそっぽを向くが、ちょっと待ってて言うと中へと戻っていく。
そして、すぐに焼きあがったばかりであろうほんのりとバターの香りのするクッキーを持ってきた。クッキーは色々な形があり、星型や人型、犬やら猫の形のまである。
俺は、綺麗に焼けているクッキーを1つつまむと口の中に入れる。

すると、恵麻は期待をこめたように聞いてきた。

「ど、どうかな～？」
「やっぱりおいしいな。昔よりも、さらに上手になってるな」

俺が褒めると、恵麻は嬉しそうにはにかんだ。
しばらくの間、俺は恵麻のクッキーを食べていた。恵麻は自分のクッキーを食べることはなかったが、終始を俺の様子を見て嬉しそうにしていた。
だが、そんな平和なときは長くは続かなかった。

「あら、楽しそうですわね？有栖さん」
「うえっ・・・。げほっげほ・・・衣先輩・・・脅かさないでください」

背後から急に声をかけられ、俺は思わずクッキーを喉に詰まらせてしまった。
すぐに俺は喉に手を入れて、無理矢理吐き出す。
恵麻は、俺に駆け寄ると背中をさすりながら大丈夫と何回も言う。

それを見ていた衣先輩も俺のことを気の毒に思ったようで、俺の背中をさする。

「ご、ごめんなさい・・・。ところで、藍羽さん？私が有栖さんの看病はいたします。自分の不始末は自分で取りますわ」

だが、恵麻は全く引くことなく言い返す。

「ううん、いいですよ～。景君は私のクッキーを食べていたせいで、喉を詰まらせてしまったんですから」

やけに私のという部分を恵麻は強調する。

俺が、そっと後ろを向くと、ちょうど衣先輩はむっとした顔を恵麻に向け、しばらく2人とも睨みあった所だった。

挑発するような目つきの恵麻と、冷たい視線で見つめる衣先輩。何が原因か知らないが、非常に不穏な空気だ。

・・・喧嘩でもしていたのかもしれないな。

だが、いつまでもこの状況を放置するわけにもいかないよな・・・。さて、どうしたものか。

俺が、思案に耽っているとふと恵麻の焼いたクッキーが目に入った。その時、俺は妙案が浮かんだ。

「衣先輩、ちょっとこっち向いてください」

「何ですか？今忙しい・・・」

俺は、こちらを向いて文句を言って口の開いていた衣先輩にクッキーを突っ込んだ。

衣先輩は、当然むせた。俺の突飛な行動に恵麻はついて来れないようだし、衣先輩も涙目になって黙ってしまった。

だが、衣先輩はいつまでも黙っているわけもなく、戸惑いながらも

俺に理由を尋ねた。

「・・・何をするんです、有栖さん！」

「そろそろ次に行きませんか？」

俺が時計を見て言うと、衣先輩もはっと時計を見ると、慌てて立ち上がる。そして、スカートをパンパンとはたくと、恵麻に向き直り言った。

「・・・クッキーはおいしかったですわ」

「あ、ありがとうございます」

そして、衣先輩は恵麻のクッキーをもう1つつまむとそのまま外へ行ってしまった。

その背中に声をかけることのできなかった恵麻は、何が何だか分からず困惑したように俺に聞いてきた。

「ね、ねえ、景君。私のクッキーおいしくなかったのかな？」

「そんなことはないだろ。衣先輩は、おいしくないものは食べないからな」

恵麻は、俺の言葉を聞いてほっとしたようだった。

だが、俺は気になることがあった。そして、今を逃しては聞く機会もないだろうと思い、聞いてみることにした。

「恵麻、1つ聞きたいんだが、何で衣先輩と喧嘩していたんだ？」

それは、先程俺が喉にクッキーを詰まらせた時のことだ。

そもそも、俺が喉を詰まらせたことで2人が喧嘩する理由が俺には

よく分からない。
悪いのは、喉に詰まらせた俺であって2人ではないはずだからだ。
「あ、えーと・・・それはね・・・」
恵麻が口篭るので、野暮かもしれないが俺はますます内容に興味を持った。
そこで、促すように聞いてみる。
「それは？」
「あー・・・うううっ・・・」
だが、段々と恵麻の言葉が言葉として怪しいものになってくると、むしろ俺は心配になってきた。
そして、恵麻が顔を真っ赤にして俯くと、悪いことをしているような気分になってしまった。
「恵麻、悪かった。言いたくないことは誰にでもあるよな。・・・そろそろ俺行くな。邪魔して悪かった」
最後にもう1度恵麻に謝ると俺は扉を開けようとした。
すると、恵麻が後ろから慌てたように声をかけてきた。
「景君、ちょっと待って。・・・よかったら一緒に帰ろうよ」
熱でもあるのか？俺は、珍しい言葉に思わず自分の耳を疑った。
思わず振り返ると、視線を忙しなく動かし挙動不審気味な恵麻がいた。
「そうだな。たまには、いいかもしれないな」

「よかった～。・・・あれ、何か引っ掛かるんだけど？」
今日の恵麻はいつもに比べておかしいような気がする。
何かを焦っているような・・・そんな感じを受ける。
俺が恵麻に声をかけたときだった。
「なあ、え・・・」
外から衣先輩が大声で呼ぶ声が聞こえた。何となくだが、声から察するにイライラしているように感じる。
「有栖さーん、行きますわよ！」
「あ、悪い。そろそろ行くな。俺、仕事中だから。あとで、連絡するから。じゃあな」
俺は、恵麻に手を挙げると家庭科室を後にした。
そういえば、手伝いに来ていたんだったな・・・。恵麻と話していたらすっかり忘れていたなどと・・・言えるわけがない。
さて、何と言い訳するべきだろうか？

「恵麻と話していたら、遅くなってしまいました」
「・・・この際だから、はっきりと言いますわ。きちんと仕事をしていただかないと困ります」
「すいません」

・・・俺が謝る必要があるのか？
衣先輩に怒られながら、ふと思った。

そして、衣先輩は俺を一通り叱ると、そのまま歩き出した。
その背中を見ながら、やはり俺は釈然としなかった。既にこのことを忘れているかのように、赤羽さんと談笑しながら歩いていた。

「・・・」

衣先輩に文句すら言えない自分が情けなく感じる。こっちを向いているわけでもないのに・・・。
俺は、少々鬱になりながら前を歩く2人の背中を追った。

「まったく・・・世の男性は料理が出来る女性を好むものなのでしょうか？」
「さあ？でも、料理はできて損はないよ」
「確かに手作りの力は違いますものね」
衣の話を聞いていた赤羽は思った。
確か、衣の料理の腕は壊滅的だったなと。
味見とかさせられないといいな、彼女がそう思ったことを悦に浸っている衣が気付くことはなかった。

第３２話：部活動調査　後編

「次は、バスケット部ですわ」

衣先輩の一言でやって来た体育館。
中では、男女のバスケ部が練習をしていた。
俺たちの学校のバスケ部は、正直に言うと全国なんて夢のまた夢。
万年１回戦敗退という弱小チームなのだった。
だが、それも昔の話。４年前に全国大会に出場して以来、以前は共用だった体育館も丸々１つ使っており、過去４年で２度出場という強豪校となっている。

「失礼します、生徒会です」

衣先輩が、そう言うと近くにいた数人がこちらを向き、慌てて部長らしき人を連れてきた。
だが、その連れてこられた部長２人も、互いに顔を見合わせ、怪訝そうな顔をしていた。
普段であれば、まだ部活動調査の時期ではないからな。あとは、部員の不祥事か、金銭問題しかないだろう。
その両方とも当てはまることがないのだろう。妙に尊大な態度で、女子バスケの部長が言った。

「ねえ、衣。何の用？」

明らかに用事がないなら帰れって言ってるよな・・・。
この先輩は確か良家のお嬢様だとか由真が言っていたな。生徒会長

選挙で負けて以来、衣先輩とはあまり仲がよくないと聞いた事がある。
自分のプライドが許さないという理由らしいが、要は衣先輩をライバル視しているということなのだろう。

衣先輩と、無言で睨み合う先輩を見ていると、似たもの同士だから仲が悪いのだろうとふと思う。
しばらくそのまま睨み合って2人だったが、衣先輩が先に視線を逸らすと溜息をついた。

「別に大した用事ではないですわ」
「だったら帰ってくれる？邪魔だから」

・・・本当に嫌っているんだな。
俺が、隣にいる赤羽さんを見ると、視線に気付いた赤羽さんは俺の小声で囁いた。

「あれでも、仲いい方なんだよ」

「嘘はいけないわ」
「デタラメを言わないで、赤羽」

ひそひそと小声で言ったのだが、どうやら2人とも聞こえたようで同時に反論された。
赤羽さんは2人の反論を聞く様子もなく、俺にウィンクすると言った。

「ね？」
「ね？と言われても困るんですけど・・・。どう見ても仲が悪いと思うんですけど」

俺は、見たままのことを言うが、赤羽さんは分かっていないといった様子で肩をすくめた。
２人が相変わらず何やら言い合っているにも関わらず、仲がいいと言う赤羽さんの言葉は信じられないが、衣先輩とは俺よりも付き合いが長いらしいので、たぶんそうなのだろう。
だが、未だに言い合う２人を見ている限りでは・・・信じることは難しい。

「はあはあ・・・しつこいですわ・・・」
「・・・そっちこそ・・・しつこいわね・・・」

１５分ほど２人は口喧嘩を続けていたのだが、ようやく落ち着いたようで２人とも座り込んでいた。
ああ言えば、こう言うといった感じで、休むことなく言い合っていれば疲れるのは当たり前だし、そもそも１５分も続いたものだと感心してしまう。

衣先輩たちが静かになると、体育館に響くボールの音やシューズの擦れる音が聞こえ、視線を目の前のコートに移すと、男女共に３ｏｎ３をしており、その中には由真の姿もあった。
相手と握手をして、コートの外に出て行き、別のグループが入ったのを見ると、どうやら休憩のようだ。
タオルで汗を拭くと、ペットボトルの飲み物を豪快に飲んでいた。・・・周りが呆れてるぞ。
由真は、全く気にしていないようで、友人と話をしていたが、どうやら俺に気付いたようで、こちらにやって来た。

「あれ、景。こんな所で何してるの？」
「衣先輩の手伝いだ。まあ、先輩がこんな状態だから、少し由真のバスケの練習を見ていたんだが、よく考えれば初めて見るんだよな。由真がバスケしている所は」

俺はふと由真を見ながら、ふと思う。
1年の頃は、俺と由真は違うクラスだったために体育でバスケはあったものの、実際にしている所を見るのは初めてのことだった。
恵麻の親友ということもあって話をするようになり、友人と呼べるくらいの仲になったあとは、休日に幸樹や晃も誘った5人で遊ぶことも多く、それなりに色々な所へ行った事もあるはずなのだが、思ったよりも知らないことが多いのだと改めて知った。

「景、何？あたしの顔をまじまじと見て」

俺は意図せず由真の顔をじっと見ていたようで、由真に不審そうな顔をされてしまった。
まあ、誰だってじろじろと見られればいい気はしないだろう。

「・・・いや、頑張っているんだなと思っただけだ」

だが、そんなことで誤魔化せるわけもなかった。
由真は、意地悪い笑みを浮かべると俺のわき腹を肘で突きながら言った。

「で？本当は何で見てたの？・・・もしかして・・・惚れた？」
「それはない」
「何だ、残念だねえ」

冗談で言っていることくらい、表情を見ればすぐに分かる。由真は、本人は気付いていないようだが、非常に表情に表れやすいタイプだ。だから、冗談か本気かはすぐに見分けることができる。

由真は、俺がきっぱりと否定するとつまらなさそうにしていたが、やがて何かを思いついたようにボールを持ってくると言った。

「あ、そうだ。ちょっとあたしと勝負しない？」
「・・・バスケか？」
「もちろん、１ｏｎ１で」

この後、紆余曲折の末、俺は由真と勝負する羽目になった。
俺は、最後まで反対し続けたのだが、周りがそれを許してはくれなかった。
喧嘩しているはずの衣先輩と部長も賛成し、仲良く勧める始末。

「有栖さん、負けは許しませんわ」
「上総野。バスケ部の力、見せてあげなさい」

赤羽さんが言っていたことは、このことだったのかと今更ながらに俺は理解したのだった。

そして、俺は今コートに立っている。
ユニフォームを貸そうかとも言われたが、本気でやるわけでもないので断った。
おかげで、制服のままコートに立っているという状態だ。

「じゃあ、景からどうぞ」

由真からボールを渡され、俺はいきなりシュートを打とうかと思ったが、さすがにふざけすぎかと思いやめておいた。
両手を大きく広げた由真は、俺の動きを真剣に見ており、素人の俺にはとても抜ける気がしない。

「・・・」

一応、スリーポイントラインからというハンデはもらっている。
由真も手を抜いているようで、あまり近くに寄っては来ない。

「景、何やってんの？さっさと来ないとこっちから行くよ？」

由真は無駄口を叩く余裕すら見せるが、対する俺は突破口を未だに見出せずにいる。

「有栖さん、さっさと打ちなさい」

外野では、衣先輩が未だに由真に突破すらしようとしない俺に痺れを切らしたように叫んでいる。
俺は、スポーツ万能、成績優秀というわけではない。ごくごく普通の人間でしかない。

・・・もしも、努力無しで才能溢れる奴がいるとしたら、思いっきり殴ってやりたいものだ。

俺は、２度ボールを床につくと、呼吸を整えると、シュートの構えに入った。
元々、俺は素人だ。バスケなど、授業でしかやったことはない。
だから、イメージだ。とにかく、ボールがゴールに入ることだけをイメージしろ。

やる前から、失敗すると考えたら、成功するものだって成功しない。
由真は、俺がシュートの体勢に入っても特に近づいてくる様子はなかった。
それどころか、欠伸を1つすると馬鹿にしたように言った。
「まあ・・・どうせ入らないだろうし、景打ってごらんよ」
俺は、由真の言葉を聞き流し、もう1度ゴールだけを見据える。
そして、ボールが俺の手を離れた。
由真は、ゆっくりとボールの行方を確認しながら、ゴール前へと移動する。
俺もシュートと同時に駆け出したが、距離に差があり間に合いそうにない。
だが、ボールは放物線を描くと、そのままゴールへと吸い込まれた。
「あ・・・」
ピーッ。
部長の笛の音が体育館に響き渡った。
唖然として俺を見る由真の後ろでは、ボールが無慈悲にも転がっていた。
・・・もしかして、勝てるのか?俺は、少しだけ淡い期待を持った。
「いやあ、参った、参った。あたしとしたことが景を下に見すぎた

なあ」

由真は、俺の肩を叩くと少し後悔したように言った。
素人相手に油断から1ポイント取られたことが、相当悔しいようだ。

結局、あの後、俺は由真に完敗を喫した。
さすがに本気になった由真に敵うわけもなく、1－3で負けてしまった。
やはり、期待なんてするもんじゃないよな・・・。

「あれだけ圧倒しておいて・・・そう言うか？」

だが、首をひねる俺にボールを拾ってきた部長が、そのボールを抱えながら言った。

「あなたは確か帰宅部だったわね。上総野が油断していたとは、頑張ったと私は思う。1年の頃からバスケをしていれば、もう少しまともな勝負になったでしょうね。もし、よかったらバスケ部に入ってみない」
「いえ、遠慮します」
「そう、残念ね。でも、いつでも私も、男子の部長も待ってるから」

俺が、誘いを断ったのには、きちんとした理由がある。
バスケ部は、校内でも練習量が多いことが有名な部活で、毎年20人以上は入部するのだが、半数以上は、その練習の厳しさのせいで辞めていくという。

残念そうな部長たちに別れを告げ、俺たちは次に目的地である校庭へと向かった。

衣先輩と赤羽さんは、何やら楽しそうにデザートの話をしながら俺の前を歩いている。

一方の俺はというと「・・・あー、体がだるい」と少しバスケをしただけで体が重くなったのを感じていた。

「ねえ、衣。この前、うちの近くに新しくケーキバイキングの店がオープンしたから行ってきたんだけど・・・あんまりおいしくなくってさ」

「そこは、前から安いだけでおいしくないと言ってますわ。やはり、駅前の所が安くておいしいわ」

「だよねー」

女が甘いものが好きだというのは、偏見に過ぎないだろうが、少なくとも前を歩く2人は好きなんだろうな。

その割には、あまり太ったようには見えないんだが・・・。2人ともスレンダー・・・。

・・・何を考えているんだ、俺は。

余計な事まで考えそうになり、俺は慌ててその妄想をかき消す。

すると、突然ポケットの中で震えた携帯を取り出すと、俺はディスプレイを見た。

そこには恵麻の名前が出ていた。どうやら、俺にメールを送ってきたらしい。

俺が、メールを見ようとすると、横に誰かがいる気配を感じた。

「藍羽さんからね。何かしら？」

「何、勝手に覗いているんですか？」

スレンダー・・・じゃない、衣先輩だ。
先ほどの件もあるのだろう。興味深そうに俺がメールを開くのを待っている。
その興味津々な視線に耐えられず、俺はその視線を避けるために反対側に体を向けた。

「私のこともお構いなくー」
「・・・プライバシーって言葉知ってますか？」

だが、見られて恥ずかしいようなメールを恵麻が送ってくるわけでもないので、そのまま俺はメールを開いた。

メールの内容は、もう部活が終わったので、待ち合わせはどうしようかという内容だった。
結局、あの黒煙騒動で部活は中止になったようだ。

さて、どうしようかと俺が悩んでいると、隣からわざとらしく咳払いが聞こえ、何かと思いそちらを見ると、ぎこちない笑顔の衣先輩がいた。

「・・・今日は、私たちと遊びに行く約束をしていたはずよね？」

何とか理性で笑っているのだろうが、その笑顔は今にも崩壊しそうだった。
俺は、それに対して「・・・あ」と間抜けな声を出すのがやっとだった。

赤羽さんは、困った俺を見て笑っているが状況を楽しんでいるようだ。

だが、俺は冷や汗が止まらない。そういえば、何の気もなしに恵麻とも一緒に帰るなどと約束していたのだ。
・・・これは、所謂ダブルブッキングだよな。何も考えていない自分が一番悪いことは分かっているが、どうするべきだろうか？
俺は、しばらく考えた末に衣先輩にこう切り出した。
「・・・恵麻も誘って構いませんか？」
「別にいいですわ」
無表情で言われると、むしろ恐ろしいのだが、とりあえず許可が下りたことにほっと胸をなでおろす。
そこで、俺は恵麻に連絡を取り、恵麻は快く了解してくれたので特に問題になることはなかった。
・・・持つべきものは理解力のある幼馴染だな。

数分後、恵麻がやって来ると、俺はまず恵麻に謝った。そして、衣先輩や赤羽さんにも同じように謝罪をした。
「もう怒ってなんていませんわ」と衣先輩も許してくれたので、俺も一安心だった。
すると、恵麻は何度か俺の様子を見ると、言いにくそうに話を切り出した。
「あ、あの・・・景君。言いづらいんだけど・・・私、今日あまりお金ないんだ・・・」
すると、衣先輩は恵麻に近づくと俺のほう見ながら言った。
「大丈夫ですわ、藍羽さん。今日は、元々有栖さんの奢りですから。

そうですわよね、有栖さん？」
「そうなの～、景君？」
・・・そういうオチなのか！？俺は、財布の中身を考えるが、諭吉は1人いたくらいだったような気がする。
あとは、漱石が1人か2人ほど。
「赤羽さん、今日行くところは1人いくらなんですか？」
「おっ？奢る気満々だね。確か、女の子は２５００円。男の子は３０００円だったよ。ああ、これはね・・・普通のバイキングだから。今、ヘルシーだって人気なんだよ」
その言葉を聞いた俺は諭吉が天に召される姿が容易に想像できた。でも、ここで奢らないと言うのもかっこ悪いよな・・・。俺の中では、正直に無理だと言えという天使と、おとなしく奢っておけと言う悪魔が対立し、葛藤が続くが、結局悪魔が勝ってしまった。
そこで、俺は半ば自棄を起こして言った。
「分かりました、3人まとめて奢ります」
「では、野球部を調査したらすぐに出かけますわよ。各自、家に連絡しておいてくださいね。赤羽さん、有栖さん。行きますわよ」
その後、野球部の調査中にこのことを幸樹に愚痴ると、馬鹿にしたようにこう言われた。
「そりゃあ、景。はっきりしないお前が悪い」
・・・そうだよな。

「有栖さん、ぼーっとしてないで行きますわよ」
「分かりました、すぐ行きます」
衣先輩の俺を呼ぶ声に幸樹は、「まあ頑張れ」と苦笑いを浮かべた。
俺は、「じゃあな」と幸樹に別れを告げ、歩き出した。

食事はそれなりに楽しいものだったが、家に帰り財布の中身を見たとき、何か悲しい気分に陥ってしまった。
バイトの給料日までは、まだ日がある。

「・・・財布に１００円もないとは、どういうことだ？」

実は、漱石は１人も財布にはおらず、５００円玉しかなかったのだ。
何とか足りたことにほっとしたのだが、明日からどうするべきかと思い悩んでしまう
食事代は、別にあるから問題はない。だが、遊びに使うお金はもう０だ。

財布を逆さにして振ってみても落ちてくるわけもなく、俺は机に財布を放り投げた。
そして、ベッドに倒れこみ天井をぼーっと見つめていると、扉をノックする音が聞こえ、エリスが入ってきた。

「景様、実はゴールデンウィークなのですけど、お時間がありますか？」
「特に何も用事はないが、何かあるのか？」

俺が聞き返すと、エリスは立ったまま話そうとするので、座るように促すと座布団の上に座ると、改めて話を始めた。

「実は、その日に私のメンテナンスのために会社から2人ほど開発部の方が来ますので、是非会っていただこうと思ったものですから」

「それは、この前来た、あの人もいるのか？」

俺に質問に一瞬エリスは言葉を詰まらせた。

それを見ただけでも、あの人が来ることだけはよく分かった。

エリスは、俺の不安を取り除こうと笑顔を作ると言った。

「で、でもただのメンテナンスですから、すぐに終わりますよ」

本当にそうだといいだが・・・。

それはエリスも同じようで、どこか不安に思う部分があるのだろう。

いつもに比べ、笑顔がぎこちないように思えた。

何故、わざわざ休日に訪問までしてメンテナンスをするのだろうか。

もし、エリスに深刻な故障があるのなら、会社に持っていくはずだ。

それに今までは、週1で会社でメンテナンスを行っていたのだ。

何かまた面倒なことを持ち込む気ではないかと邪推してしまう。

・・・嫌な予感しかしないんだが。・・・。

すると、俺の考えを見抜いたかのようにエリスが言った。

「景様・・・逃げないでくださいね」

「分かった、家にいればいいんだよな」

どうか、普通のメンテナンスでありますように・・・。
俺は、密かにそう願った。

第３２話：部活動調査　後編（後書き）

本編後の雑談　由＝上総野　由真　恵＝藍羽　恵麻　大＝五味　大助　晃＝綿野　晃

由「今考え付いたんだけどさ、学校に来て授業聞いていないのと、学校に来ないのって一緒だよね？」
恵「そ、そうかな～。私は聞いていなくても、来たほうがいいと思うよ。だって、少なくとも友達には会えるよ」
由「でも・・・友達いなかったらどうするの？」
恵「・・・それでも、来たほうがいいよ～。でも、いじめられたら嫌だよね・・・」
由「大丈夫だって。恵麻をいじめる奴は、あたしがぶっ飛ばすからさ」
恵「由真ちゃん・・・ありがとう。私も由真ちゃんが困ってたらいつでも助けるからね」

大「・・・フラグ立ったか？」
晃「何か違うと思うんだけど・・・」

今週は、忙しくなって更新が遅れたことをお詫びいたします。
来週からは、基本的に木曜更新にします。余裕があれば火曜にも更新するかもしれません。

第３３話：ラブレター・ストラグル　前編

夕暮れ時の屋上に２人の学生が立っていた。
１人は、女子。もう１人は男子。
男子の方は、夕陽に照らされ顔が真っ赤に染まっていた。もちろん、理由はそれだけではないのかもしれない。

「藍羽さん、君のことがずっと好きでした。僕と付き合ってください」

そう言うと、彼は頭を下げる。
彼は、試験でもいつも１桁をキープし、男子バスケではレギュラー。その上、イケメンと評判が高く、女子の人気はそれなりに高い方と言える。
彼自身、容姿には気を使っており、自信を持って告白したのだ。当然ＯＫのはずだ、彼はそう思っていた。
だが、彼女は迷うことなく言った。

「ごめんなさい、私好きな人がいるんです」

はっきりと断られ、がっくりとしたのかもしれない。
彼は、最後に１つだけ聞いた。

「それって、有栖か？」
「・・・」

その質問に彼女は答えることはなかった。ただ、
彼は、それを無言の肯定として受け止めた。
しかし、どうしても納得できなかったようで、彼女に詰め寄りなが

ら言った。

「どうしてさ！あいつのどこがいいのか、答えてくれ！頭も僕の方がいいし、運動だって・・・」

「・・・一生分からないよ、あなたには」

彼女は彼の言葉を遮ると、怒気を含んだような言葉を言い放った。そして、彼の方を振り向くことなく校舎の中へと消えていった。残された男子は、しばらく呆然と彼女が消えた入り口を見ていたが、やがて肩を震わせると、ぶつぶつと何か話し始めた。

「・・・有栖　景。あいつだけは・・・。今に見てろ・・・あははははっ！！」

その日、多くの学生が構内中に響き渡る不気味な笑い声を聞いたという。

ある人は言った。

「・・・やっぱりね」と。

またある人は言った。

「・・・自分大好き人間だもんな、あいつ」

一方、景はバイト先で吉田と話をしていた。

「・・・くしゅ・・・風邪か？」

「風邪なら、少し休んだほうがいいんじゃないか？」
「いえ、たぶん誰かが俺の噂をしているんですよ」
「ならいいけど・・・風邪は早めに治したほうがいいぞ。僕が風邪を引いたときなんて、彼女がずっと来たんだから・・・困り者だよ。」
「それ、彼女のいない俺に対する当て付けですか？」
「まあ、話の続きを聞け。それでな、僕は2日ほどで完治したんだが、今度は彼女が風邪を引いてね・・・。近くにいないとうるさいんだ。おかげで3日ほど潰したよ」
彼女の文句を言う割には、どことなく楽しそうに言っているなと景は感じた。
そして、時計を見てそろそろだなと思う。その彼女が来るの時間は、と。
「工、もう終わった？ちょっと早いかなって思ったけど、何だか会いたくなって来ちゃった」
そう言ってふんわりと微笑む彼女に、吉田はバツが悪そうに頭を掻くと、周りを1度見ると言った。
「・・・あと10分だから、中で大人しくしてて、な？」
「・・・吉田、女を連れ込むのは結構なんだが、今は客もいるから。それとも、クビになるかい？」
店長の視線が、冷たく吉田を射抜く。とは言っても、このカップルはバイト先でも公認で、特に店長はとやかく言うわけではない。ただ、客がいるから怒っただけなのである。
店長は、190も身長があり、何のスポーツをやっていたのかと思うほど体格がよい。顔も強面で、店長がレジにいると売り上げが3

割落ちると言われている。
そんな男に睨まれれば、萎縮せざるをえないだろう。
しかし、ここの常連はいつものことと孫を見るような視線を送っている。こんなことは日常茶飯事なのだから。
それに店長は、見た目ほど怖い人間ではないのだ。それは本人の言うことであり、本当はどうであるかは謎なのだが・・・。
店長は、1通り吉田を注意すると、奥に下がっていった。
その背中を視線だけで追いながら景は疑問を持った。
・・・連れ込むのも駄目だろ、と。
そんなこんなで景の1日は終わりを告げた。

「・・・」
今、俺は下駄箱の前で固まっている。
上履きがなくなったとか、泥団子が詰め込まれているとかそういうことではない。
白い平たいものが、下駄箱に入っていたのだ。
だが、俺にはそういうものを入れられる心当たりが全くない。
・・・ラブレターだとしたら、嬉しいのだが・・・エリスの件があるから何とも言えない。
無視しようかとも思うが、名前が書いてあると厄介だよな・・・。

しばらく考えていると、外履きのまま下駄箱の前で突っ立っている俺を心配した恵麻が後ろから声をかけてきた。

「ねえ、景君。どうした・・・の」

そして、ロッカーを覗き込むと、俺と同じ様に固まった。

「・・・何だろうな、これ」

「・・・何だろうね、これ」

2人揃って顔を見合わせるが、答えが出るわけではない。

しばらく黙ってその手紙を見ていた俺たちだったが、恵麻が笑いながら冗談っぽく言った。

「・・・ラブレターだったりして」

「だったらいいけどな」

俺も冗談めかして返すと、恵麻の表情が少し曇ったような気がした。

とりあえず、手紙を回収すると俺と恵麻は教室へと向かった。

ホームルームが終わり、俺が1時間目の準備をしていると、幸樹が俺のところへとやって来た。

「景、ラブレター貰ったってのは本当なのか？」

さらに恵麻から聞いたであろう由真が幸樹を押しのけて興味津々といった様子で俺を覗き込む。

恵麻は、ごめんねと後ろで手を合わせていた。

「へえー、誰からなわけ？」
「さあな」
俺が適当にはぐらかすと、由真は俺が手に持っている手紙に目をやった。
そして、いきなり奪い取ろうと手を伸ばすが、俺はその手を叩き落とす。
「俺もまだ見てないのに、何故見せる必要があるんだ」
そう言いつつも誰からなのだろうかと期待しながら手紙の封を切った。
そして、手紙を見た俺は・・・凍りついた。
「・・・見てくれ」
俺が、手紙を皆に見せると、皆あからさまに視線を1度逸らすと、もう1度その手紙を凝視した。
・・・期待した俺が馬鹿だった。
俺は、その手紙をもう1度見る。
今日の放課後、体育館裏で待っています。
文だけを見れば、ラブレターにも見えるかもしれない。
だが、その文章は何か雑誌や新聞を切り抜いて出来ており、脅迫文のようにしか見えない。
何だか疲れが出てきた俺は、背もたれに寄りかかると静かに目を瞑った。

瞳を閉じる前に見えた皆の同情の視線を俺は忘れない。

「・・・まあ、こういうこともあるさ。な？」

「け、景。元気出しなってば。そのうちいいことあるって」

「景君、ショックな気持ちは分かるよ。そのうち景君のことを分かってくれる人が現れるよ～」

俺は、心の中で涙を流した。

無理に慰めてくれるから、余計に悲しくなったと言ったら失礼だろうか。

そして、昼休みに入り、俺は例の手紙を持って下駄箱にやって来た。

辺りを見回すと俺は、そっとある下駄箱に手紙を入れておいた。

幸い、誰宛か書いていなかったので、悪戯でもしようと考えたのだ。

「・・・無かった事にすればいいよな」

自分にそう言い訳しながら俺は下駄箱を後にした。

放課後、神代　竜馬は憂鬱な気分で歩いていた。

最近彼はスランプに陥っており、試合で結果が出ないことを悩んでいるのだ。

今日は練習が休みのために、することのない彼は溜息を1つつくと下駄箱から靴を取り出す。すると、一緒に手紙が彼の足元に落ちた。

それに気付いた彼はその手紙を拾い上げる。

「何だ、これは・・・。ま、まさか・・・これはラブレター・・・なのか？」

彼は、期待しながらその手紙を読み始めた。
だが、その手紙を一目見ただけで、黙って破り捨てた。

「どこの馬の骨かは知らんが、ふざけた真似を・・・」

彼は、破り捨てた手紙をゴミ箱に捨てると、一目散に駆け出した。
そして、体育館裏への曲がり角にたどり着くと、ふと何か思いとどまったように立ち止まった。

彼は、不穏な気配を感じると竹刀を構え、角を曲がった。

「・・・誰もいないようだ。ちっ、いたずらか」

彼がそう思って、踵を返したときだった。
背後から、奇声と共に誰かが草むらから飛び出してきた。

「お前だけは、許さん！死ね・・・」
「・・・単純な奴め。わざと背を向けたのにも気付かないとは」

そう言うが、竹刀で思い切り頭を殴ってしまい、気絶している相手を見て彼は内心大人気ないと反省する。
まあ、保健室に連れて行けばいいだろうと安易に考える。
そして、彼は両手を合わせると静かに一礼をした。

「成仏してくれよ。貴様の死は無駄にはしない。・・・何だかすかっとしたらまたやる気が出た来た！今日も帰ったら瞑想だ！」

足取り軽く去っていく竜馬だが、すっかり相手のことなど忘れ、そのまま放置してしまっていた。
気絶した彼が自力で起きるまで2時間。この間誰も気付くことはないのである。

さて・・・神代は一体どうしただろうか？
俺は、ふと手紙のことを思い出しながら坂を下っていた。犯人を捕まえるチャンスとは思うが、俺が行っても返り討ちになる可能性が高い。
もし、仮に女だったとしても、あんな手紙を出すのとは、高校生活を棒に振っても御免だ。

まあ、あのことはもう忘れよう。
今はこっちの方が問題かもしれない。

「景先輩、聞いたよ。ラブレター貰ったんだって？で、相手はどんな子だった？美人？それとも可愛いかった？」

先程から、梓依が手紙のことでやたらとうるさい。
美玖は、自分から聞こうとはしないが俺が話すのを待っているように思える。

「あ、わ、わたしは聞きたいなんて思ってませんよ？」

そう言って視線を逸らしてもバレバレだ。
美玖は、俺と目を極力合わせないようにしながらも、俺の顔色を伺っている。

これ以上しつこく聞かれるのも、傷口を広げそうだよな。
そう俺は判断すると、素っ気無く言った。

「・・・いや、会ってもないし、そもそも手紙はもう捨てた」

・・・他人の下駄箱にな。
すると、美玖と梓依はまるで女の敵でも見るような目で俺を見た。

「け、景先輩・・・。女の子の気持ちをそんな風に踏みにじるなんて・・・」
「うわ・・・それはないよ、景先輩」

説明の仕方、間違えたか？
俺は、数歩離れて軽蔑した視線を送る双子にもう1度説明した。

「・・・手紙の中身を見れば、誰でも捨てるさ」

ふと、あの手紙を思い出し俺は空を見上げる。・・・初めて貰ったラブレターが、脅迫文だとは笑うしかない。
自ら、傷口に塩を塗るような真似するからだろう。何だか目頭が熱くなってきたように思える。
そんな俺に美玖はハンカチを差し出した。

「あ、あの・・・よかったら使ってください。・・・景先輩、泣いていますよ」
「・・・悪いな・・・ありがとう」

しばらく手紙なんていらない。この時俺はそう思った。
ハンカチで涙を拭うと、梓依も心底同情したように溜息を吐いた。

「あはは・・・それはがっかりするよね」
それから、しばらく誰も口を開こうとはしなかった。ただ3人で黙って坂を下っていく。
何か話すべきとは思うが、急に明るい話をしても無理していると思われるのが関の山だ。
こういう時に、ショックを見せずに話ができればいいんだがな・・・。
結局、重苦しい空気の中、駅前まで来ると俺は美玖に言った。
「ハンカチは洗って返すから。・・・ありがとう」
「い、いえ。そこまでしてもらわなくても・・・」
「それに、2人とも悪いな。わざわざ気を使わせて。でも、明日からはいつもの俺に戻るから、いつも通りまた話が出来るはずだ」
気分が少しは晴れたのは、きっと2人が会話をしてくれたからだろう。
悩んでいても仕方のないことだよな。もう、散々悩んだんだ。これ以上、引きずる必要がどこにあるだろうか。
よく考えれば、こんなことで暗くなるのは俺らしくもない。
俺が、手紙のことを吹っ切ると、待っていたように梓依が言った。
「少しどこかに寄って行こうよ」
「景先輩も一緒にどうですか？近くにおいしいクレープ屋があるそうなんです」
特に予定があるわけでもないからな。

クレープ屋か・・・。

「よかったら、俺に奢らせてくれないか？」
「えっ、ありがとう。景先輩」
「い、いいんですか？」

美玖と梓依は、俺の言葉を好意的に受け取ったが、俺としては、むしろお金で解決しようとしている気がした。
それでも、一応喜んでくれているだけいいか。

「景先輩、ごちそうさまでした」
「また明日、学校で」

駅前に車を待たせていた2人は、そう言って車に乗り込んだ。
俺は、俺は2人を見送ると、残ったクレープを食べ、ゴミを捨てると改札を抜ける。
そして、ホームに着くと、ちょうど電車が出発した所だった。
次の電車の時間を確認すると、思わず溜息が出る。

「・・・10分待ちか」

俺は、ベンチに座ると電車が来るまで、ぼーっと待つことになった。

改札を抜け駅を出ると、空がすっかりと厚い雲に覆われていた。
一雨降りそうな気がし、早く帰ったほうがいいと足を早めて商店街を通り抜け、近くの公園に差し掛かった。

すると、偶然にも前を歩いているエリスを見つけた。
俺は、そっと近づくと後ろから声をかけた。

「エリス、買い物か？」

驚かそうと、急に声をかけたはずだったのだが、エリスは特に驚いた様子もなくまるで家にいるかのように答えた。

「あ、景様、おかえりなさいませ」
「ただいま、と言ってもまだここは家じゃないけど」

俺までつい家にいるような気分で、返事をしてしまったが、ここはただの路上。
道端でこんな会話をしているなんて、どこの新婚さんだ、俺たちは。
ああっ！くだらない。俺は頭の中からその考えを消し去る。

「・・・景様、何だか顔が赤いですよ？」

エリスに指摘されたことは事実だが認めたくはない。俺たちが新婚みたいだと考えていたなどと言えるわけがない。言ったら、ただの痛い人、酷い妄想でしかない。
俺はそれを隠すために、話を逸らす。

「エリス、荷物重いだろ。半分持つぞ」

エリスはどうせ自分で全部持つと言うに決まっている。
だから、俺はエリスが左手に持っていた袋を奪うと、さっさと歩き出した。
荷物を奪われた時、何故か小さく「あっ」と言ったエリスは慌てて

俺の後を追い、横に並ぶと俺の顔を心配そうに覗き込んだ。

「・・・それ、卵が入っているんです」

「・・・・」

俺は、もう1度自分が持っている袋を見た。

・・・自業自得、小さな親切、余計なお世話・・・。そんな言葉が頭をよぎった。

家に帰り中身を見ると、2個ほど卵が割れていた。

それを見た母さんに高2にもなってまともに買い物もできないのかと、窘められた事は言うまでもない。

・・・最悪な日だったな、今日は。

第３３話：ラブレター・ストラグル　前編（後書き）

本編後の雑談　エ＝エリス　景＝有栖　景

エ「おかけになった電話番号は現在使われておりません」
景「誰からの電話なんだ？」
エ「・・・マンション買いませんかというお電話でした」
景「ところで、さっきのは何の真似なんだ？」
エ「はい。電話のアナウンスの真似です」
景「・・・随分と多芸なんだな」

第３４話：ラブレター・ストラグル　中編

「・・・またか」

俺は、今日も下駄箱の前で固まっていた。
下駄箱の中には、昨日と同じ様に手紙が入っていたのだ。
何の偶然かは知らないが、封筒が同じものだった。・・・また同じ人物からだろうか。
何だか、デジャブを感じてしまう。
恵麻も同じように感じたようで、俺を見て苦笑いを浮かべる。

「景君・・・今日もなんだ・・・」

とりあえず、中身を見てから捨てるとするか。

ホームルーム後、今日は昨日の３人に加えて晃も俺の所へ集まっていた。
理由は、言うまでも無い。２日続けて下駄箱に手紙が入っていた俺のことを皆気にしているのだ。
そして、皆が集まると、由真が気の毒そうに俺の肩を叩く。

「景、またなの？今日は、捕まえたほうがいいんじゃない？あたしでよければ手伝うから、いつでも声かけなよ」

由真の言葉に、幸樹や恵麻、晃も同じ様に頷いた。
・・・まだ、今日はそうと決まったわけじゃないんだが。俺が、複雑な表情をしていると、気がついた由真が尋ねた。

「で、今日の手紙はどうなわけ？」
「今日も宛先も本人の名前もないからな。悪戯じゃないのか？」
俺は、表向きにはそう言ったが、内心今度こそは本物ではないかと期待していた。
そして、封を切るとその中には手紙が2枚ほど入っていた。

「・・・」
「景、やっぱり今日も・・・って何だ、これ？」
俺の背後から手紙を覗き見た幸樹もまた訝しげに手紙を見つめる。
とりあえず、俺は机の上に手紙を広げた。
皆が手紙を覗き込むが、一様にその表情は硬い。
いや、むしろ俺のこと哀れんでいるようにも見える。

「景ってさ、面白い人に好かれるんだね」
「・・・言うな」

由真の言葉が胸に突き刺さる。
改めて、手紙の内容を見ると、1枚目は普通に書かれた文章。2枚目は数字の羅列だった。
とりあえず、こういうのは晃が詳しいと思われるので聞いてみる。

「晃、これを見てどう思う？」
「少なくともこんな人とは付き合いたくないと思う」
だが、晃は質問の意図を理解していないようだった。
・・・俺の質問の仕方が悪かったのかもしれない。俺は気を取り直し、手紙を手に取って見た。

手紙の１枚目には、こう書かれていた。

『初めまして、有栖　景さん。突然の手紙で戸惑っているかもしれませんが、お話したいことがあります。放課後４時（１２０度）、この字の中心で待っています。
ＰＳ　絶対に１人で来てもらうためにこういう文章にしました。１時間後まで待っています』

そして、２枚目はこうだ。

『７４１２２４＊４３１２０３６２５１』

非常に短い手紙だったので、たぶん用件はその場に来いという事だろう。
だが、肝心の部分が意味不明な文章になっていてよく分からない。

「・・・なあ、誰かこれ解読してくれないか？」
「・・・・」

誰も反応しないところを見ると、どうやら４人ともよく分からないらしい。
しばらくの静寂の時が訪れるが、やがて恵麻がぽつりと言った。

「ねえ、景君。もし解けたら、手紙を出した人に会いに行くの？」
「そうだな。一応・・・」

俺が話を続けようとすると、チャイムとともに教師が教室に入ってきた。
４人は、俺にまた後でと言うとそれぞれの席へと戻っていった。

そして、昼休み。

「け、景先輩・・・今度は本物ですか・・・」

「み、美玖・・・。でも、ほら・・・景先輩って変人からしか貰ってないから大丈夫だってば」

「有栖さんは、妙な人に好かれることはよく分かったわ」

俺の周りは、さらに騒がしくなっていた。

何故か、この日に限って美玖や紫、衣先輩まで教室にやって来たのだ。

珍しくいつもは強気の紫が動揺していたが、理由を聞いてみる。

「なあ、紫。今日はいつもと調子が違うが、何かあったのか？」

「・・・何でもない」

紫は、それっきりぶすっとして何も話してくれなくなってしまった。

似たような性格の由真に視線を向けるが、声には出さず口を動かした。

・・・馬鹿・・・って何なんだ？

俺が由真の言葉の意味を理解できずに困っていると、衣先輩が手をこちらに出して偉そうに言った。

「さっさと手紙をみせてもらえるかしら？」

俺が、手紙を渡すとしばらくその手紙を見ていたが、やがて興味を失ったように俺の机に戻すと、溜息をつく。

「・・・何となく場所の検討はつくけど、可愛い後輩のためにあえて教えませんわ」

そう言うと、衣先輩は教室を出て行ってしまった。
後に残された俺たちは、誰1人として答えを見出せずにいる。
皆、手紙を見つめ、考えているようだが唸っているだけで誰1人として言葉が出てこない。
・・・これ以上、時間を取らせるのも悪いような気がする。そこで、俺は全員に言った。

「あとは、俺1人でどうにかしてみる。一緒に考えてくれてありがとう」

すると、恵麻が言いにくそうにしながらも、俺の目を真正面に見据えて言った。

「・・・景君は、告白を受けるの？」

その言葉に一斉に皆が俺の方を向いた。
それを見て恵麻の問いに対する答えに皆が注目していることに俺は気付いた。
だから、俺は本音で答えることにした。言っても特に問題のあることではないと判断したからだ。

「・・・たぶん受けないだろうな。例え、今日の手紙を出した人が真面目に出していたとしてもだ。いきなり恋人になってくれと言われても無理があると思うんだ。まあ、こんなこと言ってるから、彼女が出来ないんだろうけどな」

最後の言葉は自嘲でしかなかった。
そうして手紙に視線を落とすと、正面にいた美玖がその手紙を取り上げる。
そして、美玖は俺の手を握りながら言った。

「わ、わたしもお手伝いします」
「美玖・・・それは卑怯でしょ。と言う事でボクも手伝うからね」

紫も美玖の言葉に続く。
さらに、雪崩のように恵麻と由真も話に乗ってきた。

「私も手伝うよ～」
「少なくとも人数は1人でも多いほうがいいでしょ」

最後に幸樹がニヤニヤと笑いながら、俺の肩に手を置くと言った。

「全員参加するってよ」

・・・俺も、いい友人を持ったな。俺は、心の底からそう思えた。

放課後、俺たちは教室に集まっていた。
現在、3時。約束の時間まで、あと1時間。
とりあえず7人いるので、くじ引きで、グループ分けをすることになった。

・・・。

俺は、くじ引きが終わると、皆を見ながら言った。

「・・・とりあえず決まったな」

だが、全員が全員、複雑そうな顔をしていた。
くじ引きは、1から3の数字が書かれた紙を折りたたみ、選んでいくと方式だった。

その結果、1グループが恵麻と紫。2グループが美玖と由真。そして、3グループが男3人という結果だった。
まさか男同士3人で組むことになるとは、さすがに俺の予想は出来なかった。

「ねえ、景君。一応・・・男の子は平等に入れたほうがいいと思うよ。・・・その、もし手紙を出した人が悪い人だったら・・・危ないし」

恵麻の提案に美玖や紫が頷く。
確かに、何が出てくるかは分からないわけだから、女同士というのは良くはないだろう。
そこで、再度グループ分けをすることになった。

再度、クジを引いた結果、俺は紫と組むことになった。
他は、幸樹と恵麻、美玖の3人と晃、由真のペアだった。

「景先輩、よろしく。頑張って最初に見つけるよ。負けは許されないんだから」

紫は、親指を立てて片目を瞑った。

何だか趣旨が少しずれている気がしなくもないが、それはまあいい。
「・・・ゆ、紫には負けないから」
「だったら、一番最初に見つけたチームにはご褒美って事でどう？」
・・・段々、ゲームと化していないか？
俺が溜息をつくと、嫌そうに紫が言った。
「ボクは、景先輩の溜息は嫌いだな。どんな状況でも楽しまないと。それに、ボクと一緒だと楽しくないわけ？」
「そんなことはない」
俺が紫の言葉を否定すると、由真が胸を張って声高らかに宣言した。
「じゃあ、最初に見つけたチームは景に1つ命令できるって事で決まり！」
「ちょっと待て、俺は認めてない・・・」
だが、俺の言葉など誰も聞いておらず、他の2つのグループは教室から出て行ってしまった。
俺と同じグループの紫だけが残っていた。
「諦めたら？ここは男らしく全員のお願いを聞くって事で・・・」
「それはない」
俺がきっぱりと断ると、紫は不満そうに口を尖らせた。
「ちぇ・・・心が狭いなあ」
「勝手に言ってろ」

くだらない言い合いをしつつも俺と紫も調査を始めることにした。
まずは、告白スポットを適当に回ってみるとするか。そうすると、中庭の噴水が近いな。
紫にも提案すると、特に反論もなかったのでそこから回ることにした。

屋上で1人の少女が校庭を見ながら呟く。
「・・・皆さん、頑張ってますわね」
彼女の手には、この学校の見取り図が握られていた。
彼女の眼下には、下校する生徒や部活の準備をする生徒。それに掃除している生徒が見えた。
だが、彼女はそんなものを見てはいない。
ぼんやりと下を見ていると、ふいに後ろから声をかけられる。
彼女が振り向くと、そこには長い付き合いになる友人がいた。
「無理しないでいけばよかったのに・・・。衣らしくもないよ。いつもだったら、こう・・・『私も気になるので行きますわ』とか言うでしょ？」
いつもとは違う呼びかけに、彼女が真剣に心配していることが伺えた。
その友人に衣は、ふと力なく笑うと諦めたような口調で話し始めた。

「いいのです、希望さん。私はあと彼らといられるのも1年ですもの。・・・それに、彼が告白を受ける所なんて見たくもないですわ」
衣はふっと溜息を吐いた。そして、また視線を校庭へと移す。
すると、希望は隣に並ぶと言った。

「ねえ、衣。・・・あの手紙の答え分かってるんでしょ？」
「ええ」

それっきり、しばらくの間2人は黙って眼下の生徒たちを見つめていた。

それから、数分経った頃。希望がぽつりと衣に向かって言った。

「でも・・・親友として、これだけは言っておくよ。大学に行っても会えるからね。チャンスはまだいっぱいあるからね。諦めたら・・・それで終わりなんだからね」

希望はそれだけ言うと、さっさと先に校舎内へと戻っていってしまった。
1人屋上に残された衣は、希望の言葉を反芻していた。

そして、見取り図をそっと持っていたバッグの中にしまった。

「・・・そうですわね。これからも・・・まだ時間はあるわよね」

時間と自分で言って、衣はふと腕にしている時計を見た。
まだ帰るには、時間が早い。衣はそう思った。

希望たちを誘ってどこかに行こうか。幸いにして部活は休みだ。

衣は携帯を取り出すと、勢いよくメールを打ち始めた。

その後、呼び出された希望は、安堵の表情を浮かべていた。

・・・応援しているからね。

彼女は、心の中でそうエールを送った。

第３４話：ラブレター・ストラグル　中編（後書き）

本編後の雑談　琴＝琴美（恵麻の妹）

琴「景、なぞなぞしようよ。いくよー」
景「勝手に始めないでくれ」
琴「大人になれないパンは？」
景「・・・ピーターパン」
琴「じゃあ、定番の質問。食べられないパンは？」
景「黒焦げのパン、腐ったパン、ジャパン（日本）、海パン、カビの生えたパン・・・」
琴「え？ここはフライパンじゃあ・・・」
景「・・・ちなみに人は喰えるらしいから除外。ピーターパンも同じだ」
琴「私は景の残酷さを垣間見てしまった気がするよ」
景「・・・冗談のつもりだったんだけどな」

今回は短めです。
読んでくださっている方々、ありがとうございます。

第35話：ラブレター・ストラグル　後編

・・・どうしたものか。

俺は、今、非常に困っている。目のやり場というか、この身の振り方をどうするべきかと悩んでいる。

そして、その原因は目の前にあった。

「「・・・」」
「「・・・」」

俺と紫、そして、知らない奴ら2人。
その場の空気は非常に重い。何故なら、そこの2人は今告白の最中だったらしい。

そこに俺たちが、話しながらやって来たというわけだ。
2人とも顔を真っ赤にして俯いている。まあ、全部聞いてしまったわけだからな。
まさか、誰かが見ているとは思っていなかったらしく、女の方が「はい」と答えて、キスをするところもばっちり見ていたわけだ。
2人が気付いたのは、キスをした後だったのだ。その時の慌て様はこの世の終わりと言わんばかりだった。

それから、こうしてお互いに見つめ合っていると状況になっているというわけだ。

相変わらず、誰も言葉を発することができずにいる。
すると、紫が俺のことを肘で小突く。

「・・・ねえ、景先輩。すごく気まずいから何とかしてよ」
「いや、無理だろ」
「・・・役立たず」
「・・・・」

俺たちがひそひそと話していると、告白していた男の方が意を決したように俺の前にやって来た。

「・・・あの、できれば見なかったことには・・・なりませんよね？」

俺は、その情けなさに少し呆れた。俺のことを真っ直ぐ見ようともしない。
後ろでは、ついさっきのこいつの彼女になった女が呆れたように額に手を当てていた。
・・・こいつら、長続きするのか？

「どこの誰だか知らないが、別にお前の告白に興味などない。ただ、1つ聞きたいんだがいいか？」
「あ、はい。何ですか？」

小動物のように怯えながら答える目の前の男を見ていて、俺はふと自分のことを思い出した。
・・・そうだ、俺目つきが悪いんだった。しかも、今は俺の方に太陽に光が来るものだから、それに拍車をかけているんだ。
俺は、できるだけ高圧的にならないように話しかけた。その甲斐あってか、男は少し表情をほっとさせる。

「この辺りに、不審な人物を見なかったか？」
「いえ、特には・・・」
「私も見てません」

ここじゃないようだな。
俺は、そう判断すると紫に声をかける。

「紫、他の所を探すぞ。ああ、そうだ、そこの２人。邪魔して悪かった」

俺がさっさと歩き出すと慌てて紫が小走りで着いて来る。
そして、俺の隣に並ぶと笑いをこらえながら言う。

「あいつ、ボクたちの学年だと結構人気がある男子なんだけど・・・
ヘタレだね。ボクはああいうのはパス」

・・・強烈な一言だな。たぶん、本人に言ったら泣くぞ。
だが、その一方でこれだけ強気に言う紫の好きなタイプというのも気になった。人格によって違うのだろうし、そもそも紫は理想が高そうだ。
そこで、俺は何気なしに聞いてみた。

「だったら、紫はそんな男がタイプなんだ？」
「っ！？」

すると、途端に紫の顔が真っ赤になるのが分かった。
・・・他人の恋愛話は好きでも、自分のことになると奥手になるタイプなんだな。
そう結論付けると、俺は紫に笑いながら言った。

「・・・なんてな、冗談だ。俺が紫の好みを聞いてどうする」
何となく気まずい雰囲気になりそうだったので、適当に誤魔化しておく。
紫も真っ赤になったまま慌てて口早に言う。
「そ、そうだよ。ボクが言う必要なんてないんだよ。変な事聞かないでよ」
そして、怒ったように先をどんどん歩いていく。
・・・だが、そっちは違う方向なんだが。
俺は少し離れてしまった紫に向かって叫ぶ。
「紫、次は体育館裏だから、そっちじゃないぞ」
「えっ・・・そういうことは早く言ってよっ」
紫は、戻ってくると恥ずかしいのだろう、顔を真っ赤にしながら怒った。
もちろん、本気で怒っているわけではないようで、気を取り直したように何かを言おうとした。
だが、紫が何か言おうとした時、俺に誰かが話しかけてきた。
同時にその声を聞いて、紫がさっと俺の後ろに隠れる。・・・何だかんだで、人見知りなんだよな。
「あれ、有栖君？こんな所で何してるの？それに・・・後ろの女の子は確か・・・」

声が聞こえた方を見るとそこには、明月院さんがいた。しかも、俺と紫を見て、苦笑いを浮かべている。
手には竹箒を数本持っており、どうやら掃除の後片付けをしているらしい。・・・もしかして、この辺りを掃除していたのだろうか。
俺は期待をこめて、明月院さんにもこの辺りに誰かがいなかったかと聞こうとすると、彼女は人差し指を口に当てると言った。
「ちょっと待って、まだ言わないで。当ててみせようかな。・・・人探しをしているでしょ？」
「何で分かるんだ？」
「そういう雰囲気だったから」
・・・女の勘ってやつか。
まさに、人探しの最中なので俺は素直に驚いた。
もしかして、知っているのかもしれないな。
「明月院さん。この辺りに不審者がいなかったか？」
「ふ、不審者！？」
すると、明月院さんはひどく驚いたようだった。大きく目を見開いて固まっている。
・・・この様子だと知らないようだな。俺はそう判断した。
「そっか・・・。悪いな、時間を取らせて」
「あ・・・うん。頑張ってね、私も応援してるから」
明月院さんは、再び竹箒を持つと、渡り廊下を通って小走りに校舎の中へと消えていった。

さてと、時間もないし次に行くか。
明月院さんと会話をしていた間、一言も話さなかった紫に声をかけようとすると、逆にひどく呆れた表情しながら紫は溜息をついた。

「ねえ、景先輩。ボク、さっきから気になってるだけど・・・『不審者』なんて言ったら、普通はいないって答えるよ。ここ、学校なんだからさ・・・」
「・・・」

・・・確かにそうだ。
指摘されるまで気にしていなかったが、よく考えればおかしい。
言葉遣いの奥深さを感じつつ俺は、体育館裏へと向かった。

俺は体育館裏に着くと、そう呟いた。

「・・・ここは何もないな」

そもそも何故体育館裏は告白の名所の1つなのだろうか？
人に見られるのが嫌だから、人気のないところに呼び出すのかもしれない。まあ、どうでもいい。
だが、もう1つの顔を持つことを忘れていないだろうか。
つまり、こういう所に呼び出して集団で襲い掛かる奴もいるということに。ソフトに言ってみたが、種類もさまざまだ。

・・・って、俺は、何を考えているんだ？ふと我に返るととりとめのないことをずっと考えていたことに気がついた。

要するにどうでもいいことを考えるほどに、何もなかったのだ。
とりあえずもう1度辺りを確かめるが、特に誰かがいる様子もないので、俺は次に行こうとすると、紫がしゃがみ込んで何かを摘まむと俺に見せる。

「・・・景先輩。こんなの見つけたよ」
「人の歯みたいだな・・・」

・・・何で、そんな物がこんな所にあるんだ？本当に最近この辺りで何かあったのかもしれないな。
とりあえず、俺は紫からそれを受け取った。すると、急激な寒気を感じた。そして、それは俺自身への怨恨の類に思えた。

「・・・」

俺は黙ってそのまま遠くへ放り投げた。
それを見ていた紫はぼそっと、だが俺に聞こえるように言った。

「うわ・・・ひどいな、景先輩は」
「持っているだけで不幸が訪れそうな気がしたんだ」

紫は、俺の言葉を聞くと、合点がいったようで、歯が飛んでいった方を見てポンと手を叩くと「ああ」と納得した。
そして、遠い目をして俺に言った。

「景先輩・・・ファイトッ」
「・・・視線を逸らして言うな」

結局、体育館裏にも誰もいなかったので、次に俺たちは桜の丘に向

かうことにした。
今更な話だが、俺も紫も手紙の意味が全く理解できなかった。そのため、俺たちは告白スポットを片っ端から当たってみる事にしたのだ。
中庭の噴水前、体育館裏、そして桜の丘。

「そろそろだな」

桜の丘は学校の敷地内では、かなり離れた場所にある。
その名の通り、この辺りの木は全て桜の木だ。1年に1度、学校を開放し花見を催すこともある。
だが、普段は人が来ることは滅多にない。校庭からもそこそこ離れており、またこちらの方に門がないからだ。

「待ってよ、ボク疲れたよ・・・」

そして、丘というだけあってずっと上り坂だ。
目的地はあくまで丘の上にあるのだから。
と言っても、大した距離じゃないけどな。

「紫は自分のペースで来ればいいからな」

俺は、大きく伸びを1つすると、一際大きな木を見上げた。
今はもう4月も終わりに差し掛かり、すっかり花は落ちてしまい、寂しくなってしまっていた。
俺は、木の幹に寄りかかるとそのまま座り込んだ。

「しかし、いつ来てもここの眺めは最高だな」
「そうかなあ？ボクは屋上の方がいいと思うけど」

妙に近くで声がするので声のしたほうに振り向くと、隣に紫が座っていた。
紫は俺の顔を見ることなく、どこか遠くの方を見ているようだった。
そして、ぽつりと言う。

「でもさ・・・ここでもなかったね」
「・・・まあな。もう４時過ぎたのか」

時計を見ると、既に４時１０分を示していた。
あと、５０分ほどしか残っていなかった。

俺が時計を気にしていると、唐突に紫が話し出した。

「景先輩、もしかして、手紙を出した女の子知ってるの？こんな変な子無視したらいいのに・・・」
「まあ、正論だな。いるかどうかすらも分からないのに、皆を巻き込んで悪いと思ってる」

それに対して、紫は半ば苦笑気味に笑顔を浮かべる。

「で、でも・・・ほとんどみんな冗談半分だと思うよ。ボクだって、あんな変な手紙を出した子に興味があるわけだし。それに・・・ボクは・・・」

そして、紫はさらに何かを話そうとした。何だか少し顔が赤いようながするが、気のせいだろう。
だが、何かを言う前に背後から急に声をかけられた。

「あ、景君に、梓依ちゃんだ～。休憩中なの？」

聞いたことのある声に振り向くと、恵麻がバツの悪そうな顔をして立っていた。
そして、その後ろには幸樹と美玖の姿もあった。
どうやら、3人もここを見に来たようだった。美玖を見つけると、紫は美玖の側へと走っていってしまった。

「恵麻、首尾はどうだ？」
すると、恵麻は案の定冴えない顔をして首を横に振る。
「ううん、全然ダメだよ～。由真ちゃんたちも今の所ダメだって・・・」
そして、美玖を紫に預けて幸樹もこっちへやって来た。
「俺たちは、中庭と屋上、それに校門も回ってみたけど、それらしい女の子はいなかったぜ」
やはり、手紙の内容が分からないとどうしようもないよな・・・。
それに、ここまで手伝ってもらったのはいいが、これ以上探すとなると流石に手伝ってもらうのも気が引けてくる。
「なあ、恵麻、幸樹。時間は大丈夫なのか？1時間も一緒に探してもらって、もう4時も過ぎたし、後は俺1人で探すから帰ったらどうだ？」
だが、幸樹は少しの間真剣な表情をしていたが、すぐにその表情が崩れ、笑い出した。

「気にするなって、ここまで来たら5時まで付き合ってやるよ。それに、お前見つかったとしても、どうせ断るんだろ？どう断るか、見物してやるよ」
「そうだよ～。困った時はお互い様だよ～。私たち、友達なんだから当然最後まで付き合うよ」
俺は、この2人に心の底から感謝した。この2人だけじゃない、美玖や紫、ここにはいないが、晃や由真。
理由はどうであれ、皆、俺のことを手伝ってくれているのだから。

「・・・ありがとう」
俺が照れながらもそう言葉にすると、幸樹も恵麻も笑いながら言った。

「どういたしまして～」
「だから、気にすんな」

・・・結局、皆お人好し過ぎるんだよ。
けれども、それが嬉しくもあった。

一方、景たちが話をしている頃。
美玖と紫は2人きりになってから、しばらくの間沈黙がその場を支配していた。
お互いに言いたいことはあるはずなのに、言葉が出てこない。彼女

たちの周りだけが重たい空気で包まれているようだった。
だが、唐突にその沈黙を破り美玖が紫に向かって話しかけた。

「ねえ、紫。もし・・・あのまま2人きりだったら・・・告白してたでしょ？」
「なっ！？そ、そんなことないっ。・・・うん、ない」

紫の一瞬の表情を見るだけで、美玖はピンときたようで、少しだけ寂しそうな、それでいて悲しそうな顔をして紫を見つめる。
やがて、紫も観念したように話し始める。

「・・・そうだよ。ボクはみんなが来なかったら、勢いで告白してかもしれない。けどね・・・今告白しても・・・絶対断られたと思う。今のボクは、女の子っぽくないから・・・」

それっきり紫は、顔を俯かせると、何も言わなかった。
紫の言葉をただ黙って聞いていた美玖もぽつりと言う。

「わたしもね、景先輩のことが好きだよ。でも・・・わたしは告白する勇気なんて・・・ないよ。紫はすごいよ・・・告白しようとしたんだから・・・」

そして、また沈黙の時が訪れる。
同じ人が好きだということは、もし仮に片方が付き合うことになれば、もう片方は必然的に諦めなくてはならないのだから。
その上、彼女たちは双子、つまり家族である。家に帰れば幸せそうなもう1人を当然目にすることになる。
お互いが避けていたとしても、必ずどこかで顔を合わせることになる。

しばらく、彼女たちは黙っていたが、紫が言いにくそうに美玖に言った。

「・・・あのさ、美玖。・・・もし、美玖が景先輩と付き合ったら・・・たぶん苦しいと思うけど・・・応援するからね」

「わたしも・・・同じ気持ちになると思う。でも、その時は応援するよ。だから、今度からは抜け駆けは無しにしようよ。告白する時は、一緒だからね」

2人はお互いに頷いた。

それは、2人が納得するための契約にすぎない。そして、そんなことは彼女たちも百も承知のことである。

2人の話し合いがちょうど終わった時、タイミングを計ったように少し離れた所から、想い人の声が聞こえる。

「2人とも、そろそろ戻るぞ」

その声を聞き、紫は大声で返事をする。

「今、行くーっ！。・・・美玖、行こうか」

だが、美玖はその場から動かず、紫を見据えると1つ深呼吸をすると静かに言った。

「うん、そうだね。・・・わたしたち、ずっと姉妹だよね。何があっても姉妹だよね」

心配そうな美玖の言葉に紫は、自分自身に言い聞かせるように言う。

「何、当たり前なこと言ってるんだよ。ボクたちは・・・これからもずっと仲良しなんだからね」
それは、紫の願いでもあり、美玖の願いでもあった。

結局、もう1度学校中を手分けして探した俺たちだったが、手がかりを得ることもできず、1度全員が合流することになった。
そして、皆で中庭に集まると、幸樹が時計で時間を確認し、大きく伸びをすると言った。

「・・・これ、悪戯なんだろ、結局。もう時間になったし、どこかで俺たちのこと見て、ほくそ笑んでるじゃないのか？」

幸樹の言うことはもっともな事だ。
俺だって薄々は感じていた。だが、どこかで本当に待っているのではないかという希望が捨てられなかった。ただ、それだけのことだ。

・・・格好つけて言ってみるが、何の慰めにもならないな。俺は、幸樹の言葉に割りと凹んでいた。
その俺に、由真と恵麻は苦笑いを浮かべると、少し考えてから話を切り出す。

「・・・景、しっかりしなって。そのうち、あんたのことを分かってくれる女の子がきっと現れるって」
「え・・・あ、うん。そうだよ、景君」

ただ、恵麻は何だかほっとしているようにも見えた。

俺は、溜息を1つ吐き出す。
すると、由真は皆の方に振り返ると1度おれをちらりと見てから全員に聞こえるように大声で言った。

「まあ、結局引き分けってことだよね。ということで、全員に景がご褒美をくれることになったから。ね？景。これから、駅前のドーナツ食べたい人！」
「「はーい」」

ね？じゃないし、何、全員納得したように返事してるんだ。

「ちょっと、待て。俺は、今そんなに金がな・・・」

だが、由真たちは誰も俺の話を聞いてはいなかった。
既に、皆俺を置いてぼりにして歩き出していた。

・・・本当に勝手な奴らだな。このためだったのか、俺のことを手伝っていたのは・・・。

手伝ってもらったことを軽く後悔していると、由真が大きく手を振っているのが見えた。

「景、早く来ないと置いていくよ」
「分かった、すぐに行く」

俺は、半ば投げやりに返事をすると、物事は諦めが肝心と自らに言い聞かせた。

・・・ダメだ・・・納得できない・・・。ん？

心の中で、何度も諦めと妥協という言葉を繰り返し唱えていたが、背後から視線を感じ、俺はふと2階の窓を見た。

「・・・気のせいか」

そこには、風になびいたカーテンがあるだけだった。

俺は、首をひねるが、そんなことをしても分からないことは分からない。

すると、痺れを切らしたように紫が遠くで叫ぶ。

「景先輩、早くしてよ」

紫の催促を受けた俺は、財布の中身を考えつつ、皆の所へと歩き出した。

・・・もう2度と恋愛事は、こいつらには相談はしない、と俺は誓った。

景が振り向くと少女は、慌てて身を隠した。幸いにも見つからずに済んだ様で、彼女はほっと胸をなでおろす。

「危ない、危ない。もうちょっとで見つかる所だったよ。でも・・・探していてはくれたんだ・・・。今日は、それだけで良しとしないと」

そして、彼女は再び中庭をそっと覗く。
少女は彼がいなくなるまでずっと目で追っていたが、見えなくなると再び視線を噴水へと向ける。

「・・・ちょっと難しかったかな」

少女は誰もいないことをいいことに思わず苦笑してしまう。
だが、見つけてもらえなかったことに思わず溜息も出てしまう。

「・・・はあ。もうちょっと普通に手紙出せばよかったかも・・・」

生徒手帳を開きながら、少女は椅子に腰掛ける。
パラパラとページをめくっていき、目的のページを開く。

そこには、学校の全体図が載っていた。
彼女は、生徒会に関わっており、校則も理解している景なら分かるはずだと思ってこの暗号作ったのだ。

「この字に、時計。見れば分かると思ったんだけど・・・」

だが、景は結局暗号には気がつかなかった。
彼女は、暗号にして手紙を出したことを少しだけ後悔した。

第35話：ラブレター・ストラグル　後編（後書き）

本編後の雑談

琴「幼馴染って、意外と立場弱いよね」
恵「何だか楽しそうだね・・・琴美」
琴「その点、妹はいいと思うよ。年下で可愛いし、しかも素直なんだよ」
恵「妹だってみんながみんな素直じゃないと思う。・・・それに、妹ブームなんてとっくに終わったよ～。それに比べて幼馴染は、王道なんだよ？」
琴「少なくとも景はロリコンだもん！」
恵「・・・そ、そんなことないよ。絶対にない！」

エ「・・・妹ですか」

エ「ふふっ、お兄ちゃん」
景「なっ！？・・・どうした・・・エリス。頭でも打ったのか？」
エ「ひどいです、お兄ちゃん。エリスはいつもお兄ちゃんが大好きですよ」
景「・・・どこの誰だ！？エリスに変なことを吹き込んだ奴は！」
エ「待ってください、お兄ちゃーん」

景「・・・何か心にぐっと来るものがあったが・・・俺、ロリコンの気があるのか？」

第３６話：歌姫の間奏曲

「悪い、今日はミーティングがあるんだ」
「僕は、ちょっと呼び出しがあって・・・」

幸樹と晃は、今日は忙しいらしく俺は１人で、久しぶりに購買に来ていた。
高校では、主に弁当派、学食派、そして購買派がいる。
俺は普段は学食なのだが、１人で学食に行くのも寂しいので、ここで済ませようとおもったのだが・・・。

「おいっ、順番抜かすな」
「あ、お金落とした・・・」
「そのパンを最初に取ったのは俺だ」

そんなに購買は多くないと心の中で思っていた。
実際には、この有様だった。俺は半ば諦め気味に呟いた。

「・・・混みすぎだろ」

混雑の中、俺はどうにか昼のパンと手に入れることが出来た。
そして、立ちながら食べるのも疲れるので、渡り廊下を抜け、中庭の空いているベンチを見つけるとそこに腰掛けた。

「随分とカップルの多い場所だな」

俺は思わずぼやいた。

パンを食べながら、ふと辺りを見回すと、あちらにもカップル、こちらにもカップル。
空か、校舎でも見ていなければ、カップルが目に入ってくるのだ。
鬱陶しいことこの上ないが、それを言ったら単に彼女のいない男の僻みでしかない。

「・・・昨日の奴もいたのか」

最後のパンを食べながら、ふと視界に入った光景に俺はうんざり、というよりも力が抜けてしまった。
昨日の2人が、あーんとか噴水のところでやっていたのだ。周りとは一線を越えた甘々な雰囲気に思わず手からパンが滑り落ちる。
そして、無残にも俺の昼食であるパンは埃にまみれてしまい、食べられそうになかった。

「あいつらのせいだな。誰が何と言ってもあいつらのせいだ。・・・はあ」

俺が、落ちたパンを見ながら肩を落としていると、誰かが声をかけてきた。

「隣いいかな？」
「どうぞ。俺はもう行くから」

俺は投げやりな返事をすると、相手を見ることもなく立ち上がった。
すると、その相手は俺を呼び止めた。

「待って、有栖君。どうしたの？溜息なんてついたりして」
「明月院さんか」

その顔を見て、俺はすぐに誰であるか理解した。
明月院さんは、去年同じクラスだったのだ。大して話をしたことがあるわけではないが、合唱部三大歌姫と言われて知らない人はいないくらいの有名人ということもあって、俺も当然名前くらいは知っている。
少しの間、お互いに何も話すことがなく黙ったままだったが、ベンチに腰掛けると明月院さんはベンチを手でトントンと軽く音を立て、俺に座るように促した。俺は、ベンチの一番端、明月院さんからは離れた位置に座った。

「悩み事でもあるなら、私でよければ相談に乗るよ」
「・・・その辺りを見れば分かると思う」

そう言って、俺が視線を噴水の方向に向けると、明月院さんは首を傾げつつもそちらを見やった。

「・・・」

明月院さんも、噴水のところにいるカップルを見ると黙ってしまった。
よく見ると、周りにいるカップルたちも少し距離を取っているように思える。
ある種の絶対空間がそこには出来上がっていた。
俺は既に見るのを止めていた明月院さんに苦笑いを浮かべて、俺の足元に落ちているパンを指して言う。

「・・・まあ、あれを見て唖然としていたら、昼のパンを落としたってわけだ。それで、少しがっくりときた・・・ただそれだけの話なんだ」

「ああ、そうなんだ・・・あはは・・・」

俺の話を聞いた明月院さんは、どう反応していいのか分からないようで、戸惑った表情になった。

こんな話をされれば、俺だって戸惑うし、今と同じ反応しか出来ないだろう。

また、会話がなくなると、また何だか気まずい雰囲気になってきたのが嫌でも分かってきた。

・・・ここにいても気まずいし、時間はまだ早いが教室に戻るか。

俺は、一言声をかけようとすると、先程からずっと何かを考えていた様子の明月院さんが、急にポンと手と打つと手に持っていたバスケットを開きながら言った。

「そ、そうだ。よかったら、私のお弁当少し食べてみる？」

俺はそのバスケットの中を覗き込む。

その中身は、綺麗に整列し、中に色々と挟んであるサンドイッチだった。

思わず俺は、素直な感想を漏らしてしまった。

「・・・随分とたくさん食べるんだな」

すると、明月院さんは顔を真っ赤にして拗ねたようにぷいとそっぽを向いた。

「・・・作りすぎただけです！」

俺は、不用意な発言してしまったことに気づいたが、今更遅かった。
とりあえず、言い繕ってみようと口を開く。

「ごめん、今の冗談・・・」
「冗談でも言っていいことと悪いことがあると思うよ」

・・・やっぱりダメだったか。
ジト目で刺々しく言われ、俺は思わず怯んでしまった。俺が悪いのは確かであり、謝りたいのだが、相手がその気持ちを受け取ってくれない。
・・・どうすればいいんだ？俺が、内心頭を抱えていると、突然明月院さんがいつものような声色で話しかけてきた。

「ごめん、今の冗談」
「・・・？」

俺は、いきなり言われたことが理解できずに首を傾げる。
すると、明月院さんは急に噴き出して笑い出した。

「さっき有栖君が言ったばかりなのに、もう忘れたの？」
「・・・そうだった」

恥ずかしさで明月院さんの顔がまともに見ることができない。
俺が、視線を明後日の方へ向けて言うと、明月院さんは笑いながら続ける。

「でも、傷ついたんだから・・・。私だってこんなに食べないよ。
ということで、どうぞ」

そう言って、明月院さんは俺にサンドイッチを手渡す。・・・ここ

で、断るのは無理だよな。
1つくらいならいいか。そう自分に言い訳をしながらそれを受け取った。

「・・・お言葉に甘えさせてもらうかな」

俺は、とりあえず一口食べてみる。
明月院さんは、俺が食べている間、じっと見ていたが、やがて緊張した面持ちで尋ねてきた。

「どう・・かな？」
「うまいな。明月院さんって、意外と料理上手なんだ・・・な」

言ってから、しまったと思うが口に出てしまったことはもう修正することはできない。
また、気まずい雰囲気になるのだろうか。そうなったら、今度は褒めちぎってみようかなどと俺は、考えていた。
だが、明月院さんは最後まで俺の話を聞いていなかったようで何も言ってこなかった。

「じゃあ、もう1つどうぞ」
「あ、ありがとう」

ただ、お茶とともに別のサンドイッチを出され、帰ろうにも帰れなくなってしまった。
・・・まあ、折角だからご好意に甘えさせてもらうとするか。
俺は、お茶をすすりながら、サンドイッチを頬張った。・・・この卵もなかなかうまいな。

しばらく、俺たちは他愛のない最近の出来事などを話していた。
具体的には、明月院さんは以前話したので知っているのだが、最近のエリスの様子を話したり、また明月院さんは実は家が学校から歩いて１０分ほどということといった内容だ。
そんな話をしていると、明月院さんは急に何かを思い出したように笑う。
「そういえば、1年の校外学習の時に有栖君が私を助けてくれたときがあったでしょ。あの時、私すごく嬉しかったんだよ」
「あ、ああ・・・。あれか・・・」
明月院さんが言いたいことは、俺もすぐに分かった。
あれは、去年の秋。校外学習で、越河市に行った時のことだ。

「・・・ここ、どこだ？」
あの時、俺は同じ班の奴らと逸れてしまい、いつの間にかあまり人気のない所へ来てしまっていたのだ。
「ど、どうしよう・・・。みんなと逸れたし・・・こんな時に携帯は忘れちゃうし・・・」
その時、俺は同じクラスだった明月院さんを見つけて声をかけたのだ。
これでようやく帰れると思って・・・。
「よかった・・・。ところで、有栖君。ここってどの辺りなの？」

「・・・実は、俺も道に迷ってるんだ」
「・・・あははは、嘘・・・だよね？」
「・・・本当だ」

だが、俺たちは2人とも迷子になったのだ。しかも、1度も来た事のない全くの土地勘もない土地で。
俺は俺で、明月院さんが迷子だということに落胆したし、明月院さんも俺が探しに来たものだと思っていたから、かなり落ち込んだらしい。

「あ・・・雨降ってきたね」

あの時、泣きっ面に蜂とはまさにこういうことを言うのだろう。追い討ちをかける様に雨が降ってきたのだ。
天気予報では降水確率０％とか言っていたはずにもかかわらずだ。

「まあ、折り畳みがあるから構わないが・・・」

俺は、折り畳み傘を開いてから、気付いた。
明月院さんが、何故か傘を差さないことに。悪い予感がしたが、思い切って聞くと案の定の返事が返ってきた。

「・・・うん、実は傘持ってきてないの」

思ったよりも雨足は強く、風も吹いていたせいで軒下で雨宿りをしていた俺たちにも雨が降りかかってきた。
校外学習ということもあって、俺たちは制服だった。そして、まだ9月の初めということもあって気候は夏そのもの。
当然、半袖のシャツ。しかも薄い。

・・・明月院さんの下着が少し透けて見えるんだが。

まあ、そんなことを言うわけにもいかないので、黙って俺は傘を渡した。

「・・・そこまで大きい傘じゃないけど、濡れると風邪を引くから使ってくれ。少しは、凌げると思うから」

・・・透けた下着が気になるだなんて言える訳がない。

「で、でも・・・有栖君が濡れちゃうよ」

「いや、俺なら後でタオルで拭けば問題ないから」

「あ、ありがとう、有栖君」

明月院さんは、傘を受け取るとその傘を少し前に傾けて差した。

それから30分も経たないうちに雨は止んでしまった。ただの通り雨だったらしい。

明月院さんは、雨が止んだことを確認すると、鞄からハンカチを取り出し、顔を拭き始めた。

そして、服が結構びしゃびしゃになっていることに気付くとぼやいた。

「あーあ・・・、随分濡れちゃったな・・・」

俺は、タオルで自分を拭きながらその言葉を聞いていた。

明月院さんの方を向くと、どうしても下着に目を奪われそうになるので視線は向けない。

すると、明月院さんが急にうめき声をあげた。

「あ・・・透けて・・・る」

ようやく気付いたのか。

そして、明月院さんは顔を俯かせ、恥ずかしそうに言った。

「み、見たよね・・・そ、その・・・下着・・・」

どう答えたらいいんだ？

確かに見たことは見たが、それをそのままはっきりと言っていいものか。

俺が答えに窮していると、明月院さんはそれを肯定と捉えたようだった。

「・・・そ、そんなに気にしてないからいいよ」

そうは言うものの、どう見ても明月院さんはそわそわとしている。

・・・気にしてるじゃないか。

俺が、怪訝そうに明月院さんを見つめると、彼女はただ苦笑いを１つ浮かべるだけだった。

そういえば、もう１枚持ってきたんだった。俺は、鞄の中からそれを取り出すと、相手を見ることなく差し出した。

「・・・もう１つタオルがあるから使ってくれ」

「・・・あー・・・うん・・・。ありがとう、有栖君」

この後、服が乾くまで１時間ほど待ってから、近くを通りかかった

人に道を聞いてどうにか駅にたどり着くことが出来た。
2人で戻ってきたことで、クラスの奴らに色々と聞かれたり、変な言い掛かりをつけられたのも今となっては懐かしい思い出だ。

「・・・あの時は、俺も道に迷っていたんだよな」
「でも、最後には駅まで連れて行ってくれたよね」

去年の校外学習の話で盛り上がっていると、急に明月院さんが思い出したように俺に言った。

「あっ、そうそう。昨日、何してたの？」
「ちょっと人探しをしていたんだ。・・・変な手紙を貰ったんだ」

俺は、昨日の出来事を思い出して、思わず苦笑してしまう。
結局、誰かの悪戯に踊らされていただけだったのだから。
だが、急に明月院さんは立ち上がると、目を大きく開いた。

「へ、変！？」
「きっと、手紙を出した奴は心根から捻じ曲がっていてどうしようもないんだろうな」
「そ、それは災難だったね・・・」

何だか明月院さんの言葉に力が無いような気がするが、たぶん気のせいだろう。
いや、これは考えすぎかもしれないが、明月院さんは誰にでも親切な人だから、同情されたのかもしれない。

「そうだな」

「・・・」

明月院さんは、何か考え込んでいたようで、俺の言葉を聞いていないようだった。

そこで、俺は明月院さんの肩を軽く叩いた。

「じゃあ、そろそろ俺は教室に戻るよ。サンドイッチ、ごちそうさま」

「あ、うん。お粗末様です」

俺は、それだけを言うと教室へと戻った。

景が去った中庭で、陽菜は1人落ち込んでいた。

「私って、変なのかな・・・」

確かに、今思えば普通の手紙を出していればよかった。そう思わないこともない。

しかし、それではインパクトが弱いと彼女は思ったのである。

そして、その結果がこの状況である。

「・・・変なんだよね。だから、意識してもらえないのかも・・・」

だが、その声に答えてくれる人はいない。

結局、彼女は、予鈴が鳴るまでベンチに座っていた。

その間、何度溜息をついたのか。彼女にも数えることは出来なかっ

た。

第３６話：歌姫の間奏曲（後書き）

本編後の雑談

衣「有栖さんは年上でスポーツもできて、お姉さんみたいな女性が、好みではないかと思いますわ」
美「そ、そんなことないです。可愛くて、守ってあげたくなるような後輩の方がいいはずです」
紅「・・・どちらも根拠ない」
衣「・・・うっ」
美「・・・じゃ、じゃあ紅玲奈はどう思うの？」
紅「・・・景先輩は、メイド好き」
衣「メ、メイド」
美「た、確かにそうかもしれない・・・」
紅「・・・でも、メイドは所詮メイド。だから、チャンスある」
美「きょ、今日は饒舌なんだね」
紅「・・・うん」

エ「景様、風邪を引いたのですか？」
景「いや・・・誰かが俺の噂話をしているんだろうな」

第37話：メイドさん、テレビに出る　その1

ある平日の昼下がり。
珍しく、藍羽　愛美は有栖家を訪れていた。彼女は主婦ではないので、普段はこうしてお茶を飲みながら会話をするということはない。だが、彼女は、今日は別にお茶をしに来たのではなく、仕事の話をしにやって来ているのだ。

「・・・ということなんだけど・・・柚葉さん、協力してくれない？」
「そればかりは、エリスちゃんと景次第ね」

熱心に説得する愛美に対して、景の母である柚葉の返事は芳しくない。
もちろん、愛美も柚葉の、この返事は想定済みのこと。だが、柚葉のこの言葉さえ聞ければどうでもよかったりする。

「じゃあ、今日にでも早速頼んでみるわね。実は、明後日なのよね、収録」

愛美のいい加減さは、今に始まったことではないので、柚葉はそれについては何も言わない。
ただ、母親として、当然番組内容が気にならない訳ではない。

「・・・ところで、どんな番組なの？」

訝しげに聞く柚葉に愛美は一瞬眉をピクリと動かしたが、すぐにわざとらしく咳払いを1つすると、話し出す。

「一言で言うと、バラエティよ。今回はアイドルの女の子がどうしてもエリスちゃんを見たいって言うから仕方ないのよ。あ、これ番組のＤＶＤ。一応、見ておいてね。それじゃあ」

愛美はそれだけ言うと、逃げるように足早に出て行った。
それを見ていた柚葉は、一抹の不安を覚えた。しかし、時計を見ると、慌てて２階にいるエリスに叫んだ。

「あっ、そろそろタイムサービスに行かないと。エリスちゃん、お留守番お願いね」
「はい、分かりました」

柚葉も柚葉で忙しいのである。
彼女はＤＶＤをリビングのテーブルに放置すると、買い物袋を持ち、パタパタとスリッパを鳴らしながら出て行った。

彼女が、家を出て行くとエリスが２階から洗濯物を持って降りてきた。
そして、とりあえずその洗濯物を置くとテーブルの上にあったＤＶＤを見つけた。

「何でしょうか、これ？・・・」

手にとって見るが、どういう内容かエリスにはよく分からなかった。
彼女は、洗濯物を畳みながらテレビを見ていることが多いのだが、柚葉が置いていったのだろうと推測すると、早速見てみることにした。

「・・・エリスちゃんって、案外こういうの好きなのね」

それが、帰ってきた柚葉の感想であった。

「昨日の莉子ちゃん、可愛かったよね」
「ああ、そだな。今日もテレビに出るから、録画して保存しないと」
教室の前を通りすぎた男子生徒2人が莉子とかいう女の話をしていた。
だが、俺はそのアイドルのこと自体よく知らないのだ。以前、晃がそのアイドルについて話していたことがあるが、結局色々とあってイマイチ分からなかった。
まあ、この学校にファンクラブがあることは知っているのだが・・・。
そこで、ふとそのアイドルに興味を持った俺は幸樹に聞いてみた。

「なあ、幸樹。片宮莉子って、どんな奴なんだ？」
すると、幸樹は宇宙人でも見るような目で俺を見た。
「お前、片宮莉子も知らないのか？」
「いや、名前くらいは知ってるが・・・」
「まあ、そりゃそうだよな」
幸樹は納得したように大きく頷くと、教壇へと向かった。
・・・メイドといいアイドルといい、節操がない奴だな。
そして、チョークを取り出すと、黒板に何かを書きながら俺に言った。

「よし、俺が莉子ちゃんの魅力を講義してやる」
その時、俺は既に鞄を持って教室の扉から出ようとしていた。
だが、どういうわけか幸樹は俺が逃げようとしていたことを察知したようで、振り向きざまに叫んだ。
「あっ、こら！話を聞いていけーっ！」
「俺、今日バイトだから。悪いな」
俺はそういい残して、さっさと逃げ出した。
・・・興味のないアイドルの話なんて聞いていられるわけがない。

「ねえ、そこの君」
「俺か？」
「そうっす。この近くに片宮莉子ちゃんの写真集置いてある店知らない？」
今日は、随分とアイドルの話が出てくるな。俺は、バイトの帰りがけに突然知らない男から聞かれて正直戸惑っていた。
普段なら無視するところなのだが、何も思ったのか気紛れにも返事をしてしまったのだ。
こんなにもアイドルの話が出てくるのは何だろうか？俺は時代に取り残されているってことなのか。
「・・・知らないな」
「どこ行っても売り切れなんだよなあ・・・・」

・・・ありがとうくらい言ってから行けよ。
去っていく男に毒づきながら、俺は小石を蹴った。その石は、３メートルほど先で電柱にぶつかると、そのまま勢いなく下へと落ちた。
・・・そういえば、コンビニにあったような気がするな。
今更思い出したところで、当の本人は駅の方へと行ってしまいもういない。
まあ、それ以前に知っていたとしても教えるつもりもない。勝手に探し回ればいい。だが、その言葉とは裏腹に俺は気分が少しばかり憂鬱になった。

「ふーっ！！」

どうやら落ちた石が当たったらしく、毛を逆立てて猫が俺のことを威嚇していた。
普通の猫なら逃げるはずなのだが、この猫は近所でも可愛がられており人馴れし過ぎているのだ。
その上、妙に気が強く、非常に攻撃的な猫だった。
・・・仕方ないか。
俺は、猫のいる道を避けると来た道を戻ることにした。

「ニャー」
「・・・現金な奴だな」
数分後、俺はツナを食べる猫にそう文句を言った。
あれから、コンビニに戻った俺は、ツナ缶を１つ買うとこの場所に

舞い戻った。
案の定、まだ猫は居座っており、俺を見つけるとまた威嚇してきたのだ。

そこで、ツナ缶を開けて地面に置くと、しばらくは警戒していた猫だったが、やがて寄って来るとツナを食べ始めたのだ。

そして、食べ終わった今は、俺の周りをうろうろとしている。
要はエサをくれる人はいい人、くれない人は敵だと認識しているらしい。
しばらく経つと猫は俺の方を1度振り返ると、どこかへ行ってしまった。
俺は、猫が食べ終わった缶を拾うと近くのゴミ箱に放り入れると、すっかり暗くなった中、駅へと向かった。

俺が、バイトのある日、つまり水木金曜は、家に帰るのはいつも8時頃になってしまう。
本当は、もう少し遅くまで働きたいのだが、母さんの許可がどうしても下りなかったので仕方なしに妥協している。
ちなみに、晃は火水木土とバイトをしており、深夜まで働いているという。理由は、自作パソコンのための資金にするためらしい。
俺は、商店街を抜け、少し暗い住宅街を歩きながらぼやく。

「・・・猫に構っていたら、すっかり遅くなってしまったな」

この辺りは、比較的治安がいいとはいえ、痴漢注意の看板が所々立っており、それに薄暗い路地もいくつもある。

また、俺が今通っている公園前の道は、大通りへの抜け道で、トラックも通ることが多い。
トラックに轢かれそうになった子供も結構多いと、近所の人が話しているのを聞いたことがある。
ん？家の前に誰か立ってないか？
俺が家が見えるところまで差し掛かると、家の前できょろきょろと辺りを見回す不審者がいることに気づいた。
それに落ち着きなくうろうろとしている。
「・・・警察呼んだほうがいいのか」
そう思ったが、一応確認してからでも遅くはないだろうと思い、そっと近づいてみると・・・。
「何だ・・・エリスか」
家に誰もいないのか？そう思って、俺は声をかけてみた。
「エリス、こんな所で何してるんだ？」
「あ、景様。遅いですよ」
「・・・何かあるのか？」
すると、エリスは俺の手を掴むと言った。
心なしか怒っているような気もする。
「実は、今日は藍羽様から夕食のご招待されたのです」
「・・・」

俺の予定は、おばさんなら知っているはずなんだがな・・・。
エリスに半ば引っ張れるような形で向かいの藍羽家に入る時、ふと思った。

エリスに連れられ、俺がリビングに入ると、おばさんは台所、母さんと恵麻、妹の琴美ちゃんはテレビを見ていた。
だが、誰も俺のことに気づいてくれないのでとりあえず挨拶をしてみた。

「こんばんは」

すると4人は特に驚くこともなく、俺がいることがさも当たり前といった感じで返事をした。

「景君、遅いよ〜」
「景、私お腹空いたんだけど」
「景ちゃん、いらっしゃい」
「あら、景。今日は遅かったのね」

よく見ると、恵麻と琴美ちゃんは既に風呂に入った後のようでパジャマを着ていた。
・・・普通はもう少し驚くものだと思ったんだが。まあ、自分でも何を期待していたのかよく分からないのだが・・・。

「じゃあ、そろそろご飯にしましょうか」

おばさんがそう言って、台所から次々と料理を運んでくる。
まるで、俺を待っていたかのようだ。だが、今日は俺の誕生日でも

なければ、もちろんここにいる全員とも誕生日ではない。
何かの記念日なのだろうか？

そう考えているうちにも、テーブルの上には、次々と料理が並んでいく。
おばさんは、料理の得意な恵麻の母親だけあって料理は得意らしい。
ちなみに父親のほうも得意で、昔から休日には手作りのおやつをご馳走になったものだ。
・・・そんな家族だが、琴美ちゃんだけは料理が下手だ。

俺がちらりと琴美ちゃんを見ると、すでに席についていた琴美ちゃんは、こちらを睨んでいた。
どうやら表情だけで俺の言いたいことが分かったようだ。

「何？私だけ料理ができないって笑ってるんでしょ。でも、景と変わりない位だってばー」
「・・・」

俺が言い返せるはずもない。何故なら、俺も料理が下手なのだから。
おばさん曰く、俺と琴美ちゃんはどんぐりの背比べらしく、琴美ちゃんは親が見ていない時には料理禁止。俺は、いてもいなくても禁止だ。

琴美ちゃんの余裕のある顔が妙に頭にくるのは気のせいに違いない。
まあ、それは置いておくとしてだ。先程からずっと気になっていたことがある。

そこで、俺は、料理を運び終わったおばさんに尋ねてみた。

「おばさん、今日何かの記念日なんですか？」

「ううん、違うわよ」
おばさんがにこにことしながら否定するので、俺はさらに追及しようとする。
「じゃあ、何で・・・」
だが、おばさんは俺の話を切るように話を続けた。
「それよりも、早くご飯にしましょ。冷めちゃうとおいしくないから。景ちゃん、そこに座って」
・・・何かあるな。そう思ったが、お腹も空いていたので、とりあえず言葉に甘えることにした。
俺が席に着くと、おばさんがふと思い出したように言った。
「でも、最近景ちゃんがおばさんに丁寧語を使うようになって寂しいわ。昔みたいに普通に喋っていいのよ」
「まあ、俺ももう大人ですから」
俺は適当に言葉を濁した。
・・・半分は本音だが、もう半分は建前なんだよな。
だが、おばさんは俺の言葉に気を悪くした様子もないようだった。
「今度からお義母さんって呼んでもいいのよ？」
俺は、冗談で呼んでみようかと思った。
すると、恵麻が俺よりも早く焦ったように言葉を発した。

「お母さん、早く食べないと冷めちゃうよ！」
「あらあら」

それに対し、おばさんはただ笑っているだけだった。
・・・冗談でやっていたらどういう反応をしたのだろうか？気になったが、もうどうでもよかった。

しばらくの間、恵麻が一方的に睨み、おばさんは笑顔でそれを受け止めていたが、琴美ちゃんの「早くご飯にしよう」という言葉で２人ともはっとしたようだった。
２人とも少し顔が赤くなってなっていた。

「そ、そうね、好きに食べていいわよ」
「「いただきます」」

久しぶりにおばさんの料理を食べたのだが、以前と変わらずおいしいものだった。
食事中は、恵麻や琴美ちゃん、それにエリスも加えてにぎやかに談笑することができた。

食事が終わって、おばさんが食器を片付けながら、わざとらしく弾んだ声で俺に言った。

「あ、そうだ。ちょっと見てほしいものがあるの」

そう言うと、おばさんはテレビをつけ、またお皿を運ぶ。
テレビの画面にはニュース番組が流れていた。

『次は、精神をデータ化する機械についての発表が・・・』

面白くなさそうなニュースだな。
俺はチャンネルを適当に変えてみる。すると、横にいたエリスが顔を強張らせていた。
まるで、何かに怯えているようだった。

「どうした、エリス。顔色が悪くないか？」
「い、いえ。そんなことありません。お気遣いありがとうございます」
「・・・そうか」

エリスは、一体何に驚いていたのだろうか？
さっきのニュースだろうか。だが、エリスと何か関係があるのか？

そう考えながら、ずっとチャンネルを変えていたようで、琴美ちゃんが俺からリモコンを奪うと言った。

「景、何か1つの番組にしてよ」
「ごめんな。ちょっと考え事をしていたんだ」
「ふーん・・・。あっ、お母さん。片宮莉子だよ」

それを聞いて俺もテレビ画面を見てみる。
そこには、聞いたこともない歌を歌う女の姿があった。
すると、テレビを俺の隣で見ていたエリスが何故かそわそわと、だが嬉しそうに言った。

「景様。この方が、今度私に会いに来るそうですよ」
「へえ・・・ええっ！？」

驚いて、振り返るとおばさんが苦笑いを浮かべていた。
どうやら、この件についてはおばさんに説明を求めたほうがいいらしい。
だが、おばさんは俺が聞く前に察してくれたようで、俺の横に座ると諦めたように話し始めた。

「実はそうなの。ごめんね、今日は、景ちゃんを説得するために色々と料理を作ったの。エリスちゃんはいいって言ってくれたんだけど・・・景ちゃん、こういうの嫌いでしょ？」
「いや、エリスがいいって言うなら関係ないと思います」

そもそもエリスに会いに来るのに、何故俺の許可がいるんだ？
俺は不思議でならなかった。
すると、おばさんは拍子抜けような、どこか安心したような顔をした。

「じゃあ、明後日なんだけどお昼過ぎに来るから、よろしくね」
「エリス、頑張れよ。俺は、出かけてていないけど」

「「え・・・？」」

俺の言葉に周りの空気が凍りついたような気がした。
やけに、テレビの音が大きく聞こえるのは誰も言葉を発していないからだ。実際に来るというアイドルの歌は既に終わっており、今はけたたましい音を立てるロックバンドが歌っていた。
しばらくの沈黙の後、おばさんが懇願するように俺の膝にすがり付いてきた。恵麻と琴美ちゃんはそんな母親の姿に唖然としている。

「お願い、景ちゃんも一緒じゃないと意味ないのよ」
「どうしてですか？」
「実際に、当選者にもインタビューするって・・・」
その言葉を聞いた瞬間、俺はおばさんの顔を真っ直ぐと見て、はっきりと言った。
「嫌です」
「そこを何とか。・・・恵麻とのことばらしちゃおっかな？」
「言うなら勝手に言ってください」
「・・・ぐすん」
こうしてしばらくの間、俺とおばさんの押し問答は続いた。
結局、おばさんが泣くものだから俺が折れる形でこの話は終わったのだが、いざ承諾すると物凄く笑顔で握手をされた上に、抱きしめられた。
・・・さっきまでのは、嘘泣きだったのか。
「こんなことは、景ちゃんくらいにしかしないわよ」
俺は、ウィンクをしながら楽しげに言う愛美さんが、少し恐ろしく見えた。

第37話：メイドさん、テレビに出る　その1（後書き）

本編後の雑談

愛「恵麻と琴美の母、愛美です。今日は、私がこの場をを仕切らせていただきます」
柚「景の母の柚葉です。では、早速お便りをいただきましたので紹介するわ。ペンネーム、『私ってヒロインですよね？』さんからのお便りです」
愛「当てはまる人が多くない？」
柚「・・・。えーと、柚葉さん、愛美さん、こんにちは」

「「こんにちは」」

柚「最近、私はようやく本編で目立つようになりましたが、それでも出遅れの感は否めません。どうしたら逆転できますか？大人の2人の意見を聞かせてください、だそうよ」
愛「結論から言うと、色仕掛けしかないでしょ。これでダメなら諦めなさい」
柚「・・・。まあ、それもそうだけど、後は『私ってヒロインですよね？』さんの努力次第。まずは、相手の好みとかを研究するべきね。相手の人が捻じ曲がった根性をしてない限りは想いは通じるはずよ」
愛「私よりずっと若いのに、柚葉さんって大人よね・・・」
柚「その分、苦労も多かったんだから。特に夫のことではね・・・」
愛「それは、分かる気がする・・・」
柚「でも、今は幸せよ。景がいて、エリスちゃんがいて、そして愛美や恵麻ちゃん、琴美ちゃんもいるからね」
愛「・・・雅巳さんは入れないのね」

柚「ふふっ」

第３８話：幕間１　俺とエリスと埴輪と

土曜のもう夕方になろうかという午後３時。

「それは、その辺にまとめて置いてくれ」

「はい」

愛美さんのお願いを断れなかった俺とエリスは、土曜日の午後からこうして掃除をしている。

何でもテレビ局の取材が来るんだそうだ。そんなものは企業に行くべきだと俺は思う。

だが、来る以上は仕方のないことだ。この部屋に来るとは思わないが、もしものことを考えて掃除をすることにしたのだ。

俺は、服をハンガーに掛けて仕舞っていると、エリスが俺の背後で掃除していた手を止めて俺の方へとやって来た。

「景様。あの、これは一体何でしょうか？」

特に見られてはいけないようなものは、エリスがこの家に来た日に無くなっているから問題はない。

・・・何もないはずだが、心臓の鼓動が必要以上に早い。

「どうした？」

「こちらなんですけど」

そう言うと、エリスは俺に持ってきた物を見せる。

「埴輪だな」

「はい、埴輪です」

そう、それは埴輪だった。何の変哲もない・・・ということもない。これは去年の夏休みに俺たちが住む街の近くにある古墳の売店で買ったものだ。
それを見た俺はほっと胸をなでおろす。だが、エリスはきょとんとしたまま不思議がる。

「ですが・・・その格好はメイドですよね？」
「ああ、そうだな。去年、変な口調の女と一緒に買ったものだ」

何故かは知らないが、発掘された埴輪はメイドのような格好をしていたのだ。
そして今では、その村の名物として土産物屋の定番商品になったそうだ。

「折角ですので、その時の話を聞かせてください」
「どこをどうすれば、折角なんだ？唐突過ぎると俺は思うぞ」
「景様は私に景様のことを全く話さないではないですか。ですから、お願いします」
「・・・分かった。大した話じゃないからな。途中で飽きて寝ても知らないからな」
「ロボットは寝ませんよ」

俺は、大した話でもないので、エリスの言葉を無視して掃除の続きでもしようと立ち上がった。
しかし、エリスは俺の服の裾を掴むと俺の目をじっと見つめたまま離さない。

「・・・」

「・・・」

エリスの好奇心に満ちた目に負けた俺は、こうして去年の夏休みの出来事を話し始めた。

・・・今、俺は猛烈に後悔している。

炎天下。この夏一番の暑さとまで言われた３７度の猛暑日。

そして、あまり広いとは言えない広場に５００人はいると思われる人。

俺は、この集団の中、少し苛立っていた。高校にもなって身近な史跡を調べて提出するという課題を出したアホ教師のせいで、こんな所まで来る羽目になったのだから。

だが、それ以上に狭い所に密集しているせいで、妙に蒸し暑い中で立っていることが辛かった。

これは、去年の夏休み。

俺のひと夏の思い出話だ。

「それでは、ルールの方を広報課糸美より説明がございます」

「ただいまご紹介に与りました糸美です。では、ルール説明をいたします。ルールは簡単。この村のどこかに隠してある『子を持つ』

埴輪像をこの公民館まで持ってきた方の優勝です。優勝商品は、１００万円。夕日が沈みきるまでが期限です。さあ、皆さん。準備はいいですか？」

役場の職員が説明を終え、返事を促すとやたらと気合が入れて周りの人々は返事をした。

「うおおおっ！！」

もはや返事というよりも叫んでいるだけに過ぎない。

目が殺気立っている奴ももいるが、これはどうなのだろうか。

本当は俺たちの住んでいる街からバスで2時間半もかかる甘泉村の史跡の１つ、２０００年ほど前に存在したと言われる建物跡に行く予定だったのだ。

だが、今は何故だかこんな所で、村主催の宝探しに参加させられている。

「なあ、恵麻？こんな危なそうでかったるいイベントやるのか？第一、宿題はどうする？」

「ん～。また今度来ればいいよ～」

「・・・後3日しかないけどな」

それでいいのかという俺の思いを汲んでくれる人など、この熱狂の渦の中にはいないのだ。

もはや、恵麻も幸樹も俺の言葉を聞いてはいない。

「それでは・・・・・スタート！！」

俺は訳の分からないうちに宝探しゲームに参加することになってし

まった。

「なあ、埴輪あったか？」
「こっちにもないよ～」

まず、俺たちが向かったのは、今日調べる予定だった史跡だ。
もう2人とも宝探しに夢中で調べる気はないのか、全く史跡に目もくれる様子もない。
こいつらはいったい何をしに来たんだ？聞いたところで答えは見えているのであえて聞かないがな。

「俺は、あっちを探してくるからな」

俺だけでもやっておくか。
そうして、俺は2人を見捨てて1人史跡を調べることにしたのだった。
声はかけたから、俺に非はないはずだ。

早速、俺は尼泉遺跡で発見されたという、建物跡を見に行くことにした。
だが、俺にとって衝撃だったのは、ここで見つかったという・・・。
「この尼泉遺跡では、世界初のメイドと思しき埴輪が発見され・・・」

説明の看板に書いてあったことが、あまりに衝撃的だったために声に出して読んでしまった。
偶然にもあたりに人影はない。独り言をぶつぶつと言っているなんて傍から見ればただの変人だ。見られなかっただけでもよしとするべきだ。

とりあえず、看板を写真に取り、古墳も写真に収め、もう1度遺跡を見ていると、段々と何かがおかしいことに気付き始めた。
もしかすると、それははじめから気付いていた事だったかもしれない。いや、気付こうとしなかっただけだろう。

・・・そもそも世界初すら怪しいし、２０００年前の日本にメイドがいたらおかしい。

所謂、村起こしのための話題づくりだったんだんだなと1人納得していた俺に後ろから声をかけてきた人がいた。

「今、メイドの埴輪がないと言ったさ？」

・・・見なくても分かる。絶対に、関わってはいけないタイプの人間だ。
俺は振り向くことなくその場から立ち去ろうとした。
だが、その変な口調の女は俺の前に回りこむと、俺を下から覗き込んだ。

「ちょっと、そこの君。無視しなーい」
「・・・」

俺はそいつを無視すると、右へと避ける。
すると、そいつも右へと移動する。

「・・・」

俺が、踵を返すと、素早くそいつは俺の前に回りこんで正面に立ちふさがる。

これ以上繰り返しても同じことになるだろうな。ここはきっぱりと言うべきだろう。

「悪い、邪魔だから退いてくれ」

「まあ、いいさ。それよりもこんなとこさ来て、何してるさ？」

多少睨み付けたつもりだったのだが、その女は平然とした顔をして俺の質問を無視する。

・・・こういう人の話を聞かないタイプは苦手なんだよな。俺は思わず溜息をついてしまう。

「・・・何がいいんだ、それより邪魔なんだが」

「で？」

「・・・随分と言葉を端折ったな」

最後には、無言で俺をじっと見つめていた。

多分話すまで俺の前から退くつもりがないのだろう。

俺は、厄介な奴に捕まったものだと肩を落とし諦めると、その女にここに来た目的を話し始めた。

「史跡巡り・・・のはずだったが、イベントがあってな。それに参加してる」

「ふーん、そうなのさ。だけど、全然探す気が見えないさ。無気力さ」

「・・・悪いか」

本心を突かれ、この女はエスパーか？と俺は内心毒づいた。
すると、目の前の女は意地悪い笑みを浮かべる。

「本当に表情に出やすくて分かりやすいさ」

「・・・」

どうやら俺は気持ちが顔に出やすいタイプらしい。
表情に出るなら、今の気分を出してみたら気付いてくれるかもしれないな。
早くどこか行け、早くどこか行け・・・。

「折角だから、記念館も見ていくといいさ。案内するさー」

だが、相手は都合よく無視できる人間だったようだ。全く意味を成していなかった。
俺は、完全に追い払うことを諦めると、どう見ても地元の人には思えない女に質問する。
普段なら、丁寧語で話したかもしれないが、精神的に疲れていたためどうでもよかったのだ。

「・・・ところで、あんたも探しているんじゃないのか？」

「埴輪？探してないさー。うちは興味ないさ」

「あんたは、地元の人間なのか？」

「うちは、ここが田舎なのさ。うちの名前は、広井　麗香　（ひろい　れいか）。麗しいに香るって書くのさ」

「俺は、有栖　景だ」

お互いに自己紹介を済ませる。

この広井という女は、服装はノースリーブの白のワンピース。
すらりとしたきれいな足に目を奪われそうになるが、見ないように努める。
肌は非常に白く、モデルでもやっているのだろうかとさえ思ってしまう。
１６０くらいの身長、笑うと少し八重歯が覗く。ほんわかとした見た目と違い、喋ると非常に胡散臭い話し方をするのが、印象的だ。

すると、急に何の前触れもなく広井という女が俺に指を突きつけると言った。

「アリスでいいさ」
「いや、何かイントネーションが・・・。ついでに、その台詞は俺が言うのが普通だと思うんだが・・・」
「アリスー、頭固いさ。それに初対面の女の子に名前で呼ばせる気？アリスで決定さ」

とりあえず、今会話をした限りでは、誰とでも親しく会話ができるタイプに思える。
というよりも、単に強引なだけような気がする。
結局、苗字で呼んでもらうことにしたのだが、イントネーションの違和感を拭うことはできない。

・・・だから、俺は苗字で呼ばれるのはあまり好きではないけどな。

俺たちはまず、建物跡から回ることになった。
だが、そこは俺がさっきまでいたところだ。

「なあ、広井さん」
「ああ、麗香でいいさ。いや、麗ちゃんでもいいさ」
「いや、広井。ここさっきもいたんだが・・・」

名前やあだ名でいいとも言われたが、遠慮しておいた。
すると、じろじろと広井は俺を値踏みするように眺めると、子供が悪戯を思いついたような笑みを浮かべた。

「意外とうぶなのさ。かわいいのさ。ところでいくつさ？」
「15、高1だ」
「うちより2つ年下さ」
「・・・本当か？」

正直、この語尾が独特な女が2つも年上とは思わなかった。
どう見ても、俺と同じくらいか、年下としか思っていなかった。

「今、失礼なことを考えていなかったさ？」
「・・・記念館に行くか」

広井という女の疑問は無視して、記念館の方へ向かう。

・・・意外と勘は鋭いようだ。

「これが、メイド埴輪と呼ばれてる埴輪さ」

記念館に入った俺は、自慢げに埴輪を説明する広井の話をぼーっと聞いていた。

別に埴輪にも遺跡にも興味があるわけではない。

「・・・」

俺が、思わず溜息をつくと広井は説明を止める。

「どうしたさ？」

「いや、なんと言うのか・・・。本当にメイドなんだな」

「メイドさー。これ、本当に古代文明のものか分からないさ」

今、俺たちの目の前にはメイド埴輪がある。

・・・本当にメイドだな。フリフリのエプロンドレス、カチューシャまで、ご丁寧にもついている。

でも、顔は埴輪特有のものだ。激しく違和感を感じる。

こんな物を古代人が作っていたなんて信じたくない。

「・・・」

「・・・」

互いにコメントがし辛いせいか、無言の時が続く。

俺は、黙って立ち上がると写真を撮っておいた。これで、調べ事は終わりだな。

すると、広井は俺のカメラを見て言った。

「・・・ついでだから、一緒に撮るさ」

「・・・好きにしてくれ」

俺と広井は近くにいた人に頼んでメイド埴輪の前で1枚だけ写真を撮った。

嫌と言ってもどうせ聞いてくれはしないなら、ある程度妥協して相

手をするのが一番だしな。
写真を1枚撮ってもらうと、俺はカメラを受け取りに行こうとした。だが、広井は俺の腕をつかむと、カメラを持った婆さんに人差し指を立てて言った。

「もう1枚お願いするさ」
「・・・もういいだろ」

俺が相手に迷惑だと思い、広井を嗜めると、意外な人が広井を援護した。

「あら、坊や。彼女は大切にしないとダメよ」

それは、俺たちを撮ってくれていた婆さんだった。俺のことを嗜めつつも何だか俺と広井を交互に見ながら孫を見るように微笑んでいた。
・・・彼女じゃない、と言いたかったが、何だか幸せそうに婆さんが微笑んでいたのでこれ以上言うのは憚られた。

写真を撮り終えると俺と広井は婆さんにお礼を言う。
すると、何故か婆さんは律儀にも深々とお辞儀をすると、俺たちの下から去っていった。
しばらく俺たちは婆さんを見送っていたのだが、その姿が見えなくなると、広井は俺の腕を取ると走り始めた。

「ついでにお土産も買って行くさ」
「いきなり走るな。・・・それに、大した物もないしな」
「うちも買うから、アリスも買うさ」
「・・・結局、俺の話は聞いてないんだな」

俺は、断ったのだが押し切られる形で購入することになった。
他の客も買ってるみたいだが、こんなメイド埴輪はいらないんだがな・・・。
それに、俺が持っている埴輪はカランカランと中で音がするしな。
まあ、いいか。

結局、俺はメイド埴輪を買ってしまったのだが、ふと時計を見ると2時間ほど経ってしまったことに気づいた。

「俺、そろそろ戻るな。友人も待ってるだろうし」
「うちも、そろそろ帰るさ。アリス、楽しかったさ」
「俺も悪い時間じゃなかった。じゃあな、広井」
「また、どこかで会うかもしれないさ。アリス」

こうして、俺たちは別れることにした。
あまり会いたくないと思ったが、また会うような気がする。
俺は、この時そう思った。

「景君!!どこ行ってたの?」

俺が急にいなくなったと言って騒いでいたという恵麻たちと合流できたのは、その日の夕方、
イベント終了時のことだった。
「勝手にどこかに行くな」とか「何で、携帯持ってないの」とさんざん文句を言われた。

・・・非常に理不尽な話だ。

そして、夕日が山に沈むと同時に進行役が壇上から声を張り上げた。

「今年は埴輪は発見されませんでしたあああっ！！」

妙にテンションの高い進行役の糸美とかいう女。
そんなに見つからなかったことが、うれしかったのだろうか。

「誰かが、手に入れたという情報は来ているんですけどねえ？おかしいですね。目印があるので持っている方は名乗り出てくださいね！でも、皆さんは１００万円よりも大切なものを手に入れました。
それは、今日という思い出です。・・・あれ？」

今年は、どうやら見つからなかったらしい。
いいことを言って、場を閉めようとするが、客の反応は冷たい。そもそも目印が何かということ言わない時点で、１００万をくれる気はないだろう。

「何いいこと言ってごまかそうとしてんだよ。あり得ねえ」

幸樹も文句を言っていた。
誰か、手に入れたのに気づいていない大馬鹿者がいるらしい。俺には関係のない話だけどな。

「幸樹、恵麻。帰るぞ」
「は～い」
「仕方ねえよな、全く1日損したぜ」

「はいはい、押さないでください」
向こうでは、俺のが本物ではないかと夢見る人々が並んでいる。
それを背に俺たちは、村を後にしたのだった。
バス停へ歩いている途中、恵麻は俺が鞄につけていた不釣合いな埴輪を見つけると、しげしげと興味深そうに言った。
「景君、その埴輪・・・メイドさんだね」
「ああ。今日、買ったんだ。変な口調の女と一緒にな」
「ふ～ん・・・」
俺が広井のことを言うと、恵麻の声のトーンが低くなった。さらに、きつく睨まれてしまった。
何か、俺悪いこと言ったか？
こうして、バスは俺たち3人と俺の疑問を乗せて街に向かって走り出した。

「景様、少しその埴輪をよろしいでしょうか？」
「別に構わないぞ」
俺の退屈な話を聞き終わったエリスは何か思うところがあったのか、埴輪を俺から受け取った。
そういえば、目印がどうとか言っていたような気がする。俺は昔話をしながらふと思い出した。

エリスはしばらくその埴輪をしげしげと興味深げに眺めていたが、いきなり埴輪を振り始めた。
しかも、勢いあまって自分まで揺れている。俺はエリスの突然の奇行に狼狽した。

「おっ、おい。どうしたんだ？」

もともと世間一般とはズレが生じてはいるとは思っていたのだが、どうやらそれは俺の認識違いではなかったようだ。
エリスは、埴輪に耳を当てながらもう1度振る。

「・・・何か中に入っていますね。この埴輪って大切なものですか？」

どうやら埴輪の中に何かあると思っているようだ。確かに埴輪からは何か硬いものが当たったような少し高い音がしたのは事実だった。
俺も中身に興味を持ったので、エリスの言葉に反対しなかった。

「では、早速始めます」

そう言ってエリスは、手に持っていた埴輪を自分の足元へと置く。
そして、何かを拾い上げると、掛け声と共に床に置いたばかりの埴輪を叩いた。

「えいっ」
「エリス！？その手に持ってるのは何だ？」

俺が気づいたときには、もう遅かった。
当然のように埴輪は高い音を立て、埴輪は胴体を中心に真っ二つに

割れてしまった。破片が散らばってしまい、また掃除のし直しになりそうだ。

「もう少しましな方法があるだろ・・・」

と言うものの、俺も同じ方法を採っただろうから強く言うことはできない。

真っ二つになった埴輪を持ち、俺はエリスが来てから何度目になるか分からない溜息をつく。

とりあえず大きな破片だけでも捨てるかと思い、拾い上げたその時だった。その割れた埴輪の頭の部分の方から何か光るものが床に落ちた。

「・・・ネックレスか？」

「そうみたいですね」

俺の独り言にエリスも興味深げにその埴輪から出てきたネックレスを見ている。

そのネックレスは、紐に透明な六角柱の石がついているだけの単調なものだった。

俺は、それを拾い上げるともう1度じっと眺める。何か忘れているような・・・。

しばらくそれを眺めていると、ふいにエリスが俺に声をかけた。

「景様は休んでいてください。後は私がやっておきますので」

そう言うと、エリスは俺を部屋から追い出す。要するに掃除の邪魔だということなのだろう。

本人にしてみれば、一生懸命に失敗を取り戻そうとしているだけなのだろうが・・・。

「まあ、こういう生活もありなのか？・・・俺も大分毒されたものだな」

俺は自嘲気味に言うと、何か食べ物でも探そうと1階へと降りようとした。

だが、手に持っていたネックレスに気付くと部屋へと戻った。

「エリス、開けるぞ」

俺は、扉をノックするとその扉を開ける。

ん？よく考えたらここは俺の部屋じゃないか・・・。

「はい、景様。どうしました？」

エリスが掃除機をかけようとしている体勢のまま振り向く。

そのままの体勢で動かないエリスに俺は手招きする。

「ちょっとこっちに来てくれないか？」

「はい」

エリスは、掃除をしようとしていた手を止めるとこちらへやって来た。

「ちょっと、じっとしてくれ」

「はい」

エリスはきょとんとした顔で俺を見ていた。そんなエリスに俺はネックレスを首につける。

いつも掃除や買い物をしてくれるエリスへのお礼としては、拾い物で済ませるのは悪いことなのかもしれない。
それでも、感謝の気持ちを示すことが出来ればとも思う。

「えっ、え・・・。どうされたんですか、景様」

エリスが顔を真っ赤にし、腕を振り回して慌てているがさほど気にしない。
最近は見慣れてしまった光景だ。この家に来た頃は、こんなではなかったとは思うが、ようやくこの家にも慣れたのだろうと納得する。
少しは家族として見てくれているのだろうかと、少し嬉しい気もしなくもない。
だが、俺は照れ隠しもあってわざとぶっきら棒に言った。

「俺は、ネックレスなんてしないからな。いつも何かと世話になっているエリスにあげようと思っただけだ」
「そ、そうですか。では、このネックレスは大切にしますね。景様からのプレゼントですから」

エリスは、本当に嬉しそうだった。その子供のような無邪気な笑顔を見ていると、俺も嬉しかった。
俺は1つ引っ掛かることがあったような気がしたが、すっかり忘れてしまっていた。
忘れてしまうようなことだ、大したことではないだろう。

「・・・まあ、そのうち思い出すだろう」

そういうことは大抵忘れるのが、世の常だ。
1時間後、俺はそんなことはすっかり忘れ去っていたのだった。

第３８話：幕間１　俺とエリスと埴輪と（後書き）

今週は、木曜日も更新です。

第３９話：幕間２　待ち時間と大富豪

―景君は、自転車に乗れる？―

ううん。全然ダメなんだ。

―わたしも乗れないんだ・・・―

そうだ。どっちが早く乗れるか、競争しようよ。

―うん、いいよ。わたしが勝ったら、おねがい聞いてくれる？―

いいよ。でも、・・・ちゃんには負けないよ。だって、僕男の子だもん。

―そんなの関係ないよ。でも、今度一緒に練習しようね―

うん。

・・・妙にリアルな夢だった。

それもそうだろう。あれは、幼稚園の頃の俺の記憶なのだから。

・・・だが、あの子は・・・。

名前が思い出せそうで思い出せない。いや、思い出したくないだけなのかもしれない。

だが、確かにあの子を俺は知っている。

俺は別に記憶障害だとかそんなものではないからだ。それに、あの

子は俺にとって大切な人だったのだから・・・。

・・・そういえば、机の中に俺とあの子が写った写真があったはずだ。

寝ぼけた頭で、そんなことを考えているといつものようにエリスが扉をノックして中に入ってきた。

「景様、失礼します」

エリスは、既に俺がカーテンを開けて、ベッドから出ていたことに驚いているようだった。

俺は体を起こすと、気持ちとは裏腹に弾んだ声で言った。

「おはよう、エリス。・・・そんなに珍しいか？俺が日曜の朝から起きている事が」

だが、エリスは黙って首を振ると静かに言った。

「・・・景様、目が真っ赤ですよ。泣いていらしたのですか？」

・・・そんなことはない・・・と思う。

俺は、エリスから目を逸らすと、淡々と言葉を紡いだ。

「たぶん、埃でも目に入ったんだろうな。俺は顔洗ってすぐに行くから、エリスは先に戻っていてくれ」

「分かりました」

俺は、エリスを部屋から出すと、机の中から1枚の古ぼけた写真を取り出した。

そこには、小さな子供が2人並んで写っていた。
1人は、俺。そして、もう1人の子が夢に何度か出てきた子。

・・・俺の初恋の女の子、久遠　絵梨だった。

あの子は、この写真を撮った翌日、黙って他所の町に行ってしまった。
そして、2度と戻ってくることはなかった。

会いたいとは、もう思わない。だが、今でも夢に出てくるのだから、それは建前、所謂嘘なのだろう。

ただ、俺は、あの子が・・・絵梨ちゃんが幸せであってほしいとずっと願っている。
それだけは偽りのない本心だから。

藍羽　愛美は非常に困っていた。
理由は、簡単なことだ。１０時から2時間もあれば楽に収録を終えるはずだった。

スタッフは皆揃っている。

しかし、肝心のアイドルがまだ来ないのだ。
彼女は顔には出さないように努力していた。しかし、苛立ちを隠すことはできない。細かく右足が動いている。

そんな彼女に先程まで電話をしていた後輩の女性スタッフが恐る恐る話しかけた。

「・・・藍羽さん。今、連絡が来たんですが・・・」
その話を聞いた彼女は、大きく溜息をつくと数人のスタッフと共に自分の家へと入っていった。

片宮　莉子は困っていた。
理由は簡単なことだ。今日は午前だけで終わるはずだった。
午後からは久々にフリーだったのだ。

しかし、電車は一向に動く気配がない。アナウンスすらもなく。ただ何かが起きたということくらいしか分からない。
彼女のマネージャーが今日の仕事のスタッフにお詫びの電話を入れていた。

今日の仕事は、彼女が無理を言って貰った仕事だった。
ただ、メイドロボットに会ってみたいという個人的な欲。いくら人気アイドルとはいえ、遅刻などできる立場ではない。

彼女は、未だに何もアナウンスしない鉄道会社を呪いつつも、それが無駄だと知って溜息をついた。
そして、隣にいるマネージャーの十六夜さんにぽつりと言った。

「・・・十六夜さん。これって非常にまずいさ・・・」
「別に莉子ちゃんが悪いわけではないから。先方には電話してお詫びしておいたので、大丈夫ですよ・・・たぶん」

彼女は、莉子のデビュー当時からのマネージャーで、いい仕事を取ってくるのだが、何故か自分の言葉に自信がないのだ。
十六夜さんの、『たぶん』は、大体当たるから大丈夫。莉子は、そう自分に言い聞かせたが、いまいち不安を拭いきれなかった。

俺は、暇で仕方がなかった。

おばさんが、先程やって来てエリスへの取材は午後からになりそうだと伝えてきたからだ。
今は、恵麻と琴美ちゃんが俺の部屋に上がりこんでいる。

向こうは、今おばさんとテレビ局のスタッフが数人いてい辛いらしい。
そして、今はエリスを含めた4人で大富豪をしている。
女3人、男1人という状況は人によっては嬉しいかもしれないが、恵麻は幼馴染、琴美ちゃんは妹みたいなものだし、エリスに至っては見た目は人間そのものだが、実際にはロボットだ。
それに、今は嬉しいとかそんなことを考える気分にすらならない。
その原因は、大富豪にあった。

「・・・」
「景、弱っ」
「つ、次は勝てるよ～」
「わ、私が勝ってしまったのがいけないんです」

俺は、恵麻たちの慰めの言葉を聞きつつ、余った5枚のカードを床に落とした。

これで5度目になるのだが、一向に勝てる気配がない。俺は5回連続で大貧民だ。
たまに、ジョーカーや2が来ても大富豪に持っていかれてしまう。
恵麻が2度、琴美ちゃんが2度、そしてエリスが1度大富豪になっている。
だが、俺は1度も大富豪はおろか貧民にすらなっていない。・・・
別にカードゲームくらいで負けても悔しくはない。・・・悔しくなんかない。

「景、すごく悔しそうだね」
「琴美、ダメだよ～。事実でもそんなこと言ったら、景君がショックを受けちゃうよ～」

この姉妹は揃いも揃って俺に恨みでもあるのか？
琴美ちゃんは俺が負ける度にこの調子だし、恵麻は俺をフォローしようとしてくれているのか、貶しているのか分からない。

俺が黙っていると琴美ちゃんは、トランプを切りながら挑発するように鼻で笑った。

「もう1回やろっか？景」
「・・・次は、貧民になるからな」

俺が悲壮な覚悟を決めて言うと、恵麻とエリスは、ダンボールに入った猫でも見るかのように哀れんだ視線で俺を見つめていた。

「景君・・・」
「・・・景様、目標が低すぎます」

俺はその視線を振り払うように力強く言った。

「勝てばいいんだ、勝てば」
それに対して琴美ちゃんは、恵麻に耳打ちをする。
「貧民は勝ちじゃないっていうのは・・・言わないのが優しさだよね、お姉ちゃん」
「うん、そう思う」
・・・わざと聞こえるようにいいやがって。
俺は、むっとしながら琴美ちゃんを見ると、カードを切り終わった琴美ちゃんに見下したような視線を返された。
・・・次は絶対に勝ってやるからな。俺は、琴美ちゃんを睨み返しながら誓った。

まずは、カードからだな。
とりあえず、琴美ちゃんが配り終わると、俺はカードを見る。
「・・・」
一気に気分が落ち込むのが分かった。
今やっているルールは、８切り、スペ３、１１バック、縛りがあるくらいだ。
ローカルルールは腐るほどあるが、いちいち気にしていると面倒なので大して入れてはいない。
また、ジョーカーは何でも代用可だ。
そして、大貧民は大富豪にカード２枚渡さなくてはならない。ちな

みに、大富豪はエリスだ。

・・・さよなら、俺の2枚のジョーカー。差し出されたカードは、ものの見事に俺にとってもいらないものだった。

俺はこの時、既に負けを悟っていたのかもしれない。

「7の3カード。ないよね？8のペア。5っと。これで上がりー」

「景様、私もお先に失礼します」

「け、景君。ごめんね。4の3カード。それで、9」

「・・・また大貧民か」

あれだけ意気込んで負けるのは格好悪いな・・・。

結局、ろくにペアのカードもなかった俺は手も足も出ずに負けてしまった。

俺は、もう勝てないので止めようとトランプを集める。

その時、部屋の扉がノックされた。たぶん、母さんだろう。

「景ちゃん、入るわよ」

「ちょっと待って。すぐに開ける」

案の定、扉を開くとそこにはお盆にお茶をのせた母さんがいた。

そして、俺の手元のトランプをじっと見ている。

・・・何だか嫌な予感がする。

その予感は、すぐに現実のものとなった。母さんは、嬉々とした表情で目を輝かせて言った。

「あら、トランプ？私も混ぜてもらってもいい？」
「はい、もちろんです」
「「・・・」」

エリス１人が嬉しそうに了承するが、残りの２人と俺は顔を見合わせる。
母さんが子供と一緒に遊ぶのが好きなことは付き合いの長い俺たち３人が知らないわけがない。
恵麻も琴美ちゃんもおばさんが仕事でいない間は俺の家で夕食を食べていたりしており、恵麻が中学になってきちんと一通り料理が出来るまではこちらに来ることの方が多かったのだ。
恵麻も琴美ちゃんも母さんのことは好きだと思う。

だが、母さんには１つ問題がある。

異様なまでに勝負事に弱い上に、何度も負けると露骨に不機嫌になるのだ。
別に暴力を振るうとか料理をボイコットするわけではない。ただ、大富豪で１０連敗したときの顔は、怒りを通り越して泣き出しそうだったのは未だに忘れることは出来ない。

だからこそ、俺たちは渋い表情をするのだ。
いい年にもなって高校生になった俺たちと遊びたがるのもどうかと思うんだけどな・・・。

「景ちゃん？今、失礼なこと考えていたでしょ」
「・・・そんなことない。母さんも折角だからどう？」

母さんに睨まれ、俺が動揺して思わず心にもないことを言うと、恵

麻たちは無表情で俺のことを見ていた。
曰く、ヘタレと。

「では、皆様。お好きなのをどうぞ」

エリスが、そう言うと、俺たちは適当にカードを取る。
５人になったので、今回は最初からやり直しということになる。俺は、１人だけ１０枚のものを選んだ。いつもカードが残って負けるので、少ないほうがいいだろうと判断した。
エリスはいつものように俺たちが取り終わるまで笑みを絶やすことなく待っていた。
絶対に俺たちよりも先に取ろうとはしないのだ。だが、勝負の時は、遠慮がちなのだが容赦がない。

とりあえず俺は、カードを整理すると全員の様子を伺ってみた。

恵麻は、特に変わりないといった様子。たぶん、可もなく不可もなくといったところか。
琴美ちゃんは、俺の方を見て意地悪く笑っている。少なくともジョーカーが1枚はあるだろうな。
エリスは、全く分からない。俺の視線に気付くとにこにこと温和な笑みを浮かべるだけで意図が掴みきれない。
そして、母さんは・・・。

「・・・うっ」

どうやら、カードの巡りがよくないようだった。

そして、勝負は始まった。

・・・どうするべきか。

勝負も中盤。まだ、誰も上がってはいない。
今、俺は迷っていた。俺の手元には3枚のカードが残っている。
2が2枚と5が1枚。そして、俺の前の母さんが出したカードはダイヤの1。
今までにジョーカーを使ったのは誰もいない。スペードの3も出てきていないところを考えると情勢は予断を許さない。
うまくいけば勝てるかもしれない、いや・・・少なくとも大貧民だけはないはずだ。

俺は、少し迷った末に2を出す。
すると、待っていたといわんばかりに琴美ちゃんがジョーカーを出した。

「景、これで万策尽きたでしょ？ふふん」

上機嫌に琴美ちゃんは笑っていたが、すぐに表情が曇った。
何事もなかったかのように、エリスはスペ3を出してカードを退ける。

「では、これで流しますね」

そして、エリスはクイーンを1枚を置いた。エリスのカードは5枚も残っており、俺たちの中では最も多い。
だが、随分と余裕があるのように思える。

「私、パス」

母さんが考える素振りすら見せず言うと、俺の番が回ってきた。
カードがないのは分かるが、もう少し迷うことも必要だと思う。母さんは即決即断の人だから仕方がないと言ってしまえばそれまでなんだが。
横目で母さんを見ると、手がプルプルと震えているのが分かる。

・・・本当にカード巡りが悪いんだな。

自分の母親だからこそ呆れ果てて何も言えない。
ここまで真剣にならなくてもいいと思うんだが・・・まあ、それは無視するとして・・・さてと、俺はどうしたものか。
恵麻や琴美ちゃん、エリスの表情を伺ってみるが、皆表情を悟られまいと目を合わせようとさえしなかった。そこで俺ははっとする。

・・・何で俺は大富豪でこんなに必死なんだ？・・・遺伝なのか？

俺の右隣に座り、先程からうんうんと何やら唸っている母さんをちらりと見た。

「うー・・・」

・・・どう考えても遺伝だ。

俺が、親子の遺伝に愕然としていると、恵麻たちが勝手に進めていることに気付いた。

「私、パスだよ～」
「悔しいけどパス」

「・・・私もパスします。景様、どうぞ」

そして、何故か俺の番が回ってきていた。
首を傾げる俺に琴美ちゃんは身を乗り出すと、俺の持っているカードを奪い取ると床に置いた。

「何だ・・・ドボンかと思ったのに、残念。景、よかったね、1番だよ。じゃあ、お姉ちゃん、次いいよ」

俺は状況を掴みきれない。手元には1枚もカードは残っていないはずなのだが・・・いつカードを出したんだ？

「あ、私上がりです」

エリスが2番目に上がると俺はエリスを手招きした。

「なあ、エリス。俺はカード出したか？」

俺がそう切り出すと、エリスは特に考えることもなくはっきりと言った。

「あ、はい。出したというよりも、落としたといった感じでしたけど」

「・・・そうなのか？まあ、勝ったからいいが」

母さんからの遺伝について考えていた時にたぶん落としたのだろう。
俺は、そう結論付けてこのことは忘れることにした。

その間にも琴美ちゃんが上がり、恵麻がたった今上がった。
要するに母さんの負けということだ。

その母さんは言うと・・・。

「負けたーっ！」

悔しそうにトランプのカードを放り投げると、俺に泣きついてくる。
俺が母さんをと勝負事をしたくない理由はここにある。とりあえず、頭を撫でておくがそうしておかないと後で拗ねるのだから手に負えない。
ちなみに母さんはこれを冗談でやっているのだが、一応撫でないと拗ねる。
飯時などにちくちくと針を刺すように言われるので迷惑この上ない。

そして、これをやるともう１つの問題が発生する。

「景君のマザコン・・・」
「やっぱり景はマザコンだねー」
「景様・・・大変失礼ですが・・・その・・・私も景様はマザコンかと・・・」

恵麻たちがいる前で、こういうことをされると必ずマザコンと言われるのだ。このやり取りも何度もあるので・・・慣れたくはないが慣れた。
だが、いつまでもこうしていると本当にマザコン扱いされそうなので、母さんに声をかける。

「ところで、いつまでくっ付いているんだ？」

俺がそう言って母さんを見ると、母さんと視線がばっちり合った。
すると、母さんは俺を上目遣いに見ると言った。

「景ちゃんのマ・ザ・コ・ン」
「・・・」
俺は、黙って母さんを引き剥がした。その表情は、まさにしてやったりといったようだった。
・・・俺、拗ねてもいいか？
遠い思い出の中の女の子に俺はそう問いかけた。

第３９話：幕間２　待ち時間と大富豪（後書き）

本編後の雑談　希＝希望　蓮＝蓮華

衣「生徒会からのお知らせですわ」
希「はいはーい。そんな堅苦しい挨拶は抜きにして今日も張り切っていってみよー」
蓮「浩一がいない・・・」
希「ペンネーム、剣道一直線さんからのお便りです」
蓮「分かりやすい」
希「・・・？。最近、部活の先輩の暴力が怖くて夜も眠れません。どうしたらいいですか？」
衣「それについては、私がお答えしますわ。か、むぐっ」
蓮「プライバシーだから、個人の名前は禁止」
希「うーん、まずは凶暴な先輩が卒業するのを待つしかないと思うな。それでも、ダメなら私に相談してね。色々と学校から追い出す方法があるから、てへっ」
蓮「希望、お疲れ様」
希「え？まだ、次のお便りが・・・あ・・・」
衣「希望さん。天国と地獄、どちらがお好みかしら？」
希「・・・どっちもいやーーーーっ」
衣「待ちなさいっ」

蓮「この番組は、風紀委員会委員長の美里　蓮華がお送りした。・・・あの２人は本当に世話が焼ける」

第４０話：メイドさん、テレビに出る　その２

「こんにちは」

それが、その女の第一声だった。
そして、次に言った言葉はこれだった。

「あれ？あなたは確か・・・前にもお会いしましたよね？」
「・・・」

・・・あんた、誰だ？俺は相手をじっと見るが、こんな知り合いはいない。
ドッキリでもやるつもりなのだろうか？
親しげに話しかけてきたアイドルという女が途端に胡散臭く感じた。

そのアイドルを家に通してから数分。
よく分からないが、俺は妙にその女から話しかけられていた。

「本当に懐かしいですね。・・・でも・・・その顔は覚えてないといった感じですね」
「はあ、すいません」

俺は思わず丁寧語になりながらも謝り、いつ会ったのだろうかと思い出そうとしていた。
だが、全く心当たりはなかった。
その間も、アイドルの女は黙って何か含みのある笑顔を浮かべたままだった。時折、癖なのか耳に手を当てていたが、流石にトップア

イドルともなれば、そういう行為も様になっている。
俺が、思い出そうと頭を捻っているとその人は見かねたように声をかけてきた。
「いえ、気にしないでください。もう古い話ですから」
「・・・・」
・・・気にするなと言われると余計に気になるんだが。
それに、そんなことはないかもしれないが・・・。
俺は気になったので、にこにこと笑顔を崩さない女に聞いてみた。
「ところでそれは何年前の話なんだ？」
すると、その女は特に驚いた様子を見せることなく、人差し指を頬に当てながら言った。
「そこまでは古くないですよ。1年前のことです」
「・・・1年前？」
・・・まあ、違うよな。俺は、少しだけ気持ちが落胆するのが分かった。
だが、女は俺が落胆したことに気付く様子もなく話を続ける。それに、何だか顔に悪戯っぽい笑みを浮かべている。
「ふふっ、こう言ったら分かってもらえます？アリス、元気だったさ？うちさー、広井　麗香さ」
「ああっ！？お前！」
俺は思わず立ち上がると相手を指差して叫んでしまい、その行為に

気付くと顔が火照るのを感じた。
母さんや恵麻も俺を見て、ポカンとした表情をしている。

いや、リビングの空気が凍り付いていた。
今をときめく人気アイドルをお前呼ばわりしたのだから仕方がない。
おばさんは、顔が青くなっていたし、アイドルの隣にいたマネージャーは怒りを抑えようとしているように見えた。

部屋を空気を誰か打ち破ってくれないだろうか、俺がそう思った時だった。
エプロンのままのエリスが台所から戻ってきた。

「景様、こちらの方々がそうなのですか？」
「そうらしい。とりあえず、座ったらどうだ？」

俺は、席から離れるとエリスに座らせようとするが、エリスは頑なに座ろうとはしなかった。
ちなみに椅子は全部で５つ。１つだけ空いているのだ。
現在、リビングの椅子に座っているのは広井とそのマネージャー、おばさん、母さんの４人。その４人は色々と今日の予定を話しているようだ。
スタッフの人は先程から慌ただしく動き回っているし、恵麻と琴美ちゃんは俺の隣で突っ立っている。
それにしても、何だかエリスの様子が落ち着きがないような気がする。

「なあ、エリス？どうかしたのか？」
「いえ、何か忘れているような・・・あっ」

エリスは何かを考えていたようだったがエプロンをしたままという

ことに気付くと、小さく叫んで慌てて台所へ戻っていった
エリスが台所へ戻ってしまうと、俺は、４人の話を邪魔しないように立たせたままの恵麻と琴美ちゃんにそっと謝る。

「悪いな、恵麻、琴美ちゃん」
「いいよ～、そんなこと」
「うん、そんなこと気にしてないってば。それにあの片宮　莉子ちゃんにも会えたわけだし、文句なんてないよ」

こうして笑って許してくれるのが唯一の救いだろうな。
俺は恵麻と琴美ちゃんが笑っているのを見て、そう感じた。
しばらく広井の方を見ていた恵麻と琴美ちゃんだったが、戻ってきたエリスを見つけると声をかける。

「エリスちゃん、お母さんの我侭聞いてもらってごめんね」
「いえ、私は構いません」
「お母さんに文句があったら私が代わりに言ってあげるよ。お母さん、ああ見えてすごい我侭なんだから」

エリスが家に来てから1ヶ月が経とうとしている。初めは、エリスが生活に慣れるか不安な部分もあったが、少しは家族らしくなったかとも思う。
それに、こうして恵麻たちとも会話ができているし、すっかり日常に溶け込んでいる。
俺がしみじみと感慨に耽っていると、しばらく俺たちのやり取りを見ていた広井が話しかけてきた。

「もしかして、この綺麗な人がロボットなのさ？」

その視線は、本当にロボットなのかという懐疑のものだった。

俺たちは、エリスに初めて会った時、同じ様なことを思ったので思わずお互いに笑ってしまう。
だが、広井の言葉は尤もな話だ。未だに俺も信じきれずにいるのだから。
すると、エリスは少し考えると伏し目がちに言った。
「はい、ですが・・・誰も信じてくれないのです。・・・ですので、証拠を見せますね」
俺はその言葉を聞いて、まさか脱ぐのか！？と思ったが、エリスは服に手をかけることはせず、自分の指先をつまむと、それを抜き取った。
「っ！？」
広井は声が出せなかったみたいで、口を半開きにしたまま動かなかった。他のエリスを知らない人たちも同じ様に言葉を失っていた。
俺はというと、別のことを考えていたので、少し顔が熱かった。皆、エリスに注目しているから大丈夫かと油断していると隣からツンツンと肩をつつかれた。
「ねえ、景君？顔が赤いよ～」
恵麻は声を出来る限り小さくして話してくれたのだが、小さく話してといっても近くにいる人には余裕で聞こえたようだった。
「うわっ、本当だ。景ー、エッチなこと考えたんでしょ？」
恵麻に便乗して騒ぎ立てる琴美ちゃんに、さらに広井も便乗して悪乗りする。

「変態さ、変態がここにいるさー」

そう言って広井は自分の身を抱きしめるようにしながら俺を見ていた。

・・・俺は完全におちょくられているな。

「・・・」

マネージャーの俺を見る視線が痛い。

俺のせいじゃないだろと思って、睨み返すとしばらく睨み合いが続く。

そのまま睨み合っていた俺たちだったが、マネージャーは溜息をついて俺から視線を逸らすと、広井に何やら耳打ちをする。

すると、広井は先程とは打って変わり、真面目な顔つきに戻る。

「そろそろ準備できたようですから、始めてもよろしいですか？」

どうやら丁寧語の方はアイドルの仕事をやっている時だけのようだ。

あまりの身の移り変わりの速さに俺たちはついていけない。たぶん、この辺りが俺たちのような一般人とは違う所なのだろう。

広井がそう言うと、皆も移動を始める。おばさんは、俺の所へやって来ると言った。

「景ちゃん、ちょっといい？」

「おばさん、どうしました？」

おばさんに連れられて俺は家の外へと出た。

家の外に出ると、おばさんは俺の方に向き直ると、いきなり頭を下げた。
俺は訳も分からず困惑するしかなかった。このままというわけにもいかず、俺はおばさんに声をかける。

「おばさん、何かあったんですか？とりあえず、顔を上げてください」

そう言ってから、しばらく経ってからおばさんはようやく顔を上げる。
そして、おばさんは、神妙な面持ちで話を切り出した。

「実はね、話っていうのはこれからのことなの」

俺は、ごくりと唾を飲んだ。何だかおばさんの雰囲気がいつもと違い、重々しかったからだ。
そして、おばさんの次の言葉を待っていると、おばさんは言いにくそうな顔をして言った。

「景ちゃん、テレビ出たい？」
「いえ、別に」

俺が即答するとおばさんは何だかひどく慌てたように早口で言った。

「え、でも、出たかったらおばさん何とかするわよ。うん、モザイクとか声は変わるけど」
「・・・俺は犯罪者ですか？」

おばさんは、視線を避ける。

・・・確かにメイドが家にいるなんておかしいとは思うが、犯罪になるのか。
俺が真剣に考え込んでいるとおばさんは、くすくすと笑いながら言った。

「ああ、景ちゃん。冗談よ、冗談」

俺が、不機嫌におばさんを見ると、おばさんは苦笑いを浮かべる。
だが、今日は仕事のために来ているせいか幾分真剣な面持ちで話を続ける。

「実はね、景ちゃんを出すとプライバシーとか色々と問題になるからって却下されちゃってね。それに、番組の時間上景ちゃんのインタビューは無理なのよね。ごめんね」
「その前に俺、出たいなんて一言も言ってないんですが・・・」

俺がそう言うと、おばさんは固まっていた。
俺は、目の前で手を振ってみたり、両手で音を立ててみたりしたが反応がない。

仕方がないので、放っておこうと思い、家に戻ろうとすると、家から恵麻と琴美ちゃんが出てきた。

「エリスはちゃんとインタビューに答えてるか？」
「それなんだけど、エリスちゃんが、景が戻って来ないって心配してたよ」

琴美ちゃんは、そう言っていつものように意地悪い笑みを浮かべた。
俺には、琴美ちゃんの笑顔はいつも意地悪く見えるのだが、いつもこんな笑みしか浮かべていないのだろうか？今度、恵麻にでも聞い

てみるか。
そんなことを考えていると、恵麻は俺の後ろにいたおばさんを一見すると、それだけで当たり前だと言わんばかりの様子で言った。

「あ、お母さんが固まってる」

すると、悪戯を思いついたような子供のような笑顔で琴美ちゃんがおばさんの後ろに立つと声をわざと低くして肩を叩いた。

「藍羽君、君は注意力散漫だね。明日から来なくていいよ」
「ひゃっ、ごめんなさい、すいません、もうしません・・・」
「・・・」

俺は思わず唖然としてしまった。恵麻と琴美ちゃんは笑いをこらえようと必死だった。
しばらく何故か俺に謝り続けていたおばさんだったが、ようやく状況に気付くと顔を真っ赤にした。
そして、琴美ちゃんにこやかな笑顔を向けるととても優しい声で言った。

「あとで、じっくりとお話しようね」
「え・・・」

琴美ちゃんは辛うじて笑顔だったが、どう見ても引きつっていた。
恵麻は、気の毒そうにしながらも、しっかり琴美ちゃんから距離を取っている。

俺は視線で、薄情だなと送ってみた。
すると、恵麻から視線でこう返された。『これも妹のためだよ～』と。

・・・嘘が上手になったな。俺は恵麻から視線を逸らし閉口した。

そういえば、エリスのことも気になるし、一旦戻るか。
そもそも恵麻たちがここに来たのはそのためだったのだからな。そこで、おばさんの未来のためを思って一言だけ言っておく。

「おばさん、さっきの続きなんですが・・・最近ちょっと呆けてませんか？」
「・・・」

おばさんは、黙って俺を睨んでいた。
言った後に失礼だったかとも思ったが、おばさんならたぶん許してくれるだろう。

リビングに戻ろうとすると、その扉の前に広井のマネージャーがちょうど出てきた。
だが、俺はあのマネージャーはどうも好きになれない。何故なら、俺に対する視線が突き刺さるように痛いからだ。
諦めて部屋に戻ろうとすると、そのマネージャーは俺を見つけ、少々棘のある口調で呼び止めた。

「ちょっと有栖君。こっちに来てくれる」

その有無を言わせぬ口調に俺は黙って従った。

「何ですか？」
「いえ、何ていうか・・・もうちょっと暗いイメージの子を想像していたんだけど」
マネージャーの言いたいことは分からなくもなかった。
だが、想像通りだったら何か問題でもあるのだろうか。
そんなことを考えているとマネージャーは何か思い出したように話を続ける。
「あ、そうだ。これは私からのお願いなんだけど」
「はい」
俺が、返事をするとマネージャーは呆れたように笑う。
「まだ、話は続いているんだけどね・・・。莉子と知り合いらしいけど、あまり公言しないでほしいの」
「エリスがテレビに出ると来たことはバレますけど」
俺の言葉にマネージャーの顔は、引きつったように見えた。だが、深く溜息をつくと、半ば諦めたように
「・・・来たことは仕方ないけど、それでも結構親しいみたいだったからお願いね。そうだ、折角だからインタビュー見ていったら？あなたのお母さんは見てるし、今は休憩中だから」
それだけ言うと、マネージャーはリビングに入っていった。
後に残された俺は、１つだけ疑問が残った。
・・・どこが親しいんだ？

俺は疑問が残りつつもリビングへと入った。
リビングへ入り、リビングにいた母さんやエリスと話をしているとマネージャーが俺の所へやって来た。
そして、俺を部屋の端に連れて行くと周りを気にするように小声で俺に囁いた。

「もし、色々と話したら社会的に抹殺するから」
「・・・」
「冗談だけどね・・・たぶん」

最後の不穏な言葉は、きっと冗談だと俺は信じたい。

それから、広井とエリスの当たり障りのない会話は３０分ほど続いた。
インタビューというよりもエリスの能力の確認のような気がしたのは気のせいではないはずだ。
インタビューが終わり、スタッフたちがカメラなどの道具を片付ける中、エリスは俺の所に真っ直ぐやって来るといつもよりも子供っぽい笑顔を浮かべて言った。

「景様、どうでしたか？私、上手く話ができていたでしょうか」
「大丈夫だ、広井よりも上手く話せていた」

正直に褒めるのも何だか気恥ずかしいのでそう言うと横から声がした。

「アリス、照れてるのさ」

そこにいたのはまあ予想通りと言うべきか、広井だった。
既に仕事の時の『片宮　莉子』ではなく、『広井　麗香』に戻っているようだった。
何だか笑顔が非常に嫌らしい。

「また、あんたか。帰らなくていいのか？」
「今日はもうオフさ」

・・・さっさと帰れ。
俺がそう睨むと、広井はふふんと笑いながらちらっと時計を見るとリビングの椅子に座り、俺も座るように促しながら言った。

「折角だから話でもするさ」
「・・・」

俺は、その言葉を聞いてまずマネージャーを探した。
マネージャーは、いつの間にか戻ってきていたおばさんと何やら話し込んでいたが、俺の視線に気付くと、首を2度縦に振るとおばさんとの話に戻った。

・・・あれは、一応いいのか？

そして、視線を戻すといこちらもいつの間にか恵麻と琴美ちゃん、それにエリスがちゃっかりと座って話を始めていた。

「景と会ったのって去年なんだー」
「そうなのさ。今もそうだけど、去年も可愛げが欠片もないのさ」

そして、広井は俺を指差しながら笑う。
すると、エリスは広井に少しむっとしながら言った。
「景様にも可愛い所はあります。寝顔とかは可愛いですよ」
「ぶっ」
俺は、思わずエリスの言葉を聞いて噴き出した。
そんなこと言われたらどうなるか・・・。俺は恐る恐る４人を様子を伺った。
「へえー」
「景君・・・」
「ほお、それはいいことを聞いたさ」
「景様、私、何かいけないことを言ったでしょうか？」
エリスの無邪気な笑顔がこれほど憎いと思ったのは、エリスが学校に来た時以来だろうか。
俺は皆から視線を逸らすが、予期したかのように広井が俺の目の前に回りこんでいた。
「人間、誰にだって可愛いとこくらいあるさ」
「・・・」
俺は、黙って反対側に顔を逸らす。だが。そこにはまさに小悪魔の笑みを浮かべた琴美ちゃんがいた。
「ねえ、景。エリスが言うくらい寝顔可愛いんだー。ていうか・・・朝、起こされてるんだ」
「・・・勝手に起こしに来るんだ」

俺の言い訳も非常に苦しいものがある。
琴美ちゃんは俺の状況をよく理解しているようで、悪魔のような笑顔を浮かべてさらに話を続ける。

「ねえ、もしかして・・・一緒に寝た？」
「「っ！？」」

俺は絶句するしかなった。数年前までは、純粋無垢だった琴美ちゃんも今ではこんな知識を身につけているのだと。
もっとも、俺の考えすぎで実際には単に寝ただけで他意はないのかもしれない。
とりあえず、誤解のないように説明しようとすると、琴美ちゃんははっとした顔になると少し照れながら叫んだ。

「も、もしかして、その先も・・・むぐっ」

だが、琴美ちゃんの口を顔を真っ赤にした恵麻が慌てて塞いだ。
そして、そのまま廊下へ出て行ってしまった。
残された俺とエリス、広井は唖然とするかしかなかった。

それから、しばらく経って恵麻が戻ってくるまで俺たちは気まずい空気を引きずったまま何も喋らなかった。
恵麻は、リビングに戻ってくると、顔を赤く染めて頭を下げる。

「み、みんな・・・ごめんね。琴美はお母さんに預けてきたから」

身内の恥というのもあるのだろうが、たぶん聞いていた本人が1番恥ずかしかったに違いない。

だが、折角、この話しにくい空気の中、恵麻が話を切り出してくれたのだから、それを見過ごすのは勿体無いことだ。
俺は、とりあえず恵麻に話しかけた。

「で、琴美ちゃんは・・・」
「お母さんに叱られてるよ。お母さん、物凄く怒ってた」
「・・・まあ、そうだろうな。でも、あの性格はどう考えてもおばさんからだろうな」

俺がそう軽口を叩くと恵麻はそうだねと苦笑いを浮かべながら頷いた。
俺と恵麻が話をしていたことで少し場の空気が軽くなったせいだろうか。広井がまた話を蒸し返す。

「で、本当のとこはどうなのさ？」

だが、2度も同じ手を食うほど俺も学習しないわけではない。
完全に広井の言葉は無視して話しかけてきたという事実だけを受け止める。

「ところで、これっていつ放送されるんだ？」
「・・・話を逸らしたのさ。まあ、いいさ。確か・・・5月のゴールデンウィーク明けだったさ」

暇だったら見るか。確か、8時か9時の番組だったよな。あとで、テレビ番組の雑誌でも買っておけばいいだろう。
ゴールデンウィークなんて、どうせどこにも出かけることはないだろうし、買いに行く暇ならいくらでもある。
少しは暇つぶしになりそうだなと考えていると、恵麻も弾んだ声で言った。

「私も見てみよっと。でも、景君テレビに出てないよね」
「まあ、エリスが出るなら一応見ておかないと」
「そっか～、エリスちゃんが出るんだ。一緒に見ようねエリスちゃん」
「はい、恵麻様」

俺たちはすっかり番組の話題で盛り上がっていた。
すると、存在が忘れられかけていた広井がおずおずと俺たちの会話に入ってきた。

「あ、あのさ・・・、うちも出てるの忘れないでほしいのさ」
「あ・・・」

すっかり忘れていた俺は間抜けな声を出す。
どうやら広井は、自分が会話の中にいないと気が済まないタイプのようだ。
普段はアイドルをやっているから、自分が忘れられるということはないのだろう。
今までとは打って変わりしゅんとなった広井を見て、俺はさらに追い討ちをかけるような言葉を投げかけてみた。

「まあ、俺は片宮莉子に興味なんてないけどな」
「ということは、広井麗香には興味があるということさ？」

・・・言いたいことを先に言われると、話が続けられないんだが。
折角、フォローしようと思ったのに先に言われては立つ瀬がない。
俺が言葉に困っていると、恵麻が横から話に入ってきた。

「え～と、景君はアイドルの片宮莉子ちゃんと仲良くなりたいわけ

じゃなくて、今目の前にいる麗香ちゃんと友達になりたいんだよね？」

俺は、恵麻のナイスフォローに頷いておく。何か違うような違わなくないような気がしなくもないが、大体は合っている。

やけに友達の部分が強調されていたような気がするが、友達以外に何になるというのだろうか。

俺が、困ったようにエリスの顔を見ると、エリスは全てを分かったような笑みを浮かべていた。

「景様。女性の心というものをもっと勉強したほうがいいと思います」

思いがけないエリスの言葉に俺は思わず固まった。

すると、広井が格好のえさを見つけたと言わんばかりにこの話題に食いついてきた。

「じゃあ、お姉さんが1から教えてあげるさ。鈍いのは罪さ」

非常にまずい雰囲気がするので俺は先手を打って叫んだ。

「確かに鈍いことは否定はしないが、何でこんな流れになる！？」

だが、恵麻は首を横に振りながら、呆れたように静かに言う。

「うん、やっぱり景君は分かってないよ～」

「だから、理由は？」

「これからきちんと初歩を教えてあげるさ」

「いや、いい・・・」

そう言って俺はリビングから逃げようとするが、その扉を素早くエリスに塞がれた。

「景様、逃げてはいけません」

「・・・」

エリスの目は真剣で、どう考えても退いてくれそうになかった。まさか、実力行使をするわけにもいかないし、むしろ勝てる気がしない。

俺は、諦めて話を聞くことにした。

この後、俺は1時間以上、人の観察をもっとすることやら、いかに相手の趣味を知ることが重要かについて聞かされることになった。話のほとんどが女性の心とは無縁だったのは、きっと気のせいではないはずだ。

「また、暇があったら遊びに来るさ」

広井は、帰り際こう言って去っていった。

恵麻は携帯の番号を交換したらしいが、俺は断固拒否した。・・・マネージャーの視線が痛かったからな。

・・・俺が家にいる必要なんてなかったな。

そう思うと、今日までだったデパートの物産展にでも行っておくべきだったと、少し後悔した。

第４０話：メイドさん、テレビに出る　その２（後書き）

本編後の雑談

晃「こんにちは、綿野　晃です。今日も皆さんの疑問にお答えする・・・」

幸「そんなコーナーじゃねえ！」

晃「幸樹、そんなことはどうでもいいよ」

幸「どうでもいいって・・・まあ、いいや。じゃあ俺が最初に。ペンネーム、まな板さんからのお便りです」

晃「ストレートなペンネームだね」

幸「気にしたら負けだろ、こんなの。・・・お２人ともこんにちは。今日は、私の悩みを聞いてください。昔は、同じ体型だったはずの姉が今ではある部位がすっかり成長してしまっているのに、私は全く成長しません。どうしたら、成長しますか？是非、大人の女性としての意見をお願いします」

晃「これ、僕ら宛てじゃないよね」

幸「そうだな。しかも・・・誰だか分かってしまったぜ」

晃「僕も分かるけど・・・これは、景のおばさんたちに送っておこっか」

幸「まあ、それがいいだろ。でも、この分かりやすさはどうにかするべきと俺は思うぜ」

晃「まあ、僕は１つの個性だと思っていいと思うけど・・・」

幸「お前、ロリコンなんだったのか！？俺は、色気のある大人かメイドがいいけどな」

晃「大きい胸の女子があまり好きじゃないだけだよ！それに、前から言ってるけど、メイドが好きなのは、おかしいって」

幸「お前のロリコンより、ましだっ！」

景「・・・何の暴露大会だ」
由「・・・まあ、どうでもいいんじゃない？」
恵「・・・２人とも自爆してるね」

外伝４：生徒会日和（前書き）

開始から約半年。本編４月が終了。

外伝４：生徒会日和

「お嬢様、朝でございます」
「ええ、起きていますわ」

執事の顔を見ながら、私はいつもと同じ様な笑顔を浮かべます。
執事は、私にうやうやしく一礼すると部屋を出て行きました。
私が生まれる以前から、この屋敷にいるとの事ですから、当然のように私が起きてから何をするかなどお見通しのようです。
ですから私が起きたと、料理長に伝えにいったのでしょう。

時計を見るとまだ6時半。
決して早いとは言えませんが、別に遅いというわけでもありません。

「はあ、全く・・・。今日は日曜日ですのに学校だなんて」

カレンダーを見た私は1つ、深い溜息をつきました。
いつものように洗顔を済ませるときちんとアイロンがけをされた制服を手に取ります。
今日は、日曜日。世間では、所謂ゴールデンウィークが始まるのですが、私はそうもいきません。
5月には体育祭が控えているために、競技を決めなくてはならないのです。
こんなもの、アンケートでも取ってしまえばいいですのに・・・。
その時、私の中に電流が流れたような感覚がしました。思わず、手を叩いて声に出してしまいました。

「そうですわ。それにしましょう！」

しかし、ちょうど私の部屋に入ってきた住み込みのお手伝いさんとばっちりと視線が合ってしまいました。
ちょうど私は手を叩いたままの格好で止まっていました。恥ずかしさで思わず私は俯いてしまました。
お手伝いさんも気まずいようで、見ていけないものを見てしまったと言わんばかりの顔をしてします。

「お、お嬢様・・・今日もいい天気ですね」
「そ、そうね・・・」

私たちはただお互いに笑うことしか出来ませんでした。

そして、午前9時。
私はいつもよりも遅く学校へと登校すると、真っ直ぐに生徒会室へと向かいました。
いつもなら、学生が多いはずの我が校も日曜日ともなれば体育会系の部活の部員がちらほらといるくらいです。
私の所属する剣道部は日曜日には練習はありません。あったとしても、こちらを優先しなくてはならないのですけど。
校庭を見ながら廊下を歩いていると、私に後ろからを声をかけてくる人がいました。

「衣っち、おはよー」
「希望さん、おはようございます」

私に、気軽に声をかけてくるのは、ごく一部の人だけです。

その理由は、私に関する武勇伝が勝手に一人歩きした結果、皆さんから話しかけづらい人物になってしまっていたようです。
その例外が希望さんです。希望さんとは、中学の頃からの知り合いで、私が心を許す数少ない存在の1人です。
他の皆さんにも気軽に挨拶をしてほしいものですが、他の方々は私から1歩どころか5歩は離れているような気がします。
きっと、お婆様が理事をしていることも関係しているのでしょう、教師ですらも私にはあまり関わろうとはしません。

だからこそ、希望さんのような人は珍しいのです。
それに、付き合いも長いせいで、声を聞くだけで相手の気分くらいは分かるようになりました。
だからこそ、私は希望さんに聞いてみました。

「ところでどうかされましたか？随分と不機嫌なようですが」

すると、希望さんは不機嫌なオーラを隠すことなく言いました。

「うん、聞いてよ。1年に生意気にも公然といちゃついているカップルがいるだよね。それ、もう・・・人前でキスするわ、毎朝手を繋いで登校するわ・・・この前は中庭の噴水で、『はい、あーん』『君の手料理は世界一さ』なんてやってるのよ」
「・・・それは、随分と破廉恥ですわね」

希望さんは、新聞部の部長で校内の流行や事件には異常なまでの情報量を持っています。
しかも、その情報を校内新聞に載せるという悪癖があるので、私が生徒会に引き入れて監視しているのです。
私の有りもしない噂を流した張本人でもあるわけですから。
普段から調子に乗りやすく、最も身近にいながら最も問題を起こす

のが希望さんです。
この前も有栖さんの家庭の事情に首を突っ込んでいましたし・・・。
これでも、昔よりは大人しくなったと思うのは、私が身内に甘い証拠なのだと思います。

「そういえば、私たち今年で卒業だよねー。衣っち、もう1つ伝説を作ってみない？」
「・・・私、既に伝説扱いですわ」

無いことまで言いふらされては堪りません。今度、しっかりと教育をしなくてはなりませんね。
私は、希望さんに視線を投げかけました。・・・分かってますわよねと。
その希望さんは、全身が痙攣したようにびくっとすると私に苦笑いを浮かべました。

「いやあ・・・やっぱり遠慮するね・・・あは、あはははは」

物分りがよい方は嫌いではありませんわ。私は希望さんにとびきりの笑顔を向けました。

私と、希望さんが生徒会室に行くと、既に私たち以外は全員揃って、それぞれ世間話をしていました。
生徒会室に私たちが入ってくると、深水さんと蓮華さんがこちらを向いて声をかけてきました。

「待ちくたびれたぞ、衣、希望」
「おはよう、衣、希望。さてと、全員揃ったし、さっさと会議を始

めようか」
深水さんは、とても真面目な方なのですが、思考が固く柔軟な思考ができない所がおしい人材だと思っています。
ですが、深水さんがいなかったら、私たち生徒会の今は無いといっても過言ではありません。
・・・ほとんどの仕事は彼任せなのですから。

全員が座ったのを、深水さんは見届けると何やら資料を配り始めました。
そして、全員に配り終え、蓮華さんの隣に座ると私と希望さんを見据えて言いました。

「衣、希望。今日はこれに沿って話を進めてくれ。意義は認めないし、何よりも時間がかかる。じゃあ、始めてくれ」

・・・随分と信用が無いのですね。ですが、資料は随分と手間をかけて作っているようでした。
最近、妙に忙しそうだったのは、これを作っていたからですか。
私が資料を見ながら感心していると、希望さんが不満そうに口を尖らせました。

「私だって子供じゃないんだから、こんな物無くてもできるってばー」
「今日は、体育祭の競技決め及び、既に決まっている借り物競争の借り物を決める日だ。特に希望を自由にするとろくな事にならないから、きちんとルールを決めておいた。それを見て、発言しなかったら無視するからそのつもりで」

今日は、随分と深水さんは強気ですわね。
ですが、そのように強気に出ていると・・・。私はちらりと隣にいる蓮華さんの様子を伺いました。

「浩一・・・素敵・・・」
「蓮華、照れるから止めてくれ」

・・・これはもうやはりと言うべきですわ。
私は、深水さんに見惚れている蓮華さんを見て、諦めにも似た気持ちになりました。
お2人は、かれこれ2年半付き合っているとの事でしたが、未だにいちゃいちゃと・・・。

こほん、それは置いておきましょう。

私は気を取り直すと、深水さんに話しかけました。もちろん、今朝思いついた妙案を出すためです。

「深水さん、以前の会議で決まった借り物競争ですが、借り物については各クラス1人1票書いてもらって私たちがそれを審査するという形というのはどうですか？」

すると、さっきまでの締まりのない顔から一変して仕事をしている時の顔に戻った深水さんは、少しの前を置いて聞き返してきました。

「でもさ、それだと全校生徒の数は１０００人近いから結構な数になると思う。さすがに俺1人でそれをやるってのは勘弁してほしい」
「私としては、こういうものは生徒の自主性を重んじるべきかと思っていますわ。私たちには無い発想の持ち主も大勢いると思いますもの。それに、今回の件はきちんと私も仕事します」

「いやいや、そこは胸を張るとこじゃない。今回だけじゃなくて、いつもきちんと仕事はしてほしいんだけど・・・」

深水さんの言うことは尤もかもしれませんが、これでは普段から私が仕事をしていないように思われますわ。
その点について、1度深水さんとはきちんと話すべきかもしれません。

ですが、その話はまた今度して、議題を進めないといけませんわ。
ただでさえ、休日を使っているのですから。
私は、早く終わりたいと思い、少し早口で言いました。

「では、この議題は終了いたします。次は、体育祭のその他競技ですわね。どなたでも、意見をどうぞ」

・・・どなたも挙手されませんね。
しばらくの間、生徒会室を沈黙が包みました。互いに意見を言ってくれるのをどうやら待っているようです。
基本競技のリレーなどはいちいち言わなくても既に決まっていることですから、それ以外は私もあまり思いつきません。
どうやら、私は思ったよりも体育祭の競技を知らないのかもしれません。
すると、書記の赤羽さんが言いにくそうに言いました。

「そうだね・・・障害物競走とかマラソンとか、2人3脚、騎馬戦なんかもあるよね。・・・ありきたりだけど」
「そんなことない。大体、去年、一昨年の競技がおかしい」
蓮華さんの言うとおり、確かに去年、一昨年には不可思議な競技があったのです。

巨大鉄球転がしやら、トラックリレーやら・・・。それに、去年の障害物競走には色々と問題がありましたわ。
校庭を掘り返したり、電流を流したり・・・。あれは、さすがに今年は禁止されていますが、去年の生徒会もよくもまあやってくれたものです。

赤羽さんが切り出したからでしょうか。他の皆さんも徐々に口を開き始めました。

「じゃあ、今年はミニ鉄人レースなんてどうかな？」
「いや、それはきついだろ。玉入れとかなら安全だろ」
「・・・あんた、小学校へ帰ったら？綱引きは入れる？」
「待って、それも小学校で十分よ。そうだ、障害物競走にはパンありますよね」

・・・思い思いに意見を言ってくださるのはいいのですが・・・。
赤羽さんが必死になって初期の仕事をしてくださっていますわ。
これは、意見を纏めるのは大変ですわね・・・。

結局、競技についての話は1時間近くにも及んでしまいました。
話し合いの結果、大体の競技についてはおおよそ決まりました。後は、空いた部分を実行委員会で決めてしまい、生徒側と職員会議で了承を得れば完成ですわね。

「では、今年は残りに関してはシンプルに纏めてしまいましょう。異論のある方はいらっしゃいますか？」

私がさっさと纏めようとすると、希望さんが不満を口にしました。

「今年は、トラックリレーはしないの？」
「・・・トラックが用意できませんし、それにあまりにも不平等ですわ」

私の反論に、希望さんは不満そうに口を尖らせていました。
希望さんが、普通の体育祭では暇だというのは私にもよく分かります。
ですが・・・、去年は怪我人が３０人近く出ていることを考えると、今年は過激な競技は外すべきですわ。
しかも、それは過激な大道具が原因でしたし・・・。

私は、黙って希望さんに首を横に振ると、皆さんに向かって言いました。

「あとは、各クラスで体育祭実行委員を1人選出していただきます。これは明日、借り物の内容と競技についてのアンケートと同時に各クラスにプリントを配布し、決めていただきます」

希望さんも仕方がないと諦めてしまったようで、私の言ったことに補足を付け加えます。

「うー、まあいっか。じゃあ、ついでに準備委員も3名選出してもらうね」

ちなみに、私が忘れていた準備委員というのは、正式には体育祭準備及び片付け委員と言うのだそうです。
既に述べた実行委員とこの方たちだけは、体育祭に出ることを免除されるのです。ですが、前日の準備、当日の片付けは準備委員の、生徒会の補助として運営を手伝うのが実行委員の仕事となります。
ただ、実行委員は各クラスからの意見を吸い上げていただく役目も

担っています。
また、生徒会も基本的には免除なのですが、今年は皆さん出場されるそうです。この辺り、調整しておかないと現場で指揮を取れる方がいなくなってしまいますわね。
会議が終わったら、深水さんと希望さんには残ってもらいましょう。
私は久々に生徒会の作業が楽しいと感じていました。やはり、このように自由に仕事ができるというのは素晴らしいものですわ。
そのわくわくとした胸躍る気持ちは声にも少しそれが現れているようです。

「では、最後に大まかにプログラムを組んでおきましょう」
「あ、それならある程度までならできてる。ちょっと待ってくれ」
さすがは深水さんですわね。
彼は、今まで何かを打ち込んでいたノートパソコンを私の方へと向けました。希望さんも興味津々といった感じで覗き込んできます。

「へえー、準備いいよねー。こうっちは役に立つよ」
「誰がこうっちだ！」
言い争うお2人は無視するとしても、その画面には既に大まかなプログラムが出来上がっていました。
これをベースにしていけば難なくプログラムは纏まりそうです。
今週と来週の頭で全て決めてしまいたいものですわ。何と言っても時間があまりないのは否めない事実ですから。
私は、ある程度、今後の予定を頭の中で整理すると、皆さんに告げました。

「では、今後の予定ですが、ゴールデンウィークの間に登校日が２日ありますから、１日にアンケートと各委員の選出及び顔合わせ。そして、２日にはアンケートの発表を行いたいと思います。しばらく休みが間に入りますが、その間に意見について考えてもらえばいいですわね。そして、休み明けには、再び委員会を招集して、それぞれの意見をまとめた上で、遅くとも５月１０日までにはプログラムを職員会議に提出。承認後、すぐにプログラムは印刷に入ります」

言っている本人が言うのもおかしい気もしますが、随分と急ピッチな日程ですわね。

まあ、先生方も私には直接言ってきませんが、間接的にそろそろ提出しろと言っていることですし、多少の無理は仕方がないのかもしれません。

これが終われば、しばらくは暇になりますから、頑張るしかないですわ。

「運営を任せることになる実行委員会には私が、準備委員会には希望さんがそれぞれ出席します。次回は１人の放課後にお願いします。皆さんには、相当の負担とはなりますが、よろしくお願いしますわ。それでは、以上で会議は終わりますが、希望さん、深水さん、赤羽さんは少々相談がありますので残ってください」

私の解散の言葉に、他の皆さんは席を立つと１人また１人と生徒会室を後にしていきました。

「では、会長失礼します」

「じゃあ、お先ー」

「先輩、お疲れ様でした」

そして、残ったのは先程の3人と蓮華さんだけでした。今日はお昼を一緒にすると4人と約束があったのです。
まだ時間は１０時３０分を過ぎたばかりで、まだ時間に余裕はあるのですが万が一を考えて私は、その4人に言いました。

「これから、アンケートを作ります。お昼までには作りますので、時間を潰しておいてください。もし、終わらなくても１２時には電話しますわ」

ですが、皆さんは帰ろうとはせず、お互いに何か意図を含んだ笑みを浮かべると、赤羽さんが話を切り出しました。

「じゃあ、私はコピー用紙もらってくるよ。さすがに１０００枚も刷るとなると足りないだろうし」
「なら、俺は空いた時間を使って、プログラム暫定案でも考えておくよ。希望、蓮華。ちょっと来てくれるか」

私は、良き友人に恵まれたと自負していますわ。
何かと理由をつけていますが、私を手伝ってくださるのですから。
彼らとは、これから先、大学に進んでもずっと友人でありたい。そう、願ってやみません。

「・・・皆さん、ありがとう」

私が感謝すると、皆さんの手がぴたりと止まって、不思議なものでも見るような目で私を見てきました。
ですが、すぐに笑顔で返されました。

「衣っち、困ったときはお互い様だよ。私だって色々と衣っちには

お世話になってるから」
「感謝されると、むしろ怖いくらいだ」
「衣が感謝するなんて珍しい。でも、気持ちは受け取った」
「・・・」

私は、普段あまり褒められるようなことはないので、恥ずかしさからつい顔を背けてしまいました。
何でもできて当たり前、それが私の家の方針でしたから、貶されることには慣れていても、褒められることにはあまり慣れていないのです。
ですが、希望さんが最後に言った言葉を私は聞き逃しませんでした。

「おっ、赤くなった。衣っちは褒め殺しに弱いっと」

・・・また、希望さんに弱みを握られてしまいましたわ。
ですが、言いふらしでもしたら、今度はどのようにしてあげましょうか。
私は思わず1人で笑みを浮かべていました。すると、明らかに引き攣った顔をした3人が私を見ながら言います。

「おい、希望。気をつけた方がいいぞ」
「そうだな、衣が笑っている」
「あ・・・うん。衣っちの弱みを私が使うはずないじゃん」

私は、素直な希望さんにまたとびきりの笑顔を向けました。希望さんが少し怯えているような気がしますが、それは気のせいですわ。

「私、物分りのよい方は好きですわ」
「あ、そ、そうだよねー」

今日も生徒会は平和ですわ。

少なくとも私の知る限りですけど。

外伝４：生徒会日和（後書き）

本編後の雑談

梓「今日は私たちの番だね、美玖」
美「そそそ、そうだね」
梓「緊張してるの？」
美「そそそ、そんなことないよ？」
梓「・・・じゃあ、緊張しているお姉ちゃんに代わって私が司会進行を務めさせてもらいます。まずは、メイドＬＯＶＥさんからのお便りです。２人はプｒ・・・じゃなくて双子のようですが、どうして成長に差があるのですか？」
美「今は５人だったけ？う、うん、どうでもいいよね。では、質問に答えますね。うーん・・・好き嫌いの多さかなー？わたしは何でも食べますけど、梓依は結構好き嫌いが多いから」
梓「くっ・・・双子なのに格差社会・・・」
美「メイドＬＯＶＥさんは、女性の胸ばかり見ていて捕まらないように気をつけてください」

景「・・・だってさ。性犯罪者予備軍だな、お前」
幸「何でばれたんだっ！？つーか、予備軍じゃねえ！」
晃「・・・あれは、バレるでしょ。その前に、否定する所が違うって」

第４１話：距離と間の小話

今までにない出来事のあった４月も終わり、暦ではもう５月。
４月はエリスが来てからというものあっという間だった。
５月というと、まずはゴールデンウィークがある。４月の終わりから５月の頭にかけて連休をとる人もいるだろう。
だが、俺には関係のないことだ。１日と２日は普通の平日、月曜日、火曜日だ。
平日ということは、当然のごとく学校へ行かなくてはならない。
俺は、学校へ行くのだが、そうではない人もいる。

「景様、急がないと恵麻様をまた待たせてしまいますよ」
「そうよ、景ちゃん。たまには先に玄関に行って待っていなさい」

母さんとエリスのことだ。
まあ、家のことを全てやってくれているので毎日が休日だなとは言わない。むしろ、毎日が戦争のようなものだろう。
だが、母さんは、エリスが来てからは少し余裕ができたようで、最近は昔嵌っていたバドミントンをまた始めたらしい。
いつもはエリスが相手をしているらしいが、休日になると父さんが無理やり相手をさせられているようだ。
ちなみに父さんは、今年は有給は使わないらしい。まあ、使ったところでどこかに出かけるわけでもないし、母さんの相手をさせられるだけだろうからな。

「暇だったら、景ちゃんも一緒にどう？」

母さんの誘いに、俺は黙って首を横に振る。父さんが相手をしないと俺に誘いをかけてくるのだ。母さんは、父さん相手には簡単に勝てるらしいが、エリスには歯が立たないらしい。父さんとエリスが両極端なせいだろうか、母さんはレベルが同じくらいの俺と勝負を好む。事実、俺と母さんの実力はほぼ互角といった所だ。

家の庭で、物干し竿をネットに見立てて勝負をするのだが、そこまで広くないので少し羽根が逸れるとコースアウトする。

別にバドミントンが嫌いなわけではない。昔は、母さんや恵麻とよく遊んだものだ。

だが、今の母さんの相手をしていると、平気で半日が潰れるんだよな・・・。

俺が断ると、母さんは、「あら、残念」と全く残念でなさそうに言うと、俺の目の前の席に座った。

そして、意味ありげに笑う。

「・・・ふふふ」

俺は、気になって仕方がないが、文句を言った所で相手の思う壺にはまるだけなので母さんを無視する。

寝癖を直し忘れた俺を見て、目の前で頬杖をつきながらにやにやと笑うのは単なる嫌がらせなんだろう。

「嫌がらせじゃないわ、子供とのスキンシップよ」

たまに母さんは、俺の心を読んだような発言をすることがある。

以前、気になって聞いたことがあるのだが、俺は顔に言いたいこと

が出るらしい。
だが、今はそんなことはどうでもいい話だ。
「・・・ごちそうさま」
俺は、食器を流しに持っていくと洗面台へと急いだ。

「済まない、有栖」
「悪いな。人手が足りなくてな・・・」
放課後、俺は深水先輩からのメールで生徒会室に来ていた。
俺の前には、珍しく紅茶が置いてある。衣先輩に呼び出されたときには、紅茶なんて物は出ない。
深水先輩から話を聞くところによると、今日行われたアンケートの集計の手伝いをしてほしいとのことだった。
衣先輩と、希望先輩は委員会に出ているため、また、他の生徒会役員は所用のため欠席らしい。
・・・サボりなのかと思ったが、たまたま都合がつかなかったらしい。
・・・本当か？
まあ、それは置いておくにしてもだ。
俺は、生徒会長の机の上に無造作に置かれた紙の束を見ると、思わず溜息をついた。

「これ、全部を1日で処理するんですか？」
「そうだ。後は、赤羽も来るから4人体制だ」
蓮華先輩が無表情でそう言うと、タイミングよく生徒会室の扉が開き、赤羽さんが入ってきた。
「ごめんね、遅くなって」
それに対して、深水先輩も蓮華先輩も怒った様子は全くなかった。そして、全員が揃ったところで俺を含めた3人を見据えて言った。
「そんなことない。・・・さてと、これから始めるけど・・・」
そうは言うものの、深水先輩の語気に力が無い。目も少し死んでいるような気がする。まあ、無理もない。
俺も深水先輩が見ているほうに視線をやる。
・・・これを1日でまとめて、明日には発表するというのだから、やる気も失せるだろう。
それに、資料をまとめるのは深水先輩だ。衣先輩は、パソコンなど扱ったことがないと豪語していたし、希望先輩はタイピングは早いのだが、基本的に集中力が続かない。
結局、深水先輩に回ってきてしまうのだ。
だが、俺は4人しかいない生徒会室を見て疑問に思ったことがあった
「・・・深水先輩。何故、もっと人を呼ばないんですか？」
すると、蓮華先輩は相変わらず無表情のまま淡々と言った。

「ああ、それなら希望がいちいち他人に頭を下げて手伝いに来てもらうのが面倒だと言っていた」
「・・・・」
俺は、聞いた途端呆れて物も言えなかった。
「・・・・」
「・・・・」
深水先輩も赤羽さんも苦笑いを浮かべ、俺から視線を逸らす。どうやら、生徒会は俺が思った以上に適当な集団のようだ。皆が押し黙る中、蓮華先輩はさらに話を続ける。
「有栖は、私たちの身内だから関係ない。事実、何度も手伝いに来ている。いっそ、このまま生徒会に入らないか？生徒会は楽しいと思う」
「・・・深水先輩、赤羽さん。さあ、仕事しましょう」
俺は、蓮華先輩の言葉を無視すると、書類の束に手をかけた。
「・・・ふられたか」
俺の背後で蓮華先輩が何かを呟いたような気がした。俺は、顔だけ蓮華先輩の方に向けると尋ねた。
「蓮華先輩、何か言いました？」
「何でもない。有栖、とりあえず仕事の説明をするから束を持ってきて」

何でもないという時は、大抵何かあるものなのだが、蓮華先輩が言うとも思わないので、俺は束を抱えながら蓮華先輩の所へと戻った。

生徒会室で、アンケートの仕分けを始めてから３０分。
俺たちは、黙々と作業を続けていた。

「・・・幼馴染、相模先生、女子の体操着・・・」

今、俺がメモしているのは、借り物競争の借り物のアンケートだ。
第１希望から第３希望までである。
声に出しているのは、声に出しながら作業したほうが忘れないだろうし、間違えないだろうという理由からだ。
今言ったことを別紙に書いて作業を続けようとすると、俺の真正面に座っていた赤羽さんが作業する手を止めて呆れたように言った。

「あー、有栖君。最後のは無し」
「赤羽さん、それくらい分かります」

俺は、その紙を別の場所に置くとまた作業を続ける。・・・先生はいいんだな。

俺と赤羽さんは借り物を深水先輩と蓮華先輩は、その他競技についてまとめている。
こうして、全校生徒が書いたものを見ると、色々な人間がいるのだと思い知られる。
匿名のアンケートではないはずだが、ふざけたことを書いているのは偽名か、または単にノリなのか。

そして、作業が一段落すると改めて、今までまとめたものを見てみる。
すると、興味深いことが分かった。
「メイド、メイド・・・エリス」
何故か、妙にメイドを書いているアホが多い気がする。
中には、エリスの名前を書いている奴もいた。大方、幸樹が話したのだろう。
だが、これだけメイドと書いてあると俺への嫌がらせのようにさえ思ってくる。
もちろん、書いているのは大抵が男だ。女の中にもエリスと書いている奴はいるんだがな・・・。
「由真・・・、3つまで書けるからって書く事はないと思うんだが・・・」
バスケットボール、バスケットゴール、メイド・・・。由真の書いたものでは、最初の以外は論外だ。
ん？由真のがあるということは・・・この束は俺のクラスということとか。
幸樹や晃、恵麻は何を書いたのだろうか。楽しみにしながら俺が、次の人の作業に取り掛かろうとすると、唐突に赤羽さんが俺に声をかけてきた。
「ねえ、有栖君」
「はい」

俺が顔を上げて赤羽さんを見ると、その顔から察するにあまりいいことではなさそうなのは分かった。
どうして俺の周りの年上には人をからかうのが好きな人しかいないんだ？

俺がそのことを嘆いていると、赤羽さんは俺の顔を見て笑いながら集計用の紙を俺に見せた。

「今年は、メイドは確定だね」
「・・・」

俺は、黙って消しゴムを取り出すと俺の集計用の紙からメイドと書かれた数を3分の1に減らしておいた。
だが、赤羽さんは、いつの間にか背後に回りこんでいたようで、俺から集計用の紙を取り上げると俺に人差し指を突きつけて言った。

「不正はダメだよ、あ・り・す・君」
「・・・」

・・・まあ、当たり前だよな。名目上、不正を許さないのが生徒会なのだから。
だが、釈然としない気持ちが残ったのも事実だった。

結局、俺たちが集計を終えたのは、午後6時も過ぎた頃だった。
ひたすら同じことを繰りかえす作業だったこともあるが、よく4人で終わったものだと今更感心する。

俺が紅茶を全員分用意し、４人で少し休憩しているとまるで時間を見計らったかのように衣先輩と、希望先輩が戻ってきた。

「あ、ご苦労様。早いねー、集計終わったんだ」

「皆さん、お疲れ様です」

そして、衣先輩たちは空いているところに座る。それを見て、俺はとりあえずティーカップに紅茶を淹れて２人の前に出した。

「あら、有栖さん、ありがとうございます」

「景っち、ありがとー」

生徒会室に、紅茶があるのはどうかと思うが、あるのだから仕方がない。

ここにいる俺を除く全員はコーヒーよりも紅茶を好む。だから、紅茶の缶が置いてあるのだ。

ちなみに、俺はコーヒーが好きなのだが、１人だけ別物を作るのは面倒なので紅茶を飲んでいる。

衣先輩は、紅茶を飲みながら、俺と赤羽さんがまとめた借り物の資料を読んでいたが、紅茶を置いて１つ深呼吸をすると呆れたように呟いた。

「・・・随分と、メイドが多いですわね」

その言葉に、今まで作業をしていた俺たち４人は苦笑いを浮かべる。

さらに、希望先輩は、衣先輩の後ろからその紙を覗き込むと楽しそうに言う。

「うわっ、本当だー。あ、それに結構ボツになったのもあるねー」

希望先輩の楽しそうな笑顔とは裏腹に、俺や深水先輩は表情が引き攣っていた。
こういう時の希望先輩は要注意だということは過去の経験からもよく分かっている。
何を言い出すのかと、希望先輩を注視していると、希望先輩が口を開いた。

「ねえ、このボツになったの、明日の新聞にしてもいい？」
「ええ、名前さえ出さなければいいですわ」
「衣っち、ありがとう。じゃあ、早速ボツリスト作るから」

そう言うと同時に希望先輩は、パソコンの前に座る。
そして、勢いよくキーボードを打ち込み始めた。
それを見ていた深水先輩は、深い溜息を吐いた。

「・・・希望は、こういう時だけは早いんだよな。これが、少しでも生徒会の仕事に向いてくれるとありがたいだけどだ」

深水先輩の切実な言葉に、一心不乱に打ち込む希望先輩を除いた皆が頷く。
俺たちが、頷くと深水先輩は１つ大きく伸びをすると言った。

「じゃあ、そろそろこっちも始めるか。まあ、プログラムは１時間もかからないだろうから終わったら確認よろしく」

深水先輩もまた自分のノートパソコンに向かうと、資料を見ながら打ち込み始めた。

深水先輩が、プログラム案を作り始めてから数分後、妙に満足気な

顔をした希望先輩が、世間話をしていた俺たちの話に加わってきた。
「終わったー。私も混ぜてー」
「お疲れ様」
蓮華先輩たちが声をかけると、希望先輩は俺の隣に座る。
そして、資料を机に置くと、何か思い出したように俺に向かって言った。
「そういえばさ、さっきの紙で思い出したんだけど・・・エリスさんだっけ?景っちの家にいるメイドって」
「はい、そうですが・・・それが、どうかしましたか?」
唐突な話題に俺が、戸惑って聞き返すと希望先輩は意地悪い笑みを浮かべる。
「ねえ、普段って、どんな生活しているの?私のイメージだと、毎朝、『ご主人様、朝ですよ、起きてください』とか『いってらっしゃいませ』とか『おかえりなさいませ』とか言われてるってイメージなんだけど」
「・・・」
一部違う点もあるが大体あっていたので、俺は言葉が出なかった。
それを図星と受け取った希望先輩は、何やらメモに書き込んでいた。
すると、あからさまに興味を示した赤羽さんがメイドの話を続ける。
「ふーん、ってことは・・・『お背中お流しします』とか一緒に寝たりとしてるわけ!?」
俺は、赤羽さんがどういう目で俺のことを見ていたのかを知ると、

きっぱりと反論した。

「ありません！」

だが、そうは言うものの俺の内心は焦りで満ちていた。

・・・エリスが来た日にそんなことがあったのだからな。

ただ、それ以上にここまで的確に言われると、俺の普段の生活というのはどこかで見られているのだろうかと考えてしまう。

無論、考えすぎなのだろうが。

俺が、くだらない妄想をしていると衣先輩が真面目な顔をして言った。

「有栖さん、ところでエリスさんはロボットでしたわよね。メンテナンスはどうなさっているの？まさか、有栖さんが？」

「初めは週1で会社にメンテナンスで行っていましたけど、今は2週間に1回くらいです。そういえば、明後日、家に会社の方が来るらしいです・・・」

この後、しばらく俺は4人からエリスについての質問攻めに遭うことになった。

蓮華先輩が興味を示していた意外に思えたのだが、聞いたところによると普段は衣先輩たち4人の中で1番おしゃれに気を使っているらしい。

やはり、彼氏がいるからだろうと全員ではやし立てると珍しく蓮華先輩が照れていた。

だが、すぐにいつもの様子に戻った蓮華先輩はすっと目を細めて俺に言った。

「有栖。これは言ってはいけないことだ。もし、誰かに言ったら分かっている・・・よね？」

普段は深水先輩以外には言葉を崩すことのない蓮華先輩が最後に珍しく言葉を崩していたことに、俺は背筋がぞっとする感覚を覚えた。もちろん、首を何度も縦に振ったのは言うまでもない。

俺が、蓮華先輩に対しての認識を改めているとふいに希望先輩が

「ねえねえ、今度のゴールデンウィークに遊びに行ってもいい？私、まだそのメイドに会ったことないし」

「いいですわね。私も遊びに行っても構いませんか？」

俺は、即答できなかった。４日からは母さんは恵麻の母、つまりおばさんと旅行に行くらしい。

父さんは家にいるだろうが、俺がやりたいことがあるので却下したい。

３日は、三津刃さんが来るから無理だろうし・・・。

俺が、日程について考えていると、衣先輩がおずおずと言葉を口にした。

「有栖さんの都合がよろしければ、私は3日にしたいのです。・・・その、できれば私、その技術者に会ってみたいのです」

「・・・そればかりは、エリスと相談しないと分からないです。エリスがいいっていうなら。向こうはたぶん気にしないと思います。ちょっと、電話してみます」

俺は、そう言って生徒会室から一旦廊下に出た。

「ねえ、衣っち？もうちょっとましな理由にしようよ。あれは、ないよ」
「・・・恥ずかしいのですから仕方ありませんわ」

俺が、廊下には誰もおらず、外はすっかりと暗くなっていた。そこで、ふと遅くなることを家に伝えていなかったと思い、慌てて家に電話をした。
すると、エリスが電話に出たようで、丁寧な口調で話し始めた。

「あ、景様？今、どちらにいらっしゃいますか？」

だが、何だかいつもと声が違うような気がした。
というよりも、これは母さんの声だ。もう１６年も親子をやっているのだから、電話先の声くらい分かる。
俺は、少々苛立って早口で言った。

「母さん、ふざけてないでエリスに代わってくれ」

だが、母さんも俺と１６年親子をやっている。俺のことなど分かりきっているようで、全く動じる様子もない。

「ふざけてないわよ？ところで、今日は遅いみたいだけど、寿々林君たちと遊んでるの？」
「いや、今日は生徒会の手伝いなんだ。たぶん、８時くらいには帰ると思う」
「分かったわ、気をつけてね。じゃあ、エリスちゃんに代わるわね」
母さんは、一旦保留にするとエリスを呼びに言ったようだ。

１０秒くらいだろうか。そんなに待つことなくエリスが電話口に出た。

「景様。私に用があるとお聞きしたのですが」

「そうなんだ。実は、３日のことなんだが」

だが、俺が、用件を言い終わる前にエリスは何か勘違いしたようで泣きそうな声で言った。

「もしかして都合が悪くなったのですか」

「早とちりするな。実は、先輩が三津刃さんに会いたいらしいんだが、３日に家に来てもらっても大丈夫か？」

すると、エリスは安心したようで、先程よりも落ち着いたものの少し照れたような様子で話し出した。

「え、あ、はい。三津刃さんは大丈夫だと思います。ですが、本当にいいのかと尋ねてくださいね。必ず尋ねてください」

エリスが念を押して言うものだから、俺はエリスが本当は来てほしくないのだろうかとも思ったが、エリスに限って衣先輩たちを嫌がることはないと思う。

たぶん、他に何か理由があるのだろう。

「分かった。ありがとう、エリス」

「・・・」

電話口からでもエリスが照れているのが分かった。この辺りが、可愛いんだよな。

そう思ったが、すぐに我に返った。

・・・俺、完全に毒されてないか。

エリスとの電話を終えて、エリスから伝えられたことを衣先輩たちに伝えると、少し訝しげな顔をされたが、３日に来ることになった。時間は、１０時くらいには来るらしい。
何だか、衣先輩がとても嬉しそうだったが、そんな機械に興味があるなんて意外だと俺は思った。

家に帰ると、エリスが玄関で待っていた。そして、いつものように出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ、景様」
「ただいま、エリス」

俺は、エリスの言葉を聞きながら夕方の希望先輩たちの言葉を思い出していた。
確かに、お帰りなさいませと言われるのはどうかと思う。最近、エリスの言葉にも慣れつつあったので、習慣は怖いとつくづく実感した。
そこで、俺は意を決してエリスに呼びかけた。

「・・・なあ、エリス」

エリスは、俺を真っ直ぐ見ると、穏やかに笑顔を浮かべる。どうやら俺の言葉を待っているようだった。
特にエリスが何も言わないので俺は言葉を続ける。

「普通におかえりなさいでいいからな」
「そうですか？ですが、やはりご主人様を敬ってこそのメイドだと思うのです」
だが、簡単にエリスは折れてはくれない。まあ、この辺りは俺も織り込み済みだ。
「敬っているなら、俺の意見も聞いてほしい」
多少ずるい手だと思うが、こうでもしないとエリスはこの手の話を聞いてはくれない。
エリスはしばらく黙って目を伏せていたが、やがて少し照れながらも、俺をまた真っ直ぐに見つめると何故か真剣な顔つきで言った。
「・・・分かりました。では、やり直します。・・・おかえりなさい、景様」
「ただいま、エリス」
・・・少しぎこちない気もするが、そのうち普通に会話できる日も来るのではないか。
俺は、淡い期待を抱いた。だが、エリスはそんな俺の希望をいとも簡単にぶち壊した。
「・・・これが精一杯の妥協ですからね、景様」
・・・まだまだ俺の野望は前途多難のようだ。
リビングへと足早に戻っていくエリスを俺は玄関で見送った。エリスの声がいつもに比べて冷たく思えたのは多少怒らせてしまったからかもしれないな。

しばらくはこの手の話はやめておくか。俺は、急激に変化を求めると相手の反発を招くということを学んだような気がした。

第４１話：距離と間の小話（後書き）

本編後の雑談

エ「景様のことをより知って今後に役立てたいのですが、景様はどのような方なのですか？」
恵「それって、エリスちゃんが知らない景君のことだよね？」
由「んー・・・そうだねえ、景はいい友達だよ。ぶっきら棒だけど気が利くし」
幸「そうだな。まあ、俺からの印象は不器用だけど真面目ってとこだな」
晃「バイト先でも割りと真面目に仕事してるよ」
恵「それに結構優しいよ～」
由「でも、よく考えると周りが女の子ばかりじゃない？」
幸「それは分かる。でも、景の趣味じゃない子が多い気がするぜ」
晃「可愛い女の子が来ると必ず見ているような・・・」
恵「それはそうだね～。後は、少し年下が好きなんだよ～」
由「うわっ、ロリコン！？」
幸「由真、お前今更な話だぞ、それ。あと、メイド好きだっていうのは意外だったな」
晃「見た感じと違って可愛いものが好きなんだよね」
恵「それ分かる～。ついでに景君の料理は劇物だから食べないほうがいいよ～」
由「それに、景って結構ヘタレだと思う」
幸「まあ、ヘタレだな。ああいうタイプは押しの強い女に弱いな」
晃「見た感じむっつりぽいし」
恵「溜め込むタイプなんだね～」

景「・・・あいつら言いたい放題言いやがって」
エ「景様は何を溜め込んでいるのですか？ストレスですか、お金ですか？」
景「・・・まあ、その・・・色々だ」

第４２話：オプションはいかが？導入編

５月３日の朝。
俺は、朝部屋に俺を起こしに来たエリスに声をかけた。

「なあ、エリス」
「何でしょうか、景様？」
「少し話を聞いてくれないか？・・・夢を見たんだ。あれは悪夢だった・・・。三津刃さんたちが、エリスたちにコスプレをさせていたんだ」

すると、エリスは無理矢理笑うと、渋い表情へと変わった。

「え、あははは・・・」
「・・・もしかして・・・」
「えーっとですね・・・」

だが、エリスが何かを言う前に後ろから母さんの声が聞こえた。

「景ちゃん。妄想は夢の中に留めておくのよ」
「・・・」

俺は、母さんに聞かれてしまった恥ずかしさから思わず黙ってしまった。さすがに妄想全開の夢の話を聞かれてしまうと妙に気まずい。だが、エリスに聞かれたところで特に恥ずかしいと思うことはない。エリスはこういうことは誰にも話さないし、それに今日のことの話だ。笑って聞いてくれるだろう、そう思ったのだ。

・・・よく考えると俺はエリスを特別扱いしているんだな。

そのエリスは、俺と同じく非常に気まずそうな顔をしていた。先程から、苦笑いを浮かべたままなのだ。
そして、辺りを警戒するように見回すと、声を潜めて言った。

「け、景様・・・。そのことなのですが・・・」
「・・・いや、悪かったな。朝から、変な話を聞かせて」

エリスの顔は、少々引き攣っているように思えた。その顔を見た俺は、その意味をすぐに理解することが出来た。
・・・やはり、エリスにも話すべきではなかったのだと、ロボットであっても大丈夫ではないのだと。
今更、悟っても決定的に遅いわけなのだが・・・。

俺は、逃げるように部屋を後にした。

景が出て行った部屋でエリスは景の布団をきちんと綺麗に敷き直していた。
そして、それが終わると外を見ながら溜息を1つ吐いた。

「景様・・・。それが・・・あながち妄想というわけでもないのです・・・」

だが、既に部屋にいない景にその言葉は届くことは無かった。

三津刃さんともう1人の人は１０時にはやって来るとエリスから聞いたのは朝食の後だった。
何でも半日はかかる作業のようなのだが、それなら衣先輩たちを呼ばないほうがよかったのではないかと思ってしまう。
俺が溜息をつくと、先程来たばかりの衣先輩と希望先輩が言った。

「どうかしましたか？有栖さん」
「もしかして・・・今、景っちはエロいこと考えてるでしょ？まあ、私たち見た目は悪くないからねー」

腹を抱えて全力で笑ったような希望先輩の笑い声が部屋中に響く。
人を指差して笑うことはよくないと教わっていないのだろうか。まあ、それはいい。
俺は、希望先輩を無視すると、とりあえずお茶を先輩たちの前に出す。

「１０時には来るとエリスが言っていました。エリスは今駅に迎えに行っていますから、しばらく待っていてください」

俺は、お茶を出すと一旦部屋から出ようと立ち上がる。
そこそこの付き合いのある先輩たちだが、自分の部屋で一緒にいると何だか緊張するのだ。
今まで、異性でこの部屋に入ったのは、恵麻と琴美ちゃんくらいなものだ。
あとは、幸樹や晃はたまに遊びに来る程度だ。ゲーム以外には大したものがあるわけでもないからな。

私服姿の先輩たちを見るのは、初めてのことになるが制服と違って少し大人っぽく見える。

希望先輩は、ジャケットにズボンと至ってボーイッシュな格好、衣先輩はワンピースにカーディガンを羽織っているだけなのだが、妙に似合っている。

・・・ぶしつけに見るものではないよな。

そこでふと気付いたのだが、衣先輩は俺の部屋をきょろきょろと興味深げに見ていた。あまりじろじろと見られると俺が何だか恥ずかしくなってくる。

衣先輩はしばらく何か1人で納得したり、表情を変えながら俺の部屋を見ていたが、やがて俺に不思議そうに尋ねた。

「それしても、有栖さんの部屋は綺麗ですね。私もいつもお手伝いさんが掃除してくださいますけど、それと同じくらいに完璧ですわ」

すると、衣先輩の賞賛を聞いた希望先輩は何を思ったのか、窓の淵を指でなぞり始めた。そして、自分の指をまじまじと見ると大げさに叫んだ。

「何これっ！？ほこりすらつかないって、どういうこと！？」

俺は、希望先輩の叫びにも驚くことは無かった。何故なら、エリスが毎日のように掃除するからだ。

俺は、2人に何の意図もなく当たり前のように言った。

「エリスが毎日掃除してくれるんですよ」

だが、その言葉を聞いた2人の表情が明らかに変わったのが分かった。

・・・何だか馬鹿にしたような哀れむような視線で見られているよ

うな気がするな。

それから、しばらくの沈黙の末、衣先輩がようやく口を開いた。もちろん、俺に対する視線は変わらない。

「・・・有栖さん。私思うのです。有栖さんは、甘やかされすぎだと思いますわ」

「景っち・・・。私も本当にそう思うよ。それに、景っち・・・この生活にすっかり慣れてるでしょ」

2人の言葉に俺は何も言い返せなかった。

最近、エリスがいることに疑問を持つこと自体が減っているし、たまに毒されているなと思うことはあるが、さほど強く思わなくなってきているのだ。

「・・・やっぱりまずいですよね」

俺が、そう問い返すと2人とも少し黙ってしまった。

だが、すぐに衣先輩がまた口を開いた。

「そうです・・・わね・・・。でも、有栖さんはエリスさんのことを大切に思っていらっしゃるのですよね？」

何故か、目を真っ直ぐに見て聞かれたので俺も真っ直ぐに衣先輩の目を見て答える。

何か逸らしてはいけないような気がしたのだ。

「まあ、エリスはもう家族ですから」

「・・・」

何かおかしなことを言ったのだろうか。衣先輩は難しい顔をして黙ってしまった。
このままだと部屋の空気が重くなりそうだと思ったとき、希望先輩が少し大声で言った。

「そうだ、景っち。今日の私と衣っちを見てどう思う？私服もなかなか新鮮でしょ？」

機転を利かせてくれたのは嬉しいが、俺にとっては答えづらい質問でもあった。
どう答えるべきだろうかと逡巡していると、希望先輩が呆れたように肩を落とした。

「・・・景っち、何か褒めようよ。言うことなんていっぱいあるでしょ、例えばさ、似合ってるねとかいつもより可愛いよとかさー。景っちが女の子の服に疎いのは分かるけど、せめて一言言ってあげないと、かわいそうだよ」
「・・・」

この場合に、可哀想なのは希望先輩と衣先輩のことだよな。
酷い言われようだが、確かに当てはまっていると思うので、やはり言い返せない。
・・・まあ、私服になったというだけでいつも先輩なんだけどな。
俺がそう考えていると、希望先輩は立ち上がり俺の鼻っ柱に指を突きつけた。

「今、服が変わっただけでいつもと変わらないって思ったでしょ。ダメだよー、そんなんじゃ！！」

俺は、希望先輩に気圧されてじりじりと後ろに下がる。

だが、希望先輩も俺が下がった分だけ前に詰めてくるので距離は変わらない。衣先輩は、すっかり目を丸くして俺たちの様子を何だか微笑ましそうに見ていた。
そして、俺が扉まで下がり、後がなくなると希望先輩はまた説教の続きを始める。

「いいっ！！最低でも、女の子のいいとこをどこか見つけて褒めないといけないんだよ。これは男子の義務。人間に褒められる所がないなら眼鏡とかバッグとか何か褒める。でも、これは最低限よりもまだ下なんだから」
「はい・・・」

俺は、正直辟易としていた。

「何？今、私の話にケチがついたみたいだけど？」
「そんなことないです」

俺が首を何度も横に振ると希望先輩はしばらくジト目で俺を見ていたが、やがて諦めたようで視線を外した。

・・・今度からは気をつけないといけないな。
すると、ちょうどいいタイミングでエリスが帰ってきたようだ。下から、エリスの声が聞こえてきた。
俺は、心底ほっとした。これで、この部屋から抜ける口実が出来たと。

「あ、ちょうどエリスも帰ってきたみたいですから、俺ちょっと下に行ってきます」

俺は、衣先輩や希望先輩の返事を聞くことなく部屋から飛び出した。

景が慌てて部屋から飛び出て行くさまを衣と希望は苦笑いで見送っていた。

「・・・さすがにやりすぎたかな？」

「やりすぎですわね」

衣は呆れたように言うが、希望に悪びれた様子はない。

彼女は溜息をつくと景が出て行った扉を見やると衣に向かって言った。

「折角、衣っちがおしゃれしてきたのに景っちは何も言わないんだもん。それに、私も少しはおしゃれしたんだけどね」

さらに、希望は自信なくなるなーとぼやく。何か褒めてくれるだろうという期待が無かったわけではない。

だからこそ、何も言わなかった景に不満を覚えたのだ。彼女は、不満と共にお茶を一気に飲み干す。

それに対して衣は慰めるように希望の頭を撫でる。

「有栖さんは、きっと恥ずかしいだけだと思いますわ。ですが、有栖さんに先程言おうとしたことを言いそびれてしまいました」

「告白？」

希望の何気ない一言に衣は顔を真っ赤になる。

そして、彼女は少し希望に食ってかかるように言い返す。

「なっ、何を言っているのですか!?私は別にそのような邪な気持ちで来たわけではありません」
「ふーん・・・まあいいけどね」

希望は納得していない様子だったが、これ以上衣を刺激する必要もないだろうと話を変える。
それに、彼女は衣が顔を真っ赤にして慌てふためく姿を見ただけで満足なのだから。

「ところで、衣っちがさっき話そうとしていたことって何なの?」

すると、衣はがらりと真剣な表情に変え顎に指を当てると希望ではないどこか別の場所を見ながら言った。

「・・・ええ、大した話ではないですわ。ただ・・・あのメイドは本当にロボットなのでしょうか?」

エリスの言動を見れば、さも当然の疑問なのかもしれない。
だが、希望は笑いながら衣の言うことを一蹴する。

「だって、景っちも言ってたじゃん」

衣もニュースなどでエリスというよりもメイドロボットの話を知らないわけではない。
それよりもむしろ彼女が気にしていることは別にあった。

「・・・あんなに話すロボットを私は見たことありませんわ」

衣は、もやもやとした気持ちだけが残った。

俺が1階に下りると、母さんが三津刃さんに挨拶をしており、その隣のもう1人知らない人がいることに気付いた。
エリスと親しげに話しているところを見ると、どうやらエリスの知り合いらしい。
その人は、俺が階段を下りてくるのを見つけると、妙に親しげに声をかけてきた。

「おはよう、有栖　景君。私は藤多　加奈　（ふじた　かな）、年齢は・・・聞かないで。甘奈と同じく開発部の研究員をやってるわ。よろしくね」
「よろしくお願いします、藤多さん」

俺がそう言うと、藤多さんは俺の手を握って大げさに上下に振った。
・・・何かしつこくないか？
一向に手を離さない藤多さんに俺は戸惑い、エリスたちの方を見るが、藤多さんの後ろで、三津刃さんとエリスが苦笑していた。

「・・・あの・・・いい加減離してもらえます？」
「あ、ごめんね」

ようやく手を離してもらい、中へと上がってもらうと、ふと大きな荷物を3人が持っていること俺は気がついた。
俺が持とうと声をかけようとすると、藤多さんに制されてしまった。

「ああ、これ。別に重くないし持ってくれなくていいよ。それに慌てなくても中身はすぐに分かるから」

そして、靴を脱いで家に上がるとエリスと共にリビングの方へと歩いていく。
俺が黙ってついて行こうとすると、三津刃さんが俺の肩をとんとんと叩いて呼び止めた。
振り向くと、何だか複雑そうな顔をされた。

「・・・加奈のことなんだけど・・・どうやら景君は気に入られたみたいね。まあ、大変だと思うけど頑張って」

三津刃さんは、それだけ言うと俺の肩をぽんと叩いて行ってしまった。
後に残された俺は、何が何だかさっぱりだった。

・・・そういえば、さっき三津刃さん、俺のこと景君とか言ってなかったか？
いつの間に、そんな呼び方をするようになったんだろうか。よく分からないが、どうでもいいことだ。

そういえば、先輩たちに知らせに行かないといけないな。俺が、２階に戻ろうとするとリビングから藤多さんの声が聞こえた。

「有栖くーん。ちょっと来てーっ」

・・・先輩たち、怒っていないといいんだけどな。俺は、２階に向かって手を合わせるとリビングに向かった。

俺が、リビングに戻るとそこはすっかりと服や小道具で散らかりきっていた。
母さんは、俺を見ると両手を広げ、肩をすくめる。

そして、右手でテレビの方を指差す。俺がそっちを見ると、そこには異様なものがいた。

「・・・」

俺は絶句して、何も言葉が出てこなかった。
そんな俺を見て三津刃さんと藤多さんは誇らしそうな笑みを浮かべていた。
そして、エリスが俺の方に振り向くと恥ずかしそうに言った。

「・・・景様・・・似合っているでしょうか？」

・・・何で猫耳なんだ。しかも動いてないか・・・。
エリスよりもそっちの方が気になって仕方が無い。
必然的に俺の返事は適当なものになってしまう。

「ああ、似合ってると思う」

だが、俺はそこで何かがおかしいことに気がついた。

・・・今日は、メンテナンスじゃないのか？何でエリスがこんな格好をしているんだ？

その気持ちが顔に出てしまったのだろう。俺の気持ちを察したようで、藤多さんは嫌味のない笑顔を見せる。
・・・笑顔に嫌味はないが含みのある笑顔だな。そして、藤多さんは袋からさらに服を取り出した。

「今日は色々とエリスのために服を持ってきたの。それで、有栖君に一緒に選んでもらおうと思って」

「・・・」

俺は、黙って視線を逸らし、ちらかっている床を見る。
どう考えても私服になりそうもないものがたくさん転がっている。
それでも、いくらかはまともそうな服があるようなのが、唯一の救いと言えそうだが・・・。

「景様、朝の話おぼえていらっしゃいますか？実は私、あの時に言いそびれたのですが・・・あながち嘘というわけではなかったのです」
「・・・正夢ってわけか？」
「ええ、少し違いますけど・・・」

・・・コスプレの夢が冗談じゃないのは喜んでいいのだろうか。喜ぶべきなんだよな。俺は、無理矢理良い方へと考えてみる。だが、どうしてもそれができず、俺はエリスに苦笑いを浮かべてそちらを見る。
だが、エリスは俺と視線が合うと誤魔化すように笑う。そして、何故か猫耳も動く。

どうしようもないらしい。

加えて俺はもう1つ心配事が出来てしまった。
・・・衣先輩たちと会わせていいのか、この人たち。

当の2人は、服持ってきゃいきゃいと騒いでいるだけだしな・・・。

俺は、先輩たちを呼んだことを後悔し深く溜息をついた。
・・・エリスが念を押したのはこのことだったんだな。

衣先輩なら、たぶんこう言うだろう。

『後悔先に立たず』

まさに、そうだなと俺は思った。

第４２話：オプションはいかが？導入編（後書き）

本編後の雑談

幸「なあ、景。恵麻ちゃんってどんな女の子なんだ？」

景「何だ、藪から棒に。・・・そうだな、今は変わったが・・・昔は俺の話なんて聞いてもくれもしなかったな」

晃「へえー、それは意外だね。僕は藍羽さんは大人しい女の子とばかり思っていたけど」

幸「それは俺も同感だぜ。で、他にはどんな感じなんだ？」

景「色々と助けてもらっているな。たまに母さんがいない時には恵麻の家で食事の世話になることもあるし、小学生の時にあることで相談に乗ってもらったこともあるな」

晃「家族ぐるみの付き合いなんだね」

大「何ですかね、女の子の話ならこのわたくしも詳しいのですよ？」

景「お前は何をしに来た。それに言葉遣いがおかしいだろ・・・」

大「まあ、硬いですな。それよりもいい話があるんだ。心して聞きたまえ」

幸「・・・景の口から色々聞き出すチャンスだったのによ。で、大助。それはどんな話だ？」

景「・・・ん？なあ、晃。今、あの角に恵麻がいなかったか？」

晃「そ、そんなことないよ。気のせいだよ」

景「・・・」

大「おーい、そこ。話を始めるぞ。くくく、聞いて驚け。エリス美玖＞陽菜＞恵麻＞由真＞衣＞梓依の順番だ。何の順番か、お前たちに分かるかな？」

幸「胸だな」

晃「胸だね」

大「ちっくしょーっ、この変態どもめっ」

幸「てめえが振った話だぞ。つーか、普通に生活してりゃ分かることだろうが」

晃「まあ・・・色々とね」

大「ひでーな、景は。俺だって真面目なとこくらい・・・」

恵「みんな、そんな目で見ていたんだね・・・」

美「け、獣です」

紅「・・・最低」

由「へえ。あんたたち・・・いっぺん死んだほうがいいんじゃないの？」

幸「そんなこと話してなんて無いよな、景？っていねえええっ！

！」
恵「私は景君に私のこと聞いてみてって言ったけど、こんなこと聞いてほしいなんて言ってないよ」
由「ったく、あんたらに任せたあたしらが馬鹿だったよ。金輪際、近づかないでよ、変態。みんな、帰ろ」

景「・・・ん？誰もいないな・・・。もう帰ったのか？少し黙って忘れ物を取りに行っただけなのに薄情な奴等だな」

第43話：オプションはいかが？混迷編

「あの、有栖さん・・・。この方たちは本当に・・・その・・・エリスさんの会社の方なのですか？私、いまいち信用できませんわ」

俺は、苦笑いを浮かべるしかなかった。
衣先輩たちを呼んできて、エリスと他2人を紹介したのだが、衣先輩は不審者を見るような目で3人を見ていた。
確かにイメージとはだいぶ違うがエリスがそうだと言う以上、俺にはそれ以上確かめる術はない。
しかし、いくら本当だと言ってもその辺りに転がっている服や猫耳のエリスを見れば、誰だって疑いたくなるだろう。

「・・・俺もそれに関しては同感です」

俺と衣先輩は顔を見合わせると大きく溜息をつく。
衣先輩ががっかりしたのは無理もないだろう。
それに、俺にもこんな趣味があると思われるのではないかと気が気でない。

「衣先輩、言っておきますけど、俺の趣味じゃないですから」
「・・・ええ、それは私も存じておりますわ。ですが・・・」
「ですが？」

何だか妙に歯切れの悪い衣先輩の視線の先を俺も見てみる。
その視線の先を見た俺の感想は、やっぱりな、だった。

「ねえ、三津刃さん。これ着てみてもいい？」
「どうぞどうぞ。でも、皇后崎さんって珍しい苗字ね」

「よく言われますよー。あ、景っち。そんなとこに突っ立ってないでさっさと出て行く。女性が着替えるんだから」

すっかり馴染んでいるな・・・。俺はすっかりどうでもよくなった。希望先輩は、こういう人とは喜んで関わっていくほうだ。たった1年の付き合いだが、それだけは分かる。

さらに、一応家には父さんがいるが、母さんがリビングから追い払っているので、自分の部屋でテレビでも見ているのかもしれない。要するに、男がリビングに俺しかいない。俺が何を言った所で聞いてくれる人はいないだろう。

・・・もしかすると、母さんはこのことを知っていたのか？

俺が、後ろを振り向くとちょうど母さんがリビングから出て行こうとしているところだった。

心なしか背中が笑っているように見えたので、俺は母さんを呼び止めると聞いてみた。

「母さんはこのことを知っていたのか？」

「あら、景ちゃんに言ったら面白くないじゃない。でも、お友達を呼んでいるのは意外だったけど」

そう言って、母さんはいつもよりも控えめに笑う。

母さんは外面はいいので、決して他人には普段の姿を晒すような真似はしない。

本人曰く、品のいい若奥様をイメージして演じているのだという。

「・・・俺だって知っていたら呼ばない」

「あら、てっきり景ちゃんは知っていて呼んだのか思った」

「そんなわけない！」

俺はついいらっとして声を荒げてしまった。
すると、今まで騒がしかった後ろのエリスたち４人の声が聞こえなくなった。
俺は、しまったと思うが既に遅かった。弁解でもしようと俺がエリスたちの方に向き直ると衣先輩が申し訳無さそうに言った。

「あ、あの・・・もしかして私たちが来たのは迷惑だったのでしょうか？」

それは、たぶん衣先輩だけでなく、希望先輩や三津刃さんたちも同じ気持ちなのだろう。
じっと俺のことを伺う様な目で見ている。
希望先輩でさえ、いつものようなふざけた様子は見せていなかった。
非常にまずい空気だということはよく分かる。母さんは相変わらず笑顔のままだが、その笑顔は苦しいものだった。

「・・・すいません。少し取り乱しました。俺は黙っていられたのが嫌だっただけですから」

俺が、少し息を整えてからそう言うと三津刃さんたちは安堵の表情を見せる。
だが、今度はエリスに三津刃さんは少し厳しい口調で言った。

「ところで、エリス。ちゃんと伝えてって私言ったよね？」

俺は、今まで聞いたことのない三津刃さんの口調に驚いた。
エリスはしゅんとしてしまい何も言わない。三津刃さんは、そんなエリスに構うことなく話を続ける。

「てっきり伝えてるんだとばかり思ってたんだけど・・・。まあ、いいわ。折角、景君好みの服にカスタマイズしようと思ったのに・・・」

とても残念そうに三津刃さんはその辺りにある服を見ていた。
その姿に憐憫の情も湧かないこともないが、それ以上に俺は気になったことがあった。

今、最後に何か言ったような気がするんだが、どうも脳が理解するのを拒否しているようだ。

俺は、恐る恐る聞き返した。

「あの・・・三津刃さん？」
「どうしたの、景君？もしかして、一緒に服を選んでくれる気になった？」

・・・冗談だよな？

「冗談じゃないわ。だって、エリスは一応オーダーメイドですもの。性格とか見た目は変えるつもりはないけど、服くらいはいいと思うのよ。今日はエリスに実際に着せてみて、それで景君に選んでもらおうと思ったのよ」

心を読んで会話を勝手に進められたのは、この際どうでもいい。
衣先輩と希望先輩が話についてこれてなくて、ポカンとしているのも、この際仕方がない。

「あはは・・・衣っち・・・どうしよう？」

「わ、私に聞かれても・・・」

そして、母さんや三津刃さんたちの期待の眼差しが痛いくらいに感じる。

「「・・・」」

これは、無視できなかった。

・・・視線って本当に痛いんだな。

さて、どうやってこの場から逃げようか。

エリスの服を選べと言われたところで俺としては、その辺りに転がっている服の大半は拒否したかった。

それに、普通の服なら何を着ても似合うと思うエリスの服を選ぶ必要があるのか甚だ疑問だ。

第一、オーダーメイドって・・・俺は何も注文した覚えはないんだが・・・。

ぐだぐだと俺は言い訳を並び立てるが、結局いい方法が見つかることはなかった。

・・・要するに恥ずかしいだけなんだ。

俺が迷っていると、母さんが段々とイライラしているのが分かった。

このままだと勝手に決められそうだと思っていると、都合よく家のチャイムが聞こえてきた。

「誰か、来たみたいだから俺が出てくる」

「ちょっと、景！」

俺は、口実を見つけるとリビングから一目散に逃げ出した。
そして、少しほっとした気分で玄関の扉を開けた。

「よお、景。連休中はどこにも行かないって聞いたから遊びに来たぜ」

「それで、今暇？」

そこにいたのは幸樹と晃だった。
この2人もゴールデンウィークだというのに、どこにも行く用事がないらしい。
こうして、電車で俺のとこに来るくらい暇なのだろう。
だが、俺にとっては好都合だった。

「暇だな。ちょっと外に出ないか？今、家の中はごたごたしてるからな」

俺はなるべく家の中を見せないように外に出ようとした。女物の靴が何足もあるから、特に幸樹は誤解しかねない。
だが、母さんが玄関に出てくると俺の背後から幸樹と晃に声をかけた。

「あら、幸樹君に晃君。あがっていっていいのよ。景のお友達も来ているし。・・・ちょっとちらかっているけどね」

明らかに最後の言葉は俺に向けられていた言葉だった。
その証拠に母さんは俺にだけ悪戯な笑みを浮かべていた。幸樹たちはそれが何を意味するか分かっていないようで、2人とも顔を見合わせていた。
母さんがいいと言った以上、俺が断るというのも変に思われるだけ

だよな。
俺は、諦めると2人を家の中へと上げることにした。
「おいっ、景。随分と女の人の靴がいっぱいあるけど、これ全部お前の母親のじゃないだろ？」
「・・・まあ、リビングに行けば分かるから何も言うな」
予想通りの幸樹の反応に俺はげんなりとしつつも2人をリビングへと案内した。
どうせ、2階に案内したところで、母さんが面白がって幸樹たちを昼に呼んでバレるのは時間の問題なのだから、それならばさっさと見せておいたほうがいいだろう。

「・・・なあ、景。俺は今まで景は常識人だとずっと思っていた。だけど、これはどういうシュチエーションなんだ！？」
「・・・幸樹、一応言っておくけどシチュエーションね。まあ、僕もこれには驚きを隠せないけど」
2人がリビングに入って、俺に言った感想はこんなものだった。
リビングは、さっきと様子は変わっていなかったが、いつの間にか希望先輩が先程手にしたチアガールが着そうなユニフォームに着替えていた。
・・・ＫＹって、きっとこういう人のことを言うんだろうな。
それが、俺の希望先輩への感想だった。
母さん以外は、俺が出て行くものとばかり思っていたようで、エリ

スも先程とは違った服だった。

「・・・あ」

「・・・」

だが、エリスも希望先輩も俺や幸樹、晃の姿に目が点になっていた。向こうは向こうで恥ずかしいらしい。2人とも顔を真っ赤にして部屋の隅で小さくなっていた。

そして、その服を持ってきた張本人たちはいうと・・・。

「だから、私は反対したのよ」

「ちょっと待って。甘奈も最終的には賛成したでしょ。それに、その後は甘奈の方がノリノリだったじゃない」

「加奈が乗り気で諦めそうもなかったから、私もしぶしぶ賛成したの。いい年して、コスプレ好きなんておかしいと思うわよ。それに、他人に押し付けたら迷惑になるっていつも言ってるわよ」

「甘奈こそ、いい加減真面目ぶるのやめたら？昼間から隠れて酒飲んだりしているのに、よく人のこと言えるよね」

何で、あんたらは喧嘩しているんだ？

俺は、目を背けたくなるようなリビングの惨状に思わず声を失った。そして、その惨状から目を背けるとふと1人足りないことに気付いた。

・・・そういえば、衣先輩がいないような気がする。もう帰ったのか？

俺は、辺りを見回してみると台所で母さんと会話している衣先輩を発見した。

近寄っていくと、衣先輩と母さんは俺に気付いた。

「あら、有栖さん。・・・とても賑やかですわね」
「・・・そうですね。ところで、こんな所で何しているんですか？」
すると、衣先輩ではなく母さんが俺の質問に答えた。
「ちょっとお茶でも淹れようと思ったら、霧生さんが手伝ってくれたのよ。どこかの大人とは大違いね」
母さんの視線の先にいる人はそちらに向かなくても分かる。
俺は、乾いた笑い声をあげることしかできなかった。衣先輩は少し照れたように笑みを浮かべていた。
そして、お盆にお茶を乗せると運んでいく。
俺も手伝わないとまずいと思い、ついて行こうとすると母さんが俺を服の襟首を掴んで止めた。
「霧生さんっていい子ね。ところで景とは、どんな関係なの？」
何を真剣な表情で聞くのかと思ったら、そんなことか。身構えて損したな。
俺は、思いついたまま答えた。
「端的に言うと、生徒会長とその下僕とでも言うべきか」
母さんは、俺の言うことがよく分からなかったようでしきりに首を捻っていたが、何かピンと来たらしくにやっと不気味な笑みを浮かべると俺の耳元で囁いた。
「あら、女王様なのね」
「・・・何を考えているのかは分かるけど、それは違うからな」

「冗談よ。でも、恵麻ちゃんと同じくらいにいい子ね」

お茶を淹れ終わり、俺たちがお茶を飲んでいるにも関わらず、未だに言い争っている三津刃さんと藤多さんを見た母さんは、溜息を1つつくと2人に近づいていく。
そして、手をパンパンと叩いて2人の注意を引くと笑顔を作って言った。

「そろそろお茶でもいかがですか？それにいい加減にしないとうちから蹴りだしますよ」

母さんの有無を言わせぬ気配に今まで言い争っていたのが嘘だったかのように2人は大人しくお茶を受け取ると黙ってすすっていた。
確かに母さんは文字通りこの2人を蹴りだしそうだからな・・・。
俺が苦笑いを浮かべて母さんとすっかり大人しくなった2人を見ていると衣先輩が母さんを気にしながら俺に小声で言った。

「あの・・・有栖さん・・・。有栖さんのお母様はお強い方なのですね」
「あれが普通なんですよ。希望先輩は知らないかもしれませんけど。でも、そうだろ？幸樹、晃」

俺が話を振ると、幸樹と晃、そして希望先輩がこちらへやって来た。
そして、俺の背後から急にエリスがひょっこりと顔を出した。

「景様、どのようなお話ですか？私も聞いてみたいです」

「っ！？・・・エリス、急に後ろから声をかけるな。・・・心臓に悪いだろ」

と言うよりも、今までどこにいた・・・。

時折、こうしてエリスは音もなく俺の背後にいることがある。
普段は、どちらかというとパタパタとスリッパの音を鳴らしながら駆け回っている。
だからこそ、余計に気になるのだ。俺が、エリスを見て考え込んでいると、エリスは恥ずかしそうに俯いた。

「景様、そんなにじろじろと見ないでください・・・。恥ずかしいです」

そう言われて、俺は気がついた。
エリスは、いつものメイド服ではなく聖蓮学園の制服を着ているということに。
頭を抱えたくなる衝動に駆られながらもかろうじて俺はそれをしなかった。・・・いや、できなかった。

「・・・そんな服まで作っていたのか、あの人たちは」
「いえ、これは皇后崎様の制服です。少し胸の辺りが苦しいですけど・・・」
「・・・悪かったね、胸無くて」
「そんなつもりではなかったのですが、気分を悪くさせてしまい申し訳ありません」

俺に背を向けて謝るのはいいのだが、聖蓮のスカートはそこまで長いわけではない。
それに希望先輩とエリスでは身長に差がある。つまり、元々短いス

カートがさらに短くなっているのだ。

つまり、・・・エリスが頭を深く下げるたびに・・・白いものがちらちらと見えるということだ。

だが、幸いにして俺以外の誰も気づくことはなかった。

俺がほっとしていると、幸樹はエリスの手を握りながら鼻息を荒く言う。

「おおっ、エリスちゃん。やっぱり可愛いぜ。惚れてもいいか？」

「幸樹、興奮し過ぎだって・・・」

「放っておけばいいだろ・・・。それよりも、そろそろ昼の時間だな」

時計は、ちょうど12時を回った所だった。どぎまぎとしながら言ったものだから晃に気付かれたかと思ったが、晃は気付く様子もなく俺と同じ様に時計を見た。

だが、母さんは何か用意しているわけでもなく、ただ俺たちのことを時折見ながら三津刃さんたちとお茶をしていた。

ふと、俺は今は絶好の機会なのではないかと母さんに頼んでみた。

「母さん・・・」

「ダメよ、景ちゃん。今すぐ何か頼むから、少しの間待っていてね」

「・・・まだ、何も言ってないんだが」

「どうせ、料理でも作ろうとしたんでしょ」

すると、母さんの言葉を聞いた幸樹と晃が騒ぐのを止め、俺の方を悪魔でも見るような目で見ていた。

「っ！？」

幸樹と晃は俺の料理を1度食べたことがある。そして、その場で吐いた。
それ以来、俺が料理の話をするだけでも今のような目で俺を見るようになった。
家庭科の授業では、必ず俺にこう言う。

「景、お前は野菜を切るだけにしておけ。それか、片付けにしておけよ、いいな」
「絶対に味付けに関わったらいけないよ。他の人も死にたくなかったら、景に料理はさせないで」

それ以降幸樹と晃が一言も発しないことを、衣先輩や希望先輩は訝しげに眺めていた。
そして、しばらく2人で顔を見合わせると俺に言った。

「ねえ、景っち。・・・そんなに料理が下手なの？」
「有栖さん。お2人が恐怖に慄いていますけど、一体何をしたのです？」

多少なりとも2人とも好奇が見え隠れしていた。特に、希望先輩は、いつの間にかメモを用意しており、今にも俺から聞き出そうとする雰囲気だった。
だが、幸樹と晃が2人の前に立ちはだかった。

「絶対、ダメ！！興味なんて持ってもダメ！！」
「そうです、今すぐ忘れてください。僕たちはこれ以上の犠牲者を

出したくないんです」

必死な顔で訴える2人に、珍しく衣先輩も希望先輩も圧倒されていた。

そして、苦笑いを浮かべて頷いた。

衣先輩たちがこれ以上聞こうとしないのを見た幸樹と晃は心底ほっとした表情をしていた。

いつの間にか、大人3人もこちらの騒ぎを見ていたが、原因を知らない三津刃さんたちが何も聞いてこないのは、きっと母さんが説明したからだろうな。

そして、俺たちの騒ぎが収まると話題を強引に変えようとしたのだろう、三津刃さんと藤多さんは立ち上がると大きな声で言った。

「じゃあ、午後から始めるわよ」

「あ、そうだ。男の子用の服も用意してあるの。よかったら、着てみてくれる？」

何を言っているんだ？俺は、こちらにずいと寄ってきた藤多さんの言葉を意図を測りかねていた。

その時、ちらりと見えた三津刃さんの口元が笑っていることに気がついた。

だが、それ以上に藤多さんが近くにいることに俺は得体の知れない寒気を覚えた。

俺が、少し距離を取ると藤多さんは少し残念そうな顔をしていた。

すると、ちょうどいいタイミングで母さんが俺たちに声をかけた。

「はいはい。そろそろお昼にしましょう」

母さんの言葉に、皆が席へとついていく。

・・・たぶん、気のせいだな。俺は、そう決め付けると空いた席へと座った。

第４３話：オプションはいかが？混迷編（後書き）

本編後の雑談

美「ねえ、紅玲奈？１２月って何で師走って言うのかな？」
紅「・・・師匠が忙しく走り回るから」

美「冗談だよね？」
紅「・・・冗談かもしれない」
美「・・・」

景「それで俺に電話してきたのか」
美「は、はい、そうなんです」
景「・・・頼ってくれるのは嬉しいんだが、俺もよく分からないんだ。衣先輩なら知っているんじゃないか？悪いな、力になれなくて」
美「い、いえ、そんなことないです。そ、それよりも・・・せ、折角ですから、もう少しお話しませんか？」
景「・・・それは構わないんだが、何故今の時期に師走の話なんだ？」

美「そ、それはですね・・・た、単なる思いつきです、思いつき」
景（前から少し頭のネジが緩んでいるとは思っていたが、本当にそうだったのか）
美「あ、あの・・・景先輩・・・。どうかされましたか？」
景「あ、い、いや少しぼーっとしていただけだ」

美「・・・わたしはまだ意識されていないんですね」
景「何か言ったか？」

美「い、いえ・・・わたしも少しぼーっとしていました」
景「俺たち意外と気が合うな。注意力散漫仲間として」
美「・・・と、とても複雑です」
（で、でも・・・共通点があるだけ・・・いいのかな？）

第４４話：オプションはいかが？本番前

「なあ、景。今ならまだ間に合う。さっさと外に行こうぜ」
「そうだよ、景。僕は女装癖はないんだ・・・」

昼飯が終わり、俺たち3人は皆から離れて、こっそりと話し合っていた。
だが、こそこそと行動するのはむしろ目立つことが多い。
いつの間にか俺の背後には、三津刃さんがそっと忍び寄ってきていたようで、急に会話に割り込んできた。

「何々、まさか逃げようとしてるかな？諦めも大切なんだよ」
「・・・随分と老けた考えですね」
「失礼ね、景君は。これでも、私は２６よ」

・・・この人は意味が分かっているのに、あえて分からない振りをしているんだな。
それでも、老けたという単語に一瞬むっとしたのは間違いなかった。
たぶん、会社の人が俺と同じことを言ったら、これとは違う状況ができたのだろう。

「・・・」
「風邪ですか、鷹西さん？」
「あの暴力女たちが俺の噂でもしてるんだろ」
「あ、言いつけちゃおっと」
「げっ、ま、待て。今度、昼飯奢る」
「毎度ー」

加えて、妙に笑顔の藤多さんが話を続けようとしたとき、家のチャイムが鳴った。

「ん？誰か来たらしいな。俺が出てくる」

「待ってください、私も行きます」

エリスが俺の服の裾を掴んで離さない。どうやら、俺の考えは既に読まれていたらしい。

それに逃げても、その後が大変なことになるのは目に見えているので諦めるしかなかった。

俺とエリスは連れ立って玄関へと向かった。

「すぐに参りますので、少々お待ちください」

そして、玄関の扉を開けた時、見知った顔を見つけた俺はそのまま扉を閉めようとした。

「ちょっ、景！？」

「由真。今、立て込んでいるから暇じゃないんだ」

「そ、そうなの？」

そこにいたのは恵麻と由真だった。何でこうタイミングの悪いときに来るんだ・・・。

由真に片足を突っ込まれて、さすがに挟むわけにもいかず、しぶしぶ扉を開けた。

だが、そこにいたのは2人だけではなかったのだ。

「け、景先輩。こ、ここんにちは」
「有栖君。こんにちは。こほっ・・・」
「・・・美玖に、明月院さんか」

そういえば、美玖がいるのに梓依がいないな。
俺が辺りを見回すと、ふいに玄関の扉の裏から何かが飛び出して、俺に抱きついてきた。

「景お兄ちゃん、こんにちはー」
「・・・しより、いきなり抱きつくのはどうかと思う」

そう言ってもしよりは美玖曰く、年齢は5歳程度らしいので仕方がないのかもしれない。
俺が、しよりの頭を撫でていると由真がしよりに一瞬視線を落とすと何事もなかったかのように話しかけてきた。

「・・・。ところでさ、景は暇じゃないんだよね？」
「私たちこれから買い物に行くんだけど、よかったらどうかなって思ったんだけど」
「要は荷物持ちをしろってことか」

俺の言葉に恵麻は曖昧に笑い、由真は大きく頷く。

・・・まあ、断ったし帰ってくれるよな。俺がほっとしていると、戻ってくるのが遅いと思ったのだろう。
母さんが、エリスの前に立っていた。

「あら、恵麻ちゃんに由真ちゃん。それに・・・3人は恵麻ちゃんのお友達かしら？」

「こんにちは、柚葉さん。みんな、景の友達ですよ。まあ、あたしたちの友達でもありますけど」

げ、余計なこと言うな。由真の言葉に顔をしかめた俺が後ろを見ると母さんは新たな楽しみを見つけたと言わんばかりに笑顔を浮かべる。

そして俺にこっそりと耳打ちした。

「景ちゃん・・・ハーレムね」

「・・・」

ハーレムね・・・。幼馴染にその友人。そしてたまたま知り合った双子の後輩に何度か話しただけの歌姫。

ただ仲のいい友達なのだが、周囲から見ればこんな認識になるのは仕方のないことだ。

だが、明月院さんが先程から喉を気にしていることを俺はずっと気になっていた。

あまり話したこともないので、あえて聞かなかったのだが俺たちが話している間も時折気にしているので、聞いてみることにした。

「明月院さん、風邪でも引いたのか？少し声の調子がよくないみたいだが」

「いつの間に、声の調子が分かるくらい仲良くなったの？でも、あたしも陽菜の声の調子がよくないと思う」

俺と由真の指摘に明月院さんは、少し悲しそうな顔をした。

「うん、ちょっと喉の調子が悪いんだ・・・」

まずい質問をしてしまったと俺は思った。明月院さんが歌うことが好きなのは何となくだが分かる。
だからこそ、聞いてしまったことを今更後悔するがそれはもう遅い。
たとえ悪意がなくてもだ。
俺たちの間に、気まずい空気が流れ黙りこくってしまうとそれを見かねたように母さんが言った。

「そうなの？そうだ、よかったら、うちに寄っていかない？」

母さんが1度言い出すと聞かないことは俺や恵麻はよく知っている。
だが、それ以前に皆あっさり頷いて家の中へと入っていった。恵麻や由真は分かるが、美玖や明月院さんがあっさり入るのは意外だったな。
それに、エリスとは初対面にも関わらず、既に仲良く話をしている。
これでは、帰れとは言えない。

・・・あとで、謝っておかないといけないな。皆の後姿を見ながら俺はそう思った。

「うわっ・・・あんたたち、一体何してるの？」
「け、景、せ、先輩・・・ほ、本日はお招き頂きありがとうございます。・・・ううっ、噛んじゃった・・・」
「わーい、しよりも混ぜてー」
「あ、霧生先輩に皇后崎先輩も来ていたんですか。ふーん、ここが有栖君の家なんだね」
「ところで、景君。今日は何かのパーティなの？」
エリスと挨拶をしていた5人を連れてリビングへ行くと、中の様子

を見た5人は五者五様の反応を見せた。
そして、衣先輩や希望先輩、幸樹、晃も突然の訪問者たちに呆然としていた。
だが、三津刃さんたちは違っていた。
恵麻を見つけると、何か思うところがあったようで手招きして呼んでいた。

その後、恵麻と三津刃さんたちは二言三言会話をしていたが、小声で話していたので何を話しているかは聞こえてこなかった。
ただ、話が終わるまで笑顔1つない会話だったのでふざけた話ではなさそうだった。
話を終えた恵麻は、首を捻りながら俺のところへ来ると、1度2人を振り返ってから訝しげな顔をした。

「景君。あの人たちに変なことを聞かれたの。エリスちゃんを見て思うことなかったかって」
「エリスを見て思うこと？メイドじゃないのか？」

すると、恵麻はさらに俺に近づくと小声で囁いた。

「景君、それは見たままだよ～。うん、でもね・・・あの人たちには言わなかったけど、幼稚園の頃に友達だった絵梨ちゃんに似てるなって思ったの。見た目も違うし、ロボットなんだけど、雰囲気が似てるのかな？」
「それは、ないだろ。たった数ヶ月一緒だっただけなんだからな。今は、どこにいるのかも分からないしな」

そう口ではそう言ったが、俺にも思い当たる節があった。
エリスが来てから、昔の夢を何度か見るようになった。ここ何年も見ることのなかった夢だ。

だが、あの時の絵梨ちゃんは黒髪で、背は小さく、ただ俺と恵麻よりもずっと大人びていて・・・。振り返ると懐かしい思い出だ。
もし戻ってくるなら、メイドの格好をする必要なんてあるわけがない。
俺はエリスをちらりと見るが、やはりエリスはエリスだった。記憶の中の女の子ではないのだ。

そう思うと、少し心の奥底が痛むような気がした。

俺と恵麻がお互いに話の切り出しを考えていたために、由真がそっと背後から忍び寄っていることに気がつかなかった。
由真は、俺たちの首に腕を回すと顔を近づけて笑いを抑えながら言った。

「お2人さんは、何ひそひそと話しているのかな？あたしたちには聞かれたくない話かな？」
「・・・」

俺は完全に無視したが、恵麻は動揺してしまって由真から顔を逸らす。
照れたりするから由真が面白がるんだと以前から恵麻には何度も説明しているのに一向に直る気配が無い。
まあ、それだけ純粋なんだと俺は好意的に理解している。

俺と恵麻が由真の追及を無視していると、三津刃さんたちは衣先輩や明月院さんたちに何やら耳打ちをし始めた。
初めは、顔を真っ赤にして断っていた皆だったが、藤多さんが何かを言うと、美玖が初めにやると言うと結局全員がやると言っていた。
そもそも何を始めるのかさえ俺にはよく分からなかった。

「ねえ、景君。私たち省かれてるのかな？」
「恵麻、あたしたちがいるから大丈夫だって。それに、あの女の人・・・どうも胡散臭いんだよね」

・・・本人を目の前にして言うことではないと思うぞ。
だが、当の本人は聞こえているだろうにも関わらず全く気にする様子もなかった。
それどころか、恵麻と由真を連れて行くと、何やら話を始めた。

「・・・エリス。俺、嫌な予感しかしないんだが・・・」
「はい、概ね合っています」
「・・・否定しろよ」

こういう時のエリスには頭にくることが多い。
俺が、じっと目を見ると明らかに視線を逸らすのだ。加えて俺が困るのを楽しむ節が出てきたせいか、最近は俺がある程度困るまでただ見ているだけなのだから。

・・・こういう時は、男の友人を頼るしかないよな。

「あら、2人とも帰っちゃうの？残念だわ」
「お前ら、逃げるのか！？」

幸樹と晃は、騒ぎに乗じて既にリビングを抜け出していた。

「悪い、景。俺これから野球部に顔出してくるわ」
「僕は、これからバイトだから・・・じゃあまた明日」

幸樹の野球部は今日は休みだということは聞いているし、晃は今日

はバイトではない。
バイトがあるのは俺だ。
だが、何故急に帰ったのだろうか？
すると、母さんは俺に年甲斐も無くブイサインを作ってみせた。
「だって、景ちゃん1人の方が面白そうだったから」
「脅したのか！？」
「ううん、違うわ、人聞きの悪いこと言わないで。ただ、後でこっそり女の子の写真をあげるって言ったら幸樹君が積極的に帰るって。私がそんなことするわけないのにね」
・・・あいつ・・・友人よりも写真を取ったのか。
俺は、友情の儚さを知った。写真に負けるのか、俺は・・・。何度も母さんの言葉を反芻していると不自然なことに俺は気がついた。
・・・写真？女？
俺は、母さんに確認するために尋ねてみた。
「・・・なあ、母さん。これから何が始まるんだ？」
だが、母さんはふふふと笑うだけで何も答えてはくれなかった。
すると、藤多さんがリビングから出てくると俺の腕を取ると強引に引っ張り中へと連れ込んだ。
そして、俺を皆の前に立たせると拍手を促した。
「はーい、主役の登場でーす。みんな、拍手」
皆、それぞれ違った表情を見せていたが一体何が始まるのだろうか。

俺が疑問に思っていると、藤多さんが酒に酔った親父のように俺に絡むと、がっしりと肩を組んで顔を寄せると少し色っぽい声で言った。

「今日は、時間も無いからそこの女の子たちの協力を得て、景君の好みの服を探りたいと思います。いいねえ、ハーレムだよ、酒池肉林」

・・・要するにコスプレをさせるらしい。

俺が、本当か？と視線で訴えかけると、まじですと同じく視線で返された。

まさか視線だけで会話ができると思わなかったが、できても全く嬉しくないのは何故なんだ？

それに、明日から恵麻たちにまともに顔向けできるのか？逃げ出したいのは、両隣にしっかりと三津刃さんと藤多さんがついているのでできそうもない。

・・・この人たち、柔道と剣道やってるってエリスが話していたよな。たぶん、力づくでも俺を引き止めるだろうな。

俺を除く皆が楽しそうだったが、何が一体楽しいのか俺には分からなかった。

・・・俺の趣味が露見したら、学校行けるか？

俺は、案外冷静に最悪な事態を考えていた。エリスが来てからという非日常ばかりだから感覚が麻痺しているのかもしれない。

藤多さんの言葉を無視してお茶を暢気にすすりながら俺は、現実を

シャットアウトした。

第４４話：オプションはいかが？本番前（後書き）

本編後の雑談

あなたが今年偽ったものは何ですか？

景「何だ、このお題は？」
エ「何でも『偽』が今年の漢字なんだそうですよ」
景「誰がこんなものを持ってきたんだ・・・。まあ、いいか。俺が今年偽ったものは・・・そうだな、強いて言うなら俺自身だろうか」

エ「そうなのですか？では、私も私自身です」
景「実はロボットではないとかか？」

エ「・・・はい。実は私は・・・」
景「その話は全部偽装だな」
エ「・・・景様は、ケチな方です。もう少し私の冗談に付き合ってくださってもいいと思います」

景「ケチって・・・。まあ、いいか。そうだ、他の奴にも偽ったものを聞いてみたからここで発表する」
エ「皆様は何を偽っていたのでしょうか？」

景「一応匿名だからな。・・・恋心、胸（姉が）、人格（妹が）、暴力的な面、部費、開発費、義援金、私、性別、年齢、好みの女の子、国籍・・・」

エ「あの・・・景様。これはどなたに聞いたのですか？」
景「・・・いや、俺もよく分からないんだ。半分は分かるんだが・・・

・後のは一体・・・」

エ「景様。きっと気にしてはいけないのだと思います」

景「そうだな。気にしないほうがいいよな」

エ「はい。・・・今更、私が聞いてきたなんて言えないです」

第４５話：オプションはいかが？本番編

・・・無理だ。現実が気になって仕方ない。

俺は、結局現実をシャットアウトできなかった・・・。隣では絶えず笑顔を絶やさない大人３人の視線を浴びているのだから。

「楽しみね、景ちゃん」
「もう少ししたら来るわね」
「ふふふふ」

何故、俺も逃げなかったのだろうか？無理すれば逃げることも出来たはずなんだが・・・。

もしかすると・・・いや、もしかしなくても・・・。

・・・俺はどうやら自分の気持ちに素直だったらしい。

エリスや恵麻たちがリビングから出て行ってから１０分くらいが経っただろうか。
俺はすっかり待つのに飽きてテレビをつけて見ていた。
ブラウン管からは、少し落ち目の芸人が体を張って海外で様々なことに挑戦している様子が映っていた。
だが、少し前までは覚えていたはずの芸人なのだが名前がどうしても思い出せない。

「・・・母さん、この芸人・・・誰だか覚えてるか？」
「誰だったかしら？」
「うーん・・・喉まで出掛かってるけど・・・」

皆、1度は見たことはあるようだったが、何故か名前が出てこない。
これが一発屋と呼ばれるものなのだろうな。
俺たち3人がブラウン管を見つめながらああでもない、こうでもないと話していると三津刃さんが呆れたように言った。

「ねえ、あなたたち・・・みんな来てるわよ」

俺たちが後ろを振り向くと、妙に淀んだ空気がその場を支配していた。
そこには、いつの間に来たのか、全員が勢ぞろいしていたが、皆揃って表情が冴えない。
そして、その中でも一段とがっくりと肩を落としていた美玖がぽつりと呟いた。

「・・・わ、わたしたちは・・・もう旬の過ぎた芸人以下なんですね・・・」

何て間の悪い奴らなんだ・・・。俺は、自分のことを棚に上げて責任を擦り付けた。

・・・そうじゃない。何か褒めなくてはいけないな。俺は、しばらく黙って観察することした。
すると、由真が黙ったままの俺に向かって真顔で言った。

「ねえ、景。あんたさ、まさか本当にゲイなわけ？」
「・・・そんなわけないだろ！」

だが、誰も俺の言葉を信じてくれている様子はなかった。

「景君、やっぱりそうだったんだ・・・」

「ねえ、ゲイってなーに？」

「はあ・・・有栖さん・・・あなたは正常な男性と思っていましたのに・・・」

「・・・有栖君。ゲイはよくないよ。今からでも遅くないから私と一緒に治そうよ」

「勝手に俺をゲイとして話を進めるな！！」

「「・・・」」

ようやく黙ってくれたか・・・。

ゲイの話はもう1ヶ月も前の話なのに、まだ覚えていたとはな。・・・いや、むしろ広がっていないか？

・・・。よし、忘れた。

俺が、無理矢理ゲイの話を脳内から削除し終えると、見計らったかのように誰かが俺に声をかけてきた。

「景様、景様。似合っていると思いますか？」

俺は、そのいつもよりも弾んだ声に自然と振り向いていた。

すると、そこにはアニメの魔法少女が着ていそうなコスチュームに身を包んだエリスがいた。

妙にフリフリとしたものがたくさんついていて俺の好みではないが、エリスが着ていると不思議と違和感が無い。

そして、エリスは俺の視線に気付くと1つお辞儀をしてからくるりと回った。

「・・・エリス自体が、ファンタジーな存在だからな」
「あ、あの・・・景様？それは似合っているということでしょうか？」

どうやらまた俺は独り言を呟いていたらしい。何も言った記憶がないにも関わらずエリスは期待するような眼差しをで俺を見つめていた。
こういう時に中途半端なことを言うと、後に大きな勘違いを生むことになる。
俺は、喜んでいるエリスに釘を刺しておく。

「ん？あ、ああ。似合っていると思う。でも・・・もし、その格好で外に出たら、2度と帰って来なくていいからな」

だが、エリスは服を見ながら嬉しそうな笑みを絶やさなかった。
エリスは俺が脅しをかけても本気でないことを知っているので、追い出すと言ったところで、その効果は薄い。
それでも、暴力を振るうわけにもいかない。いや、そもそも振るっても勝てないと思うが・・・。

・・・そんな背中がぱっくりと開いた服なんかで外に出てもらったら俺が困るんだよな。

喜ぶエリスを見ながら俺が溜息をついていると、俺の背後から誰かが俺の背中を遠慮がちに突付いた。
振り向くと、恵麻がそわそわとしていた。どうやら、次は恵麻を褒めなくてはいけないらしい。

「・・・今度は、巫女か？」

恵麻が着ていたのは神社の売店の人がよく着ているものだった。俗に言う巫女服というものだ。
ただ、エリスとは違って正統派なためか露出は控えめだ。

・・・俺は、巫女を見ても何とも思わないが、幸樹や大助がいたら興奮しているに違いないだろう。

会話に困ってしばらくお互いに黙っていると、恵麻がはにかみながら言った。

「に、似合ってないかな？」

その笑顔が無理をしているということは、付き合いの長い俺にはすぐに分かった。
だが、俺は、すぐに褒める言葉が見つからなかったので、とりあえず話題を変えてみることにした。

「そんな落ち込んだ顔をするな。ところで、何でその服を選んだんだ？」
「う～ん、何となく景君、こういうの好きかなって思ったの」

・・・恵麻、お前は俺のことをそんな目で見ていたんだな。
素直に可愛いと言ってあげればいいのだろうがそれは恥ずかしくてできない。
だから、思ったことがつい口から出てしまった。

「・・・恵麻。似合っていると思うが、左前は死装束なんじゃないのか？」

すると、恵麻の顔が真っ赤になったと思ったら、すぐに青くなった。
そして、俺が思った以上に慌てた様子で口早に言った。
「えっ・・・そ、そうなの！？私、着替えてくる」
「恵麻様。私もご一緒します」
恵麻とエリスが出て行った後、俺は何だか悪いことを言ったような気分がした。
俺が、唖然としてリビングの扉を見つめていると、由真が声をかけてきた。
「ＫＹだねー、景は。あたしなら言わないよ」
はっとして振り向くと、由真もまたいつもとは違った格好をしていた。
だが、それ以前の問題があった。
「・・・何だ、その服。目がちかちかして疲れるんだが」
「ああ、それはあたしもよ。ちょっと待って、電源切るから」
由真が電源を切ると、ようやくまともに服を見ることができた。
また、随分とファンシーな服だな。どこかのアイドルが着ていそうな服だ。
それが俺の印象だった。
そして、由真相手なら気を使うこともないので俺の思ったことをきっぱりと言った。
「なあ、由真。はっきり言うが似合ってない。たぶん、誰が着ても似合わない」

「あたしもそう思ったんだけど、1着目はネタに走ったほうが、後でインパクト与えられるかなって思ったのよ。まあ、次に期待してよ」

「・・・おい、まだあるのか」

俺は、2周目以降もあることを知り、げんなりとした。確かに、服は1周だけでは全部見せるのは不可能だ。

由真は、笑いながら俺の肩を叩くとリビングから出て行った。

由真が出て行くのを見届けると、美玖としよりが俺の前に立った。

「次は、わたしたちの番だね」

「うん、お姉ちゃん」

「・・・また随分とマニアックな格好だな」

俺の声は少々引き攣っていた。いや、声だけではない。顔も引き攣っているだろう。

2人の格好はどう見ても幼稚園児のものだった。

かろうじて笑顔を向けるが、そんなことでごまかしきれるはずもなく2人は怪訝そうな表情を俺に向けた。

「そ、そうですか？で、でも似合っていると思いませんか？」

「景お兄ちゃん、似合ってない？」

「・・・」

「「お兄ちゃん」」

俺は、一瞬しよりの言葉に心が揺れたが、俺の背後から聞こえた声ではっと我に返った。

そして、振り返ると母さんと藤多さんが意地悪い笑みを浮かべてい

た。だが、三津刃さんはお茶をすすりながら傍観していた。

「あら、お兄様。どうしたの？」

「・・・景ちゃんはロリコンだったのね」

「・・・いい年して、お兄ちゃんとか言ってて気持ち悪いな」

「「・・・」」

俺たちはお互いに相手の顔を見ながら笑顔を浮かべていた。

どうやら、年齢のことに触れたために母さんたちも怒っているようだが、俺もロリコンと言われて頭にきていたのだ。

母さんたちは1歩も引く気はないようでじっと俺のこと見ていたが、俺も視線を逸らすことなく見つめ返す。

「あ、あのー・・・今はわたしたちの番なのに・・・」

「お姉ちゃん、そろそろ次の準備しよっ」

俺たちは、しばらくの間睨み合ってやがてどちらともなく飽きてしまい、結局先程の互いの発言はなかったこととなった。

そして、美玖としよりがいないことに気づいた。部屋中を見回していると、衣先輩が呆れたように言った。

「もう、次に準備に行きましたわよ。では、最後は私の出番ですわね」

だが、最後まで残っていたのは衣先輩だけではなかった。

「ちょっと待ってください、私もいます」

「衣っち、私も忘れないでよ」

・・・そういえば明月院さんと希望先輩もいたな。すっかり忘れていたなんて言わなくていいよな・・・。
俺が、2人のことを忘れていた罪悪感から視線を逸らしていると希望先輩が何か勘違いしたらしく俺の目の前に回りこむと俺の顔を覗き込んだ。

「景っち、もしかしてやらしい想像してた？まあ、私の格好なら当然だよね」
「・・・してないです。それにしても随分と似合ってますね」
「棒読みでも嬉しいよー。景っちは褒め上手だね」

どこの3流役者だと思うくらいの棒読みで俺たちはお互いに褒めあった。
だが、あまり本心でないことがお互いにばればれですぐに視線を逸らしたのは言うまでもない。

この気まずい空気で希望先輩の身長が足りずに、小学生が警察官になりきって喜んでいるようにしか見えないということを、あえて言う必要もないだろう。
俺は、よく警察にバイトの帰りに質問されることが多い。だから、その服を見ると条件反射で反応してしまうのだ。

俺と希望先輩が話の糸口を見つけられずにいると、明月院さんが突然話に割り込んできた。

「有栖君。私はどうかな？」
「明月院さんは、随分着慣れているように見えるんだが、いつも着ているのか？」

すると、明月院さんはこくりと頷いた。

「うん、そうだね。私の家は代々茶道の家系だから。こういう和服を着ることも多いよ」

「そうなのか。・・・さっきは喉の調子が悪いことを聞いて悪かった。明月院さんが歌うことが好きだって知っているのにな。ごめん」

だが、明月院さんは気にした様子も見せずに、いつも皆に見せている笑顔を浮かべて言った。

「あ、それなら気にしないで。私には歌しかないから喉の調子が悪いとつらいけど、もう直るから大丈夫」

「そうか。でも、お大事に」

「うん、ありがと」

・・・歌しかない、か。そんなことはないと思うが、軽々しく口にしてもいいことでもないだろう。

本人の悩みは、他人から見るよりも深いことだってあり得るのだから。

気丈に振舞っているけど、こういう人ほど悩みは深いんだよな。

あ、そういえば衣先輩のことを放ったままだった。

俺は、暗くなった空気を変える意味もあって衣先輩に声をかけようとしたが、言葉に詰まってしまった。

「衣先輩は・・・何ですか、それは？」

「有栖君も気になってたんだ・・・。霧生先輩は・・・猫ですよね？」

俺と明月院さんが顔を見合わせ反応に困っていると、希望先輩が明

月院さんとの間に入ると俺たちの首に腕を回して引き寄せると、1人だけ楽しそうに言った。

「あー、景っち、陽菜っち。あれはね、衣っちの趣味だから。見かけによらず可愛いものが好きなんだよねー」

俺と明月院さんは、不思議なものを見るような目で衣先輩を見ていた。

普段は、武闘派のイメージの強い先輩なのだが、猫耳をつけてくるのは意外だった。

よく見ると、猫の手足、尻尾と猫になりきっていた。本当に猫が好きらしい。

しばらく、俺たちがじっと見ていると衣先輩は恥ずかしそうに目を伏せると、今にも消え入りそうな声で鳴いた。

「・・・ニャン」

その瞬間、部屋中の誰もが凍りついたような気がした。

衣先輩たちがリビングから出て行ってから、数分。

リビングに残った藤多さんと三津刃さんが、衣先輩のことを話していた。

「あの子・・・えーと、霧生さんだっけ？」

「・・・ああ、そうね。意外とあざとい子だったわね」

あざといって・・・あんたら、本人が聞いていたらただでは済まないと思うんだが・・・。

心臓が未だにどきどきしているのは、きっと見てはいけないもの見たからだと思う。
確かに破壊力はあったが、失うものも大きかったのではないか。
こうやって冷静に分析しているのも、現実だと信じていないからだろうな。

「・・・そろそろ戻ってくる頃ね」
「景君。まだまだ先は長いから覚悟しておくんだよ」
「・・・・」

・・・現実なんだよな、これがまた。
俺は、現実に引きずり戻してくれた2人を恨みつつも大人しく座った。廊下からは、着替えに行った皆の声が聞こえてきた。
まあ、どんな格好をしているのか楽しみではあるんだけどな。俺は、とりあえず欲望に素直に従うことにした。

皆がリビングに戻ってくると、静かだったリビングに再び活気も戻ってきた。
また、皆思い思いの格好をしているわけなのだが・・・。1人俯き加減で暗いオーラを放っていたのが気になって俺は声をかけた。

「恵麻・・・。今度は幽霊か？」

だが、恵麻は俺の言葉に全く反応しなかった。恵麻は俺が先程指摘したことを思ったよりも気にしていたらしい。
そういえば、小さい頃から恵麻は俺が指摘することを随分と気にし

ていた節があったように思える。
それでも、無視するなんてことは今までなかったはずだ。何だか恵麻の様子は少しおかしい、そう思ったとき、恵麻は顔を上げると俺に近づきながら言った。

「・・・どうして？何で？」
「え？」

訳が分からず唖然とする俺を置いてきぼりにして恵麻はさらにまくしたてるように話を続ける。

「私がこんなにも愛しているのにどうして私の気持ちを受け取ってくれないの？ねえ、私のこと嫌い？嫌いならはっきりと言ってよ。何も言ってくれないのは苦しいんだよ・・・」

恵麻の演技に俺はもちろんのこと、美玖や紅玲奈たちも怖がっていた。
他の人たちも恵麻の豹変に動きが止まっている。
多少声をかけにくいのだが、俺は意を決して恵麻に言った。

「・・・恵麻・・・そろそろ演技は止めたら・・・どうだ？」
「じゃあ、キスして・・・」

そう言うと同時に急に顔を近づけてきた恵麻に俺は突然のことに体が動かなかった。何故、そうなる！？
すると、由真が恵麻の首根っこを掴むとそのまま引きずって退場させた。どうやら、時間を取りすぎたらしい。

「あー、はいはい。調子に乗るんじゃない」
「ううっ・・・」

恵麻の顔が離れほっとしたのも束の間、その恵麻を押しのけるようにレースクイーンの格好をした由真とテニスウェアを着た明月院さんが前に出てきた。

「それじゃ、次はあたしの番だね。どうよ、これ。なかなか似合ってると思わない？」

「待って。順番を抜かすなんてずるいよ。有栖君、私はどうかな？」

2人の互いに前に出ようとする姿に俺は本能的に少し距離を取った。そして、何故か睨み合う2人を宥めようとおずおずと声をかけた。

「なあ、2人とも・・・。これは、エリスの着る服なんだからそこまで争う必要なんてないと思うんだが・・・。それに・・・俺にとって目の保養にはなるが・・・2人に得があるのか？」

確かに、2人とも見た目はいいので似合っているとは思う。だが、俺の持っているイメージとは違うものだった。

・・・欲求に素直になれるのなら、どんなに楽なことか。俺は、2人を見ながら心の中で溜息をついた。

すると、2人もまた恵麻と同じ様に様子が変わり、いや・・・性格が変わった。

「べ、別に私を見てほしいわけじゃないんだから。ちゃんと服を見なさいよね。・・・ちょっと、エッチな目で見ないでよ。有栖君の変態」

「なーに、ボク？お姉さんの好きなの？そうねえ、後5年したら私のところにいらっしゃい。それまでにいい男になるのよ。どう、景？なかなか大人の魅力を感じるでしょ」

・・・駄目だ、こいつら。完全に俺をからかって遊んでいるな。ちなみに前者が明月院さん、後者が由真だ。
俺が反応に困っているものだから、2人とも今にも噴き出しそうな顔をしていた。由真はともかく明月院さんの意外な一面を見れたのはよかったのかもしれない。

しばらくの間、由真と明月院さんに遊ばれていた俺だったが、それを良しとはしない人がいた。

「そ、それでは、そろそろわたしたちの出番です」
「・・・先輩たちはもう終わり」

それは、美玖と紅玲奈だった。・・・いつ、紅玲奈になったんだ、人格が変わる定義が分からないな。

俺が紅玲奈を見て、不思議に思っていると視線に気付いた紅玲奈がぽっと頬を赤く染めると、無表情のまま胸を腕で覆いながら言った。

「・・・景先輩のエッチ」
「・・・言っておくが、見てないからな。美玖と紅玲奈の違いは、そんな所を見なくても分かる。あっ・・・」

余計なことを言ってしまったと思ったが、その時にはもう遅かった。美玖もまた顔を赤くして、大きな三角定規で体を隠した。

「そ、そんな目でわたしを見ていたんですね」
「・・・偽物ってバレた」
「まあ、顔はそっくりだからな。見た目の見分けは、髪型かスタイルくらいだろ。・・・言っておくが、俺はその胸に関しては何も触れていないからな」

「ふ、触れる！？」

何に美玖は驚いているのだろうか？俺の発言に何か問題でもあったのだろうか。

やはり胸の話題に触れたのがいけなかったのだろうな。

俺が、もう1度美玖と紅玲奈の様子を伺うと視線が合った瞬間に2人とも顔が赤くなっていた。そして、俺から少し距離を取った。

・・・完全に変態扱いされてないか？

俺が、2人の反応にショックを受けていると、俺の気分とは正反対の妙に楽しげな声でエリスが声をかけてきた。

「お兄様、お兄様」

「エリス、頭がおかしくなったのか？今ならそこに技術者がいるんだから直してもらえ」

普段なら俺も驚くと思うが、今は変態扱いされたばかりで食いつきが悪かった。

俺が冷たくあしらうとエリスは大層不満げに両手をパタパタとさせた。

「違います！シスターでシスターですよ」

「エリス、何言っているんだ？」

「もしかして、分かりませんでしたか？シスターの格好をした妹です」

「姉ではないんだな」

俺がそう突っ込むとエリスは迷うことなく言い切った。

「はい、姉よりも妹の方が景様の好みだと聞きましたので」
「あえて、誰に聞いたのかは聞かないでおく」
どうせ、母さんあたりが余計なことを吹き込んだのだろう。
俺は、気を取り直すと衣先輩の方を見た。
先程、猫のコスプレをしていた先輩だったが、今度の格好もまた目立つものだった。
「ウェディングドレス・・・いいなあ。ねえ、加奈は着る予定ある？」
「あるわけないでしょ、相手もいないのに・・・」
「あら、私も着てないかも」
持ってきたはずの2人と母さんが羨ましがっているのは、ウェディングドレスを着た衣先輩だった。
俺が結婚するわけでもないのに、こうドキドキするのは、着ている服の力なのかもしれない。
「・・・有栖さん、そんなに見つめられると恥ずかしいですわ」
「あ、いえ・・・。でも、とても綺麗だと思いますよ。いつかは着たいと思っているんですか？」
俺が、素直に褒めると衣先輩は、さらに顔を赤らめると何かを俺に言おうとした。
「・・・」
だが、ごにょごにょと何かを言ったのは分かったが、肝心の言葉は聞こえなかった。

「何を・・・」

俺が、衣先輩に尋ねようとすると希望先輩が手を叩いて皆の注目を集めた。
そのせいで、俺は衣先輩が何を言おうとしたのか聞くタイミングを失ってしまった。

希望先輩は、皆の注目を集めると手をグーにして俺の顔に突きつけた。
そして、コホンと1つ咳払いをすると1度皆を見回してから、満足そうに頷くと俺に言った。

「ねえ、景っち。・・・どの女の子が一番だったと思う？」
「っ！？・・・服はどれも実用的じゃないと思います」
「そうじゃなくて、誰が一番可愛かったって聞いてるんだけど」

この手の質問はいつか来るとは思っていたが・・・さて、どう答えたらいいんだ？
俺は、希望先輩の発言の後、皆の期待した眼差しを一身に浴びているのが分かった。
・・・8人もいるのに、何て答えればいいんだ。俺は思わず頭を抱えたくなった。
思い悩んでいる間にも、皆の視線は突き刺さるように俺に集中している。

ここは、皆同じくらい綺麗だったと言うべきなんだよな。優柔不断、ヘタレなど色々な負のレッテルは貼られるだろうけど・・・。

俺が決意を固め、皆に言おうとした時だった。
廊下から聞こえる俺を呼ぶ声に振り向くと母さんが俺を手招きして

呼んでいるのに気付いた。
母さんが、後ろの皆に手を合わせると特に誰も文句を言うことはなく、俺はリビングから出ることが出来た。
リビングを振り返りながらほっと溜息をつくと、母さんは俺に鞄を渡しながら小声で言った。
「景、そろそろバイトの時間よ。みんなには私から言っておくから行きなさい」
俺は、今の母さんの言葉には裏は無いように思えた。
何があったのかよく分からないが、家族だから最後の最後で助けてくれたのかもしれない。
「ありがとう、母さん。皆にはごめんと言っておいてくれ。じゃあ、いってきます」
「いってらっしゃい、景」

バイト中、俺は今日のことを思いだしていた。
ちなみに、俺が1つ選ぶとしたらやはりウェディングドレスだろう。
あれは、反則だと俺は思っている。
・・・普段、何かと武力行使の多い衣先輩ですら、あれだけ変わってしまうのだから。
・・・・・。
・・・・・。

・・・・。

「・・・有栖」

思い出してぼーっとしていたら、店長に怒られたのは言うまでも無い。

第４５話：オプションはいかが？本番編（後書き）

本編後の雑談

実は嘘だった

景「恵麻、ちょっといいか？」
恵「どうしたの、景君」
景「実はな、死装束のことなんだが・・・あれは嘘なんだ」
恵「え？そうなの？」
景「ああ」

恵「よかった～。私ね、本当に心配してたんだ～。もしも、そうだったら・・・景君を道連れに・・・」
景「・・・」

恵「・・・景君、冗談だってば～。うん、冗談だよ～」
景「・・・その割りには、目が本気だな」
恵「そ、そんなことないよ～。ひどいよ・・・景君のバカ」

由「こうして、恵麻はヤンデレの道を歩み始めた」
恵「・・・歩かないもん」
景「・・・俺が対象でないなら歩いてくれても面白いかもな」
恵「景君っ！」

外伝５：彼女の評価

景が逃げ出してしまったリビングは静けさを取り戻していた。
静けさは取り戻してはいるものの、未だにコスプレをした女の子が何人もいる光景は異様なものと言える。
しかし、彼女たちの表情は一様に冴えない。そして、彼女たちは皆、戻ってきた柚葉を見つめていた。
その非難めいた視線を浴びている柚葉は、その視線を無視すると散らかったままの服を片付け始めた。

「柚葉さん。どうして、景君を逃がしたんですか？一緒になって楽しんでいるようにしか見えなかったけど」
片づけをしている柚葉に唐突に話しかけたのは藤多だった。
彼女は、柚葉も協力しているものだとばかり思っていた。だからこそ、先程の彼女の行動が理解できなかったのである。
不満そうな顔をしている彼女の問いに柚葉は、笑みを向けると自分に言い聞かせるように言った。
「確かに私も楽しんではいたけど、これでも景の親ですもの。景のことならここにいる誰よりも理解しているつもりだし、誰よりも愛している自信もあるわ」
柚葉の言葉に藤多も他の女の子も黙ってしまう。
見た目は４，５歳年下の藤多や三津刃と変わらないのだが、それで

もここでは最年長なのだ。また唯一人の親でもある。
景から普段の柚葉の話を聞いている恵麻や由真はもちろんのこと、何も知らない衣たちでさえ簡単に言い返せる内容ではなかった。
間違いなく今の景では、自分たちと柚葉をどちらかを選択しろと言ったら悩みはするだろうが、後者を選ぶだろう。
それが、柚葉を除いたこの場にいる女の子たちの共通認識だった。
すっかり場の雰囲気は重くなったのを誰もが感じていた。
そして、柚葉は自らの発言が場の空気を重くしたということに気付いていないようで、首を傾げるがようやく何かおかしいと思ったらしく話を続ける。

「それに、みんなはあの時、中途半端な景の答えが聞きたいわけじゃなかったんでしょ？みんなが景のことをどう思っているかは置いておくわ。少なくとも嫌ってはないみたいだし。そうだ、着替えたらシュークリームでも食べる？」

柚葉の言葉にようやく場の空気は少し和らいだようだった。彼女の提案に恵麻が目を輝かせてシュークリームという言葉に飛びついた。

「もしかして・・・」

しかし、恵麻が言い終わる前に柚葉は優しく微笑むと頷いた。

「そう、そのもしかしてよ。景が好きだから買っておいたんだけど、また今度買っておけば問題ないわ。さ、着替えていらっしゃい」

柚葉が女の子たちをリビングから出すと、大人3人だけになってしまった。
服を畳んでいる柚葉の近くで、藤多も三津刃もまた退屈そうに時計を見たりしながらぼんやりとしていた。
時折、柚葉がちらちらと手伝ってくれないという視線を送っているのだが、全く気付く様子もない。
持ってきたのだから片付けろと柚葉は内心思っているが、自分は大人なのだからと言い聞かせ自制する。
ある程度畳み終えた柚葉は時計を見ると、作業をやめ2人の前を通って台所へと移動した。
すると、彼女の後ろから三津刃が声をかけた。

「私たちでよければ何か手伝いましょうか？」
「ありがとう。・・・そうね、ジュースがあるから、コップに入れておいてもらえるかしら」

もう少し早く手伝ってほしいと言いたかったが、一応これでもお客様なのだ。・・・別に好き好んで呼んだわけではないのに。
柚葉は、ぐっとこらえながらもテーブルを拭きに戻った。

テーブルにおやつを用意し終え、柚葉が台所に戻ろうとすると、リビングをドアを開いて恵麻とエリスが足早に戻ってきた。
2人は、テーブルの上におやつがすっかり準備されているのを見ると申し訳無さそうに言った。

「すいません、柚葉様。本来であれば私が手伝うべき仕事ですのに・・・」
「柚葉さん。私たちが来て何だか迷惑をかけているみたいで・・・。

何か手伝えることはありませんか？」
「いいのよ、２人とも。あの格好じゃ手伝えないでしょ」
柚葉が２人を席に着くように促すと、２人は奥の方に隣り合って座った。
エリスは食べ物を食べることが出来ないのだが、１人立たせておくのも忍びないので柚葉が自分の隣に席を置いているのだ。
おやつをみんなが食べている間、１人食べることの出来ないエリスが寂しくないようにと彼女なりに配慮の表れでもある。
以前、エリスは食事の時は景の側に控えて座ろうとさえしなかったが、それとなく景に頼んで座ってもらうようになってからは自分と景の間に席を置いて食事中も積極的に話すようにしている。
もっともエリスは景のメイドではあるが、実際に景よりも柚葉と一緒にいることが多いので最近では景よりも柚葉の方が話が合うようになってきている。

柚葉は、２人を座らせると台所に戻るとお茶を淹れた。彼女は緑茶が好みでジュースや酒を飲むことは滅多にない。
鼻歌を歌いながら、お茶を淹れているとふと明日からの旅行のことを彼女は思い出した。
その事は、ある理由から景にはまだ言っていないのだが、ちょうど景もいないのでエリスに放すチャンスだと思った彼女は、お盆に急須を乗せるとリビングへと舞い戻ると、柚葉はおもむろに世間話をしている２人に近づき、テーブルにお盆を置きながら言った。
「ねえ、２人ともちょっといいかな？」
「あ、はい」
「何でしょうか、柚葉様」

恵麻とエリスが世間話をやめて柚葉の方に顔を向けると、彼女は神妙な面持ちで話し始めた。

「実はね、明日から私と愛美さんと1泊2日に行くのよ。恵麻ちゃんは知っていると思うけどエリスちゃんに話すのは今日が初めてかな」

「はい、そうです。ですが、柚葉様の留守は私にお任せください」

「ありがとう、エリスちゃん」

しかし、そうは言ったものの彼女には不安が残っていた。今までエリスに家事で唯一させていなかったことがあった。

だからこそ彼女はエリスに直接聞きたいのだ。柚葉は意を決するとエリスに問いかけた。

「でも・・・エリスちゃんって、料理できるの？」

そう、柚葉が唯一家事でさせていなかったこと。それが、料理なのだ。

彼女は、景に料理をさせるわけにもいかないのでエリスに尋ねたのだ。

景の料理は柚葉にとってもまたトラウマであり、自分以外に料理をさせなくなった原因でもある。

実際の所、柚葉は景たちが店屋物で済ませるならそれもいいと思っているが、景が自分がいないことをいいことに台所に立つことを危惧しているのだ。

そこで、エリスができるならば料理を、できないならば監視をお願いしようと思ったのだ。

柚葉がエリスの返事を期待していると、横から三津刃がげんなりとした様子で話しかけてきた。

「エリスは料理は出来るけど、味は保障しないわよ。ほらっ、エリスは食べることが出来ないでしょ？本を見ればその通りにはできるけど・・・アレンジはお勧めしないわ。・・・正直言って口に合わないから」

その表情は、景が作った料理を食べたことのある幸樹や晃と同じ様に思い出しただけで吐きそうだった。
柚葉はそれだけでエリスに料理を任せるのはやめにしようと決断したのは言うまでもない。

「あ、あの・・・私の料理ってそんなに食べられないものなのですか？」
「・・・」

時に深く追求しないことも優しさなのだということを教えておくべきだと、柚葉は三津刃や藤多に食い下がるエリスを見ながら思った。監視はエリスに任せるとして、レトルトで済ませて大丈夫だろうか、柚葉がそう考えていると恵麻が頬を染めてそわそわと落ち着きなく言った。

「あ、あの・・・よかったら私が作りましょうか？」
「んー・・・、じゃあお願いしてもいいかしら」
「はい、任せてください」

これで景のことは安心しても大丈夫ねと柚葉は一安心する。恵麻とは、彼女の両親が共働きで、向かいに住む柚葉は妹の琴美と共によく預かっていたために家族も同然の関係である。
しかし、最近は恵麻が敬語で話をしてくるので若干寂しさを覚えつつもある。

彼女は、料理も上手でよく気が利くので柚葉も幼稚園くらいまでは本気か冗談かお嫁に来ないかと言っている位なのだ。
もっとも、景はその話をする度に嫌がっており、それがおかしくて柚葉が言っていた節もあるので大方冗談なのだろう。
当時の恵麻の本性を知らないからそんなことが言えたんだとは、その当時の景の言葉である。

ふと、昔を振り返り柚葉は思わず笑みがこぼれてしまった。景はきっと恵麻のことが好きだったのだろう。そう思うと微笑ましい。
すると、その笑みを見られていたのだろう、恵麻が戸惑ったように顔を触る。

「ゆ、柚葉さん？どうかしたんですか？私の顔に何かついてますか？」

柚葉は、的外れな恵麻の言葉に思わず顔を背けて笑いを堪えた。
そのことで、恵麻が慌てて顔をあちこちと触り、エリスから渡された手鏡を見てようやく落ち着いたことなど顔を背けていた柚葉が気付く由もない。

しかし、顔を背けたことで彼女は、ドアの向こうの人影に気付いてしまった。
何やらひそひそと話をしているようだが、ここからでは遠くて柚葉には何を言っているのか分からない。
柚葉たちが話を終えたことでリビングはすっかり静かになってしまった。それを好機と見たのだろう、ドアが急にバタンと開くと、そこから着替え終わった女の子たちがばたばたとリビングに戻ってきた。

「け、景先輩に料理ですか！？・・・わたしでよければ・・・その・・・作りに行きます。むしろ、わたしたちの家にご招待します」
「・・・美玖が行くって言うなら・・・ボクも行ってもいいかな」
「いいい、家に！？それは、はしたないですわ。・・・付き合ってもいない男女が1つ屋根の下で2人きりなんて」
「じゃあ、明日はみんなでお弁当でも作って集まってみるのはどうかな？」
「ナイスアイデア、陽菜。あたしは暇だし、おばさんが迷惑じゃなければいいんじゃない？」

急な提案に柚葉は、恵麻の方を見やって、もう頼んでしまったのにねと思いながら苦笑いを浮かべた。
それ以前に、ずっと話を聞いているなら早く入ってくれればいいのにとも思った。

急に柚葉から苦笑いを向けられた恵麻ではあったが、長年の付き合いもあり、その笑みの意味を理解したようで少し寂しそうに笑うと小さく頷いた。
それを見て、柚葉は少し顎に手を当てて考えると、何か思いついたようで含みのある笑みを浮かべて言った。

「そうね、景に聞いてみたら？私は別に構わないけど・・・景が嫌だって言うなら仕方ないわね」

柚葉は、特に『景』の部分を強調しておいた。実質的に逃げた答えになってしまったが、女の子たちは誰が聞くかですっかり盛り上がっていたので、気付いてもいないだろう。

しばらく柚葉は、誰が電話をするかで揉めている女の子たちの様子を眺めていたがその中に恵麻がいないことに気付き、そっと恵麻に

耳打ちをする。

「ねえ、恵麻ちゃん。いいの、あの場に入らなくても？」

「わ、私は・・・。と、ところで、柚葉さんはどの服がよかったですか？あ・・・別に私たちのことじゃなくて、エリスちゃんに似合う服って意味ですよ」

「え？あ、ああ・・・そうね・・・」

自分から話を振っておきながら恵麻から急に話を振られ、柚葉は困ってしまった。

今まで空気となっていた三津刃や藤多もようやく面白くなってきたと言わんばかりに柚葉をじっと見ている。

さらに、いつの間にか女の子たちも柚葉のことを期待した眼差しで見つめている。

そこで、柚葉は思わず本音をぽろりと漏らしてしまった。

「・・・そうね・・・どの服も実用的とは思えないわね。あ・・・」

思ったことを口にしてから彼女は気がついた。これでは、景とまるきり言っていることが同じだということに。

慌てて彼女は言葉を付け加えた。

「私の意見だから適当に聞き流してくれて構わないけど・・・」

すると、彼女の言葉をみんなが固唾を呑んで見守っていた。

それは、彼女にとっては正直負担だった。少なくとも分かってこっちを見ている三津刃と藤多とは、きちんとお話をすべきねと彼女は人知れず心に誓うと深呼吸をしてからはっきりと告げた。

「じゃあ言うわよ。着ていた服なら衣ちゃんかしら。少なくともウ

エディングドレスを超えるもの無かったと思うわ。それにその前のも・・・・ね」
「・・・やっぱりそうですか」
「あ、あれは卑怯だと思いますけど・・・」
「やっぱり、みんなもそう思う？あたしもそう思った」
「でも、みんなで取り合いになった服だし、仕方ないかなって思います」

どうやら裏では、ウェディングドレスを巡って壮絶な争いがあったらしい。
景は猫も好きらしいから衣ちゃんの評価は高いわね、と柚葉は1人勝手に評価を下す。しかし、景が本人を好きかどうかまでは分からない。

景とは食事中を含めよく会話をしているほうだと柚葉は自認している。
ただ、景はここにいる女の子の話を全くすることはない。付き合いの長い幼馴染の恵麻のことすら滅多に会話には出さないのだ。むしろそういう話題を避ける傾向さえ見られる。
もちろん、柚葉はその原因に気付いているものの無理に聞き出すような真似はしないし、それをここにいる女の子に伝える必要もないので黙っておく。
伝えた所で、誰も何も出来ないだろうし、柚葉自身、景から恨まれたくはないという思いも強い。

わいわい服の話題で盛り上がっている女の子たちを尻目に柚葉は、再び服を畳み始める。
すると、エリスの外用にちょうどよさそうな服を見つけると同じ様に服を畳んでいるエリスに尋ねた。

「エリスちゃん。この服って貰っていいのよね？」
「えっ？はい、柚葉様も着てみますか？」
そういうことじゃないのよ、と渋った表情を見せるとエリスはそれ以上しつこくは勧めてこなかった。
代わりに、いくつかの服を手に取ると自分の前に掲げてみせた。
「これらの服が気に入ったのですが・・・景様は気に入ってくださるでしょうか？」
いくつかの服を目の前に掲げられた柚葉だったが、ごこちない笑みを浮かべてエリスに言い放った。
「はっきり言うわ、景に家から蹴りだされたくなかったら止めなさい。あの子も世間体は気にするほうだから・・・ってメイドさんがいる時点で気にしてないわよね」
エリスがこの家にやって来てから1ヶ月。その存在はご近所には既にバレており、よく行く商店街の人も知っている。
ただ半分程度の人には、柚葉のメイドだと勘違いされている節がある。
裏を返せば、半分は景のメイドだと知っているということだ。
もう隠しても隠さなくても勝手に広まるだろうと柚葉は他人事の様に考えていた。
それに、もうじきテレビにエリスちゃんが出たらダメ押しになるわね、とも。
彼女は、シュークリームを食べている女の子たちを見ながらふと思った。

エリスちゃんがいることを気にしていないのかしら、と。

午後４時に近くなった頃、そろそろみんなが帰るということになった時、柚葉は女の子たちに先程気になったことを尋ねてみた。
すると、恵麻と由真は間髪入れずに柚葉に言った。

「私は、景君にメイドがいても気にしてないですよ。だって景君は景君ですから」
「あたしもエリスとはもう友達だし、景のことも気にしてないですしね。まあ、あたしは器量が大きいですから」

エリスちゃんがいるこの場で聞いたのがいけなかったのかしらと柚葉は取り繕われた言葉に内心首を傾げた。
彼女は、どちらかというと困った顔をされると思っていたのだ。
しかし、柚葉は肝心なことに気付いていない。柚葉は景の母親。親の前でその子どもの悪口言えるほど彼女たちも度胸があるわけでも空気が読めないわけでもない。

しかし、多少柚葉から離れた席に座っていた紫がちらりとエリスに目をやるとつまらなそうに呟いた。

「ボクは、ロボットメイドを本気で愛してるって言ったらキモイって思う」

その独り言は、誰に言うわけではなかったが、彼女の考えだけは皆に伝わった。

「うーん、四条畷さんの言うとおりそれはあるかもしれない・・・。でも、有栖君はそんなことないはず・・・だよ？」
「あ、あの・・・苗字だとわたしも同じなので名前で呼んでいただけるとありがたいのです。わたしは、四条畷　美玖。こちらは、妹の紫です」
「明月院　陽菜。ボクは前に会った事があるから知ってるよ。・・・色々とよろしく」
「え・・・あ、うん。・・・よろしくね、紫ちゃん」
互いに握手をする紫と陽菜ではあったが、どこか2人の握手はぎこちない。
「よかったね、紫。友達が増えたね」
美玖はそのぎこちなさに全く気付いていないようだが、2人の表情の変化に気付いたエリスだけは、苦笑いを浮かべ
そのエリスを見て可愛らしいなあと柚葉は、ぎゅうと抱きしめていた。
「・・・つ、ついていけませんわ」
「・・・だよねー」
衣と希望だけはすっかり流れに乗り損ねて立ちつくしていた。

「おじゃましました～」
「またいつでも遊びに来てね」
「は、はい」

柚葉は、女の子たちを見送ると、何故かリビングですっかりこの家に馴染んでしまっている2人を見てげんなりとした。

「・・・ところで、あなたたちは帰らないの？」

「あうー・・・きょーは泊まる～」

「あん？誰に向かって口聞いてるの？あたしは、三津刃　甘奈。開発部の主任なのよ？」

今すぐ帰れ。柚葉はそう思ったが、服を貰った手前強く出ることが出来ない。

しかし、勝手に冷蔵庫から缶ビールを持ち出して飲んでいるのはどうにも納得できなかった。

しばらくの間、注意を向けていなかったのでいつから飲んでいるのかさえ分からない。

買い物にかこつけて追い出そうと考えたが2人とも何本か飲んですっかり酔っているようで全く話を聞く様子もない。

それどころか家主である柚葉に反抗するように鼻を鳴らす。

「・・・」

初めは、柚葉も我慢していたのだが、元々沸点の低い柚葉はすぐにキレてしまった。

彼女は、その細い腕のどこにそのような力があるかは分からないが2人の襟首を掴むと玄関まで引きずっていくと、そのまま外へと放り出した。

「出て行けっ！！」

「わっ！？」

文字通り柚葉に2人は家から蹴りだされてしまった。

俺が、家に帰るとそこは異様な空気が漂っていた。
既に、何も残っていない皿。そして、ずっと宴会でもやっていたのか、3人が座るテーブルには大量の空き缶が転がっていた。

「・・・母さん、俺の夕食は無いのか？」
「あっははっ。おかえりー、景君」
「さあ、あなたもこっちに来てあたしの話を聞きなさい」
「あっ、ごめんね、景。みんなで食べちゃった」

ぺろっと舌を出した母さんに俺は、げんなりとした。
母さんは、暑いのか知らないがすっかり服がはだけており、藤多さんは大声でよく分からない歌を歌っている。そして、三津刃さんは誰もいないはずの方向を向いて延々と語っている。
父さんは、1人寂しくテレビを見ていたが、俺に気がつくと右手を挙げるとまたテレビにかじりついていた。
どうやら、誰も相手をしてくれなくて拗ねてしまっているらしい。

俺もまた父さんを無視すると、とりあえず何か無いかと冷蔵庫を漁ってみた。

「おっ、やきそばでも作れそうだな」

俺が冷蔵庫から材料を探し出した結果、何とか夕食の材料が見つかった。
母さんは、酔っていて危ないから俺が久々に作るとするか。

俺が、鼻歌を歌いながら適当な鍋を火にかけ野菜を切っているとエリスが俺にとっては見慣れた格好で現れた。

「景様、見てください。制服ですよ、制服。どうですか、似合っていますか？」

「ああ、似合っているな。だが、学校には来るなよ」

俺が先手を打ったのが気に食わなかったのだろうか。

エリスは、口を尖らせると拗ねたようにぼそっと、だが俺に聞こえる程度に言った。

「・・・可愛いって言ってくれてもいいのに」

「・・・か、可愛いと思う。・・・もう言わないからな。ちょっと夕食を作るから出て行ってくれないか？」

俺が少し照れながら言うと・・・エリスは、嬉しそうな顔をしなかった。むしろ、目を白黒させて俺と俺の頭の上を交互に見ていた。

何かあるのかと俺が見ようとした時、エリスは、俺を押しのけると慌てて火を止めた。

鍋からは、何故か煙が上がっており、エリスはひどく疲れた様子だった。

「あ・・・悪いな。すっかり忘れていた」

「景様にはやはり料理は向いていないと思います。ですから、明日は私が料理を作って差し上げます。今日はこれを食べていてください」

何だかエリスの闘争心に火をつけてしまったようだが・・・。

エリスは、料理が出来るのか？

・・・まあ、万能メイドなんだから・・・料理くらいできるよな。

だが、何故か心配になってくるのはどうしてだろうか？

手渡された冷凍ハンバーグと冷凍ご飯を見ているせいだろうな。

第４６話：メイドさんと料理

俺が初めて料理を作ったのは、小学校1年の頃だった。

「・・・景ちゃん。どうやってこれ作ったの？」

「えー、ちゃんと本を見て作ったよ」

母さんに手伝ってもらうことなく初めて作ったのだが、母さんは苦笑いを浮かべて苦しそうに食べていた。

食事後にすぐに母さんがトイレに行った意味を当時の俺はまだ分からなかった。

そして、最後に料理を作ったのは去年のこと。家庭科の授業だった。

「・・・景。お前は俺を殺す気か！？」

「有栖君。・・・こういうことは教師として言っていいとは思わないけど・・・お願いだから皿洗いと材料を切るだけにしてくれる？調理は他の子にお願いしてあげるから」

幸樹どころか、家庭科の教師にも止めてくれと言われたせいで俺はすっかり有名になってしまった。

初めは、俺の料理の不味さを興味本位で試す奴もいたが、それもすぐにいなくなった。

わざと不味い料理を作っているわけではないのだが、何故か人と同じものを作ると物足りなさを覚えるのだ。

それだけでなく、よく調味料を間違えることがある。それについ最近まで塩を入れすぎたら、砂糖を入れればいいと本気で思っていた。

料理の基本、『さしすせそ』など分からない。

「有栖君。悪いけど、夏休みは補習を受けてもらうから。『さしすせそ』が分からないのは問題外ね」

「・・・」

その補習で俺は、もともと創作料理ではなかったはずが、妙な創作料理を作ってしまった。

だが、今考えるとこの料理がきっかけで希望先輩と出会い、生徒会へと巻き込まれることになったのだ。

今日、母さんがいないことに気づいたのは、由真からのメールだった。

何でも今日母さんがいないから、また遊びに行ってもいいかという内容だった。

だが、その内容を見て俺は断りのメールを入れておいた。以前から狙っていたチャンスをみすみす逃す気などない。

父さんも朝から趣味の川釣りに出かけてしまい、家には俺とエリスしかいない。

・・・そして、私に家事一切をお任せくださいと言ったエリスを完全に無視し、俺は今台所に立っている。

「景様、本当に大丈夫ですか？」
「その台詞は今日何度目だ？本も用意してあるし、それに今日は上手にできる予感がある」
「・・・それは、失敗する人の典型だと思います」

買い物から帰ってもエリスはこの調子だった。
何度も俺を思いとどまらせようと色々なことを言って説得しようとしてくる。
また、母さんから俺を止めるように言われているのか、今日のエリスはいつもに比べてしつこい上に、どこか言葉に毒がある。
これを、俺が料理をすると言った朝からずっと聞かされ続けているのだ。

あまりに煩いので縛っておくことも考えたが、エリスは武器を持っていたことから分かるかもしれないが、家庭用と警護用ロボットを兼ねているらしいのだ。
家にあるビニールテープでは、簡単に千切られるだろう。

だから、縛るのは諦め、会話で解決しようとしているのだ。。・・・
まあ、一瞬やましいことを考えたことは胸に秘めておくことにしよう。

だが、何か話題を変えないとずっと小言を聞かされ続ける気がするのは否めない。
そこで、俺は自然に話題を変えてみた。

「ところで、エリス？最近、エリスの持っていた武器を見かけないが、あれはどこにやったんだ？」

「あれですか？少しお待ちください」

そう言ってエリスはリビングから出て行った。
数分も経たずにエリスはその手に包丁を2本持って戻ってきた。

・・・もしかして、武力で止める気か？俺は、生身の包丁を見ながら嫌な汗が背中を伝うのを感じた。
そして、そのままエリスが近づいてくるものだから俺は一歩後ろに下がった。

だが、エリスは俺が半ば本気で逃げ腰になっていることに気づいていないようで温和な笑みを浮かべてさらに近づいてきた。

「景様、これが以前景様がいらないとおっしゃった武器です」
「・・・エリス、とりあえず刃先を俺に向けないでくれるか？エリスが俺を刺すというなら別だが」
「も、申し訳ありません」

あの武器は包丁となってエリスの下に戻ってきたらしい。主に俺を危険に晒すために。
エリスが台所に包丁を置くと俺はほっと胸をなでおろした。

「景様？もしかして、私が景様を包丁で刺すなんて考えていませんでしたか？」
「・・・」

温和な笑顔は変わっていないはずなんだが、どことなく怒っているように見えるのは気のせいだよな。

・・・いや、目が笑っていない。

・・・・・。

・・・・。

「こ、この包丁使ってみてもいいか？」

「人を刺さない程度にどうぞ・・・・というのは冗談です。お怪我をなさらない程度にお願いしますね。私も微力ながらお手伝いいたします」

エリスは、疲れたようでそれ以上何も言わず野菜を洗い始めた。

俺もその横で、野菜を洗い、肉を取り出す。・・・後は、あれを洗えば・・・ん？

がさがさを俺は袋の中を漁るが、あれが出てこない。

・・・袋を振っても、ひっくり返しても出てこない。

「・・・しまった・・・豆板醤を忘れた・・・」

俺は違和感の正体に気付いて愕然とする。

これが無ければ、コーンスープにコーン、味噌汁に味噌が入っていないも同然だ。

俺は、エリスに一声掛けてから再び買い物に行こうとしたが、それをエリスは制した。

「それならば、私が買ってきます。景様は何もしないで待っていてください。何もしないで大人しく待っていてください」

繰り返し言う所に俺への信頼の無さが表れていた。

「・・・分かった、分かった。大人しく待っているから」

「では、いってきます。景様、くれぐれも作ってはいけませんよ」

俺の鼻先に指を突きつけたエリスだったが、何度も頷くとよろしいですと満足してリビングを鼻歌を歌いながら出て行った。

・・・ん？今の歌・・・どこかで聞いたような気が・・・。そういえば、最近の歌知らないな。

やがて玄関の扉が閉まる音が聞こえ、リビングにも静寂が訪れた。俺はエリスをいなくなるとぼそっと呟いた。

「・・・計算通りだ。豆板醤など使うわけないのにな」

一緒に買い物に行っていながら、何を作るのかも知らないエリスに俺は呆れながらも、ここまでうまくいったことに内心ほくそ笑んだ。エリスの性格を利用したことで多少後ろめたいものがあるが、まあ仕方ない。

何故、ここまで過保護にされるのかよく分からない。

メイドだからか？

だが、考えていても分かるわけではない。俺は、エリスへの後ろめたさを振り払うと台所へと向かった。

さてと、邪魔が入らないうちにさっさと作ってしまうか。

俺は、久々に台所を満喫していた。
出入り禁止になってからも、何も変わっていない台所は俺にとって非常に使い勝手がよいものだった。

本の通りに料理を作り、今は煮込んでいる最中。
後数分もすれば、料理の完成である。俺は、コンロの火をじっと見ながら少年のようなわくわくする気持ちを抑えきれずにいた。

その時、リビングから電話の音が鳴り響いた。

・・・まさか、母さんか？いや、もしかするとエリスにバレたのかもしれない。

冷静になるんだ。落ち着いていれば大丈夫だ。
俺は、深呼吸をすると受話器を取った。

「・・・もしもし？」
「あっ、景君。よかった～、どこか出かけているのかと思ったよ～」
電話口から聞こえたのは、恵麻のいつもの呑気な声だった。
俺は、すっかり脱力して溜息をついてしまった。すると、電話口から恵麻の声が剣呑な雰囲気を帯びてきた。
「どうしたの？何だか私が電話してきて不満みたいだけど？」
相変わらず恵麻は妙な所で鋭いな。最近、母さんやおばさんに似てきているような気がする。

・・・とりあえず、それは置いておくとしよう。
俺は、幼馴染の将来への憂いをどこかへと置いて、目の前の問題を片付けに走った。
もちろん、料理のことを悟らせないためだ。
「そんなことはない。むしろ嬉しいくらいだ」
「えっ、景君、どうしたの？・・・私も嬉しいよ～」
俺の出まかせに恵麻の声が弾んでいるのが分かった。いや、照れているな、これは。
でも、何が嬉しいんだ？
それからしばらく恵麻は、お向かいなのだからこちらに来て話せばいいことをうんざりするほど話し続けた。
だが、恵麻が電話をしてきた理由が全く見えてこない。
そこで、俺はその理由を尋ねてみた。
「ところで、何故電話してきたんだ？」
「うん、そろそろお昼だから・・・一緒にどうかな？」
電話にも関わらず容易に照れている姿が想像できる。
俺相手に照れているようでは、今後彼氏ができた時にどうなるのだろうか？
「今日は、外食にしようかと思ってる。たまには悪くないかなと思うんだ」
「・・・そ、それなら一緒に食べようよ～。1人じゃ寂しいでしょ

？」

・・・妙に今日は恵麻が食い下がってくるな。
もう随分と電話して・・・・・いる・・・よな？
今更になってふと時計を見ると既に電話が掛かってきてから１５分も経っていた。
それに何だか焦げ臭いような・・・。

「うわああっ！！」

俺は、受話器を放り投げると一目散に台所に駆け込むと火を消した。

「これは、食べられないな・・・」

俺は、すっかり黒焦げになってしまった食べ物を見て、呆然としていた。
見るからに食べられそうにもないことは既に明白だった。
鍋に焦げがこびりついていそうで、これは母さんに大目玉を食らう可能性が高い。

「・・・どうする、俺？」

自分に問いかけてみるが、答えが返ってくるはずもない。

だが、誰もいないはずの俺の背後から驚嘆の声が聞こえた。

「うわ・・・酷いね」
「・・・」

言うまでもなく恵麻だった。

「・・・鍵開いていたか？」
「ううん、柚葉さんから鍵貰ってるから」

鍵を指で回しながら恵麻は答えた。
その表情は、呆れに満ちていた。ここまで酷いとは恵麻でも思わなかったに違いない。

「ところで、どうして俺の家に？」
「景君が急に大声出してどこか行っちゃうからだよ。何回呼んでも返事しないから見に来ちゃった」
「それで、この大惨事を目の当たりにしたと」

俺の問いに恵麻は無言で首肯した。もう呆れ返って物も言いたくないらしい。

しばらくの間、恵麻は逡巡していたが、やがて鍋をしげしげと眺めると俺に一言言った。

「ねえ、これってアルミ？」
「まあ、そうだと思う」
「そっか・・・。景君は、そこに座ってて。お話があります」
「・・・はい」

有無を言わせぬ恵麻の雰囲気に俺は圧倒され、大人しくリビングを出た。

1度、未練がましく振り返ったが、恵麻に思い切り睨まれてしまい、俺は2度は振り返らなかった。

恵麻が、リビングから戻ってきたのは、それからしばらく経ってからだった。
どうやら、焦げを取る為に何かしていたらしい。

そして、今俺は正座をさせられ恵麻に説教をされて続けている。
それは、まるで我侭な子どもを怒る親とその子どもといった構図だった。

「景君、柚葉さんからあれほど料理はダメだって言われてるのに・・・。別に、私は景君が料理することに反対はしないよ。でも・・・」

だが、恵麻がさらに何かを言いかけた時だった。

「ただいま戻りました」

エリスが帰ってきた。しかし、今回ばかりは帰ってきてほしくなかった。
そんな俺の願いなど通じるはずもなくエリスはリビングへやって来ると

「景様、豆板醤です。あ、恵麻様もいらしていたのですね。これから、私と景様でお昼を作るのですが、よろしければご一緒にいかがですか？」

エリスがそう言うと、恵麻は無言で俺を睨んだ。

俺は視線を明後日の方向へと向ける。すると、恵麻が俺の前に回りこんでくる。

じーっ。

そんな音が聞こえてきそうなくらいに恵麻が俺を睨みつける。

何の理由があるのか分からないが、俺は後ろめたさから視線をあまり合わせたくないので視線を逸らす。すると、恵麻がまた視線の中へと入ってくる。

そんなくだらない事を繰り返していると、エリスの叫び声が聞こえたかと思うとパタパタとスリッパの音が戻ってきた。

「景様っ！一体、どういうことなのか説明してください。私を騙していたのですね」

「えっ？景君・・・そんなことまでして料理をしようとしていたんだ・・・」

２人の非難の視線を浴び、俺はもう反論する気もなかった。

全面的に非は俺にあるのだ。もうなるようになるしかない。

・・・本当は、女２人の形相が怖かっただけなんだけどな。

結局、俺は２０分ほど恵麻とエリスに説教をされ、もう料理をさせないとの名目で恵麻の家に連れてこられた。

おばさんは、母さんと旅行に行っているために不在なのだが、代わ

りというのもおかしいが珍しくおじさんが家にいたのだ。
おじさんは、１年の半分以上を海外で過ごす海外出張中の身で、こうしてたまに帰ってくることがあるらしいが、俺が見かけるのはもう数年ぶりになる。

まあ、俺としてはおじさんは変人なのであまり会いたくないわけなのだが・・・。

「はあ・・・帰ってきたら・・・愛美は旅行！うわあっ、あーゆーみー！！」
「・・・」
「うっさい、黙れ」

スパーンと心地よい音が聞こえ、おじさんは机に突っ伏す。

・・・しかし、相変わらずおじさんには容赦ないな、この家族は。

後ろからハリセンで殴ったのは、言うまでもなく琴美ちゃんだ。琴美ちゃんは、おじさんとそれ以外の人では態度が違う。
琴美ちゃん曰く、おじさんをハリセンで殴るのは愛情表現だと言っているが、殴った時のあの汚物でも見るような目を見れば、容易に嫌っていることくらい誰でも分かる。
それにしても、この家は暴力がデフォルトなんだな。・・・今日の凶器は・・・ハリセンだよな？
俺は、久しぶりに見た光景に思わず溜息が出る。

おじさんは、おばさん一途なのはいいのだが、度が過ぎているように俺は感じている。
本人曰く娘も愛しているらしいが、反抗期の頃から話してくれなくなったと嘆いていたな。

まあ、それはおじさんが当時中1と小5だった2人と昔のように風呂に入ろうとしたのがいけなかったんだよな。
しかも、恵麻曰く乱入してきたというのだから恐ろしい。親子じゃなかったら警察沙汰になっているはずだ。

とりあえず、俺はおじさんに合掌するとその後ろでにたにた笑う琴美ちゃんに尋ねた。

「それで、何だそのグロテスクなハリセンは？」
「ああ、これ？ちょっと絵の具つけてみたんだけどダメ？」

それで、何だか返り血がついたようなハリセンなのか・・・。
上目遣いで言われても持っているものと倒れたままのおじさんが殺人を想起させるので何も感じない。

「可愛い子ぶっても、全く可愛くない」
「がーん、ひどいよ景。でも、そんな景も好き」
「がーん・・・娘の態度が違う・・・」
「・・・ふーん、で？」

・・・これはきついな。おじさんも今の一言が堪えてしまったようで、すっかりいじけて部屋の隅で丸くなっている。
それを気付いた恵麻も視線を合わせることなく無視している。
また、軽くあしらった琴美ちゃんは、俺に話を振ってくるばかりでおじさんに目もくれない。

・・・この家、大丈夫なのか？

そうこうしていると、恵麻とエリスが料理を並べ始めた。
俺たちが喋っている間にも料理を色々と作っていたらしい。

「景様、私も数品作ってみました。料理本通りのものですけど」
「エリスちゃんってすごいんだよ～。メニューを見ただけで料理が作れちゃうんだよ～」

恵麻によると、3品もエリスが作ったらしい。
確かに、俺が読んでいた本に載っている料理ばかりだ。俺はメイドの実力を改めて思い知らされた。

「へえ、エリスは料理も出来たのか。これは、おいしい。じゃあ、今度は俺が・・・」

「やめて下さい」
「景君！」

・・・そこまで拒否することはないだろ。
血相を変える恵麻とエリスに俺はいささか不満を覚えたが、気を取り直すと話題を変えた。

「まあ、冷めないうちに食べないか？」
「はい」
「そうだね～」

俺の提案に異論はないらしく、皆がテーブルへと集まってくる。
だが、誰もおじさんを呼ぼうとしないので、俺が声をかけると心底嬉しそうに俺の隣の席に着いた。
たぶん、俺がいなかったら居場所がないんだろうな・・・。何故、俺の周りの大人の男は不遇な扱いを受けているのだろうか。

・・・俺も将来こうなるのかもしれないな。・・・いや、忘れよう。

おじさんも加えた昼食は思ったよりもなごやかな雰囲気で進んでいた。
俺は、おじさんの海外の話を聞いて相槌を打ったり、そこでの出来事を聞いたりして楽しんでいた。
するとおじさんは、どこからか大きな鞄を取り出すと俺とおじさんの間に置いた。

「そうだ、景君にお土産があったんだった」

そう言って手渡されたものを見て、俺は固まった。
俺の様子におかしいことに気付いたエリスたちが俺の見ているものを後ろから覗き込むと同じ様に固まった。

「・・・これは、一体？」
「サインしないか？」
「それって・・・」

急にぶっ飛んだ発言をするおじさんに俺は驚きを隠せない。
いつもならここで琴美ちゃんが殴り飛ばしているはずなのに、何故か今回は顔を真っ赤にしてぷるぷると震えている。
だが、琴美ちゃんよりも早く恵麻が手身近にあった座布団を掴むと力任せに投げつけた。

「お、お父さんの不潔っ、もう帰ってこないで！」
「おぶっ」

恵麻に座布団を思い切り顔面にぶつけれたおじさんは悶絶していた。
おじさんが俺に出したのは婚姻届だったのだ。

つまり、俺と結婚したいということなのか？
いや、ない。絶対ない。断じてない。俺がぶるぶると首を横に振っているとエリスがそっと俺を守るようにおじさんとの間に立った。
皆の視線がおじさんに冷たく突き刺さっていていた。

「さ、最後まで話を聞いてくれないか・・・？」

おじさんは、顔をさすりながら懇願すると恵麻は汚いものを見るような目をして、いつになく冷たい口調で言った。

「で、何？」
「・・・これは、私が景君と結婚したいというわけではなくて、うちに婿に来ないかということなんだ」

すると、恵麻の表情は一変して真っ赤になるとあたふたとし始めた。
おじさんの言葉の意味することが分かったからだろう。俺と視線が合うと顔を手で覆って後ろを向いてしまった。
恵麻の態度を見ていると俺も何だか恥ずかしくなって恵麻を視界から外すとおじさんはさらに楽しげに言葉を続ける。

「景君がロリコンだと雅巳君から聞いてね、琴美をどうかと思って」
「「えっ？」」

また、ぴたりと時が止まったように感じた。俺と恵麻は互いに何を言っているのか理解できなかった。
だが、俺は1つだけ理解していることがある。

・・・父さん、あんたとは1度きちんと話し合う必要がありそうだ。
「私ならいつでもオッケーだよ」
「娘をよろしく頼む」
こんな時だけ意気投合するとは・・・似たもの親子め。
だが、お互いに視線すら向けない所が恐ろしいというか徹底されている。
「それで、本当の理由は？」
「うちは女性ばかりで肩身が狭いんだ。景君なら娘に尻に敷かれないと思ってね。それに、話が合う。うちに来てくれれば私としては非常に助かる」
「あんたの利益しかないじゃないか」
もう俺は丁寧語で話すことを忘れるくらいに呆れ返っていた。
しかし、何故恵麻の名前は挙がらないんだ？
俺はとりあえずおじさんに聞いてみた。
「恵麻がいいって言うなら、私は別に構わないよ。恵麻は親の私から見ても気立てはいいし、料理を筆頭に家事も万能。それに見た目も悪くないはずだ。さらに、ここだけの話、恵麻は発育だって悪くないし、床上手で安産型・・・ぶへっ」
小気味いい音ともにおじさんが再び机に突っ伏す。もちろん殴ったのは琴美ちゃん。
耳まで真っ赤になった琴美ちゃんはゴミを見るような・・・いや視線で殺せそうなくらいに倒れたおじさんを見ていた。

・・・ああ、布団を敷くのが上手なのか。

という冗談は置いておいて・・・床上手って・・・。俺は一瞬頭に浮かんだ光景を頭を振って打ち消した。幼馴染でそんなことを考えるなんて・・・今日の俺はどうかしているな。

ふと、恵麻を見ると偶然にも視線が合ってしまい、恵麻の顔をが真っ赤に染まった。

「・・・け、景君。今のことは忘れてね」

「・・・頑張って忘れるよ」

この後、おじさんのせいで今日1日をきまずい雰囲気で過ごしたのは言うまでもない。

・・・そういえば、エリスは本通りにしか料理を作れないんじゃなかったか？

ふと、その日の夜俺は本を読んでいて思った。

・・・だが、何だか眠くなってし、気にすることでもないだろうな。

俺は、眠気に負けてそのまま寝てしまった。

第４６話：メイドさんと料理（後書き）

本編後の雑談

『普段の休日の過ごし方』

美「そ、そうですね・・・。わたしは、趣味のガーデニングなんかをよくしています」
梓「私は、美玖と一緒にガーデニングしたり、アルフレッドと散歩に行ったり。あ、アルフレッドはうちで飼っている犬の名前だよ。もふもふしてて可愛いんだー」

景「エリス、これが普通の人の休日の過ごし方なんだ」
エ「そうのですか。ですが、何故四条畷様なのですか？」

景「いや、あの2人は休日家にいそうだからな」
エ「何だか失礼な言い方ですね」

景「あのな・・・。エリスが休日にすることが家事以外に分からないって言うから聞いたんだ。と、まあ、それは置いておいて。ボーリングでもどうだ？いつもと顔ぶれなんだが」
エ「私が行ってもいいのですか？」
景「そのために誘ったんだ」
エ「ではお言葉に甘えて、ご同行いたします」

景「エリス！ボールは水平に投げるものじゃない、転がすものだ！」
エ「そうなのですか？」
由「・・・ちゃんと教えておけばよかった」

第４７話：花と思い出

5月のある晴れた日の午後。
俺とエリスは商店街へと買い物にやって来ていた。

「景様申し訳ありません。本来であれば、景様に手伝わせるようなことはあってはならないのですが」
「家族なんだから気にするな。それに俺も用事があったからな。先に帰っていていいからな、時間もかかるし」

しかし、エリスは帰ろうとはせず、むしろ俺の用事に興味を持ってしまったらしい。
俺の荷物の中には卵も入っており、走って逃げるわけにもいかず、しぶしぶ了承するしかなかった。

・・・恥ずかしいから見せたくなかったんだけどな。

こうして俺とエリスは普段は滅多に行くことのない駅の南側へとやって来ていた。
以前、恵麻と由真とエリスで来て以来になる。

何故、俺がいつもは来ない南側に来ているのかというと今日という日だからこその用事だ。

「景様、こちらは総合病院の方ではないのですか？」
「まあ、そうだな。俺が産まれたのも、あの病院なんだ」

総合病院は、駅から少し離れたこの辺りでは最も広大な建物となっている。
この地域もまた住宅街となっているのだが、どちらかというと昔から住んでいる人の多い地域だ。
俺たちの住む北側は比較的新興住宅街で、俺が産まれた少し前にちょうど造成されている。

「そうなんですか。私も景様が小さい頃を見てみたかったです」
「・・・家にアルバムがあるだろうし、母さんに聞けば喜んで話してくれると思うぞ」

嫌というほど話してくれるだろうな・・・。容易に想像がついてしまうが、それだけ可愛がられていたということでもあると、俺は考えている。

そして、先程まで話題に挙がっていた病院前の交差点を曲がろうとすると唐突にエリスが声をかけてきた。

「あの、景様？今日はお見舞いに行かれるのですか？」
「いや、俺の知り合いに入院している人はいないしな」
「・・・そうですか」

妙に病院を気にするエリスのことが俺は気になった。

「なあ、もしかして知り合いが入院しているのか？」
「いえ、そんなことないです。た、ただ、景様がお生まれになった場所を見てみたいと思いまして・・・」

何だか今日のエリスは歯切れが悪いな。

何かこの病院にあるのだろうか。

そう思ってふと病院の中に目をやると、病院の敷地の中から柵にへばりつくようにして1人の女がこちらを見ていることに気がついた。ここからでは、よく分からないが色白で線が細いことだけは分かった。

それに、こちらに胸の前で小さく振っているように見える。

俺に手を振っているのだろうか。そう思って手を振り返そうとしたときだった。

目の前を通った男が彼女に向かって手を振った。

・・・どうやら俺の後ろにいた男に手を振っていただけらしい。

「また今度、暇な時にでもこの辺りにも散歩に行くか？」

「はい、そうしましょう」

俺とエリスは病院に背を向けると目的地に向けて歩き出した。

「あの・・・花屋ですか？」

「・・・やっぱり俺が花屋に行くのは意外か」

予想通りの反応ではあったが、エリスは俺が花を買うなんていうイメージがないのだろう。

だが、俺もこの日でなければ花を買いに来ることなんてない。

それに、商店街に買いに行けばいいのに、ここで買う理由なんてただ1つ。

商店街は母さんの知り合いが多くて恥ずかしいからに他ならない。

「おや？今年は違う女の子と一緒なんだね」
「景ちゃんが、女の子を乗り換える男の子になるなんて・・・おばさん悲しい」

２人が、こう言っているのは去年までは恵麻と一緒に買いに来ていたからだ。
今年は、家族で出かけてしまっているので一緒に来ることはない。
本当は１人で行く予定だったのだが、エリスがついて来ているので余計な誤解を招いたというわけだ。

「おじさん、おばさん、こんにちは。今年もいつもの花をお願いします」
「ああ、分かっているとも。毎年買いに来るからね。すぐに用意しよう」
「けど、感心ね。毎年お母さんにお花をプレゼントしてるなんて」

知り合いになるとこういうことを言われるので恥ずかしい。だからこそ商店街では花を買わないのだ。
・・・まあ、ここも既に毎年この日にやって来る俺のことを覚えているから、もう顔見知りになってしまっているけどな。

こうして、すっかり知り合いになっているわけだが、初めて会ったときからここの夫婦は親切な人だった。
おじさんは、温和で５０に今年なるというが、見た目は老けているように見える。本人が言うにはおばさんの尻に敷かれ続けて苦労を重ねてきたのだという。だが、そう言ったおじさんは幸せそうだったことを俺は今でも覚えている。
おばさんの年齢は知らない・・・と言うよりも教えてくれない。こちらは、肝っ玉が据わっていると表現のよく似合う人だ。毎日、お

じさんと店に出ている中で家事全般もこなすのだという。おじさん曰く、理想の嫁らしい。

「ところで、景君。そちらのお嬢さんはどなたかな？」
「もしかして、恋人かしら？あらまあ、恵麻ちゃんというものがありながら・・・色男ね」

・・・そういえば、エリスのことを紹介していなかったな。俺は、2人に指摘されてようやく気がついた。
そこで、俺は半歩後ろにいたエリスを前に引っ張り出すと、余計なことを言われる前に先手を打った。

「こいつは、エリスと言いまして、うちに来ているイギリスからの留学生なんです」
「ほほう、留学生か。しかし、随分とべっぴんさんだね」
「本当に綺麗ねえ。銀髪なんておばさん初めて見た。こんな可愛い子と1つ屋根の下なんて嬉しいでしょ、景ちゃん」
「ま、まあ、そうですね・・・」

そういえば、以前にも同じ様なことがあったな・・・。その時は、オーストラリアって言ったような・・・。
俺は自分で言ったことの矛盾に気がついたがもう遅い。

「はじめまして、エリスと申します。景さ・・・んの家でお世話になっています」

まだ、その言葉ができないのか！？未だにさん付けで呼ぶことができないとは思ってもみなかった。
だが、おじさんもおばさんも日本語に不慣れなんだねという理由であっさり受け入れていた。

・・・日本語ぺらぺらで、そこだけ詰まることに不自然だと感じないのか？

まあ、ここは結果よければ全てよしだな。それにボロが出る前に帰った方がよさそうだ。

「そろそろ花をもらってもいいですか？」
「おっ、そうだったね。母さん、あの花を持ってきてくれないか」
「ええ。じゃあ、少しの間待っていてね」

おばさんは、そう言って店の奥へと姿を消した。

花を買ってからの帰り際、並んで歩いてエリスが首をかしげながら聞いてきた。

「景様はどうして、お母様に花を贈っているのですか？」
「俺が毎年花を贈っている理由か。歩きながらでいいなら話すぞ」

エリスは、黙って頷いた。・・・そんなに真剣に見つめられても面白い話でもないんだけどな。
そして、俺は、エリスにある過去の話をすることにした。

俺は、昔いじめに遭っていたことがある。

その理由は母さんだった。母さんは周りの母親よりもかなり若く何と言うのか浮いた存在だった。
また、色々と親が話していることを聞いていたのだろう。俺は、母親のことでからかいの対象になることが度々あった。

まあ、今となってはいじめだったのかどうかなんてどうでもいいことだ。
ただ、当時の俺はいじめられていると思っていたし、そのせいで母さんのことは大嫌いだった。

「景ちゃん、今日はどうだった？」
「・・・別に。いつもと変わらないよ」

俺は、何も知らないで話しかけてくる母さんが嫌で仕方なかった。

「そうだ。明日、みんなで遊園地に出かけない？景ちゃん、行きたがってたもんね」
「・・・興味ない」
「・・・」

今思えば可愛げのない子どもだったと思う。
あの頃は、本気で違う母親が欲しいと思っていた。何故、母さんが他の人に比べてこんなに若いのか。いなければいいと思ったことも1度や2度じゃない。

そしてある日、俺が母さんを拒否していた関係が続いていた時に授業参観の手紙を渡さなかったことがあった。
だが、恵麻の母親、つまり愛美さんから聞いたらしく、俺に授業参観のことを聞いてきた。

「景ちゃん、今度授業参観があるって聞いたんだけど、手紙貰ってきてない？」
俺は母さんには来て欲しくなかったので、貰ってないの一点張りだった。
その日、母さんはそれ以上追及することはなかった。

翌日の授業参観の日。
俺は、最もその場で見たくない人の顔を見ることになった。
さすがに学校では怒らなかったが、家に帰ると俺は母さんにその怒りをぶつけた。

「どうしてさ。どうして来たの？来てほしくないから黙ってたのに！」
「・・・どうしてって、私は景ちゃんの母親よ。授業参観に行くのは当然じゃない」
「嫌だって言ってるのに何で？僕は、母さんに来てほしくない。母さんなんていなきゃいいんだ！」
「・・・っ」

乾いた音がリビング中に響き渡り、俺が平手打ちにされたことに気がついたのは少し時間が経ってからだった。
段々とひりひりと頬が痛んでくるのを感じたし、自分が言いたいことも言えない悔しさだけが残った。
だから、今まで俺に手をあげたことのない母さんに叩かれた事や、

母さんが泣いていたことなんてどうでもよかった。

そのまた翌日の日曜日のこと。

「・・・」

「・・・」

リビングは、いつもは母さんが俺に話しかけてくるのでそれなりに賑やかなはずだったが、今日は全く会話もなかった。
父さんは、何とか会話の糸口を見つけようと色々と会話を俺たちに振ってくるのだが、俺も母さんの反応を示すことはなかった。

朝食を食べ終えると、俺はすぐに玄関に向かった。

「・・・ごちそうさま。・・・いってきます」

いつもなら、どこに行くのか聞いてくる母さんもこの日は何も聞いてくる事はなかった。
だが、この時の俺は家出をするつもりでいた。1人でも生きていけると本気で思っていた。

「・・・」

だが、結局の所、1人で遠出をしたことのなかった俺がそう離れた場所に行くことができるわけもなく、家の近くの公園で1人ブランコに座っていた。
家に帰ろうという気持ちを押し殺し、コンビニで買っておいたパンをほうばる。

「・・・おいしくない」

食事をする時、いつも家族が一緒だった。
こうして1人で食べるのは初めてのことかもしれない。
1人での食事がこんなにも寂しく、またおいしく感じないとは思ってもみなかった。

やっぱり帰ろうかな・・・。
そう思ったときだった。公園の入り口の方から見知った顔が俺のことを呼んでいた。

「景く～ん。はあはあ・・・やっと見つけたよ～。おばさんもおじさんもみんな心配してるよ。・・・それに私だって心配してたんだからね」
「・・・母さんなんかに心配されなくたっていいもん」

知り合いに会えたというのもあって安心した俺は、また憎まれ口を叩いてしまった。
本当は、家に帰って謝らなくちゃいけないと思うが、家出をしたから帰れないという訳の分からない意地もあった。

「お母さんと喧嘩したんだってね。仲直りしたいけどきっかけが見つからないんでしょ」
「・・・」

この時の恵麻は、妙にお姉さんに見えた。
まるで、俺の全てを知っているような気さえもした。

「いいこと教えてあげる。きっと仲直りできるよ。それに、景君が

からかわれているのに私、何も出来ないし・・・。だからね、景君の役に立ちたいの」

恵麻から差し出された手を俺はおずおずと握り締めた。
そして、俺は恵麻に引っ張られて、あの花屋へと行くことになった。

そこで、花屋のおじさんとおばさんに出会ったのだ。
２人は、俺の話を聞くと何故か頭を撫でてくれた。

「そう、あなたはいい子ね。じゃあ、おばさんがとっておきのお花を用意するからね」
「僕は悪い子なの。だから、謝らないといけない」
「そうかい、君は将来優しい心を持った子になるだろうね。今の気持ちを大切にしなさい。ところで、そちらのお譲ちゃんは、お姉さんかい？弟さんを可愛がってあげるんだよ」

そういえば、初めてあの花屋に行った日は、俺と恵麻は姉弟だと思われたんだよな。
恵麻が必死に誤解を解こうとしていたのも懐かしい。

「あ・・・お金ない・・・」

俺はその時１００円しか持っていなかったのだが、２人はお金を取ることはなかった。
ただ、来年もまたいらっしゃい、そう言って送り出してくれた。

「・・・すっかり遅くなっちゃったね」
「うん。でも、これでお母さんと仲直りできるね」
恵麻は、他人事にも関わらず、自分のことのように喜んでいた。
昔の恵麻は何かにつけてお姉さんぶっていたんだよな。・・・あの時は、それがとても頼もしく思えた。

「で、でも・・・大丈夫かな」
「景君、私がついてるから大丈夫っ。それに、私も一緒に謝ってあげる。1人じゃできなくても、2人ならできるよ」
「・・・うん、僕頑張るよ」

半ば恵麻に連れて行かれるような形で俺は、家が見える辺りまでやって来た。
すると、家の前に立つ1人の人影が見えた。
それが誰かということは、すぐに分かった。

「・・・母さん」

紛れもなく、それは母さんだった。
俺は、思わず立ち止まってしまった。だが、恵麻に手を引っ張られ、母さんと対面した。

「・・・」

母さんを目の前にして、言いたいことはいっぱいあった。
昨日のことや今日のこと。それに、自分の本当の気持ちを伝えたかった。
だけど、言葉が出てこなかった。

「景君、ファイトだよ～」

こうして恵麻が手を握ってくれていて、俺は1人ではないということを実感できていた。
だから、今なら言えると思った。

「・・・母さん・・・ごめん・・なさい。あの・・・これ・・・」

俺はその時精一杯の勇気を振り絞ったと思う。
実際、声は震えていたし、ちゃんと言えていたかすら怪しい所があったと思う。
だが、俺は、プレゼントを受け取って母さんは許してくれるだろうか、ということだけが気になっていた。

「おかえり、景ちゃん」

母さんはそう言って、プレゼントを受け取ると俺を抱きしめてくれた。

「ありがとう」

何に対しての言葉か、当時の俺はよく分からなかった。今でもおぼろげにしか分かっていない。
母さんは、いつか分かる時が来ると言って教えてくれなかった。

思えばこの日から俺は母さんが好きなのだろう。
だが、面と向かって言うのは恥ずかしいから心にずっと閉まっておこうと思っている。

エリスに昔の話をして歩いていると、いつの間にか家の近くまで歩いてきていたことに気がついた。
時計を見ると、あの日と同じ夕方の近い時間になってしまっていたが、あの時はほとんど陽も沈んでしまっていたから、今日のような夕陽を見ることはなかった。

「ところで、その時どのような花を贈ったのですか？」
「ハシバミという花だ。普通に売っているものじゃないから、たぶん個人的にくれたものだと思う。・・・でも、人にこういう話をするのは、エリスが初めてだな。誰にも話すなよ、恥ずかしい話だし、こんな話をしてもマザコンにしか思われないからな」

すると、エリスは、分かりましたと言ってくすりと笑った。
俺が何がおかしいのか尋ねると、エリスは、やっぱりマザコンですねと言ってまた笑った。

・・・話す相手を間違えたか？くすくすと俺の隣で笑うエリスをむっとして睨んだ。

エリスは、最初は歩きながら俺が微笑ましいと言わんばかりの笑みを浮かべていたが、急に立ち止まると俺の方に向き直った。

「でも、そういうのは素敵だと思いますよ。私は、景様がそのような方だから、こうして隣を歩いているのです」
「それは、光栄なことだな」
「ちっとも思っていないじゃないですか」

照れ隠しのつもりだったんだが、どうやら伝わっていないらしい。
仕方ないか、いくら高性能で人間に近いといっても人間の感情を正確に理解するなんて事はできないよな。
同じ人でさえも互いの感情を理解するのは難しいというのに・・・
ロボットではまだ無理という話か。

「景様。・・・お顔が真っ赤ですよ。照れてしまった景様も可愛いです」
「・・・・」

全く隠せていないようだった。
・・・俺が分かり易すぎるということか。だが、エリスが楽しそうだから、良しとするか。

そうこうしているうちに家の前まで戻ってくると、母さんが外に立っているのが見えた。
何故か、母さんはこの日俺が帰ってくる時間が分かるのか、毎年のように家の前で俺のことを待っているのだ。

「おかえり、景ちゃん、エリスちゃん」
「ただいま、母さん。・・・今年は、これを買ってきたんだ」
「あら、これは・・・」

俺は、今年もまた花を母さんに贈った。
来年もその次の年もきっと贈ることだろう。

ちなみに、今年贈った花は、バーベナという花だ。
まあ、母さんが意味を知っているとも思えないけどな。

第４７話：花と思い出（後書き）

本編後の雑談

エ「景様。景様は、平凡な生活が夢だとおっしゃっていますが、どうしてそう思うのですか？」
景「今みたいに、友人がいて、家族がいるっていうのは幸せなことだ」

エ「そうですね。私も景様と一緒にいることができて幸せです」
景「・・・。そ、そうか・・・」

エ「景様、照れているのですか？」
景「うるさい。・・・それに、さっきから母さんが呼んでいるぞ」

エ「そうでした。では、景様、またお話聞かせてくださいね」
景「ああ、答えられる範囲でな。・・・いつから俺の夢は結婚してささやかな幸せを得ることに変わったのだろうか。・・・きっと、今でも怖いのかもしれないな、人が離れていくことが・・・」

第４８話：メイドマスターと呼ばれた男

～ｐｒｏｌｏｇｕｅ～

昨日、あなたを見かけました。

あなたは、大きくなって私の想像よりもずっとかっこよくなって・・・。

今の私では見向きもされないと思う。あれが精一杯。

それに・・・あなたの側に私はいるから。

・・・じゃあまたね。今度は、ここじゃなく他の場所で会おうね。

【1】メイドマスターと呼ばれた男

壬生　亜樹乃は困っていた。

彼女は、ごく普通の女の子だった。水泳部に所属し、ごく普通の成績を残していた。

学校の試験の成績も普通。素行も至って普通。そして、友人付き合いも普通。

しかし、彼女は唯一他人とは違うことがあった。

彼女の通う聖蓮学園ではアルバイトが認められている。そのため、彼女もまたバイトに励む勤労少女なのだ。

バイトをするのは、この学校ではごく普通のことだ。
では、何が違うのかというとその経験したバイトの件数の多さだった。
僅か2年で30件近くに上っているのだ。ゴキブリを追い回していたら、客を叩いてクビになったり、いい職場だと思ったらオーナーが夜逃げしたり・・・。

とことん、彼女はついていない。
そして、今回新しいアルバイト先を見つけたのだが・・・。そこには、とある問題があった。
そこで、彼女はとある人物を頼ることにした。きっと、この学校では一番詳しいはずだから。

「・・・ねえ、有栖。ちょっと私に付き合ってくれる？」
「どういう意味だ？」
「違う違う、有栖の考えていることじゃなくって。相談に乗ってほしいんだってば」

そう言って彼女は景に背を向けて歩き出した。
景も特に文句を言うことなく彼女の後を追った。

「言葉を省略するから告白かと思った。・・・ドキドキして損したな」
「そんなこと、ちっとも思ってないくせに・・・」
2人は、昼休みの廊下を歩きながら冗談を言い合っていた。もちろん、景は亜樹乃の言うとおり、彼女に何の感情も持ち合わせていな

い。
ただ、景は勘違いとはいえ不覚にも亜樹乃に対してドキッとしたのも事実でそれが悔しく、憎まれ口を叩いているのだ。当然、亜樹乃はそれを知っているので対応もナチュラルだ。

去年の体育祭で友人を通じて知り合った2人は、意外と気が合い、それ以来友人としての付き合いがある。
こうして、相談事を持ちかけるような仲ではなかった。
もしかすると、俺の知り合いに好きな奴でもいるのかもしれないと、景は思っていた。
それなら、友人としてきちんと応援してあげなくてはいけないと勝手に頭の中で話を進めていた。

人気のない校舎裏までやって来ると、近くに誰もいないことを亜樹乃は確認し、景に恥ずかしそうに話を切り出した。

「実はね・・・私また新しいバイト始めたの」
「・・・またか」

景は、呆れていた。彼女が、バイトを転々としていることは彼も知っていた。
しかし、数日前にバイトを始めたといっていたような気がする。それ以前に考えていたことと違ったためにテンションはすっかり落ちてしまっていた。

「ちょっと、ちょっと・・・何よ、そのがっかりしたような、呆れたような、バカにしたような顔は！？確かに私はいっぱいクビになったよ！だけど、そんな目をしなくてもいいでしょ！」
「あー、はいはい。で、何の話だ？」

「冷たいな、冷たいなあ。・・・実は、新しいバイトの事で有栖に相談したいことがあるの」

それならば、こんな校舎裏まで連れて来る必要など全くない。
景がそう言うと、彼女は煙が出そうになるくらい顔を真っ赤にすると消え入るような声で言った。

「そのバイトね・・・メイド喫茶なんだ・・・」

「・・・」

しばらくの間、2人の間には沈黙があった。
しかし、その沈黙を打ち破るように景は噴き出すと大笑いした。校舎に体を預けてしばらく涙が出そうになるくらいに力いっぱい笑った。
すると、亜樹乃は肩をわなわなと震わせると、また顔を真っ赤にした。もちろん、恥ずかしいわけではない。

「・・・ねえねえ、大人しく謝るのと、変な噂立てられるの、どっちがいい？」

亜樹乃は精一杯表に出さないようにしているが、実際には般若のような顔になっており、さらに笑顔も苦しい。
身の危険を感じた景は、大人しく即座に謝った。

「よろしい」

ところで、変な噂というのは、一体何なのだろうと景は思いを巡らした。
色々と想像できるのだが、どれも彼にとって学校にいられなくなりそうなものだった。つまり、エロいこと、もしくは暴力沙汰しか思

いつかなかった。
彼は、しばらくそのことを考えていたが、亜樹乃はそんなことはしないだろうと思い、頭から消し去ると話を元に戻した。
「それで、何故俺にバイトのことを告白して・・・まさか客として来いと言うのか！？」
何だそのキャバクラ紛いの店はと景は余計な想像を加速させる。
彼の頭の中には、あまりよろしくない考えが巡っている。
事実は小説より奇なりだな、と諺好きの生徒会長からの影響丸出しの言葉が彼の頭には浮かんでいた。
しかし、肝心の彼にとっての事実が捏造されているわけだが・・・。
「ああっ、もう！違うってば！私が聞きたいのは有栖のメイドのことなの」
「ああ、エリスのことか。もしかして、そこでエリスにも働いてもらいたいのか？」
これもまた違う景の答えに亜樹乃は頭を抱えたくなるのをこらえて景に説明を始めた。
彼女は、仕事を始めるにあたって今までのように失敗しないために、身近にメイドがいる景の意見を参考にしようと考えた。
だが、そんなことを堂々と聞きたくなかったし、噂が流れてクラスメイトが来たりしたら気まずいことこの上ない。
そこで、彼女は景を人気のないところへと呼び出して話を聞こうと考えたのだ。
何はともあれ話を聞き終えた景だったが、その表情は何か釈然としないようだった。

「俺＝メイドに詳しいって・・・納得いかないな・・・。それにメイドマスターって変なあだ名をつけるな。確かにメイドは家にいるが、マスターなどと呼ばれるほどメイドに詳しくなんかない。その呼び方やめてくれ」
「お願いメイドマスター、普段のメイドの立ち振る舞いを教えて。今度のバイトは時給がいいから、できる限り長く働きたいの。それでそれで」
「話を聞け！」

これには、景も亜樹乃の話を遮らざるを得なかった。
だが、

「私は空気読めないけど、引き際は弁えてるよ。うんうん、私って良心的だよね、メイドマスター」
「・・・全く読めてないし、弁えてもない。その前に、その呼び方いい加減やめてくれ」

景は、メイドマスターなどと不名誉極まりないあだ名で呼ばれ続けるのは、我慢できなかった。
それでも、景は出来る限りいらついていることを表に出さないように亜樹乃に話しかけていた。だが、隠しきれていないことは明白でもう苦笑いすら浮かべていない。
彼は、どうにか冷静になろうと会話を自分のペースに持ち込もうとしていた。

「頼むのか貶すのか、どちらかにしてくれないか？」
「でも、うちの学校でメイドが家にいるのって有栖だけでしょ。身近にメイドがいる人なんだから詳しいに決まってるじゃない」
「・・・」

しかし、会話の主導権を握っているのは亜樹乃だった。
四条畷姉妹の家にもメイドはいるのだが、彼はそれをあえて言わなかった。
言った所で、何か解決できるとも思えないし、余計なネタを与えるに過ぎないと気がついたのである。

「ねえねえ、有栖。ケチケチしないで教えてよー」

それに、景は亜樹乃よりエリスのことについては詳しいという自信はあるものの、彼はエリスの普段の振る舞いなどほとんど休日しか見ていないので、何をしているかは母親の方が詳しい。よく考えれば彼もまた普段のエリスの生活のことなど詳しいどころかほとんど何も知らないのである。

「俺に聞かれてもよく分からないな。暇があったらエリスと直接会ってみたらいいんじゃないか？」
「ああ、それもそっかー。じゃあじゃあ、今度の土曜日の午後にどうかな？その日なら、有栖もバイトないから空いてるでしょ。わおっ、これで決まりだね。ではでは、またねー」
「勝手に話を進めるな・・・って、もういないし・・・」

勝手に話を進めた上に、返事を聞くこともなくいなくなってしまった亜樹乃に景はただただ呆然とするしかなかった。

後日、土曜日の放課後、亜樹乃は約束どおりエリスと話をすることができた。
その場で亜樹乃は、エリスに一応バイトの誘いをかけてみた。
しかし、エリスはメイド喫茶のメイドにはなりたくないとのことだ

った。

その理由は、喫茶の短いスカートが恥ずかしいという理由である。どこで、そんなことを知ったのかというと柚葉と買い物に行くと、商店街の人経由でさまざまな話を聞いたからだ。

「で、ですが・・・」

「いや、しなくていい」

景は、エリスの言おうとしていることをすぐに遮った。言いたいことが嫌でも分かってしまったのだ。

エリスの口を手で塞いだ景を見ていた亜樹乃は、景のわき腹を肘で突きながら嫌らしく笑う。

「おおっ、これはお前は俺のものだから、どこにも行くなってことだね。熱いね熱いね、私妬いちゃうよ・・・って無視しないでー」

景とエリスはスルーを覚えた。

「ちょっとちょっと、そんなの覚えなくていいってば。やっぱり無視？スルーなの？いやー無視しないでー」

「・・・やりすぎたか？」

「はい、やりすぎです」

完全に亜樹乃を無視した景は、数日越しに今度は亜樹乃の話を無視するチャンスを伺っていたのだ。もちろん、既にエリスには前日に手配済みである。

有栖　景。実に器の小さな男である。

こうして土曜の午後はゆっくりと過ぎていった。

第４８話：メイドマスターと呼ばれた男（後書き）

今回は試験的な作品となっています。

今後、しばらくはこの形式で試してみようと思っていますが、何か意見がありましたらお願いします。

と、言っても、プロローグと題が入るだけなので、読むのに影響はあまりないと思います。

第４９話：小悪魔の実態

～ｐｒｏｌｏｇｕｅ～

「そんな～・・・」

「うわっ、あたしとあんたたちは敵同士ってわけね」

「まあ、暇な時に遊びに行くぜ。どうせ、毎年応援なんて適当なんだからさ」

「僕もみんなと違ったみたい」

「今年は、全員違う色か。まあ、俺のところに話せる相手がいるといいけどな」

これは、抽選直後の景たちの会話である。

【1】小悪魔の実態

体育祭を1週間後に控えたある日のこと。

聖蓮学園では、恒例のカラー決めが行われた。

体育祭では、学園の人数を考慮して8色に分かれて対抗する。

そして、文武両道を掲げるこの学校では、体育祭の成績は、球技大

会、定期試験と並んで部活動の部費に関わる大きなイベントとなっている。
また、付属の聖蓮大学への推薦入学を得るためには、イベントも『頑張る』必要がある。
試験だけで推薦が決まるわけではないので、勉強できない人はこちらで頑張るのだ。

そのため、体育祭などのイベントは一応自由参加となっているが、休む人はほぼいない。
ちなみに、競技に出なくても運営などをすることも評価の対象になっている。
それにうまくサボることもまた評価のうちである。

そんな体育祭のチーム分けが行われたわけだったが、納得できない人も当然いる。

まずは、チーム分けを見ていこう。

赤には、誰もいない。
青には、恵麻。

黄には、由真、陽菜。
緑には、幸樹、美玖。

ピンクには、誰もいない。
黒には、景、衣。

白には、晃。
紫には、梓依。

こういう組み合わせになったのだ。
しかし、ある人はこの組み合わせに疑惑を持っていた。
生徒会長である衣がイカサマを仕掛けたのではないかということである。

そして、疑問を持っていたのは梓依の1人格であり、最も強気な女の子でもある紫だった。
彼女は、思い立ったらすぐ行動しないと気が済まないので、その日の放課後すぐに生徒会室へとやってきていた。

「こんにちは、霧生　衣先輩はいる？」
「あれ？確か・・・梓依ちゃんだっけ？」

たまたま応対した希望が、紫の主人格である梓依と間違えるのは無理もないことだった。
景の家で会ったことがあるとはいえ、ほとんど他人も同然であり、その見た目は、梓依と同一人物なのだからそっくりも何も同じである。
情報として知っていてもいざ対応となると勝手が違う。

「ボクは、紫。四条畷　紫」
「そ、そうなんだ・・・。ところで、何か用かな？」

希望のいい所はどんな時も前向きなことである。
例え、目の前の人間がむっとしていても、自分は笑顔でい続けることができる。
大抵の場合、後に仕返しをして2度と逆らえないくらいに叩きのめすのだが・・・。

「霧生　衣先輩に聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」
いかにも邪魔だと言わんばかりの態度に希望は、カチンとくるものがあったが、自分は上級生なんだと言い聞かせ何とか落ち着いた。
そして、どうぞと中へ通した。

「ねえ、皇后崎　希望先輩。先輩は、今日のことを知ってる？」
「今日のこと？」
「知らないならいいよ、別に」

自分で聞いておいて、素っ気無い態度はないでしょと殴りかかりたくなる衝動に駆られるのを希望は必死に堪えていた。
しかし、知ってか知らずか紫はさらに火に油を注ぐような態度を示す。紫は、情報で相手を踊らせる希望のような人間は嫌いなため、自然と態度に出てしまうようだ。
すぐに態度に出てしまう癖は、梓依たちによく注意されているのだが、全く直る気配は感じられない。

しばらく2人は睨み合っていたが、それを見かねた衣が2人の間に仲裁に入った。

「とりあえず、お2人とも落ち着きなさい。全く・・・ここは生徒会室ですわよ」

衣は、希望を紫から引き離すと彼女よりもだいぶ背の低い紫に合わせるように中腰になった。
その余裕すら感じさせる態度に紫は、苛立ちを隠せなかった。声にもつい刺々しさが混じってしまう。

「霧生　衣先輩。ボクは回りくどいのは嫌いだからはっきり言うよ。

あの抽選おかしくない？」
「よく気付いたわね。でも、あなたたちが同じになれなかったのは、単純に運だと思いますわ」
「くっ・・・」

あっさりと認めた衣に紫は開いた口が塞がらなかった。
加えて正論まで言われてしまうとどうしようもない。確かに自分が一緒になれなかったのは単純に運が悪かったに過ぎない。

「後学までに聞いておくけどどうやった？」
「あら、そんなに知りたい？そうですわね、これは生徒会限定の方法ですわ」

紫には隠すつもりもない衣は、他の人に聞かれないようにするために部屋の鍵を閉めると話し始めた。

その方法とは、初めから1つ足りないようにして、自分は最後に引くと言って引かなかったのだ。
だから、彼女は色を自由に選べたのである。それに、彼女は1人の人数の誤差など大した問題とは考えてもいない。

しかし、生徒会長としての資質は限りなくないように思えるわけだが。

話を聞き終わった紫は、呆れた目で衣を見ていた。
普段から生徒会長として、そして剣道部の大将として活躍する衣が浴びることのないタイプの視線だった。

「あっそ・・・。別にばらすつもりもないし、霧生　衣先輩が何していようとボクには関係ない。それに、同じチームじゃなくても一

緒になる機会はある」
「あっ・・・」
すると、衣は素っ頓狂な声を上げてその場で立ち尽くした。
どうやら、同じ色になったことで満足していたようで、その後のことなど考えてもいなかったらしい。
これには、紫は呆れて物も言えなかった。だが、希望は違った。
「衣っち・・・。折角、私が一緒に考えたんだから・・・その後のこと考えていなかったの？」
「そ、そうですわね・・・。一緒にお弁当というのもありですわね」
だが、これには紫が猛反発する。
「どうせ1日中、側にいられるんだから弁当は止めてよ。大体、弁当作れるわけ？」
この問いかけに衣は、思わず閉口してしまった。彼女は、料理はどちらかというと苦手な部類だった。
いつもは、専属の料理人が作ってくれるので、滅多なことでは料理などしない。それに対して、同じ様にお嬢様育ちの紫ではあるが、母親から料理を教わっているため、姉の美玖共々料理は得意なほうである。
昼の休みの時間はまさに絶好のアピールの時間でもあるのだ。邪魔は1人でも少ないほうがいいに決まっている。
しかし、衣が簡単に引き下がるわけがない。彼女は、紫に胸を張ってさも自信たっぷりに言った。
「も、もちろん作れますわ。作れるに決まっていますわ」

「へえー？楽しみだなー」
「くっ・・・」
紫を挑発したつもりが逆に、馬鹿にされてしまい衣は肩を震わせて悔しがっていた。
２人がいがみ合っているのを見ていた希望は、２人の話題に挙がっていた弁当の話でふと去年のことを思い出した。
そして、希望は戸棚にあったアルバムから１枚の写真を抜き取り２人に見せる。
「あー、２人とも、ちょっといい？これ、去年の体育祭の写真」
机の上に置かれた写真には、景やその友人たちも写っている何の変哲のない写真だった。
しかし、紫は数人ほど知らない人物が写っていることに気がつくと顔を上げて、希望に尋ねた。
「ねえ、この人たち、誰？それに、・・・この変態っぽいのは？」
「こっちの女性は恵麻っちのお母さんとお父さん。こっちが景っちのお父さん。それで・・・これが五味　大助。変態『っぽい』じゃなくて、変態そのものだから。でも、あれで、うち１番の天才だから、神様も不平等だよね」
ひどい言われようだが、事実だから仕方のないことである。
また、大助は希望にとっては天敵であり、情報を握っても統制できない唯一の人物でもある。
卒業までには、何とか一泡吹かせたいと常々狙っているのだ。
しかし、紫はその変態に興味はなかった。
むしろ彼女が興味を持ったのは、景の側にいる両親だった。その２

人を指でなぞりながら彼女はぼそっと呟いた。

「お義父様、お義母様・・・」

「なっ！？何を言っているのです、紫さん。今、聞き捨てならない言葉が聞こえてきましたわ。その写真は預からせていただきます」

「わっ、何？まだ、見ているんだから後にしてよ。って、引っ張らないでよ」

「その手を離しなさい」

何故か、写真の取り合いに発展してしまった2人を希望は何とか止めようと声をかけるが全く取り合えってもらえなかった。

こういう時に、秘密を暴露すればいいのだろうが、相手が衣ではなかなかカードとして使うことは難しい。

希望がどうしたものかと悩んでいる間にも2人の取り合いは続いていた。

しかし、それも長くは続かなかった。

「ああっ！？」

ちょうど半分くらいになるように写真は切れてしまったのだ。

真っ二つになった中心には無残にも2枚に下ろされた景の姿があった。

それを見た衣も紫もお互いの顔を見合う。

「お互い、知らなかったことにしようよ」

「そうですわね。知らなかったということにしましょう。希望さん、構いませんわよね？」

衣は同意を求めているはずなのだが、希望にはそれが強制にしか聞

こえなかった。
色々と秘密を握っているはずなのに何故握られている側の方が強気なのか。
それは、単純に力関係に過ぎないのだと希望は悟っていた。

それに、彼女は専ら新聞部の体育祭特集で忙しいため、個人のどうでもいい話に興味は無い。
発表すると自分にも不利益を被るなら尚更の事だ。

しかし、希望が色々と考え込んでいる間にも、紫と衣は今までのことが嘘のように仲良く会話をしているではないか。
彼女はがっしりと握手する2人から視線を逸らすと、溜息を1つついて気分を落ち着けた。
すると、途端に2人をからかいたい衝動に駆られた。彼女は、1人が好きではないので、こうすることで他人の輪に入ろうとする。

「いいよー。ところでさ、景っちに関する耳寄りな情報があるんだけど・・・聞きたい？」

すると、希望の予想通り2人はこちらを向いた。その期待の眼差しを浴びながら希望は少し得意げに、しかし、時折ふざけつつ言った。

「実はね、景っちは両親と一緒に昼食を食べているんだよー。だからねー、2人きりになれることはまずないよ。だって景っち、マザコンだし。去年は、たまたま私が通りかかって一緒に写真に混ぜてもらったんだ。うん、でも景っちは私の見立てでは極度のマザコンなはずだよ。だって、写真見たら分かると思うけど、普通隣に母親はいないでしょ」

「「・・・」」

希望は期待通り考え込んでしまった2人を見て、1人にやにやとしていた。2人ともきっと思い当たる節があるのだろう。
この様子なら体育祭も退屈せずに済みそうだったと希望は思った。

そして、今年はメイドもやって来るだろうから更に面白くなりそうだ。

ただ、去年と違うことといえば今年はあの輪の中に気兼ねなく入っていけるということか。
今だからこそ、景にもマザコンだなんだと言えるが、あの当時は1歩外側から見ていたように思える。

しかし、今は景たちとも親しくなったし、去年のように1歩踏み出せない彼女ではない。

今年は、去年は入れなかったあの輪の中に自分も入っていこうと彼女は密かに誓った。

第５０話：景とファンクラブ（前書き）

次回より、形式を以前のものに戻します。
意見をくださった方、ありがとうございました。

第５０話：景とファンクラブ

～ｐｒｏｌｏｇｕｅ～

１階から自分のことを母親が大声で呼んでいる。彼は、よく分からないままリビングへと入った。
今日は、母親も忙しかったため晩御飯にはまだ早いはずである。
すると、リビングではテレビがついていた。そして、その前で母親とエリスが正座をしてテレビに見入っている。
何を見ているのだろうかと景が番組の内容を確認しようと新聞を取り上げた時だった。
彼が来たことに母親が、彼を手招きした。
そして、母親に引っ張られる形でテレビの前に座ると、どこかで見た光景がテレビには映っていた。

「本当にロボットなんだ。もう人にしか見えないよ」
「私は、あくまで人を目指して作られたものですから。こうして、こちらでお世話になっているのも、より人の生活に慣れて、データを蓄えるためです」

どこかで見たことがある人物だと、景は思った。
それに、背景は何だかうちに似ているなとも。

「そうなんだー。ということは、期限が過ぎたら、お別れするの？」
「いいえ。試験期間後は、そのままご主人様にお仕えします。既に、許可はいただいていますし、他所の家庭に行くつもりもありません。」

「それで、その『ご主人様』はどこにいるの？」
「景様なら・・・」

景は、これ以上見ていられなくなってリモコンでテレビの電源を切った。その瞬間、画面に映っていたエリスは消え、テレビの画面に反射したエリスが映った。

まさか、全国放送でしかも名前で呼ばれるとは思っていなかったのだ。
彼は、一気に脱力すると、もう寝ると言ってリビングから出て行こうとした。
これには、実はからかいの種にしようとしていた柚葉でさえも、明日、愛美さんに伝えておくからと景を慰めるしかなかった。

・・・その原因を作ったエリスはというと・・・おろおろとしていて何も出来ずにいた。

【1】景とファンクラブ

エリスと会話する片宮　莉子が放送された翌日のことだった。

その放送のせいで、エリスが学校に来た後の数日よりもさらに俺は注目を浴びていた。
商店街では、顔見知りの店の人たちに声をかけられ、通学路では、誰かしらが俺のことを見ているのだ。エリスと俺の関係はこの学校の大半が知っているために、注目の的になるのは仕方がない。
だが、また数日妙なことで注目されるというのは、気分が悪い。俺

は憂鬱な気分で校門を通り過ぎた。

教室に入ると俺の机の周りには、妙に殺気だった男たちが数人いた。そして、俺を見つけると我先にとこちらへ向かってくる。厄介事の臭いしかしないのが悲しい所だ。

「有栖　景君。僕たちに同行していただきたい」
「話があるなら、ここでしてくれ。それとも・・・ここでは話すことができない内容なのか？」

俺は朝から不機嫌だったので、当然口調も相手を見る目つきも悪かった。
多少、相手がビビッているようだが、そんなことは気にもしない。

「こ、ここは一先ず戦略的撤退をするが、また時間を改めて出直すことにする。では、後ほど」

全く面倒奴らに絡まれたものだ。そそくさと去っていく3人を俺は目で追うこともせず、机にうつ伏せになった。
俺に朝から絡んできたのは、今をときめく人気アイドル、片宮　莉子のファンクラブの会員だ。
１００名を超える会員のいるため、部・同好会含めても、この学校最大の規模である。
その上、何故か生徒会公認の部として存在しており、部費も出ている。ほとんど0に近いらしいが。

だが、あのファンクラブに目をつけられると流石に厄介としか言いようがない。

規模、組織の連帯感、気持ち悪さ、どれを取ってもこの学校最高の地位を揺るぎないものとしている。

・・・やっぱり、エリスのインタビューは断っておくべきだっただな。おばさんの顔を立てたことを今更ながらに後悔していると、誰かが俺に声をかけてきた。

「・・・景君。お母さんが、ごめんねって言っておいてだって。今度、早いうちに謝りに行くからって伝えて欲しいって言ってたよ～」

「どうにかなるから恵麻もあまり気にするな。むしろ、普段どおり接してくれると俺としても安心できるしな」

本心で言ったつもりだったのだが、恵麻には俺が無理しているように思えたらしく、心配そうに顔を覗き込まれた。

だが、妙に顔の位置が近く、お互いの息がかかるくらいの距離だったので俺は照れ隠しに思わず恵麻の額をデコピンしてしまった。

「いたっ・・・。景君、ひどいよ～」

恵麻は大して痛くもないはずなのに、何だかとても不満そうだったのでデコピンしたところを撫でてみると、恵麻の様子が何だかおかしくなった。

口をぽかんと開けたまま俺を凝視し、それに、顔が真っ赤になっている。

照れているとは思うのだが・・・もし、怒っていたらどうすればいいんだ？

俺は、真っ赤になって俯いてしまった恵麻を見て、何をしたらいいのか困っていると誰かが教室の前の方から俺に向かって声をかけて

きた。
今、忙しいのに誰だ。先程の奴等だったら・・・。
「有栖君、藍羽さん。今はホームルーム中だから、そういうバカップルみたいなことは後にしてもらえると、私は非常に助かります」
「・・・はい」

ふと、周りを見るとクラス中の視線を俺たちは独占していた。
好奇の視線や憎悪の篭った視線、さまざまな視線が俺たちに向けられているが、大抵は前者のものだ。
担任に注意されたために余計に注目を浴びる結果となってしまったようだ。

・・・こんな状態になってしまったら恵麻だって恥ずかしいに決まってるよな。

俺は、顔を真っ赤にして少し涙目になっている恵麻を見送りながら不憫に思った。
・・・担任が余計なことを言わなければよかったのではないか？
俺がそう思って担任を見ると、意図が伝わってしまったようで無理をした笑顔を浮かべて言った。

「有栖君、藍羽さん。昼休みに職員室に来なさい。・・・全くここにも公私を分けないバカップルがいるなんて。そうね、有栖君は特に私から話しておくべきことも多いし・・・、君だけ来てくれる？」
何か途中によく聞き取れない部分があったが、大方場をわきまえろと言いたいに違いない。
まあ、それ以前にカップルですらないんだけどな。

それに、俺だけって・・・恵麻に非はないとはいえ、納得いかないが普段の行いの差なのかもしれない。
俺も、真面目なほうだと思っているんだがな。

・・・朝から、ここまでついていないなんて、今日は最悪な日だ。
俺は、担任が去った後も騒がしい教室の雑音を無視するべく、眠りにつくことにした。

「景、気をつけて行ってこいよ」
「あんた、バカよね。まあ、自業自得なんだし仕方ないでしょ。あたしたちは、先に弁当食べておくから、気にしないでね」

薄情な幸樹と由真に見送られ、俺は教室を後にした。
皆、俺が朝の件で担任に呼び出しを喰らっていることを知っているので、出て行くときにも暖かい視線があちこちから飛んでくる。
そんな視線を背に浴びながら廊下に出て、階段を降りようとすると、朝、俺の机の周りにいた奴等、それに見たこともない男が数人俺の周りを取り囲むように立っていた。

「・・・今度は何だ？今、俺は担任に呼び出されていて忙しいんだ。くだらない用件なら後回しにしてくれ」

だが、その集団は人の話を聞かないことに長けているようで、俺の話を無視しているようだった。
そして、その中でもリーダー格と思われる男が話を切り出してきた。

「朝は、うちのメンバーが失礼なことをしてしまった。まずは、こ

のことを謝りたい。本当にすまなかったね」

どうやら、この男は今朝の奴等に比べてまだましなようだ。
しかし、この男が話をしている間、周りの奴等は皆直立不動で話を聞いているが、俺の話も同じくらい聞いてもらいたい。

「いや、別に・・・」
「今朝の話の続きなんだけど、よかったらうちの部室に来ないかい？あそこならゆっくりとくつろいで話し合うことが出来ると思うんだ。もちろん、君が望むのであれば1対1の話し合いにも応じよう」
だから、話を聞けと思うが相手は俺の話を完全に聞いていないようだ。
やはり、この集団の中心だけあってスルー能力は高い。

「ということだ。諸君、この方を我が部室へ案内してくれたまえ」
「はいっ！！」
「ちょっと待て、俺は職員室に用事が・・・って、話を聞け！」
こうして俺は、昼間からわけの分からない連中に連れ去られる羽目になってしまった。

「・・・ふむ、では有栖　景君。君は、会いたくもないにも関わらず、我等がアイドル莉子ちゃんに会ったというわけかい？」
「まあ、そういうことだ。むしろ、向こうの用事があったのはエリスの方だ。テレビを見ていたなら分かるはずだ」
「確かにテレビを見る限りでは、そう思う。しかし、納得しないメ

ンバーもいることは事実なんだよ」

片宮　莉子のファンクラブの部屋に来てから１０分は経っただろうか。

何故か、俺は取調べを受けるような状態にあった。

だが、さすがに会長ともなれば話を分かってくれる人物だったようで、俺はファンクラブの会長とすっかり意気投合して、次第に話が横道に大きく逸れてしまっていた。

「確かに君の言うとおり、メイド服は本来ミニスカートであるべきではないはずなんだ。この前、駅の近くにできたメイド喫茶はまさに悪魔の所業、いやメイドというものをバカにしていると言わざるを得ない」

「言いたいことはよく分かる。・・・そういえば、あいつ、あそこでバイトしているんだっけ」

「しかし、うちのメンバーの大半はミニスカート派なんだ。全く、彼らは萌えというものを理解していない。生足はちらりと見えるからいいのであって、ミニスカートではチラリズムというものが足りないのだよ。・・・ただ、目の保養になるということは否定しない」

「最後の部分には、俺も同意するな。でも、ミニスカートは目のやり場に困るんだよな」

この男はこの男でメンバーをまとめるのに苦労しているらしい。

俺たちは何故か、携帯のアドレスを交換したりと本来の目的をすっかり忘れてしまっていた。

だが、なごやかなムードだった会話も長くは続かなかった。

いきなり部屋にノックもなく押し入ってきた男が俺のことを睨みつけると、まるで悪魔でも糾弾するような勢いでまくし立てたのだ。

「会長、こんなハーレム野郎、海に沈めましょうよ。全男の敵だすよ」
「・・・お前、今噛んだな」
「やっぱりこいつむかつく！会長、こいつは沈めるべきです」

小学生と見間違えるような身長、童顔の男は、会長に制された後も俺を威嚇し続けていた。
どうやら1年らしいが、俺のことを指差したり、罵倒したりと手に負えない。

俺は、正直これ以上ここに留まるつもりもなかったのでその童顔の男を完全に無視すると、会長に話しかけた。

「俺はそろそろ帰るか。会長と話している時間は割と楽しい時間だったな。今度は、強制ではなく、お互い身分が関係なく会えるといいけどな。・・・ところでまだ名前を聞いていないな」
「うむ、それはこちらも同感だな。・・・そういえば、まだ名乗っていなかったね。僕の名前は、新螺木　瑠帷　（あらぎ　るい）。片宮　莉子ちゃんファンクラブ2代目会長さ」

俺たちは、何の迷いもなく握手を交わした。
だが、当然それに疑問を持つ奴はいるわけで・・・。

「だから会長。こんな奴にいちいち名乗らなくてもいいんです。それに、今日ここに呼び出した理由を忘れたんですか！？」

俺は、童顔の男が、会長に必死になって思い出させようとしているが迷惑甚だしく感じていた。
すっかり、和やかに会話していたものだから忘れていたが、・・・

昨日のことで俺はここに連れてこられたんだよな。

・・・どうでもいいこと思い出させやがって。

俺にとっては、不本意なことではあるが会長もどうやら本来の目的を思い出してしまったようで、バツが悪そうに頭をかくととりあえず俺に椅子に座るように促す。

外には、ファンクラブのメンバーがいることは、ひそひそと話す声で分かっているので俺は大人しく従うしかなかった。

ここで、出て行ってもメリットなど１つもない。

俺にとっては、完全アウェイのはずの場所なのだが、童顔の男もいざ用件を言おうとすると尻込みするようで、地の利を活かしきれていないようだった。

会長もまたしばらく難しい顔をして思案していたが、ようやくその重たい口を開いて用件を切り出した。

「悪いね、有栖　景君。実は、今日は君にお願いがあったんだ」

そう言って会長は、また口篭ってしまった。

何やら相当言いにくいことのようだ。

「どんな内容なんだ？」

俺が、先を促すと会長は童顔の男と顔を見合わせた。

そして、俺に無言で、本当にいいのかと目で問いかけてきた。

俺が、不思議に思いながらも首を縦に振ると、会長は手を２回叩いた。

すると、部屋の扉がすっと開き、ざっと２０人くらいはいるだろう

と思われる男たちが次々と入ってきた。

「・・・狭いし、暑苦しいな」

そう。この部屋はそこまで広いわけではない。
そんな部屋に２０数人もいれば狭いに決まっている。
それに、男ばかりではむさ苦しいことこの上ない。加えて、整然と俺の前に並んでじっと俺に何かの意図を含んだ視線を浴びせかけてくるのだ。

・・・何を俺に期待しているんだ？

俺が困って会長を見ると、会長は俺の視線の意図を察して苦笑いを浮かべた。

「これは、僕たちなりの君への誠意だと思ってほしい」
「・・・俺のことをもう少し考えてくれると嬉しいけどな」

さすがに、これで何か要求されたら呑むしかないだろうと俺は思う。

・・・１対１なら、もしかすると勝てるかもしれないが・・・１対２０で勝てるのはアニメか漫画くらいなものだ。
さて、どう出るか・・・にもよるが、穏便に事が済むことを祈るしかないか。

俺は、覚悟を決めると大人しく要求を待った。
だが、ファンクラブの奴等は予想とは違い、殴りかかってはこず、いきなり全員で土下座をした。

「お願いします！莉子ちゃんに僕たち宛てのサインをもらえるよう

に交渉してください」
「はあ？」
俺は、気の抜けた返事しか出来なかった。
・・・こういう展開は予想外だ。
「有栖　景君。君だけが頼りなんだ」
「俺の知り合いじゃないし、向こうはエリスに興味があっただけだ」
・・・実は、その前から知っていたなんて口が裂けても言えないな。
俺は、がっしりと両手を握ってきた会長から視線を逸らす。
・・・こいつら・・・俺とあの女が知り合いだと思っているな・・・。
「せめて・・・サインだけでもいいんだ。贅沢は言わない」
「・・・・」
・・・十分贅沢だろ。
「それなら、そのエリスさんにお願いしてもらえないかい？」
「・・・何が目的なんだ？」
せめて用件を言ってくれないと俺も困るんだ。
俺は、相手が何も言わなくても心が読めるとかいったものは生憎持ち合わせていない。
だが、俺は顔に出るタイプだとよく言われるわけで・・・。

「ただ純粋なファン活動なんだ。有栖　景君。君が嫌がっているのは重々に分かっているつもりだ。しかし、是非とも僕たちのお願いを聞いてもらいたい」

・・・分かっているなら聞くな。

「だから、俺は知り合いじゃない！」

「では、せめて貰ったサインをっ！！」

結局、俺は昼休み中このような問答を繰り返すことになった。

だが、何かを忘れているような気がするんだ・・・。

そして、放課後。その答えは、ようやく見つかることになる。

「有栖君・・・。約束をすっぽかすなんていい根性ね」

「・・・？」

「・・・本当に忘れているなんて、都合のいい頭しているのね。・・・」

担任は、頭に手を置いて首を振っていた。

その後もぶつぶつと、三津刃がどうだとか言っているが、きっと知り合いに俺と同じ様に手のかかる奴がいるのだろう。

・・・まさか、あの三津刃さんとは違うよな。

「まあ、いいわ。反省文を書いてきなさい」

「理由は？」

「私の知り合いに似ていて頭に来たからよ。理由は言ったから、明

日までに４０００字書いてきてね」

・・・それは、俺に関係ないことだろ。

俺は、この時ばかりは担任の知り合いを恨んだ。

もちろん俺は、即座に異議を申し立てようとした。だが、担任は俺の異議を聞く前にさっさと教室を出て行ってしまった。

・・・４０００字って、そんなに反省することあるか？

・・・無いな。適当に書けばいいか。そう俺は結論付けた。

そうは言うものの、書くには時間がいるので、さっさと帰らなくてはならない。俺が、席を立とうとすると恵麻がいきなり俺の右手を握り締めて言った。

「け、景君。私も手伝うから、ね？」

「恵麻、気にするな。４０００字くらいならすぐに書ける。担任は、４０００字と言っただけだ。内容までは指定していない」

「景君？」

恵麻はきょとんとした顔をして俺を見ていたが、俺は自信ありげに笑った。要は書けばいいのだ。

俺が笑ったのを見て恵麻も理由はよく分かっていないようだが、とりあえず笑っていた。

しばらく2人で笑っていた俺たちだったが、この様子を見ていた由真が俺たちの目の前で呆れていることに気がついた。その由真はというと、俺たちが視線を向けると待っていたと言わんばかりに悪魔のような笑顔を浮かべた。

「何、2人で見つめ合ってるの？もしかして、・・・あんたたち付き合ってるとか？」
「そ、そんなわけないよ！」
「由真、どこをどう見たらそう捉えられるんだ？いつもと何も変わってないのにな。あ、これか・・・」

由真が指摘したかったのは、手を握り合っていたことらしい。
その指摘のせいで恵麻はまた朝と同じ様に顔を真っ赤にしていた。
こういうからかいに恵麻は滅法弱いが、俺相手で照れてどうするのかと思う。もし、俺のことが好きで照れているなら嬉しいけどな。
・・・ま、恵麻が俺のことを好きだなんて有り得ない話だな。たぶん、他の男と手を繋いだとしてもこうなりそうだ。
あまり想像していて楽しい光景ではないと思うのは、幼馴染だからだろうな・・・。

こうして、俺は朝と同じ様に由真や幸樹、そしてクラスの奴等の好奇の視線に晒されることになったのだった。

「で、これが君の反省ってこと？」
「もちろんです」
「つくづく私の知り合いに似ているのね・・・」

とりあえず、反省という文字で４０００字分埋め尽くした努力だけは認めてくれたようだ。

第５０話：景とファンクラブ（後書き）

本編後の雑談

エ「景様は、もし子供ができたら、どんな名前にしたいとお考えですか？」

景「また、唐突な質問だな」

恵「私も興味あるな～。景君の子供の名前。最初の子供は男の子？それとも、女の子？」

景「・・・そうだな・・・って、２人には関係ことだろ？」

エ「いえ、そのようなことはありませんよ、景様。私は、一生景様と共にあるわけですから」

恵「ええっ！？・・・景君、それ本当なの？」

景「そう・・・だな。・・・何故、そんなに睨むんだ？・・・まあ、いいか。そろそろ帰らないと母さんに文句言われるしな。エリス、帰るか」

エ「はい、景様。それでは、恵麻様。私たちはこれで失礼します」

恵「・・・エリスちゃん、いいな～。・・・あっ、私も買い物して帰らないと。でも、景君はエリスちゃんを女性としては・・・見ていないんだよね？」

外伝６：夢の少女と現実の少女

体育祭を明後日に控えた日のことだった。

それは、しよりが持ってきた雑誌に書いてあったことだ。

「ねえー、景お兄ちゃん。見てー、この本にねー、面白いこと書いてあるんだよ」

「今日は、しよりなのか。ところで、面白いことって何だ？」

見たところ、女性向けのファッション誌で俺が興味を持つことが書いてあるとは到底思えなかった。

だが、しよりがあまり自信を持って勧めてくるので無碍に断ることも出来なかった。

とりあえず、俺がしよりの開いたページを見ると、そこにはこう書かれていた。

素敵な夢を見る方法。これを実践して、あなたも大好きなあの人の夢を見よう。

俺が、本から顔を上げるとしよりがきらきらとした目で俺をじっと見ていた。

しかも、いつの間にか俺に寄り添うようにしてくっ付いている。

「・・・これを見せて、俺にどうしろと？」

「あのね、この夢で見る人はね、うーんと・・・えっと・・・あのね、大好きな人なんだって。だからね、これで夢を見て欲しいの」

どうやら、俺は被験者としてしよりから選ばれてしまったようだった。だが、俺は少しその方法に興味を持った。
・・・俺の好きな人、か。もしかすると・・・あの女の子が夢に出てくるかもしれないな。
そこで、俺は嫌々やってあげる風を装って、しよりに言った。
「そうだな、しよりにはこの前お世話になったし、協力するか。まあ、夢なんていつ見るか分からないから気長に待っていてくれ」
「うんっ」
こうして、俺は雑誌を借りて、その日の夜から実践してみることにしたのだ。

目が覚めると、教室が静まり返っていた。窓の外を見ると、不自然な光で満ちている。そもそも今は一体、何時なんだ？
俺は、時計を見るとその時計は特定の時間を指すことなく回り続けていた。
「・・・何で、この時計・・・逆回りしているんだ？」
だが、誰も答えてはくれない。
ここは、確かに教室のはずなのだ。誰かがいないのは、おかしい。
俺は、不安に駆られた。

このまま誰もいなくなってしまうのではないか、俺1人だけになってしまうのではないかと。

その時だった、目の前に光が集まり始めた。俺はその光が眩しくて目を逸らした。

やがて、その光はゆっくりと消えていき、1つの形となった。

俺はその人に見覚えがあった。

「・・・絵梨ちゃんなのか？」

自然とその名前を口にしていた。

すると、その光は俺が望んでいた通りの形をなって現れた。

―会いに来ちゃった。でも、時間がないから・・・景君、今度は会いに来てくれると嬉しいな。それまで、私待ってるよ。ずっとずっとだよ。約束したから・・・うん、私は大丈夫、平気だよ―

何故だろうか。彼女は、とても明るい顔をしていた。

だが、その笑顔はほんの些細なことで壊れてしまいそうな繊細さを含んでいるように思えた。

―む、さては私が本当に笑っていないって分かるんだね。・・・。・・・私はね、1人は嫌なの。絶対に嫌・・・。私はずっと光の見えない場所にいたの。今も昔も、そしてこれからも。誰も会いに来てくれないし、誰も私のことを見てくれない・・・―

俺は、黙って絵梨ちゃんの話を聞いていた。

話を遮ってしまったら、2度と会えない。そんな気がした。

―もしも、景君。あなたが私を見つけることができたら・・・あなたは誰を選ぶのかな・・・？私たちかな？それともほかの大切な女の子かな・・・―

「・・・」

俺は、はっきりと絵梨ちゃんと言ってあげることができなかった。彼女もまた、そのことを分かっているようでそれ以上追及することはなかった。

ただ、寂しそうに笑った、その顔は心の奥底に深く突き刺さった刃物のように・・・俺の心を痛めた。

だが、そんな笑顔も一瞬のことだったかのように、絵梨ちゃんは再びあの時と同じ笑顔を俺に向けてくれた。

―・・・景君に1つだけアドバイスしてあげるね。景君が必死になった答えも納得しない人はいっぱいいると思うよ。でもね・・・景君だけには後悔してほしくない。人はいつだって選択をしなきゃいけないの。その選択によっては逃げ出すことだってあるし、もう1度会うことだってあり得るかもしれない・・・。そろそろ時間が来たみたい―

「体が光って・・・まさか」

―そうだよ。これは、景君。あなたが望んでできたものなんだよ。ほら見て・・・―

絵梨ちゃんはそう言って俺に光の粒となって消えていく右手を見せた。

よく見ると、手だけではない。足も体も髪も・・・まさに消えようとしていた。

「・・・消えていくってことは・・・俺が望まなくなったからなのか？」

―それは違うよ。ふふっ、理由を知りたい？―

「それは知りたいな」

―それはね・・・景君の想像力・・・うーん、この場合だと妄想力かな？・・・って、景君っ！何で、顔赤くしているの！？―

「いや、そんなことは断じて考えていない」

―嘘だね。・・・それは置いておくとして、今の私はね、景君が創造したに過ぎないの。つまり、性格も容姿もどこかの誰かに似ている。どんなに似ていても、必ずオリジナルが存在するの。でもね、コピーだったとしても月日が経てば、それはオリジナルのコピーじゃなくて、ある1つのオリジナルになるの。・・・ちょっと、難しかったかな？じゃあ、そろそろ私は行くね。・・・これが永遠の別れじゃないよ。だから、さよならは言わないよ。また、会える日を楽しみにしているね―

そう言うと、絵梨ちゃんは光の粒となって消えてしまった。

俺は、何とか止めようと手を伸ばしたが、その手に残ったのは1粒の光だけだった。

「・・・まだ3時か」

俺は、時計を見てそう呟いた。

懐かしい人の夢を見た。彼女は、彼女なのかもしれないし、そうでもないのかもしれない。
それでも、俺は・・・。

「・・・景君。景君ってば～」

誰かが俺の体を揺さぶっている。

だが、それが誰か俺には声だけで分かる。言うまでもなく恵麻だ。

「遅れちゃうよ、景君。・・・起きて、起きてよ～。・・・起きないとぶつよ？」

いつもと声の調子が違ったような気がするが、恵麻のことだ。そんな手荒な事をするはずもない。
俺は、そうたかを括ってまだ寝ようとした。だが、一瞬、舌打ちが聞こえたような気がしたと思った次の瞬間のことだった。

「・・・起きろっ！」

「ぐはっ」

俺は思い切り腹を殴られて床に転げ落ちた。

床に落ちた際に頭をぶつけたせいですっかり目が覚めてしまい、俺は不機嫌に恵麻を見た。

「何？私に意見するの？」

さらに俺よりも不機嫌そうな恵麻がそこにはいた。
腕を組んで床に転がった俺を見下しながら仁王立ちしている。何だか、昔の恵麻を見ているようで俺はつい萎縮してしまった。
幼稚園の頃の恵麻は、今とは違って俺に対して非常に暴力的だった。
まあ、女王様と下僕のような関係だったわけだ。
当時は殴る蹴るの暴行を受けていたわけで・・・。

「あ、いや・・・別に・・・」

頭では大丈夫だと思っているのだが、体が覚えていたようで、何故かしどろもどろになってしまう。

「・・・私、そんなにひどいことしてないよ？ちょっと抓ったりしただけでしょ」
「俺にとってはそれがトラウマなんだ。それに、どこがちょっとなんだ・・・。翌日になっても頬が真っ赤になるまで抓ったくせに」
「景は細かい。だいたい、私に意見しようなんて５０年早い。第一、殴る蹴るって景は大げさなの。あ、あれは・・・私なりの愛情表現なんだから」

・・・絶対、嘘だ。

「な、何？景のくせに私を疑うわけ？」
「・・・そ・・・んなことない」

恵麻の不機嫌そうな目を見ると、どうしても俺は委縮してしまう。
恵麻の横暴さには、さんざん手を焼いてきたのだ。
ああいう目をした恵麻の行動の後始末は、いつも俺がしていた。恵麻が勝手に他人のおやつを食べた時は、俺のおやつをあげ、恵麻が相手を泣かせたら、俺が何とか泣きやませ・・・。
とにかくいい思い出が1つもない。だが、恵麻がああだったのは、昔の話に過ぎない。

これは夢だ。夢に違いない。夢であってほしい。
俺は、思い切りほっぺたを抓ってみた。

「・・・あれ？」

俺は、ほっぺたを抓れば目が覚めるものだとずっと思ってきた。だが、目の前には相変わらず恵麻がいる。見慣れた天井も俺の部屋もどこにも見当たらなかった。
すると、恵麻は、半目で俺を睨みながら、ひどくバカにしたように言った。

「景。今見ているのが、夢だとして、夢の中で自分を抓っても、現実で同じことはするとは限らないでしょ」
「・・・」

恵麻の言葉は俺にとって受け入れがたいことだった。
簡単に言うと目の前の恵麻が原因なわけなんだが・・・。

俺が、はっきりと言うことができず悩んでいると、恵麻は溜息をついてがっくりと項垂れた。
そういえば、昔から恵麻は俺の態度がはっきりとしないと決まって

最終的には溜息をついていたような気がする。

「景。これが、景の夢だとしたら・・・あそこにいる女の子たちはどうなわけ？」

俺は、恵麻の指差した方を見た。そして、そこにいたものを見て俺は絶句した。

そこにいたのは、紛れもなく俺の知り合いというよりも友人たちだった。

縦横どちらも普段の数倍はある由真。

コンピューターの画面に映っている晃。

机に座り、ひたすら勉強をさせられている幸樹。

ひたすら歌を歌っているが、どこかうかない顔の明月院さん。

余計なことを言ったのだろうか？鬼のような形相で希望先輩を追い回している衣先輩。

花に水をやっている美玖。

５人で何やら言い合っている梓依たち。

普段と違う人もいれば、案外普段と変わりのない人もいるな。

その中で俺が特に気になったのは、５人になっている梓依たちだっ

た。
多重人格の全員が見られるのは、夢の中だけのことだからな。
俺が視線を向けているのに気づいたのだろうか。恵麻は、俺の背中をポンと押すとむっとして言った。

「さっさと行けばいいじゃん。あの子たちが気になるんでしょ」
「分かった。じゃあ、また明日な」

俺は、幼稚園の頃と変わることのない挨拶を恵麻にすると背を向けて歩き出した。
恵麻は、俺が顔色を伺うとさらに機嫌を悪くしたものだった。
だから、はっきりと言った方がいいのである。

だが、どうしても恵麻の様子が気になって仕方ないので、一瞬振り返るとそこには2人の恵麻が向かい合っていた。
1人は、悲しそうに目を伏せていて、もう1人はにこにこを笑みをたたえていた。

恵麻と別れ、俺は5人に近づいた。
すると、何故か喧嘩していることが分かった。聞こえてくる声を聞いてみると・・・。

「へえ？子供ができたんだって？偶然だね、ボクもできたんだ」
「ええっ！？紫もなの！私もなんだよ、ほんとに偶然だねー」

どうやら2人は子供が同時にできてしまったようで、何だか楽しそうに話している。

「・・・私もできた」
「あ、うちもや」
「ワタシもー」

・・・おい、全員かよ。

俺は、何故か5人いても誰が誰だかはっきりと分かっていた。
そう。見た目には、同じなはずなのだが雰囲気の違いというのが分かるのだ。

いや、普段から何となく分かっているような・・・。

俺がぼんやりと考え込んでいると、梓依が俺に気づいたようで、何故かとても嬉しそうに小走りでやってきた。

「景先輩」
「・・・？」

ただ俺の名前を呼ぶだけなのにどうしてそんなに嬉しそうなのだろうか。
俺が、首を傾げていると梓依は、お腹を優しく撫でながら衝撃的な言葉を言い放った。

「実はね・・・あの・・・。・・・景先輩との子供ができちゃいました！」
「・・・悪い。もう1回言ってくれないか？」

梓依の言っていることが分からなかったわけではない。
ただ信じることができなかったのだ。そもそも、子供ができるようなことをした覚えがない。

きっと頭がおかしくなったのだろう。俺が可哀想なものを見るような目で見ていると梓依は、少しむっとした顔をした。

「景先輩は嬉しくないの？」

「いや・・・その・・・嬉しいとかそういうのじゃくて、何故俺の子供って分かるんだ？」

「えっ、だって想像妊娠だよ。もしかして、本気してた？」

梓依は、まさか引っかかるなんてと言わんばかりの顔して俺を見ていた。

梓依が、そう言うと他の４人はつまらなさそうにこちらへとやって来ると口々に梓依に不満をぶつけた。

「・・・梓依、面白くない」

「ボクはもうちょっと景先輩が困る顔を見ていたかったのに・・・」

「うちは、どうでもいいけど」

「うー、つまんないっ」

いや、俺は本気で焦っていたんだが・・・。

とりあえず、そうでないと分かっただけでほっとした。

だが、梓依は爆弾をさらに投下する。

「でも、子供ができることはしましたよね？」

その発言に驚いたのは、俺だけだった。・・・わざと丁寧に言いやがって。

俺だけは首を横に振るが、他の４人は、頬を赤く染めながらもその

言葉を黙って首肯する。

このままだと、俺は5人と関係を持ったということにならないか？
いくら夢でもそれは有り得ない。

「ちょっと待て。俺はそんなことはしてない」
「・・・激しい夜だった」

「してない」
「ボクは、男の子がいいな」

「いや、だからしてない」
「うちも無理矢理・・・」

「何故照れる！？だから、俺がお前らに何をした？」
「うーん・・・でも、子供はこうのとりさんが運んでくるってみんなが言ってたよー」

ここまで会話って噛み合わないものなのか？

俺は、話しているはずの相手が全く話を聞いてくれない現状に頭を抱えたくなった。
だが、現実・・・いや、これは夢なわけだが・・・。まあ、それは置いておくとして、この状況はさらに俺を窮地へと追い込むことになっている。

「け、景先輩・・・。そ、そんな・・・信じていたのに、そんなことする人じゃないって信じていたのに・・・」

まさに、美玖だった。

畜生か外道か、はたまたゴミか汚物か。そんなものを見るような目で俺のことを見ているのだ。
しかも、その後ろには巨大な人食い花がそびえ立っている。何故、人食い花って分かるか？

それは、その花が明らかに俺を見て涎をたらしているからだ。しかも、昔の某兄弟ゲームにいた土管から出てくるものにも似ている気がする。
いや、どちらかというと8作目の状態異常のバーゲンセールの奴かもしれない。

・・・そんなことを考えている場合じゃない。

俺は、現実逃避しそうになる自分を懸命に押さえ込んだ。
そう、ここは俺の夢だ。俺が思うとおりになるはずだ。
願えばきっと、この化け物も倒せるはずなんだ。俺は、まるで餓鬼の発想のような考えに至った。

たぶん、これが夢だからこんな結論に至ったのだろうと、俺は化け物に向かっていく中で思った。

「きゃあっ」

・・・？

何か化け物の声にしては妙に女のような声をしているな。
それに、何だか柔らかいし、いい匂いが・・・。
「け、景様・・・。あ、あの・・・急にそんなことを・・・」
この声は・・・エリス？
・・・・。
・・・。
俺は、嫌な予感がしてそっと目を開いてみた。
すると、俺はベッドではなく床におり、しかも何故かエリスを押し倒している状態だった。
エリスは、頬を紅潮させており、何だか息遣いが荒い。
それに、俺の手が置かれているのは・・・エリスの胸の上だったりする。
たぶん・・・いや、絶対触っていたんだよな・・・。
・・・やばいとかそういう問題じゃないだろ！？
俺は、慌ててエリスから飛びのくとその場で床に頭を擦り付けるようにして謝った。
「エリス、何が起こったのか、よく分からないと思う。だけど俺もよく分かっていない。って、これじゃあ謝ってないじゃないか！！」
「景様、落ち着いてください。た、確かに景様は私にべったりと甘

えていらっしゃいましたが・・・悪い気はしませんでしたから」
そうは言うもののエリスは俺と視線を合わせようとはしなかった。
もしかして、嫌われた？・・・普通は、嫌うに決まってるよな。
何か言い訳やら弁明やらをするべきなのだろうが、エリスは俺と話をしたくなさそうだった。

それから、俺はベッドにもたれ掛かり、エリスはドアに寄りかかってお互い会話もなくただ過ごしていた。
時計のカチッカチッという音だけがそれほど広くはない俺の部屋に響いていた。

だが、いつまでもこうしているわけにもいかない。
意を決して俺が話しかけるとエリスは意外にも普段とあまり変わることなく応対してくれた。
ただ、１点だけを除いては。

「・・・景様。その・・・溜まっていらっしゃるのですね。私でよければ・・・」
「それ以上言わなくていい。だから、寝ぼけていただけだ。そもそも俺は、エリスにそんな感情は持っていない」
「はい、分かっています」

エリスは、そう言って悪戯っぽく笑った。・・・本当に分かっているんだろうな？
俺は、エリスの考えがよく分からず曖昧に笑っておいた。

その日の、昼休みのこと。
俺が1人で弁当を食べているとその前には、期待の眼差しで俺を見つめる梓依の姿があった。
何でも、昨日の夢の内容を聞きに来たらしい。

だが、あの夢で俺は何人もの知り合いが出てきている。
その夢に出てきた人は、俺が好きな人らしいが、どういう意味なのだろうか。
梓依は、夢の内容を聞きたがり何度も俺にせがんでくる。

それを、周りの奴らは面白半分に見ているのだから堪ったものではない。
ここ最近、俺は何かと災難に巻き込まれることが多いのだ。

これ以上、余計な問題を起こすのも難なので梓依を手招くと、その耳元で梓依にだけ聞こえるくらいの声で言った。

「夢の中の梓依は、想像妊娠をしたと言っていた」
「え、えーと？景先輩・・・は、一体私をどういう風に見ているの？」

・・・ドン引きじゃないか。俺は、馬鹿正直に言ってしまったことを後悔したが、もう遅い。
せめて、5つの人格と会話したと留めておけばよかった。
俺はそう思った。だが、梓依はすぐにいつものように笑い、軽口を叩いた。

「もしかして、景先輩・・・私がそんな冗談を言うと思ってるの？そんなわけないよ。・・・でも、もしできたら・・・子供の名前考えてくれる？」
「ん？もうそんな相手がいるのか。とっておきの名前を命名するからな」
「え？相手なんていないって。・・・景先輩がその相手になってみる？」

その言葉を聞いた瞬間、俺は口の中にあった飲み物を目の前の梓依に吹いてしまった。

「うわっ、景先輩汚い。ギャグ漫画じゃないんだから、顔にかけないでよ」
「・・・本当にごめん。これを使ってくれ」

俺がスポーツタオルを差し出すと、梓依はそれを受け取り顔を拭き始めた。
しかし、飲んでいたのが牛乳ではなくただのスポーツドリンクでよかった。
・・・牛乳は臭いんだよな。

俺が、現実逃避しようとそんなことを考えていると、顔を拭き終わった梓依がしれっととんでもない事をまた口走った。

「でも、顔にかけられたって何だかエロいよね。って、景先輩むっつりだね、顔が赤くなってるよ」
「・・・もう2度と来るな」

周りの視線がただただ痛い昼の出来事だった。

梓依は、夢の中でも現実でも俺を追い込むことが好きなのかもしれない。まさに正夢だな。

外伝６：夢の少女と現実の少女（後書き）

本編後の雑談

景「衣先輩たちは進路はどうするんですか？」
衣「藪から棒ですわね」

希「私は、ジャーナリストになって世界を飛び回るよ。それで、いつかはピューリッツア賞を取るのが夢だから、卒業したら海外留学をしようと思うよー。それで・・・」
景「・・・希望先輩、いつになくテンション高いですね」
衣「有栖さん、希望さんは夢を語ると長くなるのですわ」

景「ところで、衣先輩の夢は何ですか？」
衣「わっ、私っ！？・・・そ、そうですわね・・・ところで有栖さんは？」

景「俺は・・・分からないですね。とりあえず、今しか考えてないですし」
衣「でも、それが普通だと思いますわ。私も今を大切にしたいと思いますもの」

希「ということなんだー」

景「・・・まだ話していたんですか」

第５１話：体育祭～始まり～

体育祭当日の朝。

今日は、頭にくるくらいの天気だった。日本全国が高気圧に覆われて晴れ。その上、今年一番の暑さだというのだ。
そんな日に体育祭とはついていない。

そして、高校の体育祭は中学の体育祭とずらして野球のグラウンドで行われるのだ。
あそこには影になるものがほとんどない。１日中、炎天下のもとで動き回り、応援をしなくてならない。

俺は、この後のことを思うとどっと疲れが増してくるような感覚を覚えた。

玄関でいつものように見送るエリスに俺は、言い聞かせるように言った。

「エリス。俺は何度も同じことは言わない。分かっているよな。いってきます」
「はい、景様。お任せください。いってらっしゃい」

数日前からしつこいくらいに俺はエリスに言い続けていることがあった。
何日も言っているし、それに言い続けることにもそろそろ飽きていた。
だから、いつもよりも短い確認しかしなかった。

そして、俺はいつもと同じように家を後にした。

「どうだった、エリスちゃん？」
「はい、景様は来るなとおっしゃいませんでした。ただ、分かっているよなと」
「そう、なら安心ね。じゃあ、エリスちゃん、早く準備して。景ちゃんの応援に行くわよ」
「はい。すぐに支度します」

景がきちんと言わなかったことと、柚葉により景の計画は早くも崩壊していたのだった。

「・・・面倒だ」

俺は、校長の話を聞きながらそう漏らしていた。
暖かいというよりも、若干暑いと思えるこの日。
その中で、何を考えているのか校長は体育祭とは明らかに関係のない自分の孫の話を始めたのだ。

「私の孫は、去年の運動会で1番になりました。孫の頑張る姿は私に大きな力を与えてくれました。是非とも、皆さんには私の孫に負けないくらい頑張ってもらいたいものです」

そう言って校長は話を終えた。

だが、皆、話をまじめに聞いているわけもなくある者は友人と談笑。
また、ある者は座り込んでいた。

そして、俺はというと・・・。

「本当に長い話ですわね。話が無駄に長い人は無能だとお父様もおっしゃっていましたわ」
「・・・それを是非校長に進言してほしいです」

衣先輩と校長をそっと批判していた。
だが、批判の対象が目の前から消えてしまったので、自然と話題も別のものに移ってしまう。

「ところで、有栖さんはご家族は応援にいらっしゃるの？」
「ええ、まあ。両親が来ます」
「でしたら、頑張っている姿を見せないといけませんね」

俺は、衣先輩にそう言われ黙って頷いた。

・・・先輩。目が怖い。

こうして、体育祭が始まることになった。
開会式の時には、既に生徒の親などの見物人によって、校庭は人で溢れかえっていた。

今日が、いつもに比べて暑いということもあるのだろう。
団扇や扇子で自分を扇ぐ人の姿もちらほらと見受けられる。
聖蓮学園の体育祭は、規模としては大きく各学年１０００人近くが参加する。

もちろん全ての生徒が参加するわけだが、その中には競技に出ない奴だっている。
そういった奴は例えば、運営や案内、放送、そして準備片付けなどする。
それはくじ引きで決まるために、俺は運がなかったということになる。

どうでもいいことだが、この体育祭は学校最大級のイベントの１つであり2日間に渡って行われる。
一部保護者からは反対の声もあるというが、元々学校紹介でも大々的に載っているくらいなのだから、入学しなければいいだけの話だと俺は思う。

どこにでもクレーマーというものはいるということだろう。

「あー、だるい・・・」

俺は、炎天下の下ですっかり参っていた。他の事を考えて気を紛らわせていたのだが全く効果がない。
一昨日までは割と涼しく過ごしやすかったのだが・・・。

しかも俺たちの色は影になる場所が全くない。だが、他の色にもそれは言えており日焼けにしないように日焼けクリームが必須な状態だった。
そのような中、最初の競技が始まるまで時間があるということもあり、俺は幸樹と無駄話をしていた。

「お前すっかりだれてるな」

「幸樹。自分の色に戻らなくていいのか？」
俺はそう言うが、幸樹が戻ってしまうと暇になるので別に帰ってもらいたいわけではない。
「ところで、景。エリスさんは応援に来ているのか？」
「いや、騒ぎになるだろうから来ないように言っておいた」
「そうか・・・」
幸樹は、残念そうな顔をしていたが俺の立場が分かるようでそれ以上何も言わなかった。
何故、メイドにこだわるのか、理由を聞いてみたいものだ。
だが、幸樹がここに来た理由は俺と話すためではないということは知っている。
「今年もこれがほしいんだろ？」
「悪いな、景。３つも競技に出るって聞いたからよ。うちの部活、今年は結構やばめなんだよ。２人運営に持ってかれたんぜ」
「・・・ご愁傷様・・・としか言いようがないな」
この学校の体育祭では、成績によって部費の一部が決まってしまうために、部・同好会の奴等は必死になる。
そして、この学校は全員部活動に所属しなくてはならず、帰宅部員はいないはずなのだが、一部俺のような帰宅部員がいることも事実だ。
その帰宅部員に対しては、その成績をクラブの成績に上乗せすることができる。
俺が幸樹に渡したのは、そのための書類というわけだ。去年も協力

しているが、実際には大した上乗せにはなっていない。
それでも、無いよりはましといったところなのだろう。
俺が書類を渡すと幸樹はそれを４つ折りにしてズボンの後ろのポケットに無造作に突っ込むと再び俺の隣に座りなおす。

「今年も悪いな。ところで、景」
「何だ？」
「さっきからずっとお前の後ろで女の子が声をかけようかどうか迷ってんぞ」

幸樹が指さす方を見ると、そこには幸樹と同じ緑の鉢巻きを巻いた女がいた。
いつも以上におどおどとしているために、挙動不審に見えるその女に俺は呆れつつも声をかけた。

「・・・美玖か。幸樹でも連れ戻しにきたのか？好きに持っていっていいからな」
「い、いえ・・・違います。わ、わたしは体育祭には参加しないのでお話でもしようかなと思ったので。・・・も、もしかして・・・お暇じゃないですか？」
「いや、そんなことはないな。暇だからこうして幸樹と話をしていたわけだし、美玖も暇なら仕事があるまでゆっくりしていったらいいんじゃないか？幸樹も構わないよな？」

しかし、俺の言葉に幸樹は全く返事をしなかった。
尻に俺が折角書いて渡した書類を敷いている幸樹を横目に見ると予想通りの反応を示していた。

「やっぱり女子の体操着は最高だよな？」

「・・・俺に同意を求めるな」

表面上興味無さそうに答えたが、確かに、美玖は背は小さいものの出る所は出ている。
普段の制服ではよく分からなかったが、体操着が多少小さいようでそのスタイルの良さが際立っていた。

・・・興味がないわけではない。

ただ、幸樹が凝視しているせいだろう。美玖はその視線に恥ずかしそうに身をもじもじとさせている。
隣に反面教師がいるのに同じことはできない。

「・・・幸樹。とりあえず視姦はそれくらいにしておいた方が無難だと思う。性犯罪者は再犯率が異常らしいからな」
「俺は、性犯罪者じゃねえよ！」

そう幸樹が反論した時だった。美玖の更に背後から俺たちに向けて誰かが声をかけてきた。

「やあっ、紳士諸君。朝からお盛んだね。僕としても、この天国のような場所を堪能しているところだよ」
「・・・お前は、今すぐ自分の色へ帰れ」

言うまでもなくその人物は大助（へんたい）だった。
喜々として女子の体操着姿を写真に収めているが、目の前にいる美玖に気がつくとまるで友達であるかのように声をかける。

「そこの君もそう思うだろ？」
「ひゃあっ！？」

だが、美玖の肩にポンと手を置いたものだから美玖が完全に怯えて俺と幸樹の後ろに隠れてしまっていた。
大助は女子とみれば、見境なく声をかける上に、たまに触ったりするものだから問題だ。
しかも、全く反省しないし、何故か退学や停学にもならない。本人曰く、ギャグだからと言うが意味がよく分からない。

「いやあ、それにしても景の後ろにいる女子はロリなのに、ボイン。このアンバランスさが堪らないね」
「・・・この変態が」

幸樹はそう吐き捨てるが、先程まで似たような行動を取っていたお前の言うことじゃないと俺は思う。
まあ、俺も言える立場ではないわけだが・・・。

「大丈夫か？悪いな、変態ばかりで。こんなんでも普段はいい奴だから、適度に距離を保っていれば害はないはずだ」
「え、あ・・・えーと・・・そ、そうですか・・。あ、あの・・・わたし・・・お邪魔でしたか？」

美玖は男慣れしてなさそうだから、戸惑うのも無理はないと思う。
幸樹は俺と大して変わらないから話もできるだろうが、大助はこの学校で名前を知らない者はいないくらいだ。
美玖の大助を見る引き攣った表情からも、1年の間でも噂が確実に広まっていることを窺い知ることができる。

「邪魔なのは、大助の方だから美玖が気にする必要はないと思う」
「そうですか、よかったです。あっ、友達が来たのでそろそろ行き

ますね。また、時間があったら遊びにきます」

美玖は、友達らしき2人の女の子に手を振りながら歩いて行った。どうやら、友達同士で準備に回っていたらしい。その友達から腕章を渡されている所を見る限り、準備担当のようだ。遊びに来る余裕なんてないだろうし、友達と遊んでいた方が楽しいに決まっている。

「お前が来たせいで、美玖ちゃん帰っちゃっただろ！ああ、高校生であれだけの胸があるなんて貴重なんだぞ。折角の目の保養がっ」

「はっ、笑わせんな。俺はもともとここにいたんだよ。つーか、そんなこと大声で叫んでるんじゃねえ！！」

・・・それ以前に、これでは寄り付きたくもないよな。

美玖の胸をことを大声で叫ぶ大助と、それに構ってしまっている幸樹。

俺は、2人の関係者と思われたくないのでその場をそっと離れると校門の方へとぶらりと歩いてみることにした。

まだ、俺が出る午前最後の競技、借り物競走までは時間がある。

それに、友人の出る種目はまだ先の話だ。応援も点数に入るのだが、それはあくまで応援合戦の時の話。それまでは割と自由なために真面目に応援する奴もいれば、俺のようにふらついている奴もいる。そういう奴は大抵他の色にいる友人と会話をしていることが多い。本気でサボる奴は不思議とそういない。

そのためにいつもならだだっ広く見える校庭も、今日だけは狭く感じる。

人混みを掻き分けて校門の方へと進んでいくと、すれ違った2人組

の男の会話が聞こえてきた。

「でもさあ、可愛かったよな、あの子。何か、片宮　莉子ちゃんに似てなかったか？」

「んなわけねーよ。確かに似てたけどよ、あれは違う。デビュー当時から彼女のファンである俺が言うんだ、間違いない」

片方の男は妙に自信たっぷりだったが、あれはファンクラブの奴だろう。

多少気になる話ではあったが、本人が来るなんてことはあり得ない話だ。あの女をテレビで見ない日はないくらいなのだから。

アイドルの話を適当に聞き流した俺は、当初の目的通り校門へとやって来ていた。

校門は、子供の応援に来ている親や俺と同じようにうろついている学生や受付の学生などでごった返していた。

皆、熱いのか団扇で扇ぐ姿も多く見受けられる。

これでは、外に出るのは面倒だな。俺はそう思い、受付を何気なく一瞥して帰ろうとした。

だが、その先に銀髪の見慣れた後姿を見つけてしまい、思わずもう1度、今度はその場所を凝視する。

「ん？あれは・・・エリスなのか？」

後姿で、しかも洋服ではあるが、それはどう見てもエリスそのものだった。

そして何故か、受付にいる女と何やら楽しげに会話をしている。

俺は何だか頭が混乱してくるのを感じ、冷静に今の状況を分析してみようとしてみた。

・・・銀髪なんてそうはいない。それにエリスしか見たことない。

・・・でも、俺は来るなとしつこく言ったはず。それにメイド服じゃない。

そういえば、外に出る時はメイド服はやめろと言った。それに、あの服は少し前に一緒に買い物に行った時に買った服だ。

詰まる所・・・あれは、エリスだ。

そう結論付けて身を翻そうとしたその時だった。エリスが俺に気づいたようで会話を切り上げて俺の方へとやって来た。

「景様。応援に参りました。景様のお父様、お母様もいらしてますよ」

「・・・エリス。俺の言ったことを聞いていなかったのか？俺は来るなって言ったよな」

こんな所で大声で怒鳴るわけにもいかず、俺はエリスを引き寄せると顔を近づけて小声で喋った。

エリスもまた意味無く俺に顔を近づけ息がかかりそうな距離で囁く様に話す。

「ですが、お母様は景様が朝おっしゃっていなかったので、それは許可してくれたと・・・」

・・・母さん・・・わざとだ・・・。エリスの言葉で俺は確信した。だが、それ以上に俺よりも母さんの言葉を信じるエリスに少々がっかりとし、エリスから離れると俺は投げやりに言った。

「分かった。別に帰れとは言わない。ただ、あんまりうろうろするなよ。後、知らない奴にもついて行ったらダメだ。この２つを約束できるなら構わない」

「景様。私は子供じゃありません。ですから、ご安心ください」

エリスは、いつものように優しい笑みを浮かべる。その笑顔は、温和だとか母性的だとか感じるはずなのだが、今日に限っては黒い笑みに見える。

「・・・わざとじゃないよな？」

「何がでしょうか？」

俺の呟きに小首を傾げる様子を見る限りでは、何も考えていないようだ。

そのことを確認できたことで、少しほっとしている辺り、エリスは清純でいてほしいという自分勝手な思いがあるのだろう。

「・・・随分と毒されたもんだな」

この言葉も何度思ったことか。

「毒された！？景様、今すぐ病院に・・・」

「冗談は存在だけにしておこうな」

エリスに遠慮することなく冗談を言うようにもなった。

「えっ？わ、私の存在は・・・冗談だったのですか」

だが、まだきちんと互いのことを理解はできていないようだ。
俺もエリスのこともよく分からず、今日みたいに落ち込ませてしまうこともある。

「い、いや・・・それは言葉の綾ってやつだ。そ、そんなに落ち込むな。エリスは、俺にとって家族だし、大切な存在だと思ってるって」

そんな時は、こうやっていつも必死に言い繕ってその場を凌いでいる。
家にいれば、母さんに何言われるか分からないし、それ以上に一緒に住んでいるにも関わらずギスギスとした関係になるのは嫌なのだ。

エリスは、俺に言われたことを真に受ける傾向がある。

帰れと言ったら帰るだろうし、メイド服が正装の国があると言っても信じるだろう。
だからこそ、エリスが俺の意図と違うことを思ったのなら、必ず訂正しないといけない。

・・・が、俺はここがどこであるかをすっかり失念していた。

「あれ？もしかして、あれが有栖んとこのメイドかあ」
「ええっ、初めて見たけど・・・美人なんだね」
「前にも学校来てたよね。私見たことあるし」「ふーん、まじで。外人みたいじゃん」

少しの間しか話をしていなかったはずにも関わらず俺とエリスを数人が遠目に眺めていた。
ここは、体育祭中の校庭。高校３学年が集う場所。当然、辺りは人だらけだ。

「いいよなあ、応援に来てくれるのかよ。何で俺んちに来なかったんだ！！」
「・・・あいつ、潰してもいいのかな」

誰だ、潰すとか言った奴は！？

３６０度全てを見回してみるものの、それらしき影は見えない。
俺がきょろきょろと周りを気にしていたことを不思議に思ったのだろう。

「あ、あの・・・景様。先程のことなのですが・・・冗談ですから。私も景様と１か月共に過ごしています。その・・ですね・・・私だって冗談くらい言いますよ？だから、これでおあいこです」
「・・・ああ、そうだな」

エリスが心底楽しそうな笑みを浮かべていた一方で、俺はあることを考えていた。

次に教えなくてはいけないことは、場を察するということだと。

第５１話：体育祭～始まり～（後書き）

本編後の雑談

大「私事ではあるが、理想的な女の子との出会いＴＯＰ３を発表したいと思うのだよ」

景「・・・勝手に発表すればいい」

大「ふむ。では第３位から。・・・幼馴染」

幸「つーか、それベタ過ぎるだろ。しかも幅が広すぎる」

大「そうか？エロゲには大抵いるのだが？」

幸「エロゲかよ！？」

晃「それで、他は？」

大「ふむ。では第２位は・・・・・・ツンデレ」

晃「・・・」

大「何だね、その憐れむような目は？」

晃「それもエロゲなんでしょ？」

大「それは断じて違う。俺の近くにいるではないか、綾が・・・」

綾「誰がツンデレなのよっ！！」

大「ぐへえっ！！」

景「・・・」

綾「このバカは、ほっとくとロクなこと言わないんだから。悪いけど、ちょっとこのバカ借りるわよ」

景「・・・あれが、噂のツンデレってやつなのか？」
晃「僕に聞かれても困るんだけど」
幸「俺には、デレの部分が見えないぜ」

第５２話：体育祭～遭遇～

何故、俺はあの時、会って間もないエリスに同情なんてしたのだろう。

体育祭の競技が始まってからも俺は、何故かそのことをずっと考えていた。

・・・エリスが泣いたから？

・・・それとも、美人だったから？

・・・いずれ居場所がなくなってしまうというエリスを哀れに思ったから？

どれも答えであり、答えでないような気がする。

ただ、１つだけ言えることがある。

エリスじゃなかったら、俺は家にいてもいいとは言わなかったと思う。

・・・何故、俺はエリスだからいいと言ったのか。

「こらあっ、しっかり走れっ！！部費のためだあ、そいつには負けるなあっ！！」

「１年っ！！負けたら１０００本ノックだからな！！！」

「きゃあああっ、新螺木クンかっこいいーーっ」

だが、こんな煩い場所で物事を考えるのは無理だ。

・・・まあ、ただの気まぐれだろうからな。

エリスが来たせいで余計なことを考える羽目になったなと他人のせいにしていると、隣に座っている幸樹が俺の肩を軽く揺すった。

「景。お前、応援しなくていいのか？」

「ん？次の競技は何だ？」

「女子の１００メートル走だぞ。お前のとこの霧生先輩が出るんだろ？それにもう始まってるぜ」

幸樹は、そう言うと再び校庭の中心へと視線を戻した。

俺も、とりあえず校庭へと視線を向ける。

既に女子の１００メートル走は始まっているらしく、数組が終わって座って談笑している姿も見受けられた。

点数を見ると俺の色は、３位とまずまずといったところだった。トップとはそう差はないので十分に逆転は可能な範囲だった。

・・・万が一、優勝できなかったら衣先輩に何されるか分かったものじゃない。

それが、黒組をよくも悪くも纏めているのだ。

「俺は生きて帰ることが出来るだろうか？」

「やっぱり女子の競技は最高だと思わないかね？」

「ビデオカメラはやめておけ。どう見ても犯罪者だ、お前は・・・」

シリアスな雰囲気を出そうとしてみたものの、大助の言葉で一気に台無しになってしまった。
こいつの言葉にはつい反応させられる何かがある。そして、こいつは人を引き寄せる力も持っている。良くも悪くも・・・。

「ふっ、犯罪者ではないさ。まだまだ皮を被っている君達には分かるまい」
「て・め・え・もだろうがっ！！」

もちろん、大助が注意されたくらいでやめることはないのは重々承知している。
言い方がむかつくのも仕方がない。

だが、俺は先に憤る幸樹を抑えにかかった。

「幸樹。大助の言葉に反応したら負けだ」

だが、大助に牽制球を1つ投げておくことも忘れなかった。

「大助。後ろだ、後ろ」
「今、ナイスバディの子が走ってるから後で・・・、っ！？ちょっ、まっ・・・」

俺が忠告してあげたっていうのに、人の話を聞かないからだ。
大助の後ろにいたのは、蓮華先輩と知らない女だった。

「はいはい、話は部室でゆっくりと聞いてあげるかねえ」
「変態め。今日こそ断罪する」

先程から俺は気づいていたのだが、２人はずっと大助の様子を観察していたのだ。
俺は友人の好として助けようとはした。だが、聞かなかった大助が悪い。ただそれだけのことだ。

「一応、忠告はしたからな」
「こっ、この裏切り者おおおおっ！！アイルビーバアアアアック！！！」

大助は恨みがましい目を俺に向けていたが、俺は軽く無視すると何事もなかったかのように応援を始めた。

応援を始めた。そこに違和感を感じたのは他でもない幸樹だった。

「・・・景。お前、結構鬼だよな。それに、急に応援するとか、不自然すぎるだろ」
「やっぱり不自然だったか。でも、ああでもしないと俺たちまで変態の仲間入りだ。大助には人柱になってもらうしかない」
「ちょっと待て。その前に俺たちは何もしてないぞ。って、いつもこんな感じだからなあ。ま、いっか」

こうして俺たちは、１人の友人の尊い犠牲によって名誉を守ったのだった。

「貴様らは、本当に友達がいのない奴だな」
「そうは言うけど、君が彼らの立場なら助けたというのかい？」
「・・・それはない。僕も自分の名誉は大切だからね」

大助が連れていかれてから、すぐのこと。
何故か、すっかり大所帯となっていた俺たちは、応援などそっちのけで先程のことを話していた。

初めは、俺や幸樹のことを竜馬や光が批判していたのだが、有斗先輩の一言によって風向きは変わり、全員一致で俺たちの判断は間違いなかったということになった。
大助からすれば、本当に友人なのかと言いたくなるだろうが、皆、自分の身を守ることが最優先なのだ。

「ところで、貴様。今日はエリスさんはやって来ているのか？」
「せめて苗字で呼んでくれ。・・・どうでもいいけど。ああ、来ているさ。まあ、頑張っていいところを見せればいいんじゃないか？」

どうせエリスは見ていないだろうけどな。そう続けそうになったが、辛うじて俺はその言葉を飲み込んだ。

「おっ、景。来てるなら早く言えよ。よっしゃ、いい所見せるぞ」
「ふっ、貴様などエリスさんが見るはずもないだろう？僕の後ろでせいぜい足掻くがいいさ」

だから、お前らのことなんて見てないって・・・。第一、竜馬に関しては話をしたことすらない。
別れ際のエリスと会話を思い出してみても・・・。

「今日は景様の応援をしっかりと務めます。あ、恵麻様と由真様の応援も忘れないようにしないといけませんね。えーと・・・他に応援した方がよい方はいらっしゃいますか？」
「・・・幸樹とか晃がいるけど、今日と明日は敵だから応援しなく

ていい」

「敵・・・ですか？分かりました、今日と明日は会っても無視すればいいのですね。ところで、景様？体育祭というものは悲しいです。敵をたくさん作らないといけないなんて・・・」

「・・・そうじゃないが・・・もういいか。とりあえず、体育祭はチームに分かれて優勝を目指すものなんだ。だから、自分のチーム以外は全部敵。言い換えると、ライバルってところだな」

「分かりました。景様は他の色に勝たなくてはいけないのですね。それならば、私は景様だけのことを一生懸命応援させていただきます」

ほぼ完璧に思い返してみても、エリスは2人について触れていない。むしろ、俺が止めているような気さえする。

だが、そうは言っても、2人が応援してくれと言えば、人の好いエリスのことだ、きっと応援するんだろう。

エリスが2人を応援する姿を思うと何か釈然としないものを感じるのは、どうしてだろうか。

その気持ちに何となく見当はつくが、はっきりとさせるのもまた癪に障る。何だか、そこのエリス　（メイド）のことが好きな2人と同類になりそうだからだ。

ところで、2人はエリスがどこにいるのか知っているのだろうか？そう考えた時、俺もどこにエリスたちがいるのか分からないという事実に気がついた。

校庭中を見回してものの、こう人が多いと普段は他人よりも目立つエリスですら見つけることは容易ではない。

少しの間、エリスを探すことを試みた俺だったが、面倒になってしまい背もたれに寄りかかって目を閉じた。

「景。そろそろ先輩が出てくるんじゃない？」

その晃の声に俺は視線をスタートラインに向ける。

そこには、衣先輩が周りの歓声に手を振って応える姿があった。何だかんだ言っても、衣先輩は、この学校での人気は割と高い方だ。特に女の人気は高い。反面、男の人気はいま１つだったりする。一部、熱狂的な信者もいると聞いたこともあるが真偽は定かではない。

ただ俺が思うに衣先輩の人気は去年の立て篭もり事件の解決によるところと、元々の裏表の少ない性格によるはずだ。この事件は、去年の秋に起きたものだ。簡潔に言うと、刃物を持った痴漢、所謂、不審者が学校へ逃げ込み、人質と共に数時間立て篭もった。

その時、人質となったのが他でもない生徒会の面々というわけだ。

俺は、最初の人質として連れ回されたという苦い記憶が残っている。

この事件がなければ、俺が生徒会と関わることなんてなかっただろう。

その後、紆余曲折を経て、衣先輩が犯人を叩きのめして事件は無事解決した。

元々の人気のある先輩ではあったが、更に事件やその他の武勇伝によって人気を不動のものとしている。

「リーダーッ！！負けないで！！」

「霧生！霧生！」

「せんぱーーーいっ。頑張ってくださーーーーいっ！！！」

そして、その衣先輩が出てきたことで黒の応援は一段と盛り上がっていく。
その反面、俺たちはというと騒がしくなった黒の応援席から離れた木蔭へと移動していた。
黒色の奴らが前に集まりすぎて、全くと言っていいほど前が見えず、俺たちはもともと応援する気もなかったが、追い打ちをかけられてしまったのだという尤もらしい理由をつけてはいるが、皆真面目に応援する気など端からないのだ。

「でもさー、景。女の子が走っている姿ってこうぐっとくるものがあると思わない？」
「珍しいな、光がそんなことを言うなんて。俺は、お前は男が好きなんだと思っていたんだが」
俺がはっきりそう言うと、幸樹や有斗先輩が思わず噴き出して笑った。
晃や竜馬は顔を背けているが、肩の震えが止まっていない。
まさか全員に笑われるとは思っていなかったのか、光は慌てて皆に向かって言う。
「ちょっと待って！確かに私は女の子みたいだってよく言われるけど、一応男の子なんだよ？それに、私は両方いけるんだからっ」
は？
「「・・・はあ？」」

俺の心の声を代弁したような幸樹と竜馬の声。
声を出したのは、2人だけだったが、声を出さなかったその他も含めて全員が共通して、光から距離を取っていた。

「だ、だからっ、そんな意味じゃなくて・・・ああ、でも、この言葉じゃその意味にしか！？」

俺たちの反応を見て、光は完全に錯乱しているようだった。
いつもと扱いは大して変わっていないはずなのだが、一体何が光をああにまでさせているのか。

「貴様。・・・自爆は恐ろしいものだ。時に正常な判断力を奪ってしまう」

そういうことか。暴走していつも衣先輩に殴られているしな。

「お前が言うと妙に説得力があるな。なあ、竜馬。お前ってエリスみたいなのが好みなのか？」

すると、光以上に竜馬は動揺を示した。

「ななな！？そ、そんなことはない。別にメイドだから好きなのではない。険しい山に咲く一輪の可憐な花のような美しさに一目惚れしたんだ」

単調で分かりやすい奴だ。竜馬は普段は鬱陶しいと思う言動も多いが、幸樹以上に単純バカだからどこか憎めない所がある。
でもな・・・そのセリフは本人に言ってやれ。いくら女にもてるイケメンだとしても、そちら方面に興味のない俺に言われても引くだけだ。

「・・・ふーん。幸樹はメイドだから好きなんだよな。それはどうでもいいとして、光はどんな女が好みのタイプなんだ？」
「どうでもいいのかよっ」
「そうねえ、私はやっぱり明月院さんかな。今の合唱部で彼女の右に出る者はないくらいに歌も上手だし」
・・・明月院さんね。同級生で最も有名な女と聞かれれば、まず名前が挙がるだろう。
見た目、部活の実績は優秀で家柄もいいと聞いたことがある。頭もそれなりにいいらしいが、友人にずっと学年1位がいるのであまり気に留めたことはない。
そういえば、以前由真たちと家に遊びに来たことがあったな。あの時は風邪だったらしいが、今はもう大丈夫なのだろうか。
ただ、あの時は余計なことを聞いてしまったようだったから聞かない方がいいかもしれない。
「・・・」
光が明月院さんの名前を出すと再びやっぱりそうなのかという雰囲気が出来上がってしまう。
だが、それをフォローするように有斗先輩が会話を続ける。
「僕も彼女には一目置いているよ。ただ、恋人と言われるとピンと来ないかな。こうして集まるのも何か縁だから言うけど、僕はね、憧れの人がいたからこの学校の合唱部に入ったんだ。天然っぽいところも好きなんだけど、歌の上手な人だよ」
突然の有斗先輩の告白に俺たちは驚いて、時が止まったかのように

動きを止めた。

「ははは っ、別に驚くことはないじゃないか。理由がなくちゃ頑張れるものも頑張れないよ」

有斗先輩って、こんな人だったのか。

冗談を言いそうな雰囲気はあったが、さらにぶっちゃけるタイプだったらしい。意外と言えば意外だが、元々よい第一印象を持っている先輩なのでそれはプラスに働く。

・・・好きな人を追いかけて入部して、その上トップ3にまでに上り詰めるなんて本当に好きなんだな。ところで、その人とはどうなったんだ？

ふと、その後が気になったがすぐにそんなことを気にする余裕がなくなってしまった。

「でも、一番気になるのは景の好きな人だよね。最近は女子の知り合いも増えてきたし、気になる子もいるんじゃないの？」

晃がそう言うと他の皆も同調して頷いた。

確かに、本音か嘘かは別にして皆、好きな人の話をした。

「・・・俺も言うのか？」

「もちろんさ。よければ、人生の1年先輩として相談にも乗るよ」

有斗先輩の親切はありがたいが、俺は言うなんて一言も言った覚えはない。

「言わないっていうのは・・・無しだよな？」

俺の問いかけに全員が示し合わせたかのように首を縦に振った。
これは覚悟を決めるべきだろうか・・・。

「・・・分かった。まあ、その前にエリスの好みの男について話しておこうか」

まずは、時間稼ぎをして様子を見ることにしてみた。

「エリスは、人の話を聞かない奴と偉ぶっている奴は嫌いだ。だから、竜馬。普段から貴様なんて言わない方がいいと思う。いつどこでエリスが見ているか分からないからな」

本当はエリスの好みなんて知らないのだが、ここは利用させてもらおう。

「何だとっ!!そうなのか、き・・有栖」
「何っ!!!そうだったのか、景」

それにしてもひどい驚きようだな。
あっさりと巻いた餌に飛びかかった2人に呆れつつも話の本道が少し逸れたことに俺はほっとしていた。

もう一押しすれば、つまりエリスに好かれるにはどうするべきかを話せば、確実に俺の話をせずに済むだろう。くどいようだが、エリスの話は全くのでたらめだ。

話を続けようとして口を開きかけて、ふと視界に今までいなかったはずの女がいることに気がついた。

その女は、一点だけを見つめていた。
その視線を追って、先にたどり着こうとした時だった。その女は、口を開いて親しげにその名を呼んだのだ。

「あるちゃんっ」

あるちゃん！？

全員が、その名前で呼ばれた人の方を向いていた。いや、反射的に反応してしまっていた。

「あるちゃんっ」

その女は2度そう言った。
そして、その柔らかい笑顔はたった1人のためだけに向けられていた。

向けられた側は、大層焦っているのだが・・・。

「ちょっと、何でここにいるんですか！？」
「ええっ、別にいいじゃない、私たち付き合ってるんだし。それに、敬語とか堅苦しいのは無しだよっていつも言ってるでしょ」

付き合ってるってことは、有斗先輩の彼女ということか。
先輩が憧れるだけあって、声は鈴を鳴らしたように透き通って聞こえる。きっと歌の上手な人なのだろう。

・・・まあ、有斗先輩は彼女が来てから少し落ち着きがないように見える。

「・・・この人が、さっき話した僕の憧れの人だよ」

有斗先輩は本人がいなかった先程と違い、随分と声が出なくなっていた。

対する有斗先輩の彼女の表情は、多少照れた表情の有斗先輩とは違って笑顔のままだ。

「もうっ、憧れの人って・・・もう手に入れたじゃない。ふぅ、ま、いっか。いつも有斗がお世話になってます。私は、この学校のＯＧで聖蓮大２年の大城　雪音　（おおしろ　ゆきね）。２代前の合唱部部長をやってました。有斗共々よろしくね」

・・・随分と気さくな人だな。

最初の印象はこんなものだったのだが・・・。

「で、あるちゃんの言ってた子って、どの子？折角だから当ててみよっか。あの、メイドが好きそうでエロさが顔に出てる子？」

いや、猫被ってる。しかも、とびきり大きな白い猫だ。どうにか内面のその黒い部分を抑えていたのが、抑えきれなくなってきているみたいだ。

俺は、幸樹を指さして小首を傾げる先輩の彼女を見てそう思わずにはいられなかった。

「残念、違うよ」

「じゃあ、あの無駄に熱血っぽい子」

指差されたのは、竜馬。「無駄に」と言われたことがショックだったようで、幸樹と何やらぶつぶつと言っていた。

「残念」
「ええっ!?・・・うーん、じゃあ、そこのオカマっぽい子?」
「オ、オカマって・・・」
光もショックを隠せないようだ。
「んー、じゃあもう1人しかいないね」
そう言って先輩の彼女は俺を指さした。
隣には晃がいるのだが、何故か選ばれることはなかった。だが、正直何も言われなかったことにほっとしているようだった。
もしかすると、眼中に入っていないのかもしれないと思ったが、確信は持てなかったので言わなかった。
・・・さっきから晃の方を1度も見てないからな・・・先輩の彼女。
さらに、先輩の彼女は、晃の存在など微塵も感じていない様子で俺に話しかけてきた。
隣の晃は困惑した表情を浮かべ、そっと俺の隣から離れていった。
確実に気まずいからだ。
「へえー、君があるちゃんの話してた男の子なんだね。私ね、これでも7組のカップルを作った実績があるんだよ。何だか私、久々に燃えてきた」
・・・話の意図が全く見えないのは気のせいか?
ふと、その後ろを見ると有斗先輩が両手を顔の前で合わせて俺にすまんと言っている姿が見えた。

・・・とりあえず、悪い予感しかしなかった。

第５２話：体育祭～遭遇～（後書き）

本編後の雑談

美「紅玲奈。紅玲奈は、どんな動物が好き？」

紅「・・・犬。だって、従順だから」

美「・・・。そ、そうなんだ。・・・犬って従順だったかな？」

紅「・・・きちんと躾をすれば、人も犬も一緒」

美「い、一緒じゃないよ！」

紅「・・・何か想像した？」

美「うっ・・・うー・・・。く、紅玲奈のバカ！」

紅「・・・こうして美玖も汚れていくのでした」

美「か、勝手に汚さないで！！」

紅「・・・くすっ」

美「も、もう・・・やだ」

第５３話：体育祭～親切～

体育祭で賑わう校庭と違い、いつもは昼休みに多くの学生のいる中庭は閑散として2人の少女を除いては誰もいなかった。
噴水から出る水が再び水面に叩きつけられる音が断続的に、そして遠くから声援の声が聞こえてくる。

「相談って何？もしかして、恋愛関係？うちは恋愛に関しては素人さ」
「ううん、もっと大切なこと」

それだけで、何が言いたいのか笑顔を浮かべていた髪を1本に結んでいる少女も分かった。
急に神妙な面持ちでもう1人の少女に問いかける。

「歌のこと？」
「うん。・・・最近、無理しない方がいいよってよく言われるの。でも、私は歌ってないと・・・誰も見てくれない・・・」

それは、相談を持ちかけた少女がずっと抱えてきた悩みだった。

「でも、あなたと同じように歌い手の私から言わせてもらうと、今は無理をしない方がいいよ。喉を壊したら、もう歌い手は前と同じようには歌えない。今を大事にし過ぎて、未来をなくすつもり？」
「・・・」

ポニーテールの少女の言うことは尤もだと、黙り込んでしまった少女も理解はできる。
しかし、彼女にとっては今の方が大切なのだ。

それを既に見透かしているポニーテールの少女は、ふっと息を吐くともう1人の少女の頭にポンと手を置いた。

「・・・。ゆっくり考えるといいさ。でも、うちはいつでも味方になるから、どんな小さなことでも相談してほしい」

「・・・うん」

彼女の気持ちの整理がついていない今、何を言っても彼女の心には届かないことは分かっていた。

それでも、ポニーテールの少女は言わずにはいられなかった。

「・・・うちは先に戻ってるさ。でも、1人の友達として、お姉さんとして・・・今は休んでほしい」

ポニーテールの少女が去った中庭で、もう1人の少女こと、明月院陽菜は今はもう見えない背中に向けて

「・・・私は・・・私は、そんなに強い子じゃないよ。・・・私は今しか見えない、先なんて見られない」

しかし、彼女の呟きは、誰に聞かれることもなく水音と応援の声の中に消えていった。

「有斗先輩、事情はよく分かりました。つまり、先輩の彼女がエリ

スに会いに来たのは嘘ってことですよね」
「本当にすまない。雪音さんは、昔からカップルの間を取り持つのが好きなんだけど・・・最近は周りに縁のありそうな人がいないらしくてね。誰かいないか聞かれたわけさ。悪いけど、今日1日僕のわがままに付き合ってくれないか？僕の周りの男子は大抵彼女も知っていてね、もう君くらいしかいないんだ」
「・・・分かりました。俺でよければ協力しますよ」

ただ、最後に俺が今日だけだと強く念を押すと、少し困った表情を浮かべていた。
たぶん、彼女の琴線に引っ掛かるようなことがあればまたこんなことがあるということだろう。

・・・もし、そうなったら面倒だな。

だが、反面そのことに期待している俺自身がいることもまた事実だった。人から好かれるということは決して悪い気はしない。

・・・いや、もし誰も相手がいないなんて言われたら立ち直れないかもしれない。それに好きでもない人を紹介されてもな。

俺は何だか急に言葉にし難い不安に襲われた。どちらの答えがいいのだろうか、よく分からなくなってきたな。

有斗先輩との話を終えた俺は、先輩とその彼女と共に別の場所へと移動していた。

その途中、先輩の彼女は遠慮の欠片すら見せることなく言った。
「有栖君、携帯見せてくれる？」
「どうぞ」
特に見られて問題のある物が入っているわけでもない。
俺は、言われるがままに自分の携帯を差し出した。
しばらく携帯を見ていた先輩の彼女は、携帯から目を離すと俺を1度見てから有斗先輩にこっそりと耳打ちをした。
「・・・ねえ、本当にこれだけなの？てっきり私、もうメアドくらい交換してるとばかり」
「・・・・。本当だ、これは僕も気がつかなかった」
「・・・それじゃあ、今日はメアドの交換から始めよっか。出会いから別れまでプロデュースできるのね。きゃっ、俄然やる気が出てきた」
「・・・雪音さん。別れは演出しなくてもいいと思うよ」
・・・何だか楽しそう2人の世界を作っているが、置いてきぼりを喰った俺としては少々納得がいかない。
それに、何を話しているのかもこの雑踏の騒がしさでは分からない。
しばらく2人の背中を見ながら歩いていると、不意に先輩の彼女がこちらに振り向いた。
「ありがとう、大体君の交友関係は分かったけど、女の子少ないのね。藍羽さん姉妹と上総野さん、それに広井さんしかなかったみた

いだし。響から聞いた話だともっと女の子の携帯番号があると思ったんだけどね」

何だか意外そうに、いや、呆れたように先輩の彼女はそう言うと、俺に携帯を返した。

「・・・有斗先輩、一体彼女に何て言っているんですか？」

「まあいいじゃないか、そんなことはどうでも。それよりも、有栖君は、その中に好きな女の子はいるのかい？いなか・・・いや何でもない」

有斗先輩は俺の質問には直接答えることなくはぐらかした。隣にいる彼女が余計なことを先輩が言わないように睨みを利かせているからに違いない。

目があちこちに泳いでいる先輩が面白いのであえて俺は追及するのはやめて真面目ぶって先輩の質問に答えてみることにした。

「携帯にあるくらいですから好きだと思います」

一瞬戸惑ったような表情を見せた先輩だったが、すぐに俺の答えの意図に気がつくとふっと表情が和らぎ、いつもの先輩に戻った。

「ふむ、なかなかずるい答えだ。ところで、この広井さんって子はこの学校の子ではないと思うのだけど、どんな子なんだい？」

「・・・分かりやすく言うと、先輩の彼女のような人です」

・・・あの有名人、片宮莉子とは言えないよな。言っても信じてもらえないだろうし。

俺が拒否したにも関わらず恵麻からアドレスを聞いて送ってきたの

だ。何でも仲良くなったら男女問わずアドレスを交換するのだという。
それ以来連絡もないので、特に気にも留めていなかったが、始めから仲良くなったという気はしない。
先輩は俺の答えにしばらく考え込んでいたが、やがて言葉を選ぶように言った。
「ははは・・・、何となくお節介な女の子だということは分かったよ」
「2人とも、それはどういう意味よ」
・・・言葉通りなんだが。
2人ともと言ってはいるが、彼女が向いてるのはもちろん有斗先輩の方だ。
何だか2人の邪魔になっているだけなのではという疑心が拭えなくなってきた。
そっと立ち去ろうと2人に背を向けると既に先輩の彼女が立っていた。
「待って、待って。まだ話は終わってないよ。あ、そうだ。何か私たちのことで聞きたいことある？3サイズとか、どこまで進んだかは答えれないけど、大抵の事には答えてあげる」
3サイズなどというが、聞くほどのものでもないと思う。
それに、目の前のカップルのことに興味なんてこれっぽっちもないというのが本音だ。

・・・何かこれにも意図が含まれているのだろうか。そんなに頭良さそうには見えないけど。
俺は、先輩の彼女の言葉の真意が見えず2人を交互に見やりながら言葉に困っていた。

「あっ・・・。ねえ、一瞬私の胸見たでしょ？やだなあ、もう。高校生は、若さとエロスに満ち溢れているね」
「見てませんし、溢れてません」

お節介だけならまだしも、それに加えてからかうのも好きだとは・・・。
だが、本当に大学生か？何だか随分と世話好きなおばさんのような気がしてきた。
少なくとも最初に思った、清楚だとかそういった印象はもうどこにもない。

「・・・本当に済まない。で、もう枯れているのかい？」

この彼女があって、この先輩・・・か。

・・・似た者カップルだということだけはよく分かった。

・・・・・・。

・・・。

付き合っていられないな。

「もう俺帰っていいですか？」

すると、慌てて先輩の彼女が俺の行く手を阻むように立ち塞がる。

「わっ、ちょっと待って。からかってごめんね。じゃあ、まずは好きな女の子のタイプから聞くね」

「今までのは全く関係ないんですか！？」

すると、先輩の彼女はうんと頷いた。

俺は、敬語を使うだけでも疲れるというのに、さらに振り回されてばかりでげんなりとしてきた。

「まあまあ、がっかりしないで。お詫びに、ちゃんと好みにあった女の子、紹介するから。質問行くよ！」

だから、帰る・・・って聞いてない。

俺の言葉を完全に無視するように先輩の彼女は質問を浴びせかけてきた。

「髪は長いほうが好き？それとも短い方？」

「どちらでも構わないです」

・・・何、律儀に答えているんだろうな。俺は自分が思うよりも人がいいのかもしれない。

そんなことを考えている間にも質問が飛んでくる。

「可愛い子？それとも美人な子？」

「美人・・・かな」

「胸は大きい方がいい？それとも小さい方がいい？」
「どうでもいい」
・・・何だ、このセクハラ親父みたいな質問。
「明るく元気な子と大人しい子だったら？」
「・・・明るい子・・・かな」
「何だかはっきりしないね。ま、こんな質問にはっきりと答える子だったら手助けなんてしないけど」
・・・どっちだ。
「じゃあ、年上、年下、同級生、色々いるけど・・・上下何歳までならオッケー？」
「正直なところ年上はちょっと・・・」
俺が正直に答えると、先輩の彼女は口元に手を当てて目を丸くして言った。
「まさか、ロリ・・・」
「違います。俺の近くにはまともな年上がいないだけです」
ゲイ、マザコン、メイド好き。ただでさえ余計なうわさが付いて回っているのだから、これ以上は勘弁してほしい。
俺が、言葉を遮ると一瞬不思議そうに有斗先輩の方を向いた彼女だったが、目線だけで何かやりとりをすると再び俺の方へ向き直り、何事もなかったように話を進めた。

「次は有栖　景君。あなたのことに関する質問です。素直に答えてね」
「・・・はあ」
俺のやる気のない返答にも先輩の彼女はもう織り込み済みと言わんばかりに無視して話を進める。
「廊下で美少女とぶつかりました。さて、あなたの反応は？」
「質問の意図は？」
「私の・・・趣味かな」
「・・・・・・。とりあえず助け起こして、さよなら」
「へえー。それはどうでもいいか」
・・・どうでもいいなら聞くなよ。やっぱり苦手なタイプだな、この人は。
「あ、もしかして気分悪くした？でも、次からはちゃんとした質問だから答えてよ」
「・・・有斗先輩。俺で遊んでいるわけではないですよね？」
俺の問いに先輩は首を横に振った。
「もちろん僕は真剣そのものだよ。・・・あはは、雪音さんももちろん真剣だよ」
俺は、彼女に睨まれて言い直した先輩を見て、２人の上下関係を再確認した。
そして同時に、すぐに先輩を許して笑いあっている２人を見て、互

いに信頼しているのだということも感じ取ることができた。

・・・いや、違うか。周りが見えていないだけだな。

俺の事を放り置いて2人で乳繰り合っているのだから・・・。

さて、どう反応したらいいものか。

・・・面白いから見ているか。

しばらくの間、俺は先輩たちの様子をじっと観察したが、ものの10分もしないうちに飽きてしまった。

原因は、会話が先輩の彼女がぼけてループするものだから同じことの繰り返しだったからだ。

飽きてすぐに声をかけたものの、2人は俺の事は無視というより眼中になし。

おかげで気づいてもらうまでに5分も時間を要してしまった。

「あ・・・えーと、ね。私たち、いつもはこんなんじゃないからね。うん、いつもは清く正しい交際をしているよ。うーん、まさにオシドリだね」

・・・いつも、こんな風なんだな。

俺の冷めた視線に晒された2人は、すっかり顔を赤くしていて伏せていた。

「・・・このことは内緒でお願いね。これでも私、厳しいＯＧとして指導に当たってるから。バレたら、威厳に関わるの。ね、お願い」
「何度も何度も頼んで本当に済まない。でも、これが本当に最後のお願いだ」

いつもは、部長として後輩を引っ張る有斗先輩が、彼女といる今は周りを考えない人に成り下がっていた。
他人の意外性という面では面白いと思うが、こんなことをされた側としてはたまったものではない。

だが、先輩たちの事よりも俺にとってはエリスの事の方が気になる。どこかにうろうろして迷子にならないといいんだけどな。
そんなことを考えつつも俺は目の前の問題を処理しなくてはならなかった。

「そんなに頭を下げなくても・・・。俺は気にしてないですから」

・・・次、いちゃついたら携帯で動画に撮って流すか。

「ほんと!?うわー、ありがとう、有栖君」
「本当に済まないね。ありがとう。・・・雪音といると、つい我を忘れてしまうんだ」

本当に現金なカップル、似た者同士だな。
俺は、手を握って大げさなまでに感謝の気持ちを表す2人に苦笑した。

「それで・・・休日は何してる?」
「たまにデパートの企画展に行きます。最近だと珍味展に行きました」

「えっ、有栖君も行ってたんだ？」
いきなり背後から声をかけられた俺は思わずびくっとして動きが止まってしまった。
すると、背後の声もまた戸惑ったような雰囲気になった。
「あっ、脅かすつもりじゃなかったの、ごめんね」
「・・・明月院さんか」
俺は、ようやく真面目そうな人が現れたことに心底ほっとして思わず溜息が出てしまった。
「もう・・・。何かがっかりって感じの顔してるよ？」
「いや、そんなことはないけど・・・むしろ色々とあって疲れているんだ。ところで、明月院さんの話は？」
「あっ、うん。私もね、この前の珍味展に行ったんだよ。こういうのって、理解してくれる人ってあまりいないでしょ。だから、有栖君も同じ趣味なんだって思うと嬉しくて」
明月院さんは、いつもと違って今日はやけに饒舌に思える。
いや、どちらかというと声のトーンが高いというのか。どちらにせよ、いつもに比べてテンションは高い。
だが、声は以前よりも掠れたように思える。
「俺も幸樹たちにも親にも理解してもらえないから、まさか同じ好みの人がいるとは思わなかった」
前に声の話題に触れて、気まずい雰囲気になったので、今回はあえ

て触れないでおいた。

「そうだよね。私、この話をするのって有栖君たちが初めてなんだよ。・・・そうだ、今度の振り替え休日・・・・・・」

振り替え休日？

だが、その先の言葉を明月院さんが話す前に、近くのスピーカーから耳障りな音量で招集がかけられた。

『借り物競走に出場される選手の皆さんは、３番ゲートにお集まりください。繰り返します・・・』

「・・・もう、そんな時間か。そろそろ俺は競技に行くから。それじゃ。先輩たちもお幸せに」

俺は、先輩の彼女にもう会わなくて済むと思うと、足取りも軽く３番ゲートへと向かって行った。

一方、景の背中を見送るしかなかった陽菜は景が見えなくなるとぽつりと呟いた。

「・・・うまくいかないな。折角の機会だと思ったのに・・・」

しかし、彼女は失念していた。まだ、この場には２人いるということに。

「ふふっ、青春ね、陽菜ちゃん」

「大城先輩、それに有斗先輩。・・・ところで、ここで何をしてるんですか？」

真っ赤になって驚くに違いない。そう期待した雪音だったが、彼女の期待通りにはならず、逆に冷静に聞き返され、雪音は思わず声が上ずった。

「・・・そ、そんなことよりも、陽菜ちゃん。私がばっちりサポートするから安心してね」

「え？何の・・・」

だが、陽菜の返事を聞くことなく雪音は響を連れて人ごみの中へと消えていった。

彼女は思った。

「・・・有栖君に迷惑がかかりそう」

彼女は知らない。既に雪音が散々景のことを振り回していたことを。

景も知らない。彼が2度と会いたくないと思う人物は再び彼の前に現れることを。

第５３話：体育祭～親切～（後書き）

本編後の雑談

恵麻「は～、疲れた・・・。やっぱり走ると疲れるね～」
由真「恵麻、あんたちょっと疲れるの早くない？」
恵麻「そ、そうかな？今日は暑いから余計に疲れるのかも・・・」
由真「だったら、ちゃんと水分補給は小まめにしないと倒れるよ」
恵麻「ありがとう、由真ちゃん」
由真「・・・でも、あんた揺れるほどないし・・・運動不足じゃないの？」
恵麻「・・・？　っ！？　体力がないからだよ！」
由真「・・・ごめん、気にしてたんだ」

景「あの２人、何だか楽しそうだな」
幸樹「女の子同士、会話が弾むんだろ」

第５４話：体育祭～混乱～

借り物競走。

それは、４分以内に目的の物を探し出し、一緒にゴールする競技。

１位は１０ポイント、２位は８、３位は６、４位は４ポイント入るがそれ以下にはない。

だが、ゴールしないとマイナス１０ポイントというペナルティが科される上に、借り物を書かれた紙を引きなおしてもマイナス５ポイントという過酷な競技だ。

走者は、他の走者を妨害可能であり、お題と妨害のために毎年走者の半分がゴールできず、生徒に嫌われる競技でもある。

要するに俺はハズレくじを引かされたわけだ。

じーーーっ。

そんな音が聞こえてくるような錯覚に俺は今陥っている。

「ね、ねえ、景君。何か四条畷さんにしたの？」

「いや・・・何もしてない・・・と思う」

俺は、自信なく恵麻に答えた。

今、俺たちは借り物競走の順番待ちをしている。
俺の組には、幸樹と竜馬という足の速い２人がいて、単に走ったら勝ち目は当然ない。
だが、運を引き寄せられれば勝つことも可能で俺みたいに足が速くない奴が多く配置される競技でもある。

「でも、楽しみだよね～。あの箱の中、何があるのかな？」
「今年は何だか失格者が多いな。恵麻、気をつけてな」
「ありがとう、景君。でも、景君も気をつけてね」

１つ前には恵麻がおり、こうして順番待ちの間、喋っているわけだ。
恵麻は胸に１３の数字が入ったゼッケンをしている。その１つ後ろの俺たちは１４。
後、少しで出番が回ってくる。

じーーーーーっ。

だから、何なんだ？

俺は、気のせいとは思えない負の感情の篭った視線に思わず身震いする。
幸樹も、その視線を確認したようで哀れむように俺を見た後、他人事のように言った。

「・・・なあ、景。本当に梓依ちゃんに何もしてないのか？景のことだから知らないうちに何かやったんだろ」

「本当に何もしてない。・・・あと、あれは紫な」
「有栖よ、何故分かるのだ？ふむ、これが所謂愛の力というものか。僕にも分かる、エリスさんの居場所が！」
暑苦しい竜馬は無視して俺は軽く脚を伸ばした。
愛じゃなくて、見れば分かるんだけどな。・・・雰囲気とか、言葉遣いとかで。

じーーーっ。

紫のよく分からない視線に晒されながら、俺の出番が始まった。
『よーい・・・・・・スタート。・・・あ、しけていて音が鳴らなかったのでやり直しです』

・・・締まらない始まりだな。

借り物競走は、そんなに長い距離を走るわけではない。
途中にある箱の中から1枚、お題を引いてそれを持ってくればいいだけだ。
俺は、箱に8人中6番手でたどり着いた。1位は、幸樹。2番手は僅差で竜馬だった。
2人とも紙を見るなり、一直線に走っていったところを見ると簡単

なお題だったらしい。

紙の中身は全校生徒の投票で決まり、無記名であるがため、無茶なものも多い。

加えて、生徒会があまりに簡単なものは排除している。

おかげで、毎年失格者半数を出す一大過酷競技として悪名名高い競技となっているのだ。

・・・さて、俺のお題は一体何だ？

思いきり奥底に手を突っ込んだ俺は、１枚の紙を引き、それを開いた。

「・・・好きな異性？」

あまり突飛でありながらも、王道のような気もするお題に俺は固まった。

異性というのは女の事で、俺が好きな女でなくてならないわけで・・・。

この場合、姉妹という選択肢や母親、祖母はなしで、親戚はいいのか？

いや、その前に姉妹も祖母も親もはいないし、母親なんて論外。

何故、俺の周りには異性がこうもいないんだ。

ああっ、無駄に時間が過ぎる・・・。

頭を抱えたくなるが、こんなところで抱えているわけにもいかない。

それに、このままだと戻った時に、衣先輩に何を言われるか分かったものじゃない。

「・・・仕方ない、とりあえず先に進もう」

幸いにしてまだ誰も俺の組ではゴールに着いていないようだ。

あっ、１人着いた。ゴールの方を見ると１４番のゼッケンを着けた赤の鉢巻きの男が意気揚々と紙と借り物の確認を受けていた。どうやら、くじ運が良かったらしい。

・・・・・・。

・・・って、人の事を気にしている場合じゃない。

好きな異性、好きな異性・・・。いや、女という性別であれば・・・。

俺は、とりあえず思いつく限りの知り合いの顔を浮かべてみる。

すると、案外思い出すことができることが分かった。

絵梨ちゃんは今いないとして・・・、恵麻は別の色だし・・・いや同じ色が衣先輩しかいない。

衣先輩？

・・・好きだと仮定して考えてみよう。

「ずっと先輩の事が好きでした。付き合ってください」
「有栖さん・・・。ごめんなさい、私と有栖さんでは釣り合わないと思いますわ」
「そ、そんな・・・」
「おっ、景っちが衣っちに告って玉砕。これは、いいネタになるよー」
・・・。
何だろうな・・・いい結果が思いつかない。
それなら、1番親しい異性ならどうだろう？
・・・そうなると、恵麻だよな。
・・・俺は、何となくイメージしてみる。
「え、恵麻。少し話があるんだが、いいか？」
「どうしたの、景君。改まったりして」
「その・・・俺と・・・」
「俺と？」
「・・・。い、いや・・・な、何でもない」

「そうなの？今日の景君は何だか変だよ～」

・・・何てヘタレなんだ。

その前に何故告白が前提なんだ。

これは、あくまで競技に協力してもらうだけなんだからな。何変な気を起こしているんだ。

俺は、そんなことを考えながら歩いていると、不意に知らない女の声が俺に向かって飛んできた。

「あの・・・リタイアですか？」

目の前には、１２番のゼッケンをつけた女が心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

「えっ？いや、違うんだが・・・・・・って、ここは・・・」

知らない間に俺はゴールまでたどり着いていたらしい。

見ればここがゴールと分かるのだが、どうにも納得できないのでとりあえず目の前の女に確認を取ってみる。

「あっ、はい。ゴールですね。１４組はまだ2人しか戻っていません。美玖のお友達の先輩ですよね。残り1分半頑張ってください」

「もう1分半なのか。教えてくれてありがとう」

そうか、あの時美玖を迎えに来ていた友人の1人だ。

俺はその子に礼を言うと、再びコースを戻ろうとして足を止めた。

「・・・そういえば、1人いたな」

そう。一応異性であり、既に周知の存在となっているのが・・・。

・・・適当にごまかせば、好きな異性なんてものを引いたとはばれまい。

だいたい、好きを恋愛と一緒にしたのがいけなかったのだ。家族に対する好きだっていいじゃないか。

俺は、意を決してポケットから携帯を取り出すと、急いで電話をかける。

だが、電話のダイヤル音が虚しく俺の耳に聞こえる。

「・・・なかなか繋がらないな。うるさくて聞こえないのか」

焦る気持ちを抑えながら、俺は相手が電話に出てくれることを祈るしかなかった。

・・・・・・。

コール音が何度も続き、もうダメかと思った時、ようやく相手が電話に出た。

『景様、どうかされましたか？』

俺が電話をかけたのは、他でもないエリスだった。

既に、散々噂になっているのだ。もう今更気にすることなんてない。今日は、体育祭というお祭りの日であり、すぐに皆忘れるに違いないのだから。

「エリス、今どこにいる？」

『今は、借り物の箱の近くで応援しています』

俺の焦りと多少の苛立ちを含んだ声とは対照的に、エリスの声は楽しさを隠せないようだ。

・・・箱の近くか。それにしても、やけに騒がしいな。

時折、電話口からの音でエリスの話が聞き取れなくなる。

だが、目的を言わないわけにはいかない。

「今からゴールまで来てくれないか？エリス、この通りお願いだ」

電話口にいる相手に見えるわけないのに、俺は頭を下げていた。

普段から電話の相手に相槌を打ったり、頭を下げたりすることは俺にとっては普通の事なのだが、何故かエリスの息を飲み込んだような音が聞こえた。

『っ！？』

そして、つづけて俺に対してではないエリスの「離れてください」という声が聞こえた。もう携帯は持っていないのかその声は遠い。

それからすぐに、周りからもよく分からない悲鳴とも歓声ともつかない声が聞こえた。

『景？気をつけてね』

最後の言葉を残したのは、エリスではなく母さんだった。

「ちょっと待て、場所は・・・って、おい」

人の話を聞けって・・・。

俺が、溜息を吐いて携帯をポケットに仕舞ったのとほぼ同時の事だった。

借り物の入った箱の方から、人の悲鳴が上がった。

何があったんだ？そう思って、そちらを見ると、俺も思わず声を出しそうになった。

砂が舞い上がり、すっかり視界が遮られている。

運の悪いことに風も出てきたために、舞い上がった砂ぼこりが応援席の方へと流れているのが分かる。

・・・これは、応援している人たちも大変なことになっているはずだ。

「何があった・・・」

認めたくはないが、何となく原因は察しがつく。

たぶん、エリスだろう。

何をしでかしたのかは知らないが、恐ろしいことをやってくれた。

「景様っ」
「・・・やっぱりお前か」
砂埃をあげてこちらに走って来る・・・いや、飛んで来るエリスの姿を見て、確信はさらに深まった。
ほんの数秒でやってきたこと自体がそもそもおかしい。
「景様、緊急とのことでしたので、最も早く来られる方法を取ったのですがダメだったでしょうか？」
そんなに困惑した表情で靴を見せられても、俺の方がもっと困るんだが。
エリスの背後には、今も砂煙が朦々としており誰1人としてゴールに向かって来る者はいない。
確実に後続は全員失格になるんだろうな。俺は、未だに晴れない煙の向こうを見て他人事のようにそう思った。

ゴールに着いた俺とエリスを待っていたのは、これまた困惑した表情を浮かべる美玖だった。
「け、景先輩。・・・ず、随分と・・・派手にやってしまいましたね」
「・・・美玖。俺も頭が痛いから言わないでくれ」
先程までは、実況も応援も観客も騒がしかった全ての人たちが今は別の意味で騒がしい。
あちこちで、咳き込む音や悲鳴も聞こえる。

「と、ところで・・・景先輩。お題の紙を見せてもらってもいいですか？」
「あ、ああ・・・」

この後の事を考えると、非常に気が重い。
幸樹や恵麻たちはゴールにはおらず、状況から鑑みてあの砂煙に巻き込まれたに違いない。

・・・悪い、俺のために安らかに眠ってくれ。

「へーえっ！？」

何だ！？

聞いたこともない美玖の素っ頓狂な叫び声に俺は思わず振り返った。

・・・まるで、納得しかかったらとんでもない事実に気がついたようなそんな声だな。

「何か問題があったのか？」
「い、いえ・・・け、け、景先輩の好きな女性って・・・」

あっ、すっかり忘れていた。

知り合いに見せたら確実に誤解される。そう思っていたが、まさに美玖が思った通りの状態に陥っている。
・・・違う。反応が予想以上で、何だか目に涙が溜まっている上に、肩が少し震えている。

もしかして、俺がロボットに恋をするような人だと思っているのだろうか。
そういえば、美玖は男とあまり話さないらしいから、変人は苦手かもな。

確かにエリスの事は大切な存在と思うが、それが恋愛になると思えない。

人とロボット。そこに信頼や互いに思慕が生まれても、そこに恋愛感情の生じる余地は少なくとも俺とエリスにはないと思う。

「誤解しないでほしい。・・・俺も悩んだんだ」
「そ、それって悩むほどに好きな人がいるってことですか？」

そういう解釈もありなのか。

俺は、美玖の言葉に思わず感心する。
だが、言うべきことは言わないといけない。

「いや、そうじゃなくてな。最初は、好きと恋愛が結びついていたんだ。だが、よく考えれば、この紙のどこにも恋愛とは書かれていない。だから、俺は家族として好きなエリスを選んだ」
「へ？え、えっ？」

・・・分かってくれた・・・よな？

俺とエリスを美玖は交互に見ながら、顔に手を当ててしばらく固まっていた。

「あ、あのー・・・」

美玖のおずおずと手を挙げる仕草は小動物に通ずるものがある。

「つ、つまり・・・エリスさんはご家族であって、景先輩は家族愛の精神で選ばれたということですね」

「まあ、そういうことかな」

「わ、わたし・・・とんでもない勘違いをするところでした」

どうやら理解してくれたようで、俺としても助かった。

美玖が理解のある人で本当によかったと思う。

「景様がよかったです。私もお役に立つことができて嬉しいです」

「・・・ああ。エリス、助けてくれてありがとう」

・・・だが、エリスには本当に色々と教えないといけない。

大分、濃さはなくなったものの依然として残っている砂煙を見ながら俺はそう思わざるを得なかった。

第５４話：体育祭～混乱～（後書き）

本編後の雑談

それぞれの売り（ヒロイン編）

エリス「私は、献身的に尽くすことが売りだそうです。そして、一途な点も魅力ということです」

恵麻「私は何だろう・・・。家庭的な所かな？料理は得意だよ～」

由真「あたしは・・・積極的な所が売りだね。それに、あたしだって女の子らしい所もあるんだから。そのギャップを魅力にしたいね」

衣「私は、芯の強さが売りですわね。あと、『わたし』ではなく、『わたくし』です」

梓依「あはは、それどうでもいいよ。私の売りは、１口で５度おいしいとこ。他の人にはないよ」

美玖「わ、わたしの売りですか？・・・そ、そうですね・・・」

梓依「体じゃないの？何で、双子でこうも違うかな・・・」

美玖「か、体って・・・。わ、わたしがそれだけしかないみたいな言い方しないでよ！わ、わつぃの売りは保護欲をかきたてる所です」

陽菜「明月院さん・・・言葉がおかしくなってるよ。さて、私の売りは、そうですね・・・よく言えば誰とでも仲よくすること、悪く

言うと八方美人な所かな。でも、親密な関係の人だけに、私の素顔を見せるかも。そこは、きっと売りだと思うの」

第５５話：体育祭～偽物～

借り物競走が終わり、俺はエリスと共に職員室でみっちり説教を受ける羽目になった。

だが、教員は俺に注意はするがエリスには全く触れようともしなかった。

エリスが視線を向けると、おびえる教師まで居る始末。エリスを外に出すように言われたが、エリスが反発すると教師はもう何も言わなかった。

・・・あまりに不条理だ。

結局、説教は１０分足らずで終わり、俺は放課後に居残りで片付けと校庭の修復をすることになった。

校庭の校舎を向いて右側に当たるリレーなどではコーナー、借り物競走では箱があった付近は特に被害が大きかった。

そこで見ていた観客は、砂埃を被っただろうし、さらに運悪くその方向へと吹いていた風のせいで砂煙となって押し寄せたために、一部色の応援にも被害が拡大したという。

不幸なことにそこは俺たち黒の応援席であったりもする。

ただ、多くの人は何が起きたかも理解していないのだろう。多くの人たちが突風のせいと思っているらしい。しばらく、煙が朦々としていたので確認ができなかったのだろう。

教師たちも見たのは数人だけだと、しかもいまいち信じられないという顔をしていたのだから。

それが、俺が教師たちから聞いた事の顛末だった。

職員室を後にした俺とエリスは、廊下から校庭の様子を歩きながら眺めていた。

「・・・なあ、エリス。校庭むちゃくちゃだな」

「ええ、そうですね」

・・・何で、そんなに冷静でいられるんだ？俺は、あまりに非日常的な目の前の光景に突っ込む気力すら失せた。

エリスが通ったと思われる箇所は、地面が抉れて道になっている。

石灰の白い粉で引かれた線は跡形もなく消え、今は大急ぎで線を引き直している。

「・・・ところで、誰だ。あの人たちは？」

「どちらの方かは存じませんが、私たちの後始末をしているのかと思います」

線を引き直しているのは、生徒ではなく作業服を身にまとった工事現場にいるような人たちだ。

エリスの作った穴も次々と埋めていき、この様子だと午後の競技が始まる前に校庭は元通りになりそうだった。

「あれは、私が呼んだのよ」

突然俺たちの前に現れたのは、担任の教師だった。

「先生が？」

「そうよ。きっと何かやらかすだろうと思ったから。そして、私の予想は的中した」

担任の始めから分かっていたと言わんばかりの言葉に俺は首を傾げた。

「・・・それじゃあ、まるで始めから仕組まれていたと」

「まあ、そうかもしれないわね」

俺の言葉を遮って担任は意味深に笑う。

まさか、担任が先程の出来事に1枚噛んでいるということなのだろうか？

そう考えているとエリスが、急に会話に口を挟んできた。

「・・・あの・・・相模さんですよね？どうしたのですか、このような所で？しかも、景様の担任とは一体・・・」

「そ、そんなことはないわよ？私は、この学校の教師、相模　仁美よ。決して、優秀な頭脳と美貌を併せ持つどこかの会社の部長ではないわ」

その言い方に裏返った声。・・・すっかり丸分かりだって。

もっとも、自ら正体を明かしたような気もする。その証拠に、担任は焦りの表情など一切浮かべていない。

そして、わざとらしく溜息を吐くと意味もなく胸を張って言った。
「・・・はあー。バレたら仕方ないか。そうよ、私がハンドメイデン社で開発部部長を務める相模　仁美、その人よ」
「つまり、エリスの生みの親ということですか」
俺の問いに担任は首肯する。
どうにも胡散臭さが拭えないのは、その言葉の軽さからか。
そして、その言葉に輪をかけるようにエリスが紹介を付け足す。
「景様。彼女は、私の開発担当の1人で、同時にプロジェクトの最高責任者なのです。4月になってから、急に失踪したと聞いていたのですが・・・」
・・・失踪？
いや、現にここにいるわけだが・・・会社から失踪してまで何をしにここに来たんだ？
担任をじっと見ながら考えていると、遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてきた。
「おーい、景。そこにいたのか」
「景先輩、見つけたよ！ボクの話を聞いてもらうからね」
振り返ると遠くから俺を呼ぶ幸樹と紫、そしてその後ろには、恵麻や美玖、衣先輩たちの姿もあった。
それを担任は確認すると、ふふふっとまた意味ありげに笑う。

「あら、お友達ね。話はまた今度の機会にしましょ。・・・今回の件は、エリスのせいではなく突然起きた突風のせいよ」

だが、最後の言葉だけは、今までとは打って変わって有無も言わせぬような強い語気だった。

そして、いつの間にか意味深な俺を小馬鹿にしたような笑みは消え去り、変わって厳しい硬い表情を見せていた。

「もちろん、あなたが責任を負いたいと言うのであれば私は止めたりしない。ただ、今のあなたではエリスを守ってあげることはできないでしょ？だから、この件は、私たちに任せてくれる？絶対にあなたとエリスに悪いようにはしないから」

俺は、担任の言葉を黙って聞いていた。その沈黙を担任は、肯定と受け取ったようで、ふふっとやはり意味ありげに笑う。

・・・たぶん、この人の事は信用してもいいのではないか。

胡散臭いが少なくともエリスの事を考えている人だと思う。

だが、１点だけ腑に落ちない所があった。

愚問とは分かっていたが、それでも聞いておきたかった。

「それは、エリスのために、ですか？」

「いいえ、それもあるけど。むしろ、有栖　景君、あなたのため、ね。いつか分かる時が来るわ。ただ、その時ではないと私は思っているの」

・・・俺のため？確かに最近は、エリスがいなくなったら寂しいと考える時もある。

そういうことを見透かされているかもしれない。

「あ、そうそう。私は失踪したわけじゃないからね。エリス、あの2人に言っておいて。戻ったら仕事倍にするから覚悟しておけって」

最後にエリスにそう言うと担任は、俺たちに手を振って職員室の方へと行ってしまった。

「景様。相模さんが、時折意味がありそうに笑っていたのには気づかれたと思いますが・・・、あれは意味がないのです」

「意味がない？」

エリスの言葉が理解できずに俺は、同じ言葉を繰り返す。

それに対し、エリスは薄く苦笑を浮かべ、担任の去った方を1度見てから俺の方を向いた。

「はい。あれは、相模さんの年下の方に対するいつもの癖なのです。彼女は、決してお年を召しているわけではないのですが、職場では年齢が高い部類に入るので、若い人には、いつもああやって接しているのです。ですが、悪い方ではないので、安心してください」

・・・エリスが言うなら、大丈夫なんだろう。しかし、珍しいことに随分と辛口だな。

何となく自分を納得させると、タイミングが良いのか悪いのか3人がほぼ同時に話しかけてきた。

「景。ちょうどよかった、話がある」

「ボクもだよ」

「景君、私もあるの」

幸樹に、紫、それに恵麻か。３人揃って何の用だ？

・・・そういえば、この面子は・・・借り物競走の・・・。

・・・また、説教か。

やや怒りを抑え気味の様子の皆に俺は、既に終戦気分だった。

さてと、昼はいつ食べればいいのだろうか？

時計を見ながら、俺は現実から逃れたいと願った。

第５５話：体育祭～偽物～（後書き）

本編後の雑談

甘奈「今日はエリスの性能について話をしようと思うの」
加奈「はーい、みんな拍手」
景「・・・パチパチ」

甘奈「寂しいね。・・・それはそうとして、エリスについて今日からシリーズで語ってあげる」
加奈「それじゃ、まずは基本データから。甘奈よろしく」
甘奈「・・・どうして人任せなの？」
加奈「いいじゃない、面倒なんだから」
甘奈「まあいいけど・・・」

名前：エリス・メイデン＝ＭＯＰ１ＨＫ

製作会社：（株）ハンドメイデン

身長、体重：１５５、４３（目標値で、実際には機械のためもっと重い）

Ｂ，Ｗ，Ｈ：８８、５７、８７（ただし、分かりやすくするための公表値のためトップ、アンダー等は当選者が計ってください）

外見：銀髪蒼眼

甘奈「今日はこのくらいにしておこうかな。景君、質問は？」

景「・・・特にない」

加奈「今日はここまで。では、ごきげんよう」

第５６話：体育祭～抱擁～

３人の話というのは、他でもない借り物競走のことだった。

「景君。エリスちゃんに何言ったの？」

「そうだよ、景先輩。ボクたち、みんな失格なんだから」

「そうだそうだ。反省しろ、景」

３人いっぺんに話されても、俺にはよく分からないんだが。

すると、エリスが俺の心を読んだかのように話しかけてきた。

「景様。よく話が分からないという顔をされています。よろしければ、１人分ずつ、私が話を聞かせて差し上げます」

「そんなことされなくても大丈夫だ。俺は、子供じゃないんだから」

エリスが恥ずかしい事を言うものだから何だか顔が火照ってきた。

そして、俺がそのような状態になるものだから、当然やっかみが混じってくる。

「へえ？随分と甘やかされてるんだな、羨ましい限りだぜ」

「何だかなあ、見ているボクの方が恥ずかしいよ」

当の本人が１番恥ずかしいんだ。

知らない人を知り合いだと思って声をかけた時の恥ずかしさに似ているかもしれない。

「そ、それよりも早く本題に入ろうよ～。早くしないとお昼の時間無くなるよ～」

・・・幼馴染のことではなく、昼の心配か。
全く俺の事を心配する様子もない幼馴染は、どうやら食欲旺盛のようだ。

こういう時は、年の功に頼るべきだ。俺は衣先輩に期待を込めた眼差しを送る。

「立ち話も難ですから、生徒会室に来ませんか？あそこなら椅子も豊富ですし、お菓子もありますし、パンもありますから軽くお昼でもどうぞ」

事態を収束に向かわせようとしてくれているのか、それとも密室でじっくりと話を聞こうというのか。おそらくは後者だろう。

それにしても、生徒会室はやっぱり私物化していたのだなと思う。以前から、テレビや冷蔵庫などやたらと家電が充実していておかしいとは思っていたのだ。

呆れてものも言えないが、立ち話をするよりはよっぽどましと言える。

そして、誰からというでもなく自然と俺たちの足は、生徒会室へと向かっていた。

「相変わらず、ここは嫌な所だよな・・・」
「それなら帰ってくださっても結構ですわよ？」
「・・・余計なことを言って、どうもすみません」

思わず本音の出た幸樹を衣先輩が牽制する姿は、女王と家来の図式

だった。
もちろん、王と民のように臣下の関係ではないが、衣先輩の口調はまさに女王そのものと言える。
「相変わらず、この部屋は無駄に物があるな」
「ふふっ、そうだね～」
生徒会室は、何も家電だけがあるわけではない。恵麻は、何度か来ているので知っているようだが。
「・・・また、誰も掃除してないんですか？」
「ええ、私たち生徒会役員は皆さん掃除が苦手のようで」
書類があちこちに散乱していて、踏んでいいものかどうかさえよく分からない。
とりあえず、机とイスの周りから書類をどけると、皆に席に座るように促し、俺はお湯を沸かし始める。
「何をしているのですか？」
「折角だから、コーヒーでも飲もうと思ってな。ここの豆はいいものだからコクも香りもいいものなんだ」
「私は、食事はできませんので味は分かりませんが、このコーヒーの香りは分かります。今度、買い物に行ったら買っておきますね」
エリスは、このコーヒーが1瓶、1万円もする高級品だと言ったら、たぶん買わないだろう。
良くも悪くも母さんのそばにいることの多いエリスは、以前に比べて主婦化しつつあるから。
「・・・そうか。ところで、幸樹。話って何だ？」

エリスとの話を切って、俺はお客用のマグカップに既に挽いてあるコーヒー豆を入れながら幸樹に話かける。
そろそろ本題に入るべきだと、俺の時計が指し示していた。

「ああ。もう少し詳しく話した方がお前も分かると思うから。昼飯食べながらにしようぜ」
「分かった。エリス、そこの戸棚からパンを取ってきて、あっちに置いておいてくれないか？」

エリスは、「はい」と返事をすると漫画と殺虫剤を退けて戸棚を開けた。

「きゃあああっ！？」

突然、部屋中に響き渡るエリスの悲鳴に俺は驚きを隠せなかった。
今の今まで、エリスのこんなひっくり返ったような声は聞いたことがなかった。
そして、俺の後ろに一目散に隠れ、そっと戸棚の辺りの様子を窺う。

「け、景様・・・。ゴ・・・ゴキブリが・・・」
「はあ？って、いるな、確かに・・・」

しかも、小さいのではなく5，6センチはありそうな立派なものが。
あんなものがいきなり出てきたら、それは驚くだろう。俺は、少し落ち着いたものの、それでも動揺を隠せないエリスに同情した。

「・・・一気に食欲が失せたな」

「け、景様、あれを食べるのですか！？」

「パンの話だ、パンの！」

エリスのせいで、一瞬食べることを思い浮かべてしまい、吐き気がするほど気持ち悪くなった。

世界では、ペットにしたり、食用とする国もあるというが・・・おいしいのだろうか。

目の前のゴキブリはテカテカとして、茶色というより黒に近い羽根。薄気味悪く動く触覚といいところが見当たらない。

俺とゴキブリは、視線を逸らさず睨み合っていた。もちろん、奴が俺を見ているかは知らないが。

「・・・あら」

くちゅと音が聞こえたような気がしたが、たぶん気のせいだろう。

だが、何事もなかったかのように衣先輩は、靴を脱ぐと窓を開けて靴を2，3度上下に振った。

突然の出来事に、俺を含めて誰も何も言わない。

だが、やかんのお湯が沸騰したことを知らせる甲高い音にようやく我を取り戻すことができた。

「お湯が沸いたな。みんなコーヒーでいいか？」

「う、うん」

「ボクは、ミルクをたっぷりね」

「俺はブラックでいいや」

衣先輩の性格を考えれば、ゴキブリを見て悲鳴を上げるような人でないことは分かるのだ。
ただ、俺・・・いや俺たちはゴキブリを靴で踏んで、その靴をそのまま履いていることに驚いていた。

俺とエリスでコーヒーを皆の前に置いて全員が座ると、ようやく話が本題へと進み始めた。

「さて、時間もないからさっさと話すけど、俺が借り物競走をしていた時のことだ。俺が引いたのは、メイドと書かれた紙なんだ」

俺は、その話を聞いて、おかしいと感じた。
あれほど抜き取って全部処分したはずなのに、何故入っているのかと。

俺が衣先輩を見ると、先輩は待ってましたと言わんばかりに胸を張って堂々と隠すことなく言った。

「ええ、私たちが入れましたわ。だって、面白くありませんから」

面白半分・・・いや、全部か。

衣先輩の竹刀で相手をどつき倒した時と同じような笑みを見れば、よく分かる。

・・・触らぬ神に祟りなし・・・か。

「それで、エリスのとこに行ったのか。それで、何故俺の責任が発生するんだ？」
「ああ。俺はエリスちゃんに一緒に来てくれと言ったわけだ。そしたら、断られたんだ！」
「それで、何て言われて断られたんだ？」
俺はただそのことが気になっていた。
これだけ、騒いでいるのだからそれなりのことは言ったのだろう。
俺は覚悟を決めて次の言葉を待った。
「それか。そのまま言うぞ。『景様からうろうろしてはいけないと言われていますので、申し訳ありません』だ」
中途半端に似せようとするために気持ち悪い。
「俺だって好きで似せようとしたわけじゃないぞ！」
皆の冷たい視線を受けて必死になって否定する姿は、いたたまれないものがある。
「・・・何だかお前のせいで、部屋が寒くなった気がする」
「有栖さん、それは間違っていますわ。私が冷房をつけました」
手渡されたリモコンの設定温度は２０度。
「・・・」
黙って２８度まで戻しておくか。

「それはそうとしても。確かに、うろうろするなとは言ったが、それだけなら単に逆恨みになると思うが。競技の性質上妨害はありだからな」
「・・・それはだな」

こんなくだらないことで、この3人は俺を探していたのか？
だが、それは俺の勘違いのようだった。

「そこの2人はそうかもしれないけど、ボクは違うよ。聞きたいことはそんなことじゃない」
「そうだよ～、そんなくだらないことじゃないよ！」
「待て、俺の言ったことはくだらないのか！？」

「「うん」」

・・・もちろんだ。

エリスでさえも、周りに合わせて頷いているのだから救いようがない。

逆恨みの幸樹は放っておいて話を進めるか。

「それで、話って何だ？」
「ボクが聞きたいのは、どうしてエリスを連れて行ったのかなってこと」

紫は、椅子に膝で立ち体を精一杯こちらに伸ばしていた。

「あっ、私もだよ～」
「私も興味ありますわ」
恵麻と衣先輩も興味津々といった様子。
だが、後から言った2人と決定的に違うこと。
それは・・・。
「・・・紫。お前、美玖から聞いたな？」
「うん、もちろん」
紙の中身を知っているか否か。
「それなら理由も知っているよな？」
「えー、ボク知らないなー。景先輩の口で説明してほしいな」
俺に目一杯近づいて話すものだから、顔に息が時折吹きかかる。
嫌ではないが・・・紫の顔がこう近くにあると表には出ないが気恥ずかしさを覚えてしまう。
それでも、まじまじと紫を見ると、小悪魔ぶっていてもあどけなさの消えない所はまだ子供だなと感じる。
「景先輩。そんなにじろじろ見られると恥ずかしいよ」
「あ、悪い・・・。近くで見るとやっぱり双子なんだなって。顔立ちだけはそっくりだよな、2人は」
そう言うと、紫の頬が明らかに朱に染まった。
皮肉を言ったはずなのに、何故、紫が頬を朱に染めるのか俺には理解できない。

「こほん。有栖さん。顔を近づけ過ぎではありませんか？」
「そうだよ、紫ちゃんだって女の子なんだから照れるよ！」
そして、2人が詰め寄ってくる理由も。
その様子を見ていた幸樹は、つまらなさそうにパンを口に頬張ったまま言う。
「・・・景。両手どころか持ちきれないくらいに華に囲まれているなんて羨ましい限りだぜ」
「それなら今すぐ代わってくれ。好きな異性なんて物を引いたくらいで紫にからかわれるのはごめん・・・、あ・・・」
口にしてからしまったと気づくことはよくあることだと俺は思う。そして、しまったと思ったときにはもう遅いということは、言うまでもない。遠くのポカンとした顔や目の前のくすくすと笑う顔を見ればすぐに分かる事だった。

「そうなの！？」
「そうでしたの！？」
「そうなのですか！？」
三者三様に驚きの声が上がり、そして、しばらく生徒会室を沈黙が包む。
だが、1人はやたらと嬉しそうだ。
「景様。私も景様のことが大好きです」

「ちょっと待て。抱きつくな！」
首に手を回してぎゅっと抱きついてきたエリスを引き離そうとするが、ロボットの力に俺が敵うわけもない。
初めは、スキンシップくらいにしか思っていなかった。
ただ、段々と力が強くなってくるとそんなことを考えている余裕はどこかへ消えてしまった。
「・・・い、痛い。痛いから離してくれ！」
初めは、助けを求めても何やっているんだかといった様子で見ていた４人だったが、段々と俺の声が悲鳴に近くなると、ざわざわとし始めた。
そして、俺が卒倒しそうになる寸前。ようやく俺はエリスから解放されたのだった。

「・・・景先輩。家族愛って命懸けなんだね。ボク、先輩のこと誤解してたよ」
「わ、分かってれれば・・・いいんだ。げほっ・・・」
命を張っただけあって、皆、俺が好きな異性でエリスを選んだことに理解を示してくれたようだ。
いつもは重い空気に感じる生徒会室も今は、新鮮な酸素に満ち溢れているような気がした。
「景君。本当に大丈夫？」
「有栖さんにもしものことがあったら私・・・。ですが、有栖さんが家族思いであるということは痛いほどに分かりましたわ」

単に同情されているだけかもしれない。
だが、腫れ物に触れるような対応をされると、かえって裏があるのではないかと疑いたくもなる。

・・・この2人に限ってはないか。

「でもよ、景。あんなに熱い抱擁ははじめて見たぜ。俺もあれくらい抱きしめられたいもんだ」

たった1人を除いては。

俺があんな目にあったのに不謹慎な発言をするとは、同じ苦しみを味わいたいと見える。
幸樹が同じ目に遭う場面を思い浮かべると思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「・・・それなら、エリスに思いっきり抱きしめてもらえばいいじゃないか。・・・あの世に逝けると思うが」
「冗談だぜ、冗談。・・・でも、悪くないかも」

・・・死因は圧死になるだろうな。

それからの会話は、何のことない会話が続いた。

少し離れた土地にある若者の街の新しい店の話。

おいしい料理の作り方の話。

親がべたべたしてうざいという話。

そんな話をしている間に、昼休みは過ぎていったのだった。

第５６話：体育祭～抱擁～（後書き）

本編後の雑談

甘奈「はい、今回で２回目」
加奈「はーいということで始まりました、何故？何？エリスのコーナーです」
景「・・・いや、意味分からないから」
甘奈「そう？」
加奈「それで・・・エリスのサイズは計ってみた？」
景「誰がするかっ！！」

甘奈「はいということで」
景「華麗にスルーですか・・・」
加奈「やはり、景君には荷が重かったようね。それでは、今日はお値段なんかを紹介します。では、どうぞ」
甘奈「・・・結局、私が担当するのね」

開発費：数百億

市場販売値段：５億（量産型）
　　２０億（オーダーメイド型）

予定販売数：３年で１００体

電気代：月３万～

稼働時間：２４時間フル稼働で２週間

充電時間：おおよそ８時間

景「・・・高いな」

エ「確かに今は一般の方々には買えるものではないと思います。ちなみに、開発費は私を作るのにかかった費用です」

景「・・・でも、エリスの価値はお金じゃないよな」

エ「そう言っていただけると、私も嬉しいです」

加奈「いい話だねー」

甘奈「・・・あんたが言うと途端にウソ臭くなるから不思議よね」

加奈「・・・」

外伝7：体育祭談義

「拉致監禁プレイも悪くないと思うのだよ」

それが大助が戻ってきて最初に発した言葉だった。

「・・・檻はどこかにないのか？」

続いて俺が返した言葉。

だが、大助はそんな言葉で動じるほど軟ではなかった。

「おっ、分かっているな、景。ははは っ、今度に一緒にどうだね？」

「1人で行け」

俺は冷たく突き放すと無視を決め込む。

変態とは関わらないのが無難だ。

午後の競技は、騎馬戦という格闘技にも類するようなものが1つ残っている。

俺は、騎馬として出場するわけだが、どうにも気乗りしない。

４人１組で騎手を支えるわけなのだが、これが意外と辛い。
昼休みに弁当を食べ損ねた俺は、次の競技である騎馬戦を前に１人食事をしていた。
そう、それは既に過去の話。
「そうだ、お前は１人じゃない。この俺がいる」
「・・・帰れ」
大助の口からは、飯時に聞くべきではない言葉が平気に出てくる。
無論、飯時でなくとも聞きたくない。
だが、大助が戻ってきた時につい反応したのが運の尽きだった。
それから、しつこく絡まれた俺は、根負けし話だけは聞くことになった。
「体育祭の見どころとは、ずばり何だと思う？」
「・・・お前のことだ。答えは分かる」
俺は、端から投げやりな返答だった。
どうせ、女の競技を見て胸が揺れるだの、声がエロいだの騒ぎ立てるのだろう。
「見たまえ。壮観だと思わないかね。きゃあきゃあと言う声は俺の

心を高ぶらせる。そして、飛んだり跳ねたりする時のあの揺れる胸。
まさに、女子諸君の障害物競争は最高だ」
「お前は本当に欲望に素直な奴だな。いつか、テレビに名前が出るかもしれないな」
「それはない。俺は、ＴＰＯを弁えた変態。しかし、この競技はエロいのだが、１つだけ足りないものがある。・・・とりあえず、ぽろりを、拝ませろ」

「どこが弁えているんだ？鏡を１００回見てから出直して来い」
こんな変態であっても、大助は学年１の天才。中学・高校と試験で１位を譲ったことがない。
その上、顔もいい。性格さえ、矯正してくれれば・・・。そんな声はあちらこちらで聞こえてくる。

「この変態顔をちみは、どうしろと言うのかね？え？」
「お前な・・・」

俺は、呆れて言葉が続かなかった。
たまに、当てつけだろうかと思うこともあるが、大助は男に興味がないから、自分の顔にも興味がないのだろうと俺は考えている。

「まあ、いいか。それよりも・・・何故ここに来た？」
「それはだな。景が１番俺の話を聞いてくれる。そんな景に、今日は俺が特別に体育祭の見どころをレクチャーしようというわけだ」
聞かなくも言おうとすることは想像がつかないわけではない。
大助は俺の返事を聞くことなく話を始めた。

「まずは、この体育祭をどう思う？」
「随分といきなりな質問だな。・・・そうだな、一言で言うなら面倒だ」
すると、大助は馬鹿にしたように笑った。
「ふっ、まだまだだな。要するに楽しめればいいわけだ。体育祭も同じことなのだよ」
「・・・それで、女を見ているということか」
確かに、つまらないのなら考え方を変えればいい。大助の言うことは一理あるが、奴のやっていることは、犯罪の域に入りかねない
「その通り。よーく見ると、同じ体型の子なんて1人もいない。しかし、みんな体操着。至福、いやいや眼福ですな。ありがたや、ありがたや」
「拝むな！」
俺は、大助の頭頂部に手刀で1発殴って拝むのを止めさせた。
その弾みで、椅子から転がり落ちた大助は、尻を擦りながら立ち上がった。
「・・・景、痛い」
「痛いのは当然だ。殴られれば、痛いに決まっている」
だが、大助はタダで起き上がるほど甘くはなかった。
「でも、痛いって・・・何かエロくないか？」
エロくないか？と聞かれても反応に困ってしまう。痛いのは、痛い

に決まっているじゃないか。

俺が言葉に詰まっていると、それを察したようで大助は話題を変えてきた。

「ま、それはいいとしよう。ところで、走っている女の子の3サイズ当てでもしないか？」

「・・・いや、女の体型なんて分からないだろ。あと、ついでに俺はやらないからな」

先手を打って言っておかないと、大助は勝手に話を進める。

「ふむ、確かに分かりづらい女の子もいる。ぶかぶかの体操着なのか単にぽっちゃりなのか。そこが重要なのだよ」

既に話を聞いていないみたいだが。

まあ、この場から立ち去るというのもありだが、それは友人としてどうかと思う。

仕方ないから、話に乗ってやるか・・・。

「・・・そこはどう見分けているんだ？」

質問をしたことで、俺が乗り気だと感じたのだろうか、大助は嬉々として話を続ける。

「ふっ、そんなことは簡単なこと。ラインが出ているかそうでないかの違いなのだ。割と分かりやすいものなのだよ」

「・・・そんなにじろじろ見ない」

やはり話を聞いてやるなどと思った俺が馬鹿だったな。

溜息を吐いて、少し睨みつけるみるが、大助はヘラヘラと笑い意にも介さない。

「まだまだお子様には分かるまい。この俺ならば５０メートル先の女の子の３サイズは余裕で分かる」

「で、同じくらい男も視界に入るのか？」

「野郎は視界に入らんから分からん」

「もういい。執念がそうさせているんだな」

よほど便利な目の機能を持っているようだ。

そういえば、今日の弁当は、いつもに比べて味が濃いからエリスが作ったのだろう。

後で、ありがとう、くらいは言わないと作ってくれたエリスに悪いな。

大助の話を聞きながらも、俺は弁当を食べ終わったので片づけながら適当に相槌を打っていた。

「まあ、俺くらいにはなれば、服の上からでも手に取るように、女の子のあられもない姿が・・・」

「・・・大助、それくらいにしておいた方がいい」

まさかあっさりと話を切れそうな話題を振ってくれるとは・・・。

周りの視線が痛いから、そう言いかけたところで大助は、何年も修行した仙人のように達観して話を続けた。

「景よ。そんなことができるのは2次元世界だけだ。いくら俺と言えども妄想でしか補えないんだ」
「できないのか。お前ならできると思っていたが」
俺ががっかりしたように言うと、大助は憤慨したようで、いくらかむっとした表情を浮かべていた。
「俺とて限界はある。・・・そうだ、これからの季節にぴったりの注目スポットを教えよう」
「・・・これから？どうせ、プールとか海とか水着に関係していることだろ？」
こいつは、冬に比べて夏はイキイキとしているからな・・・。
だが、大助の答えは俺の予想と違うものだった。
「ノンノン、違うね。夏になると女の子の服が薄くなる。そうすると、服の上から下着が透けて見えるのだよ。それに、たまに下着以外のものも・・・。この天然さがたまらない」
「あー、はいはい」
大助の興奮するのに反比例するように、俺は心が冷めていくのが分かった。
言いたいことは、俺も男だから分からないことはない。
だが、それを言ったら、世間体がまずいことくらい分かるから言わない。
堂々と言えることが、恥ずかしいとは思わない・・・のだろう。
羞恥心なんてものは、持っていないのだろうが、少しくらいは持つ

べきではないか？
そうすれば、今よりもずっとモテるだろうに・・・。
俺が、しばらく大助をジトッと半眼で睨んでいると、その視線を避けるように奴は体を逸らして言った。
「おっと、すまない。そろそろ時間が来たようだ」
「・・・？まだ、騎馬戦には早いが」
遠くを見るような目をしているが、一体何がいるというのだろうか。
それに、俺には大助が嬉々としているように見えて仕方がない。
「あれだ。見たまえ、俺を追いかけてくる女の子を。やはり、俺は幸せ者だ」
大助が指差した方へ振り向くと、校門の近くを走っている数人の女の姿が見えた。
「・・・あー、そういうことか」
俺には、顔までは分からなかったが、見当くらいはついた。
腕に目立つ腕章をつけているからだ。あれは、抑止効果を期待してのことだろうが、大助に限っては逆効果だと思う。
「そういうことよ。じゃあな、景。今年こそは、真夏のビーチに行こうではないか」
「・・・」
俺の返事を待つことなく大助は人混みの中へと消えていった。

それから、間もなく。
大助の言っていた女が、こちらに息を切らして走ってきた。
その人たちは、俺の見当通り、蓮華先輩たちだった。

「アリス。なぜ、捕まえない？」
「・・・俺は、一応あいつの友人ですからね」

1度は友人を売っておいてしゃあしゃあと言えるものだと俺は言葉に出してから思った。

すると、午前中には見かけなかった顔が蓮華先輩の前にずいと出て来た。

「何で、そこで友情を出すわけ？まったく、今日こそは大人しくさせようと思ったのに」

そう言った女は言葉　綾。

あいつの彼女、果ては妻ではないかと噂の可哀想な女だ。

変に面倒見がいいために、大助の事も気になって仕方ないのだろう。
年がら年中、学校にいれば2人の鬼ごっこを見ることができる。

だからこそ皆が気にしている。何故、そこまで気にするのか。もしかして・・・と。

「ところで、1つ聞いてもいいか？もしかして、大助の事がす・・・」
「あんまりふざけたこと言うと、2度と口が利けないようにあげる

わよ」

拳を眼前に突きつけられ、俺は首を横にブルブルと振った。

そういえば・・・こいつも風紀委員だったな。道理で手が早いわけだ。

俺が、驚愕の余り目を丸くしていると、ようやく気付いたようで恥ずかしさで顔を真っ赤にして、おずおずと手を退ける。

手をやり場に困って掌を見たり甲を見たり、視線同様にせわしなく動かしている姿は、先の事がまるで嘘のように見える。

「あ、ごめん・・・。何か、いつも大助殴ってるから、つい手が・・・」

「最近は、女からの暴力も多いらしいからな」

衣先輩とか、蓮華先輩とか・・・。

2人ほどすぐに脳裏に浮かんできたが、さすがに本人を前に言えるほど度胸はない。

言葉の比ではなく、言った瞬間、何をされるか分かったものではない。

俺は本人に気付かれないようにそっと蓮華先輩から視線を逸らした。

「デートDVだっけ、新聞に書いてあったよね？男の方が弱くなっただけじゃない」

言葉は、意外にも新聞を読んでいるらしい。

それに随分と変わり身の早い女だなと俺は感心した。先程顔を真っ

赤にしていた人物と同じなのだろうかと。

思わず俺は、薄く苦笑を浮かべて答える。

「彼女のいない俺には関係ないけどな」

「ははっ、言えてる言えてる。でも、それくらい愛情表現として受け止めてくれる人がいいな」

言葉と付き合う男は、随分と生傷の絶えなさそうなカップルになりそうだと俺は思った。

・・・・・・。

・・・。

大助は、そういうのもありのような・・・。

やっぱり、この2人はお似合いのカップルだよな。

そう思ったが、今度は口にしなかった。

外伝７：体育祭談義（後書き）

本編後の雑談

加奈「今回は、主にエリスの動作環境についてです」
甘奈「あんたは紹介しないんだから、黙っててくれる？」
加奈「それでは、どうぞー」
甘奈「・・・誰か代わってくれないかな？」

気温：－５０～９０℃
湿度：特に影響なし
気候：夏場は注意
天候：特に影響なし

甘奈「その他、海外でも全く問題はありません。そして、言葉もさまざまな言語に対応。是非、一家に一台」
加奈「注文来るのかな？」
甘奈「それなら問題ないの。興味を持ってくれる人は、世界中にいるから」
加奈「うわ・・・世界がオワッテル」

甘奈「客に対してそれは失礼でしょ。どんな客でも客は客よ。買ってくれれば、それでいいの」
加奈「・・・あんたの方が、客をなめてるって」

第５７話：体育祭～帰路～

片付けの手伝いと言う名の、後始末が済んだのは午後６時になる頃だった。

陽は海に沈みかけ、オレンジのような色でありながら、あと１０分もすれば消えるであろう光が、校庭を照らしていた。

校庭に残っているのは、男ばかりで女は遅くなると危険だという理由から早めに帰されていた。

ついでに、監督の女教師も帰ったが、それはどうかと思う。

翌日も体育祭は続くのに片付けをする理由は、置いておくと雨に濡れると使えなくなるものも多いからだという。

明日も晴れなわけだが・・・。

元々、人が足りなくなることは分かり切っていたことだった。

エリスも手伝うと言ってくれたのだが、俺がそれを許さなかった。

何と言うのか、俺の存在意義がなくなりそうだから。

「・・・手伝ってもらえばよかったかな」

人数がそこまで多くなかったために、必然的に１人当たりの仕事が多くなり、最後には全員が倉庫前で倒れるという有様だったのだ。

唯一の救いは、全員真面目に仕事をしていたことだろうか。

そのために、この後歩いて帰るのはしんどいと感じてしまう。

陽はほぼ見えなくなったが、まだ暑さが残っており俺は、既に温くなったお茶を飲みながら校門に差し掛かっていた。

温いお茶でも、喉の渇きは潤うのだが、体の火照りを冷ましてくれるあの冷たさがないのは、やはり物足りない。
コンビニでも寄って行くか。そう考えながら、校門を出ると不意に背後から明るい声を掛けられた。

「やあ、有栖君。お疲れ様」
「やっほー、お疲れさま」

誰かを待っているのだろうか。そう思ったが、声をかけられて無視するわけにもいかない。

「有斗先輩に、彼女の方。お疲れ様です」

あまり会いたくない人に会ったな。特に、先輩の彼女とは会いたくなかったんだが・・・。
そう思うが、もちろん表に出すようなことはしない。嫌いと言うよりも苦手なだけだから。

「彼女の方って・・・。雪音で構わないよ。あ、でもあるちゃんが嫉妬するから、せめて大城さんって言ってくれないかな？彼女の方なんて呼び方、初めてされたよ」
「はあ・・・。本当にすまないね。雪音さんが無茶苦茶言って」

ところで、この2人はこんな場所で何をしているのだろうか。
大城さんは、黒い日傘を左手に持ち、右手を有斗先輩と繋いでいる。
日傘は、昼間には使っていなかったが、あれはたぶん大勢の人の中で使うと迷惑だから止めていたのだろう。今は日焼け止めクリーム

だってあるから無理をすることもない。
今日は暑かったせいで、大城さんの服も腕やら足やらの露出が多い。
日傘だけで他に何もケアしなければ当然焼けるだろうと思う。
ただ、有斗先輩の彼女に興味があるわけでもないので、さっさと帰ろうと思い、頭を下げると俺は回れ右して一歩前に出ようとした。
だが、大城さんの声がした同時にガッと襟首を掴まれた。

「っ！？」

首が・・・・・・。

「雪音さん、引っ張りすぎ！！」
「えっ、うそっ！？」

有斗先輩の声で、大城さんは咄嗟に俺の襟首から手を離した。
俺は、その反動でそのまま地面に倒れこんだ。
地面は整備されていて綺麗だが、石であることに変わりはない。

当然、痛かった。苦しかった。

「げほっ、げほっ・・・」
「ごめんね。本当にごめんね」

そう言って、背中をさすってくれるのはいいが、俺は別に嘔吐したわけではない。
とりあえず、服を叩くと俺は立ち上がった。

「・・・もう大丈夫です。俺は、不幸耐性が高いので気にしないでください」

不幸耐性云々は、主にエリスのせいだ。
エリスが来てから俺自身が変わったこともあってか色々なことに巻き込まれるようになったのだから。

だが、場を少しでも和ませようと言ったが大した効果は得られず、その後１０分ほど俺が先輩たち２人、特に大城さんにどうにか立ち直ってもらおうと必死になる羽目になった。

完全に夕日も落ちて、辺りが暗くなった。
道沿いの街灯の明かりも輝き始め、その光が俺たちを照らし、影が光の射す方とは逆に伸びていく。

ようやく先輩たちと俺は、駅へと続く一本道の下り坂をゆっくりと下っていた。
俺が、１番内側を通り、その右隣りには大城さん。有斗先輩は、１番道路側を歩いている。

「ところで、俺に用事って昼間の事ですか？」
「え、ああ・・・うん、そう」

妙に歯切れが悪いのは、完全に恐縮しているからだろうか。

まあ、先程の事を考えれば仕方ないとはいえ、気分を窺うように何度もこちらを見ないでほしい。

「俺は別に怒ってなんていないですよ。さっきも言いましたが、こ

れくらいで怒っていたら、精神的に持たないですから」

それは、エリスが来てから学んだこと。

いちいち細かい事を気にしない。

失敗には寛大であること。

子供を持つ親の性格が変わるというように、世間常識に疎いエリスも手がかかり、俺や母さんが教えているが、まだまだといったところだ。

褒めるべきは褒めて、叱るべきはきちんと叱る。そして、叱るときは、気分で叱らない。

こういうことをしていたためか、幾分俺も相手によっては丸くなったと思える。

思えるだけだから、何とも言えないが・・・。

「ところで2人きりで帰らなかった理由って、やっぱり昼間の話ですか？」

大城さんの歯切れが悪いので、今度は有斗先輩に尋ねてみる。

「んー、僕は少し違うかな。有栖君に話をしておきたいことがあっ

てね。雪音さんと違って、真面目な話だったから待っていたんだ」
「それなら明日でもよかったんじゃ・・・」
「明日には君に紹介するからね。もう、雪音さんが相手には連絡済みさ」

落ち込んでいてもやることはやっているんだなと、大城さんの抜け目のなさに俺は舌を巻いた。
しかし、今の大城さんはそんなことを全く感じさせなかった。

「やっぱり迷惑に感じるよね・・・。ごめんね・・・」

どうにも先程のことを気にしているらしい。
昼間とは、まるで別人のように大人しく、借りてきた猫のようだった。

「いや・・・そんなに気にしなくても。・・・そうだ、よかったら1つ俺の質問を受けてもらってもいいですか？」

俺の提案に、2人ともきょとんとして立ち止まる。そして、2人とも2つ返事で了承してくれた。

それを見て俺は、先輩たちの前に立つと単刀直入に聞いてみた。

「先輩たちにとって、幸せって何だと思いますか？」

これは、単純に興味があったということだけでなく、簡単に答えにくい質問を振ることで意識を誘導する狙いもある。
案の定と言うのか、2人とも真面目に考え込んでいた。

「うーん・・・難しい質問だね・・・」

難しいというよりも漠然とした質問だと俺は思う。
１０人いればきっと１０人違う答えが返ってくるような漠然としたもの。正解なんてどこにもないものだ。

質問をしておいて、言うのもおかしいが、そこまで親しくもない人にこの質問をしたら俺がおかしい人か、変な勧誘か何かとして扱われるだろうと思う。本当は、すぐに冗談ですと言うつもりだった。だが、本当に真剣に考えているものだから、俺がもういいですと言える雰囲気ではなかった。

・・・おかしいなら、おかしいで別に構わないが。

しばらくして先に答えを見つけたのは、有斗先輩だった。

「有栖君は、随分と哲学的な話が好きと見たけど・・・。一概には言えないけど、少なくとも僕は雪音さんといるときは幸せだと感じるよ。そうだね、彼女を見ていると心が安らぐ・・・これが幸せって気持ちなのかな」

しみじみと語っている有斗先輩には悪いが、俺にはどうしても惚気話にしか聞こえない。
すっかり俺のことを忘れているので大城さんをちらりと見ると、これ以上ないくらいに笑顔だった。

「えへへ、私もあるちゃんと同じ気持ちだよ。有栖君はどう感じるかは分からないけど、私はあるちゃんって呼ぶ時が一番幸せ。あるちゃんっていう響きがいいの。響がいい・・・きゃはっ・・・私ったら何言ってるのかな？本当にもう・・・バカバカ」

そう言って、大城さんは有斗先輩の背中を顔を真っ赤にしてバシバシと叩いた。

「いたたた、雪音さん力が入りすぎ」

「ええっ、男の子なんだからそれくらい大丈夫でしょ。うん、大丈夫。あるちゃんは、とっても強い子だから」

大城さんも俺のことなどすっかり忘れているようで、笑顔のまま有斗先輩に抱きついた。

有斗先輩も満更ではないようで、そのまま受け止めると大城さんの頭を撫でていた。

「だからと言ってバシバシ叩かなくても・・・。」

「もうっ、あるちゃんってばー、違うって。あるちゃんは、別に体力ないし。でも、心が強いじゃない。私は、そんな曲がらないところが好き。それに、倒れても私が看病してあげる」

すっかり2人は自分たちの世界に入り込んでいるようだ。

だが、この道は、今の時間帯は会社帰りの人などもいて、人通りは決して少なくはない。

先程から、通行人が迷惑だと言わんばかりに俺たちに視線を向けている。これを止めろと？

「・・・。俺が話題を振っておいてアレなんですが・・・」

「あ・・・」

今更俺の存在に気づいたと言わんばかり声を上げて大城さんがまた顔を赤くする。

今度は、照れではなく恥ずかしさで。

「・・・もしかして、愛想が尽きたかい？」

「いえ、別に。先輩にも意外な一面があるんだなと驚いている所です。ついでに、そうやっている人たちがいるのは少し羨ましいと思います」

それが、俺の素直な感想だった。
ただ、少しだけ違和感を感じたのも事実だった。

「・・・こ、これがね・・・普通のカップルなんだよ。ね、あるちゃん」
「あ、うん。僕たちは少し行きすぎかもしれないけど、それでもカップルはこんなものだよ」

「いや、それはどうでもいいです。・・・と言うより、何だか子供がじゃれ合っているのを見ている親のような気分がしました。何でしょうか？」

「「・・・」」

・・・聞いても分かるわけないいか。

「さっさと帰りましょうか。それに、近所迷惑ですし」
「「・・・はい」」

恥ずかしさのあまりにすっかり小さくなってしまった2人を余所に俺は、坂道を下り始めた。
散々惚気話に付き合ったのだから、この程度反撃しても罰は当たらないと思う。

その後は、特に他愛のない話をして、駅までたどり着いた。
駅に着いたので、さっさと帰ろうとすると大城さんが恨みがましく言った。
「でも、有栖君があんまり大人だから驚いちゃった。年上としては、何か凹むよ」
「そこが、大城さんのいいところじゃないんですか？有斗先輩もそういうところが好きになったんですよね？」
「そうだね」
有斗先輩が言ったのは、たったそれだけだったが、それだけで十分だった。
「有斗先輩。顔真っ赤ですよ」
「・・・そうだね」
すっかり2人で照れ合っているが、俺はこの場にいてよかったのだろうか？
2人の好意にすっかり甘えていたが、俺の存在は2人にとって邪魔でしかないはずだ。
今度こそは、挨拶だけしてさっさと帰ろうとすると、今度は有斗先

輩に先を越されてしまった。

「雪音さん。僕は彼と2人だけで話がしたいから、先に行ってもらってもいいかな？」

「あ、うん。ホームで待ってる」

何故、この2人は、俺の喋るタイミングをことごとく潰すのだろうか。

大城さんが、先にホームへと上がっていくのを有斗先輩は見届けると、改めて俺に面と向かって言った。

「・・・雪音さんと僕がとてつもなく迷惑をかけてしまったね。自分勝手で本当にごめん」

「気にしないでいいですって」

俺は、真面目に受け取るようなことはせず、曖昧に笑ってはぐらかした。

先輩も、ほっとしたように胸を撫で下ろすと、俺に対しては久しぶりに笑みを浮かべた。

「そう言ってもらえると僕も気持ちが楽になるよ。次からは、自重するように気をつけることにするよ。君に嫌われたくはないからね」

「嫌いになんてなりませんよ。俺は、嫌いになったら黙って離れますから。それで、話っていうのは？」

俺が話を促すと、有斗先輩は少しだけ勿体ぶったように間を空けてから言葉を選ぶように話し始めた。

「そうだね・・・。明日、紹介する子のことなんだ。色々と言って

おいたほうがいいと思ったけど、有栖君。君なら安心だ。付き合う付き合わないはどうでもいい。僕たちは、そんなんで紹介はしないよ。色々と考慮はするけど、1番大切なことは友達としてやっていけるかということなんだ。カップルができたのは結果論に過ぎない」

俺は、黙って話を聞いていた。

今まで散々俺の前で、本人にとっては醜態を曝してきた先輩が今は別人のように真面目に語っていたからだ。

1度話が中途半端に途切れ、俺が続きを聞こうとすると、やはりと言うべきか有斗先輩が再び話を始める。

「・・・これ以上はよそうか。あとは、本人から聞いてみてくれ。彼女の力になってあげてほしい。僕や雪音さんだと、彼女は悩んでいることを思い出してしまうと思うんだ」

・・・要するに、俺に人助けをしてほしいということか。

「君を利用するようで悪いと思う。もし、有栖君。君がＯＫと言うなら、明日の9時半に中庭の噴水前に来てくれないか？僕が言いたいことはそれだけ。・・・それじゃ、また明日」

そうして、有斗先輩は俺に手をあげて1度2度振ると、そのまま俺とは反対側方面のホームへと階段を上って行った。

先輩の姿が見えなくなり、反対側に比べて人の少ないホームに立って線路を見ながら、心の中で呟く。

・・・ところで、そんなに悩みを抱えている人って誰だ？

しばらく考えてみても、答えは出なかった。

第５７話：体育祭～帰路～（後書き）

本編後の雑談

甘奈「今回で、一応最後ということになりました。何故？何？エリスのコーナー。今回は、今後の展望についてのお話です」

加奈「下記に、一部を抜粋したので、よろしければどうぞ」

甘奈「何もないって・・・。私たちの今後としては、まずエリスの蓄積したデータを解析して、より人に近いロボットにすることね」

加奈「ついでに言うと、今回エリスでできなかったことを、新型ロボットで試そうと思ってるよ」

甘奈「そうね、今のところ、メイドロボットと警護ロボットの２種類が検討されているからね」

加奈「新型のロボットは、９月頃には登場する予定で、この子も半年ほど実際の人の家庭で生活してもらう予定になっています」

甘奈「そろそろマスコミ向けにプレスリリースを出す予定になっているの」

加奈「来年には、順次メイドロボットは生産が始まって、いよいよって感じかな」

甘奈「・・・あ、そうだ。部長連れ戻さないとね」

加奈「そうだね。・・・それじゃあ、またねー」
甘奈「長話を失礼しました」

第５８話：体育祭～花蝶～

体育祭２日目の朝は、これまた憎らしいほどの快晴だった。
天気予報によると、今日も晴れ。気温も昨日に続いて今年最高を更新するのではないかと天気予報士が言っていた。
隣を歩く幼馴染が言う。
「今日も暑くなりそうだね～。日焼け止め塗ってきた？」
俺は言う。
「もちろん塗った。去年は塗らなかったから、後で酷い目に会ったからな」
くだらない話をしながら、俺と恵麻は駅へと足早に歩を進めた。
その途中、恵麻が言った。
「そうだ、景君。よかったら、お昼一緒に食べようよ。今日は、たくさん作ったんだよ～」
「そっか。・・・って、昨日母さんたちがそっちに泊りに行ったのはそのためか」
俺は、昨日母さんがいなかった理由をようやく理解することができた。
今日は、弁当もなかったので昼飯をどうしようかと思っていたが、

どうやらこういうことだったらしい。

「分かった。折角だから一緒に食べるか」

「うん」

午前中は、暇と言ったら真剣に頑張っている奴らには失礼だが、暇だった。

暇で、暇で、暇で、何をしようか、ずっと考えていた。

「・・・」

楽しみ方は人それぞれだと大助は言っていた。

あの変態に正論を吐かれると、何だか複雑な気分になる。

だから、俺は俺の楽しみ方で、体育祭を楽しむ。

そんなことを考えながら、俺はまどろみに身を委ねる。

「僕の膝枕はよかったかい？」

この言葉をかけられるまでは・・・。

「・・・」

「やあ、有栖君。おはよう」

目を開けると、そこには有斗先輩の顔のアップが目に飛び込んできた。

「っ！？」

俺は、一瞬で意識が覚醒した。

慌てて起き上がると、有斗先輩のアップのせいで視界に入らなかった人がいることに気がついた。

「・・・ちょっとアブノーマルっぽくて、ドキドキしちゃった」

1人は、先輩の彼女、大城さん。

「くすくす。有栖君、驚きすぎだよ」

もう1人は、明月院さん。

どうやら、予定の時間になっていたようだ。
今日は、先輩から紹介された人に会うことになっているのだが、該当する人は1人しかいない。

「・・・先輩の言っていたのって」
「そう。彼女だよ」

そう言いながら有斗先輩は、右手でその人を紹介する。

つまり、有斗先輩が言っていた助けてほしい人というのは、目の前にいる・・・。

「よかった、有栖君で。知らない男の子だったらどうしようかと思ったの」

何故か安堵の表情を浮かべる明月院さんということになる。

あまり親しくないからこそ、逆にいいということか。

だが、親しくないから何を話していいのかよく分からない。
異性に対して、何を話すべきか。そもそも、幼馴染の恵麻や男とそう大差ない由真と違い、明月院さんは正真正銘の他人。
加えて、女。・・・共通の話題なんてあるのだろうか？
悩んでいると全く会話のネタが出てこない。何かないか、そう考えていると、明月院さんは俺の顔を覗き込んで悪戯っぽく笑った。

「有栖君、表情が硬いよ。もっとこう、リラックスして話そうよ」
「あ、ああ。・・・ごめん」
俺の返答に大城さんは、頭を抱えて情けないと言わんばかりの表情をしていた。
当然と言えば当然だ。期待していた男がこれだからな。
そして、痺れを切らせたのだろう、大城さんがぐいと俺たちを近づけさせると、両腕で俺たちの肩を抱いて耳元で囁くように言う。
「2人って何か趣味はある？」
「な、何するんですか！？」
俺が文句を言うと、大城さんは小悪魔のように唇の端に人差し指を当てて、けらけらと笑う。
いきなりのことに俺は戸惑い、有斗先輩に視線で助けを求めてみた。
「ん？これは、いつもの事で、僕らはただにやにやとしながら、それを楽しむだけだよ」
「そうそう。で、趣味は何なの？共通の趣味はお互いの距離を近づける第一歩よ」
どうやら、これがいつもの事らしい。
2人が助けてくれないことがはっきりと分かると明月院さんの間にはしばらくの間沈黙があった。
すると、沈黙に耐えかねたように明月院さんが、おずおずと話しか

けてきた。

「ね、ねえ、有栖君。昨日の続きの話なんだけど、ゴールデンウィークの珍味展は行った？」

「あれか・・・。俺行けなかったんだよな」

「私も。って、その日は、有栖君の家にいたんだから当たり前だね」

ふふっと笑う笑みは、あの日のことを思い出してのことだと思う。

明月院さんがどう思っているかは分からないが、頭の悪い大人の頭の悪い遊びによく付き合ってくれたものだと不思議でならない。今でも俺にとっては闇に葬りたい歴史だ。

つい半月ほどの前の出来事を思い出して、恥ずかしさのあまりに転げ回りたくなる衝動を抑え込む。

本当にに転げ回ったら、俺はただの危ない人になってしまう。

「じゃあ4月は？」

俺が色々と悩んでいることなどつゆも知らぬといった明月院さんの様子を見ていると、1人で思い悩んでいるのが、バカみたいに思えてきた。

「あれは行った。1時間くらいだったけど、トマトジュースと汁粉はちょっと・・・」

「あー、分かる分かる。あれは・・・飲めないよ。私、臭いに負けちゃった」

よく分からないが、久々にこのネタで話をさせてもらっている気が

する。
その相手というのが、明月院さんというのだから、また世の中は不思議なものだ。

「でも、イナゴの唐揚げは良かった。見た目は悪いけど、揚げれば何も気にならない」
「へー、そうなんだ。私は、定番の蜂の子を食べてきたよ。噛んだ時の感触が病みつきになるの」

「蜂の子はいいな。けど、俺は、隣にあったゴキブリが食べられると知って驚いた。世界では、食用として養殖したりする所もあるらしい。意外に可食部が多いんだって」
「ふーん、私はペットで飼っている話なら聞いたことあるけど、あれ食べられるんだ・・・」

ゴキブリの話題は話してからまずいと思ったが、明月院さんは、それほど驚いた様子は見せなかった。
ただ、わざとらしく手を口元に当てて、口をポカンと開けている。
俺は、それを確認するが、あくまで参考ということを言ってから話を続けた。

「日本のは食べられない。ただ、そういう種類のがいるってこと」
「私もそうだけど、あれを食用なんて考える人って、あまりいないよね。あ、そうそう。昔、ゴキブリを食べて死んだって人が・・・。ちょっと怖いよね」

明月院さんは、そのことを信じて疑っていないといった様子だった。
その純真さが魅力であるが、否定してあげないときっとこのまま信

じたまま人生を送ることになりかねない。

「あれは違うらしい。本人は生きているし、そもそも内臓食い破って出てこないって。あれは胃液で溶けるそうだ。・・・でも、肺だったら分からないけどな」

「明日の珍味展にあるかな？んー・・・でも、逃げ出したらすごいことになるね。頭に乗っかってきたりして」

さらりと恐ろしいことを言うんだな。自分で話題を振っておきながら、何故か俺の方が想像したら身震いしてきた。

「・・・まさか。でも、あったら食べてもいいかもな。・・・なんて・・・・たちの悪い冗談だが」

つい、本音がちらりと出てしまい、俺は慌てて冗談めかした。

だが、明月院さんは最後までしっかりと聞いていなかったようだった。

「うわっ、チャレンジャーだね。私、応援するよ。・・・大丈夫そうだったら、食べてみようかな」

俺は、実験台なのか。

明月院さんは、嘘か本当かは分からないが、期待しているねと大真面目に言った。

もちろん、俺はそれを無視すると、話題を少し元に戻す。

「それにしても、明月院さんって、案外ゲテモノが好きなんだ」

「本人を目の前にして言うかな。それに、有栖君は、人の事言えないでしょ？」

くすくすと笑う明月院さんの笑みは、いつも友人に向けているそれと同じものだった。

だが、俺と明月院さんの会話を余所に、有斗先輩と大城さんは何だか表情が冴えない。
特に大城さんは、話題を振ろうものなら、ぶるぶると怯えた子猫のように警戒心を露わにして、さらに威嚇された。
有斗先輩も黙って首を横に振って目を覆ったり、頭を抱えたりと忙しい。

先程までは、俺や明月院さんを見て楽しんでいたはずだったが、今はその時の余裕はどこにもなかった。

・・・いいか、好き好んでこの場にいるわけだし。

俺は、2人の存在を無視することに決めた。

「そういえば、明日もあるな」
「さっき、私言ったよ。聞いてなかったでしょ」

明月院さんは口を尖らせて抗議してきた。

拗ねた顔もまた可愛らしいと思えるところが、男の人気の秘訣なのだろうなとぼんやりと思う。

「あー・・・そうだった。ごめん。で、目玉は、エチゼンクラゲ定

食だったかな・・・」
「うんうん、有栖君はあれを食べに行くんだ」
コロコロと変わる表情も見ていて飽きない。
「もちろん。後は、色々と巡ってみるつもり。もしかして、明月院さんも行くの？」
「だって1か月に1度なんだから当然だよ。今月はたまたま2回あるけど、たぶん来月はないと思うし」
「ふーん、そうなのか。でも、同じ所に行くってことは会場で会うこともあるかもしれないな」
運が良ければ、会えるかもなと淡い期待を込めて言ってみた。
同学年でトップクラスの美人が目の前にいれば、邪な考えが少しくらい浮かんできても仕方ないと思う。
「あ、そのことなんだけど・・・」
「あ、大丈夫。俺は、誰にも言わないから」
急に声をかけられて、自己を正当化している最中だった俺は思わずよく分からないことを口走ってしまった。
目の前の相手は、戸惑いではなくきょとんした表情を浮かべ、ああと何か1人で納得すると俺の鼻先に指を突き付けて少し怒ったように言った。
「そうじゃなくて・・・」
勢いよく話しだした明月院さんだったが、それから言葉が続かなかった。

しばしの沈黙が場を支配している。こんな時、俺は何と声をかけたらいいのだろうか・・・。

・・・・・・。

何も言葉が浮かんでこない。何度も目と目が合う度に気まずさは増すばかり。

ちぐはぐとした空気が、俺たちの間に広がっていく。
俺は、話が全くできないあまりの情けなさに穴を掘って埋まりたい気分だった。
それでも、何とか振り絞って出てきた言葉は、ただこの雰囲気をどうにかしたいという一心だった。

「・・・言いづらかったら、別に言わなくてもいいよ」

「ありがとう、有栖君は優しいね。・・・あの・・・明日、暇かな？」

真っ直ぐに俺を見つめる目に思わず圧倒される。

俺は、思わずその瞳に見つめて、何だかぼーっとしてしまい、言葉すら出てこなかった。

「・・・暇・・・だよね？」

念を押すような聞き方。

「あ、うん」

勢いに押され、間抜けな返事をすると明月院さんは、ちらちらと時折恥ずかしそうに視線を外しながらも、懸命に伝えようとする。

「昨日も言おうとしたけど・・・・・・よかったら、一緒にどう・・・かな？」

一緒に！？

俺の頭は、混乱していた。その間にも、明月院さんは話を続ける。

「嫌だったら、嫌で構わないよ」

昨日の話は、これだったのか。

・・・・。

だが、すっかり忘れていたとはとても言えるわけない。何となく合わせて話をしてみる。

「ああ、昨日の話ってそれだったのか。・・・でも、俺なんかと行っても楽しくないと思うけど？」

「ううん、そんなことないよ。今だって、十分楽しいよ。もしかして・・・、私だと嫌な理由がある？」

明月院さんは、不安そうに俺の返事を待っているようだった。

・・・・・・。

俺は、今更ながらに決心すると重い腰を上げて、明月院さんの方へと改まって向き直った。

「いや、そんなことない。・・・よければ俺と一緒に回ってくれないか？」

だが、返事は意外なものだった。

「えっ・・・どうしっよかな？」

もしかして、怒っている？

そう思ったが、その心配は杞憂のものだった。明月院さんは、耐えられなくなったように吹き出すと、笑うのを堪えながら言った。

「・・・なーんてね、冗談。はい、これで決まり。それじゃあ、明日の午前9時半。デパートの正面玄関前でね。それにしても、有栖君は本当に素直だね」

結局、俺は掌の上で遊ばれていたということか。

少しばかりむっとして見ると、ごめんごめんと謝る気のない笑顔で返された。

すると、大城さんが背後からぼそりと言った。

「はぁ・・・。有栖君・・・悪いけどヘタレ過ぎ。俺と行っても楽しくないって？こらっ、女の子に気使わせてどうするの・・・」

俺は、大城さんにヘタレ呼ばわりされたが、俺にだって言い分はある。

そんなに親しくないのに、気軽に誘えるほど女性経験はない。

だが、明日の9時半か。

少しだけ明日が楽しみになった気がした。

第５９話：体育祭～弁当～

あそこか・・・。

午前の競技は、予定よりも早く終わり、俺は今、校庭の端にある丘へと来ていた。

少し離れた大きな木の下で、大きく手を振る恵麻と琴美ちゃんの姿が見える。

昼飯を食べるらしく弁当すら持たせてもらえなかった俺は、当然、昼飯にありつくために母さんや恵麻の姿を探すしかなかった。

とりあえず木の下ということもあって、意外と人が多い中でもあっさりと見つけることができたのは幸いと言える。

だが、見つけたら見つけたで、問題があった。

母さんが俺を見るなり、いきなり驚いた顔を見せたからだ。

「景ちゃん、その子・・・明月院さんよね？」

「ちょっとその辺りで会ったから誘ってみたんだけど、悪かった？」

実は、１時間強、話をしていましたとはあえて言わなかった。

そして、お昼、暇だったら一緒にどう？と恵麻もいると誘ったことも言わなかった。

しかし、母さんは、別にそれはいいけど・・・と歯切れが悪い。
そして、肘で俺の脇腹を小突くと、俺があえて見ないふりをして方に向くように小声で言う。
・・・・・・。
・・・恵麻の目が怖い。俺はちらっと確認だけすると再び視線を逸らす。
「有栖君のお誘いを受けて、お邪魔します。こんにちは」
それに対して、明月院さんはさして気にした様子もなく、挨拶を交わしている。
「陽菜ちゃん、こんにちは～。陽菜ちゃんも一緒なんだね～」
恵麻も何だか楽しそうだ。
先程のは気のせいだろう。そう思い、声をかけようとするが・・・。
ふんっ。
一睨みされて、ぷいと顔を背けられてしまった。
・・・・俺が、何をしたっていうんだ。

訳も分からず、俺は途方に暮れるしかなかった。

恵麻のことは、諦めた俺は、その幼馴染から1番離れた場所に1人陣取っていた。

母さんの隣に座るのも恥ずかしい。

エリスは、その先輩たちや母親組、琴美ちゃんと話をしており、父親組は2人で少し寂しげにおかずをつついていた。

・・・俺もあちらに混ぜてもらおうか。

「有栖君、隣いいかな？」

不意に声がかかり、見上げるとそこには小さな弁当箱を持った明月院さんの姿があった。

特に断る理由もないので、了承すると明月院さんは、ありがとうと微笑んで座った。

すると、間髪入れずに今度は反対側から声がかかった。

「景君・・・。私も隣いいかな？」

「恵麻か。そういえば、さっき怒ってなかったか？」

恐る恐る尋ねると、恵麻は、澄ました顔で言った。

「そ、そんなことないよ。気のせいだよ、気のせい」
「そうか？まあ、いいけど・・・。俺の隣でよければどうぞ」

「ありがとう」

屈託のない笑顔で言われると、これ以上追及するのは止めにしようと思ってしまう。

恵麻が、不機嫌でなくなったことにほっとしたのだろうか、きゅーと腹の虫が鳴った。

「「・・・ぷっ」」

両隣の2人にほぼ同時に笑われてしまい、耳まで真っ赤にした俺は飯を取りにその場から離れた。

「しかし、随分と豪勢な物を作ったな・・・」

適当に皿に盛りつけながら、俺は半ば呆れかえっていた。
重箱にこれでもかと詰まったおかず。数を数えるのも面倒なくらいにおかずの種類があった。

たぶん、作ったのは母親2人と恵麻、エリスの4人だろう。

・・・でも、どれが誰のだろうか？

適当に盛り付けてみたのはいいが、やはり親しい人が作った物なので最低限その人に感謝しておきたい。
とりあえず、恵麻に聞いてみようと思い声をかけると、快く教えてくれた。

「まずはね、そのから揚げがお母さん、卵焼きは景君のおばさん、おにぎりと春巻はエリスちゃん、そこのサラダと、肉じゃがは私」

とりあえず、皿に乗っているのだけを教えてもらった。

都合よくと言うべきか、４人が作ったものがそれぞれ皿にはある。

この中では、恵麻の母親である愛美さんが最も料理が上手だ。
次点で、母さん、恵麻といった所になる。

まあ、たまに食べる他の家の料理だからこそ美味しいと感じるのかもしれない。

皿がそこまで大きくないので、元の場所へと戻り、恵麻と明月院さんの対面に俺は座ると、１人手を合わせた。

「いただきます」

そして、ごく自然に食べ始めた。

「景君。どうして、そこで食べてるの？」
「有栖君は、ここにいたよね」

だが、俺にとっては自然な行動も２人には不自然に映ったようだ。

「こっちにおいでよ。あー、分かった。恥ずかしいんでしょ、女の子2人に挟まれて食べるのが」

小悪魔のような笑みを湛えて指摘する明月院さん。

まさに図星なわけだが、それを素直に認めるのもまた悔しい。

「いや、食事はやはり互いの顔を見ながら食べる方がいいと思うんだ。横に並んでいたら、よく見えないと思わないか？」

「・・・何となく景君がごまかそうとしているような気がする。でも、私もそう思うよ～」

何だか明月院さんを牽制するように恵麻は言う。

それを見た俺は、恵麻の所で膝立ちで移動するとがしっと両手を握って意味もなくぶんぶんと振ってみた。

「恵麻は分かってくれるか」

「ちょっ、景君。私は、ただ思ったことを言っただけだよ～」

「俺、恵麻が幼馴染で本当によかった」

「私も景君が幼馴染でよかったよ～」

すると、明月院さんが拗ねたような口調で言った。

「なーに？　それ、私に対する当てつけ？」

「んー・・・まあ、そうかもな」

味方のいる俺は、少しだけ強気だった。

だが、明月院さんはつまらなさそうに無表情になると一言だけ言っ

た。

「ふーん・・・」

目が据わっていて正直言って怖い。

こういう時に、素直に謝らないとどうなるかは、昔から恵麻で実証済みのことだった。

「・・・ごめんなさい。少し調子に乗りました」

俺が謝ると、明月院さんはしばらくじっと目を見ていたが、すぐにっこりと笑った。

「ふふっ、よろしい。ということで、私のおかずも1つどうぞ。これ、自信作なんだ」

俺の皿に置かれたのは、ウィンナーだった。

それを見て、ある種当然とも言える疑問が湧きあがってくる。

「・・・これ、手作りじゃないよな？」

「え、よく見てよ。ほら、タコさんウィンナーなんだから」

自慢げにそのウィンナーを爪楊枝に刺して見せてくるが、よく見るとおかしい所があった。

・・・足が2本多い。それは、タコじゃなくてイカだ。

それを口に入れてみるが、特に何の変哲もないウィンナーだった。
「・・・うん、おしかった」
「いが抜けてるよ。・・・まったくもう、素直じゃないんだから」
子供の悪戯に目を瞑る母親のような言い方に、何だか俺は抵抗を覚えた。

・・・単に恥ずかしいだけなんだが。

そんなことを考えていると、明月院さんは既に恵麻との話題に移っていた。

「陽菜ちゃん、私もいい？」
「うん、どうぞ。私も1つ」

「あ、おいしい」
「恵麻のも、おいしいよ」

・・・。

特に考えもなしにぼんやりと2人のやり取りを眺めていると、急に話が俺の方へと戻ってきた。

「景君。これも、おいしいよ」

そう言って、恵麻が箸を俺に向けて突き出してきた。
俺は、当然のように皿を出して、置いてもらおうとした。

だが、恵麻はその皿の存在など知らないと言わんばかりに、箸を更に突き出した。

「はい、あ～ん・・・。ねえ、早くしないと落ちちゃうよ～」

「ちょっと待て！　何がしたいのかさっぱり分からない」

人前で堂々とあーんなんてできるはずもなく、俺は動揺を隠しきれなかった。

すると恵麻は、俺の様子を窺いつつ、遠慮がちに言った。

「・・・私も褒めてほしい」

「わ、分かった。でも・・・そんなことされたら、気が気でなくて料理の味が分からなくなりそうなんだが・・・」

俺がそう言うと、恵麻はそれもそうだねと言って皿に煮豆を置いた。

それを見て俺はなかなかおいしそうだなと感じた。

そして、それを箸に取り口に運ぼうとした時だった。ふと、俺をじっと見つめる2つの目に気がついた。

「あっ、気にしないでいいよ。有栖君の可愛らしい一面が見れて面白いから」

気にするな、そう言われて気にせずにいられれば、それは大したものだと思う。

・・・・・・。

とりあえず、俺はその目を見ないように豆を1つ恵麻の皿から取る

と口に入れて咀嚼する。
その甘さが口に広がっていき、少し落ち着きを取り戻すと、先程の言葉がなかったかのように振舞った。
「そ・・・それにしても、恵麻はまた料理が上手になったんじゃないか？」
「そ、そうかな？　でも、褒めてもらえると作ってよかったって思うな～」
そう言ったものの恵麻は、少し残念そうに煮豆を自分の口に運んだ。
「でも、面白いものだよな」
俺がそう言うと恵麻は首を傾げた。
「何が？」
「エリスは、料理の味なんて分からないのに、今ではしっかりと料理ができる。恵麻だって、昔から料理ができたわけじゃない」
「景様。・・・褒めて頂いて、私は嬉しいです」
「つまりだ。俺もやれば・・・」
そして、話の核心を言おうとした時。
恵麻が、突然不自然なくらいに大声を出して俺の言葉を遮った。
「できないよ！　ダメ！！　絶対、ダメ。それなら、私が作ってあげるから、ね？」

そのあまりに切迫した表情に、俺だけでなく明月院さんも目を丸くして驚いている。
それでも、何度か同じことを言われている俺はすぐに立ち直り反論を試みた。

「ね？　と言われてもな。恵麻とエリスが料理ができるようになったのに俺だけ作れないのは不平等だと思わないか？　台所が男子禁制の時代はとっくにもう終わったんだ」

「それは、景様の料理があまりに酷いからです」

背後から身も蓋もないことを言われて、俺はその場に倒れこんだ。

「大丈夫です、景様。結婚は難しいですが、私がいます。家事は、全てお任せください」

俺は、フォローなのか追撃なのかよく分からないエリスの言葉に心の中で涙した。

だが、ふと我に返り、気がついた。エリスがいつの間にか会話に混ざっていたことに。

「・・・って、エリス。お前はいつからそこにいた？」
「おしかった・・・の辺りからです」

どうやら少し前から俺の真後ろにいたらしいということを話を聞いていくうちに分かった。
ついでに恵麻と明月院さんはエリスの存在に気がついていたが、あえて黙っていたらしい。

この2人は、結局の所気が合うのだろうと俺は思った。

「・・・よく分かった。でも、1つだけ納得できない所がある。結婚できないって・・・何故、そこまで確信を持って言えるんだ？」

すると、エリスは淡々と洗濯物を畳むように、作業的に言った。

「・・・メイドがいるということで、景様は有名です。少なくとも変わり者の方でもない限り、結婚は無理かと」

俺はその言葉に雷に打たれたかのように固まった。

あまりに真理を突いた言葉だったからだ。

しばらくの間、嫌な沈黙が俺たちの間にはあった。それを打破したのは、恵麻のおずおずとしながら言ったことだった。

「・・・景君。貰い手がいなかったら・・・・・・私が貰ってあげるよ」

その言葉は恵麻の口から聞くこと自体、久しいが何度か聞いたことのある言葉だった。

耳まで真っ赤にして言うくらいなら、言わなくていいのにと俺は思わず苦笑する。

「そんな恥ずかしいこと、よく言えるな・・・。身持ちが軽いと苦労するぞ」

たぶん、恵麻なりに俺を励まそうとしてくれたのだろう。

だが、俺は素直に感謝できずについ余計なことまで言ってしまった。
そのせいで恵麻は、今度は半分ほど憤怒によって赤くなった。
「なっ！？私、そんなに軽くないもん！！」
「冗談だって、冗談。恵麻は、今まで付き合った男がいないことくらい俺だって知っている」
これで、いるよとか言われたらどうしようもなかったのだが、幸いなことに俺の言ったことは事実だったようだ。
「え～、でも景君だって、いないじゃん。ふふふっ、似た者同士だね～」
「何でそんなに嬉しそうなんだ？」
「そ、それは・・・」
何かごにょごにょと言っているが、まるきり聞こえてこない。
その上、何だか顔が赤い。
周りを見ると、いつの間にか俺たちのいる場所は日なたになっていた。
「・・・熱いのか。ほら、これでも飲んで冷やした方がいいんじゃないか？」
そう言って俺は、クーラーボックスから適当に１つ取り出したペットボトルを恵麻のおでこに当てた。
「・・・冷たいよ～。・・・あ、ありがとう」

そう言うが、恵麻は何だか不満げ・・・のような気もした。

「冷た～い」

・・・気のせいか。少なくともお茶を飲む恵麻からは、そのようなものは感じない。

その恵麻は、顔の火照りを冷ますために、５００ｍｌのお茶を半分ほど一気に飲み干していた。
そして、ほっとした表情を見せると、また残りを飲み干して空になったペットボトルを俺に渡してきた。
一気に飲んだせいで、少し目が赤くなっているが本人は気づいていないようだ。

そんな恵麻を見ていると、少しだけ悪戯をしてみたくなった。

「あー、恵麻。・・・そのお茶なんだが・・・実は俺が先に開けて少し飲んでいたんだ」

こんな単純な事に引っ掛かる奴なんているわけ・・・。

「・・・・。そそそそれじゃ・・・かかか間接キス！？」

・・・嘘だよな？

あまりの動揺を見せる恵麻に俺は笑いを耐えるのに必死だった。

だが、笑いを耐えていたのは俺だけで他の２人はというと・・・。

「有栖君、それは意地悪だよ」
「景様。そのような冗談は感心しかねます」
とてつもなく白い目で俺のことを見ていた。
そして、恵麻もこの日1番と言わんばかりに顔を真っ赤にし、肩をわなわなと震わせたかと思うと、涙目になって両腕を振り回し俺の胸をポカポカと殴ってきた。
「・・・う～っ、景君のバカッ。ばか、バカ、馬鹿」
だが、俺たちのことを見ていたのは、エリスと明月院さんだけではなかった。
当然、互いの両親家族もこの痴態を見ていたのだ。
・・・またしばらくネタにされるんだろうな。
しばらく、どこか遠くへ行きたい。そう切に願った。

第５９話：体育祭～弁当～（後書き）

本編後の雑談

恵麻「う～ん・・・」
琴美「うーん・・・」

景「どうした、２人揃って・・・べ」
琴美「景、それ以上言ったら怒るよ？」

景「・・・すまん。で、何悩んでいるんだ？」

恵麻「あ、うん。実は、今日の夜は何にしようかなって・・・」
景「ん？　おばさんいないのか？」

琴美「そうなんだよねー。景、よかったら食べに来る？」
景「どうして、そうなる？」

琴美「だって、そっちもいないじゃん。景に料理作らせたくないし・・・」
景「・・・そろそろ信頼してくれても」

恵麻「景君が景君である限り、無理だよ～」

琴美「うわっ、お姉ちゃん、ひどっ」

景「・・・」

第６０話：体育祭～助言～

結局のところ、俺が所属していた黒は、２位に終わった。

最終競技で、逆転不可能と分かっていた時点で、どこの色もやる気はなかったわけだが・・・。
ただ、衣先輩は、希望先輩に負けたことがよほど悔しそうだった。
大方、何か賭けでもしていたに違いない。

「優勝できたら、皆さんで祝勝会を開こうと思っていましたのに・・・」

そういうことは、もっと早くに言ってくれ。

終わった後に漏れた言葉に、俺を含めたその場にいた全員が思っただろう。

「有栖、お疲れさん」
「また、来週な」
「じゃあな」

一緒に片づけをしていた人と、校門で別れると俺は、校内へと向か

った。

教室に忘れ物があったことを思い出したのだ。

・・・何で傘なんて持って来たんだ、俺？

とりあえず、忘れ物を取った俺はさくさくと帰ろうと、足早に校門に差し掛かった。

すると、校門を出て行こうとする見知った後姿を見つけた。
既に知り合い、家族共々帰宅済みで、1人寂しく帰るのもアレだったので俺は何気なしに声をかけてみた。

「おーい、美玖。今から帰りか？」
「あ、景先輩。は、はい、そうです」

だが、俺が話しかけたにも関わらず話すことが何もない。少しの間、俺と美玖は黙ってお互いの様子を窺っていた。
それでも、何も話すことが浮かんでこなかったので帰ろうとすると、ひょっこりと梓依が顔を出した。

「景先輩、私のこと、忘れてない？」

「・・・忘れていたな」

素直な言葉がいけなかったかもしれない。梓依は、よよよと泣き崩れるふりをして両手で顔を覆った。

「ひどいよ、私はいつだって景先輩のこと忘れたことないのに」
少し親しくなったからだろうか。梓依は、以前に比べて格段に喋るし、これまでに見せない顔を見せるようになった。
美玖も1人でもう歩けるようで、1か月前が嘘のように思える。
ただ、俺も1か月の間に色々と変わるもので、梓依の嘘泣きくらいは簡単に見抜けるようになっていた。今回のは、当然嘘泣きであり、当然に無視だ。
「・・・それはそうとして、今から帰りか？　あ、車を待っているのか」
「い、いえ、駅までは歩いて行きます」
その返答を聞いて、何でここまで迎えに来てもらわないんだろうなと思ったが、ふとメールに書かれていたことを思い出して、言葉にはしなかった。
そういえば、今は体力をつけるために少し歩く距離を伸ばしているんだったっけ。
これから2人で歩いて行くと言っていたが、危なくないか？　そう思った俺は、美玖に1つ提案を持ちかけた。
「そうか。ちょうど俺も駅まで行くんだが、一緒に行ってもいいか？」
すると、美玖ではなく梓依が返事をした。
「うん、どうぞ。美玖と2人だけだと危ないし、変質者が出たら真

っ先に盾になってくれるならいいよ」
「・・・遠慮する。それじゃあ、また学校で」
俺は、先程の仕返しとばかりにくるりと背を向けてその場を去ろうとした。
続いて美玖も帰ると言って俺の後に続くと、1人ぽつんと立っていた梓依も耐えきれなくなったようで、パタパタと靴音を鳴らして走ってきた。
「ああっ、ちょっと冗談だってば。一緒に帰ろ」
やはり人間、素直が1番だと思う。

あ、そうだ・・・。
2人と並んで歩いていると、ふとあることを思い出した。
こういうことを聞ける知り合いの限られている俺は、深く考えることなく2人に尋ねた。
「・・・2人は、女だよな?」
一瞬、時が止まったかのように2人の動きが止まった。
何か間違ったことを言ったのかときょとんとしていると、むすっとした梓依の口から冷めた言葉が言葉が飛び出してきた。

「何それ？　私たちが男とでも言いたいわけ？」

「・・・いや、そうじゃないが。１つ聞いてもいいか？」

多少引き攣った表情で俺は笑った。それにつられた様に美玖もまた曖昧に笑うと言った。

「わ、わたしたちで答えられるなら・・・」

妹の梓依と違って美玖は、協力的で非常に助かる。

「ありがとう。・・・・恋人でもない異性と２人で遊びに行くって、どんな気分がするものなんだ？」

だが、唐突な質問だったのがいけなかったのだろうか？

それとも、俺の口からそんな事を聞くとは思っていなかったのか、再び２人は固まってしまった。

それでも、どうにかやっとといった様子で、美玖が声を絞り出して尋ねてきた。

「・・・そ、それって・・・・け、景先輩が、ですか？」

「いや、そうじゃない。俺の友人の話だ」

当然、本人だということは否定させてもらう。

この２人、特に美玖は、本人を目の前に、ぼろ糞に言うとは思わない。

忌憚のない意見が聞きたいので、あえて俺であることは伏せておく。

少しの間、2人は考えていたが、ほぼ同時に答えを出した。

「わ、わたしは、それはお友達だと思っているからだと思います」

「うん、私も同感。少なくとも、景先輩のお友達は、その異性から友達としてしか見られていないと思うよ」

まあ、それもそうだ。こんな質問をすること自体、少し浮かれていたのかもしれない。

疑問を解消できたことだけが、唯一の収穫だろう。

「そっか。悪いな、変なこと聞いて。そいつには、きちんと伝えておくから」

もう伝わっているけどな。

・・・もうこの話題はいいか、これ以上話をすると墓穴を掘りそうだ。

しかし、世の中というのは、思い通りには動くことは少ない。美玖は、この話題にまだ興味を持っているようだった。

「でも、その人は、相手の女性が好きなんだと思います」

「それはないだろ」

反射的に否定してから、俺はしまったと思った。

何故、その人が好きではないとあっさり否定できるのか。

「えー、私はそうは思わないなー。景先輩の友達には悪いけど、その人、絶対遊び人だと思う。ホテル行ったら、ポイだね、きっと」

随分と辛辣な言葉に俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。

幸い、梓依は俺の言ったおかしな部分には気づかないようだった。

「・・・あはは。そいつにそれとなく釘を刺しておく」

表向きは平静を装ったものの、内心では今すぐ2人の前から走り去りたい気分だった。

・・・そんなに遊び人に思えるのか。

帰ったら鏡で自分の顔を見てみようか・・・。

少々心に傷は負ったものの、俺は気を取り直して別の話題を持ち出した。

「・・・まあ、そいつの話題はそれくらいにしておいて。ちょっと昔の話をしてもいいか？」

「何々？　景先輩の昔話って」

先程の話題と違い、梓依は喜々として話を聞きたがっている。

まるで親と一緒に遊びに行くのが楽しみな子供のようで、俺も自然と楽しくなってきた。

「ポディマハッタヤって人、知っているか？」

「誰それ？　知らないよ」

「ご、ごめんなさい。知りません」

・・・また、すべった？

冷ややかというよりも、何故その話題なの？　といった雰囲気を2人は醸し出している。

俺は少し冷汗が背筋を流れていくのを感じた。

「スリランカのボガラ鉱山で働いている人なんだ。今はもう引退したらしいけどな」

「と、ところで、その方は一体どんな人なのですか？」

ようやく美玖が少しだけ興味を示してくれたので、俺はここぞとばかりに喋り始めた。

「いや、昔、小学校の教科書に載っていたんだ。1本の鉛筆の向こうにっていう随筆に。他にもトニー・ゴンザレスという木こりと名前は忘れたがトラック運転手、それにもう1人いた気がする。とにかく、あの話はたった1本の鉛筆を作るために、多くの人が関わっているということを伝えて、物への感謝の心を持つべきだということを伝えようとしていた素晴らしい話なんだ」

だが、これだけ熱く語ったにも関わらず2人は、さほど興味を持っていない様子だった。

昔は、人気のあった話題だったはずなんだが・・・。

「・・・・やっぱり時代が違うのか」
「で、でも1歳しか違いませんよ。わたしは、分からなかったですけど、そ、そんなに落ち込まないでください」
いや、そもそも女と会話するための話題ではなかったようだ。
・・・今度、恵麻にでも相談してみるか。会話は人間関係を築く上で重要なものの1つだから。

この後、俺たちは他愛のない世間話をしながら駅までやって来た。会話の中で2人が割とニュースや新聞などを見ていることを知り、意外な一面を知ることができた。

駅前には、既に2人を迎えにきた車が止まっており、2人に別れを告げて帰ろうとすると梓依が駆け寄ってきた。
「実は、私は知ってたよ。あんな特徴的な名前忘れたりしないよ。・・・確か、豆カレーが好きなんだー」
「そうそう。何だ・・・・俺と2人の間には深い隙間があるかと思った」
思わずほっとして溜息が出てしまった。
すると、梓依は俺の前に回り込んでくすくすと笑う。

それが何を意味するのか分からず、首を傾げていると梓依は仕方ないなと言って、そっと俺の耳元で囁いた。

「ふふーん、景先輩って・・・アレ・・・・でしょ？」

「・・・？」

アレって・・・何だ？

意味深な言葉に俺は、考え込むが答えは全く出ない。

どうしても気になるので、梓依にアレの内容を聞こうとすると、顔を真っ赤にした美玖に梓依は俺から引き剥がされた。

「し、梓依・・・・それ以上はダメだよ。一線を踏み越えたら帰ってこられなくなるから」

そして、何かを言おうとした梓依の口を抑え込んだ。

「・・・むぐっ。んむむむ」

両手で口だけでなく、鼻まで抑えているので梓依が息苦しそうだ。

加えて美玖が背後から全身を使って力いっぱい動きを封じているものだから梓依は動くことができない。

「妹が、おかしなことを言いましたけど・・・忘れてください」

「・・・そういう方向なのか？」

それでも、どうにか美玖は振りほどいた梓依はその場にへたり込んだ。

「ぷはっ・・・・。そうだね、そういう方向だね・・・」

あえて言わないところが憎らしいが、たぶん俺と美玖、そして梓依の考えは大きく乖離しているに違いない。

俺と美玖は口では言えないこと、梓依のはたぶん言えるはず・・・。

・・・いや、その前にこんな所でへたり込まれても困るな。

俺は、周囲の目がこちらに向いていることに気がつくと、梓依に手を差し出した。

「・・・立てるか？」

「あ、ありがとう・・・」

しおらしい梓依というのも珍しい。

だが、そんな気分に浸っている時間はほぼ皆無だった。

「あ、そうだ。景先輩、また暇があったら遊びに来てくださいね。そ、その・・・お父様も首を長くして待っていますから」

「・・・いや、それはないだろ」

むしろ、俺を射殺さんとするぎらぎらとした視線が脳裏に浮かんできた。

1度しか会ったことはないが、娘に甘そうな人だったからな。

まあ、もう行く機会があるとも思えないが。

そう考えると気楽なような少し寂しいような気もした。

だが、俺の気分を見透かしたように梓依は、くすくすと笑った。

「私も美玖も楽しみに待ってるからね。大丈夫、お父様のことなら。紫が、お父様が何を言っても『何か文句ある？』って一喝するから」

容易に想像できる光景に、思わず俺は苦笑する。

「あっ、・・・梓依ったら、もう・・・・・。あ、あの・・・・恥ずかしい話なので、あまり口外しないでくださないね。・・・そ、そろそろわたしたち行きますね。それでは、また来週に」

「2人とも気をつけてな」

美玖と梓依は俺に手を振ると、車の方へと小走りに駆けていく。

だが、途中で梓依だけが立ち止まり戻ってくると、両腕を後ろで組んで俺を下から覗き込むようにして言った。

「あ、そうそう。私からヘタレな先輩の友達に1つアドバイス。少なくとも信頼はあるはずだから、それを裏切っちゃダメ。たぶん、私の勘だとその相手の女の子は、すごくいい子。だから、そのお友達自身のありのままでいいと思うよ。それじゃあ、頑張ってね、景先輩」

どうやら、向こうの方が1枚も2枚も上手だったようだ。

美玖に呼ばれ、戻っていく梓依の背中を目で追いながら、そう思った。

第６１話：君を知る第一歩

体育祭が終わった翌日の振り替え休日の朝。

俺は、駅前のデパートの前でぼんやりと1人佇んでいた。

・・・・早く着きすぎたな。

時計を見ると、まだ9時１０分。待ち合わせまでは、２０分ある。
家にいても気分が落ち着かなかったので、少し早めに出てきてしまった。

今日は、明月院さんとデパートの企画展に一緒に行く約束をしているのだ。

この駅前のデパートは、４０年ほど前から建っているらしい。
食品以外にも絵画や個人の発明品などの企画展を多くするために、昔から近隣では有名で今でもこの近辺最大のデパートである。

だが、ここ2，3年、駅に自由通路ができて南北に移動がしやすくなってからは、南口にできた服や食品、家電などさまざまな店が集まった複合商業施設ができたために苦戦を強いられているという。
かくいう俺も洋服は、南口へ行くことが多い。

そのため、1年前からはテナントを誘致して、対抗しようとしている。

このデパートは午前9時半に開店する。

今日は日曜日ということもあって、まだ人通りは多いとは言えない。

俺は、駅からそのまま来ることのできる2階正面入り口で、駅の方を眺めながら待っている。

普段と同じ格好で来てしまったが、めかし込む必要はないと思う。

・・・そろそろ5分前か。

時計を見ながらふと思う。これが実はどっきりだったら・・・というオチを。

よく考えれば、遊びに行くことになったのは有斗先輩と大城さんによる所が大きい。

裏で何か糸を引いていたとしてもおかしくはない。

段々と思考がマイナスになってきた時だった。

「あっ、有栖君」

明月院さんが、こちらに手を振りながら歩いてくるのが見えた。

「へー、有栖君って、早くから待ってる方なんだね。ごめんね、遅

くなって」
「遅刻するよりはましだと思うし、そんなに待ってない」
ベンチがあるから実は立っていないから、とはあえて言わない。
「今日は楽しみだね。・・・・」
「そうだな。・・・・？」
何か言いたいのだろうか？
明月院さんは、ちらちらと俺と地面とを交互に見ながら、俺の様子を窺っている。
・・・まさか、トイレだろうか？　だとしても言ったらまずいよな。遠回しに聞いてみるか。
「・・・もしかして、あまり調子よくないのか？」
「えっ、ちょっ・・・違うって・・・。もう、有栖君は鈍感なんだから」
何が鈍感なのか、俺にはよく分からなかった。
すると、明月院さんは口を尖らせて１つ１つの言葉を強調して言った。
「よ・う・ふ・く」
「あ、悪い・・・・。いきなり全身を舐め回すように見るのは、失礼だと思って・・・・」
「誰もそこまでしろって言ってない！　まったくどこのおじさんですか・・・・」

改めて明月院さんの服装を眺めてみる。
だが、ファッションにそれほど興味のない俺には思ったほど詳しいことはよく分からない。
ただ、俺としてはこの時期にしては寒そうだなと思う格好だった。
服装のことを褒めるよりも、本人を褒めた方がいいのかもしれない。
「うーん・・・可愛らしいと思う。でも、明月院さんって、その恰好で寒くないのか？」
「うーん・・・無難な答えだと思う。でも、有栖君って、もう少し乙女心の勉強が必要かも」
そう言って、明月院さんは何故かポンと1つ手を叩いた。
「さてと、そろそろ行きますか」
「焦らなくても、食べ物なんだから逃げないと思うんだが・・・」
半ば呆れつつ、半ば明月院さんの素顔を1つ垣間見ることができて嬉しいと思う気持ちがごっちゃになりながら俺は、彼女の後に続いた。
企画展は、デパートの6階で行われている。

このフロアは、毎日何かしらの催し物があり、客も多い。
４月に地下１階で小規模に珍味祭りがあったが、あれはあくまでも例外的なものらしい。

「やった、１番乗り」

先に６階に着いて子供のように笑う明月院さんは、いつも学校で見る少し大人びた感じとは違い、心が幼いまま大きくなった子供のようだ。

「あまりはしゃいで転ばないように気をつけて」
「もうっ、私はそんなに子供じゃありません」

そう言って、むぅと頬を膨らませて抗議の意思を示すがすぐに辺りを見回して子供のような無邪気な顔に戻った。

「でも、どこから回ろうか？　たくさんあって迷っちゃう」
「俺は気の向くままに回るけど。明月院さんが先に行きたいところがあるなら、そちらから回るよ」

すると、予想だにしなかった言葉が返ってきた。

「それじゃあ、エスコートよろしくお願いします」
「・・・いや、エスコートされる人は、こんな所に来ないと思う」

俺のイメージでは少なくとも。

当然自身のイメージだ。相手とは違うものだということは分かっているつもり。

だが、明月院さんは、俺の答えに溜息1つしてから空気を吸うのと同じような自然さで返事を寄こす。

「もう・・・ロマンがないな。こういうのは、『分かりました、陽菜』といった風に言って、すっと手を差し出すものだと思うな」

絶対、嘘だ・・・。

それは、どう見ても顔が笑っているから。このまま掌の上で踊らされているのも癪だが、俺はあえてそのまま踊ってみた。

「分かりました、陽菜。是非、このわたくしめと共に、今日1日を過ごしていただけないでしょうか？」

目の前に跪いて、何となくオーバーに感じるくらいに。

・・・・・・。

なかなか返事がないので、顔を下から見上げるとじっと俺を見る2つの目とぶつかった。

「くすくす・・・。有栖君が本当にやるなんて思わなかった。・・・返事は・・・・謹んでお受けします」

よく分からないが、俺に合わせてくれたらしい。

明月院さんは、俺の手を取ると勢いそのままに引っ張り上げる。

「いっぱい食べ歩こう」
「・・・本当に元気だな」
そして、俺たちは隣に並んで時計回りに歩きだした。

ここに来てからもう2時間は経っただろうか？
色々と食べながら回っているせいで、全体の半分もまだこなせていない。
その原因と言うのが・・・。
「有栖君。これこれ。おいしいよ、ほらっ」
明月院さんだ。
結局、今のところ何も買っていないので試食程度しかしていない。
搾り立ての蜂蜜、ヒトデ、ヘビ、何かよく分からない肉・・・。
ざっと、これだけ食べた。

俺としては、昼のエチゼンクラゲ定食を楽しみに来ているので、もう食べたくはない。

時間がかかるのは、彼女が妙に色々と関心を持ってさまざまな物を食べるからだ。

よく太らないよなと思うが、彼女曰く、甘いものと好きな物は別腹らしい。

そして、少し前にまた妙な物を食べた。

「ねね、有栖君。次はこれにしようよ」

「・・・闇ぬか？」

見た目は、普通のぬか床だった。

だが、名前からして怪しい。

「おじさん、これ試食してもいいですか？」

「あいよ。何が出てくるかは保証できんよ？　しっかし、今時珍しい威勢のいいお譲ちゃんだ。よし、お譲ちゃんはタダ」

やはり、可愛いというだけで得になることも多いんだな。

「そこの連れの兄ちゃん。あんたが2人分払ってくれ」

「だから、俺は食わないって」

やはりこうなるのか・・・。

当然のように1人分しか出さない俺、2人分を迫るおっさん。

「ええっ、折角なんだから食べなきゃ。おじさん2人分お願いします。・・・・有栖君、・・・・一緒に食べよ？」

えらくアグレッシブな明月院さん。

そう可愛らしくウィンクしながら言われても・・・。

・・・・。

「はい」

「毎度有り」

結局、俺のおごりということで2人分払ってしまった。

明月院さんは、自分の分は払うと言ってくれたが、自分でもよく分からない見栄でそれを断ってしまった。

「何が出てくるのかな？　何だかわくわくしてこない？」

「・・・何でもいいよ」

気分はもう対照的だ。

とりあえず、ぬかから出てきたものを口にすると・・・。

「あっ・・・・これ、ナスだ。なーんだ、闇なんて言うからもの凄いものが入っていると思ったのに。拍子抜けしちゃった」

「・・・。・・・・・？」

やはり対照的な反応。

明月院さんは、当たり。俺は、ハズレ。

まあ、それはいい。

だが、俺が噛んだのは一体何だ・・・・？

その答えは俺ではなく、ナスを食べていた明月院さんが知らされることになる。

「有栖君は、何だったのかな？　よかったら交換・・・・へ？　こ、これってタオル？」

「んが・・・・・タオル・・・だな」

何故、ぬかにタオル？

「「・・・・・」」

黄色に染まったタオルを見ながら俺たちは、互いに顔を見合せて苦笑いを浮かべることしかできなかった。

この後、俺は当然のように店のおっさんにクレームを言いに行った。
初めこそは俺の言うことに、闇ぬかだからの一点張りだったおっさんもタオルを見せると観念したようにミスを認めた。
何でも製造最中に、おっさんが首に巻いていたタオルを紛失したとのこと。

つまり、俺は何年か経っていい具合に発酵したおっさんのタオルを食べたことになるわけだ。

そして、今に至る。

俺が食欲がないのは仕方がない。

だが、明月院さんは違った。

「うわっ、これ本当にダンボール入ってる！？」
「・・・・お腹を壊すからやめてくれ」

もう振り回されっぱなしだ。

「お待たせしました、エチゼンクラゲ定食のお客様」

午後も1時を過ぎた頃。

ようやく俺は目的のものにありつこうとしていた。

いまいち食欲が湧かない俺のことを気遣ってくれたのか、俺と明月院さんは一旦このフロアを離れて洋服や宝石を見て回っていた。

戻ってきた時には、店の前には人が並んでいて３０分待ってようやく食べることが可能となった。

「俺のわがままで遅くなってごめん」

「ううん、私も食べすぎで・・・ちょっと苦しかったから」

たぶん、本音だと信じたい。

俺の倍は食べていながら、苦しくないというのなら胃の構造を知りたいところだ。

多少の驚愕の念を持ちながら、目の前の定食を心底幸せそうに食べる明月院さんを見ていると、彼女は箸を動かす手を止めて、心配そうに聞いてきた。

「どうしたの、有栖君。もしかして・・・まだ気分がよくない？」

どうやらまだ何にも手をつけていないことを心配されたようだ。

「・・・食べられるのか？　あれだけ午前中食べていたのに」
「うん、全然平気。あ、残すんだったら、私が貰うから安心してね」
俺の分まで狙っていたのか・・・？
だが、そこまで量が多い訳ではないので、生憎譲るつもりはない。
「いや、そうじゃなくて・・・・よく食べるなって感心していたんだ」
「えー、ウソだ。だって、有栖君、信じられないって顔してる。・・・もしかして、私といると楽しくない？」
不意に明月院さんが漏らした明らかに声質の違う言葉に俺は驚いた。
真面目に聞いていることは俺でも分かる。視線をじっと外さないのだから。
・・・こんなに心配症だったか？
少なくとも、俺が知っている明月院さんはいつも友人と会話をして笑っているといったイメージしかない。
誰に対しても優しい、気が利いて、悪い評判はほとんど聞かない少女。それが、俺の知っている明月院　陽菜、その人だ。
ただ、完全無欠と言える彼女にも人間関係に悩みがあるのかもしれない。だからこその先程の言葉なのだろう。
俺は、自分の意思を伝えるべきなのだと思う。相手を知るためにも。

単純に友人となりたいと願うから。

「・・・そうかもな」

「っ！？」

予想通り、明月院さんは呆気に取られていた。俺は、返事を聞くことなく一方的に話を続ける。

「少なくとも、今目の前にいる妙に自信がなくて勝手に俺の心を読んだふりをして、推測で決めつける明月院さんといても楽しくはないな」

「・・・」

「俺は、午前中に見た子供のように無邪気な明月院さんが好きだし、定食を幸せそうに頬張る明月院さんも好きだ」

一気に最後まで言い切って俺は、明月院さんをじっと見て答えを待つ。

しばらく俺の言葉の意味を考えていたのだろうか。

明月院さんは、俺から視線を外して外を見ていたが、やがて１つの結論を導き出した。

そして、少し頬を赤く染めて何度か俺とテーブルと視線を往復させながら言った。

「そ、それって・・・・告白なのかな？」

「え・・・あ、いや・・・ち、違う。その・・・好きって言うのは・・・」

思いもかけない言葉に戸惑ってしまい、大した言葉が出てこない。
だが、よく考えれば、好きだとか口走っていたし・・・。
その事実を改めて認識すると、俺は視線を合わせるどころか顔すら向けることができなくなった。

しばらく、嫌な沈黙があったが、急に明月院さんから堪え切れないといった感じで、笑いが漏れてきた。

「くすくす。もうっ、有栖君ったら、焦りすぎ。それくらい私だって分かるよ。・・・ありがとう、そして、ごめんね。気を使わせちゃったね」

「別に俺はそうは思っていないけど」

「・・・そっか。・・・それじゃあ、午後は南口に行ってみない？あそこに結構服を売っているところがあるから覗いてみよう。今日のお礼に、私が見立ててあげる」

「・・・そんなに俺の服って、ださいか？」

「うーん・・・微妙。さあ、食べたら出発ね」

とりあえず、明月院さんの元気が出てよかったと思う。

第６２話：君を知る第二歩

昼飯を済ませると俺たちは、デパートを後にして南口へとやって来た。
自由通路が複合商業施設に続いているため、歩いて行くのは決して苦ではない。

午後は、明月院さんが洋服を見立ててくれると言うので、何件か回ってみるつもりだった。

「エリス、こんなところで何やっているんだ？　それに、その車椅子の女は知り合いか？」

「・・・け、景様」

エリスとばったり出会うまでは。

「へえ、エリスさんって、偉いね。入院患者さんのリハビリの手伝いなんだ」
「はい。月に2，3度ですが、こうして足を運んでいます」

結局、午後の予定はキャンセルして商業施設内のコーヒーショップに４人でやって来ている。
先に俺が、席を確保し残る３人を待っていた。

話を聞くとエリスは、社会奉仕活動の一環として、こうしてリハビリの手伝いをこっそりとやっていたらしい。
俺に言わなかったのは、言うと余計な心配をかけるからだという。

話を聞いている中で感じたのは、どうもエリスは俺には知られたくなかったようだということだった。
いつか話をしてくれるときが来るかもしれない。そう思って、ここは深入りは避けることにした。

「・・・まだまだ俺も信頼が足りないみたいだな。俺は、このことは関わらないから気にしないでくれ」
「・・・むしろ関わっていただいた方が、彼女にとっては・・・・、い、いえ何でもありません」

エリスの言動がいつも以上におかしい。

だが、俺はそのことよりもむしろ隣の女のことが気になっていた。

健康的と言うよりも、何だか失礼になるが病的に感じる肌の白さ。
どこか儚さを感じさせる瞳。
体を支えるための足は、あまりにか弱そうに細い。

一言も話さないのでまるで人形が座って俺たちの話を聞いているようなそんな錯覚さえ覚えてしまう。

そして、何よりも・・・・。

「・・・あのさ」

「・・っ！？」

何故か、時折こちらを見ている。
初めは勘違いか自惚れかと思ったが、そうでもない。俺が視線に気がつくと、その女は、はっとした顔をして慌てて外を見る。

視線を外すと、再び観察するようにじっと見ているのだ。

話しかけようとしても、すぐに顔ごと背けられるので話しかけることさえできない。
とりあえず、何か情報がほしいのでエリスに聞いてみる。

「なあ、エリス。その女の子ってあれなのか？　あまり男と話したことがないとかそういうものなのか？」
「・・・彼女は、男性どころか人とほとんど話をしたことはないです。彼女は、ずっと1人ですから」

どこか遠い眼をしてエリスは言う。まるで、自分のことのように・・・。

すると、今まで口を開かなかった女がようやく口を開いた。

「・・・ううん、そんなことないよ。私には、思い出があるの。辛いこともいっぱいあるけど、あるの。小さく光っている幼い思い出が」

「詩人なんだな」

彼女の言葉を聞いて俺は思わずそんな感想を漏らしていた。
ほとんど独り言のような呟きだったにも関わらず、その言葉に彼女
ははっと反応した。

「っ・・・。詩人ではありません。私は、きっと鳥のように自由が
ほしいのだと思います。鳥籠にいても尚、空が飛びたいんです。た
とえ不幸になろうとも多くの選択肢がほしいんです」

ようやく話してくれたのはいいが、俺には彼女の言うことがよく分
からなかった。
入院生活に飽きているのだろうが、俺は生憎そんな経験はないから、
気安く言葉をかけづらい。

かける言葉が見つからず困っていると、話をしていた詩人の女が申
し訳なさそうに言った。

「ごめんなさい。・・・私、本が大好きなんです。おかしいですよ
ね、いきなりこんな話をするなんて。初めての人には、こんな話は
しないはずなのに」
「それはエリスがいるからじゃないか？」

・・・・・・いつからいるかは、知らないけど悪い部分が似てしま
ったんだな。

変に気を使わなくてもいいのにな。

溜息をつきたいが、さすがに本人を前に、しかも初対面の人間相手にやるわけにもいかない。
そこで、俺は先程から一切詩人の女に触れない明月院さんに話を振ってみた。

「ところで、明月院さんも何か話してみたらいいんじゃないか？同じ女の子なんだし、俺よりも話がしやすいと思うんだが」

何となくだが、明月院さんは表面上は笑顔で取り繕っているものの初対面の人間相手に緊張しているように見えた。

だが、明月院さんの返事を聞く前に詩人の女が俺と明月院さんを見ながら逡巡する。
そして、よしと小さく口にするとおずおずと尋ねてきた。

「もしかすると・・・2人は・・・そういう関係なのでしょうか？」
「いや、どう見てもそれはないと思うが」

確かに2人でいるが、ただの友人としているだけなのですぐに否定させてもらう。

「あっさりと否定されちゃった・・・。うん、まあ、私と有栖君はお友達なんですよ」
「・・・明月院さん。初めて聞く名前ですけど、いい響きですね」

車椅子の少女はそう言うと、初めて笑顔を見せた。

先程までは、何だか暗いなと思っていたが、それはたぶん笑わなかったからだろう。
笑うと、ぱっとその場の雰囲気を明るくしてくれるような、そんな

笑顔だった。

これで、少しは会話ができるだろうか。そう思った、次の時にはもう詩人の女は笑っていなかった。
代わりに神妙にして何かお告げでも言い出しそうな顔をしていた。

「そうなのですか。では・・・私なんてどうです？」

そう言って、詩人の女は呆気に取られる俺たち3人を無視して何かを鞄から取り出すと、それを自分の胸のあたりに張り付けた。

「・・・限定品ですけど？」

何と言うか、限定物に弱いとされる消費者心理を揺さぶろうということだろうか。
人の気持ちは多かれ少なかれ期間限定であるとは思う。同じ気持ちでい続けることはほぼ不可能だ。
それに、期間限定の気持ちが長続きするとも思えない。

・・・いや、今は将来のことじゃないな。

俺が返事をしないためか、初めは首を傾げてきょとんとしていた詩人の女も段々と表情が崩れて、泣きそうな雰囲気になってきた。

「・・・それは、どこから持ってきたネタだ？」

慌てて何でもいいから話しかけると詩人の女は、くすりと笑った。

「暇だったので、よく見ていた掲示板からです」

その顔に、今にも泣きそうだった面影はどこにもない。
要するに俺は、この女の掌の上で踊らされていたということになる。
午前の明月院さんといい、午後のこの女といい、俺は騙され易い方なのかもしれない。
「・・・そうか。ところで、そろそろ何か注文しないか？」
そう俺が提案すると、３人は揃ってこちらを向いた。
今更何を言っているんだと言わんばかりの表情で。
「景様。このお店は、入り口で注文すればいいのですよ」
エリスの今更ながらの言葉に俺は何も言えない。
そして、追い討ちをかけるように店員がやってきて言った。
「アイスクリームのお客様は、どちらになりますか？」
「私です」
明月院さんが嬉しそうに手を上げて、アイスクリームを受け取る。
ほどなくして詩人の女が頼んでいたというコーヒーセットが届いた。
「景様。今からでも何か頼んでみてはいかがですか？」
「いや、もういい・・・」
エリスの優しさが、今は心に痛かった。

・・・だから、入口あたりで人が並んでいたのか。せめて、教えてほしかった。

結局、水だけで1時間ほど過ごした後、時計を見ると3時になっていた。
詩人の女たちは冷える前に帰るということになり、俺たちもすることがないので解散することになった。
俺は、2人だけだと大変だろうと思い、2人に同行することにした。
エリスや詩人の女のことだから、断られるかと思っていたが、思いの他あっさりと了承された。

「景様。明月院様。本日はありがとうございました」
「今日はありがとうございました。久々に同じ年齢の人と話をして楽しかったです」

「ばいばい」

「それじゃ、明月院さんをそこまで送ってくる。ちょっと待っててくれ、すぐに戻るから」

一旦、エリスたちと別れて、俺は明月院さんと駅まで行く。
2分とかからない距離なのだが、午前に比べて人が増えており、その中を流れに逆らって歩くのが多少面倒に感じる。
平日もまた人混みに放り込まれるが、流れに沿えばいい。だが、今日は駅に向かう人間よりも出てくる人間の方が多いのでそうもいか

ないのだ。
そうして、駅までやって来ると、明月院さんは小走りに駆けだすと数メートル先でくるりと振り返った。
「今日はありがとう」
「俺の方こそ、ありがとう。1人で行くのも悪くないが、やっぱり同じ趣味の人がいると楽しいな」
こんな趣味を持っている人を他に知らない俺は、単純に嬉しかった。俺の友人は、趣味を理解はしてくれるものの、もう1歩踏み込んでくれないからだ。
「私も何も考えずに時間をすごせたのは、久しぶりだったよ。どうしてかな？」
「いや、好きな事だからだと思う。明月院さんだって、歌う時はそうじゃないのか？」
考えなしに言った言葉だった。望んでいた友人ができたことで舞い上がっていたのかもしれない。
だが、それは明月院さんにとっては琴線に触れてしまったようだった。
明らかに表情が強張り、俯きながら肩を震わせていた。
そして、言葉だけで相手を突き刺せるような調子で言った。
「・・・それは、絶対に違う。・・・・絶対に違う。好きだから何も考えない。そんなことない！」
「・・・・・・」

いきなりのことに俺は、何も言い返すことができなかった。ただでさえ、怒っている姿は珍しい明月院さんが、こうして目の前で俺に対して敵意を剥き出しにしているのだから。

周りの人が、何事かとちらちらと様子を窺っているのが分かる。部外者なら俺も喜々として様子を窺うだろうが、生憎当事者となった今は他人の目が鬱陶しいことこの上ない。

そう思っていると、明月院さんは1度顔を伏せると、再度顔を上げた。

「・・・なーんて、冗談ですよ。本気にしちゃった？　やっぱり有栖君は、人を信じやすいタイプだね。嘘と本音はしっかりと見極めないと悪い女の子に引っ掛かりますよ？」

「・・・既に、引っ掛かっているような気がするんだが」

もうそこには、先程までの明月院さんはいない。

そこにいるのは、少し小悪魔ぶって無邪気に笑っている明月院さんだった。

そして、今は俺の言葉にむうと頬を膨らませて抗議の意思を示している。

「ひどいなー、もう。・・・それじゃ、また明日。学校でね。ばいばい」

「また明日」

手を振る明月院さんに手を振り返すと彼女は改札へと向かった。

そして、俺は踵を返し、人の流れの中へと入っていく。

嘘と本音か・・・。

明月院さんは、本当に歌が好きなのだろうか？　それとも、無理をしているのだろうか？

さほど親しくない俺でも知っている噂。

明月院　陽菜が合唱部を半月ほど無断で休んでいるということ。

俺には、明月院さんの本音というものは分からない。ただ、今日あの時、笑っていた彼女は本当だと信じたかった。

第６２話：君を知る第二歩（後書き）

本編後の雑談

七夕

衣「今日は、一年に一度二人が逢える日ですわね」
景「衣先輩も、そういうのを信じるんですね。意外です」
衣「失礼ですわね。私が信じてはいけないの？」
景「いえ、別に・・・」

衣「はっきり言ってくださって結構ですわよ」

景「・・・歌でこういうものがあるんです。笹の葉・・・。この続き分かります？」

衣「・・・パンダに食べられる？」

景「・・・まじぼけですか？」
衣「・・・そのような歌知りませんもの」

景（・・・一体、どんな生活を送っていたんだ？）

第６３話：あなたを知るのは、３度目の出会いで

明月院さんを見送ると、俺は足早に２人と別れた場所まで戻っていた。

病院までは大人の足で１０分くらいなのだが、車椅子を押していくとなればもう少し余分に時間はかかるだろう。

冷えるのは、もう少し後のことだと思うが、体のことを考えれば早めであることに越したことはないに違いない。

それに俺は、どうもあの詩人の女のことが気になるのだ。

もちろん、可愛いからということもあるが、それ以上にどこかで会ったことがあるようなそんな気がする。

・・・何というのか、古典的なナンパのような気がするな。

たぶん気のせいだろうと思いながら、そのことを忘れようとさらに歩を早めた。

別れた場所まで戻ると、そこには談笑する２人の姿があった。

楽しそうに話をしている２人に悪いと思いながら声をかけると、詩人の女が俺に先に気がついて心配するような声で言った。

「おかえりなさい。ところで、何かあったんですか？　つかれているように見えますけど」
「・・・急いで戻ってきたからな。昨日、体育祭があったせいで足がまだ筋肉痛なんだ」
俺は、両脚を擦って軽くマッサージをしながら苦笑する。
すると、先程とはころっと１８０度態度が変わって嬉しそうな詩人の女から意外な提案がされた。
「今度一緒に、神社にでも行きませんか？　入院中に知り合いになったいい人がいるんです」
「最近の神社は、えらくサービスがいいんだな。そんなことまでするようになったのか」
きっとお賽銭が足りない上に、お守りの売り上げもよくないにに違いない。
「ええ、素晴らしいですよね。その方は、巫女さんらしいですけど。でも、巫女って、何だか猫の名前みたい」
それは、「みー」とか「みーこ」とかそういうことを言いたいのだろうか。・・・まあ、どうでもいい。
「・・・メイドに巫女ね。特殊な知り合いだな」
探せばどこかにいるのだろうが、少なくとも俺には、そんな知り合いはいない。
世の中まだまだ俺の知らない世界がたくさんあるらしい。そんなことを考えていると、エリスが俺たち２人を窘める様に言った。

「そろそろ行きませんか？　あまりお時間もないことですし」

「・・・すみません」

「・・・ごめん」

別にエリスが怒っているわけではないのだが、何故か謝らなくてはいけない。

そんな気持ちがしてつい謝ってしまった。

「景様。・・・私も会話に混ぜてほしかったです」

・・・拗ねていたのか。

「あ・・・・悪かった。・・・配慮が足らなかったな」

・・・・・次からは気をつけよう。

駅前の大通りを渡ると、道幅は3車線から2車線へ。

そして、病院へと続く並木道の1車線と道幅が小さくなっていく。

大きな建物が南口には商業施設しかないため、駅からでも病院は見えるのだが、病院への一本道に入ると、ますます大きく見えてきた。

「病院っていうのは、あの私立総合病院なのか？」

「はい、この辺りでは一番大きくて、設備も人員も整っている病院ですね。それが、どうかしましたか？」

詩人の女は、車椅子から俺を見上げて問いかける。
まるで、小さな子供が精一杯背伸びをしているような錯覚を覚える。
「いや、あの病院で俺が生まれたんだ。あそこに行くのもその時以来だなと思ってな」
「へえ、奇遇ですね。私もあそこに入院しているんですよ」
「何の奇遇だ、それは・・・」
照れながら言われてもピンと来ない。
呆れてつい肩をすくめると、ちょうど同じように呆れたような困ったような笑顔を浮かべるエリスと目が合った。
「ところで、エリス。メンテナンスは行かなくても大丈夫なのか？　毎週行っていただろう？」
「・・・黙っていたのですが、実は2週間に1度定期メンテナンスを受けているのです。ですので、週によっては病院に行っていました」
申し訳なさそうにエリスは言うが、俺は世間一般的によくないことをしていない限りは別に咎めるとかそういったことをするつもりはない。
よく言うなら個人を尊重している、悪く言うなら興味がないとでも言うのだろう。生憎、エリスに対する興味は尽きないのだが・・・。
「エリスって、一応試作機扱いなんだよな？　・・・2週間って、よくよく考えると長いな」
「ええ、そうかもしれませんね。ですが、私は景様の側で多くの時間を過ごしたいと思っていますから」

聞いている俺の方が、耳まで赤くなりそうだ。

「・・・よくそんな恥ずかしい事が言えるな。なあ・・・」

藁にも縋る思いで、詩人の女に同意を求める。

「だって・・・気持ちは言葉で伝えないと伝わらないじゃない。こうやって言葉で気持ちを伝えることができるのは、人間だけです」

予想通りと言えばそれまでだった。今までの話を聞いている限りで俺に意見に同調するなどあり得ない話だったのだ。

さらに、「ねー」などとエリスと互いにうふふと笑う。同意を得ようなどと一瞬でも考えたことが間違いだった。

しかし、そのような和気藹々とした雰囲気は長くは続くことはなかった。

つい先程までは笑っていたはずの詩人の女は、ひどく恨みがましい目で病院の周りにある柵を指して、憎々しげに言葉を続けた。

「私は、必ずここから出て行くんです。でも、今の私にこの柵はあまりに高い。・・・棺桶の中で眠ったままのお姫様では、誰も迎えになんて来てくれないですから」

その話のお姫様とは、白雪姫のことか。

ただ、物語では王子のキスで目覚める話や棺を落とした拍子にリンゴが取れて目覚める話があった気がする。

結局、美人は得であるということか。美人でなければ、王子が連れ帰ったり、キスをしたりしないはずだ。

「・・・グリム童話もびっくりのお姫様だな。まあ、王子が都合よく迎えに来るとは限らないからな。ただ、俺は運命を信じる方だ。人が言う言葉はそのまま信じる力になると思う。信じる信じないはその人の言葉から生まれるものだ。・・・まあ、言葉通りだな」

我ながらおかしな言葉を言ったものだ。恥ずかしくなって最後は言葉を濁してしまった。

何だか詩人の女に影響されてしまったのかもしれない。

・・・いや、違う。俺はこの詩人の女が俺と同じだと感じているんだ。

「・・・人の夢は儚いものです。どんなに願っても、どんなに縋っても、いつかは消えてしまうものです。違いますか？」

俺が心のどこかで諦めようとしているのと同じように、彼女も何かを諦めようとしているのではないか。

「・・・そうかもしれないな」

だからこそ、俺は彼女に伝えるべきじゃないのか？　・・・そうじゃない。彼女に伝えることで俺自身がもう1度歩きださなければいけない。

そして、彼女にももう1度歩いてもらいたいと思う。

気がつくと俺は勝手に話を始めていた。

「俺は、初恋の女の子がいたんだ。たった半年しか一緒にいなかった女の子だ。毎日一緒に幼稚園で遊んだし、外でも色々な所に行った友達だった。でも、もう１０年は会っていない。でもな・・・いつか会えるって信じている。こうやって言葉にすれば、より会えると思っている。まあ、１種の迷信めいたものに過ぎないけどな」

「・・・・」

その話を詩人の女は黙って最後まで聞いてくれた。
ただその顔は全くの無表情であり、感情が表れていなかった。

「悪いな。つまらない話だったな」

話してから自己嫌悪に陥ってしまう。

こんな話をしたところで、詩人の女に何の意味があるというのか。
これでは、ただの自己満足にしかならない。そう分かっているのに話しているのだから、尚のこと性質が悪い。

・・・そもそも自己満足にすらならないような気もする。会えない事実を再認識しただけのような気さえした。

とにかく弁明しないといけない。そう感じて俺は詩人の女に声をかけた。

「・・・あのな」

だが、詩人の女は俺の言葉を遮るかのように静かに首を横に振って、大輪の花を咲かせたようにほっとさせる笑顔を俺に向けて心地よい透き通った声で言った。

「・・・ううん、そんなことはありません。そうですね。願えばきっと叶うでしょうね。それじゃあ、私も1つお願いをしようかな。・・・言葉にすれば叶うかな？」

そこには、先程の恨みがましい目をした彼女はもういない。

「何もしないよりはいいと思う」

俺の言葉に詩人の女は、うんと頷いた。

そして、彼女は下を向いて深呼吸を1つすると、もう1度俺を見上げて言った。

「私も初恋の人にもう1度会いたい。会って、伝えたいの。・・・あなたが・・・あなたのことがずっと好きでしたって」

俺に対する言葉でないことは分かっていた。そのつもりだった。

だが、はっきりと俺を見て言ったその言葉に思わず俺に言われた言葉かと勘違いしそうになる。

何故入院しているのかは俺には分からない。ただ、入院してまでも想われている人が少しだけ羨ましく思えた。

すると、むすっとした表情のエリスから刺々しい言葉が飛んできた。

「・・・景様。今のは、景様に言ったわけではありませんよ」
「そ、そんなこと分かっているって。・・・何か気に障るようなことしたか？」

何故、エリスが怒っているのか俺にはよく分からない。

「いいえ、これは私の問題ですから。景様は気になさらないでください」
「・・・そうか」

そう言われても気になるものは気になるんだが・・・。

そのような不毛な会話を続けているうちに、病院の総合の受付へとついた。
中に入ると、多くの人が行き交っており、待っている人も多い。

「では、私は病室まで彼女を送ってきますので、少々お待ちください」
「分かった。受付の所で待ってる」

人が多いので座って待つということは不可能そうだが、そう長くもならないだろう。

「それじゃね、また今度。私たちって少し電波が混じっているかもしれないね」
「・・・そうだとしても、俺が発生源ではないことは確かだ」

これだけははっきりと否定しておかねばならない。
それに対して、詩人の女は予想していたと言わんばかりにオーバー

にも両手を上げ仰け反って言った。

「ええっ、私が電波の発生源ですか？　人間が電波になれるわけないのに、おかしいことを言いますね」

「もういいか？　長話をしていると本当に染まりそうだ」

既に染まってしまった気もしなくもないが・・・。

だが多少憂鬱な気分の俺とは対照的に、詩人の女は病人とは思えないほどに喜々としていた。

「あん・・・・会話切られちゃいました。では、今度会う時には、きっちり染めてみせます。・・・エリス。あとは私1人で戻れるから・・・ごゆっくり」

そして、詩人の女はくるりと方向転換すると、エリスの返事を待つことなくを行ってしまった。

・・・冗談だと思いたい。本当にやりそうだから怖い。

去っていく詩人の女の背中をそう思い、見ているとふと気がついたことがあった。

「そういえば、あの女の子の名前聞いていなかったな。エリスは知っているか？」

そう。詩人の女などと勝手に呼んでいたが名前を聞いていなかったのだ。

少しの間、エリスは迷っているようだったが、何か妙案を閃いた様で薄く笑った。

「・・・できれば、私からではなく直接聞いてあげてください。きっと彼女も喜びますから」

さらに、彼女に興味を持ってくれる人は少ないですからとエリスは続けた。

見た目はいいということを考えると、やはり病院にいるからだろうか？

どんな逸材も埋もれていては、どうしようもないからな。誰かが見つけない限り、宝の持ち腐れというものだ。

「エリスがそう言うならそうするか。・・・ところで、エリス。何でさっき怒っていたんだ？」

何気なしに気になっていたことを聞いてみると、エリスは小首を傾げたまま言った。

「・・・どうしてでしょうね？　もしかすると似ているからかもしれません」

「似ている？」

「はい。外見ではなく内面・・・ではありますけど」

エリスと詩人の女の見た目が違うことくらい誰でも分かる。

一卵性双生児ですら、どこかに差があるというのに他人の２人が似ているはずもない。

見えないからこそ似ていると言うことができるのかもしれないが。
「・・・俺にはよく分からない話だな。人の内面なんてそうそう分かるものでもないし。そろそろ帰るか」
「はい。ところで、腕を組んでもいいでしょうか？」
「・・・組んでから言うな」
妙に積極的なエリスに少々戸惑いを覚えた。
右腕を優しく包み込むような柔らかな感触や、吹きかかる息も含めてのことだ。
いつもは、俺が誰と会話をしていても自分から会話に入ってくることも、ましてもっと会話をしたいということもない。
急に態度が変わったのはきまぐれなのか、それとも心境の変化があったのだろうか？
「たまには、こういうのもいいと思いませんか？」
「いや、全くもって思わない。今後の円滑な関係のためにも是非離してくれ」
ただ、俺にはそんな心境の変化は訪れていないのだが・・・。
それでも、エリスは昨日までとは違い、前向きかつ都合よく俺の言葉を解釈していく。
「要約すると、照れるということですね」
「ポジティブなんだな？　酒でも飲んだのか？」

当然エリスが酒を飲まないことくらい知っているが、そうでもして気を紛らわせないと、密着しているエリスのことが気になって仕方がない。

「お酒が入っているのであれば、それは潜在的に隠れていたものですから、元々そういう資質だったということです」

そのようなことを言われても、未成年の俺は残念ながら酒は飲んだことはない。

エリスの言うことの真偽は分からないのだ。

だが、そんな俺でもエリスの心配をすることはできる。

「・・・ちょうどここは病院だな。ちょっと診てもらってきたらどうだ？　俺は帰るけど」

「そうですね」

さらりとエリスは俺の言葉を受け流すと、顔をお互いの鼻先が当たるくらいまで近づけると、にぱっと笑って言った。

「では、帰りましょうか」

そして、エリスは俺はぐいと腕を引っ張った。

視界に相手の顔しか見えないという状況が初めてだったせいでぼーっとしていたせいか、一瞬体が浮いたような気がした。

そういえばロボットなのだからその力は人間の比ではない・・・・・などと冷静に考えている場合ではなかった。

エリスが無理やり引っ張るせいで、俺の体が悲鳴を上げていた。

「っ！？　ちょっ、待て！　引っ張るな、肩が外れる！！　分かった、今日だけなら認めるから引っ張るな」

後先考えずにやけくそになって言うと、急に腕を引く力が弱くなり俺はバランスを崩してエリスに向かって倒れた。

普通の女だったら共に倒れて俺が押し倒したという形が出来上がるのだろうが、エリスは楽々と俺を受け止めていた。

傍から見れば、俺がエリスに飛びついたように見えなくもないような気がする。

「ふふっ、景様ったら・・・大胆です。周りの方々も見ているというのに」

慌ててエリスから離れて辺りを見回すと、１０数人程度ではあるがこちらを窺っていることが分かった。

その目は、他所でやれといったものから、あらあらといったものまである。

・・・もうしばらくここには来られない。

そう真剣に思わざるを得なかった。

第６３話：あなたを知るのは、３度目の出会いで（後書き）

本編後の雑談

『風呂』

恵麻「エリスちゃんって、お風呂どうしてるの？」
エリス「気になりますか？」

恵麻「・・・何だか意味深だね～。もしかして、景君と一緒に入っているとか？」
エリス「それは、景様が嫌がられるのでできません」

恵麻「それは・・・ってことは・・・」
エリス「体を拭いてもらうこと・・・」

恵麻「け、けっ、景君！？」
景「・・・どうした？　って、何だ、その軽蔑に満ちた目は？」

恵麻「エリスちゃんの体を拭いているって本当なの！？」
景「は？　・・・エリス、お前紛らわしいこと言っただろ？」

エリス「いえ。恵麻様が私に最後まで言わせてくださらなかったものですから・・・、申し訳ありません」
景「・・・別に悪気がないならいいんだけど」

恵麻「ね、ねえ・・・景君。それで、実際はどうなの？」

景「吹いているのは俺じゃなくて、母さんな。だから、2人は一緒に入ることも多い」

恵麻「・・・そっか、よかった」

エリス「ですけど・・・私は景様に拭いていただきたいと思っています」

恵麻「っ！？」

景「・・・エリスは、しばらく黙っていてくれ」

第６４話：きっかけと挫折

人というものは何故同じことを考えるのだろうか？

そこに響くのは、シャープペンシルを一心不乱に走らせる音と周りに気を使いつつひそひそと教え合う声。

１週間後に中間試験を控えているせいもあって、図書室は学年を問わず多くの人で混雑していた。

唯一の救いは、中学と高校の図書室が違うことか。ただ１学年３５０人もいることもあって、席数が多いものの座れないこともある。

図書室で勉強するのは家が遠い人や家では集中できない人が主に使っているが、友人と話をするだけで終わる者もいるため効果はどっちもどっちといったところだ。

俺は、いつもは家で勉強をするのだが、今日は教科書を家に忘れるという失態を犯したため、同じく図書室にいた大助から借りて勉強している。

ちなみに科目は数学。

決して、苦手な科目ではなく赤点など取ったことはない。

そのような科目を何故勉強しているのか。それには、きちんとした理由がある。

きっかけは、今日の昼休みだった。
４時間目の数学が終わった時に、担任に呼ばれた俺は職員室で衝撃的な話を聞くことになった。

「有栖君。話と言うのは他でもない宿題のことよ」

俺は、その話を聞いてもぴんと来ず、聞き返すと担任至極呆れたように溜息を吐く。

「先週出したの、覚えてない？　提出していないのあなただけよ？」

そんなものはあるわけが・・・・・。

だが、不幸にも俺ははっきりくっきり明瞭に覚えていた。

「ああ、あれか・・・。実はやったのですが家に忘れてきました」
「随分と古典的な嘘ね・・・。それはやっていないのと同義よ」

さすがにこの嘘が通じるほど、担任も馬鹿ではなかった。
その上、この担任は俺の家庭環境に詳しいために俺の最も痛いところを突いてきた。

「それならエリスに持って来てもらえばいいじゃない。あなたが呼びたくないなら私が呼びましょうか？」

エリスが家にいるということは、担任もよく知っている。なんせ開発者なのだから。
夕方にしか買い物に行くことはないので、今は確実にいるだろう。
そして、何か持ってきてくれなどと言えば、持ってくることなど火を見るより明らかなことで、またエリスのことを学校で蒸し返すことになってしまう。

「・・・すみません。やってません」

もうこう言うしかなかった。

おかげで俺はペナルティとして評価点を０にされてしまい、試験の点数の０．８倍の点数が赤点のボーダーラインである４０点を越さなくてはならなくなった。
これまで５０点以上を取ったことのない俺として重大な問題だった。

幸樹や晃と赤点ぎりぎりの点数を互いに見せ合って笑っているような、いつもの試験とは違い、早いうちから勉強をする必要に迫られているというわけだ。

「はあ・・・、真面目にやっておけばよかった」

今更ながらにノートを見て、そう思う。
俺のノートは所々抜け落ちているので、大助のノートを借りて見て

いる。
普段の行動からは考えられないが、大助は学年1の天才だ。
ただ、本人は見えない所で努力をしていると言い、天才と言われることを嫌っている。
あくまで天才とは努力をしないで才能がある人のことだと、奴は言っている。

「しかし、何なんだこれは・・・・・。意味が分からない」

大助はノートも綺麗に自分でまとめており俺のノートとは見やすさがあまりに違う。

違うのだが、見ているだけでは俺には何の事だかさっぱりなのだ。
結局、ノートも1ページ進んだ程度で1時間が経とうとしていた。

「ふむ、まったく進んでいない・・・か。どうだね、少し休憩でも」
「・・・頭から煙が出そうだ。数学ってこんなに難しかったか？」

すると、奴は一瞬面食らったような顔になったが、すぐに笑って言った。

「・・・・これは基本中の基本になるのだが。まあ、とりあえず景よ、一旦休んだ方がいいかもしれない。お前のことだ、そろそろ飽きて寝かねないはずだ」

はっきりと断定されるのも腹立たしいが、事実なので何も言い返せない。
まったくふざけた様子さえ見せないあたり、本当に俺はやばいのだろう。

俺は一旦ノートを閉じると机の上に置いて、図書室を後にした。

「さてと、景よ。今は勉強のことではなく違う話をしよう」
「ああ、そうだな」

休憩のために俺たちは食堂にやって来ていた。
俺は、ペットボトルのお茶を飲みながら大助の話を聞いていた。
だが、話の内容よりも気になっていたことがあった。

「・・・今回も余裕そうだな。ところで、その本は・・・」
「景も気になるのかね？　だろうな、男たるもの常にロマンを追わなければ男ではない」

・・・本当につかみどころがないな。

俺は、急に喜々としだした大助を心なし距離を置いて見ていた。

・・・帰ったら何をしようか。

話を聞いているふりをしながら、ぼんやりと今後のことを考えてい

ると大助は急に本のタイトルを俺に見せてきた。

・・・透視戦略と理論？　ヨーク・H・ミエール？

透視って・・・投資の間違いじゃないのか？　誰だ、この変態を野に放ったのは！？

呆れる俺とは対照的に大助は、まるで自分が書いたもののように自信たっぷりに力説する。

「真面目な本だとは思わないかね？　よく言うではないか、お婆ちゃんの知恵袋と。先人から知恵を借り、現代に生かすことは先人の思いに報いることになるのだよ」

「・・・お婆ちゃんと聞いて真っ先にぼたぼた焼きが浮かんだんだが」

「だからお前は駄目なのだ。食い意地ばかり張って、脳味噌に栄養が回っていないのではないか」

確かにごもっとも。

だが、大助の言うことも小さいことではあるが矛盾しているのだ。

「・・・・・そもそも作者の名前は男だろ。それに、透視って・・・。だいたいやろうとすることは分かったが、超能力なんてあるわけない。無駄骨に終わるのがオチだ」

俺は超能力というものはあまり信じない性質だ。

大助が超能力を信じることを否定するつもりはないが、せめてもう1度考え直させる時間くらいは与えてやりたい。
それでも、やるというなら止めることはしない。

大助は、俺の言葉に少しの間思案していたようだったが、すぐに自信と希望に満ち溢れた顔で指導者が民衆に語りかけるように堂々と話を切り出した。

「しかしだな、人間、やろうとする前からできないということが間違っている。俺は、人ができないということを次々と成し遂げてきた」

・・・悪い方向でな。

「男というものは悲しいかな、おっぱいへの探求心が抑えられないものなのだよ」
「お前と一括りにするな！　だいたいお前は、大きいのにしか目がいかないと前に豪語していたはずだ。透視しなくても分かると思うが？」

そもそも友人になる前から大助の胸へのこだわりは噂で聞いていた。

曰く、巨乳好きの視姦魔がいると。
その被害者は大助の当時の担任だったのだが、見るだけならどうということはないというスタンスの人だったので、さほど問題にはならなかった。
むしろ、それをエサに大助に日本トップと言われる大学を受験すると約束させたツワモノらしい。

ただ、そのこともあってか大助は、限界ぎりぎりを探るように行動している節がある。
普段の行動のため風紀委員からブラックリストに載せられているのも１つの限界への挑戦らしい。
俺からすれば、目立つ必要などないと思う。そんなことをふと思ううちにも話は続いていく。

「いいや、それは違う。大きければ確かに服の上からでも分かるし、圧巻だ。しかし、世の中には隠れ巨乳や美乳といったものがあってだな。見た感じでは分からないこともあるのだよ。俺は思う。何故、人類は服などというものを発明したのかと」

・・・やはり、馬鹿だ。

俺は、呆れて肩をすくめる。こんなのに１学年３４９人が学力で下回るのだから。

「単に身を守ったり、寒さを防ぐためじゃないのか？　その前に想像してみろ。男女問わず、一糸纏わぬ裸で歩いている姿を。いつも通る駅を想像するといい」

すると、大真面目に想像してしまったのだろうか？　大助は初めこそ顔が溶けそうなくらいに緩んでいたが、余計なことまで想像したようでげんなりとした表情で俺を見た。
多少恨みがましい目をしているが、俺が何をしたと言うのか。

「・・・・・・。服は人類最高の発明だ。分からないからこそ追求のし甲斐があるというものだ。裸ならすぐに大きさが分かるが、そ

れはそれで面白くない。見えないものが見える。ここに、ロマンを感じるのだよ」

「・・・開き直ったな。ところで、さっき言っていたな。見た目で分かると。それは、初対面の人間全員を見ているということか？」

「その通り。しかし、半分は違っているというべきであるな。男のは見ない。それだけは忘れないでくれたまえ」

念を押した言い方に大助の執念を感じる。俺は、呆れ返ってむしろ感心しつつあった。

「裏を読もうとし過ぎだ。俺はそもそも勘定にすら入れていないというのに」

「素直になれということかね。ところで、景んとこのメイドは大きかったな」

「・・・ああ、そういうことか。そうなのか？　俺はまじまじと見ないからよく分からないんだが」

話の筋からして言いたいことはすぐに理解することができたが、全くもって嬉しくない。

エリスが大きかろうと小さかろうとエリスはエリスだ。むしろ、抱きつかれた時に感じた柔らかさや温かみの方が気になる。

俺の知っているロボットはごつごつとしていて柔らかさや温かみとは無縁だったからだ。

「しかし、製作者はよく分かっている。大は小を兼ねると言う。相手の好みが分からなければ、とりあえず大きければいいのだ」

・・・いや、それは間違っていると思う。
小さいのが好きな奴には、余計な贅肉をぶらさげているようにしか見えないだろう。
それにしても、開発チームのトップがこの学校にいるなんて言ったら驚くだろうな。そして、俺の勘ではきっと気が合う。
「ふっ、冗談は置いておくにして。一緒に寝たりしないのかね？」
「・・・すると思うか？」
「もちろんだ。お前は、俺の親友。つまり、俺と同一体になるわけだ」
まったく俺のことを信じていない大助の顔を見ていると、本当に友人をやっていていいのかと考えてしまう。
そのせいで、口調もついぶっきら棒なものになってしまう。
「・・・アホ。物理的に恐ろしいのにそんなことができるか」
「物理的とは一体何だね？」
エリスのことを詳しく知らない大助からすれば、それは至極当然の疑問だろう。
珍しく首を傾げて大助は俺を見た。俺は、大助を見て真面目ぶって答えてみた。
「エリスは見た目や手触りといった表面的な部分は人間と変わりない。でもな、一応ロボットなんだ。・・・中身が機械だからとにかく重い。寝返りでもうたれたら、俺が潰される」
見た目こそ細く見えるが、それは紛れもない事実。

エリスが家の廊下を歩いていると、何故かみしっという不吉な音が聞こえるし、そもそも体重計に乗りたがらない。
極めつけに、エリスが1番に風呂に入った時に、お湯が大量に溢れるといったこともあったので、それ相応のものだと考えている。
所謂、古代の純金を見分ける方法と同じだ。
「ふむふむ、手触りか。景も汚れたものだ。やはり、私の仲間入りは既定路線となったようだ。おめでとう、同志よ。心から迎え入れようではないか」
時折、大助は俺を同志に迎え入れようとすることがある。
ふと気紛れに1人が寂しくなることがあるらしい。
だが、俺の返答はいつも一緒だ。
「・・・いやいや、ないない。って、学校にいてもお前と話をしているだけで、全く進まないな。やっぱり家でやることにする」
すると、大助の声色が真面目な時のものに変わった。
「家に帰って1人でできるのか？　ここはあえて1人で出来るもんと言ってくれると嬉しいぞ。仮にできないとしてもだ、俺は毎日ここにいるから教えることもできるはずだ」
「・・・謹んで遠慮する。以前にも教えてもらおうとして今日と同じようなことになったからな。2年にもなったし、俺も進歩したと思っていたが、大きな勘違いだったらしい」

ただ、今痛感しても遅すぎるのだが・・・。それに、試験が終われば確実に忘れる。

今までの経験上、よく知っていることだった。

正面に立つ大助は、まるで俺の頭の中を察知したかのように半ば呆れた口調で言った。

「俺とだと集中できないというのなら何なら俺以外から教えてもらえばいい。勉強会というものだ。そうだな、藍羽あたりなら家も近いし、よいのではないか？」

「恵麻か」

確かに恵麻は、この学年では頭の良い部類に入ると言えるだろう。特に得意不得意もなく、学年では４０番台前後をキープしている。俺の知り合いでは大助に次いで勉強ができる。

それに、家も近いし、お互いを知らないわけでもないので頼みやすい。

「そうだな、明日頼んでみるか」

「おいおい。明日と言わずに今日するべきでないか？」

大助の言うことは尤もであるが・・・。

「いや、恵麻の家に押し掛けるのも迷惑だと思うから明日にしておく」

俺は今日行くのはやめておいた。理由は何となく明日からでも大丈

夫だろうという考えからだ。

「・・・・・・。・・・本当に大丈夫か？」

「・・・ん？　何か言ったか？」

大助がぼそっと何か言ったが、俺にははっきりと聞こえず思わず聞き返すと。大助は苦笑いを浮かべて改めて言った。

「・・・・1人で出来るもん。そう言わなかったと思ったのだよ」

「・・・・」

何を言っているんだと思ったが事実なので言い返すことができない。

・・・・1人じゃ出来ないもん。

内心で唱えただけだったが、途端に恥ずかしくなり、ぶるぶると頭を振ってその言葉をかき消す。

・・・さて、くだらないことをしていないで俺も帰るか。

結局、学校ではほとんど勉強できなかった。

第６４話：きっかけと挫折（後書き）

本編後の雑談

『喜怒哀楽』

景「・・・」

エリス（何だか楽しそうです。私も嬉しくなります）

景「・・・・・」

エリス（・・・どうなさったのでしょうか？　何か悩みがあるのなら相談してくだされば　いいのに）

景「・・・・・・」

エリス（景様・・・何だか不機嫌そうです）

景「・・・ぐずっ。・・・風邪か？」

エリス（大変です。お薬を探して持っていかないといけません）

景（・・・何だかずっと視線を感じるんだよな。まさか、ストーカー・・・なわけないか。・・・しかし、この本は面白かったな。恵

麻に続きも借りてくるか）

エリス「景様、お薬を・・・・・って、あれ、誰もいません。・・・・
景様？　景さまーっ？」

第65話：スロースターター

試験開始まであと6日。

あっさりと恵麻は、勉強に付き合ってくれることになった。

そこまでよかったのだ。

だが、俺が家に帰ると母さんもさすがに呆れ顔だった。

「・・・景ちゃん。随分とお友達が多いけど・・・。遊ばないでちゃんと勉強しなさいよ」

「・・・まさか、こんなに増えるとは思わなかった」

俺が、お願いしたのは恵麻だけのはずだったのだが・・・。

4人をリビングに通し、とりあえず座ってもらう。

リビングにはエリスがおり、すぐに俺たち5人分の飲み物を用意してくれた。

「お茶のお代わりは冷蔵庫にあります。お菓子も用意しているので、よろしければどうぞ」

「悪いな、エリス。いきなり4人も連れて来て・・・」

そのまま出て行くのだろう。そう思っていたが、エリスは一向に出て行こうとしない。

それどころか俺の背後に椅子を持って来ると、音も立てずに座り、

分厚めの本を1冊をばさっと開いた。

「・・・何で、そんなところにいるんだ？」

俺として、後ろにいるということが気になって仕方がない。
できれば出ていってほしい。そう願いを込めてみたのだが・・・。

「いえ。私はこちらで監視いたします。柚葉様より厳命を申し預かっておりますので」

・・・はっきりと断られてしまった。

ただ、はっきりと聞いておきたいことがあった。

「母さんのお願いって、どれくらい重いものなんだ？　俺の願いと競合したらどうするんだ？」

「景様のお母様ですから、基本的には絶対です。競合した場合は・・・柚葉様のお願いが優先になると思います」

何となく答えは分かっていたが、改めて聞くと何とも言えない気分になる。
これで、逃げ出そうものなら地の果てまで追いかけてくるだろう。・・・いや、その前にリビングを出る前に捕まるだろうが。

人の監視のもとで勉強なんてできるわけないが・・・。

「さあ、景様。お勉強を始めてください」

わざわざ恵麻を呼んだ以上やるしかない。

こうしてエリスに急かされる形で俺たちは勉強を始めた。

「・・・とりあえず、休憩にしないか？」

勉強を始めてから2時間が経ち、時計の針が6時を指したとき、俺は皆にそう提案した。

だが・・・。

「景。お前飽きるの早くねえか？」

「有栖君。もう少し頑張ってみない？」

「景。あんた、本当にやる気あるわけ？」

「・・・う～ん、少し休もうかな。景君は頑張ったよ」

1人を除いて人選を大きく誤ったようだ。

そもそも他の3人は呼んだ記憶すらないのだが。

「ところで3人はどうして来たんだ？」

先程は聞かなかったのだが、そういえば由真と幸樹、それに明月院さんは何故ここにいる？

前者2名は俺と同等程度の学力。明月院さんは、だいたい学年の半分よりやや上。
教えてもらうなら、恵麻だけで十分だ。

「え？　だって私は有栖君の友達なんだから。それに、この前のことを謝りたくって」
「あのねえ。あたしだって頭良くないんだから声かけてよね」
「俺も同じく。それに俺は、しばらく泊まるぞ」

三者三様の理由があるのは分かった。
ただ、納得できない言葉が1つだけあった。

「・・・幸樹。泊まるって何だ？」
「景。文字通りだろ。景の家に泊まって勉強するんだよ。俺、家にいるとどうも勉強出来ねえんだ。両親には許可取ってあるから気にしないでいいぞ」

・・・そっちじゃない。俺の家の許可は取ってないんだが。

俺が盛大に溜息をつくと、幸樹はなおも食い下がってきた。

「景、頼む。俺も言っていないけど結構やばいんだぜ。これまで授業なんてほとんど寝てたし、俺の去年の年間成績知ってるだろ？」
「ああ、まあ・・・」

幸樹がここまで試験に必死な理由は、去年1年の出来事にある。
俺たちの高校は中学から大学までエスカレーター式だ。よほど試験結果が悪くなければ、そのまま大学まで行くことができる。

この、『よほど』というのがポイントだ。

ただ、幸樹なら他の道があることも事実ではある。

「でも、お前は野球がある。スポーツ推薦で十分だと思うが？」

「景。お前は馬鹿だな。今時、馬鹿を集める大学なんてそうないんだぞ。うちの大学は馬鹿は求めていないから成績が悪いと切られるんだぞ」

・・・そんなに危機感があるなら最初から1人でできるだろうに。

確かに聖蓮大学は、俺が他の学校にいれば縁もないくらいに競争率は高い。

だからこそ、付属高校にいる俺たちは楽して大学に行けるため、今の時期でさえ楽ができるのだ。

受験ということを考える必要がないということだ。

呆れる俺を放り置いて、幸樹はまだ話を続ける。

「だけどな・・・。俺は1人だとどうも遊んでしまう。そこで、景。お前に協力してほしいと思ったわけだ。な、俺と一緒に大学目指そうぜ」

「いや・・・」

目指すも何も、選びさえしなければ最終成績で赤点がなければ大学には入れるんだよな。

そこが付属のいいところである。

俺が言い淀んでいると、場の雰囲気が少し変わったような気がした。

恵麻と明月院さんががっしりと俺の左右の手をそれぞれ握って言う。

「有栖君。ごめんね、この前は恥ずかしい所を見せちゃったね・・・

。でも、こんな私も応援するよ。一緒に大学に行こうよ」
「景君。私頑張る。頑張って景君が大学に行けるように一生懸命教えるよ。だから諦めないで」

・・・え？　俺、大学に行かないって思われているのか？

大学で特にやりたいことがあるわけではない。何となく行けば、その先も見えるだろう程度にしか思ってない。
そもそも行かないと明言した覚えはないはずなんだけどな・・・。

・・・その前にさっさと説明して、この話を終わらせよう。

そう思ったのも束の間。由真が、先に口を開いた。

「ちょっと待った、景。あんた、陽菜が恥ずかしい所見られたって言ってたけど・・・何したの？」

何で、そんなに楽しそうに聞くのか。

俺は、話しても話さなくてもいいが、あれは明月院さんのイメージに関わることなので、とりあえず本人に尋ねてみる。

「明月院さん。言ってもいいのか、あれ？」

「やめておいたほうがいいね。色々と恥ずかしいから」

意味深に、かつ俺だけに明月院さんは笑った。

そういう笑みは誤解を招く。そう言おうとしたが、既に遅かった。

「恥ずかしい！？　景、お前一体、明月院さんと何があったんだ。俺達友達だよな？　包み隠さず話してもらおうか？」

「・・・私も・・・その・・・・聞きたい・・・かな？」

「あたしも、当然聞きたいわけよ。景、この空気で話さないなんてことはないよね」

だから、人数が多いのは嫌なんだ。

第一、俺が明月院さんの許可を得ずに話しても、信じてもらえるはずもない。

恵麻や由真は明月院さんの友人らしいし、俺よりも信頼しているはずなのだから。

俺は、心底余計な人まで連れてきたことを後悔した。

「・・・さて、飯まで勉強するか」

キレたくなったが、俺が休もうと言ったのがそもそもの発端だ。

だが、ここでふと両手が塞がっていることに気がついた。

「ところで、2人はいつまで俺の手を握っているんだ？」

「え・・・。どうしてかな？　景君の手って暖かいね～」

「猫が匂いをつけるようなものだと考えてくれると嬉しいな」

・・・意味がよく分からない。

確かに2人ともいい匂いが・・・・・って、これでは、ただの変態

だな。

「景様。集中力が切れているようですね。一旦、おやめになって夜御飯を召し上がった方が良いのでは？」

突如、声をかけてきたエリスは笑顔でそう言った。

・・・笑顔のはずなのだが、その笑顔を見ているとどうにも怒っているように見える。

「・・・何か悪いことをしたか？」

「いいえ。ただ、勉強の最中にいちゃいちゃするのは、いかがなものかと思います。いいのですか？　後で泣いても知りませんよ」

やはりエリスは怒っているようだ。

俺が、きちんと勉強しないことに腹を立てたのか、それとも失望したのかもしれない。

「景様が、綺麗な女性に目を奪われ心を奪われるのは分かります。ですが、優先順位が違うのではありませんか？」

エリスの棘のある言葉に、その部屋にいる全員が黙って姿勢を正していた。

まるで、全員がメイドの修行にでも参加しているようだ。

・・・男もメイドになるのか？

ふと、それを想像して俺がぷっと吹き出してしまう。

当然、今のエリスにとってそれは許せないことだったのだろう。

「景様！　少しお話があります」

俺は、エリスに１０分ほど説教をされる羽目になった。

第65話：スロースターター（後書き）

本編後の雑談

『小悪魔さんが通る』

琴美「景、いるー？」

エリス「景様は、現在外出中です。ところで、何故、琴美様は景様のことを名前だけで呼ぶのですか？」

琴美「昔は、景お兄ちゃんって呼んでいたことあったけど、景って何だかお兄ちゃんって感じじゃないんだよね」

エリス「では、どのように思われているのでしょうか？」

琴美「うーん・・・。強いて言うなら・・・・将来の婿かな？　昔、結婚しようって約束したんだ」

エリス「っ！？」

景「ただいま。あれ、琴美ちゃん、遊びに来ていたんだ」

琴美「うん。たまには、景の顔が見たいなって思ったの。だって、結婚を約束した仲でしょ？」

景「・・・それ、昔のままごとの話だろうに」

エリス「・・・景様。少しお話があります」
景「何だ？」
エリス「景様。どうして、そのように2人3人と！！　まずは、そこに正座してください」

琴美（・・・うわっ、エリス本気で怒ってる。軽い冗談だったのにな。・・・・でも、もうちょっと炎上させてみよっと。楽しいし）

琴美「景。責任・・・・取ってくれるよね？」

エリス「っ！？　景様！！」

景（・・・何故、昔の遊びで俺が怒られなきゃいけないんだ？）

第６６話：２人と１人

結局、夕食後９時まで勉強をしたところで、家に帰るために駅へ行く由真と明月院さんを俺は送ることになった。
本当は面倒なのだが、女の子だけで夜道を歩かせるなと、俺以外の人たちが言うものだから仕方ない。

ついでに言うと・・・・。

「だったら幸樹でいいんじゃないか？」

「はあ？　あたしは、景に送ってほしいんだけど」
「・・・私も、有栖君に送ってほしいな。話もあることだし」

何故か、指名されてしまったのだ。

・・・さっさと風呂に入りたかったんだがな。

そう愚痴っていても仕方がない。
俺は、幸樹に先に入るように勧めると、何故か遠慮する。

「俺が先に入ってもいいのか？」
「・・・ずうずうしく泊まっておいて何を今更。俺は、２人を送ってくるからその間に頼む」

ずうずうしく泊まりに来ておいて、何故こんな時に気を使うのか、俺にはよく分からない。

・・・何となく気がついたのかもしれないな。

「あいよ。でも、ほんと助かった。今、俺の家甥っ子と姪っ子が来ていて勉強どころじゃねえんだ。普段だったら認めてくれねえだろうよ」

幸樹がうちに来た理由は、だいたいの所分かった。

でも、泊まるまでしなくてもいいのではないかとも思う。
きっと、うるさくてどうしようもないのだろうな。

「景。早く」
「今、行く」

俺は、何でだろうなと思い、溜息を1つ吐くと、幸樹と母さんにいってきますと言って俺は家を出た。

・・・玄関先で大声で叫ぶなよ。

この地域は、比較的治安も良いほうだと母さんからは聞いていた。
それに、駅までは街灯のある通りを行けばいいだけなので、俺がいちいち送る必要などないと思う。

初夏とは言え、まだ夜は冷える。
それに、ふと思った。明月院さんはともかくとして、由真は1人で駅まで行けるだろうと。

「景。あんた、不満そうじゃない」
「・・・お前だったら、痴漢が出ても逆にぼこぼこにするだろう？」
俺は、痴漢注意という張り紙を見て冗談めかして言うと、由真はわずかに眉をひそめて、鼻を鳴らす。

「別にいいじゃない。あたしだって、女の子なんだから襲われたら怖いに決まってるでしょ」
「・・・俺は、お前のほうが怖い」

・・・女の子なんて言う柄でもないくせに。

由真は、俺の言葉に呆れて苦笑いしつつ、俺に一歩近寄ってきた。

「痴漢よりあたしの方が怖いねえ・・・。それじゃあ、あたしが痴漢だったら2倍怖いってこと？」
「・・・女であることを捨てるなよ。女だったら痴女のはずだが」

「あたしって痴女に見える？　背はでかいし、性格も強引だけどそこまでは・・・」
「要素はたくさんあるんじゃないか？」

「具体的には？」
「男に興味ないって感じだけど、実は興味あるってところとか。時々、男の・・・」

「うわあっ！？　それ以上言ったら殴るよ」

体を見ている。ただそれだけのことなんだが、恥ずかしいのだろうか？

由真は、何故か男女問わず、人の体を見る癖がある。俺がそのことを知ったのは、去年の文化祭でのこと。

たまたま通りかかった場所に由真とその友人が話をしているのを聞いてしまったのだ。

その時の由真の慌てぶりが尋常ではなかったので、それ以来時折からかうネタとして使っている。

だが、俺の方が握られているネタは多いのだが・・・。

こんな話をしているせいだろう。すれ違う人がちらちらと様子を伺っている。

今日は、いつもの近道ではなく人通りの多い道に沿って回り道をしているから、歩いている人も多いのだ。

駅前通りに入り、由真と不毛な会話を繰り広げていると、明月院さんは俺の肩をちょんちょんと突付き、周りを見ながら言った。

「・・・有栖君。最初の痴女は、揚げ足取りだと思うな」

「そうか？　それにしても、何か道行く人が俺たちを見ていないか？　話の内容が悪かったのか」

確かに、２人して大きな声で話していれば注目を浴びるのも無理はない。

まだ９時過ぎとはいえ、大きな声で話をしていれば煩いと思われる

のは仕方ないことだ。

駅までは、そう遠くない。そのはずだが、ゆっくり歩いているのと遠回りをしているために思った以上に時間がかかっていた。
だが、しばらく黙っていたためか、ようやく駅の建物が見えてきた。
すると、今まで黙っていた由真が唐突に俺に話しかけてきた。

「そういえば、あんたたち何かあったわけ？　ここ最近、急に仲良くなったけど」
「そうか？」

そう見えるほど、仲良くなった気はしないのだが・・・。そもそも学校でもほとんど話なんてしないな。
あの2人から力になってほしいとは言われたが、明月院さんの近くにうろうろしていると、遠巻きに見ている連中が煩いからな。
数日間、明月院さんのことを気にかけて知ったのは、友人自体は多いのだが、近くで親しげに話す人はそういないということだった。
男は可愛いものは遠くから見守るというスタンスの奴が多く、女は裏ではあることないこと色々と喋っており、表面上の友人という奴が多かった。

良くも悪くも目立つことは人の注目を浴びて仕方ないらしい。

「・・・有栖君、話聞いてる？」

「あ・・・ごめん。全く聞いてない」

何か俺に用事でもあったのだろうか。俺が聞き返すと、明月院さんは由真の方にちらりと視線を向けると、そっと俺に密着するくらい

に近づいた。

「・・・趣味のことは、黙っててね」

ひそひそと耳元で囁かれ、耳が少しかゆくなった。

それを見ていた由真は、仲間外れにされていると感じたのか、ずいと俺に寄って来た。

「何、あんたたちこそこそ話しているのさ。あたしにも聞かせてよ。てか、やっぱ何かあったんでしょ。それはあたしには言えないようなこととか？」

由真にこういう話をすれば最後。確実に友人たちの間に瞬く間に広がっていくことは、短い付き合いの俺でも分かる。

だから、俺は何も言わなかった。

しかし、明月院さんは違っていた。

「この前、有栖君と買い物に行って、その時にちょっとあったんだよね？　由真さんには・・・秘密です」

可愛らしくウィンクを飛ばすのはいいが、俺に丸投げするのはやめてくれ。

「ははーん。・・・ま、どうせ景のことだから何もなかったんだろうけどね」

ほら見ろ。由真が喜々とした顔を見せているじゃないか。

今は、諦めたふりをしているのがありありと分かる。後で、メールで聞いてくるんだろうな・・・。

俺は、明月院さんがここまで話をするとは思っていなかった。
由真とは少し前から仲がいいらしいし、もしかすると他の多くの友人とは1段違った存在の1人なのかもしれない。
こういった時、裏表の少ない由真を羨ましく思う。

そう俺が考えているうちに、明月院さんは意味深に由真に言った。

「何かあったらどうします？」
「あたしには、関係ないね。後で、陽菜の見えない所で、景を締め上げるかもしれないけど」

何かって、何？

「・・・2人とも、どす黒いな。俺が何かするとでも思っているのか？」

多少、非難の意思を込めて2人に向かって言うと、2人はわざとらしく驚いた表情を見せた。

「ど、どす黒いって・・・・。ひどいと思わない、由真さん？」
「陽菜もそう思う？　奇遇だね、あたしもなんだ」

「有栖君って、実はヒドイ人なのかな？」
「そうだねー、ひどい男かもねえ」

・・・2人して、こっちを見てにやにやするな。

「それに、女の子慣れしてないように思えるな。結構、女の子が周りにいるのにね」
「あははっ、景は彼女なんていないし。近くにいるのが、あたしと幼馴染の恵麻じゃねえ」
俺は、困惑の色を隠すことができずにいた。
由真の声ははっきり言って俺が喋っていた時よりも数段煩い。
おかげで周りを歩く人々が、俺たちを迷惑そうに見ているのだ。
そして、その8割ほどは俺を睨んでいく。俺にどうしろと？
「でも、有栖君って優しいんだよ。この前もエスコート・・・・・ううん、何でもない」
「・・・陽菜、それは無理があるから。デート・・・もどきね。ま、今日だって何だかんだ言っても、あたしたちを送ってくれているわけだし」
「そのもどきっていうのは、ちょっと・・・。男女が一緒に1日買い物に行けば、立派なデートだと思うよ？」
・・・デート？　いや、これは由真の方が正しいように思えるのだが。
「はあ・・・、陽菜、あんたねえ。そんなんじゃ、いつまで経ってもお子様のまま終わるよ。ま、買い物に行った相手が同じお子様じゃ仕方ないないけど」
「でも、大人すぎるのも少し嫌かな・・・。有栖君は、一緒にいると楽しいよ。話もしやすいし」

・・・そりゃ、同じ趣味なら大概は楽しいだろう。とりあえず話に困ることがないのだから。

「景の趣味ね・・・。あたしは、景が料理が好きで、変な料理を食べることが好きってことくらいしか分からないわ」

「・・・・人の趣味はそれぞれなんだから否定したらかわいそう。私だって歌のことを否定されたらショックを受けるもの。でも、有栖君って噂が色々絶えないよね・・・」

「・・・まあね。あたしは、近くにいるから分かるけど、大抵デマなのよねえ。メイドの奉仕の話とかゲイの話とか。ま、嘘も１００人いて９９人が信じれば本当のことになるだろうねえ」

正直、俺の真横で話をしているので俺にも丸聞こえなのだ。

・・・むしろ、聞かせているというのが事実と言うべきか。

女2人に男1人。その2人が互いに友人とくればそうそう話に入る隙が与えられることはない。

やはり俺は異性慣れしていないようだ。

・・・進歩ないのな。

誰に向けた言葉だろう。それは前を歩く2人か、それとも俺自身か。ただどちらにせよ、俺は2人の後ろで肩をすくめて苦笑いを浮かべているに違いない。

すると俺の悪口を言ってすっきりした2人と視線がばっちり合ってしまった。

「あ・・・。有栖君が呆れてる」

「・・・景にバカにされているような気がするのは、気のせいじゃ

ないね」

「いや、な。見た目のいい2人だって恋人もいないわけだし、俺だけが非難される云われはないと思うんだが」

特に、見た目という部分を強調しておく。

俺がそう言うと2人は俺の方を見ると顔を見合わせる。

そして、引きつった苦笑を浮かべ、もう1度顔を見合わせると言った。

「・・・うーん、有栖君をいぢめるのはやめましょう」

「・・・・そうだね。もういぢめるのは、やめにしようか」

とりあえず2人の結論はスルーということで出たらしい。

この2人に対して友人以上の感情を抱ける日は来ないだろうな。そして、その逆もまた然り。

それを是とする限り、ずっと変わることはない。ただ、俺はそれで充分だと思った。

3人で話をしていると、すぐに駅前まで着いてしまった。

「それじゃあね、有栖君。また明日」

「景。気をつけて帰るんだよ。近頃、この辺に変質者が出るらしいって恵麻から聞いたよ」

そんな話もあったな。

だが、それはそっくりそのままお返しさせてもらう。

「自分の心配でもした方がいいんじゃないか？」

「はっ、あたしが誰かに襲われるように見える？」

「いや、全く見えない」

俺がきっぱり断言すると、由真は苦笑して改札の辺りで1度大きく手を振ると雑踏の中へと消えていった。

その姿が完全に見えなくなると、俺は家に戻るために踵を返した。

・・・さて、俺も帰って風呂に入るとしますか。

第67話：好きな人の理想とアプローチ

友人と集まって、勉強を始めて2日目。

試験まではあと5日と迫る中、俺はようやくエンジンがかかり始めていた。

幸樹も何故か、うちに馴染んでしまい、母さんはダメ息子が2人に増えたと言いつつも嬉しそうで、父さんは幸樹の方が話が合うためかうちの子供にならないかなどとのたまっていた。

エリスはというと、幸樹の好奇の視線に耐えつつ、仕事をしているせいか苦笑することが増えているようだった。

そして、学校から帰ると俺たちはさっそく勉強を始める。

昨日と変わらぬメンバーで、今日こそはと意気込んでいたのだが・・・。

「ふむ、自宅にメイド。そして、俺。この場がカオスになるのも時間の問題か」

呼びもしない奴がもう1人増えていた。

「・・・何でお前が来ているんだ？」

「親友が困っていると言うのを黙って見過ごすような薄情者に、この俺が見えると言うのかね？」

あまりのしらじらしい言葉に俺は出鼻を挫かれた思いだった。

「・・・あの、五味様。何故、私の方を見ておっしゃるのでしょうか？」
「いいねいいね。・・・できれば、大助様と・・・」
大助は、エリスの手を握って顔を近づけようとした。
だが・・・。
「おい、てめえっ。俺のエリスちゃんに何してやがる」
幸樹が襟首を掴んで無理やり引き離した。
さすがの大助も幸樹の力にはなす術もなく、エリスから引き離され1人むせ返っていた。
「あの・・・寿々林様。大変言いにくいのですが・・・、私は、景様のものです」
「そこはこだわらなくていいからな」
恵麻や由真はすっかりやれやれといった様子で俺を見ていた。
ただ1人を除いては・・・。
「有栖君は、モテモテだね」
「明月院さんも、エリスと同等くらいに場の雰囲気を読もうとしないんだな・・・」
俺がそう言うと、明月院さんはてへっと小さくぺろっと舌を出した。
「景。本当に勉強できるんでしょうね？」

「・・・」

たぶん無理だろう。

母さんの多少息子を心配した言葉に俺は何も言い返せなかった。

・・・・・・。

・・・・。

・・・。

昨日とは打って変わり、リビングは静かだった。

時折、質問する時に喋る以外は、話し声は全く聞こえてこない。

ただ、シャープペンシルを走らせる音とノートをめくる音が聞こえてくるだけ・・・。

「見えた！　黒か」

「きゃああ！！」

・・・ではなかった。

「てめえ、何羨ましいことやってやがる」
「お前ら、邪魔するなら帰れ！」
こんなんで、本当に赤点を免れることができるのだろうか？
ますます心配になってきた。

俺が、キレたせいもあってか、その後2時間は非常に静かな中で勉強することができた。
6時半までは勉強の時間と決めてやっていたので、現在は全員休憩中だ。
今は、母さんが夜飯を作っており、俺たちはトランプをしながら飯ができるのを待っていた。
手伝いを皆が申し出たのだが、母さんは勉強に心血を注ぎなさいと言って手伝わせてはくれなかった。
そこで、大勢で遊ぶことのできるトランプをしているのだが、トランプを7人でやるとせいぜいカードは1人7，8枚。
そこで、幸樹が言い出したこの人数なら時間がかかるダウトをして

時間を潰すことになった。

「景よ。・・・ところで、メイドさんの下着は黒であったが、ブラはどうなのだ？　ついでに、幸樹よ。ダウトだ」

「けっ、まじかよ」

舌打ちをしてしぶしぶ幸樹はトランプを回収する。
どうして俺の方を向いているにも関わらず、的確に違うカードだと分かるのか。
それ以前に、会話がトランプとは全く関係ない。

会話に登場する当のエリスはと言うと、大助の視線から隠れるように俺の左斜め後ろに不自然に陣取っていた。

「そんなもの知るか。俺がいちいち知っているとでも思ったのか？
・・・恵麻。カード回収しておけよ」

「うっ・・・。どうして、景君分かっちゃうの～」

7人でダウトをしてれば、否応なく違う数字を出さなくてはならなくなる。
ルールによって、2周しないとダウトと言えないようにしているが、7人もいればあまり効果のないルールと言える。

「俺の予想では、上も黒だと思うのだが、さていかがなものか」

「大助、てめえ！　俺のいる前でエリスちゃんにセクハラとはいい度胸だ。ついでに・・・ダウトだっ」

「ふっ、見てみたまえ」
「ぐっ、またかよ・・・」
幸樹は、お手つきをしてしまい更にカードの枚数がかさんでいく。
現在7人で遊んでいるのだが順番は俺から時計回りに、エリス、恵麻、明月院さん、由真、幸樹、大助となっている。

先程から俺の正面に陣取る女性陣から痛い視線が向けられていることと、今現在話していることとの関連性は言うまでもない。

「・・・あんたさ、一応エリスのご主人なんでしょ。何とかしてあげなよ。エリスがかわいそうじゃない」
「有栖君。嫌われてからじゃ遅いんだよ」
「ここで、びしっと決めようよ～」

3人に攻められっぱなしの俺だが、もうこれだけ言われたら遅いとしか言いようがない。
俺は付け加えに過ぎない言葉を足すことで精一杯だった。

「・・・ということだから、大助。それ以上はやめてくれ」

これほどまでに、家に呼んで後悔した奴はこいつくらいものだ。

・・・いや、違うか。そもそも女とこいつを合わせたことが間違いなんだ。
女がいなければ、特にこういう話題を気にする必要もない。

・・・・むしろ、恵麻以外呼ばなきゃよかったんじゃないか？

・・・いや、そもそも恵麻以外呼んでない。

・・・・そもそもどうして、こいつら呼んだんだっけ？

・・・・・・。

ループする思考に溜息を吐いてエリスの方を向くと、すっかり怯えきった様子のエリスがいる。
誰が見ても分かるというのに、大助は全く気にした様子もない。むしろ、この状況になって尚喜々としている。
もうトランプどころではなくなってしまった。

こんな状況になって俺は、とりあえずエリスの頭を撫でてやることしかできなかった。

「ふむ、景は、やはり周りの女の子の尻に敷かれるタイプか。どの子であっても景を尻に敷くことは可能だろうし、皆、いい尻をしている」
「・・・もういい。お前は喋るな」

えろいおっさんみたいなことを言う大助に部屋にいる皆がドン引きしていた。
それでも、話をやめることのない大助の厚顔さには呆れてしまう。

「分かった。しかし、１つだけ景に聞いておきたいことがある」

素直に応じる大助に俺は逆に警戒心を覚えた。

「何だ？　くだらないことだったら無視するからな」

俺が、無愛想に答えると、大助は含み笑いを見せ、少し間をおくと俺に1つ問うた。

「それは、今日ここに女の子が4人いる。いずれ劣らぬ美少女、エロゲみたいなシチュエーションだと思わんかね。思わんにしても、景よ。この中に本命くらいいるのだろう？」

「だからくだらないこと・・・・」

どうして、こいつは俺の本命だとか何だを気にするのか。
この手の話題は、あまり俺は好みではない。土足で人の心に入り込んで、俺の好きな人を知って何がしたいというのだろうか。

だからこそ、俺は語気を強めて否定をした。

だが、そのこと強い反発を覚えた人がいたようだ。

「景。あんた、あたしたちの存在がくだらないとでも言いたいわけ？」

「・・・何故、いきなり噛みついてくる」

それは、由真だった。
俺は、訳も分からず首を傾げると由真は床にあるトランプの束を脇にどけて俺にずいと寄って来た。

「別に好き嫌いはどうでもいいけど、くだらないって・・・」

「・・・」

怒っているのか？

確かに言葉が悪いと思うが、俺が誰が好きかなんてここにいる全員に関係のないことだ。

・・・こういうのを逆切れというのかもしれない。

そんなことをふと思う。すると、由真はその右手を俺の肩に置いて、俺の視界には由真しか映らないくらいに近づいた。

「・・・で、本命は誰よ？　あたし誰にも言わないからさ」

こ、こいつは・・・。

俺にしか見えないように、由真はにやりと笑みを浮かべた。

そのせいだろうか。恵麻も明月院さんもああっと動揺を隠せない声を出しているのが聞こえる。

「ゆ、由真ちゃん！　そんなに近づいて。景君も鼻の下伸ばしてないで早く離れてよ」

「由真さん。有栖君が困っているじゃないですか！」

「景様・・・。こんな所で・・・」

表情まで見えないが、きっと俺に対する侮蔑の目をしているのだろう。

これって、俺のせいになるのか？

だが、2人と比べて男たちは冷静だった。

「由真。景を襲う気か？」

「ほう、上総野は、盛んだな。いいぞ、もっとやれ」

いや、違うか。

こいつらは露骨に楽しんでやがる。

だが、そう思ったのは俺だけではなかった。由真もたいそう不満そうに俺から離れ、２人に抗議する。

「はあ？　あたしが景を襲うわけないでしょ。こっそり景の好きな子を聞こうとしただけよ。ま、教えてくれなかったけど。誘惑しようとして損したわ」

・・・誘惑されるほど、魅力を感じないんだが。

俺が、呆れて肩をすくめると恵麻が話しかけてきた。

「そ、それで・・・・景君？」

「ん？」

声のした方に振り向くと、これまた恵麻が近くに正座していた。そして、真面目な顔をしておかしなことを聞いてくる。

「・・・景君は、お尻の大きな子が好きなの？」

「・・・・その話題から離れろ。それじゃあ、聞くが、・・・・恵麻が異性と付き合う時に尻だけ見て付き合うか？」

真顔で俺が聞いたためか、恵麻はしばし呆然としていた。何だか顔を真っ赤にしている辺り、悪い想像でもしたに違いない。

「景。あんたね・・・。そんな極論はないってば」

「そうだよ～。お尻となんて付き合いたくないよ！」

そりゃそうだ。随分と倒錯した質問だったな・・・。
むっとする恵麻とバカねと言いたげ由真を見てそう思わずにはいられない。

「俺なら、胸とだけでも付き合えるのだが？」

突然、会話に割り込んできた大助は、これまた喜々として言う。
言っていることとさえ違っていれば、きっと女にモテるはずなのだが・・・。

「・・・・・。随分と猟奇的な趣味を持っているのな」

人と付き合う気すらないとは・・・。
、
俺や幸樹は、大助の言動に慣れているからまたかといった感じだ。

だが、恵麻やエリス、明月院さんは唖然としている。
由真は、大助の言葉を聞くことを放棄したようで完全無視を決め込んだようだ。
まだ俺の隣で話を続けている大助を路傍の小石ほどにも気にせず話かけてきた。

「景？　そろそろ、さっきの質問に答えてよ。ちょうどご飯もできたみたいだし、食事しながらじっくり景の好みについて聞かせてもらおうかねえ」

「・・・俺の好みか。漠然としているが、１つだけある」
「何々？　勿体つけずに教えなさい。何ならあたしだけにでも」

確かに由真は他の女に比べて、話をしやすい。俺も、よく由真に対してはバカな話をすることもあるので、そのノリの範囲なのだろう。

「由真ちゃんだけって。それは、ひどいよ～。景君の幼馴染として、好きな人くらい知っておきたいよ。・・・応援くらいはできるかもだし」

「私も、今の由真さんの意見には納得できないな。私だって人の恋話は大好きだもの」

しかし、その由真の言葉には、恵麻や明月院さんからクレームが入り、由真も訂正を余儀なくされていた。

俺はそんな光景を見ながらも別のことを考えていた。

・・・そんなに俺の好みって気になるのだろうか？2人とも俺が好きってわけでもないのにな。

大いなる勘違いというものもいいと思うが、勘違いをするにももう少し確証が欲しいものだ。

今だと単なる友人でしかないだろうし。

・・・。

ふいに頭に浮かんだことを俺はかき消すと由真の問いに答えた。

「俺の料理に2度以上付き合ってくれる人かな。家じゃ作ることはおろか、仮に作っても食べてももらえないからな・・・」

こればかりは切実な願いだった。

恋人じゃなくてもいい、友人であっても構わない。ただ恋人だったらいいなと思う程度だ。

「景君・・・」
「景・・・」
「有栖君・・・」
「景様・・・」

・・・何故、全員顔色が悪くなるかな。しかも、明月院さんとエリスは食べたことないのに・・・。

だからこそこういう反応のしない女がいいと俺は密かに思っている。

「どこかにそういう人いないか？」

・・・いるわけはないのだが。

その証拠に恵麻だけは、真剣に考え込んでいるが、他は完全に端から考える気もないらしい。黙って俺を見ると、笑うか首を横に振るだけだった。

俺も端から期待していたわけではない。
そろそろ飯の時間だろうと思い、立ち上がるとエリスが俺を引きとめた。

「食べ物を食べることのできない私では・・・・ダメですか？」

座っているエリスと立っている俺。

奇しくもエリスが上目で俺を見ている状況に、多少気圧されてしまった。
それは拗ねている子供のようでもあり、全てを計算し尽くした女のようでもあった。

「・・・そんなことはない。エリスは、今のエリスのままで十分だ」
「やはり本命は、メイドさんだったか。やはり、俺の見込んだ男よ」

そんなことを言ったせいで、大助が再び会話に戻って来る。

だから勝手に俺を見込まないでくれ。

「景君・・・」
「有栖君・・・」

その上、恵麻と明月院さんも声をかけてきたのだが・・・。

何故、泣きそうな目で俺を見る？

・・・俺、何か間違ったこと言ったか？

天井を見上げても答えは出ることもない。エリスの様子をを見てみるとあれからずっと見ていたのだろうか。俺を見上げたまま右手をぎゅっと掴んで言った。

「景様。たとえ、皆様が景様のことを嫌いになったとしても、私だけはずっと景様のことを敬愛し続けます。・・・でも、そうなってしまったら景様はずっと1人身となってしまいます。ですが、私がいるので安心ですね」

最近のエリスは、どうも俺にも他人にも、自身の気持ちをはっきりと伝えるようになったような気がする。

「景。あんたは幸せ者だねえ」

ただ、それがいい方向に向かっているかどうかは別問題なのだが・・・。

第67話：好きな人の理想とアプローチ（後書き）

本編後の雑談

『梅雨に思うこと』

景「・・・こう湿っぽいと心まで湿ってくるな」
美玖「そういうものですか？　わたしは、梅雨は嫌いじゃないです。雨が降ると作物に潤いが与えられますから」

しより「えー、しよりは嫌い。だって、お姉ちゃんと、庭いじりしてると、なめくじとかいるもん。きもちわるーい」

陽菜「でも、アジサイが綺麗な季節だと思います。よかったら、家の近くに綺麗に咲く場所があるんだけど、みんなでどうかな？」

しより「景おにいちゃん、アジサイって、おいしい？　たくさんあるからたくさん食べられるかな？」
景「・・・しより、拾い食いはやめておいたほうがいい」
美玖「しよりっ、食べちゃダメ！」

しより「・・・はーい」

陽菜「何だか親子みたい」
景「・・・陽菜としよりたちが、か？」

陽菜「・・・有栖君のバカ」
景「・・・？」

第６８話：ある気まずい夜に

それから数日間。

俺たちは毎日集まって勉強をした。

泊まっている幸樹と違い、由真や明月院さんは家で勉強する方が効率がいいような気もしたが、本人たちは互いに教え合って勉強する方が効率がいいと笑っていた。

どうでもいいが、教え合うと言う言葉に俺は違和感を覚えた。

・・・恵麻しか教えていないのだから。

そして、試験前日の夜。

この日もこうして全員で集まって勉強しているわけなのだが、俺はあえて皆にあることを聞いてみた。

少なくともうちでやるメリットなどないはずなのだ。

だが・・・。

「ああ。あたしは赤点じゃなきゃいいしね。赤点あっても平常点でどうにかなるでしょ？　それに、恵麻と景を２人きりにしたら何が

起きるか分からないじゃない」
「私は、気にしないで。いつもそんなにいいわけじゃないし。むしろ、こうやってみんなと話をしながら勉強出来て楽しいよ」
「景。俺とお前は親友だろ？　苦労を分かち合ってこそ、真の親友と言えると思うぞ」
理由はまちまちとは言え、１つだけ分かったことがあった。
面白半分で集まっているから、あまり変わり映えのしない成績の奴ばかりなのだと。
この中では、幸樹に次いで頭の悪い俺が言うことではないのかもしれないが。

翌日は試験ということもあって夕方に由真と明月院さんを送ると、残るは恵麻と幸樹だけになった。
試験前日ということもあって、夜になっても俺の追い込みのペースは落ちることなく、とにかく一夜漬けをしていた。
だが、幸樹はここ数日の疲れが出たのか０時を回った頃には、机に突っ伏していびきをかいていた。
エリスは、充電のために早めに部屋に戻っていたので、リビングには俺と恵麻しか起きていない状況になっていた。
「恵麻は、もう帰って寝た方がいいんじゃないか？　俺は、もう一通り見直してから寝ることにする」
「景君。頑張るね～。でも、寝ないと記憶に残らないよ？」

「寝たら記憶から消えそうで不安なんだ。あの担任のことだから何言ってくるか分かったものじゃない」
「相模先生が？　そうかな～？　先生優しいよ～」
・・・そりゃ、上手に猫被っているからな。それに、エリスのことは誰にも話していないようだし。

「景君。私、何かおかしなこと言ったかな？」
「ん？　どうしてだ？」

「景君・・・笑ってた。しかも、何だか諦め気味に」

よく見ているんだな。

俺自身ですら気付かないことに気がつくとは、さすがは幼馴染だと妙な所で感心する。
いつもなら気にも留めないことを気にするあたり頭がつかれているのかもしれない。

だが、こうして話をしていても無駄に時間は過ぎていく。
俺は、顔をパンと叩き、気合いを入れなおすと机に再び向かう。

「・・・さて、俺は残りをやるから。お休み、恵麻」

あと2時間もあれば、もう1度見直しもできるはずだ。
これだけやったのだから、赤点はないと思うが、油断はしてはいけない。
平常点0は馬鹿にできないウェイトを占めるのだから。

・・・。

何故、横に立ったままなのだろうか？

俺は、ちらりと横目で恵麻の様子を窺う。先程から一向に帰る気配がない。

それどころか、俺の隣に座って・・・、何、楽しそうにこっちを見ているんだか。

「恵麻、どうした？　１人で帰れないなら送るが？」

「違うよ。・・・最後までちゃんと付き合うよ～。景君、頑張っていたみたいだし、私はその景君を教えていたわけだし。・・・はい、これ」

手渡された物を見て俺は、驚きを隠せなかった。

恐る恐る恵麻を見上げ、尋ねてみる。

「・・・何だ、これ？」

「私なりに模擬問題を作ってみたんだよ。・・・・たぶん、赤点を免れるくらいの役には立つと思うよ」

それを聞いて俺は、ほっとした。

まさか、答案を盗んできたのかと思ったからだ。

「・・・景君、失礼なこと考えていたでしょ～。気のせいだとか眠いからだとか、そんな言い訳は聞かないよ」

１２時過ぎても、何故こんなに元気なんだか・・・。

「・・・それは置いてといて。さて、さっさとやるか」
「・・・・。それはとりあえず１０問用意したから、３０分くらいで解いてみてね～」
そう言って、恵麻は机に頬杖をつくと、俺を下から見上げてにこにこと笑った。
・・・随分と可愛くなったものだよな。
ふと、恵麻の笑顔にそんなことを思ってしまう。
・・・・・・。
・・・何、考えているんだか。普段は一緒にいることのない時間に２人きりということで、少し気分がおかしくなっているのかもしれない。
「そっか。あとは、俺１人でできるから。こんなものは作ってくれてありがとうな」
俺は、気恥ずかしさのあまり、恵麻の頭をわしわしと撫でた。
「もうっ、髪がぐしゃぐしゃだよ～・・・」
恵麻は、髪を触りながら恥ずかしそうに抗議する。
そこまで乱れていないのにどうして気になるのだろうか？　むしろ、恵麻の心の方が乱れているのではないかと感じてしまう。
「ちょっと洗面台借りるね。こんな髪で寝たら、明日くしゃくしゃ

になっちゃうよ。あ、景君？　そんなに時間はかからないと思うけど、さぼらないでやっておいてね」
「はいはい。分かったからさっさと直してこい」
恵麻が去ってしまうと、部屋は俺だけが存在する空間へと戻ってしまう。
1人いないだけ、こうも静かになるとは。
・・・さて、始めるか。
俺は、もう1度シャープペンシルを握った。

それから1時間後。
午前1時を回った頃。
ようやく俺は、勉強を終えることができた。ぐっと背伸びをしていると恵麻が麦茶の入ったコップを俺の前に置いた。
「景君、お疲れ様。はい、どうぞ」
「そんなことまでしてくれなくていいのに。・・・ありがとう」
今まで何度も恵麻の笑顔を見てきているはずなのに、何故か気恥ずかしさを感じて俺は、恵麻からそっぽを向いた。
その様子を見た恵麻はおかしいと思ったようで、俺の視界に入り込んでくる。
「あ・・・」

俺が再び反対側を向くと、恵麻は不満そうな声を上げて再び俺の視界に入り込んでくる。

・・・何がしたいのか本気で分からないんだが。

・・・・・。

・・・何かテレビでも見るか。

俺は、テレビのリモコンを取ると、テレビの前のソファーに座る。
そして、おもむろに電源を入れて、ぽんとリモコンを隣に落とす。
リモコンは、ソファーで小さく跳ねると、そのまま動かなくなった。

「景君・・・。テレビなんて見てないで、寝た方がいいよ～」

そう言って恵麻は、まるで母親のように俺を諭し、何故か俺の頭にポンと手を置いて、頭を撫で始めた。
唐突な行動に俺は驚いたが、悪い気分もしないのでその手を払いのけることなくその身を委ねていた。

だが、そのような雰囲気だったのは一瞬のことだった。

テレビから思いもかけない声が聞こえてきたのだ。

それは、男と女がベッドですること。
荒い息使い、時折聞こえる女の叫び声に類したようなもの。

「・・・」

・・・これって・・・あれなんだよな。状況は見ればよく分かった。
映画では、たまにこういうシーンはある。

だが、タイミングが最悪だった。

今、ここにいるのは俺だけではない。
そのせいで俺は恵麻の様子が気になって仕方がなかった。
恐る恐る横目で様子を窺うと、ちょうど恵麻も同じように俺の様子を窺おうとしていた所だった。

しっかりばっちり視線が合ってしまった。

「・・・・」
「・・・・・」

たぶん、俺の顔は今真っ赤なんだろうと思う。
とりあえず、何か言わないと。そう思うのだが、頭がこんがらがって何も言葉が浮かんでこない。
時折、「あー」とか「うー」と言った擬音しか口からは出てきてはくれない。

すると、俺と同じように顔を真っ赤にしている恵麻がちらちらと視線をこちらに向けたりしなかったりしながら言った。

「け、景君・・・・」
「・・・な、何だ、恵麻？」

「・・・テレビ消さない？」
「・・・」

俺は、恵麻の方を向くことなく黙ってテレビを消した。
そのおかげか、幾分気まずい雰囲気で和らいだように思えた。

「・・・・な、何だか恥ずかしいね」

・・・気のせいだった。

恵麻は先程から、声に内心の動揺がはっきりと表れており、いつもより声が高い。

「・・・そ、そうだな」

ただ、俺の方もろくに喋れておらず、動揺がありありと表れている。

それでも、何とか言葉を絞り出す。

「恵麻」

その名前を呼ぶと、恵麻はぎこちなくこちらに振り向いた。

「・・・何？」

「・・・とりあえず寝ないか？　眠ればこんなこと、すぐに忘れるだろうし」

きっとこれが最善策だ。そう思って言った言葉だった。

「えっ・・・け、け、景君。寝るって、その・・・あの・・・・・」

「え？」

だが、言った状況が悪かったようだ。恵麻が何か盛大に悪い方向に勘違いしている。

「で、でも・・・恥ずかしいし・・・」

今にも消え入りそうな声。

「・・・・でも、私たちもそういう年なんだし・・・。景君がそういうのに興味があるのは分かるし・・・・、私も・・・・」

何かおかしなことを口走っているような気がする。

何故だろうか、その先の言葉は聞いていけないような気がした。

俺は、恵麻の両肩を掴むと、前後に揺さぶった。

「・・・とりあえず深呼吸をして落ち着こうな」

「・・・・景君のバカ」

何だか非常にむくれられてしまった。

・・・どの部分に不満があったのだろうか。

それからすぐに恵麻は家へ帰った。

「・・・聞かなかったことにしてねっ！　絶対に絶対だよ」

帰りがけの恵麻の言葉を思い出し、俺は誰もいない部屋で思わず苦笑いを浮かべていた。

・・・言うわけないのにな。

恵麻が恥ずかしいのと同様に俺も恥ずかしいのだから。

翌日、俺は答案用紙を見て思わず小さくガッツポーズをしてしまった。

・・・ここは、恵麻が教えてくれたところじゃないか？

・・・ここも、前日にやった所だ。

恵麻と勉強したところが、１問を除いてほぼそのまま出ていたのだ。要するに俺が授業を真面目に聞いていないことも同時に判明したのだが、それは今はどうでもいい。

１問だけ分からずに白紙にしたが赤点どころか、今までにないくらいのできになりそうだった。

だが、試験終了日の翌日。俺は担任から呼び出され、衝撃の事実を知った。

「・・・有栖君。あなた、途中から答えがずれていたわよ」

結局、俺は赤点ぎりぎりの４０点に終わったのだった。

第６９話：幽霊騒ぎと肝試し

「ごめんね、忘れ物を取りに行くの付き合わせちゃって」
「別にいいさ。僕も忘れ物があってさ」

１組の男女が校内を歩いていた。

誰もいない廊下は、不気味なほどに静まり返り、彼らの足音が響き渡る。

既に、夜も８時を回り、職員室などを除いては電気は付いていない。

彼らは、職員室によって断りを入れるのが面倒だったので、そのまま彼らの部室へと向かう。
その部室は、部活棟の３階の１番奥にあった。

彼らは、合鍵を持っているので、そのまま３階まで向かって行く。
階段を登り切り、角を曲がろうとしたときだった。角の向こう側から女性の声が聞こえた。

「確かに古来より男女は人目の付かない所で密会するっていうけど、まだ早いと思うわ」
「ち、違いますって。僕たちはそんなんじゃ・・・」
「そ、そうですってば。そ、そりゃ・・・ちょっと怖いかなって少し近くにいるだけで、べ、別にそんなやましいことは」

彼らは、実際付き合っているわけではないのだが、お互いに好意を

抱いていることは本人たち以外周知の事実であった。
ただ、2人は奥手であるがために、なかなか言い出せずにいるのだ。
お互いの顔を見れずにいる2人は分からないが、この暗闇でも分かるほどに動揺し、顔を真っ赤にしていた。
女性は2人を見ながら、自分が若い頃の事を思い出していた。

「若いっていいわね。・・・でも」

しかし、同時にもう元には戻らない自分とこれからがある2人を見比べ、軽い嫉妬心も覚えていた。

「こんなに時間にうろうろするのは感心できないなあ。幽霊が出て、あなたたちを脅かすかもよ？」

それでも、女性の声は相変わらず楽しそうな声のままだった。

しかし、2人の男女は違っていた。
彼らは、誰が自分たちに話しかけてきているのか全く分かっていなかった。
目の前にいる人以外の知らない人が声をかけてくる。
それが、彼らにとっての恐怖となっていた。
ようやく少年が絞り出した声は、いかにも頼りないものだった。

「ゆゆゆゆ、幽霊！？」

彼は、夜の学校には何の感情も持たないが、幽霊の類だけは苦手だ

った。
いつもは隠しているものの、今は隠しきるほどの余裕はなかった。
「うわあああああっ」
「えっ？ちょ・・・・ちょっと待って！」
慌てて、少女も彼の後を追うが、その表情には明らかに軽蔑が混じっていた。
彼女は、守ってほしいという願望が強すぎたのだ。
「あらあら、あの2人はもうダメね」
まるで、他人事のように女性は言う。
もちろん、彼女にとっては他人事である。

・・・・・。

彼らが去って、いつもと変わらぬ静けさが訪れた。
「それにしても、こうやっていれば、いつかは現れると思うんだけど」
女性は先ほどとは打って変わり、深刻そうな顔になる。
月明かりだけが、廊下を照らす。
しかし、女性の憂いを帯びた表情は映ることはなかった。

女性は窓を見た。自分だけが存在しない窓を。

そして、儚げに溜息を吐いて、月を見上げた。

「早く会わないと。・・・・・・手遅れになる前に。だから・・・早く会いに来て」

彼女の願いを、月は果たして聞き届けてくれるのだろうか。

中間試験も終わり、これから梅雨に入ろうという空色のこの日。
珍しいこともあるもので、蓮華先輩が俺を訪ねてきていた。
朝から風紀委員が教室にいるということもあって、教室内の雰囲気もいつもと違って大人しい。

「幽霊騒ぎ？」

「そう。・・・アリスの仕業？」

端的に話す蓮華先輩の表情は硬く、もしイエスなどと言えば、この

場で粛清しそうな勢いだ。

「・・・だから、その呼び方はやめてください。それに、今年のは俺は関係ないです」

俺がそう言ったのには理由がある。

去年、俺や幸樹は夜中の学校に忍び込んで7不思議の1つ、光る校長像を作ったのだ。

だが、それは過去の話。今年のことは全く知らない。

言うことは言ったしもう話は終わりだろう。

そう思っていると、蓮華先輩が珍しく俺のことを名前で呼んだ。

「そう。景、それなら、生徒会主催の肝試しに参加しない？」

「はい？」

話が急に飛んだので俺は思わず上ずった声をあげた。

その声に蓮華先輩は一瞬眉をぴくりと動かしたが、すぐに無表情に戻った。

「最近、幽霊を見たという人が多い。だから、調査の建前としてやることになった」

「・・・発案者は？」

「・・・衣と希望」

その2人だと、単に遊びたいだけなんじゃ・・・。

それに、この幽霊騒動が大きくなったのは、衣先輩たちの新聞部の校内新聞のせいでもあるのだから。

「・・・アリス。言いたいことは分かるが、それ以上は言わなくて

いい」

目一杯、眉間に皺を寄せているあたり、蓮華先輩もあの2人の行動、特に希望先輩には困っているのだろう。

「でも、私も楽しみだ。浩一と組むことができるのだから」

どうやら、表情には出さないものの言葉振りから察するに、蓮華先輩も楽しみにしているようだった。

「ところで、断わることは可能ですか？」

「いや、無理だ。アリスの時間に合わせて遅めに時間は調整しているし、きちんと私が迎えに行く」

・・・いつ、俺のアルバイトの時間を調べたんだか。

「親の許可が下りないと無理です」

「大丈夫だ、既に衣が許可をもらっている。あと、アリスのとこのメイドも来るそうだ」

・・・母さん、許可するなよ。ついでにエリスを寄越すな。面倒が増える。

俺は呆れて言葉も出ない。せめて、俺に何か一言あってもいいと思うんだが・・・。

「・・・アリス。言いたいことはよーく分かる。ただ、あの2人が今日決めたことだ。私にはどうしようもできなかった。許せ」

「・・・・」

こうして、俺は肝試しと称した生徒会の集まりに強制的に参加することになったのだ。

そして、夜を迎えた。
時間は、まだ7時を少し過ぎたばかり。本当であれば、今頃は電車に揺られていることだろう。

「遅いぞ、景」
「僕たちを呼んでおいて、自分だけ逃げるのかと思ったよ」
既に俺と迎えに来てくれた蓮華先輩を除く参加者全員が集まっているようだった。

「・・・バイトがあったんだから仕方ないだろう」
だから俺を呼ばなければいいと言うのに。
到着するや否や文句を言う幸樹と晃。この2人は、参加者を聞いた俺が呼んでおいたのだ。
何せ、グループの決まっていないメンバーは、衣先輩、希望先輩、そして何故かいる四条畷姉妹、そしてエリス。
1人で行くには、かなり気まずいものがあったのだ。

「景様。気分が優れないのでしたらお断りになった方がよろしいですよ」
「・・・いや、この面子で肝試しなんて、この時点で肝試しなんだろうかと勘違いするほどだ」

エリスは、俺の言葉に首を傾げていた。
・・・本当にエリスは唯一の良心だな。
その様子を見ながら、俺は1人思った。
「景様、怖かったら・・・いつでも、こうぎゅっとしてください。私が景様を守って差し上げます」
「誰が抱きついたりするか！　・・・・両腕広げても飛びこまないからな」
・・・どいつもこいつも夜だからって浮かれて。

俺は、呆れて皆から視線を外すと明かりのほとんどない校舎を見る。
普段は、陽が落ちて来ることはなくまた翌日が休日ということもあって人影もない。
昼の喧噪とは違った学校の姿は、人を拒んでいるようにも見えた。
そもそもこの学校、夜に入っていいのかと聞いたところ、衣先輩が許可をもらったそうだ。
そういえば、警備員も衣先輩のとこの人だと聞いたことがあったような・・・。
それに、先輩は学校の理事の孫である。その上、実家が多額の寄付を行っているという。
・・・権力って便利だよな。
「有栖さん・・・、不満そうですわね。権力は使わなければ意味の

ないものですわ。それに、私たちは悪いことをするわけではありません。第一、幽霊なんていませんわ。今しがた学校中の調査を終えましたけど、誰もいないそうですし」

・・・だったら、全く意味がないじゃないか。

「それなら、何故、今更肝試しなんですか？」

幽霊騒ぎの調査ならまだしも、解決済みの事実に何を今更驚けと言うのか。

「何もいないからこそ肝試しなのですわ。第一、安全でない肝試しなどやったら危ないじゃありませんか」

「・・・さいですか」

「さいですわ」

・・・意味分かって・・・・ないよな・・・。

「はあ・・・・」

それ、本当に肝試しなのか？

だが、嬉しそうに言う衣先輩に言い返すこともできず、心の中にそっと言葉を仕舞い込む。

代わりと言ってはおかしいが、俺の視界に入るようにちょろちょろとしながら笑っている希望先輩に文句を言う。

「で、希望先輩。その笑み仕舞ってくれません？」

「はっはーん。さては、景っち。・・・怖いんでしょ、逃げたいんでしょ？」
「もちろん怖いですし逃げたいです。・・・生徒会と謎の事件と聞いて、俺が黙って立ち向かうとでも？」
残念ながら俺は熱血漢ではないので、逃げるのかと言われたくらいでむっとくることはない。
むしろ尻尾を巻いてどこまでも逃げ伸びようとする方だ。
「チキン、弱虫。景っちのバーカ。・・・男の子ならそこで反発しておかないとねー。私的に減点だよー」
「・・・・何点が何点になったんです？」
「８０点が６０点くらい？」
・・・評価高いな。でも、もう少し下げたら関わってこなくなるかもな。
「あー、景っち？　お姉さん、何となく考えていること分かっちゃったよ？　ま、従順じゃない所も気にいっているんだけどねー」
「・・・さいですか」
俺は軽く流すと、その場を離れようとした。
だが、他の人に捕まってしまった。何となく見当はつくが、とりあえず振り向くと、そこにいたのは・・・。
「あ、景先輩。一緒に回ってよ。今なら、私と美玖がセットでつい

てくるよ？　なんてお得なんだろうね」
「は、はい。わ、わたしたちでよければ、どうぞご一緒しましょう」
・・・梓依と美玖だった。
左腕に子犬のようにじゃれつく梓依が多少鬱陶しいのだが、言って聞く奴でもないしそのまま無視を決め込む。
くっつかれたくらいで動揺を見せると、希望先輩あたりに何を言われることか分からないので、腕にくっついているのは重石なんだと自分に言い聞かせる。
「はいはい。分かったから、腕引っ張らないでくれ。・・・でも、衣先輩。これだけの人数、全員回るとでも？」
「いいえ。有栖さん。脅かす役の方もいますから楽しんでください。それに、先程も言いましたが、全く危険はありません」
自信ありげな衣先輩が目の前にいる一方、俺は不安がさらに増したことを実感していた。
・・・十分、危険な人物がいるじゃないか。
「どうかしましたか、有栖さん？」
「何、景っち？」
「どうした、アリス？」
・・・この3人が揃っていること自体が危険なんだよな。
「いいえ、何でもありません」
ここまで来たら何も起きないことを願うしかないか。

はあ・・・。

第６９話：幽霊騒ぎと肝試し（後書き）

本編後の雑談

『鏡に映る霊』

ある暗い部屋の中、１本のロウソクを囲む３人・・・。

景「せっかくだから、七不思議の鏡の話をしようか」
紫「え、聞きたい聞きたい。ボクは怖い話なんて平気だもん」
美玖「・・・・・」

景「・・・２人の期待に沿えるほど怖くはないけどな。数年前、ある科学部員が深夜まで学校に残っていたんだ」
美玖「そ、それで・・・・お化けに食べられちゃうんですね！？」
紫「・・・美玖、お願いだから最後まで話は聞こうよ」

景「面倒だから話は端折るが、鏡の前までそいつはやって来たんだ。そして、ふと視線を感じて鏡を見ると・・・・鏡には・・・・」
美玖「いやーーっ！！　も、もういいです！　いいです！！」

紫「美玖、ほらっ、鏡を見てっ」
美玖「へ？　・・・・。ぎゃあああっ！！？」

景「・・・さすがにやりすぎじゃないか？」
紫「うーん、美玖がこんなに引っ掛かるなんて思わなかったよ」
景「その鏡、心霊写真貼っただけだろう・・・」
紫「そうだよ。・・・で、景先輩。さっきの話のオチは？」

景「そいつ、ナルシストだったんだ。それで、数日ほぼ寝てなかったら顔がひどい有様になっていたんだとさ」
紫「・・・・やっぱり、そういう勘違いなんだ。なんだ、つまらないの。・・・・ねえ、景先輩？　こんな時に聞くのもおかしいかもしれないけど・・・・ボクのことどう・・・」

景「おーい、2人ともこんな暗い部屋で何しているんだ？」
紫「えっ？　あれ？　景先輩、やだな、さっきまでボクたちと一緒だったじゃん」
景「ん？　俺はずっと幸樹たちといたんだが。何だ、寝起きか？髪、ぐしゃぐしゃになっているぞ」
紫「・・・景先輩のバカ」
景「・・・？」

第７０話：携帯メイドの時代は来るのか？

「では、メンバーを決めましょう。この棒を１つ選んでくださいな」

そう言って衣先輩は、俺たちに棒を見せた。

手の中には、色のついた部分がおそらくあるのだろう。

４色それぞれ２つずつあるらしい。

俺たちは、その中から１つ選ぶと引き抜く。

そして、同時に色を確認した。

・・・・・。

・・・・。

「よう、景。・・・・・よろしく」

「何だ、お前と一緒か。さっさと終わりそうでいいな」

俺のペアは幸樹だった。

男同士で残念と思う所もあるが、これもくじ引き。仕方のないことだ。

しかも俺たちは最初のペアということもあり、待つ必要さえない。

正直、かなりついている。

・・・それにしても、随分と皆浮かない顔をしているな。

俺とペアになった幸樹、衣先輩と希望先輩。美玖とエリス。そして、梓依。
梓依とペアの晃を除けば、ほとんどが不満げな表情を浮かべている。
それが、この重苦しい雰囲気を作っているのだろう。

何かそれぞれの希望があったに違いないが、皆叶わなかったのだろう。
俺が分かるのは、幸樹くらいだが。

ただ、ここでぼーっとしていても時間が過ぎていく。
俺は幸樹を促すと、校舎へ向かおうとした

だが、それに待ったをかける人物がいた。

「・・・やはり私は景様について行きます」

・・・エリス？

俺は正直なところ、意外というほど驚きはしなかった。
エリスなら言いかねない、そうどこかで思っていたからだ。
ただ、それを許すと色々と厄介なことになりそうだということも薄

々感じ取ることができた。

「エリス、わがままはよくないな。決まった以上は、仕方のないことだ、諦めて回って来い」

「・・・景様。雑誌では、肝試しは男女のペアであるものと書いてありました」

「ま、それは人それぞれってことだな」

どこの雑誌にそんなことが書いてあったんだか。

エリスもさまざまな知識を身につけようとするのはいいのだが、もう少し疑ってかかるべきだろうと思う。

「でもよ、景。どうせなら女の子と回りたいと思わないか？　女の子なら、『きゃー、こわーい』なんて言って抱きついてくるかもしれないんだぞ」

「・・・お前は、それが目的か。逆だったら格好悪いだろう？　俺は、そうなるだろうからあまり一緒に回りたくはない」

くだらない男のプライドというやつかもしれない。

だが、そんな俺の小さなプライドなど他の奴らには見えもしないようだ。

「景様。私は気にいたしません。むしろ歓迎いたします」

「わ、わたしも・・・その気にしないです。わたしも怖がりですし、お互いに抱きしめあうのも・・・悪くないと思いますよ」

「私も一向に構いませんわよ。」

随分と度量の大きな女性陣だな・・・。

「景、絶対にもう1度くじの引き直しを要求するべきだぞ」

それに比べて幸樹、お前は・・・・。
男としてではなく、人間としての器の小ささを見せつけているな。
大体、そんなにくじのやり直しを求めるなら、衣先輩に直接言えばいいものを。

いや、俺もか・・・。格好悪い所を見せたくないから、女と回らないなんてな。

すると、幸樹の声が衣先輩に直接届いたからだろう。

「確かに私のやり方が間違っていましたわ。皆さんさえよろしければ、もう1度くじを引き直しませんこと？」

皆も同調したこともあって結局、衣先輩は幸樹の意見を聞き入れて、再度くじを引き直すことになった。

再度、くじを引くと俺は赤色ということになった。
今度は、先に男3人が引いて、そこに女が入るという組み合わせ方法に変わった。

「エリスさんも引いてくださいな」
「・・・いえ、私は景様と行きますので結構です」

「・・・いや、エリス、わがままはよくない。きちんとくじを引かないと」

先程から、同じことを数度繰り返している。

事の発端は、エリスがくじを引くことを拒否したことから始まった。

「景様の身を守るように、柚葉様から仰せつかっています。ですので、申し訳ありませんが、それを引くことはできません」

その言葉から始まりエリスは、頑なにくじを引こうとしない。

それから数分。

未だにこうしてエリスはわがままを言っている。

美玖と梓依は、目を丸くして俺を見ているし、希望先輩は喜々として状況を見つめている。

他の人も当惑しているようで、俺がどうするのかを少しばかり期待の眼差しで見つめている。

俺は、恥ずかしさから顔を真っ赤にしていた。

「男の方がそれぞれ1グループに1人はいるように組んであります。女性は、2人または1人各グループに入ります」

「私は人ではないので、数には入りません」

・・・何という屁理屈。

確かに人ではないが、ここで言っている人というのはそういうこと

ではない。
これが男相手ならぶん殴るであろう衣先輩も、エリス相手にはどうもやりにくいらしい。
「では、頭数ということに。3，3，2のグループを組むための頭数にエリスさん、あなたも入っていますわ」
「・・・それでは、頭がなければいいのですね」
エリスの言葉に、説得に当たっていた衣先輩は首を傾げた。
俺も何を言いたいのか分からない。すると、エリスは自分の首を掴み、被り物を脱ぐのと同様と言わんばかりに首を取った。
そして、首を手に持つと、その首がこちらを向いてにこりと笑って言った。
「・・・これで、よろしいですか？」
一瞬、時が止まったかのような感覚に襲われる。
だが、それも束の間の休息に過ぎなかった。
「きゃあああああっ！！」
甲高い声が、校舎内に響き渡った。その声がやたら近くから聞こえ、俺は辺りを見回す。
「・・・おいっ、美玖？　大丈夫か？」
「あ、ああ頭が・・・」
美玖は可哀想なくらいに怯えて俺の背後に隠れてしまっていた。
とりあえず、落ち着くまではこのままいるしかないか。こう何か柔

らかいし、いい匂いがするし・・・。

・・・何、やっているんだ。

美玖の状態にも関わらず不謹慎なことを考えてしまい、少しばかり罪悪感が湧いてきた。

そんな罪悪感から目を背けるように他の人の様子を窺った。最初に校舎側に目を向けると、衣先輩と希望先輩が話をしていた。

「・・・・お、驚きましたわ」

「・・・う、うん。エリスっちって、どうも時折ロボットってこと忘れるくらいに人間だしね・・・。さすがに私もびっくりした」

何事にも動じなさそうな2人が珍しく驚いていることに俺は驚きだった。

・・・。

何となく近くに別の気配を感じてふと正面に視線を戻すと、梓依がそっと近づいて来ていた。

どうやら脅かすつもりだったようで、視線が合うと残念そうな顔をした。

「景先輩っ、よかったら私のとこメイド紹介しようか？　教育にはうるさいからきっとすぐにきちんとしたメイドになると思うんだけど」

「・・・いや、メイドじゃないんだが・・・・一応な」

だが、手厳しい梓依の言葉が返って来る。

「どう見てもメイドじゃん、景先輩。何にせよ、メイドの教育はご主人様の基本だよ？」

「・・・梓依、お前は馬鹿にしに来ただろ」

「もちろん。何を今更」

梓依は、首だけのエリスを見ても何の動揺も示していない。それどころか、何だかやけに嬉しそうだった。姉の美玖とは大違いだ。

「あの・・・」

梓依との会話が一段落した所で、ちょうど機を見計らうかのようにエリスが話しかけてきた。

「・・・・あの・・・景様・・・」

「・・・エリス、その首早く戻してくれ。見ていて・・・あまりいい気分がしないんだ」

そもそもどこを見て話をしていいのか迷う。・・・たぶん、顔を見ておけばいいのだろう。

すると、エリスは申し訳なさそうな調子で言った。

「・・・・その・・・首、元に戻していただけませんか。・・・・1人では戻せないのです」

「・・・もうわがまま言うなよ？」

「・・・はい」

生首と会話をするなんて、もう一生ない経験だろう。

俺は、エリスの首を元の場所にはめ込んだ。あっさりと元に戻ったことに意外性を感じながらもエリスに聞いておくべきことがあった。

「・・・ところで、エリス？」
「はい、何でしょうか？」

「その首が取れる機能はどういう意味があるんだ？」

「いつでもどこでも一緒。携帯メイドということだそうです」

俺は、意味が分からず天を仰ぐ。

・・・携帯メイド？　首を持ち歩くのが携帯？

「・・・かさばって邪魔になるだけじゃないか？」
「そうでしょうか？」

「第一、携帯か、それ？」
「はい。首だけなら持ち運びができて、いつでも一緒にいられるというわけです。体の方が家の仕事はこなしますので、家事は疎かになりません」

エリスの言葉を忠実に想像してみる。

洗濯物を干す首無しメイド。何も言わずに、紙を出して買い物をする首無しメイド。
家に帰ると無言で玄関に現れる首無しメイド。・・・きっと首の方が、「おかえりなさい」と言うのだろう。

・・・なかなかシュールな光景だ。

「エリス。そんな気持ち悪い機能はなくすように言っておいてくれ。いいな、必ずだ」
「はい、分かりました。必ずお伝えします」

・・・あの人たちは、何考えているんだか。

「・・・あと、皆に謝っておかないとな」
「・・・。え、えーと・・・・私のせいで、皆様にご迷惑をおかけしまして申し訳ありません」

だが、皆、エリスを見ると苦笑するばかりだった。

・・・もう肝試し終わりでいいんじゃないか？

たぶん、これ以上の恐怖体験はできないだろうから。俺は、そう思った。

第７１話：有栖　景と夜の学校

「景先輩っ、よろしく」
「あら、有栖さん。私もご一緒しますわ」
「２人ともよろしく」

俺が組むことになったのは、梓依と衣先輩だった。
とりあえず、衣先輩がいれば、何かあっても安心だろう。
たぶん、真っ先に向かっていくだろうし。

「お化けが出て来たら・・・・守ってくれる？」
「守る予定だが、逃げる準備は怠るなよ？　しんがりくらいは務めるから」

「・・・何だか心配ですわ」

衣先輩は、俺と梓依のやり取りを聞いて呆れていた。

・・・俺は、あなたが企画したこの肝試し自体が心配です。

もう、いやっ！　誰かーっ！！

誰かの助けを呼ぶ声がどこからか聞こえる。現在、校舎西館の４階、倉庫前を通り過ぎた所だ。

ルートは予め決まっているので迷うことなく進んできたが、何も起きないのでいまいち退屈だったりする。

「何だか無気味だな・・・。こう死者が俺たちを誘っていると言うのか」

「うーん、そうかもねー・・・」

「そ、そうですわね」

何となく雰囲気を出そうと、先程から俺は梓依と衣先輩にに話しかけていた。

だが、２人とも反応がいまいちだ。

ぎゃああっ！！

さすがは、衣先輩が連れてきただけはあるな。恐怖心を煽ろうと叫び声まで上げるなんて。

だが、所詮は人の声。俺は、自分たちの足音しかしないよりも少しばかり落ち着くことができていた。

「・・・なあ、衣先輩脅かす役がいるって言っていたよな。これも、演出の１つなの、かあっ！？」

後ろを向いて歩いていたのがいけなかったのだろう。

俺は、何かにつまずいてバランスを崩すと無様に廊下に倒れ込んだ。

「きゃああっ！？」

そして、続いて梓依が俺の上に倒れ込んできた。

「っ！？」

ひ、肘が・・・・。

声にならない声をあげ、俺は痛みをこらえる。

「け、景先輩っ！　ごめんなさい・・・」

「・・・・いや、気にしなくていいから」

さっさと退いてくれ。

色々と自分のことや梓依のことが気になるのでそう言いたかったが、隣にある男の濃い顔が気になって仕方なかった。

どうやら、この男のせいで転んだようだ。

・・・さぼって寝ていたのか？　そんなわけないか。じゃあ何しているんだ？

俺の頭の中は堂々巡り後袋小路。結局答えは出てこない。

しかし、考え事に没頭していたせいで一時状況を甘受していたのだが、よくよく考えれば俺と梓依の状態は世間一般としておかしい。

そして、そういうことに厳しい人がすぐそばにいる。

「こほん。有栖さん。梓依さん。いつまで抱き合っているのですか？」

「えへへ、怖くて立てないよー」

何が怖いのかはあえて聞くまい。

俺は衣先輩が怖いので梓依に降りるようにあまり期待せずに促す。

「えー、景先輩はこういうの嫌なの？」
案の定梓依は、まだこうしている気満々のようだった。
・・・俺としては非常に嬉しい。嬉しいのだが・・・。
「いや、ラッキーだとは思う・・・が、世の中それがまかり通るほど甘くはないんだ」
ついで世の中には色々な人がいるからなと、衣先輩のことを思い浮かべて内心で呟く。
「景先輩は、ラッキースケベだね。ああ、それとも・・・・むっちり？」
「それを言うならむっつりだな。無理してボケなくいいんだぞ」
梓依は小柄だから、むっちりなんて言葉とは無縁だろう。
ただ、体勢が体勢だったことが不幸だったのだろう。
衣先輩は、イライラとしたようにこちらに大股で近寄って来た。
そして、衣先輩が黙って梓依の首根っこを掴んで立ちあがらせる。
当の梓依は猫のようにふーっと威嚇していた。
ただそれとは別に、起き上がろうとした俺には別のものも見えていた。
・・・2人ともパンツが見えてるんだが。

だが、不幸なことにそんな冗談を言える状況ではなかった。
怒りの矛先をこちらに向けてほしいなんて思わないからな。

俺は、そっと立ち上がると雰囲気を変えようと話題を逸らしにかかった。

「・・・。この人もそうなのか？」

足下の大男を指差すと、衣先輩はさして驚くこともなく淡々と言う。

「・・・あら？　この方は、私が呼んだ家の者ですわ。どうして、気絶など・・・・」

更に、梓依も話に加わってくる。

「・・・・あのさ、景先輩。言いにくいんだけど、さっきから女の人の叫び声がするでしょ。あれ、うちのメイドなんだよね・・・。でも、私こんなの頼んでないのに」

「へ・・・？」

気づけば、俺の口から間抜けな擬音が漏れていた。

一体、どうなっているんだ？　ただの肝試しじゃないのか？　それともただのサービスなのか？

サービスならとっくに俺たちを脅しているだろうし、この倒れている男はよほど慌てていたのか靴が片一方脱げて転がっている。

何か・・・得体の知れないものが、校舎内に潜んでいるのかもしれない。

ごくりと唾を飲み込むと俺は、梓依に尋ねる。
すると梓依は、やや緊張した面持ちで俺の顔を見た。

「前に学校を案内した時のこと、覚えているか？」
「あ、うん・・・」

「あの時、変な声が聞こえたよ・・・な？」
「・・・あー、あれ。・・・ま、まさか景先輩っ！　本気で言ってるの？」

梓依は、俺がここまで場の雰囲気を読まないとは思わなかったのだろう。
その顔は驚きを隠していない。

「ま、いるなら会ってみたい気もするな。怖いもの見たさって言うのか」
「さっきは、女の子にかっこ悪いとこ見せたくないって言ってたのに！！」

梓依の声が俺たち以外見えない校舎に響き渡る。

だが・・・。

「ほんと、矛盾だらけじゃ。・・・呆れてものも言えぬ」

どこからか梓依に同調する声が聞こえた。

ん？　今、何かいたような・・・・。

衣先輩、梓依、そして・・・・。

・・・・誰だ？

見つめた先の2人の間には誰もいない。2人はううんと首を横に振る。

ふと右肩に違和感を感じ視線を落とすと、青白い手が置いてあった。ゆっくり視線を上げ2人の方を見ると、衣先輩も梓依も口をあんぐりと開けて、立ちすくんでいる。

「・・・あらら、見つかっちゃいました」

背後から聞こえる声は先程と同じだが、口調が全く違う。対する俺たちは、先程から一言も発していない。

「ごめんなさいね。では、ごきげんよう」

幽霊は勝手に話を進めると壁の中へと消えてしまった。

とりあえず、幽霊がいなくなり俺はほっとして2人に声をかけようと振り向いた。

「2人とも・・・・」

そう言いかけて、俺は絶句した。

既に2人の姿は遥か彼方。遠くの方に消えていく足音に俺は、しばし唖然としていた。

「・・・・・」

・・・1人残されると複雑な気分になるんだな。

足下に転がっていた衣先輩の家の人もいつの間にかいなくなっている。

代わりと言ってはおかしいが、俺の目の前には幽霊が回り込んで来ていた。

「随分と薄情な娘に軟弱な男じゃのう」

「・・・俺の信用が足りてないんじゃないのか。ほら、こういう時って素が出るものじゃないか」

「・・・危機的状況だったかのう？　で、お主はどうしてここに残ったのじゃ？」

「・・・・・。・・・逃げるタイミングを失ったからだな」

・・・幽霊と2人きりか。

「あらあら、こちらとしては好都合ね、話があるのは、あなただけだし。それで・・・私のこと、覚えてる？」

いきなり口調が変わる幽霊を俺はじっくりと見てみる。

年齢は、美玖や梓依よりも幼いように見える。服は質素で、きっと生前は貧乏だったのだろうと思われる。

もう少し年を重ねればきっと美人になるだろうと推測される。

「・・・もうお迎えか」
「・・・・ほんとに連れて行こうか？」
俺の言葉を真面目に捉えた悪霊が睨みつけてくるが、見た目の幼さ故か全く恐怖心を感じない。
「性質の悪い悪霊だな。それじゃ遺言残すから少し待ってくれ」
「悪、悪って、私はそんなものじゃないわ。で、誰に何を言い残すの？」
「ん？　とりあえず、学校に悪霊がいるから祓ってくれって。お腹の辺りが真っ黒だからすぐに分かるって言っておく。最後に聞いておきたいんだが、何の霊なんだ？」
・・・最期かもしれないが。
「・・・ようやく会えたのに、それはひどいと思うな。私はね・・・・・何と、あなたのお母さんなのでーす」
「・・・バカは死んでも治らないって本当なんだな」
母さんはまだ死んでないんだが・・・。昔の写真も見たことがあるが、そもそも見た目が全く違う。
「・・・随分、口調が悪くなったのね」
「死人に口無しって言うしな」
ついでに言うならバカにつける薬もない。
「・・・・なーんだ、幽霊って分かってたの」

つまらなさそうに言う悪霊に俺は肩をすくめる。

「そりゃ・・・・床に体半分めり込んでいたら誰だって分かる」

「・・・その割には怖がってないのね。ま、いいけど。じゃ、ちゃっちゃと話始めましょうか」

見たところ、ただの子供なので、正直怖いとかそういった感情は浮かんでこない。

そう思ったが、面倒だったので口にはしなかった。

第７２話：有栖　景の血族事情

皆が俺を置いて逃げ去ってから数分。
誰も戻ってくる気配はない。後から来るはずの他の組も通りかかる様子もない。

俺もどうせなら逃げるべきだったなと思うのだが、どうしても幽霊に聞いておきたいことがあったので、とりあえず空き教室に移動し、椅子に腰掛ける。
幽霊も俺の隣に陣取ると何から話そうかしばし思案しているようだ。

そこで、俺は気になったことを聞いてみることにした。

「１つ聞きたいんだが、何故学校に？」
「もちろん、あなたに会うために決まってるじゃない」

きっぱりと言い切る幽霊に、思わず頭を抱えたくなる衝動を何とか堪える。
俺は、会いたいと思ったことは１度もないのだから。

「はあ・・・。でも、俺には幽霊の知り合いなんていないんだが」
「そりゃ私だって、あなたと直接知り合いじゃないわ、初対面よ。正確に言うと、あなたは私の子孫、要するに私はご先祖様ってこと。敬ってくれていいのよ」

自信たっぷりにそう言う自称ご先祖。
だが、生憎胡散臭いだけだ。

・・・大体、幽霊と言われても信じられないって言うのに。

「家系図なんて見たことないから、先祖なんて祖父くらいまでしか気にしたことないしな」

「家系・・・と言っても有栖って名乗るようになったのはごく最近のことよ。それまでは単なる名前しか持たない農民に過ぎなかった」

「ってことは、あんたも農民だよな」

「まあ、よくご存じで」

「幽霊に、しかも俺より年下に撫でられても嬉しくないんだが・・・・」

ついでに言うなら、さっき自分で言っただろうに・・・。どうやらこの幽霊は大事な頭のネジを何本も失ってしまっているらしい。

「これでも１０００歳は超す幽霊なんだけどなあ・・・」

「幽霊に年齢なんてあるのか？」

・・・どうでもいいことだが。

「・・・現世の私は、１６で結婚して１７で子を産んで。結局、その子産んで顔を見ただけで死んじゃったんだけど・・・。今でもお産は大変なことだけど、当時は今と比べ物にならないくらい命懸けのことだったのよ」

「・・・・何で、男は子供が産めないんだろうな？」

「さあ？　そんなもの生物を作った何かに聞いたらいいんじゃない？」

この幽霊、難しい話は嫌いなんだな。

急に興味を失ったようにトーンが下がる様子を見て、俺はそう思った。
だが、それもまたどうでもいいことだ。

「それで、人としての１７年の人生はどうだったんだ？」
「そうね、私は幸せだったわ。夫は優しい人よ。誰からも好かれてた。子供は女の子でね、それはもう可愛い子。あの子は、１５で嫁入りして３人の子宝に恵まれたわ」

話を聞く限りでは、そもそもこの人がこの世に未練を残すようなことは何もないように思える。

「・・・ところで、何故成仏できないんだ？」

「そうっ！　まさにそれが大事なのよ。ほんと、娘によく似て賢い子ね」
「だから、いちいち俺の頭撫でないでくれ」

何か、こう撫でられる度に寒気がするのだ。きっと気恥ずかしさの裏返しというのだろう。

「まあ、照れちゃって。・・・さて、さっきの話の続きに戻りましょうか。事の発端は、娘の二男なの。ここから系列としては２つに分かれるの。その二男系列があなたたち、有栖家ってこと。ああ、ちなみに有栖って名乗ったのは、明治になってからだけど、そう名乗った人は、酔狂な人だったわとだけ言っておくわ」

「あ、そう。で、その二男がどうしたんだ？」

俺が、面倒になって話の先を促すと、幽霊も少しの間逡巡してから頷いた。

「面倒だから掻い摘んで言うと、二男は当時としては長生きだったの。だけど、彼ね・・・結婚したのが４５の時で相手は１５だったのよ」

先祖からロリコンなのか・・・。

俺は、自身の血を初めて呪いたくなった。

「違うわ。昔は、女性は結婚が早かったのよ。今思えば、人生短いわけだから当たり前と言えば当たり前かもしれないわね。１人でも多くの子供がほしいわけなんだから。ほら、１１人も子供のいる名家の女性貴族がいるでしょ？　名前なんだっけ？」

「いまいち話が見えないんだが・・・。あんた、何をしに来たんだ？」

多少俺は苛立っているのだが、幽霊は全く気にも留めないようだ。生きている時もこんな感じだったのだろうと思う。きっと周りを振り回していたに違いない。

「私には１つだけ心配事があるの。はっきり言うと、有栖家の男の人ってどうも・・・・・幼女趣味なのよ」

「・・・は？」

幽霊に言葉に一瞬時が止まったような感覚を覚えた。

その時、父さんの顔が頭によぎったがそれは仕方ないことだ。

その間にも幽霊は話を気のせいではなければ嬉々として進めていく。

「ちょっと難しいか。今風に言うなれば、ロリコンってこと。でも、昔は若い頃に結婚するのは当たり前だし、偉い人は政略結婚というのもあったから、それほど問題視されなかったけど、今はね・・・・」

「ちょっと待て。つまり、子孫にロリコンだと言いたいがために１０００年以上も彷徨っていることか？」

「それもあるわね。だって、そう言った時の顔ったら・・・ぷっ・・・・。みんな否定するんだもの」

「それが楽しみで成仏しないのか」

俺は、思い出し笑いをする幽霊を見て、呆れ返っていた。

理由のほぼ全てがそこにある。それはきっと否定しようのない事実なのだと。

すると、さすがに幽霊も俺の視線に気づいたのか笑うのをやめて少しだけ真面目に話をし始めた。

「そうね。６０過ぎて側室と子供を作る人だっているわけだし・・・。ただ、有栖家の場合、結婚はそれなりに若い時にするから、結果としてロリコンになるのよ。ロリコンは歴史なのよ」

さっきからロリコン、ロリコンって、この悪霊、悪意に充ち溢れすぎているな。

誰かいっそ早いところ成仏させてくれないだろうか。

「そんな歴史消えてしまえ。ところで、あんたのロリコンの定義はいくつまでなんだ？」

「私からすれば、１５以下は完全にアウトね」
「・・・自分が判断基準なのか。ま、残念なことに俺は年下には興味ないけどな」

「・・・そう」

幽霊はつまらなさそうにそう言うと、しばらく黙りこんで俺をじっと見ていた。

「な、何だ？」

「・・・くすくす、あなたも幼女趣味。しかも、５歳くらいなの、可愛らしい」
「人の心も読めるのか」

「ええ。普段から結構使っているわ。ただ、母と違って人と会話する時にはできる限り使わないようにしているけどね」

俺の思い違いでなければ思いっきり今使っていたよな？

「・・・あなたの思い違いね」
「思ったとおりじゃないか」

俺がそう言うと、幽霊は降参と言わんばかりにペロッと舌を出して、ごめんごめんと笑いながら頭を下げて謝った。
ただ、それはどう見ても反省する気のない者の姿だった。

それを証明するかのように顔を上げた幽霊は当然のように顔に悪意をたたえて笑っていた。

だが、その笑い顔もすぐに消えて真面目な口ぶりで新しい話を始めた。

「でも・・・・いない子にいつまでも執心していると今を取り逃がすことになるわよ？　・・・本当は、あなた気づいているんでしょ？　もう彼女には会えないってことに。今も女の子にあの時の優しさを求めているんじゃないの？」

「・・・かもな。俺にもよく分からないからどうにでも言えばいい」

俺が、ぶっきら棒に話を流すとしばらくその場に沈黙が流れた。

図星だったこそむっとするのだろうな。

その沈黙を破ったのはやはり幽霊だった。彼女はとっておきと言わんばかりに勿体ぶったような笑みを浮かべ、俺ににじり寄ってきた。近づいてきた分だけ、俺が後ろに下がると幽霊は残念そうにその場に留まった。

「・・・湿っぽい話はここまで。じゃあ、後は甘い甘い砂糖のような恋の話をしましょうか」

「砂糖なんて昔にないと思うが・・・。あっても高級品だろうし、貧乏な農民が食えるものじゃないはずだろう」

「いいじゃない、例えよ例え。ま、私は1度だけ蜂蜜を舐めたことがあるくらいね。あれは甘い・・・・じゃなくて・・・・で、誰狙ってるの？」

「ロリコンの流れからどうしたらそういう話になるんだ・・・・」

会話に流れというものが感じられない。

きっとこの幽霊は計画性というものが全くないのだろうな。

「はいはい。細かいことはいいから。幸い、ここには私とあなたの2人きり。私、口は堅いから安心して」

「あんたが幽霊ってこと以上に信用できない言葉だな」

そもそも心が読めるなら好きな人くらい分かるはずだよな？

「もうっ、そういうのは言わせるから楽しいんじゃないの。心を読んだって面白くも何ともないんだから」

「・・・なあ、聞いてもいいか？」

たぶん、と言うよりもほぼ確実に分かることなのだが、聞いておくべきだろうと俺は思った。

「何？」

「・・・たまに人格変わってないか？」

言ってから幽霊を様子を窺うと、特に幽霊は何とも思っていないようだった。

ただ、意外というわざとらしい顔をして俺に言った。

「あら、分かる？」

「そりゃ話し方が違うしな。3人くらいか？　エセ貴族とあんた自身と後は・・・」

すると俺の言葉を遮って幽霊が先に言葉を発した。

「可愛い娘の私ね。はじめまして、有栖　景君。そうね、こうなった理由くらい教えてあげるわ。主人格である母は死んだあとも霊と

してこの世を彷徨っていた。そして、力尽きて消えそうになった時にある霊を取り込んだの。それが、あなたの言うエセ貴族」

これが自慢の娘なんだな。見た目は変わらないし、中身もそこまで違いがないように思える。

だが、エセ貴族。あれは、口調からして違うから分かりやすいな。

「そして、私も死んだ時に取り込まれたんだけど、何故かこうしてエセ貴族と同じく意識が残っているってわけ。母が言うには、まだ力の弱い時だったからしいけど・・・。それから多数の霊を取り込んだから霊としては強くなってしまって、今でもこうして彷徨う羽目になったの」

「自業自得って言わないか、それ」

俺がそう言うと、幽霊は嫌そうな顔をして視線を俺から外した。

「あー、それはお母さんに言ってくれる？　私は節操無く喰らったりはしないから。私は精力をすこーし分けてもらっているだけよ。でも、精力も霊もそうだけど、やっぱり人間が一番ね。元々人間の霊だから最も親和性が高いのは同じ者同士。動物のはおいしくないし、それにほらっ、見て？」

「・・・猫耳？」

俺は、急に頭から生えてきたその耳をまじまじと見つめていた。

人間の耳があるのに、獣の耳も生えている。何に使うというのか・・・？

俺が首を傾げていると、幽霊は黒板に下手糞な絵を描き始めた。

そして、黒板の絵を指し示しながら言った。

「そうそう。動物の霊を取り込み過ぎると変な副作用が憑くのよ。母の雑食には困ったものね」
「・・・悪い。何書いてあるのか全く分からない」
すると、幽霊はあからさまにむっとして俺の方にふわふわと飛んでくると、落胆した表情を見せつけながら言う。
「子孫なんだからそれくらい以心伝心で分かってくれないと・・・」
俺にそんなことが分かると思っているのだろうか？　非常に大きな疑問だ。
「無茶言うな。・・・それで、結局この世に未練があるからこうして幽霊になっているわけなんだよな」
「そうね。でも、私は子供たちをずっと心配してこの世を彷徨っているんだから。・・・・あー、その目は一体何様？　まったく先祖の霊を敬うこともしない、これだから最近のゆとりは・・・・」
「はいはい」
あまりに煩く喋るので俺はよかったねと流す。
うまい具合にちょうど話も切れて、ふと考えると結構時間が経ったのではないかと感じ始めてきた。
そろそろ帰らないと心配されそうだよな。
・・・・それにしても、誰も探しに来ないなんて、俺ってひょっとして嫌われているんだろうか？
「他に聞きたいことは？　何なら昔の話でも・・・・」

「長くなりそうだからいい。あんた、母親より話したがりなんだな」
「それはそうよ。だって、母が大抵表にいるから外に出たら喋り倒さないと」
最後に1つ確認しておいた方がいいことがあることを俺はすっかり忘れていた。
そういえば、肝試しの目的は最近の幽霊騒動だったな。
「・・・もしかして、最近学校に出て来る幽霊って」
「あ、それ、私、私。母は人を脅かすのにあまり興味ないみたいだからたまにしか参加しないけど、てーちゃん・・・あ、エセ貴族のあだ名ね、も好きみたいだから参加してくれるよ。この前もカップル脅かして面白かった」
・・・とりあえず、原因は分かって・・・・よかったのか？
「幽霊にまでなって人を脅かすなんて、はた迷惑な死者だな」
「ええ、そうよ。だから、何？」
この幽霊、開き直りやがった。
「あ、そうだ。先の続きを聞きましょうか。さ、遠慮なく恋の話を聞かせてくれる？　ここ最近、真面目に恋の話を語らう相手がいなくて困っていたのよ」
「・・・・・最近って何年なんだ」
だが、幽霊は人差し指を唇に当てて、さあと首を傾げた。

その態度からして、答える気はさらさらないのだろうな。初対面にも関わらず、俺はそう直感した。

73話：有栖　景の恋愛事情1

忘れてくれればよかったのにな。
俺は、そう思うがそれももう過ぎた話だ。
幽霊が苦しみ始めて、3つの人格の誰が俺の話を聞くかでまずもめて、俺に決めろという所で俺と3人が少しもめ、もう1度話し合いをする中でもめ。
結局、5，6分は無駄にしたのかもしれない。
「じゃ、ささっと話を始めましょうか。どうせ、お母さんもてーちゃんじゃ、あなたの心を読んでしまって面白くないでしょうからね」
「恋愛の話なんてそもそも面白くないと思うぞ」
幽霊に自分の恋愛の話をするなんて思いもしなかったが・・・・。
「それで、何から話そうか？」
「そうねえ・・・・。まずは好きな人はいる？」
「さっきも見たから分かると思うが、昔はいた。今はいないな。恋愛が関係ないなら好きと思う人は結構いるが」
その質問に俺は、嘘偽りのない気持ちを幽霊を真っ直ぐ見据えて答えた。
先程、心を読んでいたので完全に信用することは難しいが、この娘の方は、もう面白半分に心を読むようなことはしないだろうと思う。

「でしょうね」
「笑いながら言われると傷つくんだがな」
やっぱり真剣味が感じられないんだよな。親もその子も。
「ごめんごめん。それじゃ、次の質問ね。あなたは恋愛に興味はある？」
「興味は当然ある。ただ、相手がいないからな、仕方がない」
そして俺は、胸の中のつっかえた物を吐き出すようにはあと大きく息を吐いた。
「今日は月が奇麗に見えるんだろうな。夜空を見上げながら普通の女の子と他愛のない話をしてみたいものだな」
「だったらそうすればいいじゃない。あなたって恋愛に消極的なのね」
はっきりと図星を突かれた俺は苦笑を幽霊に向けるしかなかった。幽霊もまた同じように困ったような笑みを浮かべる。
自らが起こした沈黙に耐えかねた俺は椅子から立ち上がり、教室の窓を開けて空を見上げる。
ひんやりとした風が教室内に吹き、カーテンが大きく揺れる。幽霊には当然当たるわけもなくカーテンはただ風になびいていた。
俺は、その様子を見ながらふと思う。
もしかすると、もう話が尽きてしまったのだろうか。
それならそれでありがたい・・・・。

「今日は新月よ？　月なんて見えないじゃない」
「ロマンがないな。ま、期待はしてなかったからいいけど」
相手を間違えたのか、それとも俺が間違っていたのか。
こんなことを他人に言ったことないから分からないが、たぶん言わない方がいいのだろう。
「でも、夜ってこんなに明るいんだよね。もうずっと昼みたい」
その幽霊の言葉は、感心したような残念そうなものだった。
「昼は昼。夜は夜。今も昔も変わらないと思うが」
「昔は月明かりがない時なんて真っ暗だったもの。でもこう明るいと火をおこして、それを囲んで家族で話をするというのもまた悪くはないと思うわね。明るすぎて、自分の影を見失いそう。・・・って、そんなことはどうでもいいわ！」
感傷に浸っていたと思えば、急にはっとして大声を出したり、随分と忙しいな。
俺はいうとやはり苦笑を浮かべるしかなかった。いや、愛想笑いに近いかもしれない。
「あなたの消極的な理由、聞かせてもらってもいいかしら？」
「ま、幽霊なら構わないか。元よりあり得ない存在なわけだし。これから話すことは俺の独り言だ」
そう言うと、幽霊はええと一言だけ言い、頷いた。

俺はそれを肯定と捉え、つまらない過去の話を始めた。
「心を読んだなら分かると思うが、あの女の子が俺の初恋の相手だ」
「へえ、幼稚園で初恋、ませてるのね」
ませていると言うのか、当時はそれが恋とは思っていなかっただけだ。
今でもこの認識が正しいかどうか不明瞭だが、初めてずっと一緒にいたいと思った女の子なのだからきっとそうだろう。
「今思えば俺は早熟だったんだろうな。今じゃ、すっかり落ち着いてしまった」
「爺くさいわね」
あんたの方が、そう言いかけた言葉を俺は喉元でどうにか飲み込んだ。
幽霊とはいえ、相手は一応女。年齢のことを言えば、確実に反論が飛んでくるだろうから。
幸いなことに幽霊は俺が言いかけたことを気に留めていないようで、本を読んでほしい子供がするのと同じように俺の服を引っ張り話の続きを要求する。
俺は、その子供っぽい行動に苦笑しつつ話を続ける。
「あの子は、恵麻から俺を守ってくれる子だった。それだけじゃなくて、恵麻に対して暴力はやめて言ってくれたんだ。そういや、それ以来、恵麻は大人しくなったな」
「ふーん・・・つまり、あなたは守られたいと思う方ってことでいいの？」

「いや、別に守られるだけっていうのもな。互いに守り守られるのがあるべき姿なんだと思う。何も肉体的に守られなくても精神的に守ってほしい時はあると思うんだ」

・・・・理想論に過ぎないけどな。

口に出してからそう思ってももう遅い。
まさか俺からこんな絵空事のような言葉が出るとは思っていなかったのか、幽霊は顔をそむけてぷっと吹き出して笑っていた。

綺麗事しか言わない人間。そして言葉だけで終わる、それが俺という人間の本質なのだろう。
幽霊と話をして改めて自分を見つめなおすとそう思える。

だからこそ、俺は幽霊が笑っても怒ることもなければ、落ち込むこともない。
だが、こちらの内心を知る由もない幽霊は俺と視線が合うとバツが悪そうに頭をかいた。

「何て言うのか・・・・夢見がちね。ま、それは1つのあるべき姿だとは私も思うけどね」

「この年で夢がないよりましだろう。・・話がずれたが、消極的な理由というのは、その子が突然いなくなったから・・・・かな？」

あの日を思い出しながら俺は視線をずっと遠くの空にやった。
すると幽霊は、ぽつりと一言漏らした。

「亡くなった・・・わけないわね」

どうにかぼかしたものの明らかに幽霊の表情はしまったといったそれだった。
その言葉を言ったきり黙り込んでしまい、今までと打って変わり沈痛な面持ちで俺の様子を窺う。
言い方が少し悪かったか？
・・・相手が悪いのか。一応、死んだ人だし、そう考えたくもなるよな。
半分呆れ、半分同情しつつ俺は幽霊に言う。
「いや、死んではないと思う・・・・が、音信不通って所だな。また明日って言葉を聞いた翌日に家族揃っていなくなった」
そういえば、あの日は1日泣いたっけな。気がついたら朝になっていたっけ。
「好きになった人がまたいなくなったら嫌だ、そう思ったわけだ。悪いな、期待したほどの理由じゃなくて」
「ううん、そんなことないわ。・・・・そんなことないけど、あなた、少し臆病すぎるわ。たった1度の事じゃない」
幽霊の言葉はあまりに正論だった。
ただ、今の俺が完全に受け入れることのできるものでもなかった。
「確かにあんたの言うとおりだ。・・・・ま、2度とこの話は誰にもするつもりないけどな」

「どうして？」

「普通の人間に話したら、たぶん引かれる」

「それもそうね。ポエマーはごく一部の琴線にしか触れないものね」

昔は、詩を女性に送っていたというのだから、現代においても風流として認めてもらえるのではないだろうか？

だが、俺の場合は、単なる愚痴であって風流には程遠い。

その差は、とてつもなく大きく深いものだ。

「ということで、俺は恋愛を諦める。そうすれば楽だからな」

「何が・・・ということ、よ！　子孫を残さないでどうするの・・・・・・あっ」

幽霊は焦ったのだろう。

つい、本音が出てしまった言わんばかりに口を押さえるが、聞こえてしまった以上聞かないふりはできない。

「それが本音か」

「そ、そうよ、本音よ。何か悪い？」

俺に図星をつかれたことが相当悔しいのか幽霊が完全に逆ギレしている。

１０００年生きて、これではもう進歩のしようもない。いや、幽霊が進歩するのかすら怪しい。

断固言い争うのも面白いが、ここは俺が一歩下がるべきなのだろう。

「いや、別に。大体、冗談に決まってる。時期が来れば、そういう

想いを抱くこともあるだろうな」
「そうかしら？」
そこは否定しないでもらいたかったんだが・・・。
「ま、安心して見ていてくれ」
早く成仏してくれ。
「そう。それならいいんだけど」
何か含みを残す言い方に俺は、どうにも気にかかった。
だが、幽霊は俺のささいな疑問など気づく様子も全くない。
「それで、これからはどうなの？　女の子が何人かいるじゃない。どうせ友達なんでしょうけど、印象くらい聞かせてくれる？」
「印象・・・か。無難な所で答えるけど構わないな？」
その問いに幽霊は、黙って首肯する。そこまで追求する気はないのだろう。
「誰にも恋愛感情なんてないことくらい分かるわ。ただ、私の趣味で聞いておきたいだけよ」
そういえば、以前同じような人がいたことを俺は思い出していた。
きっと似たような展開になるのだろうな。
俺は、そう覚悟した。

７４話：有栖　景の恋愛事情２

幽霊に何故か、知り合いの話をすることになった。
いちいち容姿の説明をするのも面倒だったので、幽霊に心を読んでもらい、それは省略する。

全部で６人分話を聞きたいと言われたが・・・・。

「さて、まずは誰の印象から話せばいい？　俺は積極的に話をしたいわけじゃないから聞かれたことだけ答える」

俺としては誰からでも構わないし、聞きたいという相手が分からない。
尋ねると、幽霊は思案することなくあっさりと返事を寄越した。

「じゃあ、まずはさっきの話に出てきた恵麻って女の子から」

幽霊が初めに指定したのは、恵麻だった。
先程の話で少しばかり名前が挙がっていたので気になったのかもしれない。

「恵麻か。そうだな・・・恵麻は向かいに住む幼馴染で、同級生だ」
「え？　そ、それだけ？」

簡潔かつ分かりやすい説明だと思うんだがな・・・。

容姿は分かっているのだから、これくらいでいいと思うが、まだ足りないらしい。

「ん？　まだ加えた方がいいのか？　・・・・うーん、そうだな、恵麻とは学校の行きだけは一緒に通っているな。幼稚園の頃からずっとだから、習慣みたいなものだな。あ、そうだ。さっきも言ったが、恵麻は昔は性格も今に比べて横暴できつかったんだ。あの頃の関係を一言で言うなら女王様と奴隷みたいなものだ」

もう戻りたくはないが、少しだけ懐かしい思い出。

だが、昔の恵麻も悪くなかったような・・・、それにあの頃の俺は、何だかんだで恵麻といつも一緒だったよな。

一時期、その中に絵梨ちゃんがいたんだっけ。

昔のことを思い出し、ふと感傷に浸っていると幽霊が呆れたと言わんばかりに肩を竦めた。

「・・・あのね。私が聞きたいのは、あなたがどう思っているかなんだけど？」

「はあ・・・？　どう思っているか？　昔の印象とはだいぶ変わったな。昔は、俺が守ってくれと言いたくなるくらい勇ましかったが、今は守ってあげたいという感じだな。ま、幼馴染で最初の友人だから、ずっと仲良くいられたらと思う」

ほぼ無理だろうということくらいは分かっている。

それでも・・・・と、どこかで期待している俺がいることもまた事実だった。

「でも、さっきの話で思ったんだけど、恵麻って子。あなたのこと好きなんじゃないの？」

「それはないな。これでも、恵麻とは付き合い長いが、そんな素振

り見せたことないからな」
告白されたわけでもなく、態度が変わったわけでもない。
年相応の変化はあっても根本はあの当時と今の恵麻は大して変わっているわけではない。
向かいに住んでいて、恵麻の両親は共働きだったため、よくうちに遊びに来ていたし、飯も一緒に食べていた。
きっと今のエリスに抱く感情に似たものを俺は恵麻に対し持っているのだろうな。
「ほら、幼い頃って好きな子にどう接していいか分からなくていじめっちゃたりすることってあるでしょ。1種の愛情表現だったと私は思うわ」
「それだと、今は全く相手にされていないことになるな」
当時の俺としては、あの恵麻の横暴っぷりは愛情ではなく、恐怖の対象でしかなかった。
今の恵麻のことは嫌いではないし、むしろ好きだと思う。
ただ、それが恋愛に結びつくかどうかはまた別問題なのだろう。
「それじゃ、次は由真って子にしようかな」
俺が、そうこう考えているうちに幽霊はのほほんとした顔で次の人へと話題を変えていく。
「んー、由真か。由真は恵麻の友人だ。俺は高校に入ってから知り合いになったから、付き合いは短いな。女の友人と言うなら2番目に付き合いは長いし、顔を合わせることも多いな」

「ふーん。もしかして、そこから恋が始まったりして」
ぼそっとそう言った幽霊はふふんと楽しそうに鼻を鳴らした。
だが、俺は冷めた目でその様子を見ていた。
「それはない。何せ、由真は体つきが逞しい男が好きなんだ。例えば、幸樹、とかな。ま、それだけってことはないだろうが、時折幸樹に視線が向かっている所は見かけるな。もしかして・・・・」
「・・・あなたが言うの、それ」
幽霊は、呆れきったのかもう肩を竦めることも溜息を吐くこともしなかった。
俺は、単に気づいたことを言っただけなのだが、きっと幽霊は俺も人の気持ちに気付くべきと言いたいのだろう。
しかし残念なことに好意を寄せてくれているのはせいぜい家族くらいしか思い浮かばない。
「ま、いいか。次は、そうだな。さっきまでいた衣先輩にするか」
「あー、さっきいた背の高い方の子ね。あの子の驚いた顔は面白かったわ。ああいう、普段強気な子がああいう一面を見せるっていうのはいいものだと思わない？」
いきなり何を言い出すのか思ったら・・・。
もう呆れて真面目に返事をするのも面倒になる。
「いや、別に」
「はあ・・・、普段強気な女の子がふっとした瞬間に見せる弱い部

分。どうして、そこにぐっと来ないの？」

「・・・その弱いな部分で、今の俺の状況があるわけなんだが」

別にギャップはいいんだが、そのせいで危険に晒されたらたまらないよな。

俺には、自ら死地へ赴く趣味は毛頭持ち合わせていないのだから。

・・・・・。

だが、こうして幽霊と会話をしているとふと思うのだ。

「なあ、俺って・・・」

「ねえ、ところで彼女はどういう人なの？」

「・・・・」

言葉を遮られ、俺は多少憮然としつつ幽霊の質問に答えた。

「生徒会長兼剣道部副主将兼普通の女子高校生だ」

「簡潔な答えありがとう。それじゃあ、次は双子の子たちにしようかしら」

つまり、美玖と梓依ということか。

「あの2人は、今年知り合ったばかりだな。どう思うか？　そうだな、知り合って2か月くらいだが、それなりに仲は良くなったと思

う。そういや、やたらと大きな屋敷に住んでいるな」
「そうじゃなくて・・・・どう思っているかを話してくれないと意味がないわ。さっきの衣って子の印象も聞いてないわ」
幽霊のやれやれと言わんばかりの態度に俺は少々頭に来ていた。
そういうことを言われると、これから話そうとしていたのに話す気が無くなるんだけどな、と言い訳がましい事を思いつつ。
言った所で、はいはいと聞き流されるのは目に見えているので言わない。
内心は溜息、外面は溜息を吐きつつ話を続けることにした。
「衣先輩か。初めて出会ったときは、危ないと噂の生徒会の会長だったからな、怖いっていう印象だったな。今は、そうだな・・・見た目ほどきつくはないが、美人だと思って近づいたら周りにハニートラップがあって、それに引っ掛かったっていう感じだろうか。先輩自体は頼りがいになるんだけど、時折目が部活中の時の目になるのが怖いな」
「つまり、本人も生徒会の人も結局怖いってことね」
「まあ、そういうことだ」
・・・これ本人たちに言ったら、どうなるんだろう。
あまり想像はしたくないが、とりあえず本人たちがいなくてよかったと心底思える。
「あとは、美玖と梓依だな。2人の印象か。美玖は割と大人しくて、梓依は割と活発だな。双子の割には少し雰囲気が違うのは、二卵生だからしいが他にあると俺は思う。それで・・・」

「その違いっていうのはどこかしら？」

そこに食いつくのか・・・・。

俺としてはあまり食いついてほしくない部分なのだが。

・・・・・。

何と答えるべきなのだろうか。そう考えていると、何を邪推したのか幽霊はこれ以上ないくらい清々しい笑みを浮かべて言った。

「えー、何々？　もしかして言えないことなの？　・・・もしかして、体の相性とか？」

「・・・あんたはもう1度死んで出直して来た方がいいな」

「わっ、顔真っ赤ね。はいはい、私が違うってことはよーく分かりました」

俺の苦し紛れの言葉もあっさりと無視され、その上色々と想像したせいで顔が真っ赤になったことを指摘され、さらに同情までされて・・・。

胸だと大人しく言っておくべきだったな。

どうでもいいことだが、大きい方が美玖、小さい方が梓依だ。

「・・・・・。そうだな、2人は色々と問題を抱えていたみたいだが、頑張っているし俺が応援できるならできる限り力を貸してあげ

たい。そう思うかな」

「ふーん、普通ね」

いや、普通って、あんた。

ただもう突っ込むだけで疲れが溜まりそうなのでやめておく。

その代わりに、話を早く終わらせようと次を促した。

幽霊は、何か期待するような眼差しを送っていたが、すぐに諦めたように1度視線を外してから話の続きを言った。

「じゃあ、最後は最近仲良くなった子ね」

「明月院さんのことか？　そうだな、明月院さんは、有斗先輩の紹介で仲良くなったんだ。趣味が同じってこともあって気は合うと思う。まあ、三大歌姫なんて言われるくらいだし、肌とか髪の毛とかを保つための色々な手入れとか大変なんだろうな」

そう俺が他人事のように言うと、幽霊は気になるところがあったようだ。

そして、何故か怪訝な顔をして尋ねてきた。

「歌姫っていう、その微妙に呼ばれたくない呼称って何？」

「・・・さあ？　その昔、新聞部がそう書いてから広まったらしい。何代も前から歌姫はいるらしいから」

やっぱり歌姫って呼称は傍から見ると、馬鹿みたいなんだろうな。

珍しく幽霊の言葉に同調できる。

「まあ、趣味仲間としてまたどこか催事があれば行きたいと思うの

が、今の正直な気持ちだな」

これで、全員言い終わったな。

だが、俺が素直に言ったのにも関わらず、幽霊は表情は硬かった。

「・・・あなた、全然ダメね。聞いていて思ったけど、恋愛する気あるの？」

「それは、もちろんある。でも、自分だけがあっても意味がないだろう」

自分でも女々しいというか、積極的でないことは分かっているつもりだ。

ついそんな言葉が出てきてしまう俺自身が情けなかった。

幽霊も呆れ過ぎて疲れてしまったようだった。

「1度叩いた方がいいのかしら？　壊れたものは叩けば直ると言うわ、人も同じよね」

「それは暴力って言うんだが・・・」

大体、どの時代の人だって叩いて直れば苦労はない。

テレビだって叩いて直るわけではないというのに。

「・・・可愛くて可愛くて可愛さが余るわ」

「それは、憎いっていう感情だ。よかったな、新たな感情が芽生えて」

何だか幽霊も本性を現しつつあるようだ。

そりゃ、俺の脈絡もなく聞いたことすら返してこない話を聞いていれば疲れもするだろう。

もう聞きたいことも少ないのだろう。

口早に幽霊は最後にもう1つ質問を投げかける。

「それじゃあ、最後に尋ねるけど今1番気になる子って誰？」

「特にいないな」

その俺の答えは予め考えにあったようで、幽霊は特に表情を変えることはなかった。

「・・・。そうやってはぐらかすの・・・。ま、私は言いたいことは2つ。1つはロリコンは絶対にダメってこと。有栖家の男は、そうやって失敗を重ねてきたのだから。もう1つは、・・・・景、あなたが幸せだと思う生き方をしなさい」

「今更そう言っても説得力無いんだが・・・・。あんた、今までも同じ失敗を繰り返してきただろう」

幽霊は俺の言葉に否定も肯定もせず、ただ黙ってにこやかに温和な笑みを浮かべ笑っていた。

それはきっと無言の肯定なのだろう。

その後、しばらく幽霊は俯いて黙っていたが、突然顔をばっと上げて噛みつかんと言わんばかりの勢いで迫ってきた。

「ところで、また聞いてもいい？　今は母の方ね」

「今度は・・・・何なんだ？」

俺は、目を輝かせている幽霊を見て、思わず一歩後ずさりをしてしまっていた。
何となく雰囲気で分かってはいたが、また出てきたということは、そういうことなのだろう。

・・・まだ聞きたいことがあるのか。何故、お人好しのように付き合っているんだか。

やはり俺に人を見る目はないようだ。尤も、相手は幽霊だが。

75話：有栖　景の事情

幽霊が再び入れ替わり、俺とは打って変わって生き生きとし始めたように見える。

死んでいるから生き生きという表現が当てはまるのかという疑問が湧いてくるが、俺の疑問はすぐに霧散してしまった。

そして、幽霊は遠慮する仕草さえ見せずに俺に尋ねた。

「ねえ。1つ聞いてもいい？　あの機械人形の名前って何？」

「エリスだ」

「エリスって言うの。・・・・そう」

幽霊は名前を噛み締めるように呟いた。

それは、俺に対して聞いてほしいというサインなのだろう。

だからこそ、聞いてあげるべきなのだと思った。

何となく雰囲気を読んで少しだけ間をおいて尋ねてみる。

「・・・どうかしたのか？」と。

「ほんとにあの時の絵にそっくり！　ほら、あなたが幼稚園の頃に書いていたの、覚えてない？」

だが、幽霊は、そんな俺のささやかな心遣いなど微塵も届いていないようだった。

「・・・」

「銀髪蒼眼の少女。あの当時のままのデザインなのね。尤も、あの頃の彼女は普通の女の子だったけど」

「・・・随分と昔から見ているんだな」

何だか加速したロケットのような勢いの幽霊に対し、俺は1歩どころか13歩ほど距離をおいて話を聞いていた。

そもそも誰の話かさえ分からないのだから。

「幼稚園の頃は、男の子なのに女の子の絵ばかり描いていて周りの子から馬鹿にされていたわよね」

・・・・・。

「小学校に入ってから、同じ夢を持つお友達ができてたくさん語っていたわ」

・・・・。

「いつかロボット作るんだって言ってたし、私もずっと気にしていたから。その夢がもう叶うなんて。でも、最近の機械人形はすごいわね。まるで心を持っているみたいに動くんだもの。」

・・・いつまで話をする気だ？　それ以前に誰の話をしているのだろうか。

そう思ったが、１つ話の中に興味を引く部分があった。
それは、心という部分だ。

「見えない？」

そう俺が問うと幽霊はふざけた様子もなく答える。

「ええ、私にはあの子の心だけは見えなかった。・・・ちょっと違うかもしれない。あの子には、心がないと言うべきかしら」

その答えを聞いた俺は、さすがに幽霊には現代文明は難しいのだろうと感じていた。
顎に手をやり考え込む幽霊の姿は、少しばかり滑稽にも映る。

「・・・エリスは自分で考えて行動するのだから、心がないって言うのは納得いかないな。確かにプログラムで動いているんだろうけど」

難しく考える必要なんてないと俺は思う。
単に人の心はないが、ロボットにはロボットの心がある。それが例え作りものであったとしてもだ。

「うーん・・・・うまく伝わるか分からないけど、今いるエリスって子と前に学校に来たエリスって子が違う子に見えるのよ」
「エリスは学習するからな。そりゃ、２か月もすれば変わりもするだろう。科学の結晶みたいなＡＩを積んでいるらしいし」

幽霊の疑問点が俺にはいまいち分からない。
それを見透かしたように幽霊はすっかり呆れているようだ。
「やっぱり分かってない・・・。私が言いたいのは心の話。前は、少し見えたような気がしたんだけど、今はほんとに全く何も見えないの」

ふざけているわけではないのだろう。
その目は真剣そのもので、本当に悩んでいるように見えた。
だからこそ、

「・・・目が曇ったんじゃないのか？」

などとは言わず、俺は黙って話を聞いていた。
ただ、それは明確な答えが見つからなかっただけとも言う。
それを幽霊は聞いていないと感じたのか、少しだけ残念そうに薄く笑うと強引に話を転換し始めた。

「それはいいとして、あなた、ほんとにいいの？」
「いいのって、何が？」

俺はその質問の意図が分からず、オウム返しに質問を返す。
すると、幽霊はただ淡々とした様子で、

「ロボットのこと。はっきり言ってあのロボットが側にいる限り、恋愛はおろか結婚なんて夢のまた夢よ？　あ、冗談でも『俺はエリスと結婚する』なんて悲しいことは言わないでね」

などと恐ろしい世迷言を吐いた。言った本人はけらけら呑気に笑っている。

思わず噴き出してしまったが、すぐに咳払いを1つして落ち着こうと試みる。

何故、そんな発想が生まれるのか、不思議でしょうがない。

「・・・残念だが、俺はロボットと恋愛ごっこなんてするつもりはない。エリスはあくまでも家族だ。それ以上にもそれ以下にもなれはしない」

聞こえのいい言葉は免罪符。

その言葉は自らを守る最大の武器。

「随分と冷たいのね。いいえ、割りきっていると言うべきかしら」

割り切っている。

幽霊の言葉は、俺の本質から大きく乖離しているものだった。

「いや、どっちも違う。俺は卑怯だなと思ってな・・・。家族なんて便利な言葉を使っているけど、エリスに何1つしてやってない。これじゃ、家族じゃなくてただの同居人だな」

そう言い切ってから深い溜息を吐いた。

そんな俺の態度に接しても幽霊は眉1つ動かすことはなかった。

「そうかしら？　あなたは言ったわ、機械人形にも心がある、と。それならば、あなたの気持ちを彼女も感じているはずよ」

「俺としては、こう・・・形に表すことができればと思うんだけど

な」

「・・・その答えは、あなたが見つけないとダメね。その結果が例え別離の道だったとしてもよ」

随分と厳しい事を言ってくれるものだ。

考える時間が欲しいと思うのだが、幽霊は、俺の答えなど端から興味はないようで、さっさと話を進め始めた。

「あなた、さっき科学の結晶がロボットって言ったけど、科学で心を完全に解明することは難しいことよ。科学とは証明することよね」

「言い切っていいものかどうかは別問題だけどな」

「ええ、その通りね。でも、科学で解明できないことが、存在しないということではないわ。それは、歴史が証明しているもの。私たち幽霊は人の心の想像の産物、いわば人の心の結晶のようなものに過ぎないけれど、確かにここにいるわ」

今度はまた随分と難解な話だと、何となく話を聞きながら思う。そもそも理解しようとしてないのが、問題なのかもしれないが。

「いずれロボットと同じように私のような幽霊も人と同じように暮らせる日が来るのかしら？」

「ま、俺が生きているうちには無理だろうな。幽霊には実態ってものがない。いると思えばいるし、いないと思えばいない、曖昧な存在だから無理だな」

「そう・・・それは残念ね。でも、私にみたいに美人な幽霊なら夢

であったとしても嬉しいわよね？」

がっかりとした思えば、すぐに年上の余裕めいた笑みを浮かべたりと、ころころとよく気分が変わるもんだとついつい感心してしまう。

「あんたがそれを言うか・・・・。ま、それに、いつかエリスも俺みたいのを見限って離れる時が来るだろうしな。俺の役目はその日までエリスに世間を知ってもらうってことだろう。いや・・・むしろ、そうなるように知ってもらうべきなんだろうな」

エリスには多くの可能性があると俺は考えている。
ずっといてほしいという気持ちと、いずれは送り出すべきだという気持ちが何度も寄せては返しを繰り返す。

本音は、傍にいてほしいと思っているが・・・。

「・・・ふふふっ」
「何だ？　何かおかしいこと言ったか？」

「ふふっ、景はエリスのことが大切なのね。その気持ちを伝えて御覧なさい。きっと喜ぶはずよ」

・・・心を読みやがったな。

今の俺はどういう顔をしているだろうか。きっと真っ赤なんだろう。多分の恥ずかしさとかすかな憤りをもってその原因を睨みつけると、彼女は飄々として、

「でも、景。私が言うのもおかしいかもしれないけど・・・もう少し相手をよく見て御覧なさい。きっと、今とは違うことが分かるは

ずだから。それに、あなたの思っているほどエリスって子は複雑じゃないわ。単純にあなたを信頼し、情愛の念を抱いているわ」

と、知った口を叩いた。

「さっきは心を否定していたのにな」

ついでに言うなら心が読めないとも言っていたような気もする。否定するのは、読めないことが怖いからなんだな。

それを心に思い描き、幽霊を少し憐れんだ目で見ると、案の定心を読んだのか悔しそうに唇を噛む幽霊の姿があった。

「・・・・それもプログラムっていうのかしらね。ま、いいけど。それでも、ちゃんと見てあげないとダメよ？　愛情の裏返しは、憎しみにも情愛にもなるの。どっちに転ぶかはあなた次第」

鼻先に指を突き付ける意味はあるのか分からないが、幽霊は満足そうだった。

「・・・善処する」

「善処するだけじゃダメね。デートに誘ってみなさい、そうすればきっと彼女の違った一面が垣間見れるはずよ。それは、他の女の子にも言えることね」

「・・・暇な時に散歩に誘ってみるか」

「やっぱり景はいい子ね。ほんと娘にそっくり。あなたは、きっと幸せになれるわ」

その話を聞いてふと思う。
どこが似ているんだろうか？
・・・単に褒めるところがないからそう言ったに違いない。
「俺に似た娘って、相当出来が悪いな・・・・。むしろ、可哀そうだ」
「あら、そんなことないわ。娘は、私に似て可愛くて器量もよくて・・・でも恋愛には不器用で、ああっ、もうっ。この気持ちどう伝えよう」
・・・親バカか。
「ところで、名前聞いてなかったな」
「そういえばね。・・・なつ。私は、なつって言うのよ」
「なつさんか。娘さんと俺は似ても似つかないように思えるんだが？」
「確かに容姿はそこまで似てないわね。血の影響でうっすら面影が残ってはいるけど・・・。私が言いたいのは、幸せになれるってことよ。娘と同じように、同じくらいに、ね」
昔から子の幸せを願わない親はいなかった。
そして、目の前にいるこの幽霊もまた同様だったということだ。
ロリコン云々を伝えに来たはずの幽霊に何故か恋愛のことで説教されるとは思わなかったが。

それきり俺たちの間にはしばらく沈黙が流れていた。
誰もいない校舎は、風の吹く音以外何も聞こえてこない。
そう、誰もいない・・・。
「そういや、誰も俺のこと迎えに来ないな。本当に嫌われていたりしてな」
「ああ、それ。それは私が少しだけ心の中にある恐怖心に干渉しているから誰も来られないわ。ロボットの方も止めているから期待しても無駄よ。所謂、金縛りといったものを想像してくれるといいわね」
・・・無駄に万能なんだな。
もう俺は何も突っ込む気もしなかった。
「ま、来ても意味はないか」
幽霊相手に何かできるとも思えないしな。
除霊してもらうべきか。だが、呼ぶのは祈祷師でいいのだろうか？
「冷たいわね。・・・・最後にもう1つお願い」
「・・・俺ができることであれば」
「抱きしめさせてもらえるかしら？　私、子供を抱けないまま逝ったの。娘も幽霊になってからお母さんって呼んでもらえたのはいいのだけど、結局抱きしめることは叶わなかったから」
「別にそれで満足す・・・・」

途中まで言った所でばっと幽霊が俺に飛びついて来た。
物体ではないので、痛みを感じるわけでもない。
しかし、何か体が段々と重くなっていく不思議な感覚を覚えた。
体の上に漬物石でも乗っているような、そんな感覚だった。

しばらくの間抱きしめられていたが、やがて幽霊も満足したようで俺の頬にちゅっと口づけをして離れた。
その感覚は全く残りはしなかったが、ますます体が重くなったような気がした。
言葉に表すなら満身創痍というべき俺に幽霊は、疲れを見せるどころか先程に比べてますますピンピンしているようだった。

「あと、化学実験室に1人まだ取り残されているから、連れて帰ってくれる？」
「・・・何だろう、こうふわふわしたというのか・・・あまり気分が優れないんだが」

俺が、床に倒れこむように座り込んで、浮遊している幽霊を見上げて言うと、幽霊は、

「うーん、それは・・・私が触れたからね。私、幽霊でしょ？　生き永らえるために人間の精気を少し分けてもらっているのよ。普段は、ちょっと触れる程度だから変化はないと思うんだけど、さっきはかなりぎゅっと抱きしめたから・・・・ちょっと、ね？」

と、はっきりとその原因を言う。

「・・・生き永らえるって、あんたもう死んでるだろう」

疲れているせいで、突っ込みを入れる声にも力はない。

対する幽霊は、嬉々として返事を寄こした。

「じゃ、死に永らえるってことにしておくわ」

ここで死んでくれって言ったら不謹慎なんだろうな。

ちょうど会話が途切れたので、そろそろ戻ろうと立ち上がると幽霊に右手を差し出した。

「もう会う機会もないだろうけど・・・・ま、何だ・・・、楽しかったとだけ言っておく」

「またね」

またね・・・か。

差し出された手は透き通り、今にも消えてしまいそうな気がする。

次に会う時は、遠い日かもしれないし明日かもしれない。

ただ、次に会うときはまたお互いに笑って会えればそれでいい。そう思って俺は彼女の手を握った。

その後、幽霊は2度と学校に現れることはなかった。

俺は、過労で2日目を覚まさなかったせいで、周りの人、特に四条畷姉妹と衣先輩にお祓いに行くように強く勧められる羽目になった。もちろん、面倒だったので断ったのだが。

さらに、衣先輩が学校に祈祷師を呼んだものの、その人が裸足で逃げ出してしまったのはまた別の話だ。

75話：有栖　景の事情（後書き）

本編後の雑談

『ロマン派と現実派』

美玖「紫、同床異夢って・・・・何だか不思議な言葉だと思わない？」

紫「はあ？　何で？」

美玖「だって・・・床って同じお布団で寝ているってことだよね？　夫婦仲が冷めきっているのかな？」

紫「・・・馬鹿みたい。ボクたちだって昔は同じ布団で寝てたけど同じ夢なんて見なかったじゃん」

美玖「・・・実は、浮気とか？　なんだかエッチだね」

紫「それは、美玖の頭のほうだって」

（実際には、同じ事を行いながら、考えや思惑が異なること）

美玖「うーん、じゃあ呉越同舟は？」

紫「仲の悪いのに一緒に行動をしているってことでしょ」

美玖「そう。そして、最後は困難を分かち合った2人は恋に落ちるんだよ、きっと」

紫「・・・敵国なんだから殺し合うだけでしょ」

美玖「・・・紫は、夢がないよー」
紫「美玖は、夢見過ぎ」

76話：メイドさん、デートをする　1／3

向こう3カ月の予報です。

今年の夏は例年に比べ、猛暑の日が多くなるでしょう。

「・・・暑くなるか」

と、天気予報を見ながら俺はポツリと言葉をこぼした。
ここ数日は、体育祭の頃が嘘のように冷えた日が続いていたからだ。

「ふんふ～ん」

そのまま寝転がっていると、鼻歌を歌いながらエリスが洗濯物を持ってやって来た。
相変わらず、真面目だと思う。

今日も、頭にカチューシャを乗せているし、いつもの見慣れたメイド服に身を包んでいる。
外に行く際には、服も着替え、カチューシャも外している。
服はともかくとして、カチューシャの意味はないと思うのだが、前に聞いたところ、メイドには必要なのだとの一点張りだった。

「景様、お願いします」
「はいはい」

カチューシャねえ・・・。

適当に手に取った洗濯物を畳みながら、同じく洗濯物を畳むエリスの頭をぼんやりと眺めていて、ふと思う。

「なあ、エリス？」

「はい、どうしましたか？　おやつの時間にはまだ早いですよ」

素っ頓狂な返事を寄こすメイドに頭を抱えつつも、目的を忘れないためにも冷静であることを言い聞かせる。

「・・・あの、景様。それは・・・・私の下着です」

洗濯物を畳む手伝いはいつものことで、男性用のもの全般を畳むのが俺の役割なのだが、うっかりエリスの下着を畳んでいたようだ。

全くもって冷静ではないことが、あっさりと露呈してしまった。

「・・・悪い」

それから洗濯物を黙々と畳み、それらがほぼ畳み終えた時、もう1度俺はエリスに声をかけた。

「その頭以外に、帽子ってないのか？」

「帽子って、これですか？　・・・これ以外の帽子はないですね。

あと、これはカチューシャです」

その言葉を聞いて、これまでなかった明日の予定がぱっと浮かんできた。

こういう時は、善は急げとも言うし、すぐに伝えるべきだ。

「エリス、明日暇か？」

「？　日常家事以外に特にはありませんけど」

期待通りの返事に俺の心が意味もなく高揚するのを感じる。

その高鳴る鼓動を抑えつつ、エリスの目から逸らすことなく言った。

「それなら、明日、俺とデートしないか？」

冗談だと思われたのかエリスからの返事はない。

だが、しばらく経つとエリスは驚いたように叫んだ。

「へ？　えっ！？　えええええっ！？」

その声に俺が何かしでかしたと思った母さんが飛んできて、有らぬ疑いをかけられたのは言うまでもない。

「それでは、いってきます」

「エリスちゃん、今日は楽しんできなさいね。でも、景？　どういう風の吹きまわし？　デートだなんて」

「だから、軽い冗談だって。単なる買い物ついでに散歩に行こうって誘っただけだ」

本当は、こっそりと行くつもりだったのだが、エリスがデートの服はどうするべきかと母さんに相談したせいで、あまり知られたくなかった人に知られてしまうことになった。

ただ、そのおかげでエリスは今日1日家事をしなくてもよくなったので、朝早くから出掛けることが出来たのだ。

「景。帰ってきたら家の手伝いをちゃんとするのよ。それと、エリスちゃんが楽しめるように気を使うのよ」

「分かったよ」

そのせいで、色々とうるさい小言が飛んでしまったが。

「景様は、本当に心配されるのですね」

「・・・」

エリスもくすくすと声を上げて笑っていた。

そんなエリスに仕返しがしたくなって、先に歩き出すとエリスは慌てて俺の後を追いかけてきた。

そして、再び横に並ぶとむっとして言う。

「景様、ひどいです」

「・・・景様言うな。恥ずかしいだろう。以前のように、さん付けで呼んでくれ」

つい嘆息してしまってから、はっとする。

溜息なんてついていたら、楽しいものも楽しくなくなってしまう。

大体、近所の人は、エリスが誰の所にいるか知っているし、そういえば、テレビに以前出たことがあったから手遅れなのかもしれない。既に、今更と言うわけだ。

エリスは幸か不幸か気にした様子を見せることなく、少し前に出て俺の前に立つと、後ろ向きに歩きながら、

「ところで、今日はどちらに連れて行ってくださるのですか？」

と尋ねてきた。

そういえば、今日の予定言ってなかったか。

自分のうっかりさを嘆きつつも、楽しさの方が勝り、すぐにそれを打ち消してくれた。

「町のお勧めスポットと帽子を買いに行こうと思ってな」

今年の夏は暑いというのに、何も被らないのはロボットであってもよくないだろうし。

「お勧めと言いますと、タイムサービスのお店とかでしょうか？」

「とりあえず、家でどういうことをしているのか、よく分かった」

まあ、一般家庭で家事労働をしていれば、半ば主婦と化すのは仕方のないことだ。
適度な質素倹約を行う主婦になってくれればいいと思った。趣味になると生活に困るに違いない。主に、同居する人が。

まず、俺たちがやって来たのは、川に架かる大きな橋だった。
ここまでは、駅に向かう途中にある国道からバスに乗って２０分ほど。
その橋を渡ってしまえば、隣の庸布市がある。ちょうど川の真ん中が市の境となっているわけだ。

だが、今日はそちらに用はなく、国道から川沿いへと道を下りていく。
夏に向けてのこの時期は川沿いに緑の遊歩道が出来ており、歩くと気持ちのいい場所だ。
散歩やジョギングを楽しむ人、家族でゆったりと歩く人。川原では、野球を楽しむ人たちの姿も見える。

「なかなかいい所だろう？」

「大きな川ですね、近くで見るとこんなにも大きいです」

両腕をいっぱいに広げ、その広さを俺に伝えようとする姿は微笑ましく思える。
同時に、もう少し早く連れてきてあげればよかったとも思った。

「春はお花見、夏は緑と花火、秋は紅葉が綺麗だ。冬は、風が強いからただ寒いだけだが」
「花火は、綺麗ですよね。空に打ちあがって、大きく華を咲かせるのもいいですけど、線香花火の侘びしさもいいと思います」
「ここの花火は綺麗で、迫力もある。２万５０００発も打ち上げるんだからな」

エリスがあまりに喜ぶものだから、自分のことのように俺も嬉しくなった。

「きっと綺麗なんでしょうね」

何もない空を見上げてエリスはそう言った。
その言葉が俺にはふと寂しげに思えた。

よく考えればエリスは本物を見たことがないのだ。
俺はその風景を思い出すことはできても、エリスには想像することしか出ないのだから。

「今年は一緒に見に行こうな。綺麗に見える場所も知っているから朝から場所を取りに行くか」
「はい。お弁当を作って行きましょう」

きっとその日は、楽しい１日になるだろうな。

「まだ時間もあるし向こうの橋まで少し歩いてみるか」
「そうですね。ゆっくり歩きましょう、景さ・・・んっ！」
何か言いそうになって慌てて口を押さえ俺の様子を窺うエリスだったが、いくらなんでも誤魔化せるわけない。
以前にも同じようなことがあったのだから。
言わないべきだろうか？

「・・・そんなに難しいことなのか？　それなら、無理しなくてもいいからな」
でも、言わずにはいられなかった。
無理をさせて今日を楽しめないのでは、お互いに不幸になる。
だが、エリスは非常に真面目な性格で、妙に一途なところがあったということを俺は失念していた。
「いいえ、頑張ります。景様のためですから！」
要するに、頭が固く、不器用だということだ。
「・・・」
胸の前で小さくコブシを作って気合いを入れるのは、結構なんだが既に空回っているような気もする。

ま、その姿があまり不憫なので言わないでそっとしておいてあげようか。
一応、俺のためと言ってくれているわけだし。

76話：メイドさん、デートをする　1／3（後書き）

本編後の雑談

エリス「私は、たくさん子供がいます」
幸樹「っ！？　1人くれ！」
景「・・・・」

エリス「・・・あはは。実は景様との子供です」
幸樹「っ！？　景、てめええっ！」
景「・・・お前ら、頭を冷やせ」

幸樹「ぶっ・・・、景、水をかけるとかねえだろ」
エリス「・・・びしょびしょです」
幸樹「っ！？　おおっ、眼福、眼福」
エリス「・・・っ。きゃあああっ！！」
幸樹「ぶへえっ！？」

景「・・・。で、その子どもたちは、いつ世間に出て行くんだ？」
エリス「9月になります。まずは30体ほどです」
景「ちゃんと見送ってあげるんだぞ」

エリス「はいっ。・・・・あ、あの・・恥ずかしいので着替えてきます」

景「・・・こっちが恥ずかしくて見てられないって」

77話：メイドさん、デートをする　2／3

バスに揺られること20分。

再び、俺たちは行きと同じバス停へと戻ってきていた。

次の目的地は駅通りのとある店だ。

そこで、エリスの帽子を買おうというわけだ。

ゆっくりと散歩を楽しんだ結果、意外にも時間を喰ってしまったがたまにゆっくりと時間を過ごすのも悪くないと改めて思えた。

だが、ゆっくり過ごした結果、ある問題が起きていた。

それは、エリスが間違った方向に頑張ろうとすることだった。

「では、こうしましょう。今日だけは、私はメイドではありません」

「それでいいんじゃないか。それなら、様付けで呼ぶ必要もないしな」

もう俺は真面目に取り合ってもいなかった。

散歩中に聞かされ、バスの中で聞かされ・・・。

俺のために頑張ってくれるという気持ちだけでお腹いっぱいだ。

ただ残念なことに当然、エリスはそんな俺の態度が気に入らないらしい。

「最後まできちんと聞いてください。ですから・・・・」

まるで、俺の親のようにうるさく説教をする。
しかし、何か妙案を思い付いたのか急に言い淀んで俺をちらちらと見ると、何かを伝えようとしていた。
残念なことに俺は、超能力者でもないのでそれでは何も伝わらない。
そこで話を促すと、エリスは立ち止まり胸に手を当てて、よしっと小さく呟き、口早に言った。

「そ、それでは・・・今日だけは・・・・・恋人になってもいいでしょうか？」

「・・・好きにしたらいいんじゃないか？」

いきなり何を言うのかと思ったが、俺は思った以上に冷静だった。
単に気乗りしないだけだったのと、照れであまり表に自分を出したくなかったというのがあったからだ。

「はい。では、好きにします」

と、エリスは俺の腕を取ると、それに自身の腕を絡める。

つまり俺とエリスは現在、所謂腕を組んだ状態ということになる。
それは、カップルか酔っぱらいのすることだ。たぶん、エリスの意図は前者だろう。
でも、あっさり認めたくないという気持ちが心のどこかにあった。

「・・・酔っぱらいじゃないんだから。恥ずかしいからやめてくれないか？」
「嫌です。いいと言ったではないですか。それに、酔っぱらいは肩を組むものです。世の恋人は腕を組むのです」

そこが大事とばかりに最後の言葉を強調してエリスは言った。
「どこの受け売りだ、それは？」
「柚葉様が、こうしたら景さ・・んが喜ぶとおっしゃってしましたよ」
余計なことを吹き込んで・・・。
話を逸らそうと辺りを見回してみると、ある張り紙が目に入って来た。
「・・・ふーん、少し先になるけど商店街の七夕祭りがあるのか」
なるべくエリスの方を見ないで話しかけるが、とても近くにいるために声がよく聞こえる。
意識するなと言う方が難しいかもしれないのだが、
「知らなかったのですか。と、言いましても私も昨日知ったばかりですけど」
幸いなことに色気もいの字も感じさせない日常の会話だったので、そこまで意識することはなかった。
「そうなのか。でも、張り紙なんて貼ってなかったと思うけどな」
俺だって毎日、学校に通学に商店街を利用しているのだ。
いくらなんでも、気づかないわけがない。
すると、エリスは小悪魔っぽく笑うと、少しだけ誇らしげに言った。

「いえ、肉屋のおば様が教えてくださいました」
随分と馴染んでいるのだなと、俺は舌を巻いていた。
同時に、少しだけ寂しさも感じるのだった。

「ここ・・・ですか？」
店の前に着いたエリスが最初に発したのは、さも意外だと言わんばかりの尻上がりの言葉だった。
「俺も来るのは初めてだ。しっかし、えらく入りにくい店だな」
「そうでしょうか？　確かに入口に物があって邪魔ですけど」
・・・蹴り倒したりしないよな？
そう視線を投げかけると、エリスは何か勘違いしたようで、
「欲しいのですか？」
と、１０００円のジーンズを手に取って俺に渡してきた。
「違う、違う」
とりあえず商品を元の場所に戻す。
エリスは、小首を傾げていたがやがて一言ぽつりとこう漏らした。

「・・・景さ、んは分かりにくいです」
「・・・・・。さて、目的の品は店の中だ。時間もあるし、ゆっくり選んでいいからな」
そのまま聞き流して、俺は店へと入って行く。
要するに今日は、セールで人が多いのに、入口が一か所しかなく荷物を持った客でつっかえている。
だから、入りにくい。そう思ったのだ。
「景さ、ん、置いていかないでください」
「・・・悪い」
ぐいと、服を引っ張られなければそのまま店を入ってしまうところだった。
次からは、ついて来ているか確認しないといけないな。

先に、帽子の売ってある場所にたどり着くと、そこは色とりどり、形もさまざまな帽子が置いてあった。
「景さん、待ってください。1人では迷ってしまいます」
「すまん。俺が道に迷った」
どこに売り場があるか分からずにうろうろした結果がこれだ。
目的地に着いたはいいが、俺はぐったり、エリスは山のようにある帽子にうっとりといった様子だ。

「・・・。しかし、随分と帽子ばかり置いてあるな」
「そうですね。あ、景様、この帽子、金属を編んでいるのですね」
そう言ってエリスはその帽子を被ってみせた。
・・・金属臭くなりそうな帽子だ。
「・・・あまり似合っていないようです」
俺の表情から察したのか、エリスはその帽子を元あったマネキンに被せる。
そして、次に持ってきたのは、これまた妙な組み合わせだった。
「では、これはいかがでしょう？」
「毛糸のニット帽に黒のサングラス・・・。どこの不審者だ？」
もはやエリスも分かってやっているようで、そうですよねと、同意するとその帽子をまた戻す。
そして、手ぶらのまま戻って来ると少し元気のない笑顔を浮かべて言った。
「サングラスは、似合うと思ったのですけど残念です」
「・・・サングラスは目が見えないからな。笑った時の目もとが隠れていると楽しいかどうか分からない。やっぱり、笑顔は隠れていないのが1番いいからな」
我ながらアホなこと言っていると思う。たぶん、舞い上がっているのはエリスではなく、俺なのだろうな。

そのようなことを思っていると、エリスは俺の真正面に立ち、胸に手を当てすうっと息を吸うと、その息を吐き出す勢いのまま喋り出した。

「できれば、景さんに選んでいただきたいのです」

「分かった」

「けれども、本当によろしいのでしょうか？」

「よろしいのですよ。ま、お金のことなら心配するな。むしろセンスを心配してくれ」

エリスは、本当に遠慮深いな。しみじみそう思う。

「いいえ、景様なら、きっと私に似合う帽子を選んでくださると信じています」

「随分と過大評価されているんだな・・・。それなら、俺が選んでみるか。んー、それならこっちのはどうだ？」

と、俺は適当にマネキンから拝借してきた帽子を、エリスに被せてみる。

「・・・あれ？」

だが、俺は、その帽子を見て目を疑った。

「景さん、どうしました？　目をこすったりされて」

「いや、俺のセンスって絶望的だと思ってな・・・」

どうして、髪の毛が帽子から生えているんだ？

エリスの毛は銀髪。しかし、その帽子から生えているのは黒だ。

「どうして、目を背けるのですか！？」

「何も言うな・・・」

何か間違ったものを俺は渡してしまったようだ。

エリスには、その帽子を見せないようにさっと隠すと、そのまま元の場所に戻しに行く。

もちろん、エリスにはついて来ないように言ってから。

そこで、俺はある真実を知ったのだった。

「あ・・・ヅラと一緒に取れたのか」

それから、いくつかの帽子を見繕って元の場所に戻るとエリスの視線がある一点に集中していることに気がついた。

「・・・」

その視線を追って行くと。その先には、ある白い帽子があった。

モデルとなっているマネキンが着ている白のワンピースとお揃いのもののようだ。

洋服の方は、たぶんエリスには似合わないだろうと直感的にそう感じた。

マネキンもスタイルはいいが、そちらはファッションモデルのような体系。エリスは、同じスタイルがよいと言っても真逆を突っ走っ

ているのだから。
男で言うなら、背が小さいのに肩幅が広いためにMサイズでなくLサイズを着ているようなものだろう。
・・・何か違うような気がするが。
「あの帽子が欲しいのか？」
俺が声をかけると、まるで知らない人に声をかけられたかのようにエリスはびくっとして、体が錆びついたかのようにギギッと軋んだ音を立てそうなくらいに重々しく体をこちらに向けた。
「け、景様・・・見ていたのなら声をかけてくだされば良いのに。人が悪いです」
「人が悪い、それはいいな。ところで、気になるなら被ってみたらいいんじゃないか？」
だが、エリスは首を横に振って動かない。
何かを気にしているようだが・・・・。
そこでふとあるエリスの言葉を思い出した。
『景さんに選んでいただきたいのです』
そして、俺は、こう言った。
『俺が選んでみるか』
エリスは、今日だけの恋人になると言ったが、その本分はメイドだ。
要するに、エリスは俺が選ぶと言ったしまったために、自身の意見

を言えずにいるのだろう。
だから、俺は言わなくていけない。
「別に、さっき言ったことを気にしているならいいからな。エリスが気に入った物を買えばいい」
「・・・。はいっ」
エリスは、そう気持ちを前面に押し出して返事をすると、ぱっとその商品のもとへと飛んで行った。
先程、恋人云々と言ったことなんて露と忘れてしまっているに違いない。
恋人と言うなら、過度の遠慮なんていらないはずなのだ。
そもそもエリスが俺に遠慮する理由はどこにもない。
「エリス。俺に遠慮しなくてもいいから、エリスのやりたいことがあったら、好きにやったらいい」
すぐに戻ってきたエリスにそう伝えると、まだ遠慮しているようで、
「・・・・では、本日だけ」
と、エリスは、逡巡した後に言った。
「別に普段の時だって構わない、エリスは家族なんだから。俺は言いたいことはエリスに言うし、エリスも言いたいことがあったら言ってほしい。もちろん、それはエリスが決めればいいことだがな」

どうやら、まだ迷いが残っているようだが、エリスがそうありたいと言うなら俺が強制することはできない。
一応、俺の意思は伝えておいたが、簡単に変われたら苦労はないよな。

その間にもエリスは、鏡の前で帽子の角度を気にしたりしながら、何度となく位置をズラしたりしていた。
別に買うと決まったわけではないし、適当でいいと思うのだがエリスなりにこだわりがあるのだろう。
しばらく、そっとして待っていると、ようやく位置が決まったようで、エリスがこちらを緊張した面持ちで見つめた。

「・・・どうですか？」

ゆっくりとエリスは回ってみせると、何故か最後に腰に手を当てポーズを決めた。

「よく似合ってるな」
「本当ですか？」

エリスは、心底嬉しそうに笑っていた。
いい物が見つかって嬉しいのと、褒められたのが嬉しいのと両方の気持ちが入り混じっているのだろう。
俺も、エリスがここまで笑うのを見るのは、初めてで他人事なのに何故か心の奥底が温かく感じた。

だが・・・。

「大変申し訳ありません。この商品は只今品切れです」
店員に頭を下げられてはどうしようもない。
俺たちは、肩を落として店を後にした。
「・・・残念だったな」
店から出たエリスは見るに堪えないほどに落ち込んでいた。
「・・・いえ、私は気にしていません」
とてもそう見えないが・・・。
傍から見ても、はっきり落ち込んでいることが丸分かりだ。
これまでは、あまり気にしていなかったが、エリスは割と喜怒哀楽は激しいようだ。
尤も、怒に関しては抜け落ちてしまっているようだが。
「・・・。エリス、ちょっと待っててくれ。すぐに戻るから」
「え、あ・・はい」
エリスを店の前で待たせると俺は、急いで店内へと舞い戻った。
店に入った俺は、再び帽子売り場へと直行する。
幸いなことに、先程の店員は帽子を並び変えたりしているようで、まだその場に残っていた。
「すいません、ちょっといいですか？」

「先程のお客様ですね。先程は大変申し訳ありません、お連れの方がお気に召したようだったのに」

店員は俺の顔を覚えていたようだ。

これなら話も早いだろうと、俺は早速本題を切り出した。

「さっきの白い帽子は取り寄せたりすることはできますか？」

「取り寄せですか・・・。うーん、どうでしょう。確かにうちは他に3店舗ほどありますけど、こればかりは聞いてみないと分かりませんね。少々お待ちください」

そう、店員は言うとレジにある電話からどこかに電話をし始めた。

・・・そういう電話は裏であるのではないのか？　そう思ったが善意を踏みにじる気もさらさらないので黙っておくことにした。

それから、１０分くらい待っただろうか。

電話で誰かと話をしていた店員が、俺の方を向くとありましたよ、とにこりと笑った。

「取り寄せは可能なのですが、１週間ほどかかるそうです。それでも、よろしいですか？」

「はい、お願いします」

たった1週間待つくらいどうと言うほどのことはない。

それで、エリスが喜ぶ姿が見られるのであれば。

「彼女へのプレゼントですか。優しいんですね」

「・・・彼女？　いや、そういうのじゃないです」

どう見たら、エリスと俺が恋人に見えるのだろうか。
それ以前に、俺とエリスって並んで歩くとどう見えるんだ？
すると、店員はぽんと手を打って、ふふっと黒い笑みを浮かべて言った。
「あら、これからでした？　・・・ふざけた話をしていると睨まれるのでこれくらいにしておいて、こちらにお名前と住所お願いします」
だが、話の途中で急に真面目になるものだから何かあったのかと俺は辺りを様子を見まわしてみる。
すると、あっさりと原因は判明した。
なるほど店長らしき人がこちらを見て、苦々しい顔をしている。
この店員は、たぶん何度も前科があるのだろうな。
来週もいるだろうか、とふと思うと何だか笑いたいような可哀想なような複雑な気分になった。
「はい、確かに。それでは、1週間後の午後4時くらいにこちらに、この紙を持って来てください。取り寄せをお願いしたと言っていただければ、すぐに用意できますので」
「ありがとうございます」
俺は、店員に頭を下げると、エリスの待つ入口へと再び急ぐのだった。

77話：メイドさん、デートをする　2／3（後書き）

本編後の雑談

『人のことより・・・』

大助「最近、ちとお前の魅力が足りなくなってきたように思うのだが」
綾「はあ？　別にあんたに魅力なんて感じてもらわなくて結構」
大助「・・・もしや、本当に効果があるのか？」
綾「さっきから、ぶつぶつと。言いたいことがあるならはっきりしたら？」
大助「ならば、聞く。乳麺・・・・ぐほあっ！」
綾「それ以上聞いたら、あの世に連れてく」

景「あの2人、そのうち付き合ったりして」
晃「・・・付き合ったら、意外とうまくいって、そのまま生涯の伴侶になりそうだけど」

由真「・・・先に自分の心配すればいいのに」
恵麻「そ、そこが、景君のいいところじゃないのかな～？」

由真「本当にそう思ってるわけ？」
恵麻「・・・・。複雑かもしれないね～」

由真「はあ・・・どっちもどっちだわ」

78話：メイドさん、デートをする　3／3

帽子選びに思いの外、時間を掛けてしまったので、その後の予定を１つ減らし、駅前デパートの美術展を見学するだけで、既に時計の針は午後４時を指し示していた。
そこから、俺たちはまたバスに揺られ、今度は町の西側の高台にある公園へと向かっている。

公園へと向かう坂道は、今も変わらず相変わらず急なままだった。この辺りに住む人は、行きは楽であっても、帰りはひいひい言いながら登るのだろう。
もし、住む場所を選べるのならここにはあまり住みたくはない、そう思う。

「時間が過ぎるのもあっという間だな。はあ・・・、長いなこの坂は」
「景さんは、運動不足です。少し運動をされてはいかがでしょうか？　少しお腹の辺りが出てきたように思えます」

「・・・まじか？　・・・。気のせいだと思うが」
「いいえ、そのようなことはありません。毎日、景さんを見ている私が言うのですから間違いありません」

確かに、エリスの言葉は尤もと言える。
だが、認めがたい事実だ。昨日、体重計に乗った時は、以前と変わっていなかったのだから。

・・・帰ったら、乗ってみるか。

「ま、それは置いておこう。今日の町案内は次の所で終わりだな。ちょうど時間もいいし」

「そうなのですか？　では、楽しみは取っておくことにします」

「取っておくといい。きっとエリスにも気に入ると思うから」

こう豪語するのはいいが、本当は気に入ってくれるかどうか心配だったりもする。

俺のお気に入りの場所ではあるが、エリスの好みというものを俺はあまり知らないのだから。

「景様が気に入っていらっしゃる場所ですか。楽しみです」

と、エリスは子供のように無邪気な笑みを見せた。

この様子なら大丈夫だと思う。

うん、大丈夫だろう。

公園に着いたのは、午後5時を回る少し前のことだった。

坂の途中の神社にも寄ろうかと思ったが、あそこはまあいいや、と思ってやめておいた。

どうせ墓しかない場所だ。景色は公園に負けないが、エリスを連れて行く場所ではないだろう。

「景さん、近所の公園と違って広いですね」
「そりゃ、そうだ。ここは1周すれば1時間はかかるからな。さすがにそこまで時間はないから回りはしないが、また来る機会もあるだろうから、その時回ってみるか」

エリスは、その言葉に黙って笑顔を見せた。
俺の言っていることを信じていないのか、それは少し曖昧だったような気がした。

「んー、まずは、先にいくつか回ってみるか。この公園には、俺が見せたいもの以外にも、割と有名というか、噂程度の小話が付いたものがあるし」
「どのようなものなのでしょうか。楽しみです」

あまり期待すると、かえって俺が紹介しにくいんだけどな。
エリスが、目を輝かせて期待するものだから、俺は半歩ほど後悔の念から後ろに下がってしまった。
そんな俺をエリスは、珍しい動物でも見たかのようにきょとんと見つめていたのだった。

「ここは、昼間に行った川と同じでお花見の季節になると桜が空を覆い尽くさんばかりに咲くんだ」
「この町は、桜の名所が多いのですね。いつか、景さんと一緒に来ることができるでしょうか？」

「いつか、じゃなくて来年だな。花見じゃなくていいなら、恵麻とかあたりを誘って遊びに行くのもいいな」

エリスと話しながら、並木道を目的の場所へ向かって進んでいく。
ここも1つの目的ではあるが、この先に噂の中心が置いてあるのだ。

夏に向かう梅雨時のこの季節、桜の木は花はとっくに散り、葉だけが残っている。
春は本当に綺麗なのだ。

初めて見たとき、ここは桜のトンネルだと思ったのも今はいい思い出だ。
そして、もう1つの思い出があることも忘れはしないのだろうな。

エリスもそんな桜の満開になった様子を思い描いていたのだろうか、うっとりとしたように一言口にする。

「その時は、私がお弁当を作りましょう」
「いや、俺が作って皆に振舞う」

「お願いですからおやめください」

「・・・それなら、一緒に作れば問題ないだろう。俺は、食材を切ることだけに専念する」
「それなら一向に構いません。景さんは、切るのはお上手ですから」

即答されるのは、少しばかり悲しいが、エリスの中では俺の料理は人を殺せるとさえ思われていそうだ。
恵麻や母さんが大げさな事を言うから、悪い印象を持たれているが実際はそこまでひどくはない。

せいぜい違和感を感じる程度のものでしかないのだ。
食べたら失神するなどといったものでは決してない。

「やっぱり料理が下手な人と結婚するべきか・・・」
「景さん。どのような方と結婚しようとも私がおります。・・・もしかすると、結婚できないかもしれませんけどね・・・・私がおりますので」

何やら不穏当な言葉が聞こえた気もするが、ここはあえて聞かなかったことにしたい。
厄病神と書いてメイドと読むのかもしれない。

そのような話をしているといつの間にか並木道を抜け、町が一望できる公園の端へと着いた。
そして、ここにあるものが置いてある。

「ほら、あれが噂の中心だ」

この並木道自体は、そこそこ距離はあるのだが、公園の入口から今回の目的地まではわずか３００メートル。
話をしていればすぐに着く距離だ。

「・・・？　中心と言うのは、あの・・・ベンチなのでしょうか？」
「そうだ。１つしかないが、あれが噂の類だ」

エリスは、不思議そうにベンチを見て、何があるのだろうかといった顔をしている。
見た目は、白く、所々ペンキの剥がれたただの木製のベンチだ。
それだけなら噂になることはない。

「どのような噂があるのでしょう？　座ったら壊れてしまうとか・・・でしょうか？」
「・・・それは、それで噂になりそうだが、違うな。あれにカップルで座ると一生幸せになれるんだとさ。まあ、眉唾物だな。願いの叶わなかった奴を俺は知っているから」

あのベンチは、割と古い物だ。
両親が結婚してこの街に来た時からあったものらしい。
ちなみに1人で座ると、一生独り身になるという。

・・・俺のことだが。

俺は、割と迷信深いので少しばかり心配しているのだが、エリスはそうでもなかったようだ。
ベンチのことなど露も気に留めていないようで、

「噂などその程度のものかと」

と、淡白な反応を見せた。
意外にも、エリスはこういう迷信事に興味はないようだ。
一応中身は女の子だと思っていたが、女が皆こういうのが好みというのも偏見なんだろう。

そういや、エリスってそもそも女なのか？

「まあ、そうだな。それで、ここからの景色が最高なんだ」

とりあえず、頭に浮かんだ妙な事を振り払い、話題を変えてみる。
エリスは、たぶんこちらの方が気に入ると俺は思っている。
柵まで俺が歩いて行くと、エリスもまた俺の後について、柵までやって来た。

「あ・・・。うわあっ、景さん、すごいです！　遠くまで家がびっしりとあります！」
「そこに望遠鏡があるから、もっとよく見えるはずだ」
エリスは、初めて望遠鏡を覗くせいもあってか、子供のようにはしゃいで、駅が見える、川が見えると楽しそうだ。
その姿を見ていると、やはり、連れて来てよかったなと素直にそう思えた。

ふと、その姿は昔の俺に似ているような、そんな気もした。
これでは、デートと言うよりも親子の散歩のようなものだ。

「景さん」

急に先程までとは違った重々しい声に俺は振り返った。

「景さん。・・・景さんは、知らない方が幸せだと思うことはありますか？」

エリスは、もうはしゃいでいた時の笑顔はそこにはなく、笑顔は顔に張り付いているだけのように思えた。
何か悪いことでも思い出させてしまったのか？

そう感じたが、それは後に置いておいて、先に質問に答えるべきだろう。

「随分と哲学的な質問だな。・・・ま、知らない方がいいことだってたくさんあると思うが・・・、俺は大切に思う人の事は知っていたいな。それがたとえ悲しい事であったとしても。で、エリスは何か俺に秘密を抱えているってことでいいのか？」

「そうですね。・・・そうですね、あまり知られたくないことはあります。実は、この胸は着脱可能だったりすることです」

と、自分の胸に手を置いてエリスは言った。

つまり、偽物ということになるらしいが、そもそも本物って何なんだ？

エリスの体は全部作り物のような気がするが・・・。

「・・・で、外すとどうなる？」

「ぺたんこになります」

「・・・」

何だ、てっきり爆弾にでもなると思っていたんだが・・・期待はずれだ。

ただ単に、製作者の趣味嗜好が大きく反映されているに違いない。

オーダーメイドと言いつつ、既存のままやって来ているのだから。

いや、俺が白紙で出したからか。

「・・・け、景さん、そんな・・・・やらしい目で見ないでくださ

い」

「見てないっ！」

表向きはそう言ったが少しの間、見ていたのがばれてしまったらしい。

着脱可能などと言われたら視線がそこに行くのは仕方がないことだ。

それに、エリスが先程見せた憂いの表情も消えている。

一体、何だったのかは分からない。が、これでよかったのだろう。

エリスは、嫌ですね、と悪戯っぽい笑みを浮かべ、ふふっと笑って、

「それもそうですね」

と、あっさりと引き下がった。

そのエリスの謙虚さは、普段と変わらない。

が、今日に限ってはその不自然さにこちらの方が気になってしまう。

「やけにあっさりとしているな。・・・何か裏があるんじゃないのか？」

すると、エリスは待ってましたと言わんばかりに俺に言う。

「分かります？　折角ですから、そこのベンチに一緒に座りませんか？」

「うーん・・・」

何とも魅力的な話ではあるが、俺には小さな不安があった。

この椅子、昔からこのままであるためか、老朽化が著しいそうだ。
普通の人でさえ座ったらみしみしと音を立て、まるで自分が太ったかのような錯覚を起こさせるとネットによると専らの噂らしい。
だが、一緒に座ることに一定の魅力を感じないでもない。
「別に構わないが、抜け駆けは禁止だからな」
「はい。では、ご唱和ください。・・・せーの」
「いや、それ違うと思う」
そう言いつつもエリスに合わせてベンチに座る。
・・・大丈夫そうだ。
だが、そう油断した時だった。
パキパキと、何かが耐えきれなくなった音とても近くから聞こえてきた。
「・・・げっ」
「きゃっ」
そして、バキリと乾いた音を立て、ベンチが真っ二つになってしまった。
「エリス、大丈夫か？」

俺は、ベンチがエリスの尻に潰される前にその場から飛びのいていたので、何ともなかった。
とりあえず、手を差しのべながら仰向けにひっくり返ったエリスを上から覗き込む。
すると、エリスはそのままの体勢で俺の右手をぎゅうと握って捨てられるペットのような目をして言った。

「あの・・・私は太ったというわけではありません。人と同じように見えてもそこはどうにもならないのです。デブとかそのようなことは言わないでください。きっと軽量化してみせますから！」

俺は、どう反応していいのか困ってしまったが、その言葉を無視してエリスを起こした。

・・・エリスさん、とても痛いです。

真っ赤になった右手をさすりつつ、これは俺だけ逃げた代償なのだろうと少しばかり後悔した。

陽も傾き始め、その辺りで遊んでいる子供が次々と家路につくのを俺は横目で眺めつつ、坂道へと差し掛かった。

エリスが、もう1度だけ景色を見て来てもいいかと聞くので、行かせたのはよかったがなかなか戻ってこず、探しに行ったところ並木道でぼんやりと佇む彼女を見つけたのだった。
あの時、ひどく慌てていたような気もしたが、エリスのことだ。
俺を待たせてしまったなどと、そのような事を思って戻りづらくなっていたのだろう。
こういう時は、何かフォローをしてあげるべきだ思うのだが、
「夕陽が綺麗だな」
などと、気の利かない話を思わず口にしていた。
だが、エリスは、
「そうですね。本当に綺麗」
と、目を細めて眩しそうに太陽を見つめていた。
「もう1回見に来ような」
「はい」
そのエリスが笑う顔を見ていると別の意味で熱くなるのを感じるのが分かった。
「さ、さっさと帰ろう」
「景さん、何を照れているんですか？」

「何でもない、夕陽のせいだ」
「あ、待ってください。いいではありませんか、教えてくださっても」
こんな馬鹿な事を言う日が来るとは思いもしなかった。

78話：メイドさん、デートをする　3／3（後書き）

本編後の雑談

『鉄拳制裁』

景「よかったな、幸樹。お前が、エリスの（鉄拳制裁を受けた）はじめてだ」
エリス「そんな・・・・、私、いつの間にか汚されていたのですね・・・」

幸樹「俺は汚れじゃねえ！」

景「・・・。しかし、エリスは意外にも大人なんだな。意味を知っているとは思わなかった」
エリス「メイドとしてさまざまなニーズにお応えしなくてはなりませんので」

景「俺は、純真無垢だった頃のエリスが懐かしい」
エリス「では、これからはそうしましょう」

景「遅いよ」

幸樹「でも、俺は淫乱メイドも悪くないと思うぞ」
景「・・・。（あーあ）」

エリス「・・・私は、淫乱でも気が多い訳でもありません！！　寿々林様は、そのようなことを仰る方だったのですね、正直見損ないました、最低です！！」

景「完全に嫌われたな。あんなに怒ったエリスを見るのは俺も初めてだ」
幸樹「・・・何か不公平だ」

外伝８：少女の見た夢、少女が見た今

静けさにふける夜の公園を１人の少女が、歩いていた。
その少女は、高校生くらいに見えた。

彼女は、首の辺りで髪を結って１本にし、その１つになった髪が肩と腰のちょうど半分くらいまで伸びていた。
雲の隙間から出た月明かりが少女を照らすと、真っ白なワンピースが月明かりの下でキラキラと輝いた。
そして、彼女の白い肌が光の中に現れる。

そこには白雪のような美しさはなく、彼女の純真さこそそこに表れているようだったが、どこか病的なものを連想させるような、例えるならば陽に当たっていないような弱々しいものだった。

しかし、その月明かりは少女のためにあったのかもしれない。
その光の下に今は彼女しか映るものはないのだから。

彼女の足取りは１歩１歩何かを踏みしめるかのようにゆったりとしたものだった。

「ひとーつ・・・・ふたーつ・・・・・・」

と、少女は数え唄を口ずさみながら、並木道を進んでいく。

その声を聞いているのは、少女と天に輝く星々だけ。
少女が1歩1歩進んでいくと、それに比例するかのように彼女の頬を朱にほんのり染まっていった。
まるで愛しい恋人に久しぶりに会うかのような、そのようなわくわくした気持ちを彼女は隠しきれずにいた。

「・・・・さんじゅーいちっ・・・・・さんじゅーにっ、と」

立ち止まった少女の先には1本の木が立っていた。
並木道の木は、それも同じような外観にも関わらず、少女はそれと分かっていた。
懐かしい1つの思い出。彼女は、ひと時も忘れたことはなかった。

しかし、少女は思い出の前に立つと、その場で膝から崩れ落ちた。

『あなたとわたし』

そこには、最近彫られたと思われる文字が刻んであった。
少しばかり右上に、カギ括弧のような書きかけの文字も含めて人が彫ったとは思えないほどに、文字が整っている。

少女は、わたしという文字をぼんやりと何か物思いに耽ったような目で見つめていた。
その目は、どこか懐かしいものを見るような悲しい目だった。

「・・・・」

と、少女は口を動かし、自身の名前を声に出すことなく読みながらそっと『わたし』の上の空に描いた。

そして、『あなた』という文字に、同じように名前を空に描く。

描いた文字は、悲しいほどに儚く消え、そこに残ったのは『あなた』と『わたし』だった。

また、少女に残ったのは言いしえぬ虚しさと、徒労感だけだった。

「もういいの？」

と、先程まで姿さえなかったもう1人の少女が問う。彼女は、表情を一切変えることはなく、その言葉をかけることさえも義務と言わんばかりだった。

「ええ、いいの。もうここには思い出は残っていなかったから」

と、少女は1人寂しそうに笑った。

時計の針が１２０度を示し、どこかから時を知らせる音が聞こえる。その音を聞いた少女は、急にそわそわとし始めた。時間がやって来たのだ。

彼女に残された時間は、もう少ない。

いっそ魔法でもあれば、彼女の願いは叶うのかもしれない。
しかし、願いを叶えた先には、一体何があるのだろうか。そこには、きっと何も広がっていないのだ。1歩踏み出すことさえ、躊躇するに違いない。
かつて、自身がいたはずの場所に戻れる嬉しさはなかった。

彼女は、魔法でも奇跡でも構わなかった。ただ、あの頃、ありふれた日常に戻りたいだけだった。
その日常が続くこと、それが彼女の願いだったのだ。

「あなたとの思い出もいつか消えてしまうのかしら」

少女がそう語ると、もう1人の少女は頭を静かに左右に振った。

「残ります。・・・あなたが、私を見つけられる限り。私があなたを見つける限り」

その言葉に少女は、そう、と静かに呟いた。
もう1人の少女も、そう、とだけ言葉を返した。

それは、もう1つの物語。

彼女と彼女、どちらかが消えるまで続くお話。

外伝８：少女の見た夢、少女が見た今（後書き）

もう１つ外伝があるので、来週は月、木２回の更新です。

外伝9：有栖さんちのエリスさん

「エリス、おかえり」

この言葉を聞くのは何度目のことでしょうか？

「ただいま、景様」

そして、この言葉を言うのは何度目のことでしょう。

しかし、先に私が挨拶をするべきなのに、また景様に先を越されてしまいました。

近頃、景様はこうして私を見つけると先に声を掛けていらっしゃいます。

メイドとしては、ご主人様に先に挨拶をされるなどあってはならないことですが、郷に入っては郷に従えという言葉があります。

その家々のしきたりに従うこともまたメイドとしてその環境に慣れる第一歩なのです。

「そういえば、ここ数日は負荷テストだったらしいな。悪い影響はなかったか？」

「はい。何も問題はありませんでした。あとは、月1のメンテナンスくらいですね」

こうして、ご主人様に心配をかけるのはよくないのですが、心配のお言葉をかけていただくのもまた嬉しく思えます。

この2週間ほど、私は、代わりの者に景様をお任せしていたので余計にその言葉が響くのかもしれません。

ですが、ここで感傷に浸っている場合ではありません。

「景様、今、お時間はございますか？」

「嫌と言うほどあるな」

本日は景様は休日ということでこうして家にいらっしゃいます。
これは、もう絶好の日よりです。外は雨ですが、全くそのようなことは関係ありません。

「では、こちらの書類にサインを頂きたいのです」

私は、重要とタイトルのある書類を景様に渡しました。
景様はその書類を見ると、怪訝そうに私と書類に視線を往復させます。
きっと、見ただけで嫌な気分になられたに違いありません。

しかし、この書類は、私と景様にとってとても重要なものに当たるのです。
所謂、人で言うところの婚姻届のようなものですから。たとえに出したものは、この書類とは全く関係ないですが、それくらい大事なものです。

・・・ただの契約書、紙切れ1枚などと言われると、少しばかり傷つくのです。

私が、不躾にも他の事を考えていると突然景様が私に声を掛けてきました。

「・・・エリス、1枚目に婚姻届が挟まっているんだが」
「はい？」
予想外の言葉に、私は俗に言うところの目が点という状態でした。
景様からそれを受取り、確認すると開発部の方のある男性の名前が書いてあります。
もしも、これが女性の名前だったら、もっと大変なことになったに違いありません。
そのようなテロから景様をお守りするのもメイドの務めです。
「ま、それは任せる。俺は、とりあえずこれを読めばいいんだな？」
「はい、お願いします、私は、会社に連絡を入れますので」
そう言えば、数日前にこの方は大変な物を失くしたと言っていたので、たぶんこれのことなのでしょう。
早く教えてあげなくてはなりません。
ここ数日、塞ぎ込んでいたので、もう遅いかもしれませんけど。
電話を終えて、リビングへと戻ると景様は未だに書類と睨めっこをされていました。
会社の方は、電話口でわんわん泣いていましたが、すぐにこちらに取りに来るそうです。
どうやらまだ大丈夫だったようで、何よりです。

と、このようなことは置いておくとして、景様は段々と書類を読むのに飽きてきているようです。
ここは、私が助け舟を出さなくてはなりません。

「景様。その書類に飽き飽きしていらっしゃいますね？」
「・・・まあな。これ、文字びっしりで、しかも４０枚もあるからな。これ、一体何のためにあるんだ？」

景様は、疲れ切ったといった様子で机に突っ伏します。

・・・実は、これも作戦の１つなのです。

景様は飽きやすく、尚且つ、そうなった時、集中力が散漫になられます。
そして、景様は非常に適当になり、私の言うことでさえ何も考えずにイエスと言います。

つまり、時間を浪費せずにささっとサインをしていただこうというわけです。

それは、詐欺ではないか？

いいえ、それは違います。

メイドは、常にご主人様を見ているのです。
良いところ、悪いところを見つけ、そして常にご主人様の最善とな

るように努力をする。

この場合の最善は、早急にサインをしていただくことです。

決して、私的な感情によってそうしているわけではありません。

「・・・実は、最後の1枚が誓約書となっていて、それにサインをしていただきたいのです」

「何だ、そんなことか。・・・えーと、要は氏名と印鑑か。拇印でいいのか？」

「はい、結構です」

本当は、よくありませんし、住所等も必要なのですが。

景様は、何だかほっとされたようで朱肉を持って来ると、指を押し付け、そしてそのまま捺印をされました。

・・・将来、騙されないようにしていただかないといけないようです。

あっさりとサインをされたことに、一抹の不安を覚えましたがそれはそれとして・・・。

「景様が、その書類にサインをし、私もそれにサインをしたことで、私は有栖　景様の正式なメイドとなったのです。改めまして、本日からよろしくお願いします」

「こっちこそ、また色々迷惑かけるがよろしく。でも、何だか実感が湧かないな」

それもそのはずです。私もまだ実感は湧かないのですから。
加えて、判を捺した所で見える何かが変わるということはありません。
こう、裏で契約や権利関係が動くだけなのです。

契約書を見ている見ている景様を見ていると、まだまだ子供なのだと感じます。
これからも、私がしっかりと支えなくてはなりません。

このようなことを言うと、老けただのばば臭いだの、お前は俺の母親かだの言われてしまいます。

「・・・エリス。お前、少し壊れたんじゃないのか？　今、ずーーーーっとにやにやしていた」

ご主人様の真正面でそのようなことを考えてながら、一瞬視線を外したのが災いしたようです。
伸ばした時間は、その時間なのでしょう。滅多に、景様は言葉を伸ばさない方ですから。

「そういえば、ここ最近のエリスは変わったな」
「具体的にはどこでしょうか？」

「そうだな、俗っぽくなったと言うのか。ここ最近は、それが顕著だな。今のエリスは落ち着いているけど」
「たとえ私がオリジナルとは言えども、月日が経てば変わっていくものです。変化もまた些細なことです」

皆さんは、私の事をオリジナルと呼びます。

しかし、私がオリジナルという証はどこにあるのでしょう？

ある方は、こう言いました。

「それを見つけに、あなたはここから出て行くのよ」と。

また、ある方は、私の悩みを一笑に付して、こう言いました。

「元は１つでも１日でも違う生活をすれば、違う存在になってしまうものだよ。だから、コピーとかオリジナルといったものは厳密にはないね。まあ、オリジナルがいるとしたら・・・・」

最後に、私が通っていた場所にいたある方は言いました。

「私がいないとダメだから行ってあげるくらいの気持ちでいいと思うよ。空にも雨にも境界があるように、人にだってないわけないでしょ。それに、境界線を越えて行けるあなたは私が行くなと言っても行くだろうから」

私は、ロボットですから心はありませんが、景様のことはお慕い申し上げております。

初めからどのメイドにもこの思慕の心はプログラムされており、それは人に危害を加えないという１つの制御装置でもあります。

私たちに盲目的に思慕の念を刷り込み、ご主人様に信頼を寄せるということは、端から決まっていることです。

しかし、初めはプログラムによるものだったかもしれません。盲目

的に思慕の念を刷り込まれていたのかもしれません。
ですが、私たちは疑似感情によってご主人様と過ごす中で、さまざまに変化していきます。
ですから、私はずっと景様の側にいるはずです。
それは、私が景様のメイドであること、そして、何よりもご主人様のことが大切な存在だからに他なりません。
この想いもまた始めから決まっていたことかもしれませんけど。

例え、この気持ちが全て作り物、紛い物であったとしても、どちらかの最期の時まで、私たちは側にずっといるのです。

だから、私たちがいらなくなってもどうか捨てないでください。

しばらく、私と景様の間には沈黙が流れていました。
それは、たぶん景様が私の話した事を理解できず、どう返事をしてよいのか迷っていたからでしょう。

しかし、私もこの場合どうすればよいものかまだ理解していません。ここで洒落の利いたことでも言うことが出来たならば、私はメイドとしてさらに一歩先に行く存在となれるのに。

「あ、そうだ」

そのようなことを1人考えていると突然景様が声をあげ、何やらソファーの背後から両腕で箱を抱えてきました。無駄に大きいですが、一体何が入っているのでしょうか。

「これを、・・・エリスにプレゼントだ」

「退院祝いのようなものですか？」

私がそう言うと、景様は少しの間目を丸くして固まってしまいました。

たとえが・・・悪かったのでしょうか？

私が戻って来たのは、ある種退院と同義と受け止めていたのですが、日本語は難しいです。

しかし、私の思っていたことはどうやら間違っていたようでした。

「自称デートに行った時の買い物だ。中身は・・・・まあ、開けてみれば分かる」

何故、自称という部分を強調されるのでしょうか？

もしかすると、景様はデートではなく、密会をされていたのかもしれません。

人には言えない事があったのかもしれませんね。

それにしても何が入っているのでしょうか？
中身をスキャンすることできますが、それでは何の面白みもありません し、プレゼントをしてくださった景様に悪い気もします。
ですので、そういうものは使わずに開けてみたいと思います。

「これは・・・・」

「エリスが欲しがっていたからな。後で聞いてみたら在庫が他所にあるって言うから取り寄せてもらった」

私の顔は、今どのような表情でしょうか。普段は鏡がなければ見ることさえできませんが、今は何となく分かる気がします。

「私とのデートは楽しかったですか？」
「それだと、何か別の人と行ったみたいな言い方だな。俺は、楽しかったが、エリスはそうでもなかったか？」

そのようなこと・・・、そのようなことがあるはずがありません。
あの子もまた私であるのですから。

「・・・いいえ、とても楽しかったです。それに、このような帽子まで買っていただいて」

彼女は、私とは違う負荷テストに臨んでいました。
プログラムを変更した際にどれほどの負荷がかかるのか。それが彼女の役割。

私は、プログラム自体の負荷実験でした。

この実験の意義は2つ。
1つは、違う体に入っての拒否反応の有無。もう1つは、廃棄後の再利用について。

消えてしまうのではないかという恐怖もありましたが、こうして存在するのですから今は幸せです。
もしかすると、私もまた私でないかもしれませんけど。

良くも悪くも尊い犠牲がなければ、技術は前に進んでいかないのです。

そして、そのおかげもあって私には新しい機能がつくことになりました。
どんな機能かは分かりませんが、故障を防ぐためのものだと聞かされています。

「これで、夏も快適だな」
「はい。あの・・・・また是非外へ連れて行ってください」
「次は、夏休みに入ってからになるかもしれないけどな」

この帽子もきっと何かを残したいと彼女がそう感じたから、ここにあるのでしょう。

景様は、きっとその気持ちを知ることはないはずです。
知らない方が幸せということもあるのですから。

私もまたここ2週間の間、『私』と景様の間に何があったかは知り

ません。
知りたいと思う反面、知ったら怖いという気持ちもあります。
・・・何をしたかさえ、皆目見当もつきませんので。

「あ、そうです。景様にこれを」
私は渡すタイミングをすっかり見失っていたどころか、忘れていたボイスレコーダーを取り出すと、それを景様に差し出します。
「ただのレコーダーと思ってはいけません。何と気分によって色が変わる優れものなのです」
「ふーん・・・」
しかし、私の言うことなど景様の信用に足らないようです。
訝しげに上から見たり、横から見たりしています。
「エリスから貰った物だし大事するな。けど、何に使うんだ?」
「毎日1度は話しかけてみてください。声日記と思えば、よろしいかと」
それに、きっと彼女も喜ぶはずです。その遺した想いを色に託して。
こんな事を言っているのを知られたら、きっと彼女は怒るでしょうね。

私は、死んでない、と。

「なっ！？　なんだ、これ？　いきなり赤く光ってるが・・・」

「何ででしょうね」

彼女は、私が笑っていることに対してきっと怒っているに違いありません。

彼女は、聞くことはできるのですから。

「ちょっと待て！　これはアラートなのか！？　爆発するのか？」

「ただのボイスレコーダーが、爆発するわけありませんよ」

景様はお気づきになるでしょうか。

それには、たった1キロバイトではありますが、元々データが入っているということに。

それに気づく日はいつ来るのか、私は楽しみでなりません。

外伝9：有栖さんちのエリスさん（後書き）

本編後の雑談

『心配事』

加奈「ねえ、三津刃」
甘奈「今、仕事中なんだけど」

加奈「エリス、大丈夫かな。ちゃんと説明できてるかな」
甘奈「大丈夫よ。エリスは1人でやるって言ったんだから」

加奈「あー、それじゃなくてさ。新しい機能つけたでしょ」
甘奈「付けたわね。あれで、故障率が更に下がったはずね」

加奈「あれさ、画期的だとは思うけどさ、副作用あるでしょ？　結局、エリスの副作用って何か分からなかったじゃない」
甘奈「そうね・・・。あれは、作業中に隠している気持ちが反動として表に出るものだから・・・」

加奈「これまでの主人との関係で決まるんだっけ？」
甘奈「そうよ。ドSになったり、淫乱になったり、果ては殺すかもしれないわね」

加奈「ため込んだ気持ちが原因になるんだよね」
甘奈「・・・楽しみね」

加奈「・・・私は、あんたの思考が一番心配だわ」

79話：パーティへの誘い

「景、席確保しておいてくれ。俺が買ってくるから」
「勝手なこと言うな。適当に４００円以下の定食で頼む」

今日は、俺は幸樹ともに学食へやって来ていた。
いつもは弁当の俺だが、今日はその弁当がない。

・・・要するに忘れてしまったわけだ。

エリスから、持って来ましょうか、というメールも着ていたが、それは断固拒否した。
たぶん、エリスのことだから教室まで来るに違いないし、校門まで俺が取りに行ってもいいが、エリスは見た目からして黒髪黒目の標準日本人からかけ離れているため目立つので確実に誰かにはばれてしまう。

最近、ようやくメイドの噂が少なくとも俺の前からは消えつつあるというのに・・・。

ま、文句言っていても仕方がないので、さっさと席を探してしまうか。

幸いにも早く来たことで、空いている席は意外にも多く、俺はその１つに腰掛けると、幸樹が来るのを待つことにした。

しかし、ほんの数分もしないうちにぞろぞろとまるで、アリが巣から這い出て来るように学生がわらわらとやって来る。
学食は安いのが自慢だし、味もそこそこいい。たくさん食べる高校生の財布には、コンビニよりは優しい。
が、肉が多く、野菜が少ないのがどうにも問題だったりする。

「あれ？　1人？」

声のした方を見ると、そこにいたのは明月院さんと、たぶん友人と思われる見た目が派手な女がトレイを持って立っていた。

今時、ヤマンバメイクはないよな・・・。

「いや、幸樹、友人と一緒だ」

あんまり見ていて気分のいいものでもないので、やんわりとお断りする。
だが、明月院さんは、そこの所には滅法疎かったようだ。

「でも、こんな偶然もあるもんだね。ねえ、一緒に食べてもいいかな？」

あれ？　こういう時って断るものだよな。

「俺はいいが、そっちの人はいいのか？」

俺は、もう1人のヤマンバにも一応尋ねた。

頼むから嫌と言ってくれ。

「ああ、別にいいよー。全然いいよ、声かけられるの慣れてるし」
いや、あっさりＯＫしなさんな。知らない男に気軽について行かない方がいいと思うんだ。
「・・・俺、声かけてないんだが」
「いいじゃん、別に。席の１つや２つ減るもんでもないし」
だから、他所に行けって言っているんだ。
「座れば空いた席は減ると思う」
ただ、面と向かってそんなことは言えないのが、悲しい。
対照的に、このヤマンバは人の家に土足で上がり込むようなずうずうしさを持っているようだ。
「ねえ、陽菜。これが、陽菜の新しい友達？　・・・ああ、これ、あの有名な」
「華、やめなよ。有栖君に悪いって」
「・・・メイドのことか」
「あー、ごめん。当ってるけど、今は話に入ってこないでくれる」
・・・何だか馴れ馴れしいな。
全くもって悪びれる様子も見せない所が、さらに腹立たしい。
うざいなどという事を思うくらいに鬱陶しい。
そして、俺の返事など聞くことなく俺の反対側の２席に陣取った。

とりあえず、正面が明月院さんだったことが唯一の救いと言えよう。座る時に、ごめんねと謝ってくれたが、明月院さんが謝ることではないと思う。

それから間もなく幸樹は2人分のトレイを持って戻ってきた

「なあ、景。席は取っておけと言ったが、何かおまけがついてねえか？」

「よかったな、幸樹。華があって」

その言葉に反応した幸樹の顔は、苦笑いだった。

視線の先にいる派手な花を見れば、当然とも言えるが。

幸樹は、少しの間何か考えていたようだが、やがて諦めたように席についた。

それを見計らって明月院さんが、俺たちにそのヤマンバを紹介し始めた。

「あ、そうそう。紹介するね、こっちは、中村　一華　（なかむらかずは）。私の中学時代からの友人です」

「私が紹介に預かった一華でーす。いえーい」

いや、訳分からん。

俺も幸樹もこの女にはついていけずにぽかんとしていた。

華ね・・・。

確かに人目を引く花だよな。けばいけど。

「ああ、そうですか。それはご丁寧にどうも」

「ちょっ、全く関心０！？　陽菜の目が行くのは分かるけど、こっちを向いてよ、ハニー」

「この味噌汁薄っ」

「ああ？　そういうもんだろ。塩分控えめで健康的。いいじゃねえか」

俺も幸樹も示し合わせたかのように無視。

本当に味噌汁が薄く、水を飲んでいるようだから困る。

「あ、そうかそうか。この見た目がいけないのか」

気づいているのかよ。

そう思って、ついそちらを見てしまい、その行動に後悔する。

「私さ、メイクアーティストを目指してるからさあ、こういうのも出来た方がいいかなって」

ばっちり視線があったヤマンバに話しかけられてしまった。

「別に見た目で判断するつもりはないが、第一印象って言葉があるからな」

俺が、興味なさげに返事を寄こすと、別の所から再びちょっかいが入って来る。

「有栖君。それ、思いっきり見た目で判断してる」
「ああ、彼女の言うとおり。全部正しい」
「見た目で判断するのは、よくないね。このメイクの下は意外と可愛いかもよ？」

・・・ええ、全員敵ですか。そうですか。

顔のなければ、どんなに楽なことか。
三者三様の俺を小馬鹿にしたような笑みが無性に腹立たしい。

「ねえ、陽菜。何で、これ探してたのー？」
「えっ、ちょ、ちょっと！？　何で、そこで言うの！？」

「・・・」

1つの会話を続ける気すらないのな。
しかも、俺を指さして「これ」はないと思う。

ただ、俺もこの会話を続ける気もないので、幸樹としばらく会話でもしているか。

「最近、この辺りに不審者がいるらしいぞ。しかも2人。1人は女子に声をかけ回っているという男。もう1人は、裏の高台の公園で歌っているという女だ」
「2人目は不審者か？　ただ歌っているだけなら害もないだろうに。俺も放課後に聞いたことはあるが、悪くないと思うけどな」

「俺は、そこの歌姫の方がいいと思うぞ。まあ、最近部活に顔出してないらしいって専らの噂だけどよ」

「・・・」

いや、本人いるのによく言えるな。

俺は、そっと視線だけ明月院さんに向けると、本人は聞いていなかったようで、こちらを向いてはいなかった。

幸樹も、気づいたようで話を慌ててすり替える。

「てか、美人って得だよな、景。見た目だけでアドバンテージがあるな。野球で言うなら、５０－０でこっちが負けていて、９回２アウトランナー無しって感じになっていると思うぜ」

「意味が分からないし、既に5回でコールド負けしていると思うが。第一、そんな差つくのか？」

「つくぞ、ひどいとこだと１２２点とかバスケ並みに取られることもあるんだぜ。まあ、それはいいとしても、その泥人形みたいな顔どうにかならないのかよ」

が、結局、話を振ってしまうらしい。

「それ無理。大体、何であんたらみたいな馬鹿と下郎の言うことなんか聞かなきゃいけないのさ。それに、自分たちも大概よね」

しかも、ふり方がよくなかったために、相手の反応もすこぶる悪い。

差し詰め俺は、下郎の方だろうか。

ヤマンバは俺たちの事をイケメンではないということを言いたいらしい。

別に、イケメンと思ったことなど1度たりともないが、自分がきもいとわざわざ卑下する気もないので、割とどうでもいい。

しかし、初めて会ったのに言いたいことがこうも分かると、そして何より言っていることがいちいち頭にくるのは、どうにもいただけない。

「さてと、俺もう食べ終わったし先に戻るな」
「おいっ、景。お前、俺を1人でこんなのと置いてく気かっ？」

当然、用もないのでささっと帰らせてもらおう。

「あ、有栖く・・・・」

だが、俺が席から立ち上がった瞬間だった。

「こんにちは、K先輩」

背後から聞き覚えのあるいきなり元気な声をかけられ、振り向くと、そこには見知ったよく似た顔が2つあった。
しかし、ここで会うのは初めてだ。

「何か発音おかしくないか、美玖？　それに・・・紅玲奈か。珍しいな、今日は食堂か」
「・・・違う。今日は、景先輩に用事があって来たの」

「用事？」
「は、はい。実は、これを渡そうと思いまして」

そう言って美玖は、綺麗な便箋を俺に手渡した。
中を見ると、招待状と書かれた紙が入っており、どうやらパーティをするようだった。

「・・・2人の父親の誕生日なのか」
「は、はい・・・。け、景先輩。是非、来ていただけないでしょうか？　明後日ですけど」
「何故、俺なんだ？　俺は、あのおっさんとは仲良くないんだが」
そもそも呼ばれる理由が分からない。
どう好意的に解釈しても、あのおっさんが俺を良く思っているは思えないからだ。
すると、紅玲奈はばっさりと一言で俺の疑問を一刀両断にした。
「・・・メイド。父はメイドが来ればそれでいいと思ってる」
「あのおっさん、ついにどうかしてしまったのか・・・。俺とは気が合わないと思っていたが、いざそうなってしまうと、それはそれで残念だ」
エリスか。
そういえば、以前家に行った時に連れて行ったっけ。
まさか、あのおっさんが一目惚れしているとは思わなかった。
「紫なら喜ぶと思いますけど・・・、い、一応わたしたちの父親なので、困ります。いないといないで、困りますから」
「・・・会社の方ね」
「・・・まあ、嫌いにならないであげてくれ。俺が言うのもおかしいが」

家族にまで見捨てられたら、いくら何でも可哀想だ。既に一応扱いなのが、危険のバロメーターか。

今、俺は遠い目をしているのだろう。
イメージはあるが、どんな目かは知らない。

それはそうと勝手に俺が話を進めてしまったせいだろう。
美玖は、多少怒ったような焦ったような口ぶりで、大げさに身振りを交えて言った。

「ち、違うんです。そういう話じゃなくて・・・」

「それで、本当の理由は？　あのおっさんは、俺の事好きじゃなさそうだし、誕生日にあまり呼びたくない人間だと思うが」

そう。家に初めて遊びに行った日、おっさんは俺の事をずっと睨んでいたな。
まさか、行ったら殺されるとか・・・・はないか。

この2人に限ってそれはないよな。

「実は・・・エリスさんを連れてきてほしいんです。お父様が、お酒に酔ってご友人に『あのメイドロボットは私が貸しているんだ』なんてでまかせを言ったものですから。それに、その会社を傘下に入れてしまったもので、ご友人からだったら見せろと言われて、誕生会で皆さんに見せることになったというわけです」
「それなら、エリスに行ってもらえばいいか？」

できることなら俺は、あの家に、と言うよりあのおっさんと顔をあまり合わせたくない。

エリスは、以前行ったことがあるし、この2人の家だからさほど気にすることはないだろう。

すると、紅玲奈が近くに寄って来て、俺を見上げるとじっと俺の目を言った。

「・・・景先輩は来ないの？」

「俺は・・・・服がない」

正確には、金持ちの家でするようなパーティに着ていく服がだ。

紅玲奈のお願いとあっても、そればかりは仕方無い。

「・・・・」

何故、顔を赤くするんだ？

・・・・・。

・・・・。

まさか・・・・とは思うが、俺の頭ではそれくらいしか思いつかなかった。

「べ、別に普段から裸で過ごしているわけじゃないからな。勘違いしないでくれ」

「・・・・」

それでも、紅玲奈は全く反応は示してくれない。

違ったのか、それとも図星だったのかは分からない。
いや、俺が墓穴を掘った可能性も否定できない。
「紅玲奈？　おーい、何か変な想像してないか？　悪いことは言わない、今ならまだ引き返せるから、戻って来ーい」
完全にどこか遠くへ意識を持っていかれた紅玲奈は、俺の声くらいでは戻ってこないようだ。
美玖が頭にチョップをすると、ようやく異世界から戻って来たようで、ゆっくりとした動作で頭頂部を押さえしゃがみ込む。
それを横目で眺めていた美玖は、やがて１つ溜息をつくと、何だか無理やり笑顔を作って俺に言った。
「つ、つまり・・・正装がなくて、行きたくても行けないということですね。それなら安心してください。そのまま来ていただければ、お貸しします。お友達も誘っても構いませんよ」
「・・・美玖、痛い」
「・・・何か無理させているようで悪いな」
色々な意味で。
「そ、そんなことありませんよ。むしろ、景先輩なら毎日来ていただいても」
「・・・うん」
「それは、遠慮しておく。俺は長生きしたいからな」
こうして仲良くなったはいいが、あの家だけは用がない限りは勘弁願いたい。

人の目は意外と気になるし、家は心休まる場でなくてはならないと思う。

・・・あの家は、敵意と興味の視線が多すぎるからな。

「・・・それは、残念です。では、その招待状を当日必ずお持ちになってください。無いと追い返される可能性も否定できないので」

「・・・無くても、明後日、裏門から来てくれたら応対します」

言ってることが矛盾しているな。どっちが正解なんだ？

俺も迷っているが、2人も迷っているようだ。顔を見合せ、何度か言葉を交わすと、美玖が俺に対して言った。

「そうですね、裏門の方がいいかもしれませんね。表は車を止めている余裕はないでしょうし」

「・・・うん、待ってる」

「分かった、エリスと・・・後は1，2人連れて行くかな。幸樹、お前は行くだろう？」

「別にいいぜ」

後は、この前家に行ったことのある由真でも誘うとするか。あまり知らない人を連れて行っても2人が困惑しそうだ。

「それはそうと明後日の何時からなんだ？」

「夜は家族で過ごすのでお昼の1時から始まる予定です。できれば、10時くらいには来ていただけると助かります。本当は、迎えの者を出したいのですけど、この日ばかりは皆さん、忙しいので」

「歩いて行けない距離でもないし、そこまでしてもらわなくても大丈夫だ」

とは言ったものの、歩くと実は３０分はかかるんじゃないかと思う。たぶん、座る場所くらいあるだろうから、そこで半日過ごせばいいだろう。

「それと、誕生日プレゼント等はいりません。その代わりにエリスさんを連れて来ていただくということでお願いします」

それはよくないと思って聞き返したが、美玖は首を縦に振ることはなかった。

「分かった。それじゃ、また明後日」

「はい、楽しみにしてます。では、また」

「・・・私も楽しみ。バイバイ」

そう言って2人は、学食を後にした。

2人がいなくなったのを、見届けると幸樹がトレイを持って立ち上がり、言った。

「しっかし、景。お前、いつあの子たちを手なずけた？　ついにロリにも目覚めたか。いや、前からだったよな。メイド好きで、マザコン、ゲイ、ロリコン。ほんとに救いようがねえな」

「はあ？　何言って・・・」

そんなでかい声で言ったら・・・。

その俺の危惧は最悪な形で当たってしまった。

「有栖君。そうだったの！？　・・・・・・・それじゃ私勝ち目が」

「そこっ、真面目に受けるな！　・・・と言うよりも、どれを真面目に受け取ったんだ？」

「え？　あ・・・ううん。ほんと、救いようがないよね、・・・・・・・私が」

明月院さんにまで、笑われた！？

しかも、救いようがないって・・・・。

最も笑わないと思っていた人に笑われると堪えるな。

その作り笑いが、今は逆に心に楔を打ち込んできたような気がした。

79話：パーティへの誘い（後書き）

本編後の雑談

『理由』

陽菜「どうして、有栖君は、ゲイなんて呼ばれていたの？」

景「名前のせいだな」

一華「アリス　ゲイ、ｎｉｃｅ　ｇａｙ」

陽菜「このように一文字違うだけで、意味が違うので気をつけましょう」

景「・・・」

８０話：パーティー前の余興　前編

そして、何事もなく当日を迎えた。
あの２人の家に着くのは、時間は多少かかったものの途中までバスがあることを知ったおかげもあって楽が出来た。
それは、よかったのだが・・・。

「なんか、俺ら間違ったとこ来てねえか？」
「あー、あたしもそう思う。雰囲気が違うのよね」

「あの２人に悪意はないと思うんだが、こう見ると違う世界ってあるんだなって思う」
「・・・？」

表門が見えるすぐ近くを横切ったのだが、車が数台横付けされ、そこからテレビで見たことのある政治家や芸能人がしっかりと着飾って車から降りてくるのが見えた。
エリスだけは、よく分かっていないようだったが、このパーティーどう見ても所謂上流階級向けのものだ。

そんな場所へ、俺たちは私服で訪れているのだ。場違いにも程がある。
人は平等と言うが、世の中そんなものは綺麗事だという事をはっきりと示してくれている。
身分差を気にしなくていいのは、上の人間であって下の人間というのはやはり気にしてしまうものなのだろう。
気にすれば、気にし過ぎ、気にしなければずうずうしい。難しいものだ。

更に、裏門という場所へ貫った地図を見ながら歩いて行くと、そこにはガードマンとおぼしき屈強な男が４人と、その間に挟まれて美玖と紫が立っていた。
俺たちが来たのを見て、紫はガードマンの制止を無視してこちらに寄ってきた。

「景先輩、それにみんな、いらっしゃ・・・あれ？　みんな元気ないね？　どうしたの？」

紫は、あれあれと首を傾げながら俺たちを不思議そうに見ている。
本気で気づいていないようだ。
だが、美玖の方はすぐに気が付いたようだった。

「あ、あの・・・本当に無理言ってすみません。皆さんが、ここ場違いだなって感じていらっしゃるのは重々承知しております。でも、わたしや紫は皆さんが来てくださって嬉しいです。できる限り、わたしか紫が相手をしますので心配しないでください」

非常に申し訳ないという気持ちが小さい体いっぱいに表しているが、そこまで恐縮する必要はどこにもないと思う。
どうせ俺や幸樹、由真は場に入り込めば場違いであることなんて忘れるだろうから。

「いや、俺たちが勝手に来た様なものだし、そんなに気にしなくても大丈夫だ。隅っこの方で料理でも食べてれば問題ないだろうし、な？」
「それもそうだよな。ということで気にすんな、俺も景も由真も料理食べに来ただけだしよ。俺なんて朝抜いてきたから腹が減って仕方無い」

「幸樹、あんたね。少し何か胃に入れて来た方が、食べられるのに。あたしは、少し食べてきた」
「まじかよ・・・。俺、馬鹿じゃねえか」
幸樹と由真は、すっかり臨戦態勢らしい。すぐにでも、食事に向かいそうだ。
だが、俺は、しっかり朝を食べて来たので、あまりお腹は空いていない。
それに俺は、ああは言ったもののパーティーの料理にあまり興味はなかったりする。
美玖も紫もホストの家族だ。俺たちという特定のビジターばかりに構っている余裕はあるまい。
加えてエリスは、今日は四条畷家のメイドとして振る舞うだろうから、たぶん側にいることはないだろう。
「た、たくさん時間もありますから、休憩しつつ食べてください」
「どうせ食べない人も多いから好きに食べてよ。捨てると面倒だし。持って帰るなら包むよ？」
「おっ、なら適当に貰って帰るか。あ、言っておくが、これは私利私欲ではないぞ。あくまで、捨てるのがもったいないというエコ精神からだ」
「幸樹、お前って奴は・・・。素直に食べたいって言えばいいのに」
「あたしも同感」
ま、幸樹と由真について回ればいいか。さすがに1人でいるには辛

い場所だろうし。
そう思いつつ、俺は友人らと共に、家へと案内されたのだった。

相変わらず異空間のような家の中ではあるが、今日は相当忙しいのだろう。
生活臭さえ感じさせなかった家とは思えないくらい、お手伝いさんやらボーイやらが走り回っている。

既に、到着している客を客間に案内したり、荷物を運んだりと大変そうだ。
こういう時、時間を守るのはいいが早く来すぎて迷惑になるという悪い例なのだろう。
ただでさえ準備が忙しいのに、余計な手間が増えるのだから。

そんな悪い人間代表の俺たちは、ある部屋へと案内されていた。

前に遊びに来た部屋よりは狭いがそれでも俺の部屋よりも断然広い。
また以前来たときに入った部屋とは違って、どこか生活臭がするというのか、どうにもここは落ち着かない。そもそもこの家自体が落ち着かないが、ここはまた別格だ。
1メートルほどのぬいぐるみが、部屋に入るとお出迎え。
目立つせいでたくさんあるように思ってしまったが、ぬいぐるみはそれだけだった。
テラスには所狭しと植物が植えられており、小奇麗な本棚には分厚

い本がびっしりと並んでいる。
タイトルを見る限りでは、主に植物の育て方や庭造りの本がちらほらと見える。

ぼけっとそんなことを考えていると、同じように部屋をきょろきょろと見回していた由真が美玖に尋ねる。

「ねえ、美玖？　ここってさ、もしかして、美玖か紫の部屋なわけ？」
「は、はい。他に空いている部屋というのがそうないもので。一応女の子の部屋なので、変な所を開けたりしないでくださいね」

美玖の視線の先はもちろん俺と幸樹。
それは、確実に俺たちに対する忠告だろう。

開く気もない俺と幸樹は、分かったと了承の意を示した。
もし、開けたら・・・・、どうなるかは想像に難くない。

とりあえず、ここにいる女子3人と関わることは2度とないだろう。
もしかすると、異性どころか全ての知り合いと関わりが無くなるかもしれないが。

美玖の忠告が終わると、それを見計らったかのようにコンコンとノックの音が聞こえた。
どうぞと美玖が言うと、1人のメイドが3組ほどの服を持って中へ入って来た。

「失礼します。お嬢様、頼まれた物をお持ちしました」
「ありがとう。きちんと手はず通りお願いね」

「はい。それでは後ほど」

メイドは、美玖と紫にそれらの服を渡すと、一礼をするとささっと部屋から立ち去って行った。

そういえば、あのメイドさん。確か長良さんだったと思うが、何故俺を見て笑ったのだろう？

少し考えてみるが、何も答えが出ないので諦めることにした。

「では、こちらを召してみてください。無難そうな物を選んでありますから」

そう言って美玖は、俺たち1人1人にそれぞれのための服を渡した。由真だけは、女なので俺たちとは違いドレスだったが、果たして似合うのだろうかと、ふと思った。

「景、あんた顔に出てる。・・・まあ、あたしもこういうのが似合うとも思わないけど、着たら幸樹共々きちんと褒めなさいよ」

馬子にも衣装などとは、俺も同様なので言うことはできない。

濃いグリーンのドレスは、由真にしては落ち着きすぎの感もあるが、主役はあのおっさんだから目立たない方がいいと判断してのことだろう。

「それじゃ、由真先輩はこっちで着替えて。ボクは2人を隣の部屋に案内してくるから」

それから、俺と幸樹は隣の部屋に案内されていた。
ここは、紫の部屋らしい。
部屋内に男2人だけ残していくというのもどうかと思うが、一応信頼してくれているということか。
だが、それよりも俺には身近な所に問題を抱えて悩んでいた。
「・・・なあ、幸樹。俺の服サイズが合っていないんだが」
ぶかぶかのズボンを押さえながら俺は言った。
対照的に幸樹のは、サイズもちょうどいいようだ。
声をかけられた幸樹は、何とも締まらない俺の格好に、幸樹はぶっと吹き出した。
「んあ？　くっ、ぷっくくっ・・・・・」
「・・・」
そして、ひとしきり笑いきると、まだ息が苦しそうに言った。
「そのまま行けばいいんじゃねえか？　話題は全てお前のものだろうな」
「行ったらそのまま俺は違う世界に逝ってしまいそうだ」
結局、俺は元の服のまま。

文句を言おうにも美玖の部屋は立ち入り禁止。
通り過ぎるこの家の人からは不審者を見るような目で見られる始末。
別に覗いているわけではないが、着替え中につき立ち入り禁止と書かれた部屋の前で男がうろうろしていればそれはもう立派な不審者だ。
そのことに文句は言えない。

それから１０分ほど経ってから部屋から出てきた由真たちは、いきなり俺がいたことに驚いていた。
が、美玖と紫は俺がまだ着替えていないことにも驚いているようだった。

「景。何であんた、そんなに機嫌が悪そうなの？」
「そう見えるか。別にいいんだ。俺は覗き魔扱いされたって構わない。無実だということは俺だけが知っているんだからな」

皆、よく分からないといった風だったが、俺もどうでもよかった。
俺も言っていることがよく分かっていないのだから。
唯一、事情を知っている幸樹だけは、また笑っていた。

とりあえず、幸樹のことは無視して俺は美玖に尋ねる。

「これ、サイズが合わなくて着れないんだ。一体、誰のと間違ったんだ？」

すると、美玖は紫と顔を合わせると、

「ふふふっ」
「くすくす」

思わず笑ってしまったといった様子で、少しだけ声を上げて笑った。

「2人は何か楽しそうだな」

俺は困っているのだが、用意した2人が笑っていると少しばかり嫌味も言いたくなってしまう。

用意させた俺が悪いのかもしれないが・・・。

多少イライラした気持ちが、俺の顔に出ていたようで美玖は、バツの悪そうな顔をして携帯を電話を取り出して、誰かを呼びだしながら言った。

「い、いえ・・・。もしかすると、間違った物をメイドが持って来たのかもしれません。すぐに持って来させます。寿々林先輩と上総野先輩はここで待っていてもお暇でしょうし、私の部屋でくつろいでいてください。飲み物と軽食も用意しておきますので、ゆっくり、してください」

それに対して幸樹は、間髪入れることなく答える。

「別に景の着替えくらい待ってたってそんなに時間もかかんねえだろ。俺は待・・・」

「ああ、分かった、分かった。あたしらはお言葉に甘えておくとするよ」

由真は、幸樹の背中を押すと美玖の部屋へと押し込んで、自分も部屋の中へと入って行った。

「・・・気を使わせちゃったかな？」

「そうかもね。あとで、わたしが謝っておくね」

それを見て、美玖と紫は顔を見合せて苦笑していた。
何に笑っているのかは俺には分からないが、あの2人が実は・・・
なんてことを思っているのかもしれない。

今は違うだろうが、いずれはあり得るかもしれない。

そんなことをふと妄想していると、メイドの長良さんが1着の服を
持ってこちらへやって来た。

「お嬢様。私の不手際でご迷惑をおかけしたようで、申し訳ありま
せん」
「わたしに謝られても・・・」

美玖が俺を見て困惑したように言う。
すると、長良さんは俺の方へ姿勢よく歩いて来ると、その手にあっ
た服を俺に差し出した。

「こちらが、有栖様に用意されたものです。先程のは、こちらの不
手際のようです。大変失礼したしました」
「いや、別に気にしないでください」

ただ、こんな服を誰が着る予定だったのか気になるだけだから。

俺の言葉に、長良さんは一瞬だけきょとんとしていたが、すぐに大
人の余裕なのかふふっと笑った。

「そう言っていただけると助かります。あまり失敗ばかりするとお
給金に響くんですよ。あ、お譲様たちは、いい加減そろそろ着替え

てください！　お客様も見える時間も近いですし、それにまだ見せていないではないですか」

俺に対する態度とは違って、美玖と紫には自分の子供を急かすように言うあたり、客と主人に対する態度の使い分けはしっかりとするようだ。

が、それを当の本人の前で見せているのでは全く意味を成さない。

案の定と言うべきか、美玖も紫もあまり長良さんの話を聞いていないようだった。

少しだけちらりと横目で見るだけで、後は俺の方に向いて話を続ける。

「景先輩、ボクの部屋に服は置いていて構わないよ。何もかかっていないハンガーが１０個くらいあったでしょ。あれにかけておいて」

「着替え終わりましたら、わたしの部屋でくつろいでいてください。その頃には、ちょっとしたものが用意されていると思いますので」

何とも至れり尽くせりといった風だが、エリスを連れてきただけでこれほど歓待されると、逆にこちらが恐縮してしまう。

「なあ、美玖？　紫？　男である俺を部屋に上げて気にならないのか？」

「別に？　景先輩がボクの下着とか服とか趣味その他に興味があるってなら話は別だし、なにかするって言うなら監視をつけてもいいけど」

「はい。わたしは景先輩を信頼していますので。なにをされるのかじっくり拝見しましょうか？」

２人の返答に俺は、その顔をもう１度見返した。

言った本人は、にやにや笑ってただ黙ったままだ。

「・・・この家には男の着替えに興味のある奴がいるのか」

「ふふっ、さあ、どうだろうね。少なくともボクは興味あるよ。なんだったら一緒に着替える？」

「そんなことしたら、紫もわたしも襲われちゃったりして。でも、ダメですよ。そんなことしたら、景先輩、社会的に抹殺されます」

冗談めかして言うせいか、2人とも何だかとても楽しそうだ。

紫はともかく美玖までこう悪ノリをするとは何とも意外に思えた。

「はいはい。そういうことは冗談で言わない方がいい。あんまり言われると俺が勘違いするからな」

勘違いは日常茶飯事のことで、美玖たちの言葉を真に受けるのもまた悪くないと俺は思っていた。

冗談を言うくらいだし、少なくともこちらに悪い感情を持ってはいないだろうから。

もう1度言ってきたら、今度はこちらから冗談を言ってやろう。

―けい君に、わたしのとっておきをあげるね―

不意に頭の中にこんなフレーズが浮かんできた。

「それに、そういうことは、とっておきの時に言うと、効果抜群ら

しい」

そういえば、あれはあの子の言葉だったっけな。
口にしてからそう思った。

「とっておき、か。確かに何度も言っていたら効果ないよね。つまり、ギャップが必要ってことだね」

「でも、取り置き過ぎて、腐ってしまっても意味がないですよね」
「・・・・」

とって置き過ぎて、フレーズが腐ったみたいだ。

やはり幼稚園時代の言葉は現代に通用しないようだ。

８０話：パーティー前の余興　前編（後書き）

先日（１１月１８日）に感想を下さった回路焼付機さんへ。

理系の女性は少なく、開発者が女性ばかりは不自然のとのことですが、ご指摘ありがとうございます。
あまり調べずに書いたのでこうなりました。女性型ロボットなんだから開発にも女性がいるべきだろうと深く考えずに3人ほど登場させました。

好意的に他の社員は皆男性だと思っていただければ、圧倒的に男が多いという人数比に問題はないと思うので、そう思っていただければ幸いです。

81話：パーティー前の余興　後編

「ここで少し待っていてください。折角なので、最初にお見せします」

美玖がそう言って紫とどこかへ着替えに行ってから15分くらいは経っただろうか。

俺は、着替えるのに5分もかからず、こうして部屋にあった椅子に腰かけてぼんやりと部屋を眺めていた。

紫の部屋は、美玖の部屋に比べ質素なのだが、あまり統一性といったものは感じられない。

たぶん、人格がいくつかあるため、互いの好みを折衷してこうなっているのだろう。

本棚には、動物の飼い方や、星占いの本、危ないタイトルのもの、絵本とバラエティに富んでいる。

その隣には、何に使うのかホワイトボードが置いてあった。

ただ、あまりじろじろと見るのも憚られるのも事実であり、俺は目を閉じて椅子に深く寄りかかった。

そういえば最初と言ったが、メイドが一緒なんだから最初に見るのはメイドか、それかお互いということになると思ったが、それを言ったらたぶん野暮というものなのだろうな。

そう思っていると、部屋の扉をコンコンと叩く音が聞こえて、俺の返事を聞くことなくその扉が開き、そこから紫が顔を覗かせた。

「もう着替え終わった？」
「着替え終わってなかったらどうするつもりだったんだ・・・？」
そう言って2人に視線をやると俺は、はっと息を呑んでそのままアホみたいに固まっていた。

「えへへ、どうかなー？」
「あ、あの・・・どうでしょうか？」

「・・・綺麗だな」

思わず口にしてしまうほどに2人とも綺麗だった。

美玖のドレスは、つやつやした光沢のある素材を使った物で、露出こそ少なめではあるが、そのためか体のラインが色っぽく見える。
いつもはピンで留めてある髪は、ストレートにしており、少しばかり大人になったような気がした。

紫のドレスも美玖とは、どこかデザインが違うものだった。
どういう服なのか聞いて見ると、アメリカンスリーブワンピースというものらしい。
肩の露出が激しいので、これに後で1枚ほどショールを羽織るか考えているとのことだ。

こうして見ると、制服の時とは違って2人のスタイルの違いが際立っていることが分かる。
特に・・・。

「痛っ！？」
「なんか美玖にやらしい視線を感じた。ボクには憐みの視線を感じた」
紫に思いきり足を踏まれ、一瞬星が見えたような気がした。
ヒールの踵は勘弁してほしい。一点集中がこれほどの威力を持っているとは・・・。
痛みにのた打ち回りたいが、借りた服の手前そんなことできるわけもない。
しばらく俺は、踏まれた足を手で押さえたまま固まっていた。
そんな俺の様子を見て、紫は哀れに思ったのだろうか、俺と視線が同じくらいまでしゃがんで、俺の顔を正面に見据えて言った。
「でも、許してあげるよ。ドレスなんて、見られてなんぼだからね。無視されたんじゃ、着る意味もないでしょ。不躾に胸元ばかり見るのは感心しないけど」
「以後、気をつけます」
つい本能のままに見てしまったが、よくよく考えたらあまりにまずい行為だった。
頭のどこかには残るだろうが、今は忘れたことにしておこう。
「よろしい・・・って、何でボクに敬語？」
「何となく使うべきだろうと思って」
許してもらえてほっとしたからとは言えまい。
これ以上、この話を蒸し返したくはないのだ。

だが、俺の思いとは裏腹に紫は何だかまだ気にしている様子だ。
「でもさ、ボクも思うんだよね」
「・・・？」
「どうして双子なのにここまで差があるのかって」
そう言って、紫は自分の断崖絶壁に手を当てる。
また、視線が・・・。
情けなくて仕方がない。
「ボクと美玖って、双子だし顔とかは結構似てるって言われるんだよね。昔は、みんな、ボクと美玖と間違えていたけど、今は間違える人はいなくなったよ」
「髪型で分かるからな」
とりあえず、無難な答えを言ってみる。
が、紫は能面のような無表情で、冷めたように答える。
「景先輩、今更模範解答を言っても遅いよ。答えは、胸。ムッツリーな景先輩が見ていた場所だよ」
「・・・随分と気にしているんだな」
「そりゃねえ。だって、双子でこんな格差社会はないと思うんだ」
紫は、比較のためか美玖の隣に再び並んで立った。

今度は胸を見ないように、顔だけをじっと見つめることにした。
「わ、わたしだって好きで大きくなったわけじゃないんです」
「景先輩。努力は分かるけど、あまりじっと見つめられると・・・恥ずかしいかな」
「・・・ごめん」
今度は、今度で逆効果らしい。
一体、どうしろというのか・・・。
「気にしないでいいよ。それで、ボクも努力をしたんだ。でも、キャベツは効果ないし。牛乳はボク嫌いなんだよね」
「す、好き嫌いは良くないよ。お母様も好き嫌いをすると成長しないと言ってるよ」
「・・・要するに、牛乳を飲んだか飲んでいないかの差か」
それだけで、こうも差が出るとはそれはそれで興味深い話だ。
「そうかもね。うちの牛乳アメリカ産なんだけど、何か牛乳を出やすくするためにホルモンを混ぜていて、それが人の胸にも作用するから大きくなるらしいよ。牛も人も変わらないってことだね。でも、ボクも少しずつ成長しているからね、格差は確実に縮まっているんだ」
最後の言葉は何となくだが、自分に言い聞かせているような気がした。
これは、単に負け惜しみというものなのだろう。

でも、事実だとしたら成長しないはずの物が無理に成長しているわけだし、何だか可哀想な気もする。
胸が大きいというのも案外考えものなのかもしれないな。
そう思っていると、牛と言われたことが頭に来たのか美玖が紫に対して猛抗議していた。

「わ、わたしは牛じゃないです。ゆ、ゆ、紫！！」

「でも、ボクから見れば、乳牛と変わりないんだけど？　ホルスタイン？　ジャージー？　エアシャー？」

怒る美玖と、馬鹿にしたように冷静に美玖を見る紫。
そこに姉としての威厳などなく、これだとどちらが姉なのか不明だ。
ただ、ここは美玖が劣勢なので助けてあげるべきだろう。

「どれも同じだろうに。飲めれば一緒だろう？」

牛の名前なんて知らないし、牛乳の味の違いも知らないからな。
すると、紫ではなく何故か美玖が普段のゆっくりした動作からは想像できないほどの速さで俺の方に顔を向けた。
目には少しばかり涙が浮かんでおり、その表情は軽蔑と羞恥の入り混じったもののようだった。

「け、け、景先輩のエッチ！」

突然のことに俺は戸惑いを隠せなかった。

今までのことで言われるのは分かる。
が、何故このタイミングなのか。
「はあ？　いや、牛乳の話なんだが・・・。何故そうなる？」
「え、あ、あの・・・き、聞かないでください！」
何かとてつもなく大きな地雷を美玖は踏んでしまったようだ。
ついでに紫が、とてもよい笑顔を浮かべていたが、とりあえず何もしないように言っておいた。
これ以上言うと、あまりに美玖が色々と可哀想だ。
「ま、不自然なことにはそれなりの理由があったってことでお開きにするか」
適当な事を言ってこの話を終わらせようとするが、そんなうまくいくはずもない。
「ふーん、ボクたちのこと、そういう風に見てたんだー？　格差社会って身近にあるんだー、なんて思った？」
「思ってない、思ってない。でも、２人じゃなかったらそんな小さな格差、気にも留めないと思う」
半ば開き直ったかのように俺は言ってしまった。
「「・・・」」
・・・あれ？　一応フォローを加えたつもりなのだが、部屋の空気

が何だかおかしいことになってしまった。
押し黙って俯く2人を見て、俺は少し焦っていた。
「・・・それはいいとして、どこかの乳牛扱いの妹よりはましだと思うが」
そして、話題を強引に元に戻す。
すると、再び部屋の空気が元の不自然な対立軸を持ったものへと戻って行く。
「あっ、そうそう。紫は、わたしを何だと思っているの？」
「ちょっ！？　ね、ねえ・・・何で話を元に戻すかなー？」
紫が美玖に詰め寄られ、俺に恨みがましい目を向けている。
「それじゃ、後はゆっくり2人だけで話をするといい。俺は先に行っているから」
当然、俺は軽く受け流した。真面目に受け取ると怖いからな。
部屋の空気も元通り。
やっぱり暗く重い雰囲気は2人には合わないよな。
・・・ごめん。
俺は、心の中で紫に合掌した。

しかし、こんなことで紫が逃がしてくれるわけはない。

「け、景先輩っ！　1人で逃げるなんてずるいよ！　こうなったら一蓮托生、墓場までついて行くよ」

「そんなレベルの話になったのか・・・。悪霊だな、もう」

きちんと祟られる前にお祓いを受けておけばよかったな。

皮肉な事に目の前にいる本人から以前勧められたことがあるのもまた因果だろうか。

「悪霊なんて失礼しちゃうな。そもそも景先輩がじろじろ美玖の胸をいやらしい目で見たのが原因なんだから。・・・・責任を取ってよ。だいたい、どの牛も美玖も乳も一緒だって言ってたし」

「いや、最後のは言ってない。・・・・それはそうとして。美玖、ごめんな。事情を知らなかったとは言えど、今回の件は俺が悪い。これからはそういう目で見ないと約束する」

「あ、あの・・・謝ってもらえるのはいいんですけど、何故かとても複雑な気分がします」

何故、美玖は複雑そうな顔をしているだろうか？

誠意が足りないのか、それとも他に原因があるのか。

とりあえず、様子を見た方がいいか。

「・・・。そうだな、話を別の話題にしてみようか。2人の父親ってどんな会社を経営しているんだ？」

とてもアホな事を聞いてしまったとは思うが、実際知らないことだし興味もあった。
後は、美玖をよく観察するしかない。明らかに表情に出ていたら、もう1回謝ろう。

そう思い、美玖の顔色を窺う。

「あ、あの・・・知りませんか？」

当の本人は怒っていないようだが、目を丸くしてとても驚いていた。
まるで信じられないものでも見たかのように。

また墓穴掘ったのか？　まるで知っているのが当たり前と言わんばかりだ。

「・・・何となく金持ちって言うのは分かる。けど、四条畷なんて会社聞いたことないな」

すると、紫が納得したようにパンと手を打つと、部屋の隅からホワイトボードを持って来て、何か図を書き始めた。

・・・普段は、何に使うんだろうか？

「ああ、それじゃあ分からないよね。んーとね、うちの会社は、主に鉄鋼などの金属を、産出、輸入から加工、製品化までを行っているの。地下鉄とか飛行機、戦車や戦闘機も手掛けているんだよ。ただ、これだけに飽き足らず新しい事業としてロボット産業にも参入したんだけどいまいちで、今流行りの企業買収ってわけ。ただ、敵対的買収ってわけじゃないよ。創業した頃からの付き合いらしいし」

ホワイトボードには、色々な部門の名前がびっしりと書いてある。
とりあえず読んでみようと思うが、3行読んで飽きてしまった。

「はあ、要するに色んな事をやっているわけだ」

自分が聞いたにも関わらず、あまり興味がなかったりする。
美玖と紫が、嬉しそうな顔をしていることだけが唯一の救いだろうか。

「はい。父は、四条重工の取締役社長ということになっています。例外は色々ありますけど、簡単に言うとその会社で一番偉い人ということです。祖父が会長ですけど、権限は何もありませんし。あと、もうお分かりとは思いますけど、会社名は名字の一部を取っています」

何だろう、美玖に少しばかり馬鹿にされているように思えるのは考え過ぎか？
さすがに社長がどういうものかということくらい俺だって知っている。

だが、四条重工なんて聞いたこともない。
話を聞く限り、その辺りの中小企業ではなさそうなんだが・・・。

「なあ、知らないのって珍しいのか？」

「うん、珍しいよ。それはいいとして、一族経営しているのは、売上の規模が業界でも最大の重工くらいで、あとの薬品、フーズ、あと・・・その他は昔から外部の人が経営してるよ」

そこまではっきりと言うということは、逆に知らない俺はおかしい

ということか。
でも、名前が書いていあるわけではないし、知らなくておかしいというわけでもないはずだ。
そう内心で言い訳をしてみる。
・・・そういや、一族経営とか言っていたが、祖父、父と来たら、子に受け継がれるのだろう。
「ということは、将来は2人が社長になることもあるのか」
目の前の2人からはあまり想像できないが、将来どうなるかなんて分からないしな。
「あー、それはないね。だって、将来はどうか知らないけど、なかなか女性に従うのって難しいんじゃないかなって、あの親父も言ってたし。あ、そうだ。ボクの婿になってみない？　きっと社長だよ？」
「いや、それ目当てに結婚したくはないな。第一、あのおっさんと仲良くできる自信がない」
紫と結婚や付き合うことが仮にあったとしよう。万が一あったと仮定して考えてみよう。
あのおっさんが介入してくるのは目に見えている。
下手をしたら殴り合い。下手をしなくても口論が続くに違いない。
ま、そもそもの前提条件があり得ないからいいか。
「それもそうだね。それじゃ、ボクが嫁入りしてあげるよ。こう見

えて家事は得意だよ」
紫も悪戯っぽくウィンクを1つする。
これは、冗談だな。少しばかり残念な気もするが、俺は適当な愛想笑いを浮かべて言葉を返す。
「そりゃ楽しみだ」
「うんうん。楽しみにしててよ。子供はマリア・テレジアくらいは欲しいかな」
「えっ！？　ゆ、紫・・・ダメ。・・・・子供は何人とか早いよ」
美玖は紫の話が冗談と分かっていないようだ。
しかし、マリア・テレジア。どこの外人だ、それは？
俺にはさっぱり分からないが、話から察するに子沢山だったのだろう。
ただ、何となくそう思った。
「そうか。なら、来年迎えに行くから待っててくれ。子供は結婚してから考えような」
「・・・」
ボンッといった擬音が聞こえそうなくらいに、紫は急激に顔を赤くしていた。
「冗談だ。紫は、いざ言われると打たれ弱いんだな」

「ううっ」

紫は、何だか悔しそうな残念そうなそんな顔をしていた。

そしてそのまま黙ってしまった紫に代わって美玖が不満げな様子を見せていた。

「むう・・・。景先輩はわたしのことは胸だけ扱いのままですか？
フォローは無しですか？」

「美玖には美玖のいい所がある。色んな人がそのうち気づいてくれるさ」

エリスが、そういえば胸が飾りというか取れると言っていたことを思い出したが、それは何となく口にするのは憚られた。

人の胸は流石に取れないと思うし、言ったら確実に引かれる。

美玖は、マスコットみたいで可愛らしいし、近くで愛でていたいタイプだ。

ただ、これはいい所と言うよりも、俺個人の感想なんだよな・・・。

「景先輩は、女心と世界史をもっと勉強した方がいいと思います」

明確な答えを示さなかったせいで、更にむっとした顔で美玖にそう言われてしまった。

世界史と女心。

どちらも難しいな。

81話：パーティー前の余興　後編（後書き）

本編後の雑談

『打ち切り』

希望「打ち切りって怖いよねー」
衣「？　希望さんは、打ち切りの経験がおありで？」

希望「私ね、昔校内新聞に漫画描いて載せていたんだけど、不評で3回で終わらされちゃって・・・」
衣「一体、どのような内容だったかしら？」

希望「・・・言わせるんだ。生徒会長密着4コマ。3週で打ち切りだったんだよー」
衣「あら、あの下種な漫画」

希望「報道が権力に屈するなんて・・・」
衣「あら、報道は面白半分でするものではないわ。権力は、そこを是正したに過ぎません」

希望「恣意的検閲に断固抗議する！」
衣「あれは、プライバシーですもの。同じ事をまたしたら問答無用で潰します。ここは学校という特殊社会ということをお忘れなく」

景「・・・ケンカしてないで仕事してください」

82話：パーティーは小休止

パーティー会場に着いた俺たちは、一言も喋ることなくただただ口をポカンと開けて唖然としていた。

そこには、明らかに住んでいる世界が違うと思われる着飾った人間が、嫌でも視界に飛び込んでくるほどにいた。

だが、幸樹たちはすぐに慣れてしまったようで、さっさと食事をしに行ってしまっていた。

エリスの姿も確認はできたが、すぐに多くの人に囲まれてしまって、その後はどこに行ったかさえ分からなくなってしまった。

美玖や紫は、次々に声をかけられており、俺に構っている余裕などどこにもなかった。

誕生日って祝ってもらうものじゃないんだな・・・。

家族総出で来賓の相手をするのは、パーティーを開いた者の宿命か。

俺や恵麻の誕生日でさえ、祝われるというよりも食事をよそったり、飲み物をついでいたくらいだしな。

ただ、このパーティーはそれとはまた毛色の違ったものだった。

人、場所が華やか過ぎて目が痛い。

少なくとも俺がこんなパーティーを開く日は来ないだろう。

そして、このような場所で1人になった俺はさながら砂漠に捨てられた人間のようだ。

することもなくぼんやりと端の方で、適当に食事をしているといきなりフランクに俺に話しかけてきた人がいたのだ。

「やあ、有栖　景君。隣いいかな？」

「・・・どちら様？」

何となく俺が丁寧にそう問うと、その話しかけてきた中年の男は、そうだそうだと笑ってから俺に1枚の名刺を差し出した。

「はじめまして、有栖　景君。私がハンドメイデン社社長の伊南圭司　（いな　けいじ）だ。伊南さんとでも呼んでくれ。君のことは、エリス君から聞いているよ。とてもよいご主人様だと」

・・・この人が、メイドロボット会社の社長なのか。

だが、まず思ったことは、この人がメイドロボットを作ったのかという感心よりもむしろこちらの訂正を入れるのが先だろう。

「・・・ご主人様じゃなくて、家族です。・・・・・あれほど、どこかしこでもご主人様とか言うなと言っておいたのに」

たぶん、俺を知っていてエリスの話を聞いた人は皆、そう呼ばせていると誤解するだろう。

ああ・・・頭が痛い。

「否定する必要はないさ。君はどう考えてもご主人様だ。ご主人様、いい響きじゃないか」

「・・・あまりそれ言わないでくれます？　何か伊南さんに言われ

ているようで気持ち悪いです」

エリスに言われるなら百歩譲って許せても、このよく分からないおっさんに言われると体中に鳥肌が立って来る。

伊南さんは、僕もそう思うよと心からの同意を示すかのように力強く頷いた。

「私も残念ながら『ご主人様』と呼ぶ趣味はなくてね。やはり、君とは分かり合えそうだ」

「・・・」

変な人に会ってしまった。

気さくに近づいてくる人間は、疑ってかからないといけないな。

「そ、そんなに警戒しないでくれ。別に怪しい者じゃない」

「怪しい人に限ってそう言いますね。と、それはどうでもいいんだった」

別に不審者認定するのは俺だけでいいのであって、相手に伝える必要性は皆無だ。

第一、この場で俺が騒いだところで、誰が聞いてくれようか。

そもそもこのような祝いの席で騒ぐのは無粋だろう。それが例え好きではない人間のものであっても。

「ふむ、君は何故私がメイドロボットを作ったか聞きたいと見える」

「いや、何も言ってな・・・」

マテ、話をサッサと進めるナ。

突然のことに、俺は混乱して思考が正しくできずにいた。

正しくは、反応が出来ていないと言うべきか。

「それは私の趣味だからだ」

「・・・随分、きっぱりと言いますね」

聞いてもいないことをべらべらと。

しかも誇らしげに。

「そうだね。しかし、ただ好きだ。それだけでは、ただのメイド好きに過ぎない。残念なことに世界中を見て回った私の中に最高のメイドはいなかった。そこで、私が作ってしまえばいいと考えた。それが、今のハンドメイデン社だ。たぶん、ほぼ全員が私に騙されて入社しているだろうね」

わはは、と豪快に笑うこのおっさんは、立派な詐欺師なのだろう。

とてもいい笑顔だ。

何故か、俺は騙されたという部分が釈然としないが。

皆、好きで入ったからこそメイドが完成したのだと俺は思う。

「何もしない一般人よりも、何かを成し遂げたキモオタの方が世の中に大きく貢献しているわけだ。私は反骨心の塊なもんでね、いつか馬鹿にしてた奴らを見返してやろうと企んでいたわけさ」

「別に、キモオタっていう外見じゃないと思いますが？」

向こうも分かっているだろうから言わないが、メイドロボットを作ってもメイドの時点で馬鹿にする奴は馬鹿にするだろう。

それに、このおっさんはきっと昔からモテたんじゃないかと俺は思っていた。

たぶん、３０代と思われるが、なかなか野性味溢れる顔つきだ。見た目だけなら、こういう大人になりたいものだ。見た目だけなら。

・・・いや、夢を叶えたことが羨ましいんだろうな。

「まあ、私は挙動がキモイって言われていてね。その上、話すことがメイドのことばかり。そりゃ相手は引くね」

「まあ、想像に難くはないですね」

そりゃメイドの話をしてきて相手がそれに乗ってくれることなどほぼ０に等しいだろうからな。

家にメイドロボットがいる俺でさえ、学校じゃ一切その話はしない。

俺にメリットなど１つもないからだ。喜ぶのは精々希望先輩くらいだろう。

「まずは、日本のメイドはメイドじゃないという話に始まり、メイドとはいう個人的概念論、メイドに備わっているべき小道具・・・」

「あ、もういいです。たぶん、それは挙動じゃなくてその話しが長引くのが嫌で避けていたんだと思います」

俺が、話を切ると伊南さんはつまらなそうに話をするのをやめた。

だが、すぐに思い出したように話を再開した。

「私が言いたいのはメイドには必要な物は従順さということなんだ。特にロボットともなれば力も強いし、そのせいで人を殺してしまうようなことがあってはならない。主人の最期の時まで共にある。そ

れが私の考えるメイドの究極の理想かもしれない」

「・・・メイドが好きなんですね」

俺が言葉を選んでそう言うと、伊南さんもまた少しばかり自分を振り返ったかのように言葉を発した。

「あー、変な話をして済まないね。ここから君に言いたいことなんだ」

どうやら、これまでのは余興らしい。自分の過去が本題だったら既に俺はここにいないだろうし。

「私はある友人に約束したのだよ。必ずメイドロボットを作り上げて、大々的に発表すると。エリス君をプレゼントするというのは、彼に期待させる一環に過ぎない。ま、彼から今のところ連絡はないから知っているかどうかは分からないが」

ほんの少しだけだったが、伊南さんの表情が憂いを帯びた。連絡がないとは薄情だなとも思ったが、海外にでもいたらたぶんこのニュースは知らないだろうし、知っていても連絡しづらいのかもしれない。

「その人は今何を？」

「彼と相模と私の３人は高校時代に知り合った仲間で、その時彼が絵にしたものが今のエリス君だ。彼は私の小学校時代の親友で、唯一私の趣味を理解し、語り合った仲だ。しかし、彼は、高校を卒業すると同時に道を違えたんだ」

「どこか違う学部にでも行ったんですか？」

興味本位で俺はさらに質問を重ねた。
すると、気を良くしたのか伊南さんは、聞いてもいないことまで話し始めた。

「いや、彼はデキ婚をしてしまったんだ。推測するに君と同じくらいの年齢だろうね。生活がかかっていたみたいで、夢をあきらめざるを得なかったそうだ」

「・・・」

想像の斜め上を行く答えに俺は言葉を失った。だが、身近な所にふと思い当たる節があった。

そういえば、俺の両親もデキ婚だな。そして、できた子供が俺。

世の中には高校生でそんなことをしてしまう奴がまだいるらしい。
その子供がまともに育っていることを、同じ境遇の俺から願わさせてもらおう。

そうしていると、伊南さんはさらに俺が話す間もなく話を1人で続けていく。
俺は、適当に相槌を打つだけでもう話す隙すらない。

「私は、君に感謝している。個人的にはエリスを大切にしてくれていることだね。会社の社長として言うなら1つはテレビに出したくれたことだ。あの時間帯は宣伝費がかさむんで、考えものだったんだが君のおかげでＣＭをせずに済んだ。元々メイドロボットは富裕層向けへの販売から始めて、今すぐに一般販売というわけにはいかないからＣＭはまだ打たないけれど、おかげ様で問い合わせも多く来るようになったね」

とは言っても、売れないんじゃ仕方無い。
メイドロボットの一般販売はいつになるのか俺は皆目見当もつかない。

「私たちの会社は将来は、介護などにも参画を予定しているんだ。いずれ、介護ロボットの需要は高まるだろうからね。月2万で動くのだから初期投資を安くすれば、いけると私は踏んでいる」

いや、一般販売はさっき無理って言っただろう。
金持ちしか買えないロボットがどうして、一般の末端の貧乏人にまで届くというのか。
大体、俺の家に来たこと自体奇跡としか言いようがないと言うのに。
あ、でも・・・かっぱらってくれば初期投資がいらないからいけるのか？

少しばかり邪な考えが脳裏を過ぎった。そして、気づけば目の前の話を聞くよりも自身の考えに没頭していた。

「それに、人が足りないと言われる医療の現場でも活躍が見込めると踏んでいるんだ。将来は、一家に1台を目指したいところだね。でも、結局はブルジョワ向きなんだろうね」

いや、でも盗んだところでメイドが言う事を聞くとは限らない。
むしろ一般人じゃ勝てないだろう。

そもそもどうやって盗むんだ？

エリスを持つなんて普通の男じゃ無理だ。普通の男じゃエリスを持

ち上げることさえできない。
だが、ＡＴＭを盗む奴がいるくらいだから持ち運びが物理的に可能か。

「ここだけの話だけど、メイドロボットは1体数億の利益が出るんだ。今は開発費回収のために１０億は上乗せしているんだ。ま、誰もしたことがない事業だからこそできる荒技だけどね。それに、その価値に見合っただけのメイドだと僕は自負しているよ」

「・・・でも、そこまでする価値はないか」

労力の割に得られるメリットが小さすぎる。

今度体重を聞いてみようか。

だが、答えてくれるとは思わないし・・・。

「や、やはり不満点はあるのか！？　ど、どこだ？　エリス君のどこが不満なんだ？」

「・・・抱えることができないんだから重いんだろうな」

「そ、そうか。抱っこか！？　ありがとう、有栖　景君。いつか私の所へ来てくれ。一緒に最高のメイドを作ろうではないか」

「ん？　あれ？　・・・何故、あんなに喜び勇んで帰って行ったんだ？」

ふと、我に帰ると、そこに伊南さんの姿はなく、俺が見えたのはやたらとテンション高く戻って行くその背中だけだった。

結局、あの人は何がしたかったんだ？

1人で喋って、1人でいなくなって・・・。

ほぼ話の内容など聞いていないに等しいものの、その中で俺には1つだけ残ったものがあった。

それは、従順、ということだけだった。

だから、エリスはああなのだと。

俺が家族だと言うことは迷惑になっているのかもしれない。そう思った。

８３話：別のお誘い

はあ～。

私は、ここ最近溜息を吐く回数が増えていることに気づいていた。
昨日数えてみたところ、４５回。

１日にしては多いのかもしれない。
溜息をつく度に幸せが逃げると母が言っていたことがある。

もし、そうなら一体どれほどの幸せが逃げたと言うのかな。

仮にそれが本当だとしても、そんなもん、絶対に信じる気なんてないけど。

「長かった入院生活ももうそろそろね。先生の許可が下りれば、退院できるわ」

私の所によく来てくれる看護師さんがそう嬉しそうに言う。

さっさと退院しろと言いたいのだろうか？

ううん、違う・・・と思う。

「できれば檻の中で、ちやほやされていたいな～。外に出たくな～い」

そんな思いを打ち消すかのようにそう甘えたように言ってみると、
「何言ってんの。あなただったら、外でもちやほやされるわよ。若いっていいわね」
おでこを人差し指でツンとされ、笑われた。
看護師さんは笑顔が素敵だ。私は、あんな風に笑ったのはいつ以来か。尤も彼女も仕事用に張り付けた笑顔かもしれないけど。

それに比べて、私は・・・。

「外に何があるんだろう？　結局、何もなかったし」
病院ばかりで過ごしたために、ろくに外に友達すらできなかった。おかげで、悶々とする毎日を過ごしている。
一応、高校に通ってみているものの、出席日数ギリッギリでどうにか進級できるという程度で、文化祭も体育祭も楽しいことなんてこれっぽちもありはしない。
「うーん、私がとやかく言うことじゃないと思うけど、外に行けば色んな事があるんじゃないの？　あなただって、最近は外との繋がりができたじゃない。ほら、毎週のように外国人の女の子が来ているし」
看護師さんの言うことに私は、ああ、そうだと思った。
彼女たちのおかげで、私にはほんの少しだけ居場所が出来たのだ。

全く・・・人間よりもロボットといることが多くなるとは思いもしなかった。

看護師さんが気付かないほどに精巧な人間型ロボット。
それが、ハンドメイデン社のメイドロボットだった。

「あら、噂をすれば。こんにちは、えーと・・・確かミリュカさんよね？」
「はい、正しいです。看護師さん、こんにちは」

今日は、彼女が来たみたいだ。
もう1人は、昨日電話で今日は彼について行くからこっちには来られないと言っていたし。

正直、私はそんな彼女が妬ましかった。ここ10年私が願っても手に入れることのできないものを彼女は持っている。与えられているから。
外に出て、そして多くの人と気軽に触れ合っているから。

だから、私は彼女が嫌いだ。

私を気遣っている優しさも嘘ならば本当に嫌いになれるのに。

私も同じ彼女なのに・・・。

どこで境界線が引かれてしまったと言うのだろうか？

私は、色の違う東の空を見上げてそう思った。

・・・様、景様。

「起きてください、景様」

「んんっ・・・あれ？　俺、寝ていたのか」

エリスが戻って来るのを待っていたらいつの間にか眠ってしまっていたらしい。
たぶん1時間くらいしか寝ていないと思うが、中途半端に寝たせいで体がどうも重い。

ぐっと体を伸ばして深呼吸すると、頭が少しだけすっきりした。

「・・・もう6時か」
「はい。お待たせしました。お水をどうぞ」
エリスは、グラスを俺に差し出した。
まだ冷たいので、エリスがここに来てから時間は経っていなようだ。
「ありがとう。ここのメイドになった感想はどうだったか？」
「色々な方にじろじろと好奇の視線で見られていたので恥ずかしかったです。あと、こちらをご覧ください」
差し出されたのは、十数枚の紙切れだった。
そのうちの1枚を開けてみると、そこには11桁の数字が並んでいた。
とりあえず他の物も見てみると、名刺などが多数ある。
「何だ、モテモテじゃないか。嫉妬を禁じ得ないな」
「もうっ、景様ったら。私は興味がないのですが、今日はこちらのメイドということでしたので、一応受け取りはしましたけど・・・。捨てても構いませんか？」
心底興味がないと言うのもまた相手に可哀想な気もする。
が、これがあの社長が言っていた主に従順ということなのだろうかと、ふと思う。
あなただけを見つめてる、ということはそれはそれで嬉しいが、作りものであることに違いはないわけで。
でも、誰からも相手にされないよりはましかとも思った。
誰からも存在を認識されないよりは、たとえロボットであっても自分を認めてくれるものがいてもいいだろう。

「エリスが好きにしたらいい。でも、一応シュレッダーにかけた方がいいんじゃないのか？　個人情報とか最近煩いし」
「それもそうですね。では、手っ取り早く燃やしましょうか」
「・・・社長にあげたらいいんじゃないか？　営業に使えるかもしれないし」
エリスの何か間違った言葉に俺は呆れかえりながらも、別の方法を提案する。
燃やすと言った時のエリスの表情が一瞬だが嬉しそうに見えたのは気のせいと思いたい。
「景様は聡明なのですね」
あまりに純粋に褒められたのが久しぶりだったせいか、俺はつい言葉に詰まってしまった。
「あまり持ち上げられると照れるんだが・・・」
「では・・・。景様は、極々当たり前のことしか思いつかないのですね。・・・こうすれば、同じくらいになるでしょうか」
全く笑顔も冗談も抜きに言い切られたせいで、俺の高揚した気分は一気に萎んでしまった。
プラスとマイナスを足せば０になる。確かになるだろう、それが同じならば。
「上げて落とすって言うのは、後に来る方のダメージが大きいんだ」
「難しいのですね。立派なメイドになるべく精進いたします」

「やらなくていい！」

俺は、エリスが間違った方向へ進まないよう、その決意を思いとどまらせようと必死だった。
このままだと数か月もすれば、ボケで漫才を繰り広げそうな気がしたのだ。相方はたぶん俺だろう・・・。

「進化を忘れた者に成長はありません。どうか見守っていてください！」
「静観していたらどうなるか分からないから心配だ」

黙認という言葉もあるくらいだ。
エリスは俺が何も言わなければ認めてくれたと思うだろう。

「では、共に目指しましょう」
「俺はメイドに興味はないって・・・」

大体俺をメイドにして何をするというのか。

「男性のメイドは珍しいでしょうから、大丈夫だと思います」
「何が、どう、大丈夫なのか聞かせてほしいな。・・・ま、その前にそんな需要ないだろう」

「景様。世の中にニーズのないものなどありませんよ」
「恐ろしい事をさらっと言うな」

一瞬だけ、俺のメイド姿を想像してみたが、すぐに頭の中から振り払うくらいに出来が悪かった。
こんなものにニーズがあるとは思いたくもない。

「ふふっ、冗談です。でも、私はありだと思います」

・・・エリス、お前のニーズか。

言った本人の事をすっかり忘れていた。

でも、どっちが本音なのかいまいち掴みにくいんだよな。

何かサインのようなものでもあればいいのだが。

「景様、逡巡の所失礼します。少しお話があるのですがよろしいでしょうか？」

そう考えているとエリスが、少し不安そうな顔で俺に話しかけてきた。

これは、俺でも分かる。何か言いにくいことがあるのだろう、と。

「あ、ごめん、考え事をしていたらぼーっとしてた。それで、話って言うのは？」

「・・・あの、もしよろしければ、お暇な時でよいので会ってもらいたい方がいるのです。その方は、しばらく入退院を繰り返していて、ご友人がいないのです」

エリスが、そこまで気にかける人か。

誰だろう？

「彼女はここ最近でもうすっかりよくなりまして、今度退院します。もう病院の世話になることもありません。病は気からとはよく言ったものです、本当にそうでしたからね」

「詩人の女のことか？」

ふと、浮かんだのは少し前にあったあの女のことだった。
少し電波のようなものも感じたが、意味の分からないことを言ってみて構ってくれる人を求めているのかもしれない。
するとエリスは、まさかと言わんばかりに驚いた様子で言葉に詰まっていた。
「っ！？　・・・景様、よくご存じで。もしかして、相模さんから聞かされていました？」
「・・・うわ、本当なのか？」
冗談で言ったつもりが、正に現実となってしまった。
俺はあまり会いたいわけではないし。
「ええ、本当です。よろしければ、月曜日の放課後に付き合っていただけないでしょうか？　相模さんも休暇を取っていらっしゃいますし、都合は良いかと」
「それは俺じゃないといけないか？」
「はい。景様、でなければなりません」
できれば行きたくないので、遠まわしに断ろうとしたが、エリスにはっきりと俺でなくてならないと言われてしまい、逃げ道が無くなってしまった。
まさか、エリスの友人の事を変な女だから会いたくないとは言えまい。
「・・・。分かった、それじゃ月曜日に行けばいいんだな」

「ご迷惑をおかけします。では、学校まで・・・」

「迎えに来なくていいからな？」

言い切る前にエリスの言葉を潰しておく。

エリスは、先に言われたことが悔しいようで、むうっと頬を膨らませて怒っていた。

「景様は、意地悪です。では、駅前でお待ちしております」

「４時半には行けるから、その時間に集合ということにしよう」

しかし、話というのは一体何なのだろうか？

家に戻ってからも考えてみたが、何も浮かぶことはなかった。

８４話：再会

「景様、こちらです」

エリスについて俺は、広い病棟を歩いていた。
1人で行ったら目的地に着く前に迷ってしまいそうな、そんな広さだった。
この地域一帯の中核を担うこの病院は、様々な科とそれに見合った収容数を誇る。
それでも、最近はベッド数が足りなくなることがあると言うのだから驚きだ。そんなに病人がいるということか。

「この病院は、ある大企業が建てたもので、今でも資金はそこから出ているので、これだけの施設が保てるのだそうです」
「ふーん」

大企業ね。

美玖と紫の家だろうか？

「景様、こちらになります」

先を行くエリスが俺を振り返って言った。
この辺りは、完全に個室ばかりで掃除も他に比べてとても行き届いているようだ。

「・・・金持ちだったんだな」

こんな所に、入院している詩人の女はよほど裕福とみえる。

ま、他人のことは置いておこう。エリスとの繋がりも家絡みであるのかもしれない。

しかし、先に中から話声が聞こえる思ったのとほぼ同時にその扉が開き、中から学校でよく見る顔がそこから出てきた。
そして、俺と視線が合うとこちらへとやって来た。

「あら、ちょうどいい所に」
「こんにちは、相模先生」

俺が頭を下げ挨拶すると、相模さんもオウムのように同じ事をする。
そして、ちょうどよかったと言わんばかりに俺の背中を押して、病室に連れ込もうとした。

当然、俺は踏ん張って耐えた。

「いきなり何するんですか！？」
「しーっ。ここは病院なんだから大声を出してはダメよ」

「・・・」

あんたのせいだよ。
そう言いたいが、ここは病院だったことを思い出して口をつぐんだ。
俺が黙ったことで、話が進めやすいと相模さんは感じたようで、花瓶を持ったまま用件を切り出した。

「ちょっとの間、中の子の話相手になってくれる？」
「エリスの方がいいんじゃ・・・」

だが、相模さんは全く俺の話に聞く耳を持っていなかった。
端から結論ありきと、俺の言葉を無視して話を進める。

「折角だから2人きりにしてあげる。エリスもそれでいい？」
「私は特に異論はありません。では、景様。ゆっくりと思い出話でもどうぞ」

エリスの最後の言葉はどういう意味なんだろうか？

そう思い、病室へ入ろうとした時、ふと入院患者の名前が書いてあるプレートが目に入った。

九音　絵梨。

それは、俺の初恋の人の名前だった。

「・・・」

一体、何を話せばいいと言うのだろうか。
向こうもそのようだが、こちらも何から話していいものか分からずにいた。

「久しぶり」
「うん、久しぶり」

「・・・」
「・・・」

そして、会話が終わってしまった。

本当は色々と聞きたいことがあるのだが、うまく話に持っていけない。
病室に入ってから数分。まだ、あの2人は戻って来る様子さえない。
たぶん、2人はグルで俺はまんまと嵌められたのだろう。

それはいいとしても、久しぶりに見た絵梨ちゃんは、あの頃の面影は全くと言っていいほどになかった。
細いというよりもやつれているように見えるし、あれほど笑顔しか浮かべていなかった顔も今では時折作ったように薄い笑顔を浮かべているだけだった。

元気だった？　とか見て分かるようなことは聞くことはできないし・・・。
だから、俺は相模さんやエリスとの関係を聞いてみようと思った。

「ところでいくつか聞いてもいいか？」
「私に興味あるの？」
無表情に聞き返されて、少し俺は返答に困った。
肯定もしないし、明確な拒否も示さない。声に抑揚も感じないので今の気分さえよく分からない。
この前会った時はこうじゃなかったんだけどな・・・。
迷った末に俺はこう答えた。
「興味はある。特に、本当にあの絵梨ちゃんかということに」
すると、目の前にいる詩人の女は、急に顔を綻ばせると嬉しそうに笑って言った。
「大当たり～。おめでとう、景君。あなたは見事に特等、私を受け取る権利を得ました」
「はあ・・・？　ありがとうございます」
意味が分からず、呆然と立ち尽くす俺と笑いっぱなしの絵梨ちゃん。
全てが変わってしまったように思えたが、その笑顔だけは、俺の思い出の中にある絵梨ちゃんそのもののように思えた。
だが、１０年という歳月は人を大きく変えるのだとも知った。今から違う人だと言われても信じてしまいそうなくらいだ。
変わっていないというのもまた問題だとは思うが。
「でも・・・絵梨ちゃんって言うのは・・・ちょっと恥ずかしいな

～。絵梨でいいよ」
「絵梨・・・さんは、病院で何しているんだ？　それに相模さんやエリスとは一体どんな関係なんだ？」
矢継ぎ早に質問したせいか、少しばかり絵梨さんは困っているようだ。
「う～ん、ちょっと整理させてくれる？　・・・それじゃ、ちょっと聞いてほしいの」
一呼吸おいて、それからのんびりとペットボトルのお茶を飲み・・・。
そして、ちょっとと言いつつ1，2分ほど経ってから話を始めた。
「晴れた日には青い空が見えます。曇った日には、白、灰色、黒の雲が見えます。雨の日は傘を差すので空が見えません」
「・・・」
あれ？　話関係ないような・・・。
「春は花粉に泣かされて、夏は暑さに泣かされる。秋は体重に泣いて、冬は寒さに泣く」
「あの？」
だが、絵梨さんは俺の声など届かない別の世界に行ってしまわれたようだ。
「空を見れば、そこには境界線が引かれている。雨にも境界線が見

えるんだよ」

・・・何が言いたいんだ？

「私と景君の間にも境界があるの」

「もう１０年以上会ってないからな。あって当たり前だと思う」

ようやく触れられそうな話題が来たので、相槌を打って話しかけると、やっと俺の方を見て、首を横に振って言った。

「ううん、時間の問題じゃないよ。ほら、見てみて」

指を差す場所は・・・つま先から頭頂。

そのつま先がぴょこぴょこ動いて存在をアピールしているのが微笑ましい。

・・・いいな。

・・・。

って、見惚れている場合じゃない。

俺は内心慌ててつつも冷静さを装って答えた。

「時間の問題だな、それは」

「ええっ！？　違うよ、背も胸も・・・って、あれ？　そっか・・・それも時間か」

「成長は時の経過のためだな」

わざとなのか天然なのかはよく分からない。
が、あまりそういうことに詳しくないということだけはよく理解させてもらった気がした。

「うんうん、そうだね・・・って、違うよ。そうじゃなくて、ここ！　んもう、こっち来て！」
「十分聞こえているから、そのまま言ってくれ」

いきなり怒りだす理由がいまいち理解できないので俺はあまり近づくたくなかった。
もしかすると精神的に不安定なのかもしれないし、何かされてからでは遅い。

「だから、私が言いたいのはね！　ベッドが私と景君の境界だって言いたいの！」

俺がなかなか近づかないことに腹を立てたのか多少口ぶりが怒っているような気がする。
顔を見ると、目に涙を浮かべているし、口も尖がっている。

まるで、子供が入院して親と離れ離れになるかのようだ。
何となく不憫に思ってしまい、つい甘やかしたくなってしまう。

「はいはい、分かりました。これでいいか？」
「これで境界はなくなったね。私の手が向こう側に届いたんだから。では、質問に答えます」

俺の手を掴んだ途端にぱーっと花が咲いたように笑ったものだから、少しだけ俺は戸惑っていた。

何だか嵌められたと言うのか、計算されてそこに誘導されたように感じたのだ。
たぶん、違うと思うのだが。

俺は、ベッドの端に座らせてもらうと、話を聞こうとする前に一言だけ文句を言っておいた。

「さっさと答えてくれればいいのにな」

すると、絵梨は、むうとわざとらしく頬を膨らませて怒っているぞとアピールすると、とっておきと言わんばかりに、笑顔をまた振り撒いた。

「え～、いいじゃな～い。結論は短いし、言ったら景君驚くもん。だって、エリスは私なんだから」
「え？」

何か、今とんでもない言葉が聞こえたような気がする。

別に聞こえていないとかそういったものではない。
ただ、言っている事を信じられない。そんな気分だった。

俺は信じられないという気分で絵梨さんに視線を向けた。
絵梨さんは、その視線を受けても笑顔を浮かべたままで、それがまた事実なのだと物語っていた。

「だから、エリスは私なんだってば。正確に言うとモデルが私なのかな」
「・・・前に社長に会ったことがあるけど、エリスのモデルは昔の

友人が書いたものだって言っていたが」

そもそもエリスと絵梨さんの外見は大きくかけ離れたものだ。
銀髪碧眼のエリスと標準日本人の黒髪では同じ顔であっても印象は大きく異なるだろう。
エリスと絵梨さんは顔もそんなに似ているわけではないし。

だが、絵梨さんは俺の言う事が間違っているとあっさりと説明してくれた。

「あ～、違う違う。私は、エリスの内面。つまり、ＡＩの基ってこと。私は研究の協力者、被験者、・・・羊とでも言うべきだろうね」

絵梨さんが、エリスのＡＩのモデルだと聞いたのはよかったが、何か返答に困る言葉だ。
この場合、何と言えばいいのだろう。大変だった？　それとも頑張ったね？

何かどちらもしっくりと来ないのは、俺自身に経験がなくまた想像もできないことだからか。
だからだろう、ということにしておくが俺は、全く関係のない事を口にしていた。

「・・・とりあえず、昔馴染みの絵梨ちゃんってことでいいんだよな？」
「その通り、まさに正解。女王様の椅子になってた景君を知ってる昔馴染みの絵梨です！」

・・・まさに、目の前にいる以前まで詩人とばかり思っていたこの人こそ、本物の絵梨ちゃんのようだ。

「あの女王様を怖がっていつも私の後ろにいて、いっつも彼女は私のとこ来て、『景は私の物だから返して！』って言ってたよね。あははっ、やっぱり椅子がないと女王様は務まらないよね」
「今の本人が聞いたら卒倒しそうな話だな」

若干脚色されているような気はするが、大まかにその通りと言えよう。
あの話を俺から恵麻にしたことは1度もない。俺にとっても女の尻に敷かれていたという事実はあまり嬉しくはない。
あの当時、口はもちろん、腕力ですら喧嘩したら負けるくらいだったのだ。

・・・でも、椅子にはされたことは・・・ないこともないな。

・・・・。

嫌な思い出を思い出して、気持ちが落ち込んだ所にタイミングよくというべきか、相模さんとエリスが病室へと戻って来た。

「感動の再会中悪いんだけど、時間の都合上早く話を進めないといけないのよ。ちょうどよかったわ。事情も知ったみたいだし、私も話に混ぜてもらおうかしら」
「相模さん、狙っていたんだね。でも、私はいつでも話がしたい時に景君と話ができるから今は少しだけ時間を譲るね～」

ということは、病室の前でいつからかは知らないが、待っていたということだろうな。

相模さんの話を聞いていてそう思った。

「ありがとう、絵梨ちゃん。それじゃ、ちゃっちゃっと話をしましょうか」

「それなら、俺が来た時に話せばいいのに。今までの時間無駄なんじゃ・・・」

そうすれば後でゆっくりと話が出来ただろう。

だが、総じて本人の意図というものは言わなければ伝わらない。

以心伝心などという事は、眉唾物だと俺は思う。

それは目の前にいる絵梨さんも同様のようで、俺の考えなど分かるわけない彼女は、すっかり俺の言葉でご機嫌斜めのようだ。

「景君！　それは聞き捨てならないな～。私との会話が無駄だった、そう言いたいの？」

「あっ、ごめん。別にそういうのじゃないからな。ただ、何と言うのか色々と考えさせられただけだ」

正直言って無駄は多かったと思う。ま、その無駄が、また良いのだが。

でも、言わなくいい事だと思ったので、いちいち詳しくは言わない。

俺が聞かなくてもどうせ話すだろうしな。

85話：未来、2の次、3の次

それから間もなく、相模さんは俺に対して話を始めた。

「実は、有栖君。あなたにお願いがあるのよ。この子を転入させたいんだけど、手伝ってくれない？」

「はい？」

聞いた途端、それは無理だろうと俺は思った。

確かに昔の知り合いだし、俺を助けてくれた女の子だ。

でも、今の絵梨さんは・・・・とても普通の学校に馴染める様な子ではないように思えた。

何せ、俺と再会した今日でさえ意味の分からない事を口走っているのだから。

学校へ行くことが本人を助けることになるのかよく分からない。

「彼女もそろそろ退院できるみたいだし、誰かの目が届く新しい引き受け場所が必要だと思うのよ」

その誰かとは・・・、目の前にいる相模さんのことなんだろうな。

「私は、有栖君の調査と彼女の事後研究も兼ねているから、うちに来てくれた方がありがたいのよ。彼女は他所の高校に通ってはいるけど友達がいなくて馴染めてないみたいだし」

馴染めないのは、この人のせいもあるのだろうか？

大体、研究とか言っているが、この2人って親子なのか？
でも、そんなに似ていないし・・・。疑問だけが果てしなく湧いてくる。

「いくつか質問していいですか？」
「ええ、疑問に思う事は全部聞いてくれた方がいいわね」
全部答えてくれると言うが、全部聞いていたら面倒だ。
だから端的に聞いてみることにした。
「家は？　お金は？　ご両親に連絡は？　転入って言いましたけど試験は？」
「・・・あ、お金だけは心配しなくて平気よ」
全然準備していないのに話だけ進んでいたのか・・・？
あまりの準備の悪さに俺は驚きを隠せなかった。
うちの学校は私立校だ。しかも今時期編入試験などやってはいないだろう。
それにそういうことは教師の方が詳しいはずだ。
「それと、編入試験は受けることは可能よ。優秀で熱意のある生徒、教師には、いつでも門戸を開いているのが聖蓮の特徴だから。でなきゃ私が教師になんてなれるわけないわ」
「それなら、俺に頼む必要なんて全くないんじゃ・・・」
「だって、あなた、あの霧生さんとお友達なんでしょ？」

その言葉を聞いて、はっとした。
つまり、この人は俺が衣先輩と友人だと知っていて頼んでいるのだと。

確かに、聖蓮学園は衣の先輩の家である霧生家、ひいては霧生グループの寄付によって成り立つ学校だ。
そこの娘である衣先輩の存在は確かに大きいものがある。今の生徒会の力の９割９分はそれによると言っても過言ではない。

「・・・」

「時代に反逆するわけじゃないわ。こっちからも、上を通して話は通しておくけど、あまり仲が良くないじゃない。うちとあちらって」

それは、霧生と四条の各グループの事を指しているのだろうな。

「だから、一応お願いしておいてくれる？　できれば夏前に受けさせたいのよ」
「もし、断ったら？」

断る気はないが、一応尋ねてみる。
すると、相模さんは悪びれる様子も見せずに、平然と言い放った。

「内申がどうなってもいいなら構わないわ」
「・・・」

こういう所でそんなものを持ち出すのか。
呆れてものが言えないし、正直失望を俺は隠せなかった。
ここは無言でじっと見ることで、地味に抗議の意思を示してみようと思う。

すると、相模さんは流石にまずいと思ったようで、すぐに苦笑いを浮かべて前言を撤回しにかかった。

「冗談よ、冗談。こんな私的な事で生徒への評価を変えたりなんてしないわよ。あなたの内申はこれ以上下げようがないから。そうね、じゃあ・・・もし補習になったら私がみっちり勉強を教えるってのはどう？　個人授業を特別に無料で」

「俺が補習受けるのは確定ですか」

人の夏休みに勝手に余計な予定を入れないでほしい。

夏休みは学生にしかない、ある種の特権なのだから。

そんなくだらないやり取りをしていると、ふと視界の端に絵梨さんがつまらなさそうに外を見ているのが入って来た。

「そういや、本人の意見を聞いてないな。話は聞いていたと思うが、どうする？」

そう話をふってみると、絵梨さんはぱっと嬉しそうにこちらに向いて多少はにかみながら、それでいて少し興奮したように早口に話し始めた。

「私ね、入退院を繰り返していたから人と接するのが苦手なんだ～。だから変な事を言って人を遠ざけちゃうの。えへへ、やっぱりこういう女の子は苦手？　景君が嫌なら私は構わないよ。でも、もしよかったらお願いを聞いてほしい」

「分かった。絵梨さんがやるって言うなら、俺がほんの少しだけ手助けする。チャンスは与えるから後は自分で頑張ってくれ」

何と言うのか、俺は本当に非常に恩着せがましいな。
別にこんな事をしなくても、受験はできるのだから。
素直に協力すると言えれば苦労しないんだがな・・・。

何と言うのか、はっきりと言うのは気持ち恥ずかしいのだ。

「・・・ところで、住むとこはあるんだよな？」
「うんっ、それは任せてよ～、って言いたいんだけど家賃払ってないからね～。えへへ、この前入院する時に両親に言って解約してもらっちゃった。両親がね、私が退院したら、また探すって。確かに住んでない間は家賃無駄だしね～」

その話だと絵梨さんの両親は一体どこに住んでいるというのか。
まさかとは思うが、捨てられたとかそういう話じゃないよな。

そんな俺の悪い想像とは裏腹に、何だか先程より明るくなったような気がする絵梨さんは、身振り手振りを交えて話している。

「あ、でもでも、入院費は相模さんとこが負担してくれるって。借金まみれで一緒に身売りってことはないから安心して」
「いや、俺まで売る気なのか。・・・ついでに家と学校も提供してもらえばいいのに」

話を真面目に聞いていると、時折変な事を言うからこちらとしてはたまったものじゃない。
久々にエリスや相模さん以外と話して嬉しいのだろうから、俺はとりあえず笑っていればいいと思う。

・・・とても、笑顔は引き攣っていると思うが。

気づく余裕もないのだろう。絵梨さんは、話の続きをするのに夢中なようだった。

「だって、そこまで請求したらずうずうしいじゃない」

「衣食住は人間生活の基本だぞ。無いと後で困る事になる」

「それじゃ、ずうずうしいんだけど・・・家、一緒に探してくれないかな？　病院って世知辛いよね、治ったら出て行けだなんて。まだ、私、家無いのに」

「いや、居座ったら本当に必要な人にベッドが行き渡らないだろう。それに、家が無いなんて病院は知らないって・・・」

世間知らずなのか、単にわがままなのか。絵梨さんは、家が見つからなかったら病院を家にすると言わんばかりの様子に、さすがに俺以外のエリス、相模さんも少し冷たい目で絵梨さんを見ていた。特にエリスは、俺の耳元で、ひそひそと蹴り出した方がいいかと聞いてくる始末だった。自分の基があれじゃあ、嫌にもなるだろう。

「・・・じょ、冗談だって。うんうん、冗談、冗談。いやだな、私だって常識くらいあるよ～」

そう言って、笑って何とか取り繕うとしている絵梨さんには悪いが、割と本気だってことを本人以外皆気づいているのだということを教えてあげるべきかどうかで俺やエリスは悩んでいた。

少しの間、相談した結果、それは教えないということに落ち着いたが、その間放置される形になった絵梨さんは、ジト目でこちらを見ていた。

今度は、俺が取り繕う番になってしまった。

だが、何も案がないので話を強引に進めてみることにした。
「ところで、一応、念のために聞くが両親ってのはどこにいるんだ？」
その質問は、割と効果があったのかもしれない。
絵梨さんは、瞬きほどのほんの少しだけ悪だくみをする悪党のような黒い笑顔を浮かべていたが、すぐにそれを消して何もなかったと言わんばかりに今までよりも柔らかく、そして憂いを帯びた笑顔で言った。
「実は死んでます・・・・って話だったら同情する？　今は海外にいるね。残念な事に私は不幸な星の下には生まれていないんだ～」
「・・・入院の時点で十分不幸だと思うが」
きっと素直に同情できないのは、一瞬の表情を見てしまったからなんだろうと思う。
知らない方が幸せな事ってあるものなんだと、悲しいことにそれを知ってしまった。
「ノンノン。不幸と思うからこそ不幸なんだよ。でも、今の私は不幸だな～って思う」
「・・・」
実は、絵梨さんはポジティブなようでネガティブらしい。
でも、悪い人ではないと思う。そう思いたい。
「それじゃ、1，2日くらいは学校さぼって付き合うかな。衣先輩にも言っておかなきゃいけないし。家探しは、最初はその大家のと

こに行けばいいんじゃないか？」
「そうだね～。ふふっ、明日が楽しみ」
俺の提案をあっさり受け入れるのもどうだろうとは思うが、こちらとしても1人だと心配なので良しとしよう。
だが、話がまとまったと思った時だった。
思わぬと言うべきか、それとも当然と言うべきか、相模さんから俺の発言にクレームがついた。
「仮にも教師の前でさぼるとか言わない！」
相模さんが珍しく教師らしいことを言うが、元々あんたが仕向けたことだろうと内心思う。
本当であればはっきり言ってやろうかと思ったのだが、その手間が単に省けたのだ。
エリスが、俺の前にずいと出て相模さんに向かって少しトーンの低い声で言った。
「相模さん。大変失礼ですが、さぼらせるように仕向けたのは、あなたです」
まさかエリスにそのようなことを言われるとは思っていなかった相模さんは少しばかり面食らったようだったが、そこは大人だからかすぐにその動揺を笑顔で隠して言った。
「エリスは優秀ね。私の考えなんてお見通しか」
「はい。あなたは学校の教師でさぼれない。私は、彼女が嫌がるからダメ。ご両親は海外。それなら、残るは景様しかいないということになります」

「・・・でも、さぼるのはダメよ」
1人でという選択肢が用意していない所をみるに、絵梨さんは、2人から相当心配されているようだ。
・・・俺も心配だが。
「そんなの冗談ですって。放課後にやりますから。・・・とりあえず、学校に転入した時のアドバイスをしておくか」
「おおっ、ありがたやありがたや」
・・・何故、拝む？
その突飛な行動に俺は少しついていけず、戸惑ったが気を取り直して、持論を述べてみた。
そう、これはあくまで俺の主観論に過ぎないのだ。
「・・・。まずは、第一印象が大事だ。人の印象は外見で決まってしまう。つまり、見た目さえよければ最初の掴みは問題ない。その点、絵梨さんは大丈夫だ。俺が見て来た異性の中でも5本の指に入るくらいに美人だ。それに、学校は制服だから私服のセンスは問われないから安心していいからな」
とりあえず、いいことだけ言って褒めちぎっておけばいいやと思ったあたりに、少しばかり面倒に思ってしまった部分が出ている気もしなくもない。
ついでに言うなら前評判が高いと、評価が落ちた時が怖い。
逆に普段評判が悪い奴が、少しいいことをすると評価がぐっと高まるという。ただし、どちらも周りの人間次第と言えよう。
すると、俺の内心を読んだのか、不満げな様子で頬を膨らませてい

た。

「ねえ～、それって・・・私、見た目だけってこと。中身は空洞化してスカスカだと。お前なんてパンチしたら拳が突き抜けると？美味しそうに見えても、実は意外と中身がない安い肉まんみたいと？」

「・・・」

やっぱり反応に困る相手だ。

褒めた部分には全く反応を示してくれない。

いや、話のほぼ全てが褒めているはずなんだが・・・。

一体、どう言葉を返せばいいのか。全く分からないので、つい言葉に詰まって俺は、絵梨さんに背中を向けて、少しばかり現実から逃避した。

すると、絵梨さんはどこをどう取ったのかすっかり感心しきったような絵梨さんの声が聞こえた。

「男は背中で語る。つまり、黙って俺について来いってことだね～。頼もしいね」

「できればついて来ないでほしい」

思わず振り向いて抗議すると、してやったりと言わんばかりの絵梨さんの満面の笑みがそこにはあった。

何だか既に性格を把握されているような気がするが、俺には今の絵梨さんがどういう人なのかは、全く掴めなかった。

再会した初日で、分かろうなどと考えるのもおこがましいとは思うが。

だが、そんな俺の内心の複雑さまでは、絵梨さんも分からないようで上機嫌に話を続けた。

「子鳥は初めて見た者を親と思います。何となく景君を刷り込んでみました」

「何となく高２で同級生の娘はいらないな。あと、それは捏造と言って、世間ではあまりよくないこととされているから、気をつけないといつか犯罪者になるな」

「馬鹿言わないでよ～。捏造も続ければそれが真実になるんだよ！世間って、そんなものだよ、け・い・く・ん」

建物とか、食品とか、歴史とか、実に様々な物が捏造されたり、変化している世の中だ。

確かに、時間が経てばそれもまた真実となるのだろうが、笑いながら言う絵梨さんの言葉を認めるのも癪なので、認めないでおこう。

「絵梨さんが世間を語るは２０年は早い。あと、馬鹿はそっちだ」

馬鹿に留めておいたのは、病院に帰れとか、病気じゃないか？　とか言えるわけないからだ。

一応、それくらいは気遣っておくべきだろう。

そこへ何故と言うべきだろうか。

急に相模さんが呆れたといった様子で口を挟んできた。

「・・・いやいや、あなたも同じでしょうが」

「そうですよね。・・・語っていいのは相模さんだけですよね」

「・・・エリス。最近、あなたも性格悪くなったわね」

「いえ。景様から常日頃思った事は言うように命ぜられていますから」

・・・いや、言ってない、言ってない。人のせいにするな。

エリスが、相模さんに対して笑顔で言い切るものだから、この部屋で俺だけが内心慌てふためいていた。

絵梨さんは、その様子を見て、面白いね、と馬鹿にしたようにげらげら笑い、相模さんはかろうじて笑顔を保ったものの俺の方をきっと睨みつける。

エリスには教育がまだ足りないのだと実感する羽目になったが、ここで関わると面倒そうなので、さもいないかの如く視線からその様子を外して無視する。

だが、この部屋だけでなく外にまで響いていそうなくらいに笑う絵梨さんにだけには力なく注意した。

「・・・絵梨さん。色々と迷惑だから煽るのはやめてくれ」

「ひどいな〜。昔は、私の事をえりりん！　えりりん！　っていつもついて来ていたのに。あの頃の景君は素直で可愛かったのに」

「・・・絵梨ちゃんとは言っていたけど、えりりんだけは無いと断言できる」

昔の俺が、そんなあだ名で呼ぶような関係の友達はいないことはなかったが、女相手にはなかったはずだ。

そもそも恵麻と絵梨さん以外、女が友人にいた記憶さえないのでその辺りは割とはっきりと覚えている。

だからこそ俺は、今までになく自信を持って言う事が出来た。

その自信もあってだろう。絵梨さんは、今度は、あっさりと嘘だと

認めた。

「そうだよね～、知ってるよ。でも～、何で景君は絵梨、さん、なの？　絵梨でいいよ、絵梨で」

「絵梨さんじゃ悪いのか？」

何となく絵梨と呼びたくないような気もする。

昔から絵梨『ちゃん』として俺の頭には残っているせいかもしれない。

だから、何か後ろにつけて呼びたくなってしまうのだ。

だが、それは俺の都合。相手が認めてくれるとは限らない。

「だ・か・ら、ちゃんもさんも呼び捨ても禁止。最初の友達がこれでどうするの！」

絵梨さんは、すっかり怒り心頭の様子だった。

たぶん病院生活で甘やかされていたか何かで、自分の思い通りにいかないとわがまま言うのだろうな。

絵梨ちゃん、絵梨さん、絵梨。いまいちどれもしっくりと来ない。

大体、どれも呼ぶなって・・・。

・・・ん？

ふと気が付いたおかしなこと。

それを俺は口にせずにはいられなかった。

「って、待て。何て呼べばいいんだ？」
「えりりん」
何の迷いもなく言う絵梨さんに、俺は思わず絶句した。
自分で言っておいて、気に入っているらしいが、俺は1番呼びたくないものだったのだ。

少しの間、俺は考えてみた。
どれが一番ましだろうかと。そして、1つの結論へとたどり着いた。
「・・・ま、まあ・・・何だろうか・・・えーと、よろしく、九音。俺も名字で呼ぶから、そっちも有栖で構わないからな」
「いきなり知り合いに降格！？　せめて、景ちゃんに・・・」
「それはやめてくれ」
母さんがたまにそう呼ぶことがあるが、外でそう言われると思うとぞっとする。
そんな風に呼ばれていいのは、本当に幼い頃だけだ。
高校生にもなって、ちゃん付けは厳しい物がある。

自身への呼び方の事で悩んでいると、絵梨さんは妙案が閃いたようでポンと手を打って俺の方へ嬉しそうに向いた。
「じゃじゃ、攻めて攻めてハニーと」
「わざと言っているよな、それ」
「ハ・・・」

「飛躍しすぎだ。・・・分かった、景でいい」
もう諦めた方が楽になっていいよな・・・。
俺はもうすっかり投げやりになっていた。

その一方で、絵梨さんは言うと・・・。

「やったーっ！　やっぱり交渉は自分の本心よりも上を行かないといけないよね～」
「足元見られていたのか・・・」

すっかり元気いっぱいのご様子だった

天然のように見せかけて、しっかりと計算しているとは。
本当に人と話すのが苦手なのか？

「じゃあじゃあ、次は景君の番ね。ささ、絵梨と呼んで」

絵梨さんはそんな些細な疑問さえしっかりと考える時間の余裕も与えてはくれない。
いや、意図的に与えていないのかもしれない。

「絵梨・・・さ・・・」
「誰よ、えりさって！」

そういきなり絵梨さんが叫んだが、俺もそんな奴のことは知らない。
でも、不思議とどこかで聞いたことがあるような響きだった。

「何かえりさって、どこぞの踊りか何かにありそうだよな」

「それは、エイサー！　沖縄の伝統舞踊だよ～」

ふむ、違うか。

「それじゃ掛け声・・・」

「それは、エイッ、ヤーッ！」

っ！？

危うくパンチをもらいかけたが、何とかそれを避ける事が出来た。
いちいち体を動かしてまで表現しなくていいと思うんだ。

「・・・俺のわがままに付き合ってくれてありがとう」

とりあえず、もう会話は終わりにしよう。
ネタをふったのがいけなかったのだ。

「あと、欧州カメラ業界団体は、ＥＩＳＡって言うみたい」

「・・・絵梨。もう結構だからな」

精も根も尽き果てた。今の気分を端的に表すならこの言葉が近いだろう。
だが、絵梨さんはやっぱり違っていた。俺から生気を吸い取っているかのように。

「あやっ！？　景君、今、何と？」

あやって何の驚き方なんだか・・・。絶対、普通に驚いたらこんな声は出ないだろう。

「・・・。よろしく、絵梨」
「うん、よろしくね、景君」

全くもって俺と絵梨は、対照的な状態にあった。
片や疲れてもう帰りたいとさえ思う俺。片や俺の両手を掴み、ぶんぶんと上下に振る絵梨。

これからの事を考えると不安と期待が交互に俺の胸に飛来するが、きっと最後は幸福な結末を迎えられるだろう。
その過程がどうであったとしても。

「人気ってどうやったら出るのかな？　とりあえず脱ぐとか？」
「日本的考え方だが、それ学校でやったら、俺は絶対に無視するからな。絶対にやるなよ」

「やだな～、冗談だよ。私、人に見せるような体してないし」
過程で力尽きるような不安が拭えないのはどうしてなんだろうか。
ま、２度念押ししたから大丈夫だと思うんだが・・・。

数日後。きっと答えが出るのだろう。
その時、また考えればいいか。

俺は、現在に考える事を放棄して、未来にその問題を託すことに決

めた。

頑張ってくれ、数日後の俺。

８５話：未来、２の次、３の次（後書き）

本編第１部はこれで終了です。

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

あとがき

最終話が史上最長になってしまい、申し訳ありません。

オーダーメイドの連載開始から1年と8カ月弱。

ユニークアクセスで17万回ものアクセスをいただきました。
本当にありがとうございました。多くの方々が見てくださったことがここまで連載を出来た最も大きな要因だと思います。
実力以上に多くの方に読んでいただいて、恐縮の日々でした。

処女作なうえに、そもそもあまり文が上手とは言えない私ですので、まさか、こんなにアクセスがあるとは連載当初は思いもしませんでした。
最初の目標は累計アクセス１０００くらいでしたし、自分が書きたい事を書くという事で、物凄くちんたらしていたので。
実際、途中で飽きた人は多いと思います。本編が９０話近くでまだ２か月半しか経ってませんしね。

最後まで読んで下った方は神様です。いえ、神様よりも素晴らしい方々です。

この１年と８カ月弱を振り返って思うのは、やはり読者の方々がどう思うのかという事を考える必要があるということです。
差別表現等は、やはり好まれないですし、何気ないシーンでも読者

の中には不快に思う方もいるのだなと感じました。
私は、元々小説家になろうなどのネット小説の1読者に過ぎない者で、それが何を思ったのか何となく自分で小説書いてみようと書いたのが、このオーダーメイドになります。
物語自体や主人公、ヒロインの性格を考えたり、人物の名前を考えるのに半日かかったりすることもありましたが結構楽しかったです。

今回、一旦終了する理由は、そろそろ区切りをつけようかなと思っていたという個人的理由です。

また、初期設定では最後に登場した絵梨は登場する予定はほぼなく、実は死んでいるという設定でした。
でも、さすがにヒロイン死亡じゃコメディとして無理があると思って急遽登板させました。それが、途中から出てきた「詩人の女」であり、絵梨であります。
続編の方で、彼女は活躍してもらおうと思います。

続編は、新規として1月の頭を目処に『オーダメイヅ』として、ひっそりと小説家になろうの方で公開していこうと思います。たぶん、今とそう大差のない出来栄えになります。
もし、読まれる機会があれば、どうぞよろしくお願いします。
何年かかるかは分かりませんけど、最後まで書くことだけはお約束いたします。

最後にもう1度。

これまでオーダーメイドを読んで下った皆様。

ありがとうございました。

ここから先は、ちょっとした落書きです。
どうでもいい方は、戻っていただけると幸いです。あと、特に見ても何の害もないと思います。

現在、エンディングの構想は、ヒロインのうち４人あります。絵梨とエリス、恵麻、梓依の４人が今の所あります。
他のヒロインの方々のエンドは構想中です。そっちの方がよければ、そっちにするかもしれません。一応、全ヒロインのエンディングを比較して検討したいと思います。
まあ、面倒になったら景１人エンドというのもありかもしれません。
要望等があれば、どうぞお願いします。

本編では、誰か１人のエンドを書いて、後は、外伝という形で書くのが、今のところの構想です。
量は、オーダーメイド以上の物になることが見込まれております。
質は……頑張ります。

以上、落書きでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9485b/

オーダーメイド

2010年10月9日17時24分発行